終了

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第99集

清洲城下町遺跡Ⅷ

本文編

2002

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

終了

序

清洲城下町遺跡は、西春日井郡清洲町の市街地ほぼ全域と新川町、春日町の一部に広がる大規模な遺跡です。遺跡は古代から江戸時代まで続きますが、その中でも織田信長をはじめ有力な戦国大名が居城とした戦国時代の「清須城」は、尾張を代表する城館として全国的にも著名なものです。

当センターでは、これまで十数年にわたって清洲城下町遺跡の発掘調査を行い、そこで得られた成果については、これまでに７冊の調査報告書として刊行してまいりました。

８冊目にあたる本書は、清須城本丸の南東隅に造られた石垣の主要な部分の調査の報告がなされており、金箔瓦や鯱瓦など多量に出土した瓦とともに、往時威容を誇ったとされる清須城の姿を復元する上で貴重な資料を提供するものと考えております。

最後になりましたが、調査に対して御理解、御協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚く御礼申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財の保護と研究の一助になれば幸いです。

平成 14 年 8 月

財団法人愛知県教育サービスセンター
理事長　　井 上 銀 治

終了

例　言

1　清州城下町遺跡は（遺跡番号21001：『愛知県遺跡分布地図Ⅰ（尾張地区）』1994による）は愛知県西春日井郡清洲町のほぼ全域に分布する広大な遺跡であり、一部は春日町と新川町にまたがる。

2　本書は、愛知県土木部（現建設部）が進めている五条川河川改修に伴う事前調査にかかる発掘調査報告書のうち、第4巻に相当する『清洲城下町遺跡Ⅷ』である。発掘調査は県土木部（現建設部）から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センター（現愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。

3　本書が対象とするのは、平成7年度から平成11年度にかけて行われた95Ａ区・95Ｂ区・96区・97Ａ区・97Ｂ区・97Ｃ区・99Ａ・99Ｂ区の8調査区で、合計の面積は8500㎡になる。

4　発掘調査は、95Ａ・Ｂ区：水谷寛明（現吉良町立白浜小学校）・松田訓・加藤博紀（現県立蟹江高校）、96区：増澤徹（現岡崎市立城南小学校）・宮腰健司・原田幹（現県教育委員会文化財保護室）、97Ａ・Ｂ・Ｃ区：黒田哲生（現県立五条高校）・石黒立人・浅井厚視（現海部教育事務所）、99Ａ・Ｂ区：春日井毅（現一宮市立宮西小学校）・伊藤太佳彦（現県立知多東高校）・木川正夫（現県立岡崎高校）が担当した。

5　発掘調査に引き続き、平成12・13年度に報告書作成のための整理事業を実施した。平成12年度の整理作業は鈴木正貴が、平成13年度は宮腰健司・鈴木正貴が担当した。

6　調査にあたっては本センター理事・専門員をはじめ次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、清洲町教育委員会、愛知県建設部河川課

7　調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。ただし、旧基準の「日本測地系」で表記している。

8　遺構は以下のアルファベットによる分類記号と、各調査区毎で調査時に使用した表記をそのまま使用した。ただ99Ａ・Ｂ区については、2面ある各面毎に遺構番号がふられているため、2面目を千番台の表記とした
ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝、ＳＷ：石垣、ＳＸ：その他の遺構、Ｐ：ピット

9　本書の執筆は下記のとおりである。
Ⅰ－1・2　宮腰健司、　Ⅰ－3　鈴木正貴
Ⅱ－宮腰健司、Ⅲ－鈴木正貴
Ⅳ－（Ⅰ）　堀木真美子・植田弥生、Ⅳ－（Ⅱ）　北野信彦、Ⅳ－（Ⅲ）　パリノ・サーヴェイ
Ⅳ－（Ⅳ）　井上巌、Ⅳ－（Ⅴ）　森勇一、Ⅳ－（Ⅵ）　北垣聰一郎
Ⅴ－鈴木正貴

10　遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、遺物の写真撮影は福岡栄が行った。

11　発掘調査及び整理全般については、調査研究補助員である神谷巳佳・小嶋そのみ・土倉崇子の他、多数の発掘補助員・発掘作業員・整理作業員・整理補助員の皆様のご協力を得た。記して感謝する次第である。

12　本書をまとめるにあたり、本センター専門委員を始め、次の各氏のご指導・ご協力を得た（敬称略）。
青木修・赤羽一郎・磯村豊司・内堀信雄・梅本博志・遠藤才文・太田宏一・岡村一幸・岡本直久
尾野善裕・加藤理文・蟹江吉弘・金子健一・北垣聰一郎・北野信彦・河野通明・小竹森直子・佐野元
鈴木真哉・柴垣哲彦・下村信博・荘景輝・千田嘉博・高瀬哲郎・高田徹・高田祐吉・高橋信明・谷口克広
中井均・中野晴久・野口哲也・野澤則幸・原田幹・藤澤良祐・松井一明・村田弘・森村健一・山本宏司
吉田寛

11　調査記録（図面・写真資料・日誌等）は、本センターにて保管している。

12　出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24　　TEL　0567-67-4164

終了

目次

Ⅰ　調査概要 1

1 調査の経緯（1）、2 調査の概要（2）、3 歴史的環境（4）

Ⅱ　遺構 7

1 95A・B 区（7）、2 96・97C 区（11）、3 97 B区（27）、4 99 A区（29）、5 99 B区（34）

Ⅲ　遺物 37

（Ⅰ）概要と分析の方法

1 出土遺物の概要（37）、2 整理方針（38）

（Ⅱ）陶磁器・土器類 39

1 概要と分類の方法（39）、2 95A 区出土陶磁器・土器類（40）、3 95B 区出土陶磁器・土器類（43）、4 96 区出土陶磁器・土器類（47）、5 97B 区出土陶磁器・土器類（56）、6 97C 区出土陶磁器・土器類（70）、7 99A 区出土陶磁器・土器類（74）、8 99B 区出土陶磁器・土器類（108）

（Ⅲ）瓦類 142

1 概要と分類の方法（142）、2 軒丸瓦（143）、3 軒平瓦（165）、4 金箔押軒瓦（185）、5 丸瓦（186）、6 平瓦（193）、7 飾瓦（206）、8 鬼瓦（209）、9 鯱瓦（213）、1 0 造形瓦類（219）、1 1 道具瓦（221）、1 2 文字瓦（233）

（Ⅳ）木製品 235

1 概要と分類の方法（235）、2 木製品の資料紹介（235）、3 土台木（260）、4 杭（266）、5 繊維製品（270）

（Ⅴ）石製品 271

1 概要（271）、2 資料紹介（271）

（Ⅵ）金属製品・金属関連遺物 277

1 概要と分析の方法（277）、2 鉄製品（277）、3 銅製品（281）、4 鉛製品（283）、5 金属関連遺物（283）

（Ⅶ）自然遺体 287

（Ⅷ）石垣に記された墨書 288

1 調査の経緯と調査方法（288）、2 墨書の紹介（289）、3 考察（294）

Ⅳ自然科学的分析・考察 301

（Ⅰ）清洲城下町遺跡出土木製品樹種同定 302

1 はじめに（302）、2 樹種同定の方法（302）、3 結果（302）、4 まとめ（306）

（Ⅱ）清洲城下町遺跡出土漆器資料の材質と製作技法 323

1 はじめに（323）、2 出土漆器資料の調査（323）、3 考察（326）

（Ⅲ）清須城出土瓦の胎土分析 343

はじめに（343）、1 試料（343）、2 分析方法（343）、3 結果（343）、4 考察（346）

（Ⅳ）清洲城下町遺跡出土瓦の胎土・金箔分析 349

1 実験条件（349）、2 X線回折試験結果の取扱い（349）、3 X線回折試験結果（350）、4 化学分析結果（351）、5 瓦の金箔の化学分析（351）、6 まとめ（351）

（Ⅴ）清洲城下町遺跡から産出した貯穀性昆虫とその意義 365

1 はじめに（365）、2 分析試料（365）、3 結果（365）、4 考察（366）、5 おわりに（368）

（Ⅵ）清須城伝本丸を中心とした土木構築物について―主として石垣・土台木― 373

はじめに（373）、1 94A 区の土木構造物遺構（373）、2 96 区の土木構造物遺構（383）、3 結語（390）

Ⅴ　まとめ 394

報告書抄録 400

終了

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図　1
第 2 図　調査区位置図　3
第 3 図　清洲城下町遺跡と周辺の遺跡　5
第 4 図　95A・B 区東壁セクション（１）　8
第 5 図　95A・B 区東壁セクション（２）　9
第 6 図　95A・B 区東壁セクション（３）　10
第 7 図　96 区セクション（１）　13
第 8 図　96 区セクション（２）　14
第 9 図　SW01・SW02 断面図　15
第 10 図　SW01・SW02 平面図　16
第 11 図　SW01・SW02 側面図　17
第 12 図　SW01・SW02 土台木平面図　18
第 13-1 図　SW01・SW02 土台木平面詳細図（１）　20
第 13-2 図　SW01・SW02 土台木平面詳細図（２）　21
第 14 図　SA01 ～ 09 平面図　22
第 15 図　SA01 ～ 08 平面図　23
第 16 図　SA05、SA04・06 見通し図　24
第 17 図　SA07 見通し図　25
第 18 図　SA09 平面図　26
第 19 図　SE01 断面図　27
第 20 図　97 Ｂ区セクション図　28
第 21 図　99 Ａ区 SD13・SK248 セクション図　30
第 22 図　99 Ａ区西壁・北壁セクション図　31
第 23-1 図　99 Ｂ区西壁・北壁セクション図（１）　32
第 23-2 図　99 Ｂ区西壁・北壁セクション図（２）　33
第 24 図　99 Ａ区井戸セクション図　35
第 25 図　99 Ａ・Ｂ区井戸セクション図　36
第 26 図　95A 区出土遺物実測図（1）　41
第 27 図　95A 区出土遺物実測図（2）　42
第 28 図　95B 区出土遺物実測図（1）　44
第 29 図　95B 区出土遺物実測図（2）　45
第 30 図　95A・B 区出土量分布図　46
第 31 図　96 区出土遺物実測図（1）　48
第 32 図　96 区出土遺物実測図（2）　49
第 33 図　96 区出土遺物実測図（3）　50
第 34 図　96 区出土遺物実測図（4）　51
第 35 図　96 区出土遺物実測図（5）　53
第 36 図　96 区出土遺物実測図（6）　54
第 37 図　96 区出土量分布図　55
第 38 図　97B 区出土遺物実測図（1）　57
第 39 図　97B 区出土遺物実測図（2）　58
第 40 図　97B 区出土遺物実測図（3）　59
第 41 図　97B 区出土遺物実測図（4）　60
第 42 図　97B 区出土遺物実測図（5）　61
第 43 図　97B 区出土遺物実測図（6）　63
第 44 図　97B 区出土遺物実測図（7）　64
第 45 図　97B 区出土遺物実測図（8）　65
第 46 図　97B 区出土遺物実測図（9）　67
第 47 図　97B 区出土遺物実測図（10）　68
第 48 図　97B 区出土遺物実測図（11）　69
第 49 図　97B 区出土遺物実測図（12）　70
第 50 図　97B 区出土遺物実測図（13）　71
第 51 図　97B 区・97C 区出土遺物実測図　72
第 52 図　99A 区出土遺物実測図（1）　75
第 53 図　99A 区出土遺物実測図（2）　76
第 54 図　99A 区出土遺物実測図（3）　78
第 55 図　99A 区出土遺物実測図（4）　79
第 56 図　99A 区出土遺物実測図（5）　80
第 57 図　99A 区出土遺物実測図（6）　82
第 58 図　99A 区出土遺物実測図（7）　83
第 59 図　99A 区出土遺物実測図（8）　84
第 60 図　99A 区出土遺物実測図（9）　86
第 61 図　99A 区出土遺物実測図（10）　87
第 62 図　99A 区出土遺物実測図（11）　88
第 63 図　99A 区出土遺物実測図（12）　89
第 64 図　99A 区出土遺物実測図（13）　92
第 65 図　99A 区出土遺物実測図（14）　93
第 66 図　99A 区出土遺物実測図（15）　95
第 67 図　99A 区出土遺物実測図（16）　96
第 68 図　99A 区出土遺物実測図（17）　97
第 69 図　99A 区出土遺物実測図（18）　99
第 70 図　99A 区出土遺物実測図（19）　100
第 71 図　99A 区出土遺物実測図（20）　102
第 72 図　99A 区出土遺物実測図（21）　103
第 73 図　99A 区出土遺物実測図（22）　105
第 74 図　99A 区出土遺物実測図（23）　106
第 75 図　99A 区出土遺物実測図（24）　107
第 76 図　99B 区出土遺物実測図（1）　109
第 77 図　99B 区出土遺物実測図（2）　110
第 78 図　99B 区出土遺物実測図（3）　111
第 79 図　99B 区出土遺物実測図（4）　113
第 80 図　99B 区出土遺物実測図（5）　114
第 81 図　99B 区出土遺物実測図（6）　116
第 82 図　99B 区出土遺物実測図（7）　117
第 83 図　99B 区出土遺物実測図（8）　118
第 84 図　99B 区出土遺物実測図（9）　120
第 85 図　99B 区出土遺物実測図（10）　121
第 86 図　99B 区出土遺物実測図（11）　122
第 87 図　99B 区出土遺物実測図（12）　123
第 88 図　99B 区出土遺物実測図（13）　124
第 89 図　99B 区出土遺物実測図（14）　125
第 90 図　99B 区出土遺物実測図（15）　126
第 91 図　99B 区出土遺物実測図（16）　127
第 92 図　99B 区出土遺物実測図（17）　130
第 93 図　99B 区出土遺物実測図（18）　131
第 94 図　99B 区出土遺物実測図（19）　133
第 95 図　99B 区出土遺物実測図（20）　134
第 96 図　99B 区出土遺物実測図（21）　135
第 97 図　99B 区出土遺物実測図（22）　136
第 98 図　99B 区出土遺物実測図（23）　138
第 99 図　99B 区出土遺物実測図（24）　139
第 100 図　99B 区出土遺物実測図（25）　140
第 101 図　99A・B 区出土分布図　141
第 102 図　軒丸瓦実測図（1）　145
第 103 図　軒丸瓦実測図（2）　146
第 104 図　軒丸瓦実測図（3）　147
第 105 図　軒丸瓦実測図（4）　148
第 106 図　軒丸瓦実測図（5）　149
第 107 図　軒丸瓦実測図（6）　150
第 108 図　軒丸瓦実測図（7）　151

第 109 図　軒丸瓦実測図（8）　152
第 110 図　軒丸瓦実測図（9）　153
第 111 図　軒丸瓦実測図（10）　154
第 112 図　軒丸瓦実測図（11）　155
第 113 図　軒丸瓦実測図（12）　156
第 114 図　軒丸瓦実測図（13）　157
第 115 図　軒丸瓦実測図（14）　158
第 116 図　軒丸瓦実測図（15）　159
第 117 図　軒丸瓦実測図（16）　160
第 118 図　軒丸瓦実測図（17）　161
第 119 図　軒丸瓦実測図（18）　162
第 120 図　軒丸瓦実測図（19）　163
第 121 図　軒丸瓦実測図（20）　164
第 122 図　軒平瓦実測図（1）　166
第 123 図　軒平瓦実測図（2）　167
第 124 図　軒平瓦実測図（3）　168
第 125 図　軒平瓦実測図（4）　169
第 126 図　軒平瓦実測図（5）　171
第 127 図　軒平瓦実測図（6）　172
第 128 図　軒平瓦実測図（7）　173
第 129 図　軒平瓦実測図（8）　174
第 130 図　軒平瓦実測図（9）　175
第 131 図　軒平瓦実測図（10）　176
第 132 図　軒平瓦実測図（11）　177
第 133 図　軒平瓦実測図（12）　179
第 134 図　軒平瓦実測図（13）　180
第 135 図　軒平瓦実測図（14）　181
第 136 図　金箔軒丸瓦実測図（1）　182
第 137 図　金箔軒丸瓦実測図（2）　183
第 138 図　金箔軒平瓦実測図　184
第 139 図　丸瓦厚さ別出土重量図　186
第 140 図　丸瓦実測図（1）　187
第 141 図　丸瓦実測図（2）　188
第 142 図　丸瓦実測図（3）　189
第 143 図　丸瓦実測図（4）　190
第 144 図　丸瓦実測図（5）　191
第 145 図　丸瓦実測図（6）　192
第 146 図　丸瓦実測図（7）　193
第 147 図　平瓦実測図（1）　194
第 148 図　平瓦実測図（2）　195
第 149 図　平瓦実測図（3）　196
第 150 図　平瓦実測図（4）　197
第 151 図　平瓦実測図（5）　198
第 152 図　平瓦実測図（6）　199
第 153 図　平瓦厚さ別出土重量図　199
第 154 図　丸瓦出土量分布図　200
第 155 図　平瓦出土量分布図　200
第 156 図　丸瓦のコビキＡ・Ｂの出土量比分布図　203
第 157 図　飾瓦実測図（1）　207
第 158 図　飾瓦実測図（2）　208
第 159 図　飾瓦実測図（3）　210
第 160 図　飾瓦実測図（4）　211
第 161 図　飾瓦・鬼瓦実測図　212
第 162 図　鬼瓦実測図（1）　214
第 163 図　鬼瓦実測図（2）　215
第 164 図　鬼瓦実測図（3）　216
第 165 図　鯱瓦実測図（1）　217
第 166 図　鯱瓦実測図（2）　218
第 167 図　造形瓦類実測図（1）　220
第 168 図　輪違い瓦実測図（1）　222
第 169 図　輪違い瓦実測図（2）　223
第 170 図　輪違い瓦実測図（3）　224
第 171 図　輪違い瓦実測図（4）　225
第 172 図　面戸瓦実測図（1）　226
第 173 図　面戸瓦実測図（2）　227
第 174 図　丸瓦系道具瓦実測図（1）　228
第 175 図　丸瓦系道具瓦実測図（2）　229
第 176 図　平瓦系道具瓦実測図（1）　230
第 177 図　平瓦系道具瓦実測図（2）　231
第 178 図　熨斗瓦実測図　232
第 179 図　伏間瓦・文字瓦実測図　234
第 180 図　木製品実測図（1）　236
第 181 図　木製品実測図（2）　237
第 182 図　木製品実測図（3）　239
第 183 図　木製品実測図（4）　240
第 184 図　木製品実測図（5）　241
第 185 図　木製品実測図（6）　243
第 186 図　木製品実測図（7）　244
第 187 図　木製品実測図（8）　245
第 188 図　木製品実測図（9）　247
第 189 図　木製品実測図（10）　248
第 190 図　木製品実測図（11）　250
第 191 図　木製品実測図（12）　251
第 192 図　木製品実測図（13）　252
第 193 図　木製品実測図（14）　253
第 194 図　木製品実測図（15）　255
第 195 図　木製品実測図（16）　256
第 196 図　木製品実測図（17）　257
第 197 図　木製品実測図（18）　258
第 198 図　土台木実測図（1）　261
第 199 図　土台木実測図（2）　262
第 200 図　土台木実測図（3）　263
第 201 図　土台木実測図（4）　264
第 202 図　土台木実測図（5）　267
第 203 図　土台木断面模式図　267
第 204 図　杭実測図（1）　268
第 205 図　杭・布など実測図　269
第 206 図　石製品実測図（1）　272
第 207 図　石製品実測図（2）　273
第 208 図　石製品実測図（3）　275
第 209 図　石製品実測図（4）　276
第 210 図　鉄製品実測図（1）　278
第 211 図　鉄製品実測図（2）　279
第 212 図　鉄製品実測図（3）　280
第 213 図　銅製品実測図（1）　281
第 214 図　銅製品実測図（2）　282
第 215 図　金属関連遺物実測図（1）　284
第 216 図　金属関連遺物実測図（2）　285
第 217 図　石垣 SW01 の石番対照図　289
第 218 図　石垣に記された墨書（1）　290
第 219 図　石垣に記された墨書（2）　291
第 220 図　石垣に記された墨書（3）　292
第 221 図　石垣に記された墨書（4）　293
第 222 図　石垣に記された墨書（5）　294
第 223 図　石垣に記された墨書（6）　295
第 224 図　石垣に記された墨書（7）　296

第 225 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（1）　315
第 226 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（2）　316
第 227 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（3）　317
第 228 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（4）　318
第 229 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（5）　319
第 230 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（6）　320
第 231 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（7）　321
第 232 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（8）　322
第 233 図　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法　337
第 234 図　漆塗り構造の分類　337
第 235 図　ＥＰＭＡの分析結果　338
第 236 図　清洲城下町遺跡の地区別出土漆器資料の組成　339
第 237 図　各遺跡における年代別の蒔絵粉材料の変遷　340
第 238 図　各遺跡別の一括出土漆器資料の組成　340
第 239 図　代表的な樹種の顕微鏡写真　341
第 240 図　赤色系漆（根来系漆器）の漆塗塗り構造　342
第 241 図　胎土重鉱物組成　345
第 242 図　胎土中の重鉱物　348
第 243 図　三角ダイヤグラム位置分類図　354
第 244 図　菱形ダイヤグラム位置分類図　354
第 245 図　Qt—Pl 図　354
第 246 図　SiO2—Al2O3 図　354
第 247 図　FeO3—MgO 図　355
第 248 図　K2O—CaO 図　355
第 249 図　Au—Ag 図　355
第 250 図　胎土・金箔分析試料（1）　356
第 251 図　胎土・金箔分析試料（2）　357
第 252 図　胎土・金箔分析試料（3）　358
第 253 図　胎土・金箔分析試料（4）　359
第 254 図　胎土・金箔分析試料（5）　360
第 255 図　胎土の顕微鏡写真（1）　361
第 256 図　胎土の顕微鏡写真（2）　362
第 257 図　金箔の顕微鏡写真（1）　363
第 258 図　金箔の顕微鏡写真（2）　364
第 259 図　昆虫分析試料の採取地点　369
第 260 図　遺跡から産出した貯穀性昆虫の顕微鏡写真　371
第 261 図　現在の貯穀性昆虫　372
第 262 図　清須城本丸地点の発掘調査区位置図　374
第 263 図　清須村古城絵図と調査区推定地点　375
第 264 図　93C・94A・96・97C 区遺構配置図　376
第 265 図　94A 区石垣・土台木　377
第 266 図　SW01 立面図　380
第 267 図　SW02 立面図　380
第 268 図　石垣（SW01・SW02）平面図　381
第 269 図　石垣（SW01）と土台木　382
第 270 図　96 区土台木平面図　385
第 271 図　96 区土台木平面詳細図（1）　386
第 272 図　96 区土台木平面詳細図（2）　387
第 273 図　96・97Cb 区石垣とシガラミ遺構　389
第 274 図　94A 区石垣・土台木写真　391
第 275 図　96 区石垣・土台木写真（1）　392
第 276 図　96 区石垣・土台木写真（2）　393
第 277 図　本丸東側遺構配置図　397

挿表目次

第 1 表　調査区別焼物類出土量一覧表　73
第 2 表　99A・99B 区瀬戸美濃窯産陶器出土量一覧表　90
第 3 表　軒丸瓦・軒平瓦出土量一覧表　164
第 4 表　丸瓦厚さ別出土量一覧表（重量）　201
第 5 表　丸瓦径別出土量一覧表（重量）　202
第 6 表　丸瓦径別出土量一覧表（破片数）　202
第 7 表　丸瓦厚さと径の対照表　203
第 8 表　平瓦厚さ別出土量一覧表（重量）　204
第 9 表　平瓦厚さ別出土量一覧表（破片数）　205
第 10 表　動物遺体出土一覧表　287
第 11 表　石垣墨書一覧表　288
第 12 表　木製品における樹種利用の比較　307
第 13 表　土台木の樹種　308
第 14 表　木製品の樹種同定結果（1）　309
第 15 表　木製品の樹種同定結果（2）　310
第 16 表　木製品の樹種同定結果（3）　311
第 17 表　土台木の樹種同定結果　312
第 18 表　杭の樹種同定結果（1）　313
第 19 表　杭の樹種同定結果（2）　314
第 20 表　清洲城下町遺跡出土漆器の一覧表　329
第 21 表　清洲城下町遺跡出土漆器の調査結果　330
第 22 表　大脇城遺跡出土漆器の調査結果（1）　331
第 23 表　大脇城遺跡出土漆器の調査結果（2）　332
第 24 表　大脇城遺跡出土漆器の調査結果（3）　333
第 25 表　岩倉城遺跡出土漆器の調査結果　333
第 26 表　勝川遺跡他出土漆器の調査結果　333
第 27 表　吉田城遺跡出土漆器の調査結果　334
第 28 表　名古屋城三の丸遺跡出土漆器の調査結果（1）　335
第 29 表　名古屋城三の丸遺跡出土漆器の調査結果（2）　336
第 30 表　ろくろ挽き物の用材分類一覧表　337
第 31 表　重鉱物分析結果　344
第 32 表　瓦の型式と胎土　346
第 33 表　重鉱物分析試料一覧　347
第 34 表　胎土性状表　352
第 35 表　化学分析表　353
第 36 表　タイプ分類一覧表　353
第 37 表　胎土・金箔分析試料一覧表　360
第 38 表　清洲城下町遺跡出土の昆虫化石分析結果　370
第 39 表　96 区出土山茶碗類出土量　395
第 40 表　96 区出土古瀬戸製品出土量　395

Ⅰ　調査概要

1　調査の経緯

清洲城下町遺跡は愛知県西春日井郡清洲町を中心に、春日町・新川町にわたる広大な遺跡である。五条川河川改修・名古屋環状2号線建設・県道拡幅に伴う発掘調査が、昭和57年度から平成11年度までに約84000㎡が実施されている。

本書で対象とする調査は、平成7年度から平成11年度までに実施された発掘調査のうち、愛知県土木部が計画した五条川河川改修事業に伴う8調査区（95Ａ区・95Ｂ区・96区・97Ａ区・97Ｂ区・97Ｃ区・99Ａ・99Ｂ区）である。この河川改修に伴う発掘調査は、昭和61年度から平成11年度までに、北は清洲中学校から南は巡礼橋に至る区間で、40130㎡の面積で行われたことになる。

調査区のうち、95Ａ区・95Ｂ区は遺跡南端に近く、名古屋鉄道本線鉄橋の南で五条川左岸部分にあたる。96区・97Ｃ区は清須城本丸の南東の地点で、かつて石垣が見つかっている94Ａ区と隣接する。97Ａ区・97Ｂ区はその本丸部分の対岸である五条川左岸に設定された。99Ａ・99Ｂ区は五条川左岸の長者橋を挟んだ地点に相当する。



第1図　遺跡位置図

2　調査の概要

（1）95 A区・95 B区

調査期間　平成 7（1995）年 11 月～平成 8（1996）年 3 月

調査面積　95 A区　1500 ㎡、95 B区　1500 ㎡

調査担当者　水谷寛明・松田訓・加藤博紀

概　要　排土処理の関係で 95 A区→95 B区の順に調査を行った。基本的に黄褐色砂までを重機等で表土剥ぎし、その下層の褐色砂以下を掘削し、灰黄褐色砂・シルト面で遺構を検出した。

95 A区では調査区ほぼ中央で、北西から南東に走る溝があり、北側では土坑・溝が確認できたが、南側には遺構が見られなくなる。95 B区の北端には95 A区で見られた溝と平行する溝が検出され、その南側からは土坑・溝が多数検出されている。また埋土中に多くの円礫を含む土坑も見つかっている。

（2）96区

調査期間　平成 8（1996）年 12 月～平成 9（1997）年 3 月

調査面積　2000 ㎡

調査担当者　増澤徹・宮腰健司・原田幹

概　要　重機での表土剥ぎ時点で、94 A区で確認されていた石垣の上部が見つかったため、その後の掘削においては、石垣から五条川までの落ち込みをＳＸ01、下層の溝をＳＸ02というように、94 A区で用いられた遺構表記をそのまま踏襲することとした。ＳＸ01の掘削は、礫・瓦が集中する層以下をＳＸ０１－２層、その上層をＳＸ０１－１層、さらにその上層で堤防の盛土以降の層は検出として遺物を取り上げていった。また、ＳＸ０１の中で、石垣に近く特に礫・瓦が集中する部分をＳＸ０１礫層と呼称した。このＳＸ０１中より金箔瓦（軒瓦・飾瓦・鯱瓦）を含む大量の瓦が出土している。

石垣は北東から南西に走るＳW01とそれに直行するＳW02がある。これらの石垣と下部施設の多くは後世に抜きとられているが、ＳW01は長さ約11ｍ、高さ1.8ｍで２～４段積み、ＳW02は長さ約５ｍで基底石のみが残っている。２つの石垣下位には土台木が敷かれており、ＳW01は、溝を掘り、横木を置いてさらにその上に縦木が乗せられており、ＳW02は縦木のみで作られている。ＳW01下部の土台木の南西端を確認するため、排土置き場になっていた部分を拡張したところ、土台木を据えた溝は約44ｍ続き収束することが判明した。さらにＳW02の南東側には方形の突出部があり、Ｌ字状の杭列や溝が見つかっている。

石垣とその関連遺構の下層にはトレンチ観察により、溝ＳＸ02、柵、杭の存在が確認されたが、これらの調査に関しては、石垣の保存方法が決定しなかったため、次年度の調査に委ねることとなった。

（3）97 A区・97 B区・97 C区

調査期間　平成 9（1997）年 11 月～平成 10（1998）年 3 月

調査面積　97 A区　700 ㎡、97 B区　500 ㎡
97 C区　600 ㎡

調査担当者　黒田哲生・石黒立人・浅井厚視

概　要　97A区に関しては３本のトレンチを開けたところ、調査区全体にわたり五条川の旧流路にあたることが確認された。流路内であるため湧水も激しいことから、トレンチの断面観察等を行い調査を終了した。

97 B区も五条川旧流路とその東岸部が検出された。調査区内には幾条かの流路とその川肩部分が確認されており、それに伴う整地層や杭列が検出されている。

97 C区は前年度の96区の下層部分の調査、94 A区と96区の間の未調査部分の調査を行った。96区ＳW02下層には、逆コ字状の丸杭と角杭で形成された杭列に、間を竹で編み込む様にした柵が検出された。また94 A区と96区間では、94 A区の石垣と土台木の続きが出土しており、その下層では倒壊した柵も見つかっている。さらに、移転保存に伴う石垣移動時に、石面に「雑賀」などの墨書されている石が19点確認されている。

（4）99Ａ区・99Ｂ区

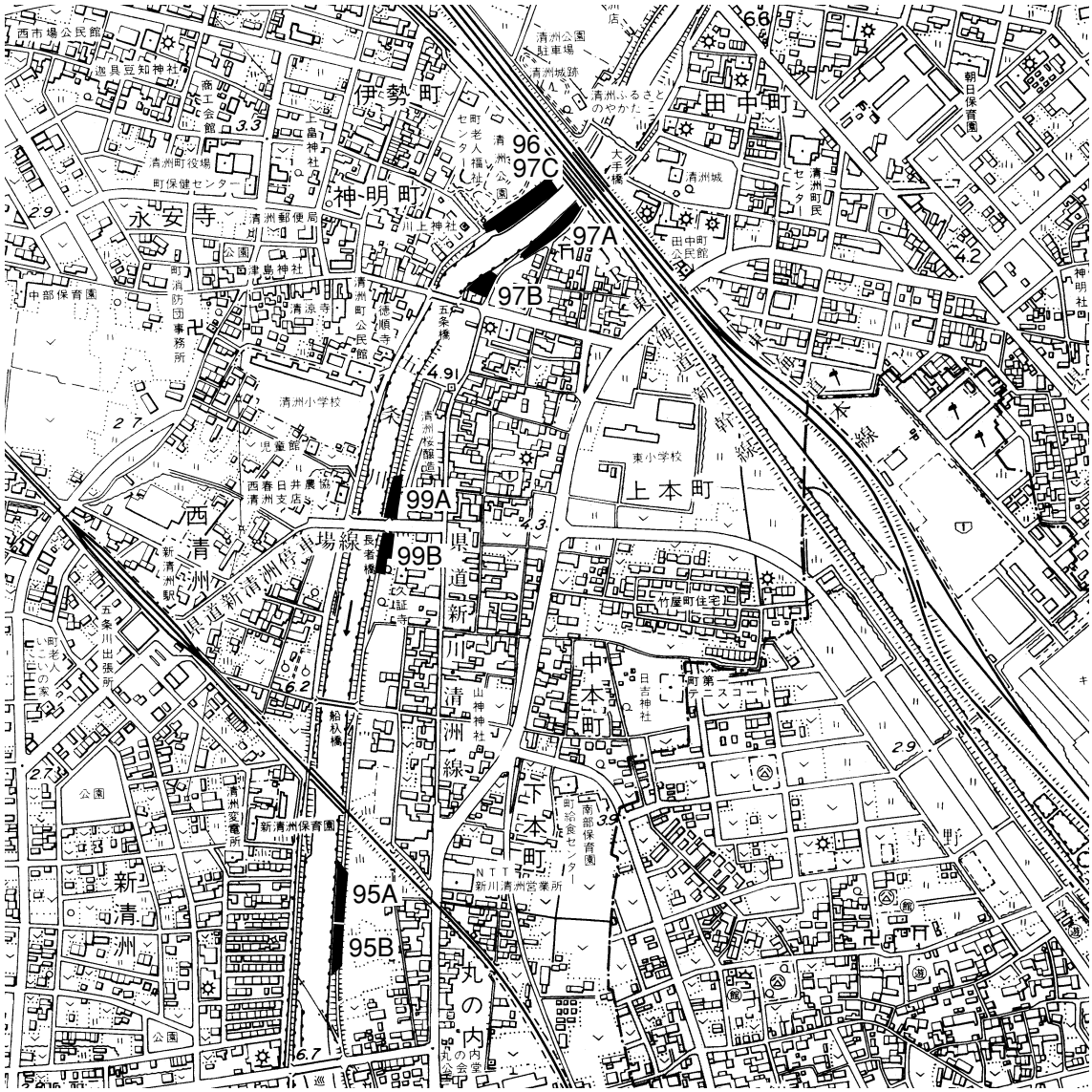
調査期間　平成11（1999）年12月～平成12（2000）年3月

調査面積　95Ａ区　850㎡、95Ｂ区　850㎡

調査担当者　春日井毅・伊藤太佳彦・木川正夫

概　要　95Ａ区では、標高約2.5ｍ面を第1面とし、地山の黄橙色砂直上を第2面として調査を行った。第1面では調査区北東約1/3程に、約50㎝の落ち込みが検出され、その中に畝状遺構が展開している。さらに、調査区中央に南北方向の溝が走り、城下町後期の廃棄土坑や井戸が密に存在する。第2面では城下町前期の区画溝や天正地震の痕跡が確認された。

95Ｂ区も、標高約2.4ｍ面を第1面とし、地山の黄褐色シルト直上を第2面として調査を行った。調査区の南側では江戸時代以降の旧堤防築堤による整地層がみられ、それにより城下町期の遺構が削平されていることが確認された。ただそれ以外の部分では95Ａ区同様多くの溝・土坑・井戸が検出されている。



第2図　調査区位置図

3　歴史的環境

（1）発掘調査で明らかとなった清須城以前の様子

愛知県西春日井郡清洲町およびその周辺地域では、これまでに多くの遺跡で比較的広大な面積の発掘調査が道路建設など様々な理由によって実施されており、清洲城下町遺跡およびその周辺は古くから人々が継続して生活を営んできたことが判明してきた。遺跡の北東部に隣接して所在する朝日遺跡（遺跡番号21001）では縄文時代後期の遺構・遺物が確認されており、近在の遺跡の中では最も古いものとなっている。この朝日遺跡は弥生時代には東海地方屈指の拠点的な集落として位置付けられており、多くの成果が得られている。弥生時代の他の遺跡には清洲城下町遺跡の西側に土田遺跡（遺跡番号21005）が、南西部では阿弥陀寺遺跡（遺跡番号31008）などが所在している。古墳時代初頭には、前方後方形墳丘墓などが確認された廻間遺跡（遺跡番号21003）がある他に、土田遺跡でも墳丘墓が確認された。古墳時代中期には朝日遺跡で墓域が、古墳時代後期になると清洲城下町遺跡田中町地区で集落遺跡が出現するようになる。この田中町地区では奈良時代から平安時代まで集落が継続している。平安時代後半（11世紀後半）には清洲城下町遺跡朝日西地区（朝日西遺跡）で集落遺跡が現れる。引き続き、平安時代末（12世紀後半）になると土田遺跡や清洲城下町遺跡田中町地区および御園地区などでも中世集落遺跡が出現している。南北朝時代（14世紀代）ころになると、清洲城下町遺跡朝日西地区や阿弥陀寺遺跡は集落は継続していくものの、土田遺跡や清洲城下町遺跡田中町地区などでは集落は消滅すると考えられている。しかも、南北朝・室町時代まで継続する集落遺跡も、15世紀中頃になると急速に遺跡は衰退すると考えられており、その後は清須城とそれに関連する遺構群に取って代えられてしまうようである。

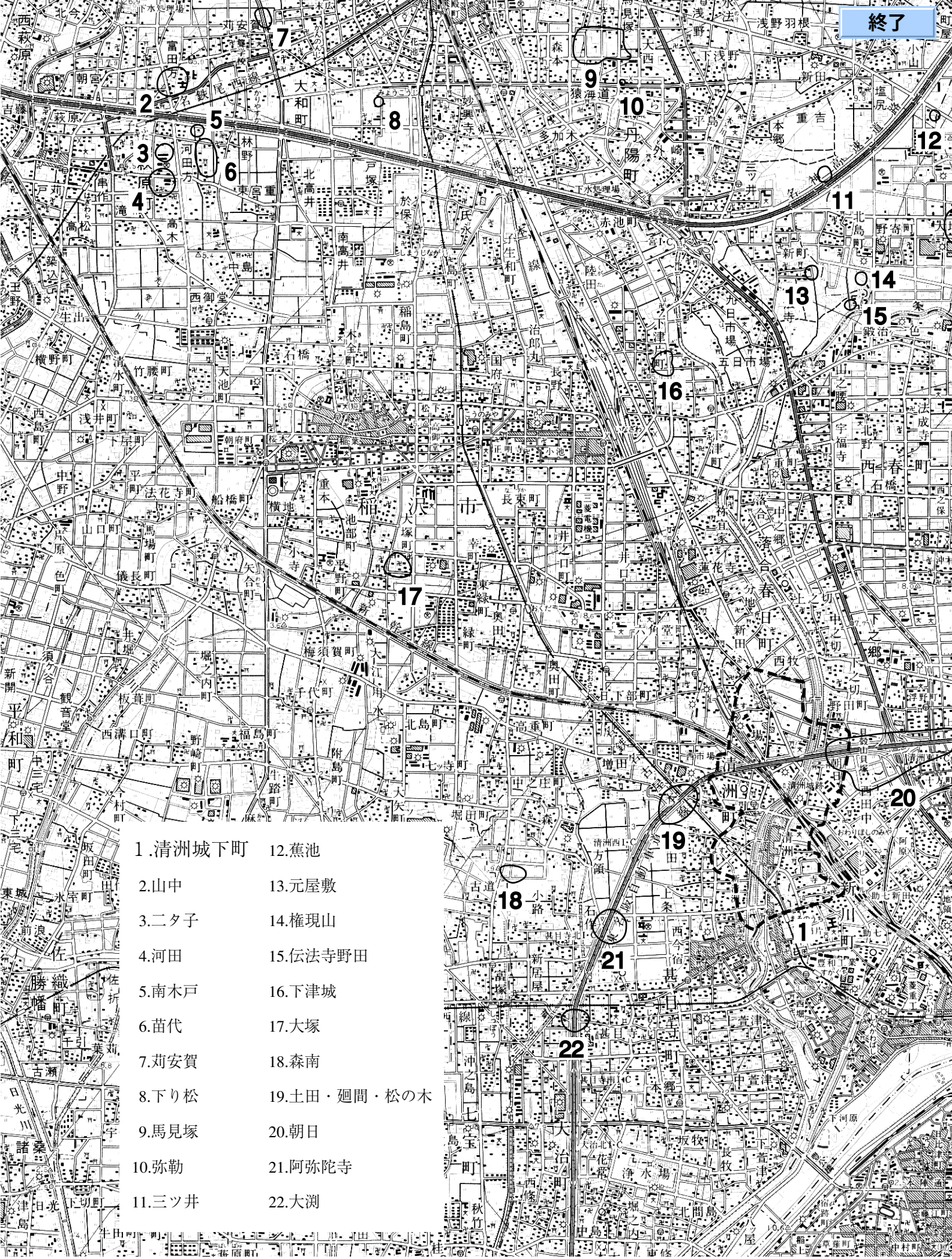
（2）築城期における清須城

考古学的な成果が着実に積み重なり、集落の動向が明らかになる一方で、古記録類による清須周辺の歴史像もある程度は明らかとなっている。「清須」という地名は14世紀初めの『神鳳抄』に伊勢神宮領の「清須御厨」として記載されたのが初出である。この「清須御厨」がどこに比定されるかについては定説が全く無いが、清洲城下町遺跡朝日西地区（朝日西遺跡）に当てる考え方もできるかも知れない。

応永12（1405）年頃、室町幕府の管領で尾張守護職であった斯波義重が、鎌倉街道と伊勢街道の合流地点で交通の要衝となる清須に、守護所下津城の別郭として清須城を築城したと伝えられている。これまでの発掘調査の成果ではこの記述を裏付ける積極的なデータは発見されていないが、全く無視できないものと思われる。その後、文明8（1476）年に守護所下津城が戦乱によって焼かれ、守護所は清須城に移ったとされている。文明10（1478）年に清須城の尾張守護代織田敏定を岩倉城の織田敏広と斎藤妙椿が包囲攻撃し対立を深めたが、翌年両者で和議が成立し、尾張は上四郡を岩倉の織田敏広が、下四郡を清須の織田敏定が分割支配されることとなった。清須城と岩倉城は両者ともこのころ本格的に居館や城下の諸施設が展開するようになったと考えられ、清洲城下町遺跡の田中町北部地区や岩倉城遺跡（岩倉城跡：市指定史跡：記念物番号1105）の発掘調査でその繁栄振りが明らかにされている。

（3）城下町期前期～大改修までの清須城

弘治元（1555）年に清須織田家当主信友が守護斯波義統を殺害したのを契機に、那古野城にあった織田信長は清須城を攻めて信友を切腹させ清須城に入城した。織田信長は次いで、永禄2（1559）年に岩倉織田家を滅ぼし、永禄3（1560）年に桶狭間の戦いに



第３図　清洲城下町遺跡と周辺の遺跡（1/50.000）

勝利し、永禄4（1561）年に尾張守護斯波義銀を追放して勢力を伸ばし、永禄6（1563）年に小牧山城に居城を移転した（小牧越し）。小牧越し後の清須城下の様子については明らかではないが、該当する時期の遺物が少なくなる可能性が指摘されており（鈴木2002）、盛時から比べればその繁栄は衰えた可能性が高い。しかし、依然として家臣の本拠や家族は清須に残したままの状況も想定され、実際天正10（1582）年に本能寺の変の事後処理のための重要な会議が清須で行われたこと（清須会議）自体が、この時点においても清須が重要な位置を占めていたことを物語っているだろう。

小牧越し以降の天正3（1575）年には織田信忠が尾張の支配権が与えられており、翌年に織田信忠は岐阜城主になっていた。天正10（1582）年の清須会議後は、織田信雄が尾張、伊勢、伊賀の領主となった。当初信雄は伊勢長島に居城を構えていたが、天正地震と木曽川洪水を期に天正14（1586）年に清須城に本拠を移すことを決めた。このころ清須城は、城下町を三重の堀で囲み本丸には天守などが築造されるなど大きく改修されたと推測される。これを裏付ける資料が御園神明社前の内堀から出土した「天正十四」銘丸瓦である。大量に廃棄された瓦類に伴って出土したこの資料から、少なくとも瓦葺建物が天正14年に建造されたことがいえるだろう。実際には天正地震以前から瓦類の存在は明らかとなっており、瓦葺建物の存在がどこまで遡るのかは詳らかにできていない問題となっている。

（4）大改修～清須越しまでの清須城

その後の天正18（1590）年に、織田信雄は追放され豊臣秀次が清須城主となった。秀次は翌天正19（1591）年に尾張国の検地を、文禄2（1593）年に清須町人の家数調査をそれぞれ実施し、尾張の支配力を高めた。このとき清須町人の家数2729軒であることが明らかとなっている。この後は、文禄4（1595）年に福島正則が、慶長5（1600）年に松平忠吉が、慶長12（1607）年に徳川義直が城主となり、清須城下町は最も繁栄した時期を迎える。しかし、慶長14（1609）年に徳川家康が名古屋城築城を決定し、翌慶長15（1610）年に名古屋城築城が開始され城下町全体も移転が進められた（清須越し）。慶長18（1613）年に清須越しはほぼ完了したといわれ、後に美濃街道の宿場町として清須宿が設けられ、尾張三宿として町並みが栄え続けたと伝えられる。

Ⅱ　遺　構

1　95A・B区

（1）　溝

A　SD01・02・03

SD01・02・03は、95A区の北側を南北に走る溝群となる。SD01は幅60㎝・深さ約15㎝で長さ9.5ｍを測り、それと平行するように延びるSD02は幅80～130㎝・深さ約25㎝を測る。SD03はさらに南側にあるもので、幅80㎝・深さ約25㎝で長さ９ｍにわたって検出されている。SD02の時期は城下町Ⅲ-2期になる。

B　SD04

95A区中央を北北西から南南東に向いて走る幅60㎝・深さ約20㎝の溝で、褐色細粒砂が埋土となる。時期は城下町Ⅲ-2期になる。

C　SD101

95B区の北端を北北西から南南東に走る幅50㎝・深さ約５㎝を測る溝となる。南端部は約10㎝程深くなり、やや西に振れて拡張しており、中層から上層に５～10㎝の小礫を含む。さらにその先には、同様に小礫を含むSK207が所在する。時期は城下町Ⅲ-2期になる。

D　SD102

95B区中央を東西に走る幅190～240㎝・深さ約50㎝の溝で、にぶい黄褐色シルトが埋土となる。時期は城下町Ⅲ-2期になる。

E　SD107・108・109

95B区の中央から南を東西に走る溝で、SD107は幅150㎝・深さ20㎝、SD109は幅110㎝・深さ約8㎝を測り東側で途切れる。SD108は幅70～140㎝・深さ25～45㎝の大きさとなる。３条の溝とも時期は城下町Ⅲ-2期になる。

F　SD501

95B区の南の下層で検出された溝で、ほぼ東西に走る溝が直角に北方向に折れる。規模は幅140㎝・深さ約30㎝を測り、灰黄褐色極細粒砂が埋土となる。

G　SD502・503

SD502は、SD501の南約180㎝のところを東西に平行して走る幅180～200㎝の溝で、底面のわずかな部分のみが残存していた。東側はSX501によって切られており不明である。そのSX501からSD501に直交するように南に走る、深さ約70㎝のSD503が検出された。SD503は東肩が不明で西肩のみが確認されている。

（2）　土坑

A　SK26

95A区にあるSD03の南端の南で検出された土坑で、東側がSK27に切られているが、大きさは短径58㎝・深さ27㎝の楕円形を呈し、城下町Ⅲ期の遺物がまとまって出土している。

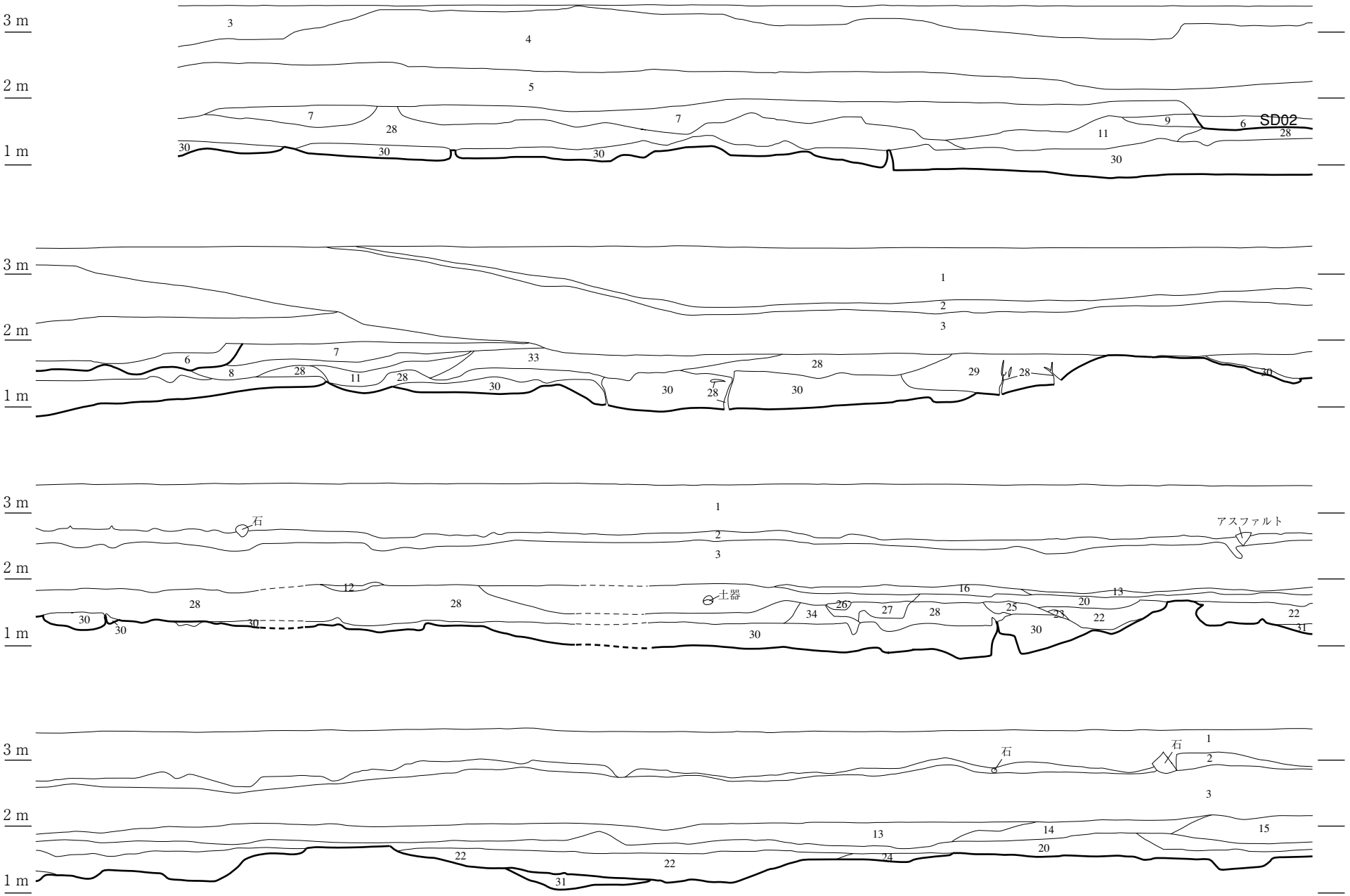
B　SK207

95B区の北で、SD101の先端の南西にある長径180㎝・短径170㎝・深さ60㎝を測る土坑となる。最上層に、長径約50㎝の礫２個を含む３～10㎝の礫が多数出土している。時期は城下町Ⅲ-2期になる。

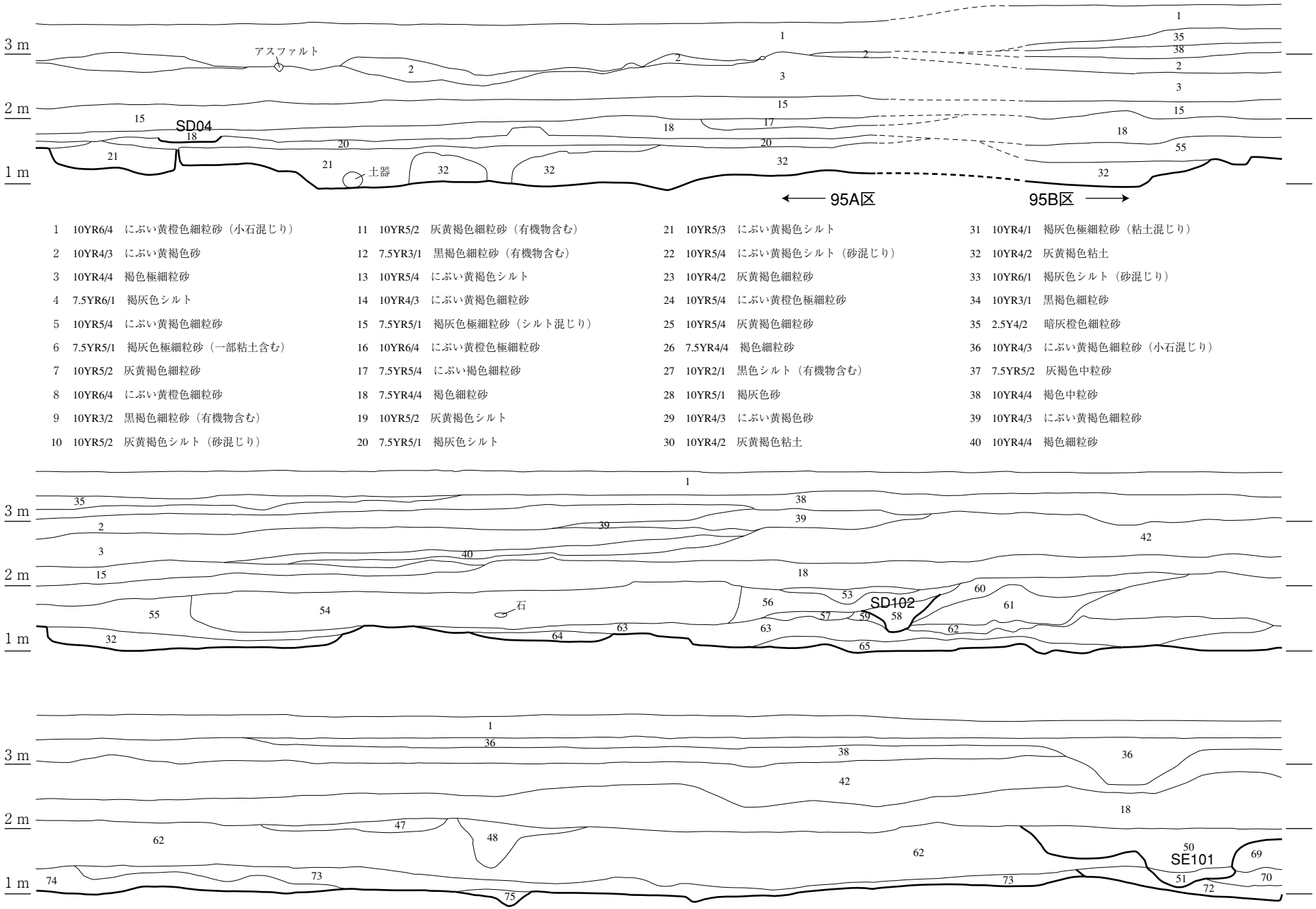
（3）　井戸

A　SE101

95B区中央部の東壁沿いに検出された井戸で、西肩部分180㎝程のみが検出されている。東壁セクションの観察では、底面の径140㎝程の部分がさらに落ち込んでおり、桶・曲物等の内部構造物があったと推定される。

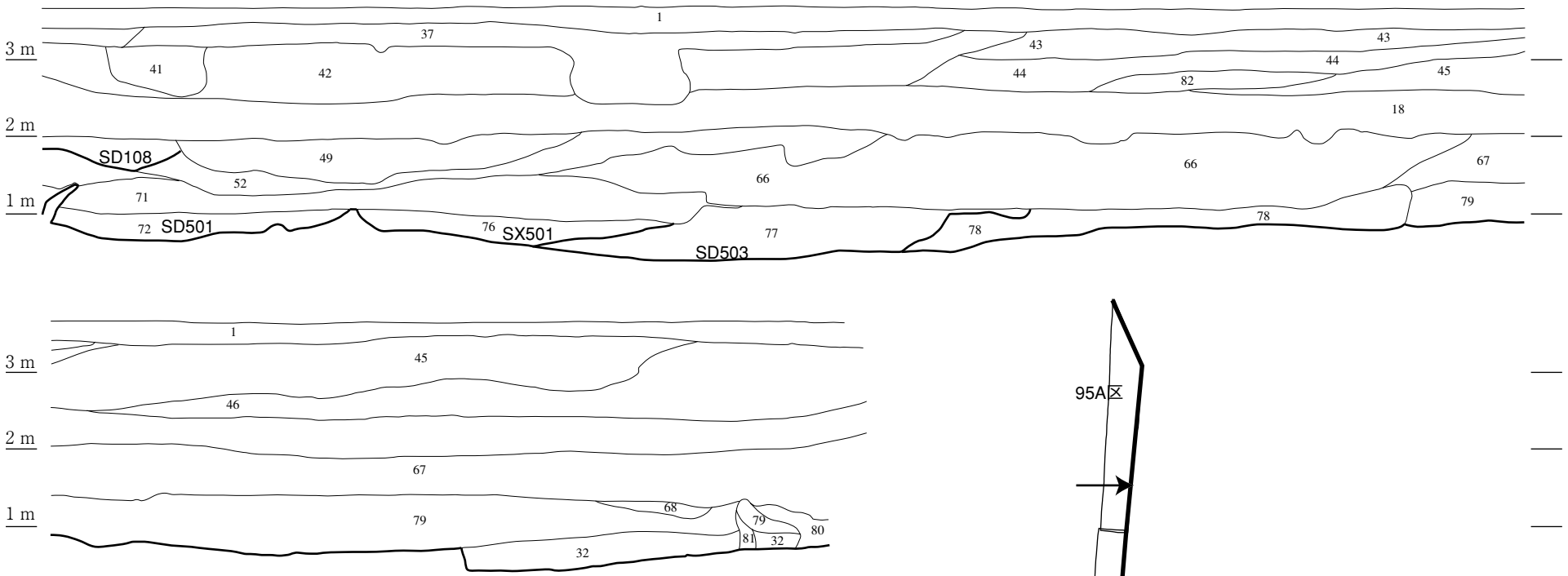


第４図　95A・B区東壁セクション（１）　1/80



1 10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂（小石混じり）
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂
3 10YR4/4 褐色極細粒砂
4 7.5YR6/1 褐灰色シルト
5 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂
6 7.5YR5/1 褐灰色極細粒砂（一部粘土含む）
7 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂
8 10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂
9 10YR3/2 黒褐色細粒砂（有機物含む）
10 10YR5/2 灰黄褐色シルト（砂混じり）
11 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂（有機物含む）
12 7.5YR3/1 黒褐色細粒砂（有機物含む）
13 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
14 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂
15 7.5YR5/1 褐灰色極細粒砂（シルト混じり）
16 10YR6/4 にぶい黄橙色極細粒砂
17 7.5YR5/4 にぶい褐色細粒砂
18 7.5YR4/4 褐色細粒砂
19 10YR5/2 灰黄褐色シルト
20 7.5YR5/1 褐灰色シルト
21 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
22 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（砂混じり）
23 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂
24 10YR5/4 にぶい黄橙色極細粒砂
25 10YR5/4 灰黄褐色細粒砂
26 7.5YR4/4 褐色細粒砂
27 10YR2/1 黒色シルト（有機物含む）
28 10YR5/1 褐灰色砂
29 10YR4/3 にぶい黄褐色砂
30 10YR4/2 灰黄褐色粘土
31 10YR4/1 褐灰色極細粒砂（粘土混じり）
32 10YR4/2 灰黄褐色粘土
33 10YR6/1 褐灰色シルト（砂混じり）
34 10YR3/1 黒褐色細粒砂
35 2.5Y4/2 暗灰橙色細粒砂
36 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂（小石混じり）
37 7.5YR5/2 灰褐色中粒砂
38 10YR4/4 褐色中粒砂
39 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂
40 10YR4/4 褐色細粒砂

第５図　95A・B区東壁セクション（２）　1/80



41 10YR4/4 褐色細粒砂（小石混じり、撹乱）
42 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂
43 10YR4/4 褐色細粒砂（一部褐灰色細粒砂含む）
44 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂
45 10YR3/4 暗褐色極細粒砂
46 10YR6/2 灰黄褐色シルト（砂混じり）
47 10YR3/3 暗褐色中粒砂（一部有機物含む）
48 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂
49 10YR4/4 褐色中粒砂
50 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂
51 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂
52 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂
53 10YR3/3 暗褐色中粒砂（一部有機物含む）
54 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
55 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂
56 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
57 2.5Y5/2 暗灰黄色中粒砂
58 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
59 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂
60 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂
61 10YR5/2 灰黄褐色シルト
62 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
63 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂
64 10YR5/2 灰黄褐色シルト
65 10YR5/2 灰黄褐色シルト
66 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂
67 10YR4/4 褐色細粒砂
68 10YR5/1 褐色極細粒砂
69 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
70 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂
71 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂
72 10YR5/2 灰黄褐色シルト
73 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂
74 10YR5/2 灰黄褐色シルト
75 10YR5/2 灰黄褐色シルト
76 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂
77 10YR5/2 灰黄褐色シルト
78 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂
79 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂
80 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂
81 7.5YR5/6 明褐色中粒砂
82 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂（シルト混じり）

第６図　95A・B区東壁セクション（３）　1/80

2　96・97C区

「Ⅰ－2調査の概要」でも述べたとおり、96・97C区は五条川の右岸で、清須城本丸の南東側の調査区にあたる。96区は上層の石垣を主とした部分を、97Ca区は北西側にある94A区との間の部分を、97Cb区は下層の柵列を主とした部分を調査した。

（1）　河道

A　SX01

旧五条川になる遺構で、本来ならばNR（自然河道）とすべきものであろうが、94A区での表記と整合させるために、本書も同一のSX01を用いた。石垣・柵列や突出部がある肩部分と、検出した最底面との比高は1～1.2mを測る。北西側の肩付近ではやや急激に落ちがみられるが、全体にはゆるやかに南東側に落ち込んでいく。また北東隅では、底面が南東に向かってゆるやかに立ち上がり部分を確認しており、北西肩になる94A区で検出された石垣からの距離は約30mとなる。埋土は上層50㎝程が江戸時代以降の堆積であるシルト層で、その下層が城下町期の堆積となり、遺物取り上げ時点では、前者を「検出」とし、後者のみを「SX01」とした。さらに城下町期の埋土は、礫・瓦を多量に含む上層と砂質が強くなる下層に分け、1層・2層と呼称した。水流を示す砂の堆積は、最下層でしか確認できず、ほとんどの埋土はシルト質で、ゆるやかな流れもしくは淀んだ場所であったことが想定できる。調査時の底面レベルは標高約80㎝で、SX01はさらに落ち込むことが確認されたが、湧水が激しいため、下層への掘削は断念した。

（2）　SW01関連遺構

A　石垣（SW01）

調査では、表土を剥いだ時点で石垣の最上部が検出され、前面部分を中心に多量の礫・瓦が出土している。

突出部の南西端より、SX01の肩に沿って南西方向に延びる石垣である。崩落が極めて激しく、長さ10.8mのみが残存していた。依存状況が良い部分で確認すると、SW01は基本的に、50～100㎝の大きさの立方体の石を4段に積み上げており、石の間に20～40㎝のやや大きめの自然石や10㎝以下の栗石が詰められている。最下段に置かれた根石とその上3段に積み上げられた石垣石は、部分的な加工は行われているが、面を作り出すようなことはされておらず、比較的平坦な面が前面にくるように配置されている。またわずかであるが、石垣間の詰め物には、自然石以外に五輪塔や木杭が使用されている。石垣石は、上位にいくに従い後方に控えながら積まれており、現状での角度は60～65°となる。石垣の背面で、堀肩との間には裏込めとなる10㎝以下の多量の栗石が、幅40～60㎝の間に詰め込まれていた。また、根石・石垣石には、19点26カ所の墨書が確認されている。

B　溝

SD01

SD01は、溝を目的として掘削されたものではなく、石垣に用いられた石を抜き取るため掘削した結果、溝状になったものである。特に南西部では大規模な「抜き取り」が行われたようで、根石・土台木とも残存しておらず、不定形に乱雑に掘り込まれている。また北東部の土台木についても、「抜き取り」時に移動したと考えられるものが存在する。これらの作業が行われた時期については、不明である。

SD02

石垣を構築するために掘削された溝である。幅3～3.8m、深さ0.5～1.5mを測り、断面形は台形を呈する。SW01が残存している部分では、根石部分にあたる下位70㎝程の高さまで青灰色シルト土・灰色シルトで埋められていた。また底面では、平坦にするために埋められた灰色シルトが部分的みられた。

溝最上部より、石垣に平行して長さ約2m・厚さ14㎝の丸太杭が横位の状態で2本出土している。根石の上端に接することから石垣の押さえかとも考えられるが、2段目の石垣石とはやや距離があり、用途は不明である。

土台木

SD02に直交するように置かれた32本の胴木と7本の横木からなる。

胴木・横木とも遺存状況が良好であったのは、石垣の下位にあたる部分であるが、調査途中に、湧水と五条川からの流水のため、浮き上がってしまい、胴木25・26・28・30と西－１～３、東１～３の横木の出土位置が不明となっている。また現位置にあると思われるその他の胴木の中にも、幾分か移動している可能性もある。そのため第12・13図では、取り上げ後に実測した横木・胴木をはめ込んである。

胴木は長さ260～280㎝・幅30～50㎝・厚さ20～30㎝を測り、上下面・側面・小口面に面取が施されている方形・長方形のものと、半円形のものがある。上面には横木が渡せるように、幅20～30㎝・深さ５～10㎝の抉り部が平行して２カ所設けられている。胴木は各々90～100㎝の間隔で、石垣の平面形に沿って、また横木を抉り部にはめ込むことができるように、幾つかのグループごとに少しづつ角度を変えて配置されている。また石垣の崩落を防止するために、胴木の前面部がわずかに高く上げられている。さらに胴木16の上面では、墨書らしきものが見つかっているが、不明瞭であり、確認はされていない。

完存している横木のうちもっとも大きなものは東－１で、長さ540㎝・幅22㎝・厚さ18㎝を測るもので、西－３がやや小振りなもの、西－１・２、東－２が長さ４ｍ、東－３が約250㎝となる。これらの横木は、両端に抉り込み部分があって、重ねあわせることができるようになっており、同一面にある東－２・３や、上下対称面にある東－１、西－１・３や、同一面にありながら片方の抉り面が不明瞭な西－２がある。また、横木を重ねた部分を動かないように補強するために抉り部にほぞ穴が穿たれているもの西－２、東－１・２、ほぞ穴がないもの西－１、東－３がある。石垣のない部分の、胴木19～22の南東側の抉り部で横木21が検出されているが、遺存状況は極めて悪いものであった。また、胴木12の南東側でも横木らしき木片が確認されている。

土台木に用いられた樹種は多様で、アカマツ・コウヤマキ・ケヤキなどがみられる。

これら土台木（胴木・横木）及びその上位の根石を支えるために前面部を中心に、検出されただけで89本の杭が打ち込まれている。これらの杭は長さ80～100㎝、太さ約12㎝の樹皮が残存した芯もち材で、アカマツがほとんどをしめており、その他クリやヤナギが使われている。

（３）石垣（SW02）

SW01の北東端から直交するように南東に根石３個分が検出されている。用いられた根石・石垣間に詰め込まれた石･栗石ともSW01と同規模となる。土台木の遺存状況は良好ではなかったが、約40㎝の間をおいて２本の横木が直接地面上に置かれており、南東端の下位のみに胴木が存在する。根石・横木の前面には、長さ80～100㎝の樹皮が残存した芯もち杭が９本の杭打ち込まれている。なお、SW02の北東側は削平されているため､現状では低くなっている。

（４）石垣（SW03）

97Ca区の調査区端で検出されたもので、94A区の土台木・横木に続いていくものである。ただ94A区では根石・石垣石は検出していないが、南東端にあたると思われるこの部分では、80㎝程の根石が２個確認されている。

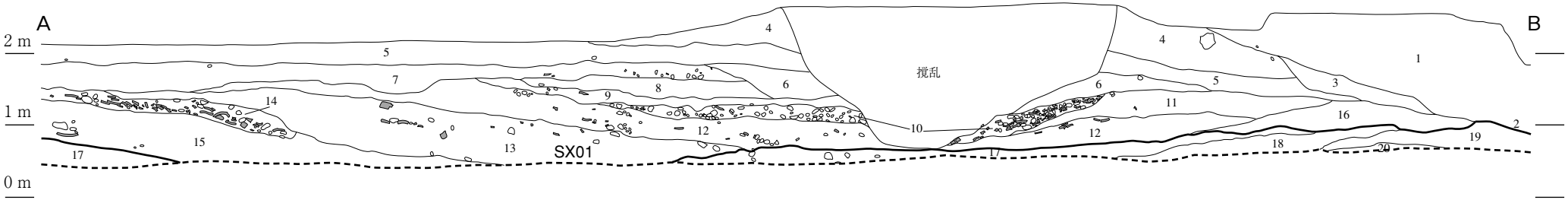
（５）溝

A　SD03

突出部分の南東辺に沿うように北東から南西に走る、幅３～６ｍの不定形な溝で、流水を示す砂層が埋土となっている。北東・南西端は不明瞭で、そのままSX01につながっていくようである。

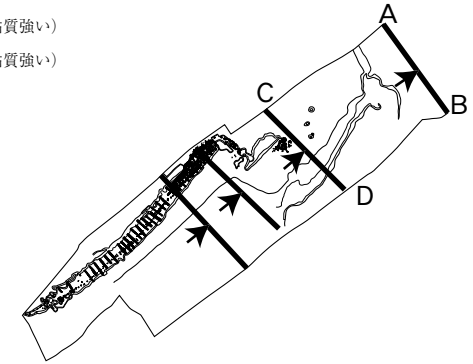
B　SX02

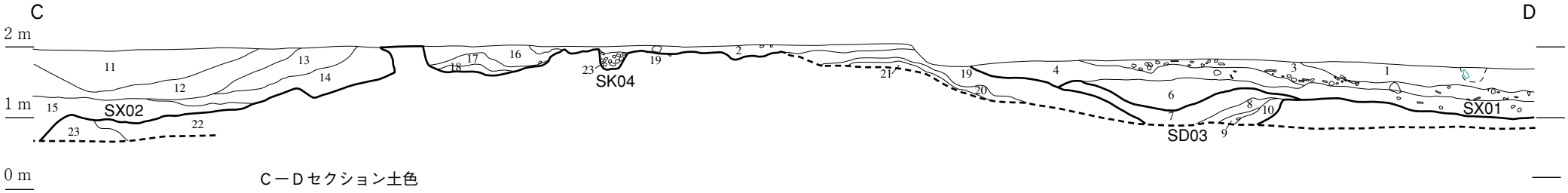
溝状の遺構であるが､94A区で呼称されたSX02という名称をそのまま使用する。石垣遺構の下層から検出された溝状の遺構で幅約７ｍを測り、底面は湧水のため不明瞭であるが､浅いところでも約90㎝を測る。南東肩および南西端はそのままSX01と繋がるようではっきりとせず、北東肩はSW01があるあたりで屈曲すると思われる。埋土はシルトが主体で、木製品や植物遺体が多量に出土している。



A－Bセクション土色

1 10YR4/1 褐灰色シルトとにぶい黄褐色砂
10YR5/4 黄褐色砂の互層
2 10YR4/1 褐灰色シルト
3 10YR5/2 灰黄褐色砂
4 10YR5/2 灰黄褐色シルト
5 10YR4/1 褐灰色シルト
6 10YR5/1 褐灰色シルト
7 10YR5/2 オリーブ灰色シルト
8 10YR5/2 オリーブ灰色シルト
5BG5/1 青灰色シルトブロックをわずかに含む
9 5BG5/1 青灰色シルト
10 5BG5/1 青灰色シルト
10YR5/2 オリーブ灰色砂を含む（礫・瓦を多量に含む）
11 7.5Y5/2 オリーブ灰色シルト
12 10Y5/2 オリーブ灰色シルト
5BG5/1 青灰色シルトブロックを含む
13 5BG5/1 青灰色砂質シルト
10Y5/2 オリーブ灰色シルトブロックを含む
14 5BG5/1 青灰色砂質シルト
10Y5/2 オリーブ灰色シルトブロックを含む（礫・瓦を多量に含む）
15 10BG5/1 青灰色砂層
16 7.5YR5/2 灰オリーブ砂質褐色細粒砂
17 10BG4/1 暗青灰色シルト（粘質強い）
18 10BG3/1 暗青灰色シルト（粘質強い）
19 10YR5/3 にぶい灰黄褐色砂
20 7.5YR5/8 明褐色砂

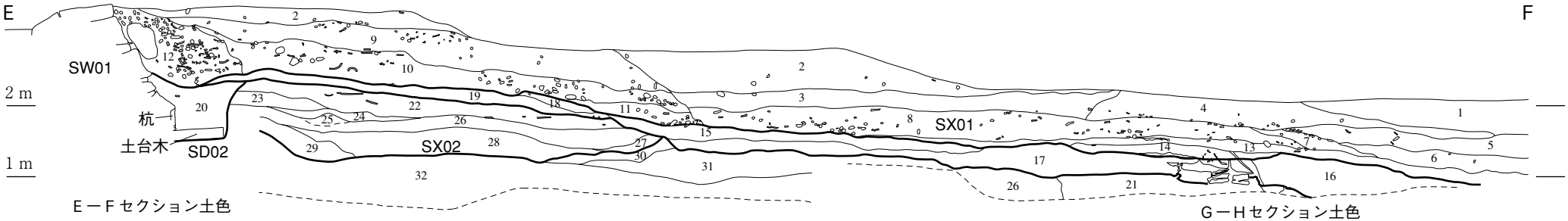




C－Dセクション土色

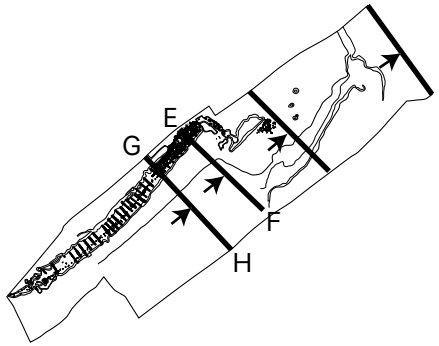
1 10YR5/1 褐灰色シルト
7.5YR4/6 褐色シルトの互層
2 2.5Y6/1 黄灰色シルト
3 10YR4/1 褐灰色砂（礫を含む）
4 10YR4/1 褐灰色砂
5 10YR4/1 褐灰色シルト
10YR6/8 明黄褐色砂の互層
6 2.5Y6/8 黄色砂
10YR4/1 褐灰色シルトの互層
7 10YR4/1 褐灰色シルト
2.5Y7/8 黄色砂を含む
8 2.5Y6/8 明黄褐色砂
9 5B5/1 青灰色シルト
10 2.5Y6/8 明黄褐色砂
10YR4/1 褐灰色砂を含む
11 2.5GY4/1 暗オリーブ灰シルト
12 5B5/1 暗青灰色シルト
13 2.5Y4/2 暗灰黄色砂
14 2.5GY5/1 オリーブ灰砂
15 5B2/1 暗青灰色シルト（粘質シルト）
16 5Y4/1 灰色シルト
17 10Y6/3 にぶい黄橙色砂（鉄分多い）
18 10Y6/3 にぶい黄橙色砂
10Y5/1 褐灰色シルトを含む
19 10Y8/1 灰白砂
20 7.5YR5/6 明褐色砂
21 10YR4/1 褐灰色シルト
22 2.5Y5/4 黄褐色砂
23 10YR6/4 にぶい黄橙色砂
24 2.5Y6/8 明黄褐色砂
25 5B4/1 暗青灰色砂

第７図　96区セクション（１）　1/80



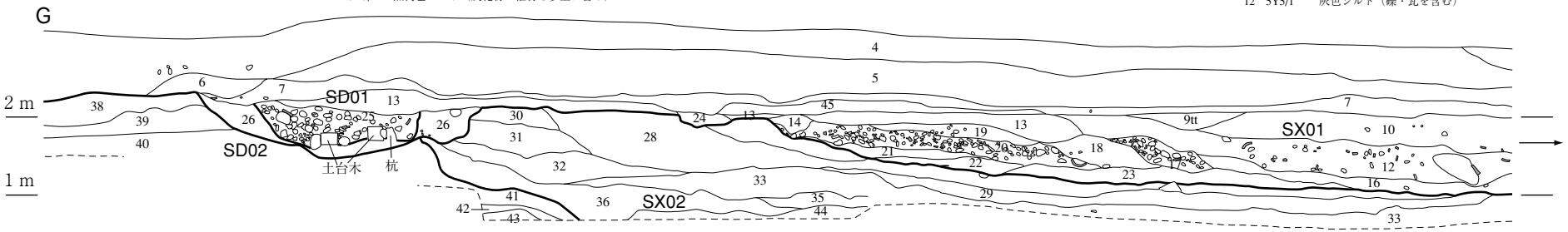
E－F セクション土色

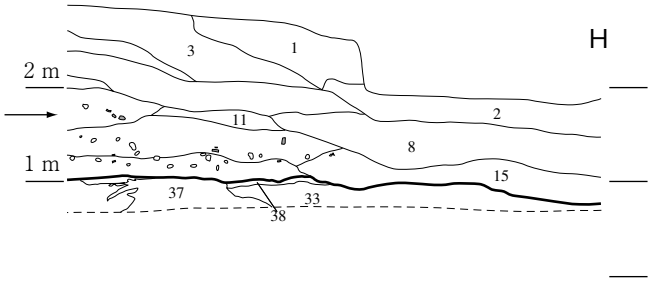
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2 10YR6/6 黄橙色砂質シルト
3 2.5GY5/1 オリーブ灰シルト
4 10YR4/2 灰黄褐色シルト
5 10YR5/1 にぶい黄褐色細粒砂（礫・瓦を少量含む）
6 10YR4/1 褐灰色砂
7 5YR5/1 灰色砂
8 10YR4/1 褐灰色砂質シルト（礫・瓦を多量に含む）
9 10YR5/6 黄褐色シルト
10YR6/2 灰黄褐色シルトブロックを含む
10 10YR5/6 黄褐色シルト（礫・瓦を多量に含む）
11 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（礫・瓦を含む）
12 10YR5/6 黄褐色シルト（礫・瓦を多量に含む）
13 10YR4/1 褐灰色砂
14 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
15 7.5YR5/1 褐灰色砂
16 5BG4/1 暗青灰色シルト（粘質シルト）
17 10BG4/1 暗青灰色砂質シルト
18 2.5Y7/3 浅黄砂
19 2.5GY5/1 オリーブ灰シルト
20 5B5/1 青灰色シルト
21 10YR5/6 黄褐色砂
22 10YR3/1 黒褐色シルト（瓦・植物・木製品を含む）
23 2.5Y4/1 黄灰シルト
2.5Y7/2 灰黄色砂を含む
24 2.5Y3/1 黒褐色シルト（炭化物・植物を多量に含む）
25 貝層
2.5Y3/1 黒褐色シルトを含む
26 5B4/1 暗青灰色シルト
10YR3/1 黒褐色シルトを含む
27 7.5YR5/1 褐灰色砂
28 5B4/1 暗青灰色シルト
29 5B4/1 暗青灰色シルト
7.5YR5/1 褐灰色砂を含む
30 5B4/1 暗青灰色シルト
31 N2/1 黒色シルト（粘質強い）
32 10BG4/1 暗青灰色粗砂



G－H セクション土色

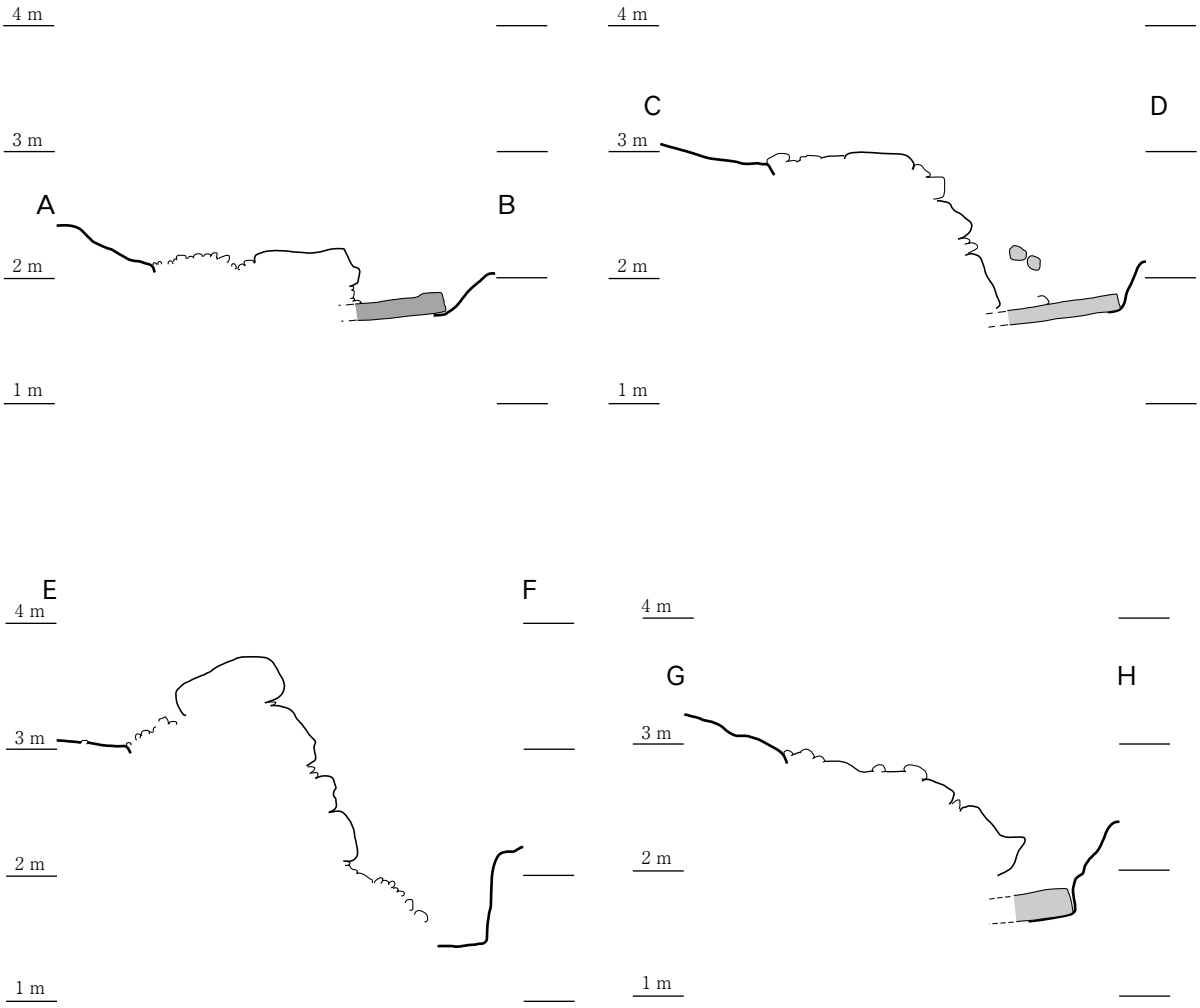
1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
10YR4/1 褐灰色シルトの互層
3 10YR4/4 褐色シルト
4 7.5YR6/8 黄橙色砂質シルト
5 10YR5/6 黄褐色シルト
10YR6/2 灰黄褐シルトのブロックを含む
6 10YR5/6 黄褐色シルト
10YR6/2 灰黄褐シルトのブロックを多く含む
7 10YR5/1 褐灰色シルト
8 10R4/1 暗赤灰色シルト
10YR4/1 褐灰色シルトの互層
9 10YR5/1 褐灰色シルト（鉄分を含む）
10 10YR5/1 褐灰色シルト（鉄分を多く含む、礫・瓦を含む）
11 10YR4/1 褐灰色砂
12 5Y5/1 灰色シルト（礫・瓦を含む）



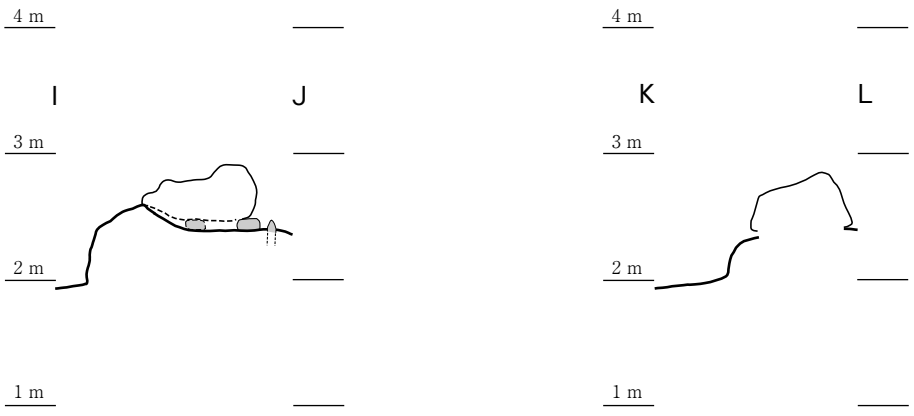


13 7.5GY5/1 緑灰シルト
14 10YR5/1 褐灰色シルト
15 10YR5/1 褐灰色シルト
2.5Y6/6 明黄褐砂の互層
16 10YR4/1 褐灰色シルト（礫・瓦を含む）
17 10YR5/2 灰黄褐色シルト
18 7.5GY4/1 暗緑灰砂質シルト
19 7.5GY5/1 緑灰シルト（礫・瓦を含む）
20 10YR5/2 灰黄褐色シルト（礫・瓦を多量に含む）
21 10YR6/6 明黄褐砂
10YR5/1 褐灰色シルトの互層
22 5Y4/1 灰色砂
23 10YR6/6 明黄褐砂
10YR5/1 褐灰色シルトの互層
24 10YR5/1 褐灰色砂質シルト（鉄分多い）
25 7.5Y4/1 灰色砂質シルト（礫を含む）
26 7.5Y4/1 灰色シルト
27 5GY5/1 オリーブ灰色砂質シルト
28 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト
29 10BG4/1 暗青灰色シルト
30 2.5YR5/1 赤灰砂質シルト（植物を多量に含む）
31 2.5GY5/1 オリーブ灰色砂質シルト（植物を多量に含む）
32 5B4/1 暗青灰色シルト（植物を多量に含む）
5GY5/1 オリーブ灰色シルトブロックを含む
33 5B4/1 暗青灰色シルト
34 N5/1 灰色シルト
35 5Y5/6 オリーブ粗砂（有機物含む）
36 5B4/1 暗青灰色シルト
37 5YR4/8 赤褐色砂
38 10Y5/1 灰色砂質シルト
39 10Y5/2 オリーブ灰色シルト（粘質強い）
40 10Y4/2 オリーブ灰色シルト（粘質強い）
41 10BG5/1 青灰色シルト
42 10BG5/1 青灰色砂
43 5GY2/1 オリーブ黒色シルト（粘質強い）
44 5G3/1 暗緑灰粗砂
45 2.5GY5/1 オリーブ灰シルト

第８図　96区セクション（２）　1/80

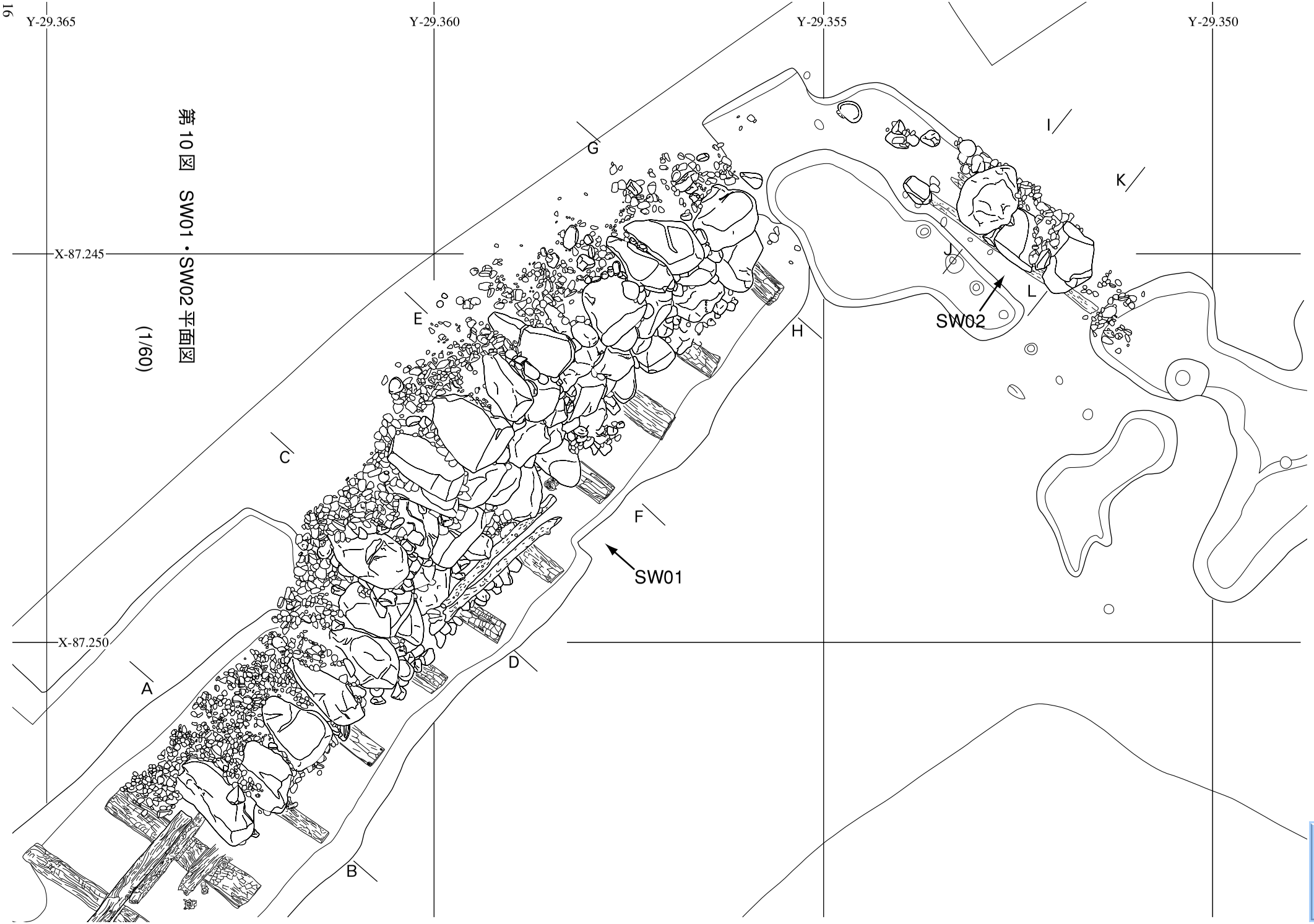


SW01



SW02

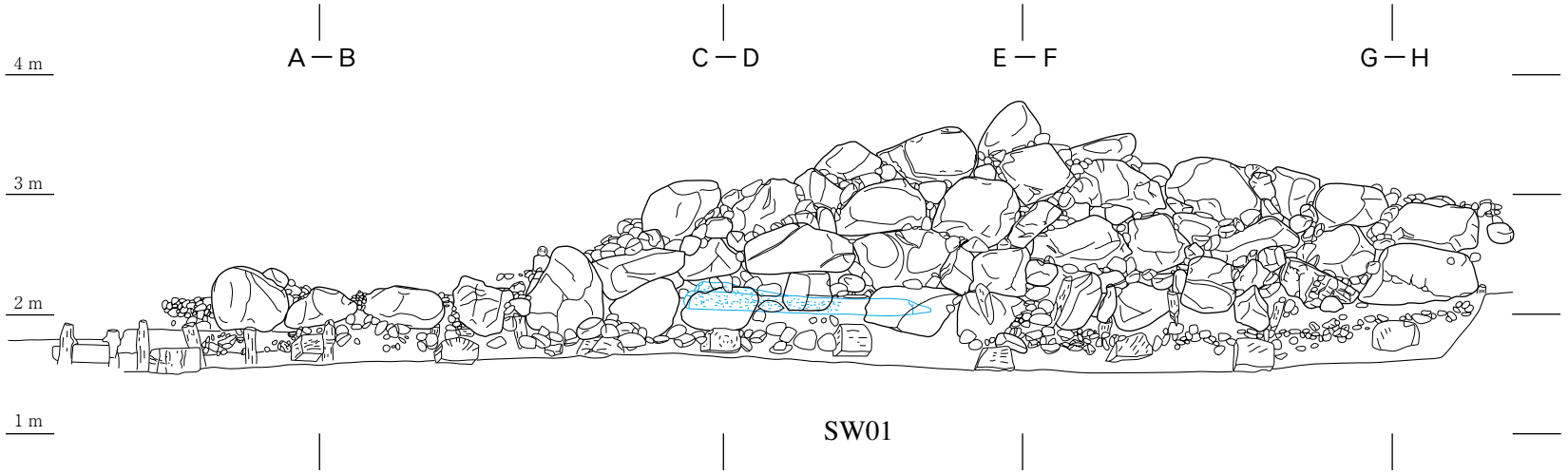
第 9 図　SW01・SW02 断面図　　(1/60)

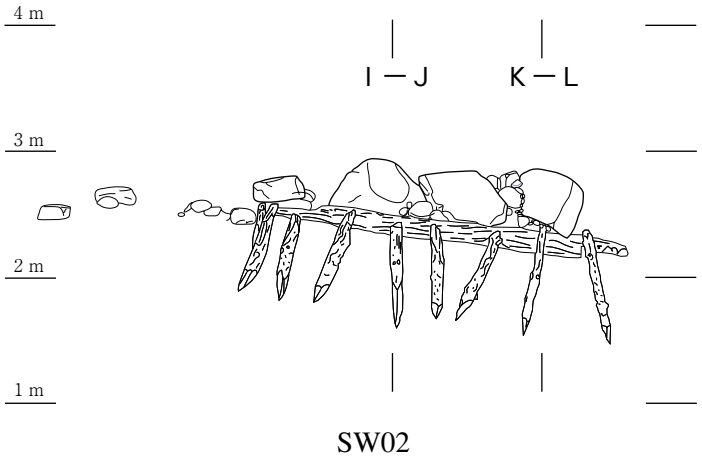


第10図　SW01・SW02平面図

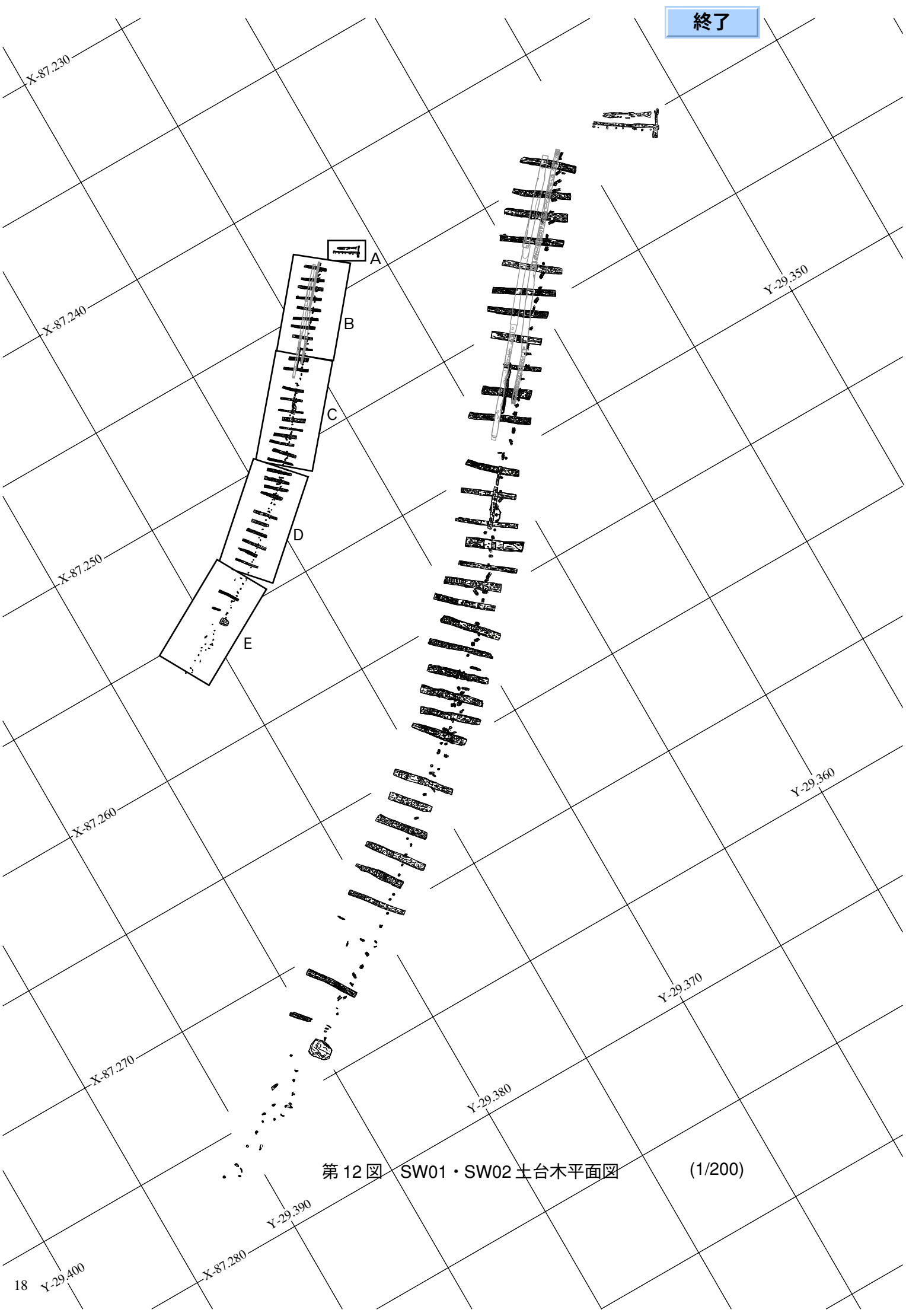
(1/60)

終了





第 11 図　SW01・SW02 側面図　(1/60)



第 12 図　SW01・SW02 土台木平面図　　(1/200)

C　SD04・05

SW02付近にある不定形な落ち込みである。SD04はSW02の南西側にあり、長径3.6ｍ・短径1.6ｍ・深さ13㎝を測る。SD05は南東側にあり、長径9.1ｍ・短径2.7ｍ。深さ25㎝を測る。両者とも黄橙色砂が埋土になっており、下層の柵列に伴った溝である可能性が高い。

（6）土坑

A　SK01・02・03・04

突出部にあるSA01・02・03にコ字状に囲まれた部分の中央部から開口部に位置する、長径１ｍ前後の土坑である。この中でSK04は55㎝の深さがあり、中層から上層にかけては10～20㎝の栗石が出土している。

B　SK05

調査時には土坑として認識していたが、掘り込みはごく浅く、集石遺構として捉えるべきであるかもしれない。石は径60㎝を測る大型の自然石が１個と、20～30㎝の中型のもの、5～20㎝の小型のものが多数検出されている。

（7）柵列

A　上層で検出された柵列

SA01・02・03

96区の上層遺構の検出時に確認しているが、打ち込まれた層を特定することはできなかった。そのため比較的新しい時期の遺構であるとの認識にたって調査を進めていったため、充分な記録を採ることがなされていない。

SA01は北東ー南西方向の19本、SA02は北西ー南東方向の15本と97Ca区の５本、SA03は北東ー南西方向の35本の杭で構成されており、平面形は南西部が開口部となるようなコ字状を呈している。またSA02が97Ca区に続いていく可能性が高く、そうするとSW03の延長上にある北西ー南東方向の柵列とそれに直交する２条の柵列と見ることもできる。杭は５～12㎝のアカマツを主体とした丸杭で、ほぼ垂直に打ち込まれている。杭の長さは50～80㎝を測るが、突出部が削平を受けて石垣SW01・02が検出された地点より低くなっていることを考えると、現状より長いものであったと推定できる。柵列の長さは、全長がわかるSA03が27.9ｍを測り、SA01が25.6ｍで、SA02にまで続くとするとSA03と同じ長さになると思われる。SA02は、96区部分が5.9ｍ、97Ca区部分が2.3ｍあり、未掘部分をいれると9.1ｍとなる。杭間は30～60㎝とばらつきがあるが、38㎝と60㎝間隔となっているものが最も多くみられる。また、SA01はほぼ直線上に並ぶが、SA02では方向を違えている部分が２カ所、SA03では２～３カ所ある。特にSA03は、北東側のやや曲線状になる部分や、杭間が狭い部分、北西側に平行するように打ち込まれている部分などがあり、SA01・02に比べ、不定形さが目立っている。

またSA02の北東側で、突出部のコーナーに沿って弧状に並ぶ４本の杭も柵列である可能性がある。これらの杭もSA01などと同様な大きさで、1.1～1.3ｍの間隔をもって打ち込まれている。

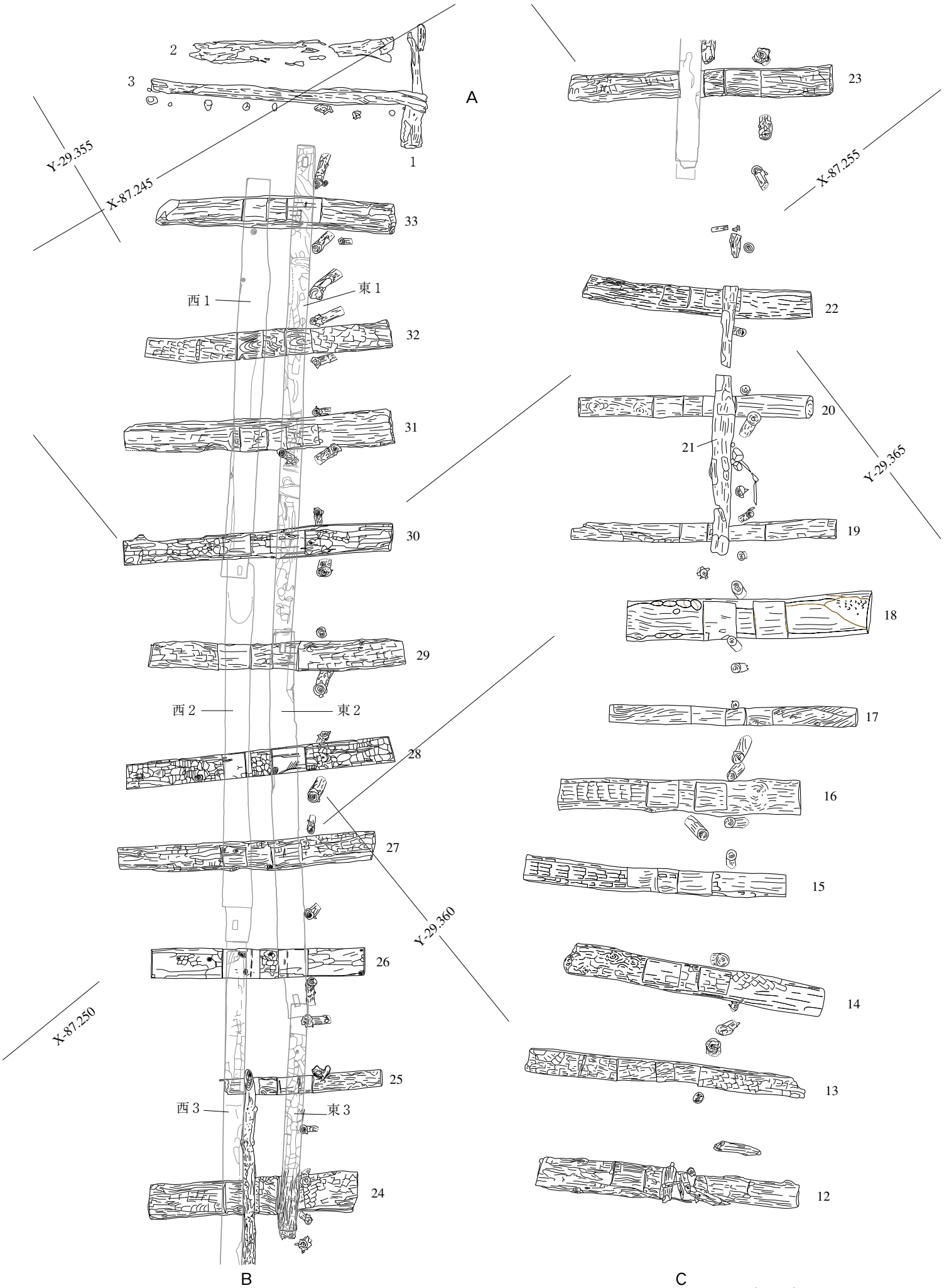
B　下層で検出された柵列

石垣SW01・02の下層に作られた５条の柵列群である。柵列群のうち、主要なものはSA06・07・08であり、平面形が上層の柵群と対称的に北東側が開口部となっている。また南北軸は上にある石垣よりも東に振れており、上層の柵列群と同様の方向を向いている。ただ上層の柵列群と大きく異なる点として、丸杭だけではなく大型の角杭が用いられていること、杭が垂直だけではなく斜めに打ち込まれていること、杭に幅２～３㎝の完形または半裁した竹を巻き付けて「シガラミ」としていることが確認できたことがあげられる。

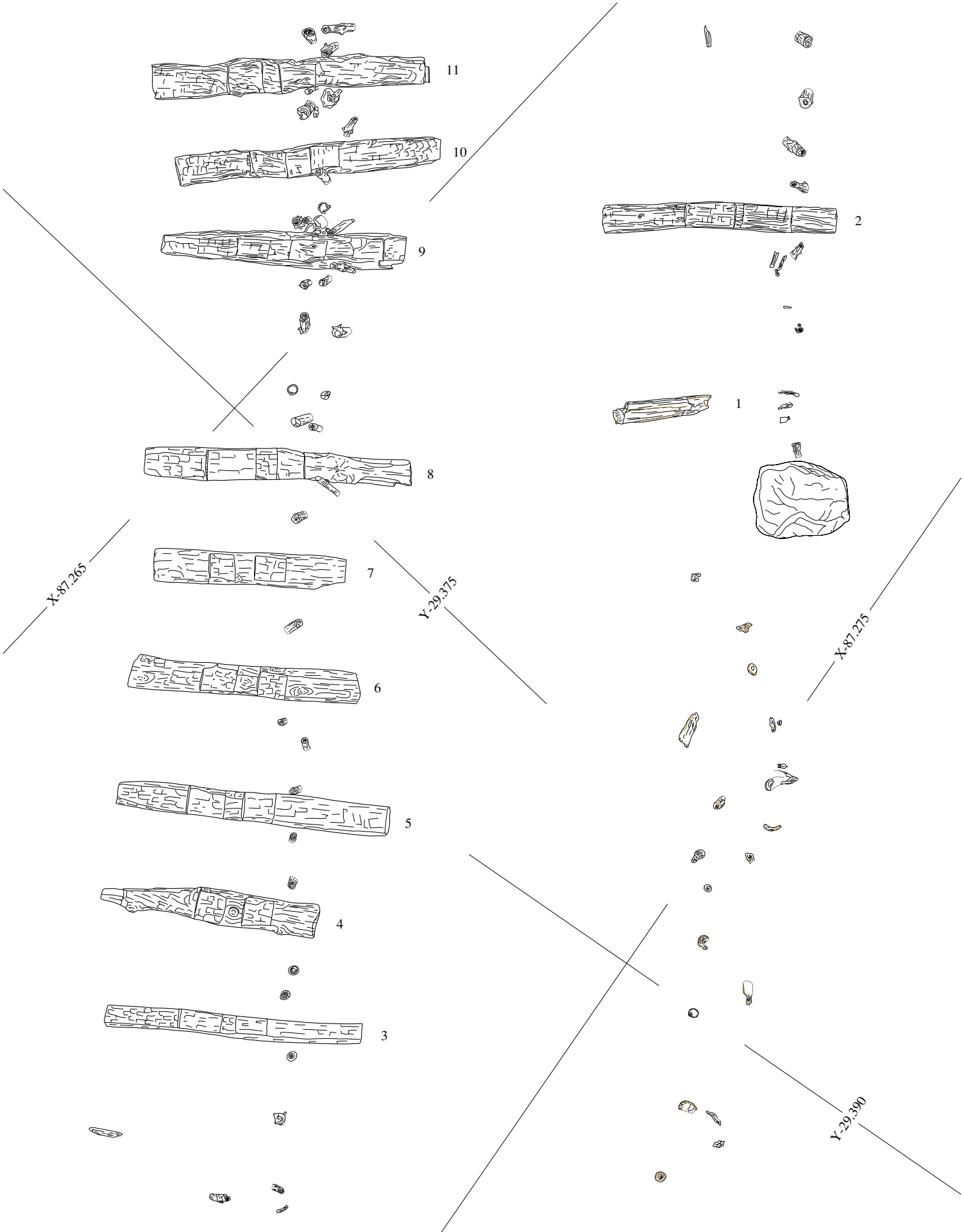
下層調査時には湧水が激しく、柵列の崩壊が予想されたため、杭の下端部分については計測点をもとに推定したものを第16・17図に掲載している。

SA04

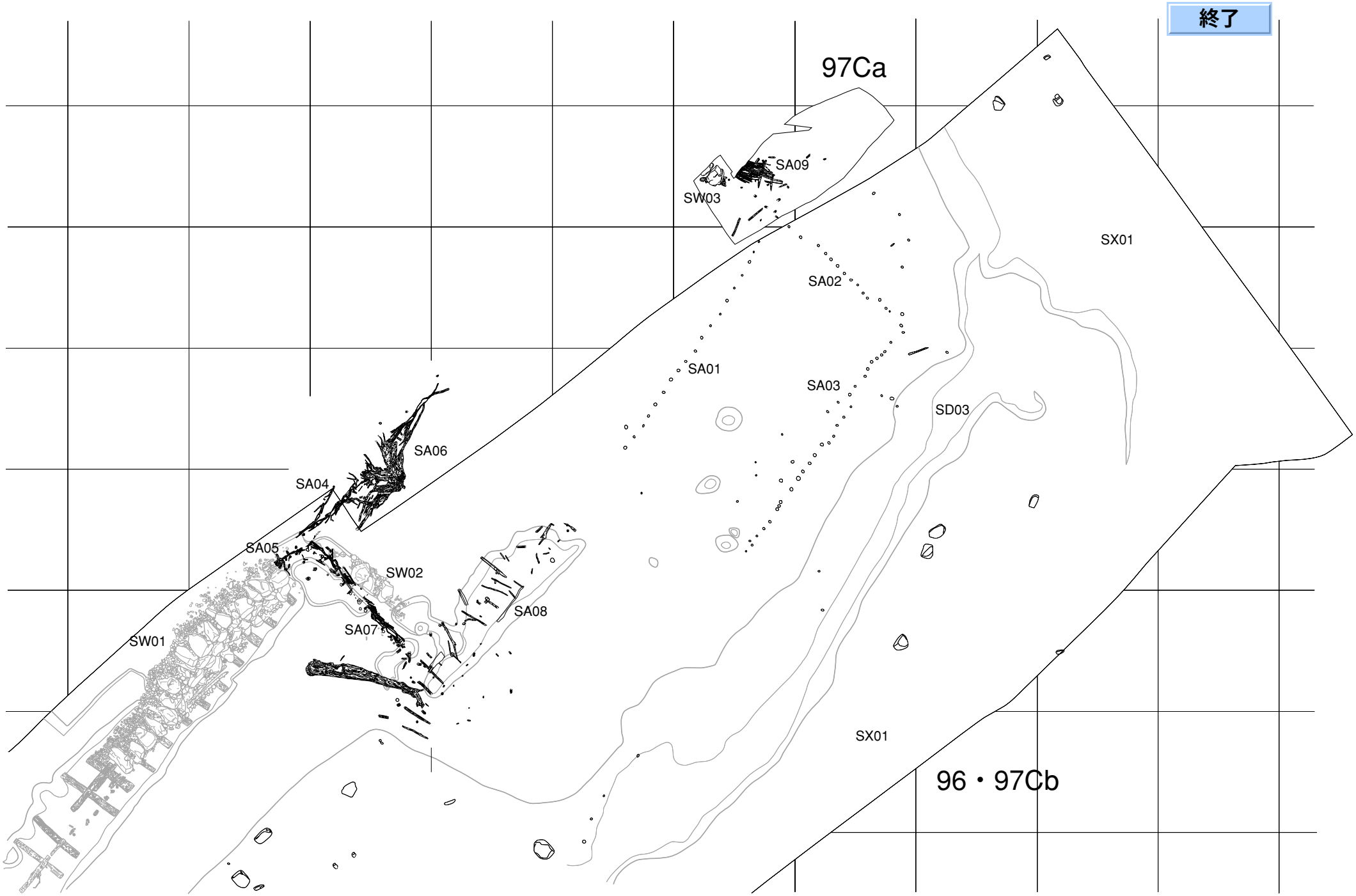
側面が面取された四角形杭で構成された柵列で、SA06の西側で軸線を違えて長さ2.4ｍにわたって検出され、調査区外に続いていくようである。大型の杭は長さ2.8ｍを測り、杭間をつなぐように竹が編み



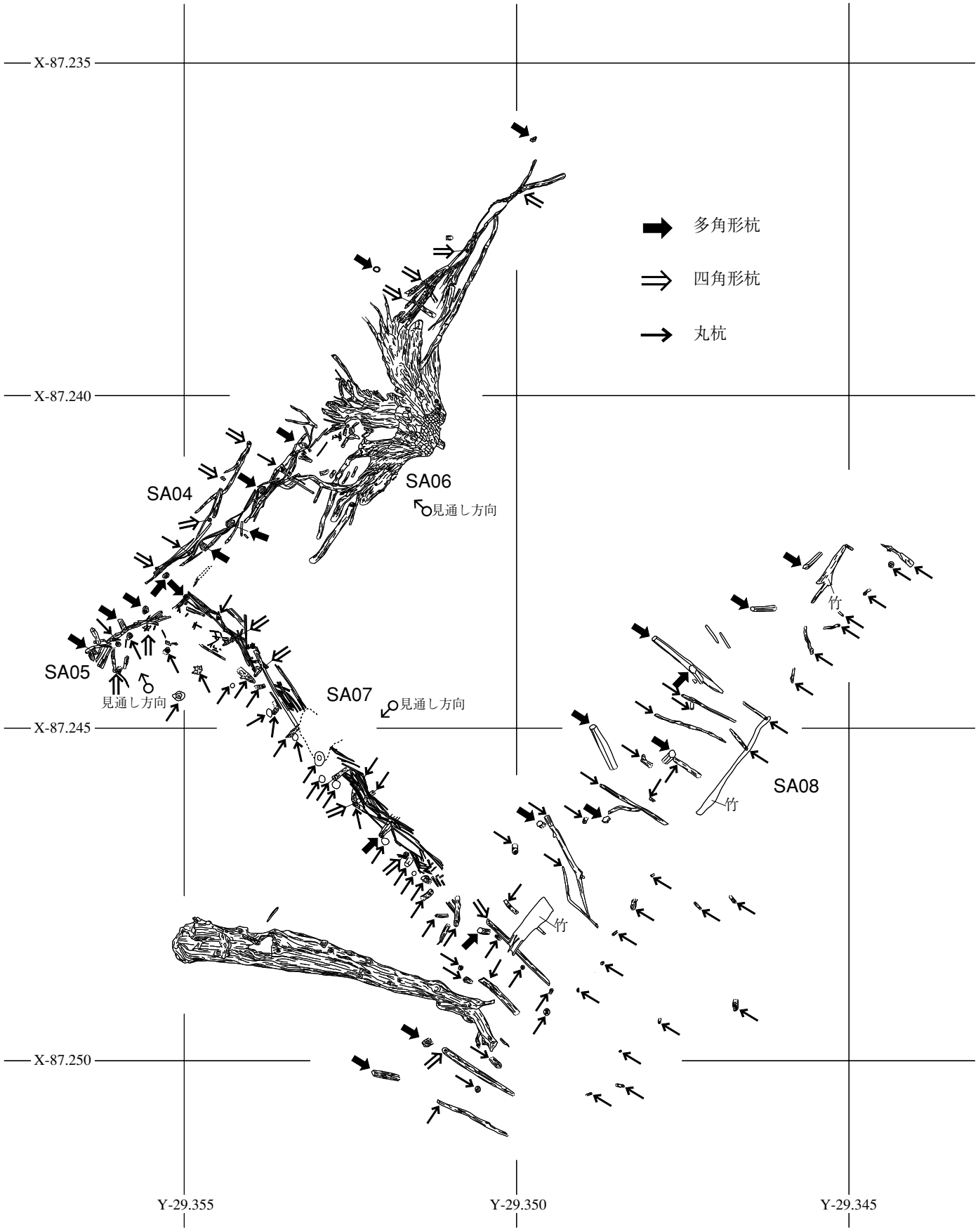
第 13-1 図　SW01・SW02 土台木平面詳細図（１）　(1/50)



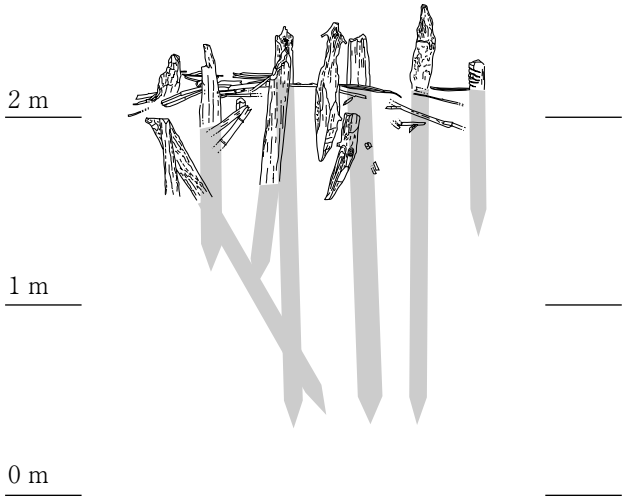
第 13-2 図　SW01・SW02 土台木平面詳細図（２）　(1/50)



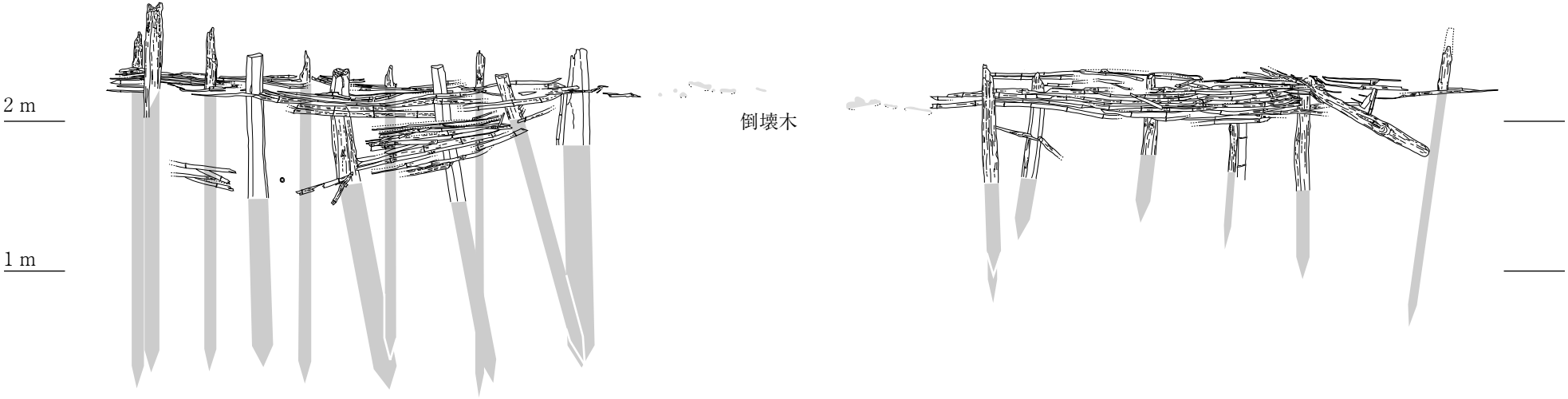
第 14 図　SA01 ～ 09 平面図　　(1/200)



第 15 図　SA01 ～ 08 平面図　　(1/80)



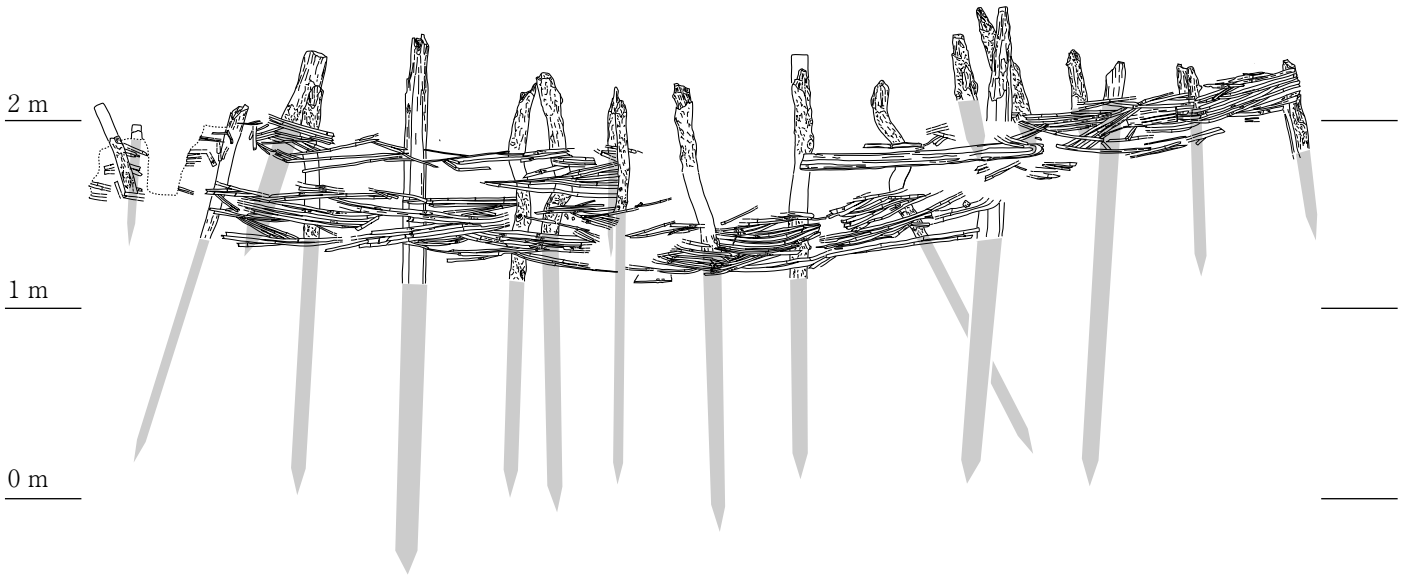
SA05



SA04・06

※　アミ部分は推定長

第 16 図　SA05、SA04・06 見通し図　　(1/40)



SA07　　※　アミ部分は推定長

第17図　SA07見通し図　　(1/40)

込まれている。杭間は60～100㎝を測る。

SA05

SA07の北西端より、直角よりわずかに開き気味に延びる柵列で、長さ1.6ｍにわたって検出されている。杭には多角形杭と丸杭があり、杭長は１～2.2ｍで、杭間には竹が編み込まれている。杭間は40～50㎝を測る。また多角形杭の南東側にも不揃いな四角形杭・丸杭がみられる。

SA06

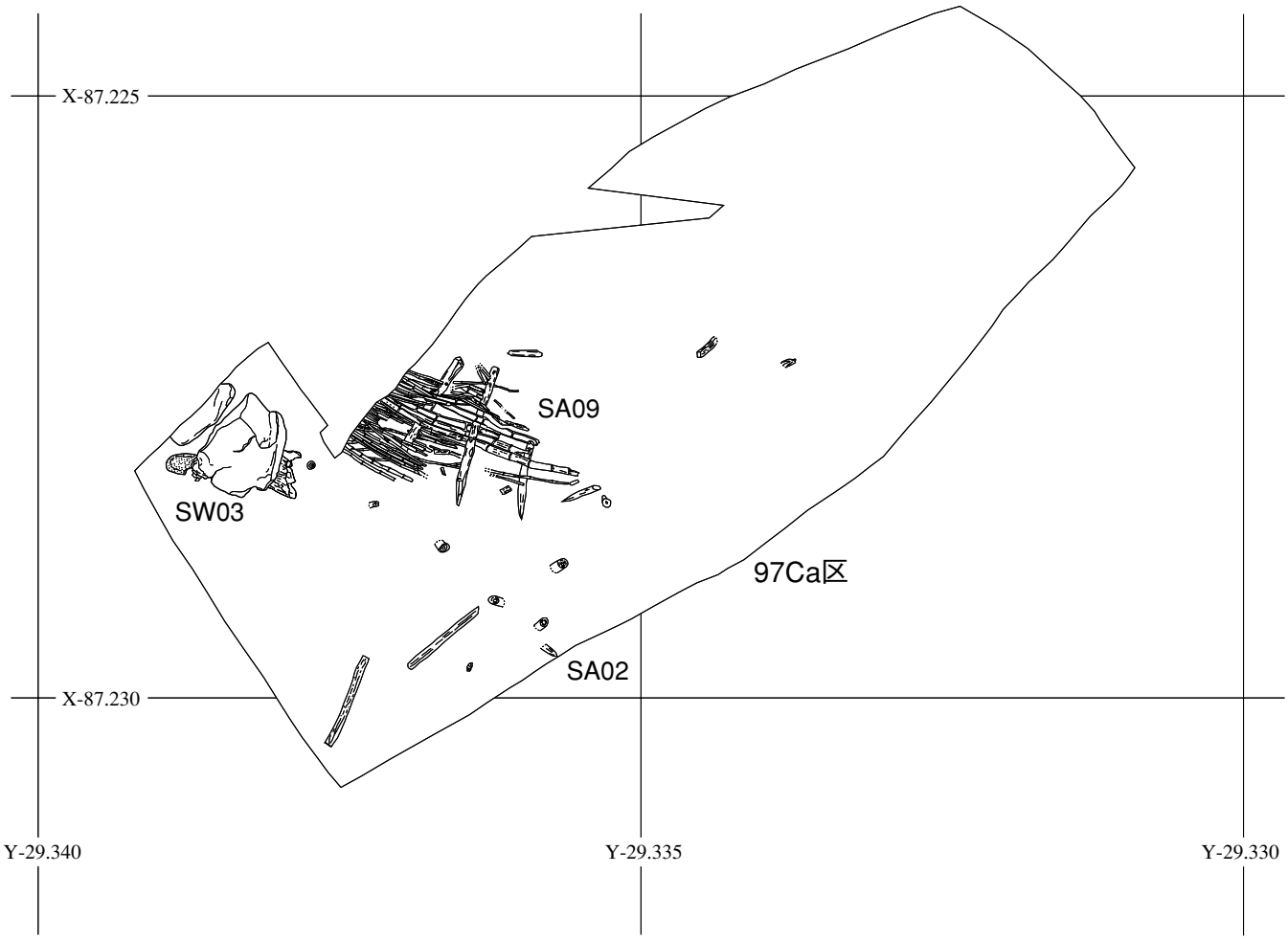
下層柵のうち北西側で北東ー南西方向に向くもので、長さ8.6ｍになる。柵は10本の多角形・四角形杭と２本の丸杭からなっており、杭長は１～2.4ｍを測る。杭間は40～50㎝で、間には竹が編み込まれている。このSA06で特徴的なことは、中央部に倒壊木の根が検出されたことで、この部分約2.4ｍにわたっては杭が確認できないことから、柵列の一部として用いられていたことが考えられた。倒壊木は五条川方向に向かって倒れており、折損部には明瞭な削痕跡がみられた。また編み込まれた竹の下位では、下方に向かって沈下している部分が検出されている。

SA07

北西ー南東方向に延びる柵列で、長さ6.4ｍになる。杭長0.5～2.3ｍの丸杭が主体となり、その間に杭長１～2.8ｍの多角形･四角杭が５本検出されている。ただ詳細にみると、杭間が50㎝を測る多角形・四角杭列と、そのやや南西側を不揃いに並ぶ丸杭列に分かれ、編み込まれた竹は多角形・四角杭列を基軸としているようである。 SA07の編み込まれた竹も、SA06と同様に下位部分が下方に向かって沈下しており、柵と竹からなる「シガラミ」が、何らかの理由で一時崩壊して沈下したと考えらた。さらに上述した多角形・四角杭列と丸杭列の相違が、沈下前と沈下後の修復･補強に対応するとも想定されたが、明確な証拠はつかめなかった。

SA08

北東ー南西方向の杭列で、長さ10.6ｍになる。こ



第 18 図　SA09 平面図　　(1/60)

の杭列もSA07と同じく、北西側にある多角形・四角杭列と南東側にある丸杭列に分かれる。ただ多角形・四角杭列は、北西側を高く南東側を低くして、地面からの角度が30 ～ 45°といった横位に近いような状態で検出されており、横または斜位から打ち込まれたことが推定された。一方、丸杭列は垂直かやや角度をもって上方から打ち込まれている。竹の編み込みは部分的に検出されたのみである。

SA09

97Ca区の石垣SW03の東側で検出された柵列で、長さ２ｍにわたっており、北西側はさらに調査区外に続いていく。杭長1.2ｍの丸杭３本に竹が編み込まれた「シガラミ」が、北東側に倒れた状態で出土している。上部が削平されているため詳細は不明であるが、出土時点の高さはは、土台木より「シガラミ」が30 ～ 40㎝下位となっている

3　97Ｂ区

（1）河道

97Ｂ区は五条川左岸に接した調査区であることから、本調査区でも河道肩部分が検出されている。

河道は幾度か方向を変えて流れており、古い順より、NR01→NRX→NR00・02→NRb→NRaとなる。河道の時期については明瞭ではないが、最古のNR01が城下町期の遺構を削平しており、それ以降に形成されたと考えられる。

また、第20図の北東セクションでも確認できるとおり、河岸部分には埋め立てにもちいられたと思われる斑土が検出されており、河道の変化に合わせて河岸を補強していった状況が確認できる。

NR01は、幅約13ｍを測り、調査区南東部の城下町期の遺構を削平し、その上部に形成されている。幅が狭いことから、五条川本流ではなく支流であるとも考えられる。

NRXは、河道が岸にあたり屈曲する地点にあたるが、河岸が明瞭に確認できなかった。NR00・02も、NRXと同様の地点にあたり、NR00が北東から南西に流れてくる部分、NR02がそこから曲がって北西に流れる部分になる。

NRb・aは、現在の五条川と平行する河道である。これらの河道に沿って、丸杭を打ち込んだ幾条かの杭列が検出されており、河道岸の補強のためのものと考えられた。

（2）井戸

A　SE01

平面形が隅丸方形及び円形を呈し、径1.4ｍ・深さ1.3ｍを測る。上層より瓦や土器、10㎝前後の礫が多量に出土している。下層では3段のタガをもつ桶組の井戸枠が検出されている。時期は城下町Ⅰ期となる。

（3）溝

A　SD01・02

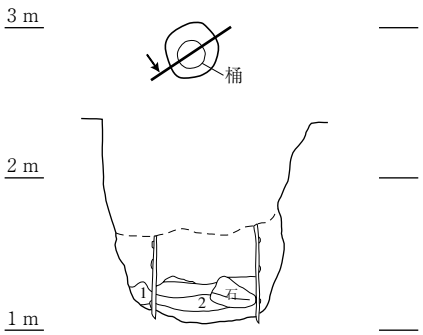
調査区東部をほぼ東西に走る溝で、SD02→01の順となり、西側がNRに切られている。SD02はSD01に切られているために深さ22㎝と確認できるのみで、SD01は幅1.3ｍ・深さ46㎝を測る。SD01は、砂が埋土となり、上層に炭化物と焼土を含んでいる。SD01の時期は、城下町Ⅰ期となる。

B　SD03

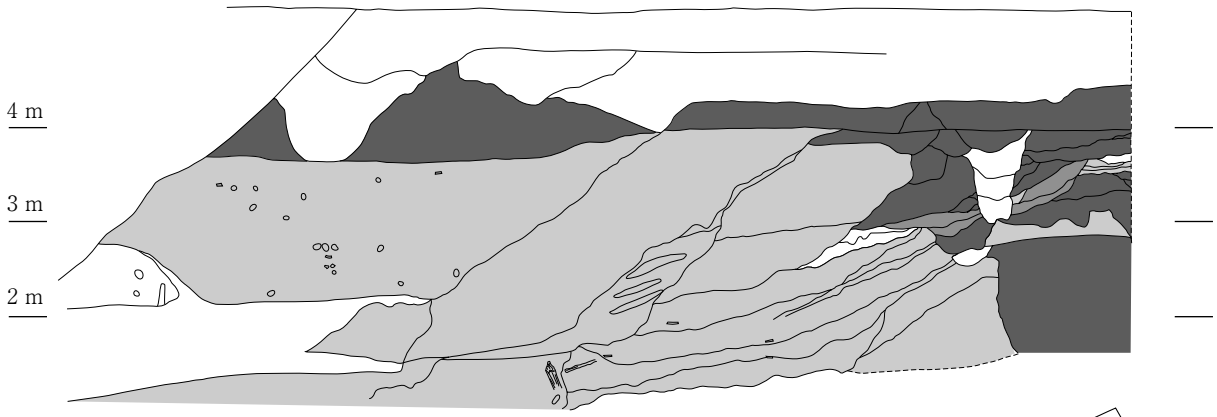
調査区東部を北東ー南西方向に約12ｍの長さを走る、幅58㎝。深さ28㎝の溝で、底面でピット列が検出されている。ピットは、長径40～90㎝・深さ7～25㎝を測るもので、70㎝及び170㎝程の間隔をもって掘削されている。

C　SD04・05

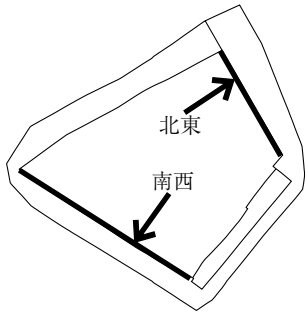
調査区北東隅の河道下層で検出された溝で、南側にある城下町期以前の遺構群と同時期と推定される。掘削時期は、SD05→04、SD05→01となる。

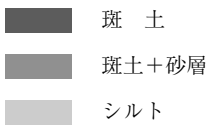


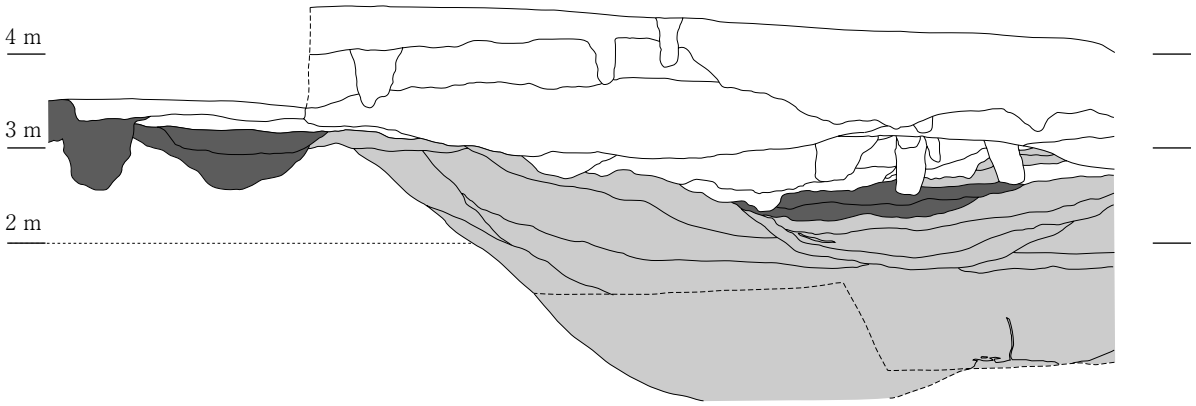
第19図　SE01断面図　(1/50)

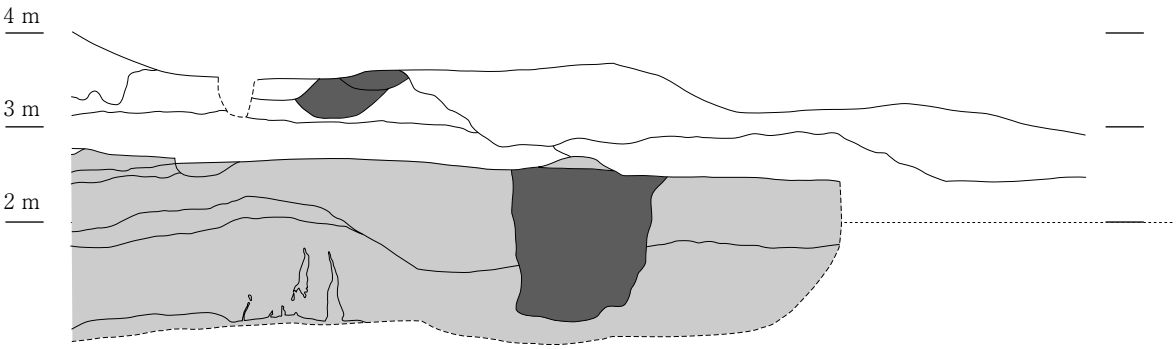


北東セクション









南西セクション

第 20 図　97 B 区セクション図　　(1/80)

4　99 A区

（1）溝

A　上層で検出された溝

SD01・03、SD08

SD01･03は同一の溝と考えられ､調査区南西部を、南北からやや東に振れた方向で走る。幅約１m・深さ約50㎝、溝の断面形はＶまたはＵ字形を呈し、再掘削された痕跡がみられた。時期は城下町Ⅲ-2期になる。SD08 は SD03 の北端の西側約 1.6 mから始まり、SD01･03と同様の方向を向いて走る。幅30㎝・深さ10㎝と小型の溝となる。

SD04・02・04・05・07

上記の２条の溝に直交するように、北からSD07・04・02・05があり、これらの溝群は、区画溝として機能していたと考えられる。所属時期は、城下町Ⅲ-2期を中心としている。

B　下層で検出された溝

SD13・14

SD13は調査区中央部を､東西からやや北に振れた方向で走る溝で、幅4.9 m・深さ1.2 m、断面形がゆるやかなＵ字形を呈する。下層には細粒砂の互層が堆積しており、水流があったことを窺わせた。時期は城下町Ⅲ-2期になる。

SD14 は SD13 の北約 1.8 mのところを、同方向に走る溝で、東側で途切れているようである。

SD05・11

SD11 は、SD13 の南約７mのところを同方向に走る溝で、幅2.5 m・深さ1.1 m、断面形は逆台形を呈している。溝は東側で、南肩が50㎝ほど拡張されて収束する。時期は城下町Ⅲ期となる。

SD05 は SD11 の南約１mのところを平行して走る、幅1.3 m・深さ30㎝の溝で、同じように東側で途切れている。SD12 はSD11の北約１mのところを平行して走る､幅2.8m･深さ１mの溝で､井戸SK221のところで途切れている｡両溝とも時期は城下町Ⅲ-2期になる。

（2）井戸

A　SK44

調査区の南西隅で検出された井戸で、長径3.6 m・短径3.1 m・深さ2.1 mを測る。井戸枠は桶組みで、部分的に残存していた。時期は城下町Ⅲ期になる。

B　SK68

SK182を切って掘削された井戸で、長径2.7 m・短径2.5 m・深さ２mを測る。井戸枠は確認されていないが、下位部分は段状を呈しており、抜き取りの痕跡であると思われた。時期は宿場町期か。

C　SK182

SK68の南西側にある井戸で、長径2.2 m・深さ2.1 mを測る。最下位では楕円形に組まれた長径69㎝・短径57㎝の桶組みの井戸枠が検出され､内部より５～30㎝程の礫が10個出土している。時期は城下町Ⅲ-2期になる。

D　SK186

SK68・SK182の南である井戸で、径2.4 mの円形で・深さ0.6 mを測る。時期は城下町期になる。

E　SK203

調査区の西壁沿いで検出された井戸で、長径4.1 m･深さ1.6 mを測る。最下位より円形を呈する桶組みの井戸枠が検出されている。時期は城下町Ⅲ期になる。

F　SK207

SK68の北東側にある井戸で、長径3.0 m・短径2.8 m･深さ1.4 mを測る。最下位より楕円形を呈する桶組みの井戸枠が検出されている。時期は城下町期になる。

G　SK221

SK207の北西側にある井戸で､長径4.0 m･短径3.5 m・深さ0.7 mを測る。時期は城下町Ⅲ期になる

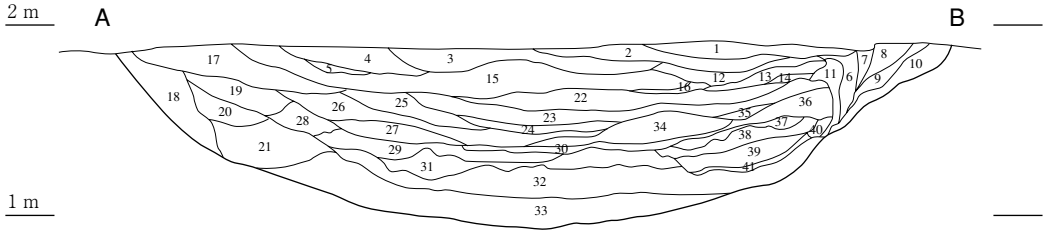
H　SK250

調査区の北東部で検出された井戸で、長径3.3 m・深さ1.6 mを測る。最下位より楕円形を呈するタガのはまった桶組みの井戸枠が検出されている。時期は城下町期になる

（3）　土坑

A　SK248

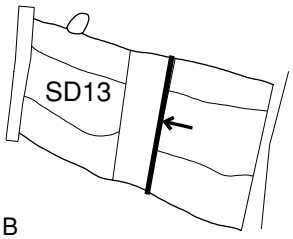
長径2.9 m・短径2.8 m・深さ0.5 mを測る、隅丸

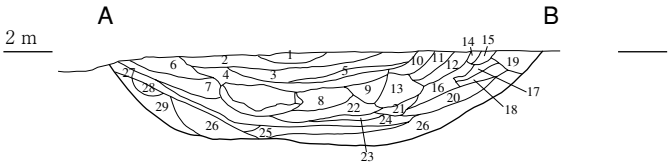


SD13

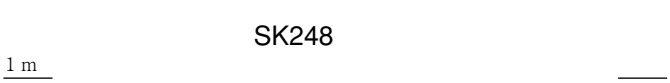
99A区SD13セクション土色

1 2.5Y6/2 砂質シルト
2 2.5Y5/2 砂質シルト 炭化物含む
3 2.5Y6/2 砂質シルト
4 10YR6/2 砂質シルト
5 10YR6/1 細粒砂
2.5Y7/3 シルトブロック混じる
6 2.5Y6/2 砂質シルト
7 噴砂
8 2.5Y6/2 砂質シルト
9 10YR6/2 砂質シルト
10 10YR6/2 細粒砂
11 10YR6/2 砂質シルト
12 2.5Y6/2 シルト
13 2.5Y6/2 シルト
10YR6/3 シルトブロック混じる
14 2.5Y6/2 シルト（マンガン斑）
15 2.5Y6/2 シルト
10YR6/3 シルトブロック混じる
16 10YR5/2 シルト 炭化物・焼土含む
17 10YR5/3 砂質シルト 炭化物・焼土含む
18 10YR6/2 細粒砂
19 2.5Y6/2 シルト
10YR6/2 細粒砂ブロック混じる
20 10YR6/2 細粒砂（マンガン斑）
21 10YR6/4 細砂（基盤）
22 2.5Y6/2 砂質シルト
10YR6/3 シルトブロック混じる
23 2.5Y6/2 砂質シルト
2.5Y6/3 粘質シルトブロック混じる
24 2.5Y5/2 砂質シルト
10YR6/2 シルトブロック混じる（沈鉄あり）
25 2.5Y6/2 砂質シルト
2.5Y6/3 粘質シルトブロック混じる 炭化物含む
26 2.5Y6/2 砂質シルト
27 2.5Y4/1 砂質シルト
28 2.5Y4/1 砂質シルト
10YR6/2 細粒砂の互層
29 2.5Y4/1 砂質シルト
10YR6/2 細粒砂ブロック混じる
30 2.5Y3/1 粘土
31 10YR6/2 細粒砂
2.5Y4/1 砂質シルト・2.5Y3/1 粘土ブロック混じる
32 10YR6/2 細粒砂の互層
33 10YR6/2 細粒砂の互層
34 2.5Y6/1 シルト
2.5Y6/2 粘質シルトブロック混じる
35 2.5Y5/1 砂質シルト
10YR6/2 シルトブロック混じる
36 2.5Y4/1 砂質シルト
37 2.5Y4/1 砂質シルト
10YR6/2 細粒砂混じる
38 2.5Y4/1 粘質シルト
39 2.5Y5/1 粘質シルト
10YR6/2 細粒砂混じる
40 2.5Y5/1 砂質シルト
41 10YR6/2 細粒砂の互層（沈鉄あり）





SK248



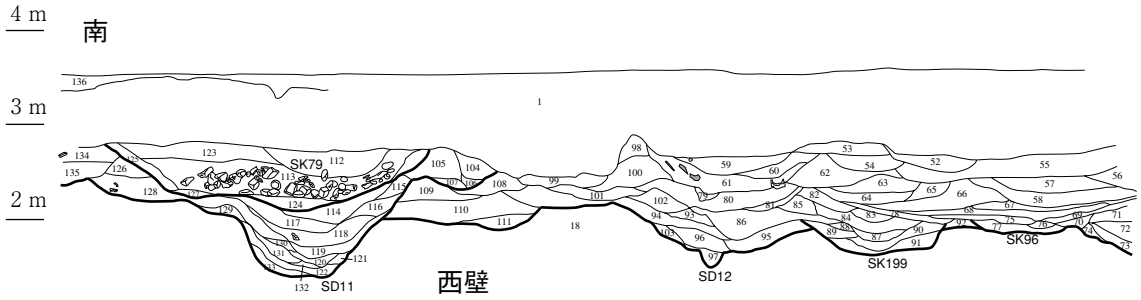
99A区SK248セクション土色

1 2.5Y7/1 粘土
2.5Y5/1 中粒砂混じりシルトの斑土
2 2.5Y5/3 粘土
3 2.5Y3/1 粘土
10YR5/6 中粒砂の互層
4 2.5Y3/1 中粒砂混じり粘土 炭化物含む
5 2.5Y2/1 粘土 木片混じり
6 10YR6/1 中粒砂
10YR6/1 中粒砂の互層 炭化物の層あり
7 10YR4/2 シルト混じり中粒砂
10YR6/1 粘土の互層 炭化物の層あり
8 10YR4/2 中粒砂混じりシルト
10YR6/1 粘土ブロック含む 炭化物・土器片含む
9 10YR4/1 中粒砂混じり粘土
10 10YR5/3 粘土
10YR5/1 砂質シルトの斑土
11 10YR4/1 砂質シルト 土器片含む
12 10YR7/1 中粒砂
10YR4/1 中粒砂の斑土
10YR3/1 粘土ブロック含む
13 10YR3/1 粘土
10YR4/1 粘土ブロック含む
14 10YR5/3 中粒砂
15 10YR4/2 中粒砂混じり粘土
16 10YR3/1 粘土 炭化物含む
17 10YR5/3 中粒砂
10YR3/1 粘土の互層
18 10YR5/3 中粒砂
19 10YR3/3 中粒砂
20 10YR6/1 中粒砂
10YR4/1 粘土ブロック含む
21 2.5Y3/1 粘土
22 2.5Y3/1 中粒砂混じり粘土 炭化物含む
23 2.5Y3/1 シルト混じり中粒砂
24 2.5Y3/1 中粒砂混じり粘土 植物遺体あり
25 2.5Y5/1 粘土
10YR5/3 粘土の互層 炭化物含む 木片混じり
26 2.5Y5/4 中粒砂 炭化物の層あり
27 2.5Y7/1 粘土
2.5Y5/1 中粒砂の互層（沈鉄）
28 2.5Y4/2 シルト混じり中粒砂
29 2.5Y7/1 中粒砂
10YR6/6 中粒砂の互層

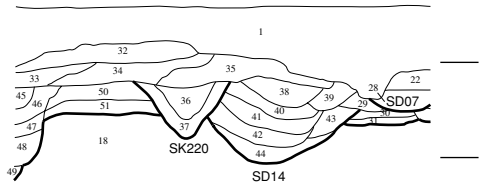


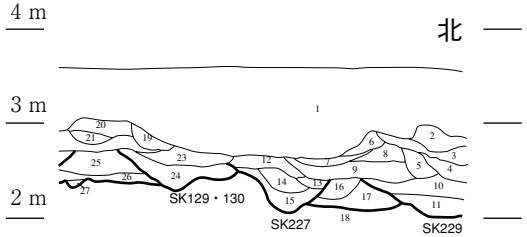
SK248

第21図 99A区SD13・SK248セクション図 (1/40)



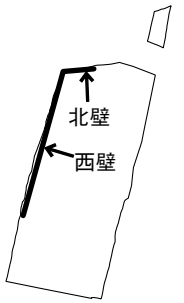
SK203（別図参照）

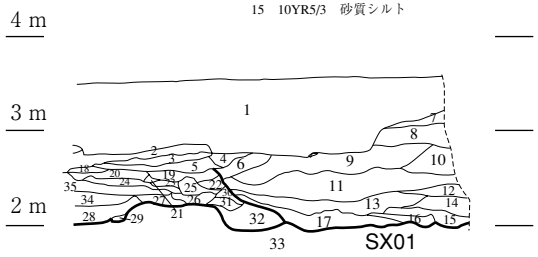




99Ａ区西壁セクション土色

1 表土
2 10YR4/4 砂質シルト
2 10YR4/4 砂質シルト 瓦礫混じる
4 10YR5/3 砂質シルト
5 10YR5/4 砂質シルト
6 10YR5/4 砂質シルト
8 10YR5/4 砂質シルト
7 10YR4/4 砂質シルト
10YR5/4 砂質シルトブロック混じる
9 10YR5/4 砂質シルト
10 10YR4/3 砂質シルト
11 10YR4/3 砂質シルト
12 10YR5/6 砂質シルト
13 10YR5/4 砂質シルト
14 10YR6/4 極細粒砂
15 10YR5/3 砂質シルト





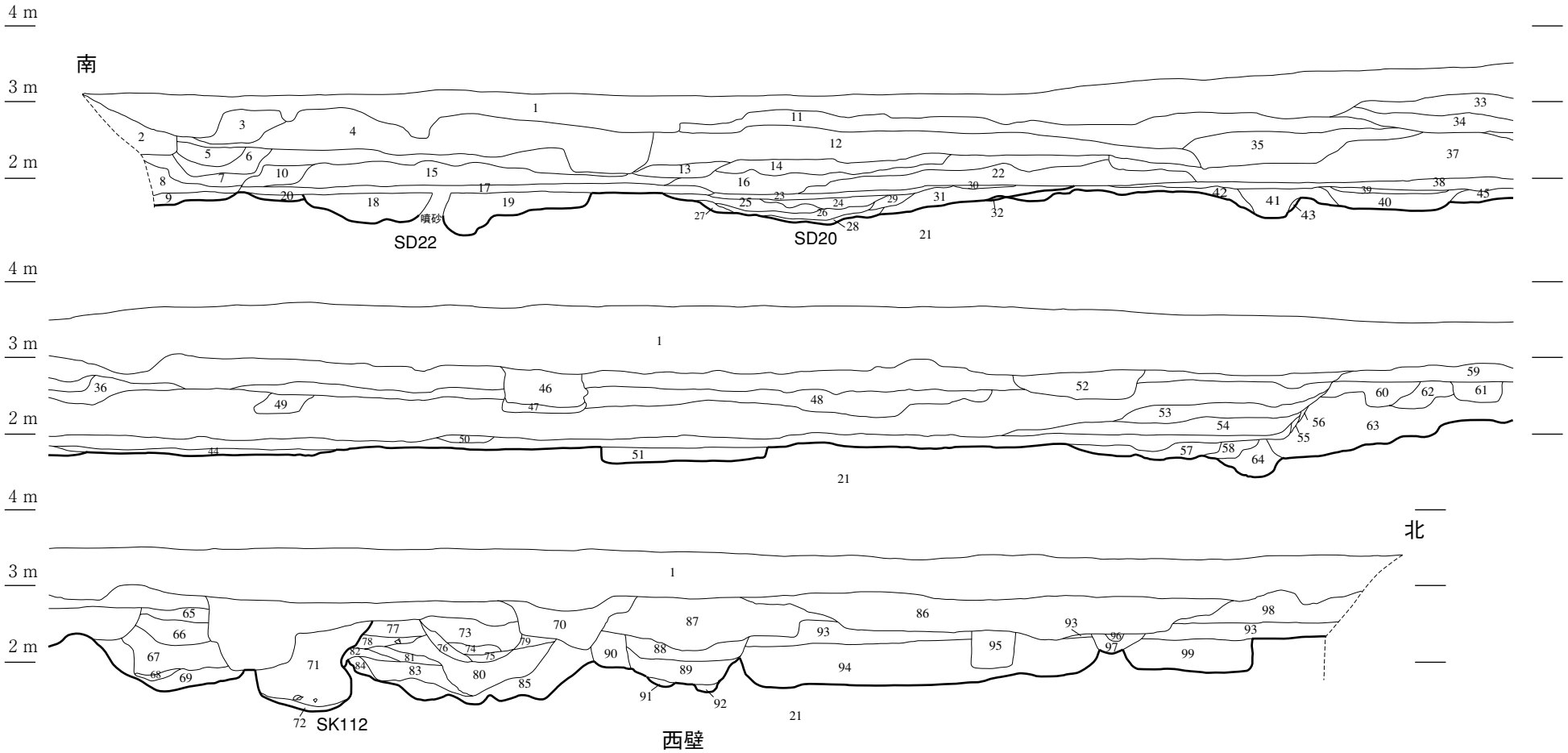
北壁

16 10YR5/4 砂質シルト
17 10YR5/3 砂質シルト
18 10YR6/4 極細粒砂（基盤）
19 10YR5/3 シルト 炭化物多く含む
20 10YR3/3 シルト
21 10YR5/3 砂質シルト
22 10YR4/4 砂質シルト
23 10YR4/4 砂質シルト
24 10YR5/4 砂質シルト
25 10YR5/4 砂質シルト
26 10YR5/4 砂質シルト
10YR6/4 極細粒砂混じる
27 10YR5/4 極細粒砂
28 10YR4/3 砂質シルト
29 10YR4/4 砂質シルト
30 10YR4/4 砂質シルト
31 10YR4/4 砂質シルト
10YR6/4 極細粒砂が混じる
32 10YR5/3 砂質シルト
33 10YR4/4 砂質シルト
10YR4/3 シルトブロック混じる
34 10YR6/3 砂質シルト
35 10YR5/3 砂質シルト
36 10YR5/3 砂質シルト 炭化物多く含む
37 10YR5/3 砂質シルト
38 10YR5/3 砂質シルト
39 10YR5/4 砂質シルト 極細粒砂混じり
40 10YR5/3 粘質シルト シルトブロック混じる
41 10YR5/4 砂質シルト
42 10YR5/3 砂質シルト
43 10YR5/4 砂質シルト
44 10YR6/2 シルト
45 10YR3/4 砂質シルト
46 10YR4/5 砂質シルト 炭化物多く含む
47 10YR4/5 砂質シルト 炭化物多く含む
10YR5/3 シルトブロック混じる
48 10YR4/3 極細粒砂
10YR5/3 シルトブロック混じる
49 10YR4/4 極細粒砂
10YR6/4 極細粒砂混じる
50 10YR6/3 砂質シルト
51 10YR6/4 砂質シルト
52 10YR3/4 砂質シルト
53 10YR7/2 細砂
54 10YR3/4 砂質シルト
55 10YR3/3 砂質シルト
56 10YR4/4 粘質シルト
57 10YR4/4 粘質シルト 極細粒砂混じる
58 10YR4/3 粘質シルト
59 10YR3/3 砂質シルト 炭化物含む
60 10YR4/4 砂質シルト
61 10YR3/3 砂質シルト 炭化物含む
62 10YR5/4 粘質シルト
10YR5/4 砂質シルトの撹乱
63 10YR4/2 シルト
64 10YR3/2 砂質シルト 炭化物含む
65 10YR4/4 シルト
66 10YR4/4 粘質シルト
67 10YR6/3 極細粒砂
68 10YR4/4 粘質シルト 極細粒砂が混じる
69 10YR6/2 極細粒砂
70 10YR5/3 シルト 極細粒砂が混じる
71 10YR4/3 極細粒砂 炭化物含む
72 10YR4/3 砂質シルト 細粒砂が混じる
73 10YR4/2 シルト 極細粒砂が混じる
74 10YR4/3 砂質シルト
75 10YR6/4 極細粒砂
76 10YR5/4 砂質シルト
77 10YR5/2 極細粒砂
78 10YR5/3 粘質シルト 極細粒砂混じり
79 10YR4/4 砂質シルト
80 10YR3/2 粘質シルト 炭化物多く含む
81 10YR5/3 シルト 極細粒砂混じり
82 10YR4/4 砂質シルト 極細粒砂混じり
83 10YR3/2 砂質シルト
10YR4/4 砂質シルトの撹乱
84 110YR3/2 砂質シルト
10YR4/4 砂質シルトの撹乱 炭化物多く含む
85 10YR5/4 極細粒砂
86 10YR3/2 砂質シルト 炭化物多く含む
87 10YR4/2 極細粒砂
88 10YR4/3 砂質シルト
89 10YR4/3 砂質シルト
90 10YR3/2 砂質シルト 炭化物多く含む
91 10YR3/2 砂質シルト 炭化物多く含む
10YR6/4 極細粒砂の撹乱
92 10YR5/3 シルト
10YR6/4 極細粒砂が混じる
93 10YR4/3 極細粒砂
94 10YR4/2 シルト
95 10YR5/4 極細粒砂
96 10YR5/3 極細粒砂
97 10YR5/4 極細粒砂
98 10YR5/4 極細粒砂
99 10YR5/4 極細粒砂 シルトブロック混じる
100 10YR5/6 極細粒砂
101 10YR5/4 極細粒砂
102 10YR4/3 極細粒砂
103 10YR6/3 極細粒砂
104 10YR2/3 砂質シルト
105 10YR5/4 極細粒砂
106 10YR4/4 極細粒砂
107 10YR4/4 砂質シルト
10YR5/3 シルトブロック混じる
108 10YR4/4 砂質シルト
10YR5/3 シルトブロック混じる
109 10YR4/3 極細粒砂
110 10YR5/3 極細粒砂
111 10YR5/2 極細粒砂
112 10YR3/3 砂質シルト
113 10YR5/3 砂質シルト 礫混じる
114 2.5Y5/3 粘質シルト 炭化物含む
115 2.5Y5/3 粘質シルト
116 10YR4/3 砂質シルト
117 2.5Y5/3 粘質シルト 炭化物含む
118 10YR4/1 粘土
119 10YR4/2 シルト 極細粒砂混じり
120 10YR4/1 粘土 極細粒砂混じり
121 10YR6/4 極細粒砂
10YR4/1 粘土が少量混じる
122 10YR4/1 粘土
10YR6/4 極細粒砂が混じる
123 10YR4/3 砂質シルト
124 2.5Y5/3 粘土
125 10YR5/3 砂質シルト
126 10YR4/2 砂質シルト
127 10YR5/3 砂質シルト
128 10YR4/2 シルト 極細粒砂混じる
129 10YR6/2 極細粒砂
130 10YR5/4 極細粒砂
131 10YR6/3 極細粒砂
10YR4/1 粘質シルトブロック混じる
132 10YR4/2 粘土
10YR6/4 極細粒砂が混じる
133 10YR6/2 細砂
134 10YR4/3 砂質シルト
135 10YR5/2 シルト
136 10YR3/3 表土

99Ａ区北壁セクション土色

1 表土
2 10YR4/4 砂質シルト 瓦礫混じる
3 10YR4/4 砂質シルト 瓦礫混じる
4 10YR5/3 砂質シルト
5 10YR4/4 砂質シルト
10YR6/2 シルトブロック混じる
6 10YR5/3 砂質シルト
7 10YR4/2 砂質シルト
8 10YR5/3 砂質シルト
9 10YR5/3 砂質シルト
10YR5/2 砂質シルトブロック混じる
10 10YR5/3 砂質シルト
11 10YR5/3 砂質シルト
10YR6/3 シルトブロック混じる 炭化物わずかに含む
12 10YR5/3 砂質シルト 炭化物わずかに含む
13 10YR5/2 砂質シルト
10Y6/3 シルトブロック混じる
14 10YR4/4 砂質シルト
10YR5/3 砂質シルトの斑土
15 10YR5/2 砂質シルト 極細粒砂混じり
16 10YR4/2 粘質シルト 極細粒砂混じり
17 10YR5/2 粘質シルト 極細粒砂混じり
18 10YR4/4 粘質シルト 炭化物含む
19 10YR4/4 粘質シルト 炭化物わずかに含む
20 10YR4/3 粘質シルト
21 10YR4/4 粘質シルト
22 10YR5/2 シルト
23 10YR5/3 砂質シルト
24 10YR5/2 砂質シルト 極細粒砂混じり
25 10YR5/5 砂質シルト
26 10YR5/2 シルト
27 10YR3/2 砂質シルト
28 10YR5/3 砂質シルト
29 10YR6/2 極細粒砂
30 10YR5/2 砂質シルト
31 10YR4/4 砂質シルト
32 10YR5/3 砂質シルト 極細粒砂混じり
33 10YR7/2 細砂（基盤）
34 10YR4/3 砂質シルト
35 10YR4/4 シルト

第 22 図　99 Ａ区西壁・北壁セクション図　(1/80)

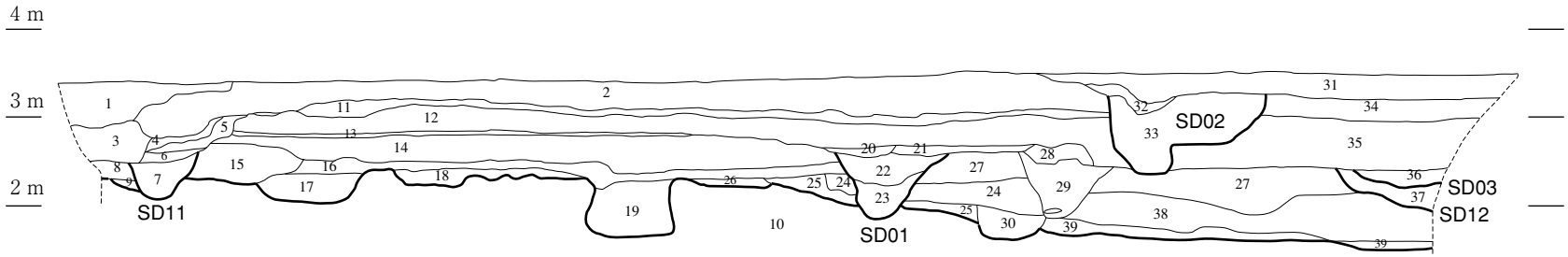


99Ｂ区西壁セクション土色

1 表土

2 10YR3/4 極細粒砂 瓦礫混じる
3 10YR5/2 シルト
10YR5/4 シルトの斑土
4 10YR5/3 砂質シルト
10YR5/2 シルトブロック混じる
5 10YR5/2 シルト
6 10YR5/4 細粒砂
10YR5/2 シルトブロック混じる
7 10YR5/2 シルト 極細粒砂混じり
8 10YR5/2 極細粒砂
10YR5/2 粘土ブロック混じる
9 10YR6/4 細砂
10YR5/2 粘土ブロック混じる
10 10YR5/2 砂質シルト 極細粒砂混じり
11 10YR4/4 細砂
12 10YR5/2 シルト 極細粒砂混じり
13 10YR5/2 粘質シルト 極細粒砂混じり
14 10YR5/4 極細粒砂
10YR5/2 シルトブロック混じる
15 10YR5/2 砂質シルト
16 10YR5/2 シルト 極細粒砂混じり
17 10YR5/2 砂質シルト 炭化物わずかに含む
18 10YR5/2 砂質シルト 下層に鉄分沈着
19 10YR5/2 砂質シルト 下層に鉄分沈着
20 10YR4/3 シルト
10YR6/4 細砂混じる
21 10YR6/4 細砂（基盤）
22 10YR5/2 砂質シルト 炭化物わずかに含む
23 10YR5/3 粘質シルト 極細粒砂混じり
24 10YR6/2 細砂
25 10YR4/1 粘質シルト 極細粒砂・炭化物混じり
26 10YR3/1 粘土 炭化物含む
27 10YR5/2 シルト
10YR6/4 細砂混じる
28 10YR4/2 粘質シルト
29 10YR4/2 粘土
30 10YR6/4 極細粒砂
31 10YR4/2 粘質シルト 極細粒砂混じり
32 10YR5/2 シルト
33 10YR4/4 砂質シルト
34 10YR5/2 砂質シルト
10YR5/4 砂質シルト混じる
35 10YR5/2 シルト 極細粒砂混じり
36 10YR5/4 極細粒砂
37 10YR5/2 シルト 極細粒砂混じり
38 10YR4/2 粘土
39 10YR4/3 粘質シルト 極細粒砂混じり
40 10YR4/2 粘質シルト
41 10YR4/2 粘質シルト（鉄分多い）
42 10YR5/2 シルト
43 10YR6/4 細砂
10YR4/2 粘質シルト（鉄分多い）が混じる
44 10YR3/2 砂質シルト 炭化物含む
45 10YR4/5 砂質シルト 極細粒砂混じり
46 撹乱
47 10YR5/3 シルト 上層は瓦を含む
48 10YR5/3 細粒砂
49 10YR6/2 極細粒砂
50 10YR5/2 シルト
10YR4/4 砂質シルトが混じる

第 23-1 図　99 Ｂ区西壁・北壁セクション図（１）　(1/80)



99A区西壁セクション土色

51 10YR5/2 砂質シルト（鉄分多い）
52 10YR4/4 シルト
53 10YR6/4 シルト 極細粒砂混じり
54 10YR6/2 シルト 極細粒砂混じり
55 10YR5/3 砂質シルト
56 10YR5/4 砂質シルト
57 10YR5/3 シルト（鉄分多い）
58 10YR4/2 砂質シルト
59 10YR4/4 砂質シルト
60 10YR4/3 砂質シルト 炭化物含む
61 10YR5/5 シルト 炭化物多量に含む
62 10YR4/3 砂質シルト
63 10YR5/3 砂質シルト
64 10YR5/2 砂質シルト 極細粒砂混じり
65 10YR6/3 砂質シルト 極細粒砂混じり
66 10YR6/3 砂質シルト 炭化物含む
67 10YR4/2 砂質シルト 炭化物含む
68 10YR6/3 砂質シルト
69 10YR6/4 細砂
10YR5/2 砂質シルトを含む
70 10YR4/2 砂質シルト
71 10YR3/2 砂質シルト 炭化物含む
72 10YR6/4 細砂
10YR4/2 砂質シルト
73 10YR5/3 砂質シルト 炭化物を少量含む
74 10YR4/3 砂質シルト 炭化物を少量含む
75 10YR4/2 砂質シルト 炭化物含む
76 10YR4/2 シルト 炭化物を多く含む
77 10YR4/3 砂質シルト 炭化物を多く含む
78 10YR5/3 粘質シルト 炭化物含む
79 10YR5/3 砂質シルト 極細粒砂混じり
80 10YR5/2 粘質シルト 極細粒砂混じり
81 10YR5/3 シルト 極細粒砂混じり
82 10YR5/2 粘土
83 10YR4/2 粘質シルト 極細粒砂混じり
84 10YR4/2 シルト
10YR6/4 細砂が混じる
85 10YR4/2 シルト
10YR6/4 細砂が混じる
86 撹乱
87 10YR6/3 砂質シルト
88 10YR6/3 砂質シルト 極細粒砂混じり
89 10YR6/3 砂質シルト 極細粒砂混じり 炭化物わずかに含む
90 10YR5/3 砂質シルト
91 10YR6/4 細砂
10YR6/3 砂質シルトが混じる
92 10YR6/4 細砂
10YR6/3 砂質シルトが混じる
93 10YR4/4 砂質シルト
94 10YR5/2 砂質シルト（鉄分多い）
95 10YR4/4 砂質シルト
96 10YR4/4 砂質シルト 炭化物多く含む
97 10YR5/3 シルト
98 10YR6/4 砂質シルト
99 10YR4/4 10YR5/2 砂質シルト（鉄分多い）

99A区北壁セクション土色

1 表土
2 10YR4/2 砂質シルト 極細粒砂混じり
3 10YR6/4 砂質シルト
4 10YR6/2 シルト
10YR5/4 極細粒砂が混じる
5 10YR6/4 砂質シルト
6 10YR4/3 砂質シルト 炭化物含む
7 10YR6/3 粘質シルト
8 10YR4/4 砂質シルト
9 10YR6/4 細砂
10YR6/3 砂質シルトブロック混じる
10 10YR6/4 細砂
11 10YR4/2 砂質シルト
12 10YR5/4 砂質シルト
13 10YR5/3 砂質シルト
14 10YR5/4 砂質シルト
15 10YR6/3 砂質シルト
16 10YR6/2 砂質シルト
17 10YR6/4 砂質シルト
18 10YR4/3 砂質シルト
19 10YR5/4 砂質シルト
20 10YR6/4 シルト 炭化物を少量含む
21 10YR5/4 砂質シルト 炭化物を少量含む
22 10YR5/4 シルト 炭化物を少量含む
23 10YR5/2 粘質シルト
24 10YR6/3 シルト
25 10YR6/3 砂質シルト
10YR6/4 細砂混じる
26 10YR4/3 砂質シルト
27 10YR6/4 シルト 炭化物を少量含む
28 10YR6/4 シルト
29 10YR4/2 砂質シルト
30 10YR5/4 粘質シルト
31 10YR5/1 中粒砂
32 10YR3/1 粘質シルト
33 10YR4/2 砂質シルト
34 10YR4/3 砂質シルト
35 10YR4/4 砂質シルト
36 10YR4/3 砂質シルト 炭化物を少量含む
37 2.5Y5/3 粘質シルト
38 2.5Y5/3 粘土
39 2.5Y5/3 砂質シルト
10YR6/4 細砂混じる



第 23-2 図　99 B区西壁・北壁セクション図（２）　(1/80)

方形を呈する土坑で、下層の炭化物・植物遺体を含むシルト・砂層より、コクゾウムシなどの穀物害虫化石が出土している。

（4） 不明遺構

A　SX01

上層で南北約24mにわたって検出された落ち込みで、南側でクランク状に曲がる。また、北側のトレンチ部分にも続いていくことが確認されている。落ち込みは50～70㎝の深さをもち、南北からやや東に振れている。底面では、平行して東西に走る幅10～20㎝・深さ5～10㎝の溝が検出されている。SX01は城下町期の遺構を切って作られており、宿場町期以降のものである可能が高く、溝の配置から畑作地とそれに伴う畝と考えられる。

5　99Ｂ区

（1）溝

A　上層で検出された溝

SD01・02・03・06

やや東に振れ平行して南北に走る溝である。SD01・02・06の時期は宿場町期となる可能性があるが、調査区東壁沿いで検出されたSD03は城下町Ⅲ-2期になり、他の溝とは性格の違うものであるかもしれない。

SD04・05

同位置をやや北に振れて東西に走る溝で、1条の溝と途切れ部分という見方もできる。ただ出土遺物からみた時期は、東にあるSD04が宿場町期、西にあるSD05が城下町Ⅲ-2期になる。

B　下層で検出された溝

A　SD11

調査区北東隅で、直角に折れて曲がる溝で、幅1.2m・深さ40㎝を測る。時期は城下町Ⅲ期になる。

B　SD20・21

調査区南側を、やや北に振れて東西に平行して走る溝で、SD20が幅4.2m・深さ60㎝、SD22が幅3m・深さ50㎝を測る。時期はSD20が宿場町期になる可能性があり、SD22は城下町期になる。

（2）井戸

A　SK92

調査区の北よりのところにある井戸で、長径4.0m・短径3.2m・深さ2mを測る。最下位では楕円形に組まれた長径74㎝・短径55㎝の桶組みの井戸枠が検出されている。時期は城下町Ⅲ-2期になる。

B　SK131

SK92の南西にある井戸で、径2.5m・深さ1mを測る。時期は城下町Ⅲ-1期になる。

C　SK289

SK100などに切られて全体は不明であるが、深さ1mを測る。宿場町期の可能性がある井戸である。

D　SK304

調査区の西壁沿いで検出された井戸で、長径3.2m・深さ62㎝を測る。時期は城下町Ⅲ期になる。

E　SK316

SK92に切られる井戸で、長径5.1m・短径4m・深さ1.8mを測る。最下位では隅丸方形に組まれた長径68㎝・短径64㎝の桶組みの井戸枠が検出されている。時期は城下町期になる。

F　SK325

SK289の北東にある井戸で、径1.2m・深さ1.2mを測る。下層では、3段に重ねた桶組みの井戸枠が検出されている。時期は城下町Ⅲ期になる。

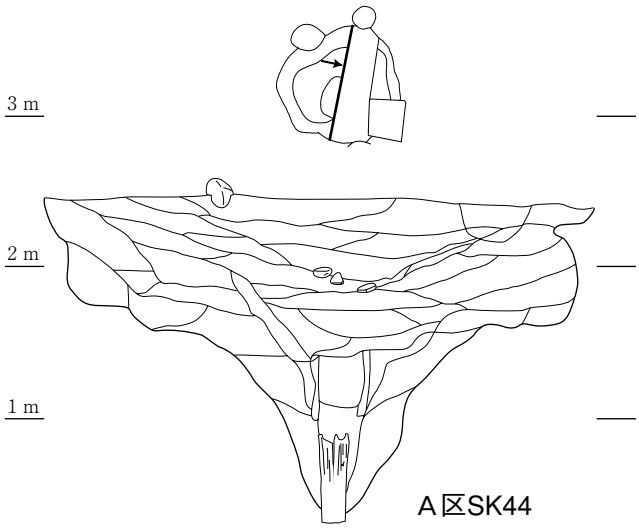
G　SK296・327・328・332・334・335・336

調査区の南部で検出された7基の井戸で、いずれも上部がSX01の造成によって削平されている。

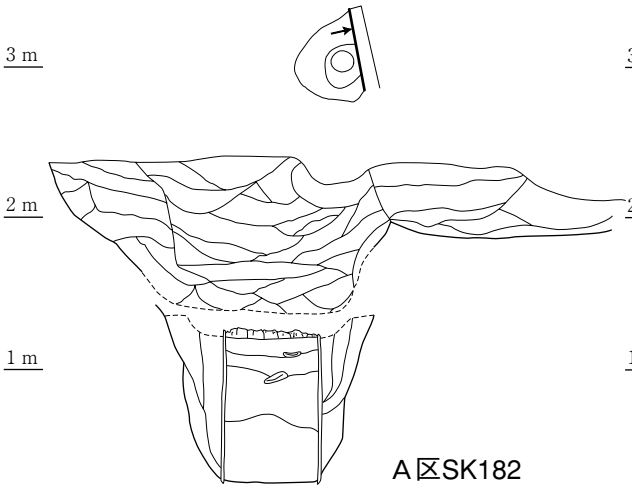
（3）不明遺構

A　SX01

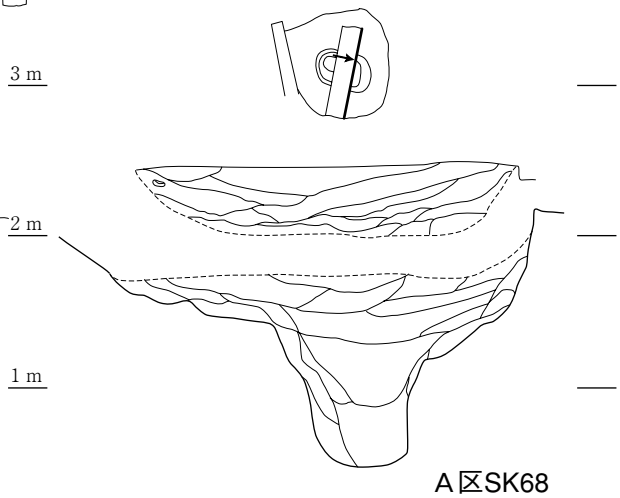
調査区の南部にある幅約10m・高さ約60㎝の、南北に延びる高まり（写真図版6）で、粘土ブロックを含む土で土盛りされている。また東西の肩部から落ち込みにかけては整地層が広がっており、江戸期以降に造成された堤防とそれを埋めた整地跡であると考えられた。



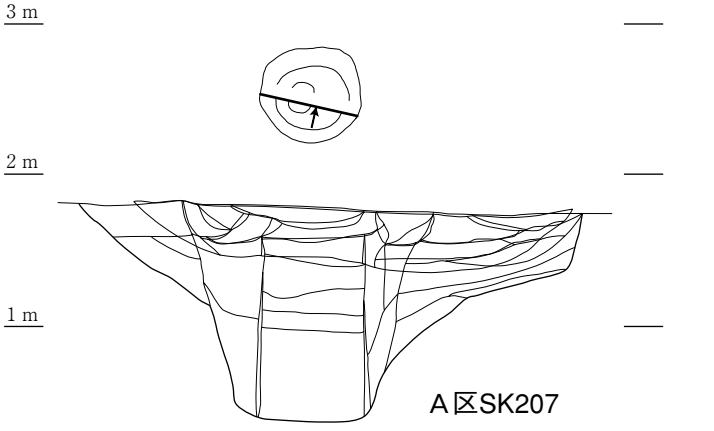
A区SK44



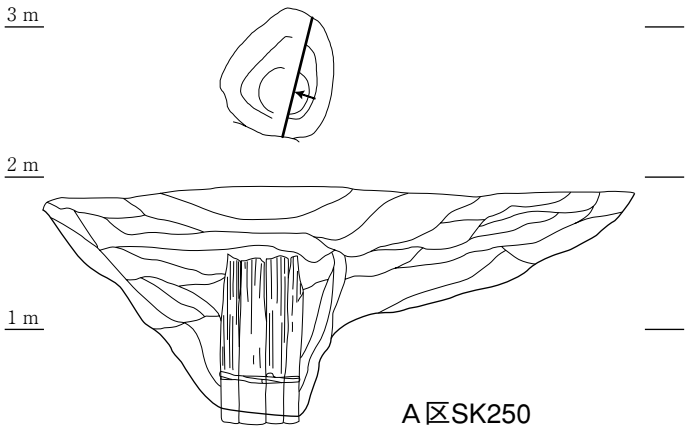
A区SK182



A区SK68

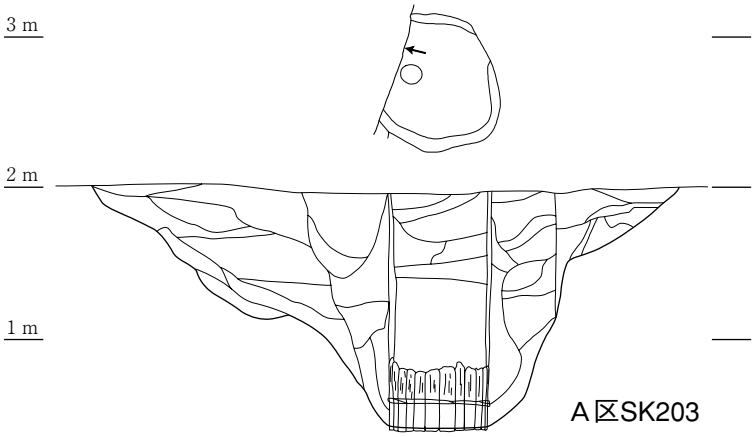


A区SK207

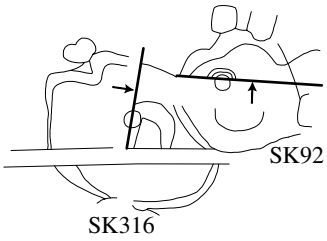


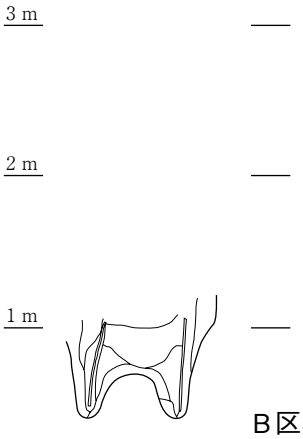
A区SK250

第25図　99 A区井戸セクション図　(1/50)

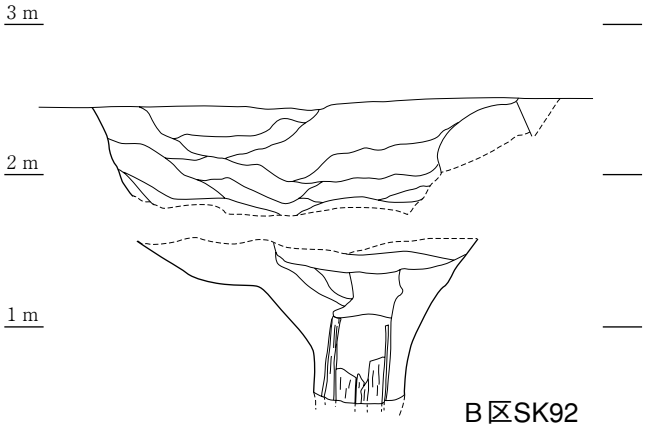


A区SK203

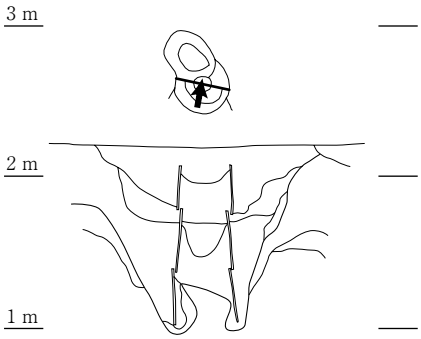




B区SK316



B区SK92



B区SK325

第25図　99 A・B区井戸セクション図　(1/50)

Ⅲ　遺　物

（Ⅰ）　概要と分析の方法

1　出土遺物の概要

本報告書の対象となる調査区（95A区、95B区、96区、97A区、97B区、97C区、99A区、99B区）から出土遺物には多種多様なものが多量に出土している。これらは材質で分類すると、陶磁器・土器類、瓦類、木製品、石製品、金属製品、自然遺体などに分けることができる。また、各遺物の時期について着目すると、奈良時代の須恵器から江戸時代の陶磁器や近代のガラス製品に至るまでバラエティーに富んでいる。遺物の出土量に注目すると、96区出土瓦類が圧倒的な出土量を誇るのを始めとして、各調査区から多量の遺物が出土しており、総遺物出土量は27リットル入りコンテナで約1300箱にのぼる。

これらの遺物は、各調査区において出土遺物の種類や時期や出土量に相違が認められ、多様性を示している。これは、今回対象となる各調査区が清須城下町の中でも多様な地区に分散して分布していることに起因し、具体的には各調査区で遺跡が存続した時期、地形的な条件や遺構のあり方に起因する遺物の遺存条件、存在した遺構や屋敷などの性格などが相違しているために起こる現象であると推定される。この各調査区で異なる出土遺物の様相を概述すると、以下のようにまとめられる。

（1）95A区、95B区

清洲城下町遺跡の南部地区に属し、周辺では城下町期Ⅲ期（城下町期後期）に属する町屋に関連する遺構などが確認されている。城下町期Ⅲ期の中でも後半の段階のみが居住域になっていた可能性が高く、当時の生活面が低く砂地であることから土地的条件は悪く居住域であった期間が他の地区に比べて短いことが予想される。深く掘り込んだ遺構は少なく、遺物は陶磁器・土器類が大半を占めており、遺物出土量はそれほど多くはない。

（2）96区、97C区

清洲城下町遺跡の本丸地区に属し、本丸東側の内堀や石垣など城郭の外郭に伴う遺構が確認された。内堀内や石垣の前面から大量の瓦類が出土しており、これらは城下町期Ⅲ期（城下町期後期）に属すると推測される（一部に城下町期Ⅱ-2期に属するものが存在するか？）が、一方、同時期に属する陶磁器・土器類は非常に少ない点が特徴となっている。また、城下町期Ⅰ期（城下町期前期）の陶磁器・土器類も下位の遺構や堆積層から出土し、さらに時期的に遡るものも少なからず認められる。また、下位の堆積層は湧水レベル以下の部分があり、多くの木製品が出土している。

（3）97A区

清洲城下町遺跡の田中町地区に属し、かつ五条川に面した調査区である。城下町期や宿場町期の遺構は確認されず、五条川の堆積物から近代などの遺物が出土した。特に報告するに値する資料は無いと判断して、ここでは割愛することとしたい。

（4）97B区

清洲城下町遺跡の五条橋地区に属する。97A区と同様に五条川に面した調査区であるが、97B区では旧五条川の堆積層から様々な遺物が出土している。堆積層の特に上位からは近世や近代遺物が出土した

が、下位の堆積層からは城下町Ⅰ期（城下町期前期）にまで遡る遺物が比較的多く存在する。また、旧流路では滞水環境にあった部分があり、こうした粘土層などからは木製品や繊維製品などの植物製品が多く出土した。

（5）99A区、99B区

99A区は清洲城下町遺跡の本町地区、99B区は清洲城下町遺跡の南部地区に属するが、両者は長者橋を境に隣接しており、遺跡の状況は類似している。周辺では城下町期Ⅲ期（城下町期後期）に属する町屋に関連する遺構などが確認されており、本町地区では城下町期Ⅰ・Ⅱ期（城下町期前期）の遺構や遺物も確認されている。このような状況であるためか、99A区、99B区では城下町期Ⅲ期（城下町期後期）に属する陶磁器・土器類が多量に出土している。なお、滞水環境にあった遺構埋土がほとんどなかったことから木製品などはあまり出土しなかった。

2　整理方針

上記のように、各調査区で遺物の出土傾向に相違が認められることが明らかであるが、遺物そのものの大半は大量生産されたもので調査区によって遺物の形状や性質が著しく異なることはないと想定される。今回対象となる膨大な資料を報告するに際しては、全部の資料を図化や写真撮影によって報告することは到底できない状態であり、実際には図化や写真撮影による資料紹介は代表的な遺物に限定せざるを得ない。しかし、遺物が大量生産品であることを前提にすれば、出土量の算定が全資料の図化に代わる重要な情報として位置付けられるのではないかと思われる。このことから、本書では、材質分類を大分類に設定し、この大分類毎に整理報告を行うこととしたい。材質と調査区によって資料の特性が異なることから、これに応じて整理の方法が若干異なるが、具体的な手順は下記の通りである。

（1）大分類

遺物を材質（陶磁器・土器類、瓦類、木製品、石製品、金属製品など）で分類する。

（2）資料の図化と写真撮影

資料の多様性を表現することを念頭に置いて、重要と思われる図化可能な資料を図化し、その中でさらに選択した資料の写真撮影を行った。この結果、項目によっては大量に出土した同一分類の資料を大幅に割愛するなどの処置を行っている場合があり、資料抽出は恣意的であるものがあることをあらかじめ断っておく。遺物の図化（実測および拓本）は整理補助員などが行い調査研究員が点検した。製図作業（デジタルトレース）は大部分をアイシン精機株式会社事業企画室文化財プロジェクトに委託し、一部は調査研究補助員および調査研究員などが行った。写真撮影はスタジオピュアの福岡栄氏の手を煩わした。

（3）出土量の算定

出土量の算定は全ての遺物で実施できなかったものの、大部分の資料について行った。資料の特性が多様であることから、材質別に方法を設定しカウントした。原則として接合前破片数を計測し、必要に応じて重量などのデータを併用した。元々個体識別を実施した上で数量化しているわけではないので、算出された数値が本来持っている出土量を表現しているとは言えないことを断っておく。

具体的には、瀬戸美濃窯産陶器については、その多くは藤澤良祐氏に時期や器種を直接鑑定いただき、これを調査研究員や整理補助員などが集計作業を行った。土器については、調査研究員が分類した後にその結果を整理補助員などによって集計作業を実施した。丸瓦や平瓦については整理補助員が分類した上でデータを採取し、後に調査研究補助員がデータ入力して調査研究員が集計作業を行った。

（Ⅱ） 陶磁器・土器類

1　概要と分類の方法

（1）概要

今回出土した陶磁器と土器類は多くは従来の城下町期に属する遺物であるが、城下町期以前（古代から中世）と城下町期以降（近世から近代）の遺物も存在する。これらは広大な範囲に及ぶ調査区の中で出土したものであり、調査区によって出土遺物の時期や量、そして遺物の接合状況は大きく傾向が異なっている。このため、今回の報告では調査区に応じて報告のあり方を変えて実施した。具体的には、99A区と99B区では別遺構どうしの遺物片が接合するケースが多く、この状況では遺構一括資料として各遺物を取扱うと重複する遺物が多く煩雑になってしまうため、調査区一括で取り扱うこととした。この他の調査区では従来通り遺構一括資料を中心に取り扱う方針とした。

（2）出土量計測（カウント）の方法

ここで実施した陶磁器と土器類のカウント方法は、これまでに筆者らが数冊の報告書（鈴木編1994a、鈴木編1994b、蟹江編1996、鈴木編1997）で実施してきた方法ではなく、陶磁器の部分を中心に新たに変更した方法を採用する。これは、先頃に筆者が瀬戸美濃窯産陶器の消費地遺跡の出土傾向を分析したカウント方法（鈴木2002）を取り入れたものである。この方法を用いた理由は下記のとおりである。

これまでに15世紀末から17世紀初頭の大窯期の瀬戸美濃窯産陶器の流通の様相について藤澤良祐氏らが精力的な調査を敢行し、各地で藤澤良祐編年による消費地遺跡の出土量のデータが揃いつつある（瀬戸市埋文2001）。藤澤良祐編年案の妥当性については現在も将来にわたっても絶えず検討していかなければならない問題と思われるが、現状において清洲城下町遺跡における瀬戸美濃窯産陶器の流入様相を他の遺跡の状況と比較しながら検討することは、当面の諸問題を考察するのに必要なことと考えられる。このような研究状況を背景に加え、今回対象となった調査区はいずれも過去に報告を実施した調査区に隣接することもあって、新しい方法を採用し、比較検討のためのデータを提示できると考えたためでもある。

ただし、今回この方法によるカウントも全ての調査区で完全にはできなかった。整理時間の不足だけではなく、筆者の力量不足によるものであり、あらかじめこの点を断っておく。

（3）分類の方法

最後に、分類の方法についてその概略を記述する。

全陶磁器と土器類を城下町期以前と城下町期と宿場町期に区分し、それぞれの時期毎に分析方法を設定した。分析方法は、城下町期を中心（詳細）に分析し、城下町期以前と宿場町期は遺構や遺物の量が少なく遺跡の主体となっていないことから割愛することとした。

城下町期の陶磁器と土器類については、基本的に産地材質、器類、器種、器形、釉薬などの項目によって階層的に設定し、出土量の計測は接合前破片数を求めた。産地材質のうち、瀬戸美濃窯産陶器については多くの資料を藤澤良祐氏に器種や時期についてご教示いただいた。この成果をもとにデータを作成しているため、分類は基本的に藤澤良祐の分類方法に依拠する形となっている（藤澤良祐2002）。また、土師器については、その分類は以前に分類作業を行い報告した『清洲城下町遺跡Ⅴ』（鈴木編1995）の所収論文に依拠している。その他の遺物については、適宜先行研究を援用しながら分析を進めていった。

2　95A区出土陶磁器・土器類

（1）概要

95A区から出土した陶磁器と土器類は多くは従来の城下町期Ⅲ期に属する遺物であり、城下町期以前と城下町期以降の遺物は極めて少ない状況である。陶磁器類の出土量を完全に計測することができず、正確な数値を示すことができなかったが、陶磁器・土器類は接合前破片数でおおよそ4000点が出土した。この調査区では、遺構の重複が少ないためか、遺構間における遺物接合はほとんどできなかったことなどから、遺構別に実測図を掲載し報告することとしたい。

（2）遺構一括資料の紹介

A　SK05出土遺物（第26図1）

土師器羽無釜（1）などが出土した。1は肩に付く耳は遺存した部分には残存しなかったが、直立する口縁部が短いことなどからみて城下町期Ⅲ期に属する羽無釜B類と考えられる。

B　SK10出土遺物（第26図2）

土師器羽無釜（2）などが出土した。2は肩に付く耳は欠損していたが、板状の外耳が付着していたと推定され、口縁部から肩部にかけてなだらかになっていることなどからみて城下町期Ⅲ-2期に属する羽無釜B類と考えられる。

C　SK20出土遺物（第26図3）

瀬戸美濃窯産陶器徳利（3）などが出土した。3は口縁部が欠損し、体部は鉄釉を施した上に灰釉を流しかけている。

D　SK22出土遺物（第26図4）

土師器犬形代（4）などが出土した。4は頭部と右前脚部と左後脚部が欠損する。

E　SK25出土遺物（第26図5）

土師器内耳鍋（5）などが出土した。5は底部から口縁部にかけて丸く彎曲しながら内彎するタイプで、清須分類鍋B類の第3型式に属する。

F　SK26・27出土遺物（第26図6）

土師器内耳鍋（6）などが出土した。6は底部と体部の境界に明瞭な稜を持つものであり、5と同じく鍋B類の第3型式に属するだろう。

G　SK06出土遺物（第26図7）

土師器羽付釜（7）などが出土した。7は短い鍔を持つ釜で耳部は遺存しなかった。口縁部が短くやや内傾することから比較的新しい資料と考えられる。

H　SX01出土遺物（第26図8～10）

瀬戸美濃窯産陶器向付（9）、擂鉢（10）、常滑窯産陶器を転用した加工円盤（8）などが出土した。8は焼締られた真焼の製品で器種は特定できない。9は銅緑釉が施されたいわゆる織部製品で連房式登窯第1小期に属する資料である。

I　SD02出土遺物（第27図11～18）

瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（11～13）、内禿端反皿（14）、擂鉢（15・18）、常滑窯産陶器無頸壺（16）、備前窯産陶器小瓶（17）などが出土した。天目茶碗はくびれた口縁部が高く上方に伸びるタイプで城下町期Ⅲ-2期に属する資料である。16は口縁部が内側に折れてその上面に浅く広い沈線が巡る形状となっている。17は底部に窯印とみられる刻印が施されている。

J　SD04出土遺物（第27図19～26）

瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（19）、折縁皿（20）、志野丸皿（21）、擂鉢（22～25）、土師器羽付内耳鍋（26）などが出土した。瀬戸美濃窯産陶器は大窯第4段階から登窯第1小期に属する資料である。26は鍔と内耳を両方有する土師器鍋で口径は約30cmを計測する。口縁部が内彎することから比較的新しいものと推測される。

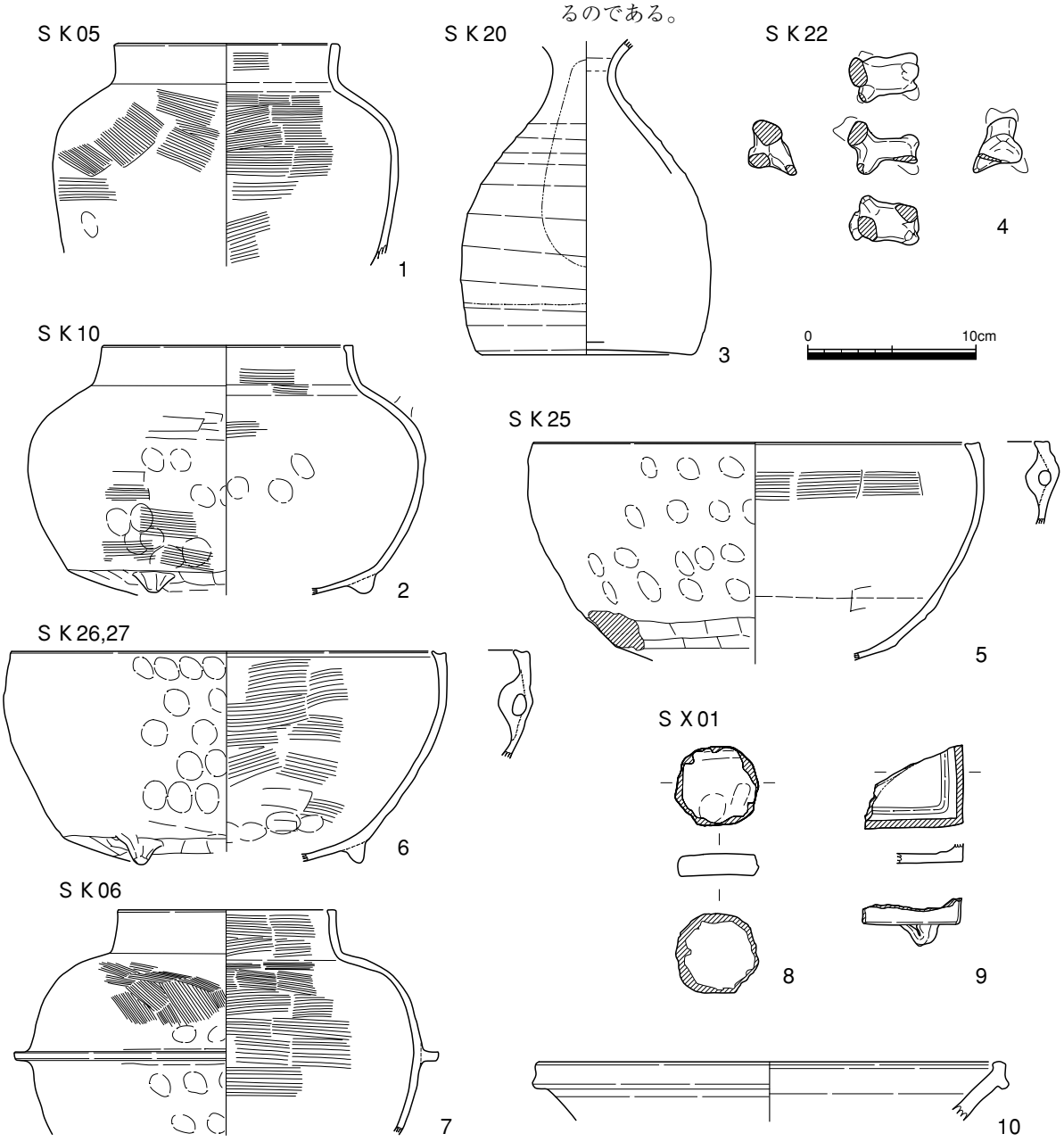
（3）遺構外出土資料の紹介

遺構外から出土した資料の中で特筆すべきものを抽出して報告する。瀬戸美濃窯産陶器は折縁皿（27）、志野丸皿（28）、徳利（31）、擂鉢（33・34）などがあり、中には登窯第8小期に属するこね鉢（32）も含まれる。土師器にはロクロ調整皿、非ロクロ調整皿、内耳鍋、釜などがあり、ロクロ調整皿は体部が逆ハの字状に開き口縁端部がやや外反するもの

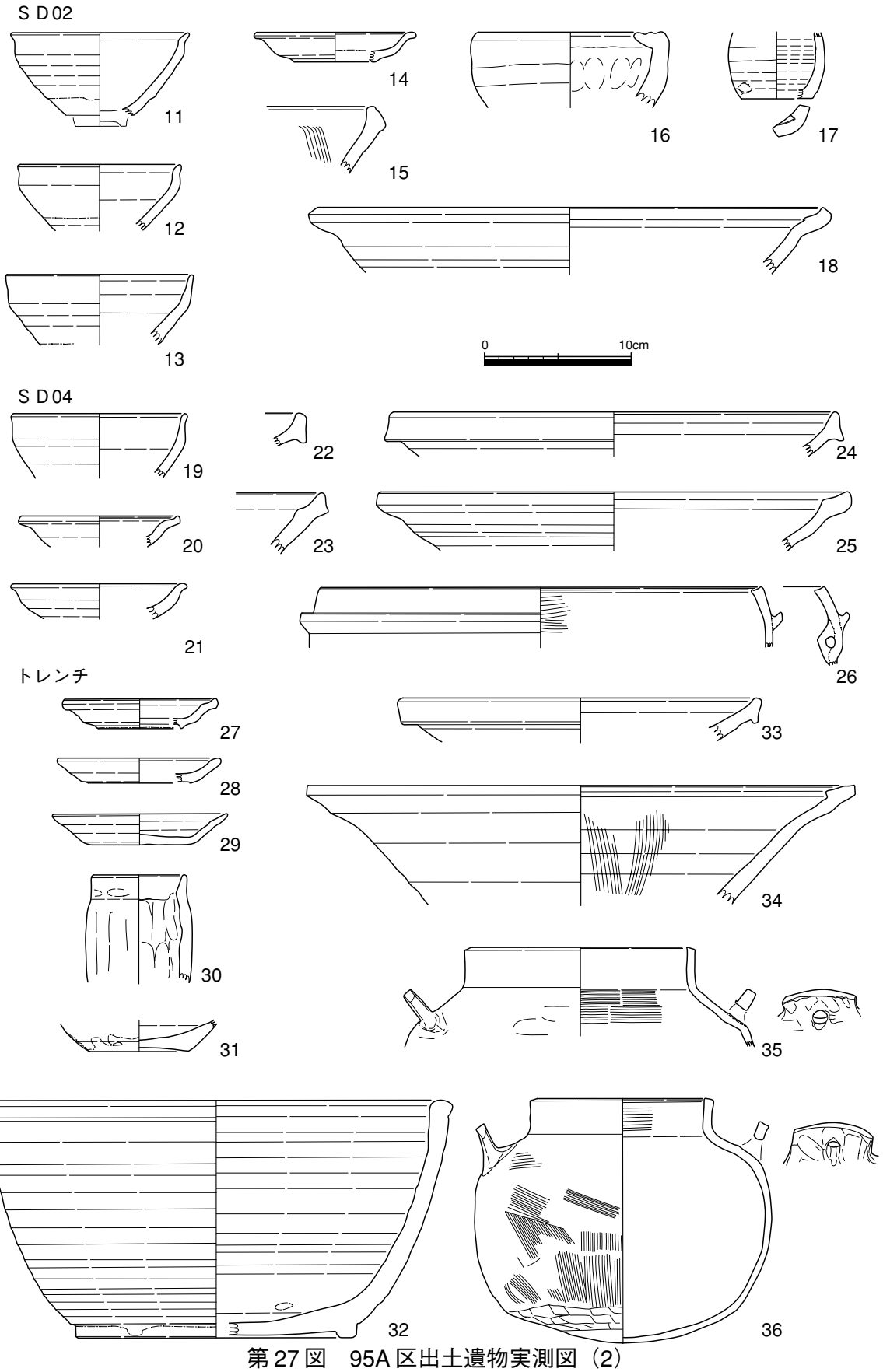
(29) などがみられる。釜は平面形が五角形状となる板状外耳が付くものが多く（35・36）、鍔が無いものも多い。

（4）小結

数少ない実測資料から見ても、瀬戸美濃窯産陶器では大窯第4段階を中心に、大窯第3段階から登窯第1小期までの遺物が多く認められる。これは土師器鍋釜類をみても判明する現象である。具体的にみてみよう。土師器の出土量を接合前破片数で算出すると、ロクロ調整皿が377点、非ロクロ調整皿49点、内耳鍋18点、羽付鍋0点、釜68点、焙烙83点、不明鍋釜類1255点、火鉢3点などとなっている。このうち、ロクロ調整皿は『清洲城下町遺跡Ⅴ』（鈴木編1995）の分類でみるとC類が10点、E類が20点であり、非ロクロ調整皿はD類が圧倒的多数を占めている。これらは、羽無釜や焙烙と同様に、城下町期Ⅲ期に多く見られる器種であり、陶磁器と土器の両側面からみても、95A区は城下町期Ⅲ期という短期間に居住域となっていた可能性が高いことが窺われるのである。



第26図　95A区出土遺物実測図（1）



第 27 図　95A 区出土遺物実測図（2）

3　95B 区出土陶磁器・土器類

（1）概要

95B 区から出土した陶磁器と土器類は、95A 区と同様に、多くは従来の城下町期Ⅲ期に属する遺物であり、城下町期以前と城下町期以降の遺物は極めて少ない。今回の報告に際しては、陶磁器類の出土量の測定を完全に行うことができず、正確な数値を示すことができなかったが、陶磁器・土器類は接合前破片数でおおよそ4000点が出土した。この調査区では、遺構の重複が少ないためか、遺構間における遺物接合はほとんどできなかったことなどから、遺構別に実測図を掲載し報告することとしたい。

（2）遺構一括資料の紹介

A　SD102 出土遺物（第 28 図 37 ～ 53）

瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（37・38）、小碗（39）、大皿（44）、擂鉢（41・42・47）、常滑窯産陶器壺（45）、甕（46）、土師器ロクロ調整皿（40）、内耳鍋（48）、焙烙（49）、火鉢（50）、火熨斗？（51）、羽無釜（52・53）、中国産磁器青花皿（43）などが出土した。瀬戸美濃窯産陶器は大窯第 3 段階後半から第 4 段階までに属する製品が多くなっている。39 は志野小碗で体部から口縁部にかけて直立する。擂鉢は口縁端部が内側に折り返して縁帯を持つタイプであるが、上端部に面を持たない。48 の土師器内耳鍋は口縁部が直線的に伸びる第 4 型式に属するものと考えられる。羽無釜は、肩に付く耳が遺存するものは少ないが、直立する口縁部が短く、口縁部から肩部にかけてなだらかになっていることなどからみて城下町期Ⅲ期に属する羽無釜Ｂ類と考えられる。51 は口縁部が大きく外反する浅鉢状の製品で中空の取っ手を持つ火熨斗状の製品と推測される。

B　SK101 出土遺物（第 29 図 54）

土師器ロクロ調整皿（54）などが出土した。54 は体部から口縁部にかけて短く直線状に伸びるものである。

C　SK109 出土遺物（第 29 図 55）

土師器ロクロ調整皿（55）などが出土した。55 は口縁部が緩やかに内彎するもので、器壁がやや厚い。

D　SK111 出土遺物（第 29 図 56 ～ 58）

瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（56・57）と内禿皿（58）などが出土した。天目茶碗はくびれた口縁部が長く直立するもので、登窯第1小期に属する資料である。58は非常に浅い内禿皿で比較的新しいものと考えられる。

E　SK126 出土遺物（第 29 図 59）

土師器ロクロ調整皿（59）などが出土した。59 は口縁部が内彎するもので、他の遺構出土資料に比べ器高がやや高い。

F　SK130 出土遺物（第 29 図 60）

土師器ロクロ調整皿（60）などが出土した。60 も口縁部が内彎するが、腰が強く張っておりこの結果口縁部が直立ぎみになるものである。

G　SK140 出土遺物（第 29 図 61）

土師器非ロクロ調整皿（61）などが出土した。61 は内面を一方向にナデているだけで口縁部を立ち上げないタイプである。

H　SK144 出土遺物（第 29 図 62・63）

瀬戸美濃窯産陶器向付（63）と土師器ロクロ調整皿（62）などが出土した。63 は底部のみが残存するが、おそらく志野四方向付と思われる。底部の露胎部分には「九」と記された墨書が残存する。

I　SK149 出土遺物（第 29 図 64）

登窯第 1 小期に属する瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（64）などが出土した。

J　SK151 出土遺物（第 29 図 65）

瀬戸美濃窯産陶器志野四方向付（65）などが出土し、大窯第 4 段階後半に属する。

K　SK153 出土遺物（第 29 図 66）

常滑窯産陶器壺の下半部（66）などが出土した。焼成は良好であり、真焼製品である。

L　SK158 出土遺物（第 29 図 67）

口縁部が内彎する土師器ロクロ調整皿（67）などが出土した。

M　SK180 出土遺物（第 29 図 68・69）

大窯第 4 段階後半から登窯第 1 小期までに属する

瀬戸美濃窯産陶器などが出土した。両者とも志野製品である。

N　SK182 出土遺物（第 29 図 70 ～ 72）

瀬戸美濃窯産陶器志野四方向付（70）、志野丸皿（71）、土師器火鉢（72）などが出土した。70 は浅い皿形の志野四方向付で底部に半環足が付着する。72 は筒状の土師器で、おそらく火鉢に 3 つ付く中空の脚になると考えられる。

O　SK183 出土遺物（第 29 図 73）

土師器ロクロ調整皿（73）などが出土した。73 は腰が張って口縁部が内彎するもので、口縁端部にタールが付着する。

P　SK184 出土遺物（第 29 図 74）

土師器羽無釜（74）などが出土した。板状の外耳が付き、口縁部はやや内傾する。

Q　SK192 出土遺物（第 29 図 75）

土師器ロクロ調整皿（75）などが出土した。内外面ともタールがかなりの部分に付着したものである。

R　SK194 出土遺物（第 29 図 76・77）

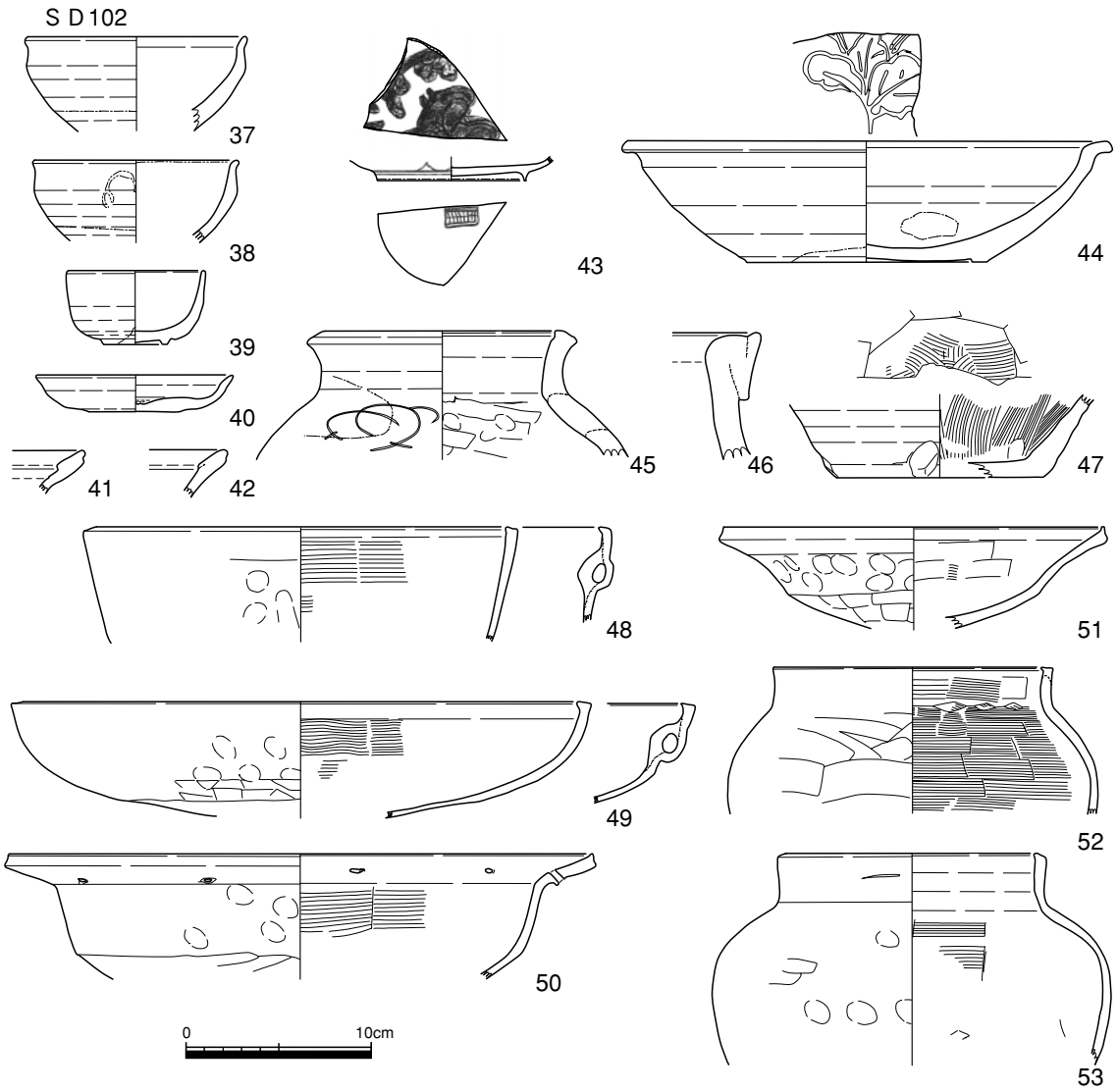
土師器釜（76）とロクロ調整皿（77）などが出土した。77 は口縁部が内彎するタイプである。

S　SK197 出土遺物（第 29 図 78）

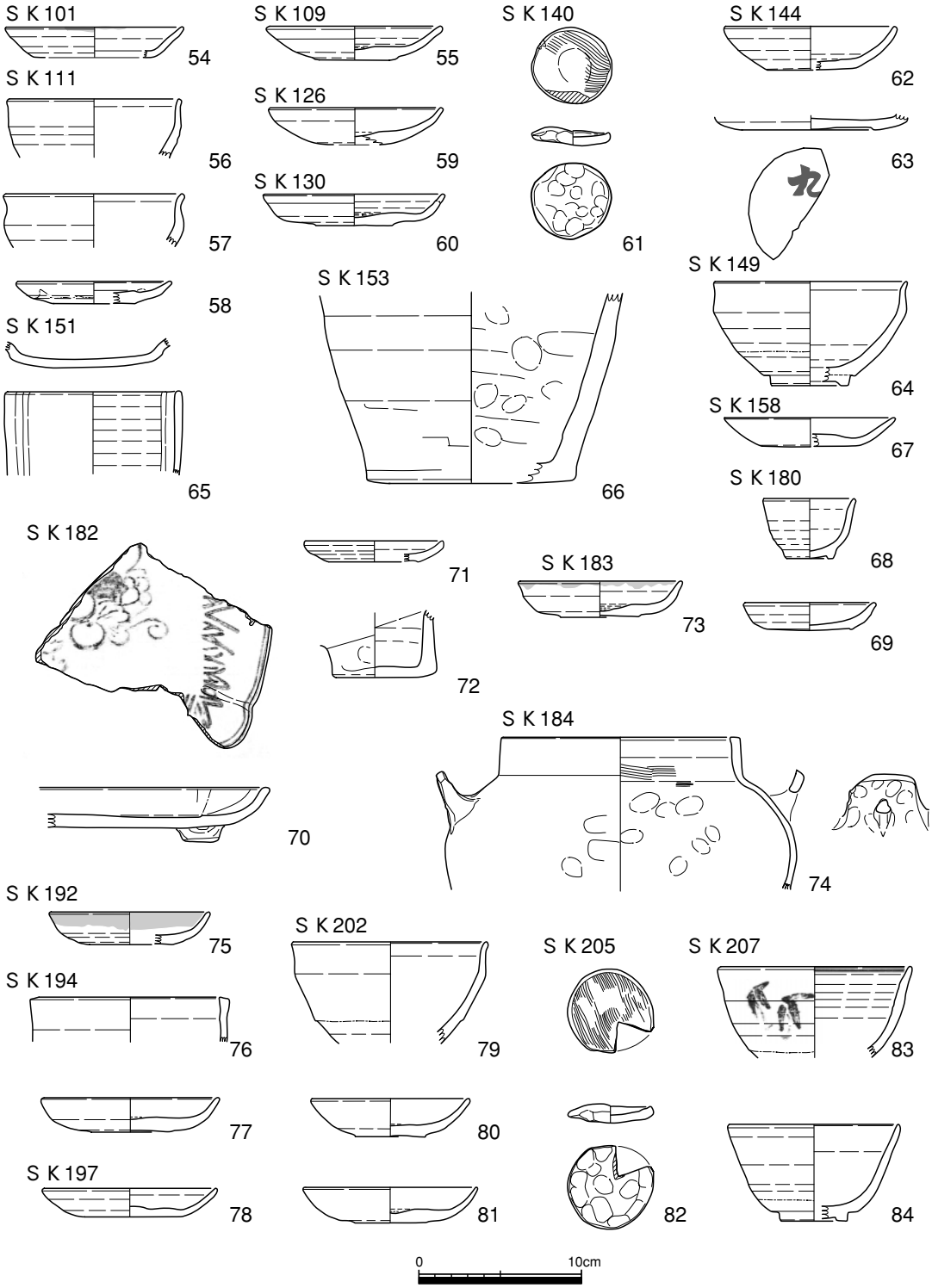
土師器ロクロ調整皿（78）などが出土した。体部から口縁部が逆ハの字状に伸びるものである。

T　SK202 出土遺物（第 29 図 79 ～ 81）

登窯第 1 ～ 2 小期に属する瀬戸美濃窯産陶器天目



第 28 図　95B 区出土遺物実測図（1）



第 29 図　95B 区出土遺物実測図（2）

茶碗（79）と土師器ロクロ調整皿（80・81）などが出土した。すべて城下町期Ⅲ-2期に属する資料である。

U　SK205 出土遺物（第 29 図 82）

土師器非ロクロ調整皿（82）などが出土した。内面は一方向にナデており、口縁部を上に立ち上げないものである。

V　SK207 出土遺物（第 29 図 83・84）

登窯第 1 小期に属する瀬戸美濃窯産陶器志野丸碗（83・84）などが出土した。83 には外面に鉄絵が描かれている。

（3）小結

本調査区も 95A 区と同様、瀬戸美濃窯産陶器では大窯第 4 段階を中心に、大窯第 3 段階から登窯第 1 小期までの遺物が多く認められる。また、土師器の出土量を接合前破片数で算出すると、ロクロ調整皿が 696 点、非ロクロ調整皿 43 点、内耳鍋 26 点、羽付鍋 1 点、釜 45 点、焙烙 21 点、不明鍋釜類 603 点、火鉢 8 点などとなっている。このうち、ロクロ調整皿は『清洲城下町遺跡Ⅴ』（鈴木編 1995）の分類でみるとＣ類が 48 点、Ｅ類が 76 点であり、非ロクロ調整皿はＤ類が圧倒的多数を占めている。95A 区と比べると、ロクロ調整土師器皿が比較的多く、鍋釜類は少ない傾向を読み取ることができる。

凡例

方眼の 1 マスは、平面垂直座標Ⅶ系によって設定された 5m グリッドを示す。

マスの中の数値はそのグリッドから出土した土器類の破片数を示したものである。

	l	m	n	o	p	q	q
14							
15				5			
16				17	2		
17			12	84	34		
18			7	172	61		
19			5	54	77	11	
20			4	52	127	5	
1			19	83	47	2	
2			8	48	85	14	
3			52	76	354	22	
4			9	70	34		
5			13	35	7		
6			6	23	6		
7			6	29	17		
8			28	107	3		
9			42	52	36		
10			18	63	11		
11			34	59	17		
12			57	63	12		
13			47	10			
14			28	1			
15		60	154	110			
16		15	117	114			
17		11	34				
18		15	56	1			
19			16	6			
20		7	26	13			
1		4	2	8			
2			8	1			
3							
4		13	1	6			
5			8				
6							

第 30 図　95A・B 区出土量分布図

4　96区出土陶磁器・土器類

（1）概要

96区から出土した陶磁器と土器類は接合前破片数で6321点である。これらは城下町期に属する資料ばかりではなく、城下町期以前や城下町期以降のものも少なからず見受けられる状況である。また、遺構の状況は本丸東側の城郭外縁部に相当し、城下町期Ⅲ期を中心に内堀や石垣が、それ以前では柵や溝などが確認されている。このような状況の中、遺物はその大半が石垣前面部分や内堀あるいは石垣下層のやや規模の大きな溝から出土したものが大半を占め、比較的小規模な遺構から出土した事例はほとんど見当たらない。このため出土陶磁器類が多いSX01下層を中心に遺構一括出土資料を取り上げることを報告の中心とし、これに加えて城下町期以前の遺物が相当量存在することも重視して、これもできるだけ図化するように心掛けた。

（2）城下町期以前の資料紹介

A　須恵器（第31図85～98・100）

96区から出土した須恵器には様々な器種が認められ、杯蓋、杯身の他、短頸壺（93）、平瓶？（94）、甕（97）なども存在する。杯蓋は口縁端部を下に折り曲げるいわゆる杯蓋Bが大半を占め（85～88）、杯身は高台を有するいわゆる杯B（91・92）の他に無台杯（いわゆる杯A）も存在したと考えられる。これらの須恵器はほとんどが猿投窯系須恵器と考えられ、8世紀を中心とする時期のものが多いといえよう。

B　古代の土師器（第31図99）

古代に属する土師器には甕（99）などが存在する。99は体部外面に荒いハケ調整を残すもので8世紀代に位置付けられると推定される。

C　灰釉陶器（第31図101～103）

灰釉陶器も96区からは少なからず出土している。器種は、筆者の識別能力の問題が残されるものの、碗（102）や皿（101・103）が多い。これらは時期的には、黒笹90号窯式期に属するものが主体をなしていると考えられよう。

D　山茶碗類（第31図104～111）

山茶碗類（灰釉系陶器類）には碗、皿、鉢などが存在する。今回の資料では、東濃型山茶碗類と尾張型山茶碗類の二者が確認されており、どちらかと言えば後者の方が出土量は多い。東濃型山茶碗類には藤澤良祐編年の第6型式に属する碗（104・105）などがあり、尾張型山茶碗類には第5型式に属する碗（106）、第7か8型式に属する碗（107）、第3型式に属する小碗（108）、第5型式に属する鉢（111）、第9型式に属する鉢（110）などが存在する。

E　古瀬戸製品（第31・32図112～152）

96区から出土した陶磁器と土器類の中で、比較的目立つ存在として瀬戸窯産陶器の古瀬戸製品をあげることができる（ただし、ここでは城下町期に属する古瀬戸後Ⅳ期に属する製品についてはこの項目から除外している）。器種には、卸皿（112）、燭台（114）、仏供（115～117）、仏餉具（118）、柄付片口（119）、花瓶（120）、折縁深皿（121・122）、折縁大皿（123）、直縁大皿（124）、水注（138・139）、梅瓶（140～142）などが存在するが、最も多いのは四（三）耳壺である。

四（三）耳壺は古瀬戸前期から後期にわたって各時期の製品が認められる。藤澤良祐編年でこれらを時期区分すると、130と144～146は古瀬戸前ⅠかⅡ期に、131と147は古瀬戸前Ⅱ期、148は古瀬戸前Ⅲ期、132と149は古瀬戸前ⅢかⅣ期、135と152は古瀬戸中期に、137と150と151は古瀬戸後期、126は古瀬戸後ⅢかⅣ期などに分けることができる。なお、129は猿投窯産陶器の三筋壺で4か5型式に属する古いタイプのものである。

このようにみると、96区では古瀬戸前期から中期にかけての資料が一定量まとまって存在し、器種構成では四（三）耳壺が多いことが明らかである。後述するようにここでは常滑窯産陶器の壺類も数点出土しており、このような出土傾向は、東海地方の一般的な？集落では余り見られない状況である。むしろ中世墓またはそれに関連する遺跡で多く見られる状況といえよう。96区で墓などの遺構が確認されて

いないので断定はできないが、中世の段階で墓域が展開していた可能性を窺わせる資料となることをここで指摘しておきたい。

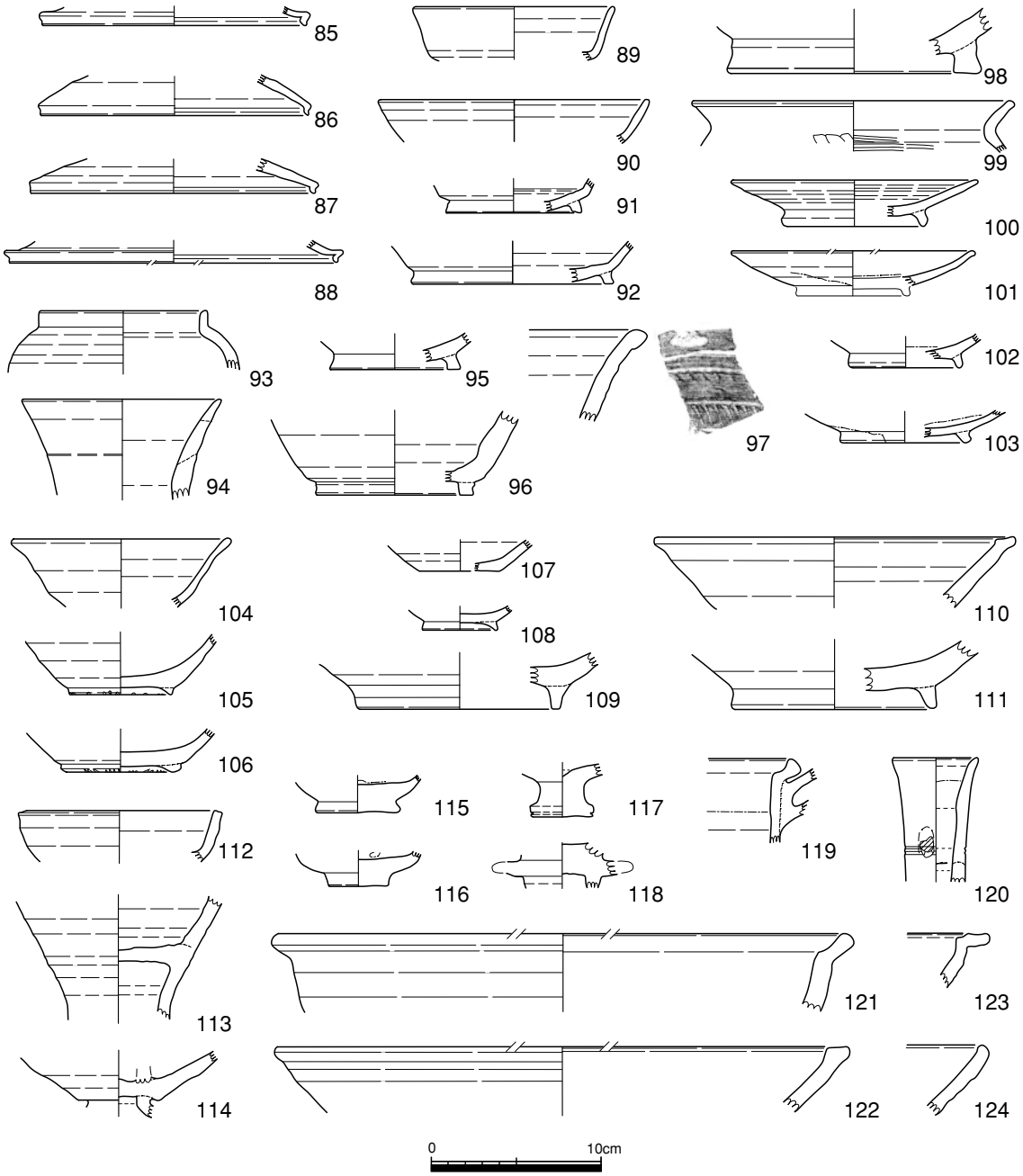
（3）遺構一括資料の紹介

A　SX01-2層出土遺物（第33～35図153～275）

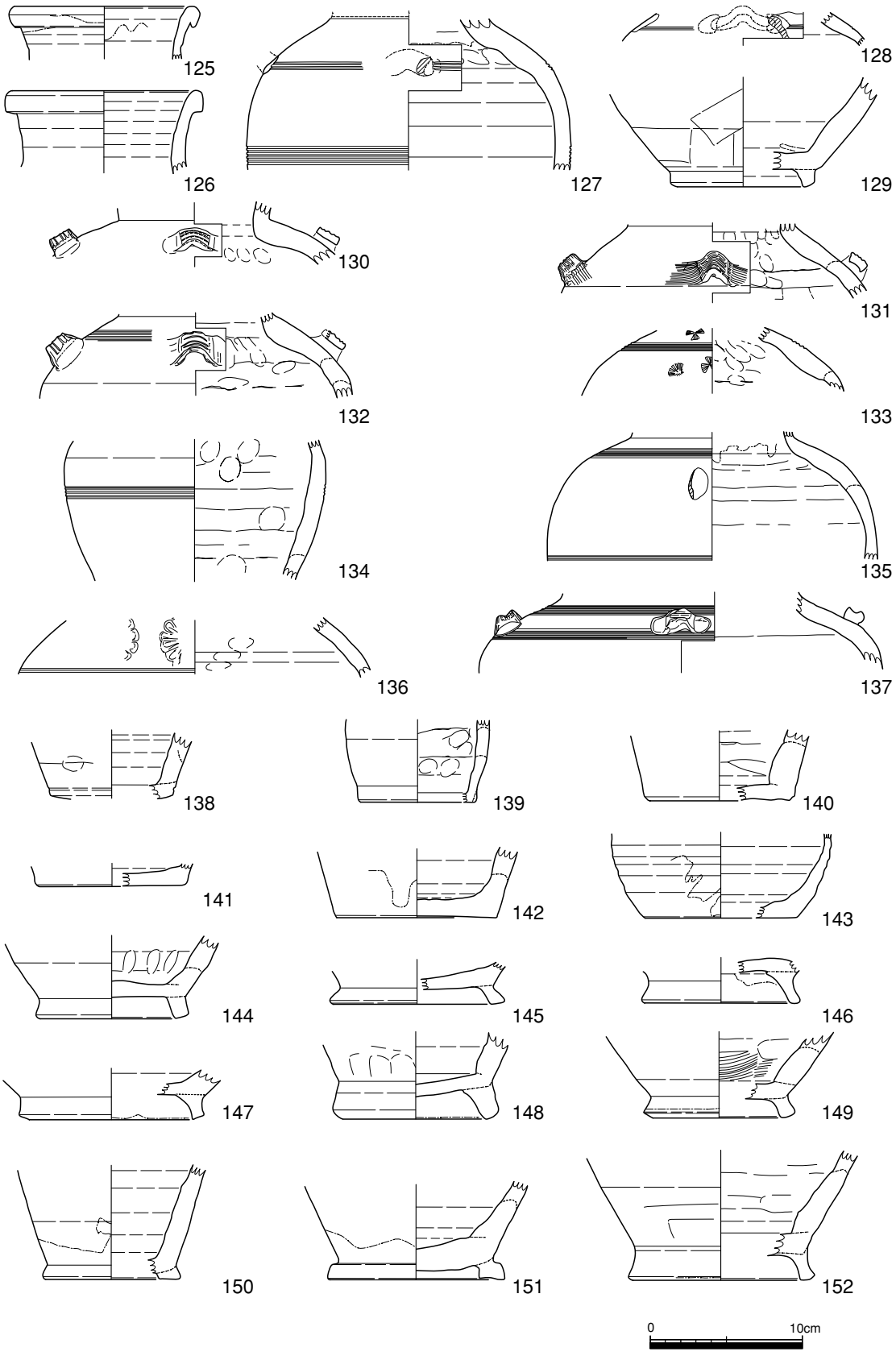
SX01の第2層から出土した遺物には様々な製品が存在しており、多くは城下町期に属する遺物であるが、一定量の宿場町期に属する資料も見受けられる。ここでは、城下町期の瀬戸美濃窯産陶器、中国産磁器、土師器、常滑窯産陶器、宿場町期の陶磁器・土器、その他に分けて報告する

（A）城下町期の瀬戸美濃窯産陶器

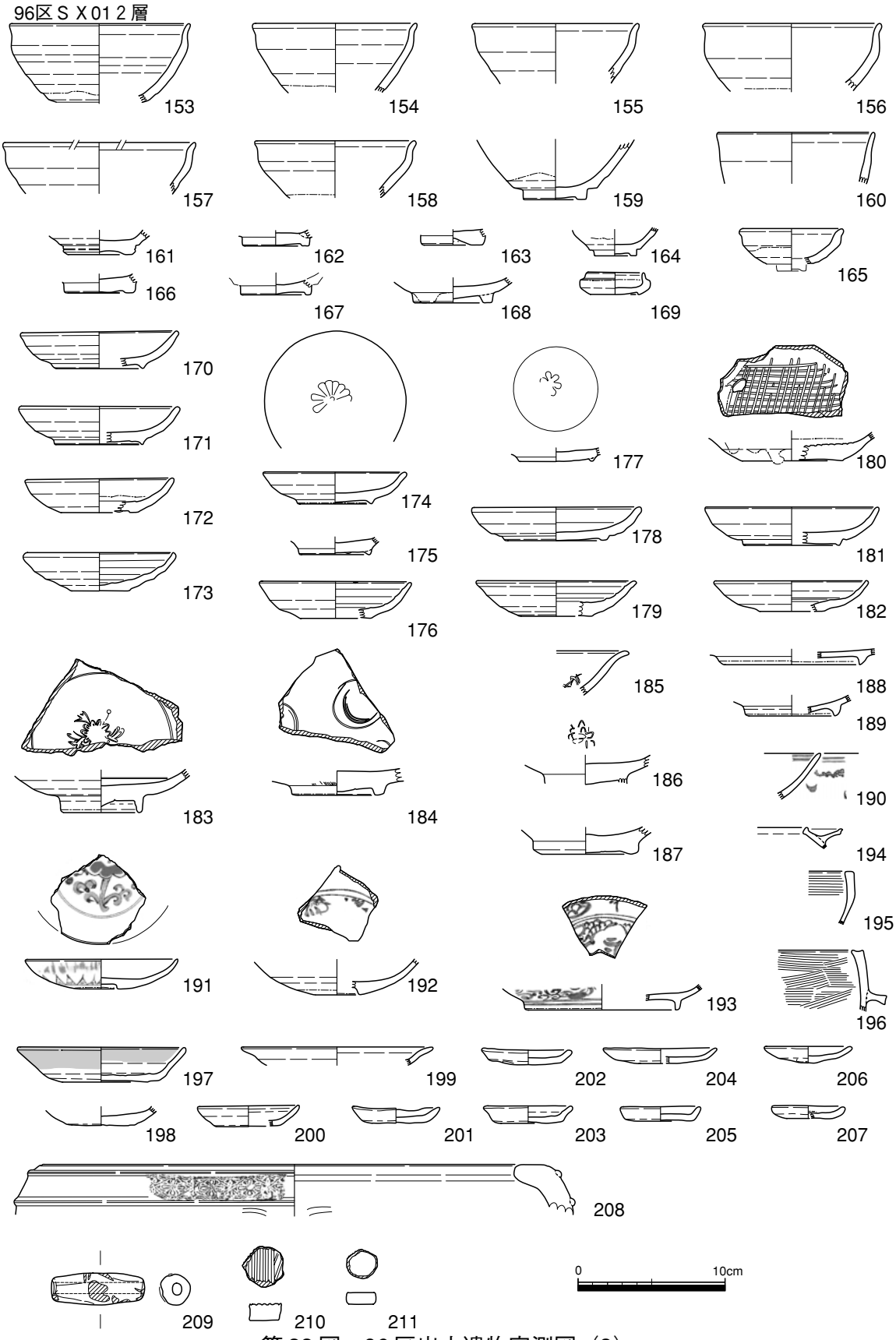
瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗、丸碗（160・168）、小天目茶碗（164・165）、丸皿、重圏皿、卸皿（180）、



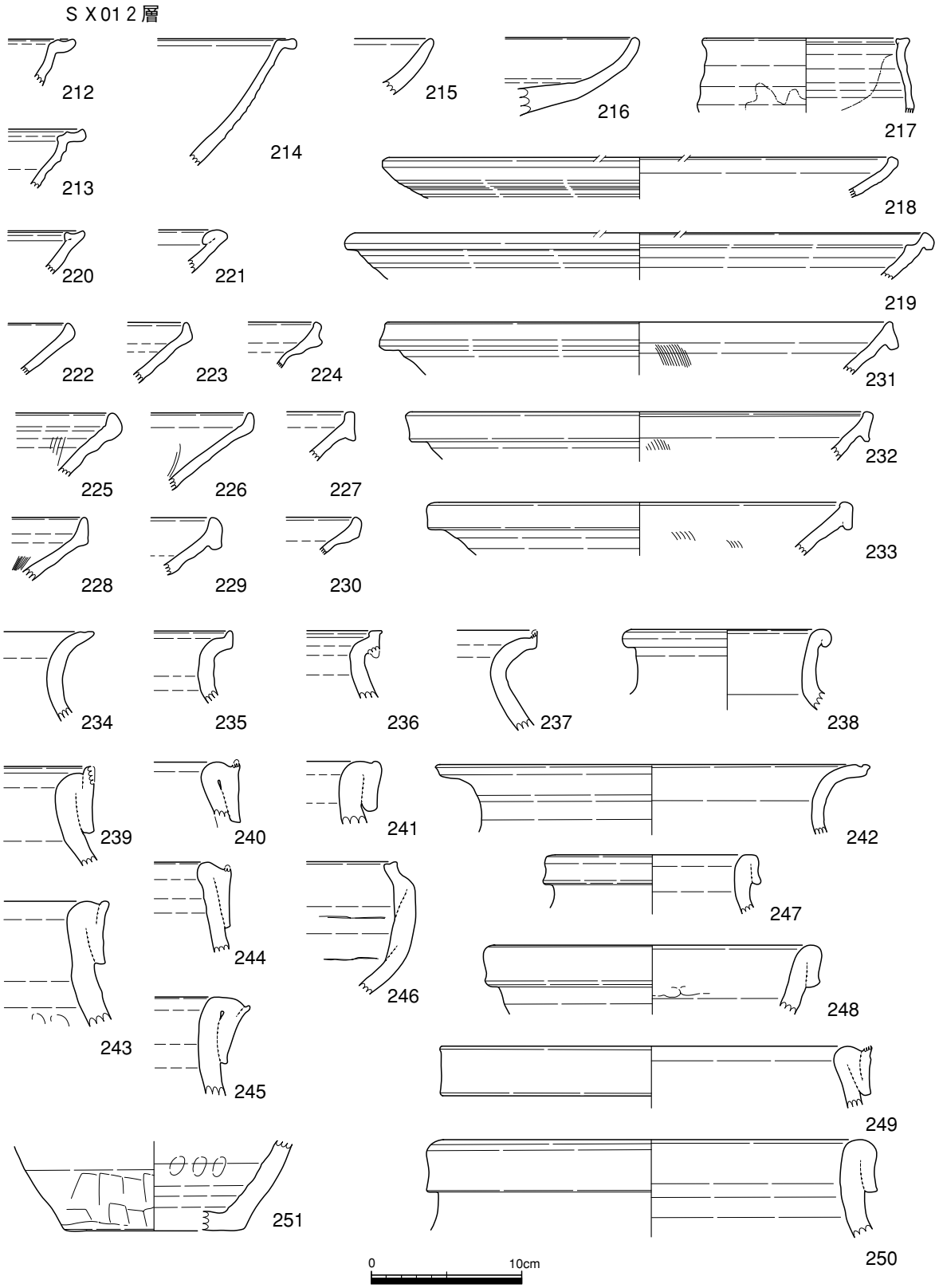
第31図　96区出土遺物実測図（1）



第 32 図　96 区出土遺物実測図（2）



第 33 図　96 区出土遺物実測図（3）



第 34 図　96 区出土遺物実測図（4）

志野丸皿、縁釉皿（198）、擂鉢、大皿などが存在する。天目茶碗は口縁端部を短くＳ字状に折り曲げる古瀬戸後Ⅳ期新段階に属するもの（154・157・161）、大窯第1段階に属するもの（162・167）、大窯第3段階後半に属するもの（155・159）、大窯第4段階前半に属するもの（158・163）、大窯第4段階後半に属するもの（153・156・166）がある。丸碗は大窯第3段階後半に属するもの（168）と登窯第1小～2期に属するもの（160）がある。碗のみに着目しても城下町期各時期の製品が認められることが判明する。

皿は大窯第3段階に属する灰釉丸皿（170・171・174）などが目立ち、大窯第4段階後半に属する志野丸皿（178）や重圏皿（179）なども認められる。169は大窯第4段階に属する香合身である。

擂鉢は古瀬戸後Ⅳ期新段階のものが多く（220・222・223・225・226・230）、他に大窯第1段階に属するもの（224）、大窯第2段階に属するもの（228）、大窯第3段階後半に属するもの（229・231）、大窯第4段階前半に属するもの（227・232・233）も存在する。

（Ｂ）城下町期の土師器

城下町期に属する土師器にはロクロ調整皿（200）、非ロクロ調整皿、内耳鍋、羽付鍋などが存在する。非ロクロ調整土師器皿には、口径が大きく口縁部が大きく外反するタイプ（199）と口縁部を短く立ち上げて横ナデが施されるタイプ（201～207）がある。一方、土師器皿の出土量は2464点と多いのに対して、鍋釜類の出土量は137点と相当に少なくなっており、図化できた資料は195と196に過ぎない。また、194はいわゆる内彎型羽釜と呼ばれる室町時代を通じて尾張地域を中心に存在する形式の鍋類で、口縁部がかなり内傾しこの形式では比較的新しい資料である。208は瓦器の火鉢で、口縁部外面にスタンプ紋が巡っている。

（Ｃ）常滑窯産陶器（第34図234～251）

常滑窯産陶器には甕と壺が存在する。234のように赤羽中野編年の3型式に属する古いものから、244のように11型式に属するものまで、時期的に多様なものが存在する。中でも口縁縁帯部が頸部上端に密着し縁帯が折り返しの頂部よりも下がった位置にくる10型式に属するものが数量的に多い。238や247などの壺類や246などの無頸壺などの器種もわずかに存在する。

（Ｄ）宿場町期の陶磁器・土器類（第35図252～275）

江戸時代（17世紀中頃～19世紀中頃）の陶磁器・土器類には、瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、土師器など多種多様な製品が認められる。瀬戸窯産陶器には腰錆茶碗（253）、端反碗（255）、水盤（265）、蓋（266）、小瓶（269）、大皿（270）、こね鉢（271）、擂鉢（272）などがあり、端反碗や擂鉢を除く大部分の製品は登窯第8～9小期に属するものである。端反碗（255）は登窯第11小期に属する。

美濃窯産陶器には広東茶碗（256）、箱形湯呑（259）、無高台皿（灯明皿261～263）、丸皿（264）などがある。広東茶碗や箱形湯呑は登窯第9小期前後に属し、無高台皿は登窯第8～9小期に、丸皿は登窯第5小期に属する。

土師器には焙烙が存在し、これらは口縁部が内側に屈曲し端部が肥厚するもの（274・275）であり、18世紀後半から19世紀初頭に位置付けられよう。

この他には、肥前磁器丸碗（257）、蛙形の産地不明陶器水滴（254）、関西系磁器蓋（267）、白色粘土などによる編目状の浮紋が内外面に展開する産地不明陶器碗（260）、近代に属するガラス製薬瓶（268）などがある。

Ｂ　SK07出土遺物（第35図276）

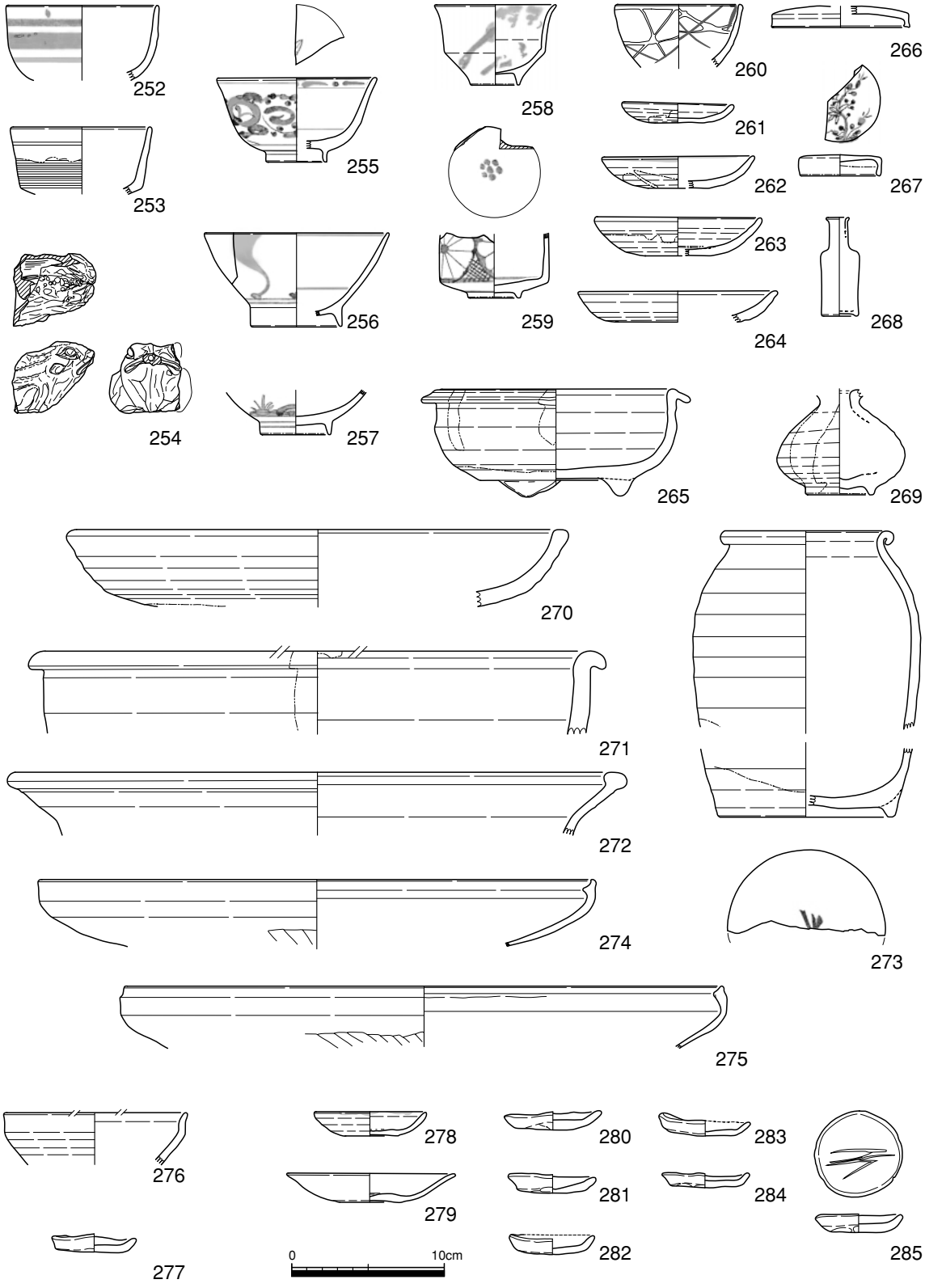
SK07からは天目茶碗（276）などが出土した。276は口縁部が緩やかにくびれており、古瀬戸後Ⅳ期古段階に属するものである。

Ｃ　SU02出土遺物（第35図277）

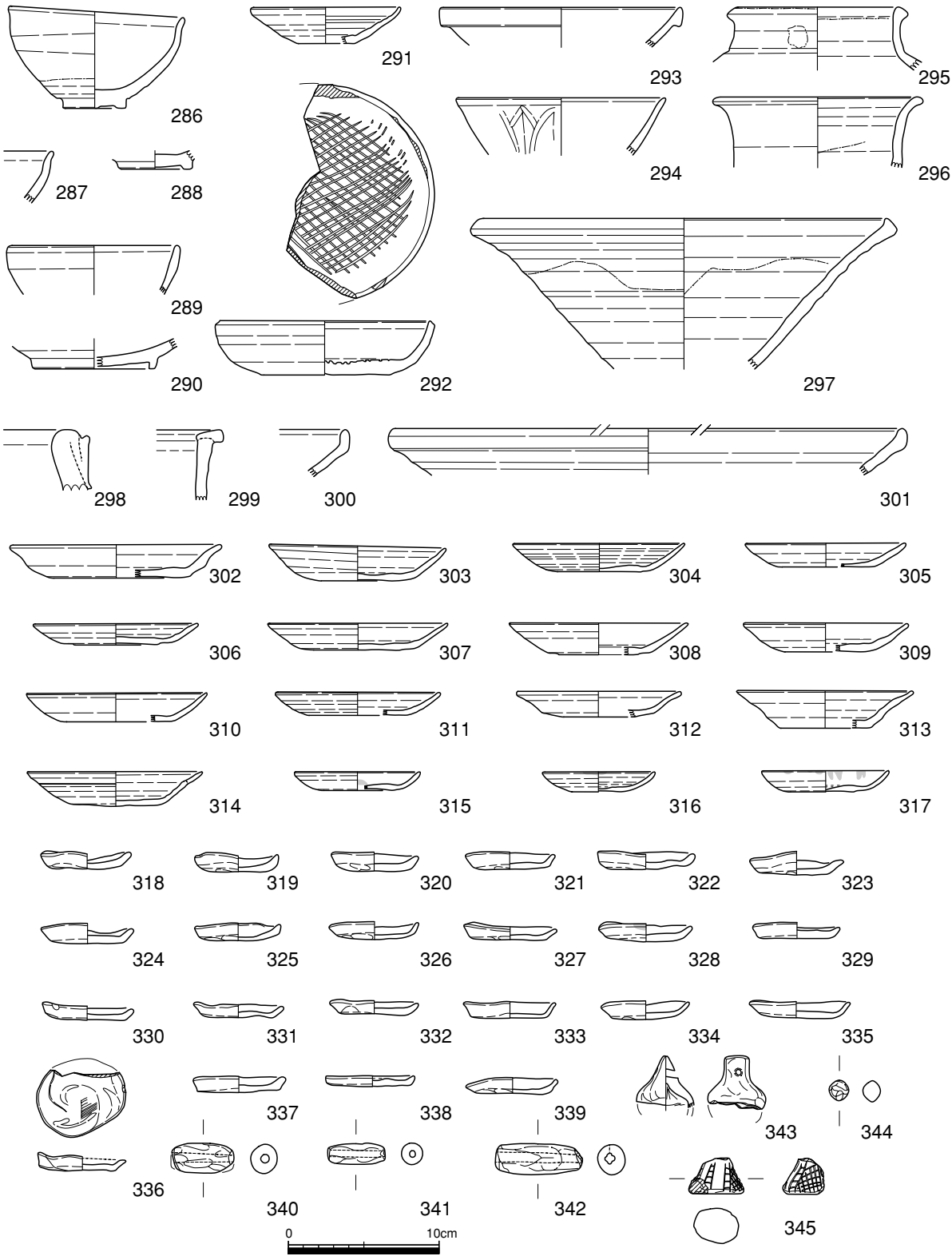
土師器非ロクロ調整皿（277）などが出土した。277は口縁部が横ナデされたタイプで、城下町期Ⅰ～Ⅱ期に属するものである。

Ｄ　SU01出土遺物（第35図278～285）

土師器ロクロ調整皿（278・279）、非ロクロ調整皿（280～285）などが出土した。278は口縁部がやや内彎する小形皿、279は口縁部が緩やかに大きく外反するものである。非ロクロ調整皿はSU02出土資料と同様口縁部に横ナデが施されるタイプのもので、285は内面に線刻が認められた。



第 35 図　96 区出土遺物実測図（5）



第 36 図　96 区出土遺物実測図（6）

（4）遺構外出土資料の紹介

遺構以外から出土した資料（特に城下町期に属するもの）をここで紹介する。瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗（286～288）、台付碗（289）、卸皿（292）、筒型容器（296）、直縁大皿（297）などがある。天目茶碗は大窯第1～3段階に位置付けられるものが多いが、その他は古瀬戸後Ⅳ期前後に属するものが多い。中国産磁器には白磁玉縁口縁碗（293）、龍泉窯系青磁蓮弁紋碗（294）など城下町期以前に属するものが目立つ。土師器皿にはロクロ調整皿と非ロクロ調整皿が存在するが、前者は口縁部が大きく外反するタイプ（302・312）は非常に少なく、口縁部が直線的に逆ハの字状に開くタイプ（303～311）が多く認められる。一方、後者は口縁部が上方に立ち上がり横ナデが施されるもの（318～339）が大半を占める。土師器にはこの他に、土錘（340・341）、土鈴（343）、土鈴用と推測される土玉（344）、瓦質に焼成された形代（345）などがある。342は陶製の土錘である。

凡例

方眼の1マスは、平面垂直座標Ⅶ系によって設定された5mグリッドを示す。

マスの中の数値はそのグリッドから出土した陶磁器・土器類の総破片数を示したものである。

	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t
4																			
5														1	14				
6														45	64	6			
7												3	1	24	77	46			
8										5	9	11		34	22	58	22		
9								9	13	3	18		42	39	38	9			
10							1	54	27	19	4	1729	84	25	2	1			
11						1	15	6	37	20	12	220	54	3					
12						5	10	65	43	45	32	19	8						
13					6	15	34	68	24	23	14								
14			1	17	9	20	28	37	10	1									
15		3	38	33	10	25	6	4											
16	1	12	18	12	2	9													
17		12	1																
18																			

第37図　96区出土量分布図

5　97B区出土陶磁器・土器類

（1）概要

97B区から出土した陶磁器と土器類は接合前破片数で9766点である。その内訳は城下町期に属する資料ばかりではなく、古代の遺物が140点、山茶碗類が237点出土するなど城下町期以前の遺物が一定量認められる。また、城下町期以降のものも瀬戸窯産陶器などが582点存在する。これらの資料は人為的に掘削された遺構の他に自然流路（旧五条川）などの堆積物からも多量に出土しており、現実的には自然流路も遺構に含めると遺構外出土資料はほとんど存在しない状態となっている。このような状況であることから、ここでは遺構一括出土資料のみを紹介することで報告としたい。

（2）遺構一括資料の紹介

A　NR02出土資料（第38～42図346～477）

NR02の灰色粘土層や植物層などからは多くの木製品とともに陶磁器・土器類が出土している。陶磁器・土器類は城下町期Ⅰ期に属する資料が大半を占め、瀬戸美濃窯産陶器、土師器、常滑窯産陶器、中国産磁器、瓦器などの製品が存在する。ここではこれらの産地材質別に記述を進めたい。

（A）瀬戸美濃窯産陶器

瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗（346～352）、平碗（353）、仏餉具（台付碗：354）、香炉（355～357）、縁釉皿（358～361）、重圏皿（東濃型山茶碗：363～368）、卸皿（369・370）、耳付水注（371）、茶入（372）、瓶子（373）、小鉢（376）、口広有耳壺（377）、花瓶（380）、徳利（381）、甕（382）、卸目付大皿（383）、擂鉢（385～397）などが存在する。このうち352・354・362・367・368・380は大窯第1段階に属するものであり、これ以外の製品は古瀬戸後Ⅳ期に属するものが多く、中でも新段階に位置付けられるものが大半である。

天目茶碗は口縁端部を短くS字状に折り曲げるものが多く、底部外面には紫褐色の錆釉が施されている。平碗（353）は器壁が厚手で器高が低くなるものであり、仏餉具（354）は底部外面が露胎となっている。香炉は口縁部が短く外側に折れ曲がるタイプと（355・357）、緩やかに外反するタイプ（356）に分けることができる。

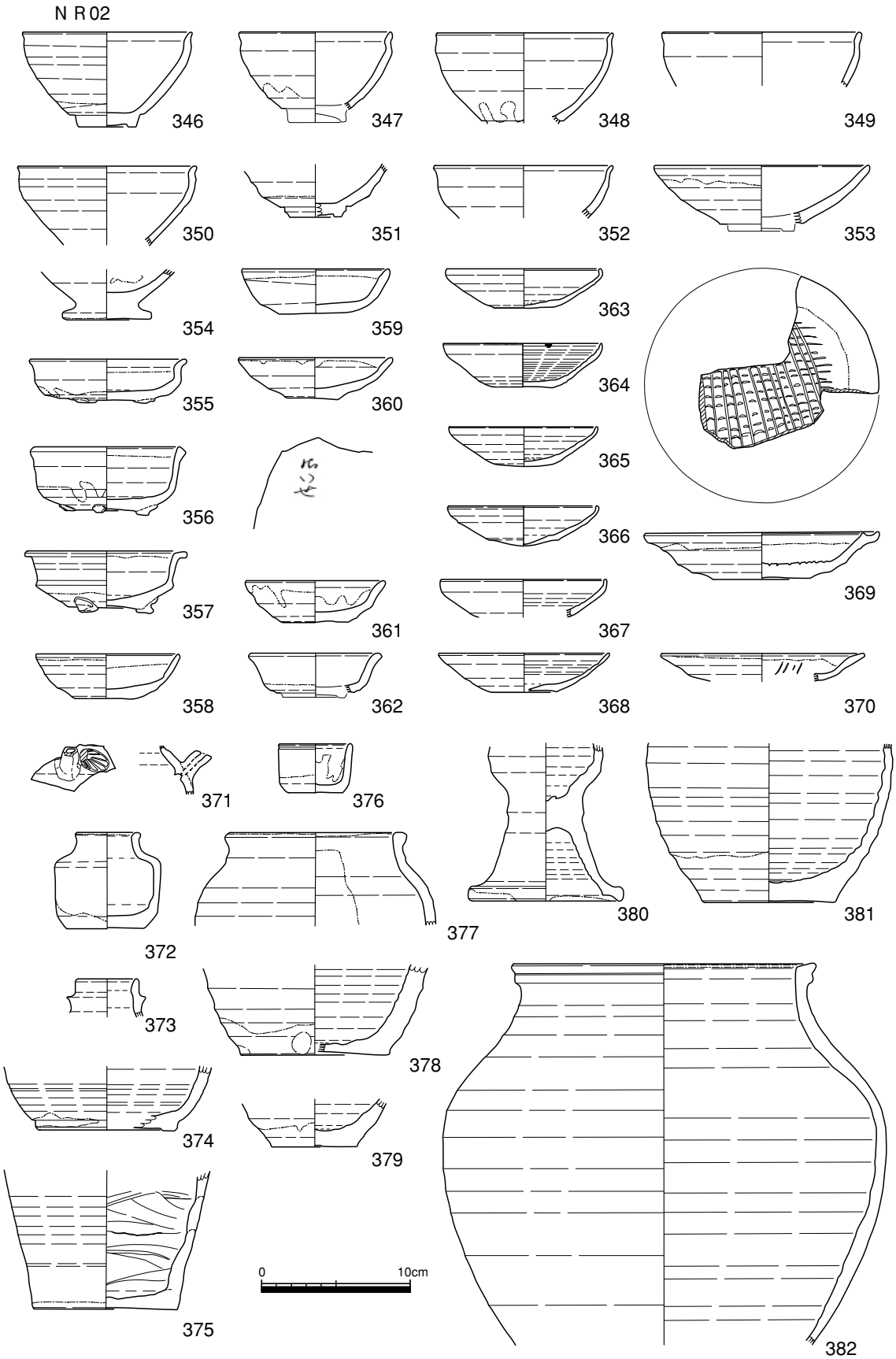
縁釉皿は体部から口縁部にかけて直立ぎみに開くタイプ（358・359・361）と、斜に開くタイプ（360）がある。361は内外面がやや煤けており、内面中央部（見込み部）に「御いせ」と墨書が施されている。重圏皿（東濃型山茶碗）は口縁部が屈曲するように内彎するタイプが多く（363～367）、ほとんど内彎しないタイプ（368）は少ない。364の口縁部には部分的にタールが付着しており、灯明皿として使用されていたことが判明する。

耳付水注（371）は注口部が出土した。茶入（372）は光沢の強い黒色の鉄釉が施されていた。擂鉢は図示したものは全て口縁端部が内側の斜上方にやや伸びる古瀬戸後Ⅳ期新段階に属するものであるが、詳細に見ると、内側に伸びる口縁端部が丸く玉縁状になるもの（385・387・389・394・395）、端部がやや長く伸びるもの（390・392・397）、端部が短く折れるに過ぎないもの（391・393）に分類が可能である。

（B）土師器（第40図398～451・第41図462～474）

城下町期に属する土師器にはロクロ調整皿（398～435・437～440）、非ロクロ調整皿（436・441～451）、内耳鍋（462～474）などが存在する。

ロクロ調整土師器皿には、口径が11～15cmの規模で体部から口縁部が直線的に逆ハの字状に開く1類（398～427・429～435）と、口径が約17cmの規模で体部の腰が張り口縁部が大きく外反する2類（428）と、口径が約8cmの規模で体部から口縁部が直線的に逆ハの字状に開く3類（437～440）がある。『清洲城下町遺跡Ⅴ』（鈴木編1995）分類で各類を当てはめてみると、1類がB類に、2類がA類に、3類がF類に各々相当し、この中で1類（B類）が数量的に最も多いものである。したがって、このNR02はロクロ調整B類の土師器皿が多く認められるタイプの出土状況を呈していることが明らかとなり、90CD

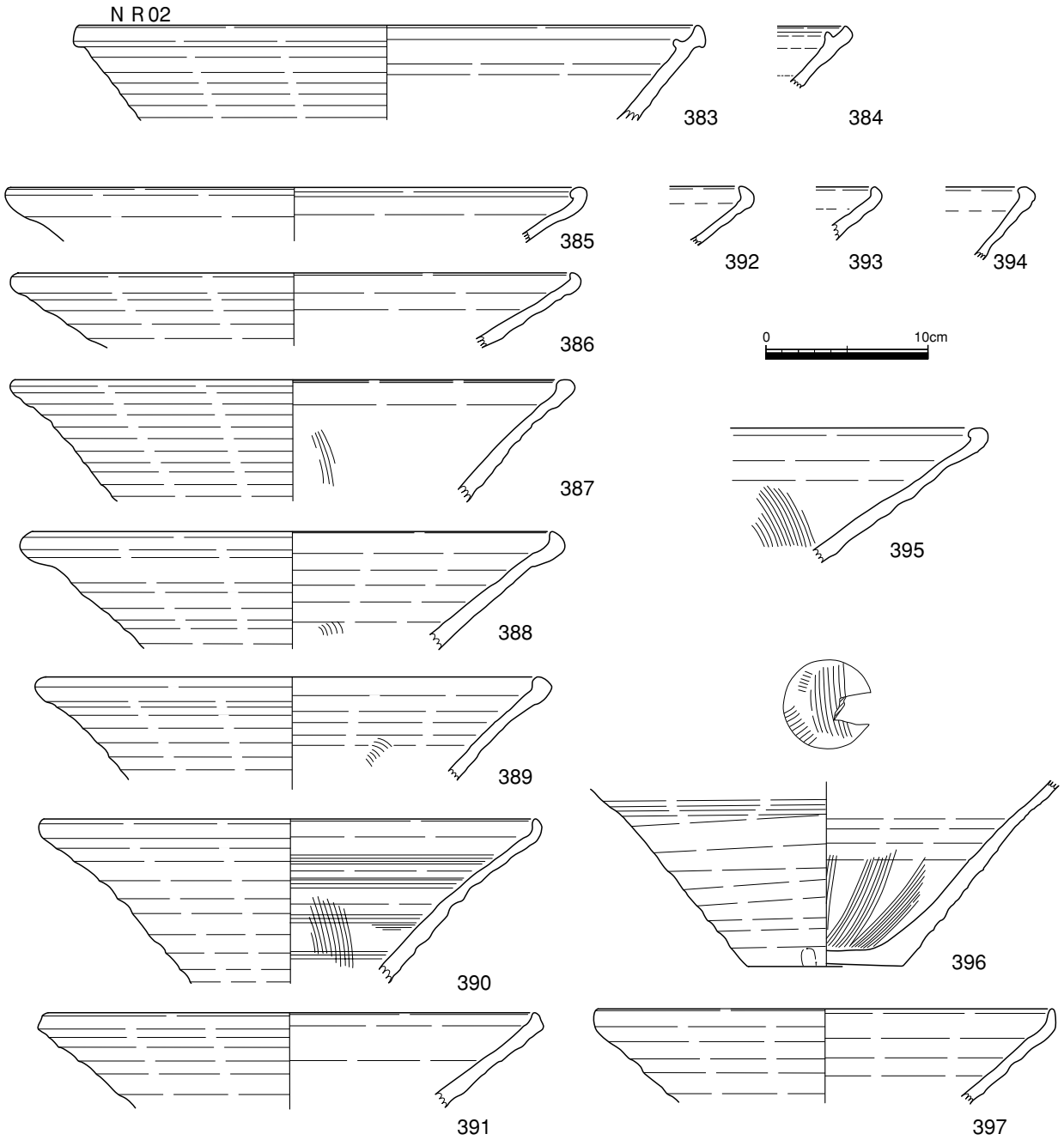


第 38 図　97B 区出土遺物実測図（1）

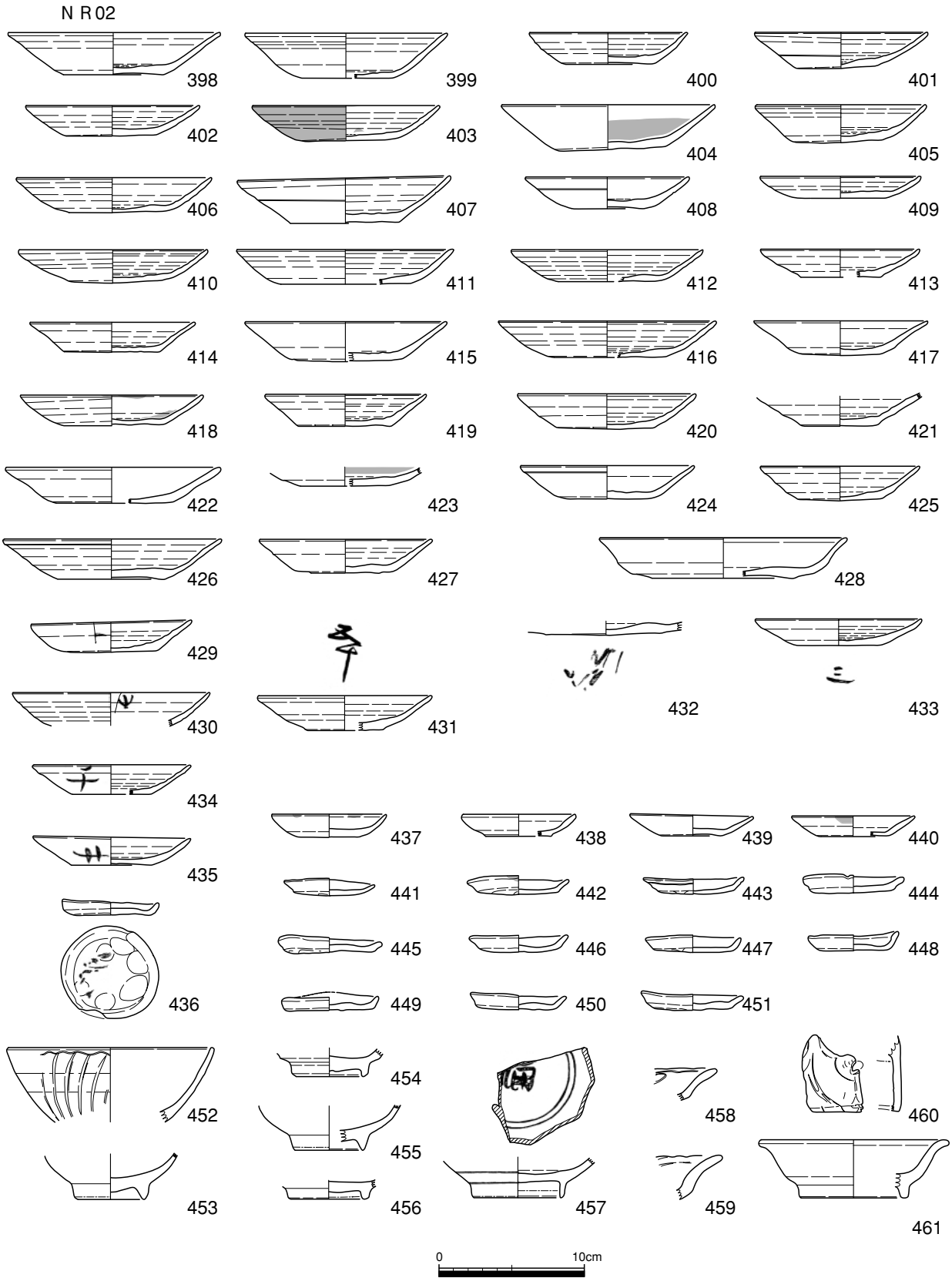
区や94A区と同様な出土傾向を示していることが判明した。1類のロクロ調整土師器皿には墨書が施されたものが数点存在する。これらは体部内面に書かれたもの（430）、底部内面に書かれたもの（431）、底部外面に書かれたもの（432・433）、体部外面に書かれたもの（434・435）など様々な部位に墨書されているが、記述された内容は判読できたもので見ると「五十」、「三」、「十」、「廾」といった数字に限定されているものである。

一方、非ロクロ調整土師器皿には、口径が約6cmの規模を持ち、口縁部を短く立ち上げて横ナデが施されるタイプにほぼ限られる。このうち、436の底部には判読できない墨書らしき痕跡が残存する。

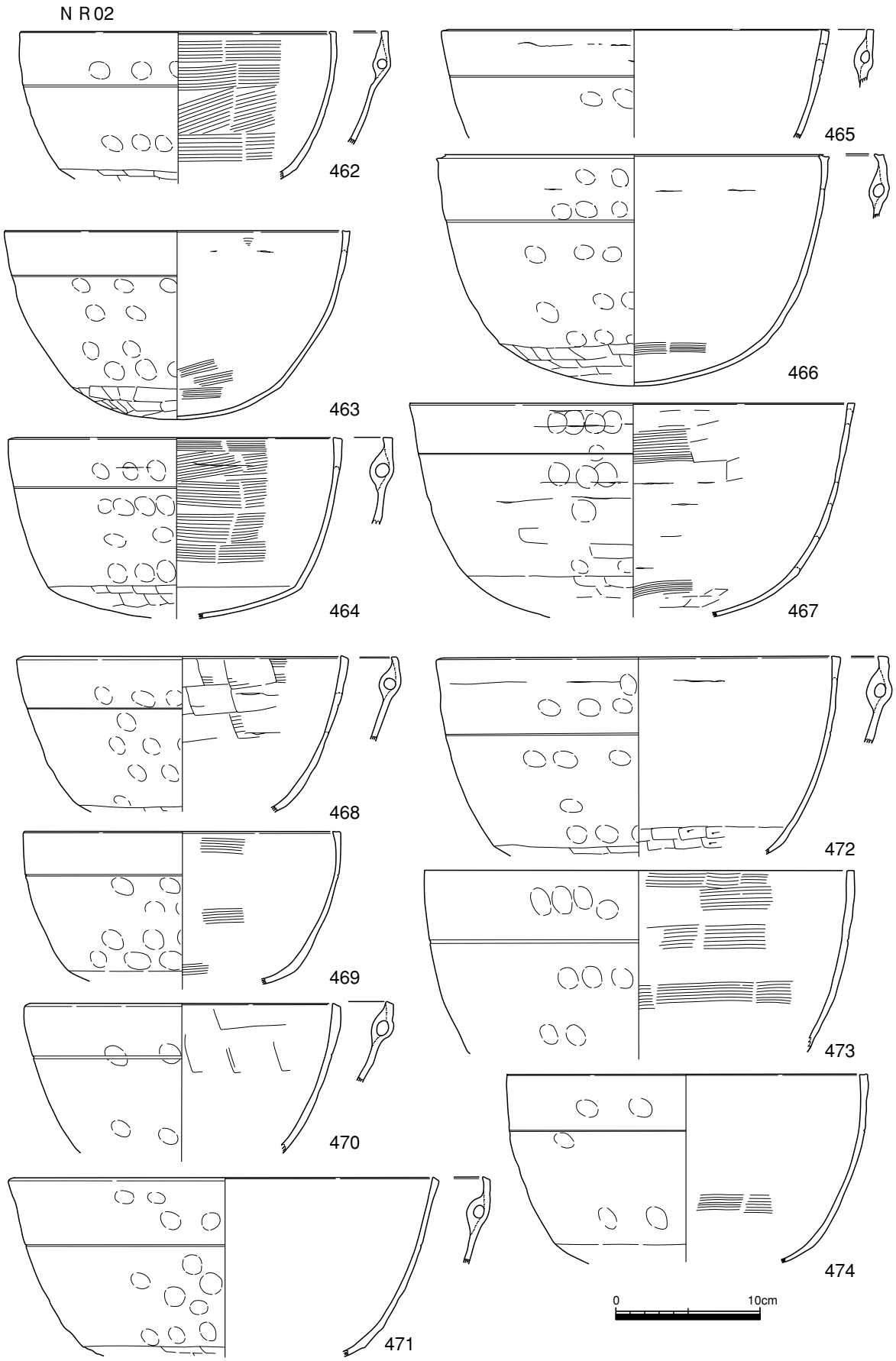
鍋釜類は圧倒的に内耳鍋の出土量が多くなっている。内耳鍋はいわゆる半球形内耳鍋に属するもので、体部から口縁部にかけてほとんど直立しながらやや



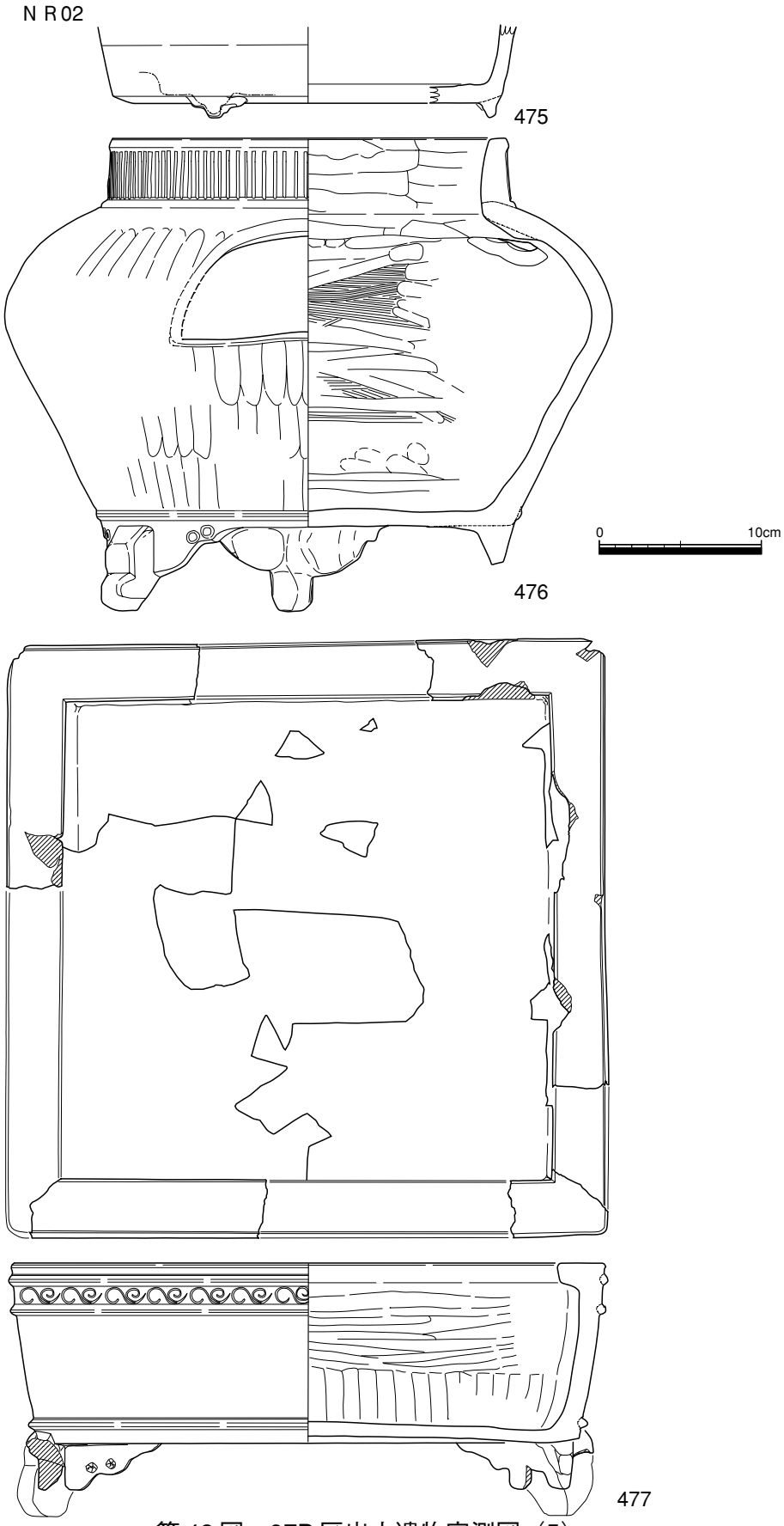
第39図　97B区出土遺物実測図（2）



第 40 図　97B 区出土遺物実測図（3）



第 41 図　97B 区出土遺物実測図（4）



第 42 図　97B 区出土遺物実測図（5）

開くタイプであり、口縁端部から3～5cm程度下位の部分に浅い沈線が巡っている。これらは半球形内耳鍋の中で最も古いタイプとして認識されているものである。内耳は粘土を平らに伸ばして取り付けられている（写真図版15参照）。

（C）**中国産磁器**（第40図452～461）

中国産磁器には青磁と白磁と青花が存在するが、比較的青磁の出土量が多くなる傾向を読取ることができる。青磁には蓮弁紋碗（452）や稜花皿（458・459）、水滴（460）などが認められ、その多くは龍泉窯系の青磁と考えられる。460は人物を形作った水滴の破片と推測されるもので、あるいは新しい時期に属するものかも知れない。白磁には碗（453・455）などがあり、青花には蓮子碗と目される碗（457）などが存在する。

（D）**瓦器**（第42図476・477）

瓦器には風炉（476）と火鉢（477）があり、両者とも表面が赤橙色を呈しているものである。476は3個の猫脚を持ち、半円形の大きな窓と花形を呈する小さな孔が2個穿たれている。表面は縦方向にミガキ調整が施され、内面はヘラ状工具によるケズリ調整や指ナデ調整が施されていた。477は平面形がほぼ正方形となる火鉢である。口縁部は内側に直角に屈曲し、外面上位に連続するスタンプ紋が2条の突帯の間に施されている。

B　NR01出土資料（第43～47図478～641）

NR01からも多くの陶磁器・土器類が出土している。NR02出土遺物と同様に、城下町期Ⅰ期に属する資料が大半を占め、瀬戸美濃窯産陶器、土師器、常滑窯産陶器、中国産磁器、瓦器などの製品が存在する。

（A）**瀬戸美濃窯産陶器**（第43図478～534）

瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗（478～483）、平碗（484）、仏餉具（台付碗：485）、尾張型山茶碗（486）、重圏皿（東濃型山茶碗：487～499）、縁釉皿（500～514）、端反皿（516）、香炉（518～520）、茶入（522・524）、折縁深皿（605）、双耳壺（606）、燭台（607）、口広有耳壺（612）、擂鉢（614～631）などが存在する。このうち485・486・509・516は大窯第1段階に属するものであり、これ以外の製品は古瀬戸後Ⅳ期新段階に位置付けられるものが大半である。大窯第2段階から第4段階の資料はほとんど見られないのに対して、連房式登窯期の製品は数点見い出すことができる。515は登窯第1小期の志野鉄絵丸皿、517は登窯第5～6小期の摺絵皿、523は登窯第8小期の汁次である。

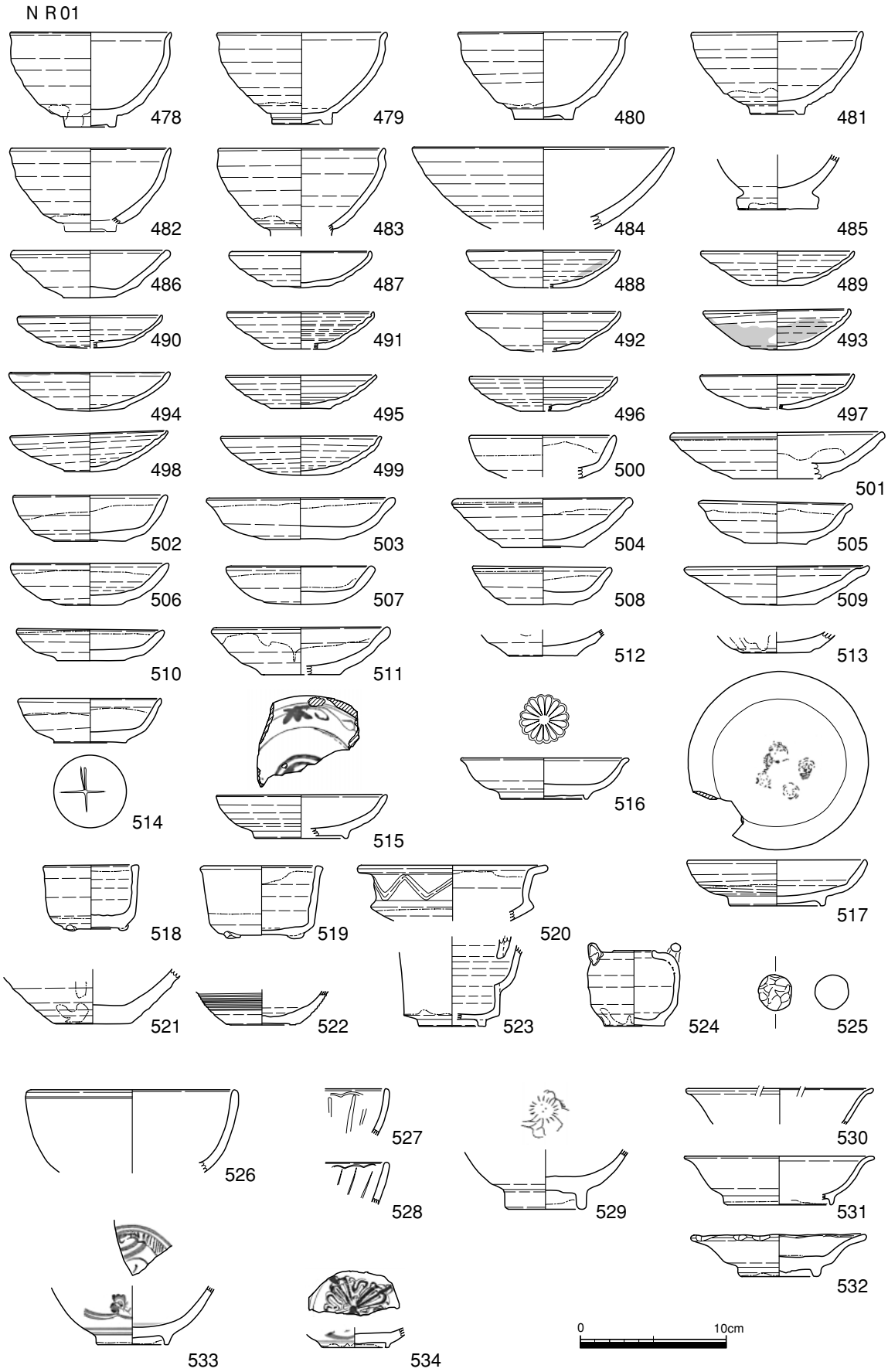
天目茶碗は口縁端部が短くS字状に折り曲げられている。平碗（484）は器壁が厚手のものであり、尾張型山茶碗（486）は高台を持たないもので、大窯第1段階に相当する第12型式に属するものである。

重圏皿（東濃型山茶碗）は口縁部が緩やかに内彎するタイプが多く、493のように内外面の多くの部分にタールが付着しているものがある。縁釉皿は、はさみ皿と分類されるもの（501・509）が含まれている。この他のものはNR02と同様に、体部から口縁部にかけて直立ぎみに開くタイプ（502・503・507など）と、斜に開くタイプ（504～506など）がある。505は内外面がやや煤けている。514は底部外面に焼成後に刻み込まれた「十」の刻書が残存する。端反皿（516）は内面に印花紋が認められ、香炉は筒形のタイプ（518・519）と袴腰形のタイプ（520）が存在する。520は頸部に鋸歯紋状の沈線が巡っている。

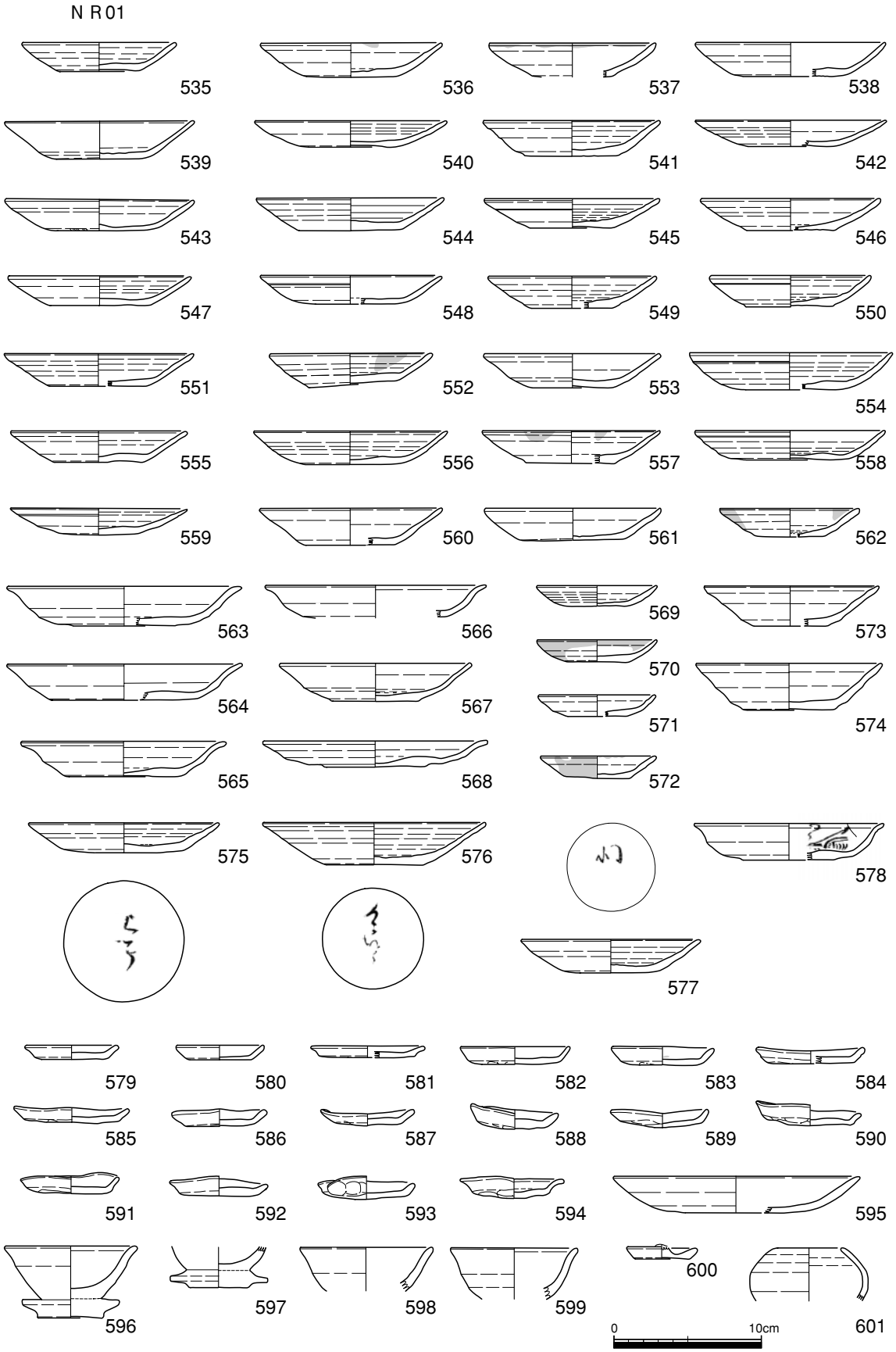
521は擂鉢形小鉢の底部である。603は大窯期に属する腰部がやや丸く張る鉢と推測される。双耳壺（606）は底部がヘラケズリ調整されていた。607は燭台の脚部、608は頸部と肩部がなだらかになっている壺である。擂鉢は口縁部内側に突帯が巡るタイプ（614・615）と口縁端部が内側の斜上方にやや伸びるタイプ（616～631）があり、いずれも古瀬戸後Ⅳ期新段階に属するものである。後者は、詳細に見ると、内側に伸びる口縁端部が丸く玉縁状になるもの（617・629など）、端部がやや長く伸びるもの（621・627など）、端部が短く折れるに過ぎないもの（622・623など）に分類することができる。

（B）**土師器**（第44図535～601・第47図632～641）

城下町期に属する土師器にはロクロ調整皿（535～578）、非ロクロ調整皿（579～595）、仏餉具（596～599）、蓋（600）、無頸壺（601）、内耳鍋（632～640）、釜（641）などが存在する。

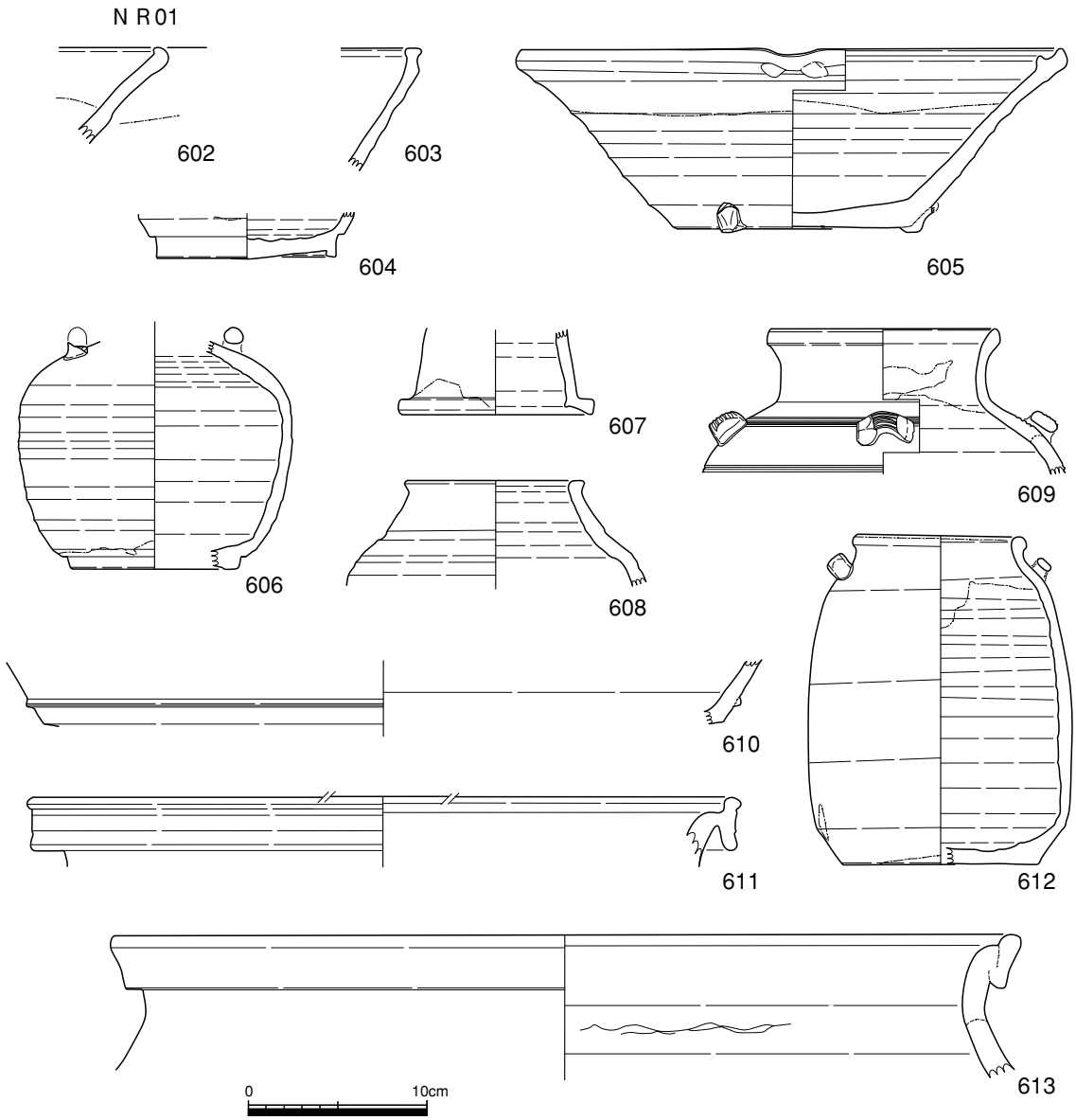


第 43 図　97B 区出土遺物実測図（6）



第 44 図　97B 区出土遺物実測図（7）

ロクロ調整土師器皿には、口径が10～13cmの規模で体部から口縁部が直線的に逆ハの字状に開く1類（539～559・575～577など）と、口径が約15cmの規模で体部の腰が張り口縁部が大きく外反する2類（563～568）と、口径が約8cmの規模で体部から口縁部が直線的に逆ハの字状に開く3類（569～572）、口径が約12cmで器高が他と比べやや高い4類（573・574）、体部は直線的に開くもののやや外折れする5類（560・561など）がある。『清洲城下町遺跡Ⅴ』（鈴木編1995）分類で各類を当てはめてみると、1類がB類に、2類がA類に、3類がF類、5類がE類に各々相当し、この中で1類（B類）が数量的に最も多いものである。しかしNR02に比べると2類（A類）が比較的目立つようになっている。1類のロクロ調整土師器皿には墨書が施されたものが数点存在する。これらは底部内面に書かれたもの（577）、底部外面に書かれたもの（575・576）があり、いずれも記述内容は判読できない。2類（A類）にも内面に墨書が残存するものが存在するが、文字か否かも判定できない状態である。



第45図　97B区出土遺物実測図（8）

一方、非ロクロ調整土師器皿には、口径が約6～7cmの規模を持ち、口縁部を短く立ち上げて横ナデが施されるタイプ（579～594）にほぼ限られる。この中で横ナデが強いタイプ（594など）も見られる。この他に口縁部が直線的に伸びて、口径が約17cmを測るもの（595）も認められる。

596～599は口縁部が外反する碗形の体部を持ち、下部に平底の盤状台が付くものであり、瀬戸美濃窯産陶器大窯第1段階の仏餉具を模倣してできたと推測される。596の盤状の台の上面には回転糸切り痕が残存することから碗部と台部が別々に作られ合わせたものと考えられる。これまで清洲城下町遺跡では見られないタイプの土師器製品である。600は土師器蓋で下面には回転糸切り痕が残る。601は無頸壺でこれまでの類例と比べると器壁が薄いものである。

鍋釜類は、NR02と同様に、内耳鍋の出土量が多くなっている。内耳鍋はいわゆる半球形内耳鍋に属するもので、体部から口縁部にかけてほとんど直立しながらやや開く最も古いタイプであり、口縁端部から3～5cm程度下位の部分に浅い沈線が巡っている。641は口縁部が高く直立する羽付釜であり、鍔の長さがやや長い。

（C）中国産磁器（第43図452～461）

中国産磁器には青磁と白磁と青花が存在する。青磁には無紋碗（526）、蓮弁紋碗（527～529）や稜花皿（532）などが認められ、いずれも龍泉窯系の青磁と考えられる。白磁には端反皿（530・531）などがあり、青花には碗（533）と皿（534）などが存在する。

（D）常滑窯産陶器（第45図611・613）

常滑窯産陶器には甕があり、赤羽中野編年の7型式ぐらいに属する。

C　SD01出土資料（第47図642～644）

中国産白磁皿と青磁碗？と瀬戸窯産陶器四耳壺などが出土した。四耳壺は頸部と肩部がなだらかになり古瀬戸後Ⅲ期に属する。

D　SK14出土資料（第48図645～661）

瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（645）、擂鉢（649～652）や土師器ロクロ調整皿（654～660）、内耳鍋（661）などが存在する。648は中国産青磁の盤で龍泉窯系の製品と考えられる。体部内面にそぎが入っている。

E　SK01出土資料（第48図662）

非ロクロ調整土師器皿などが出土した。横ナデが施される古いタイプのものである。

F　SK02出土資料（第48図663）

瀬戸美濃窯産陶器腰折皿が出土した。古瀬戸後Ⅳ期後半に属するものである。

G　SK06出土資料（第48図664～666）

ロクロ調整土師器皿などが出土した。口径が約12cmのものと8cm弱のものがあり、両者とも体部は短く直線的に開くものである。

H　SK08出土資料（第48図667～669）

瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（667）、ロクロ調整土師器皿（668）、非ロクロ調整土師器皿（669）などが出土した。669は口縁部が緩やかに大きく外反する口径が大きなタイプのものである。

I　SK10出土資料（第48図670）

瀬戸美濃窯産陶器擂鉢などが出土した。

J　SK12出土資料（第48図671）

瀬戸美濃窯産陶器平鉢などが出土した。

K　SK13出土資料（第48図672）

土師器内耳鍋などが出土したが、体部外面に沈線が巡る古いタイプのものである。

L　SK17出土資料（第48図673・674）

瀬戸美濃窯産陶器擂鉢と非ロクロ調整土師器皿などが出土した。

M　SK15出土資料（第48図675）

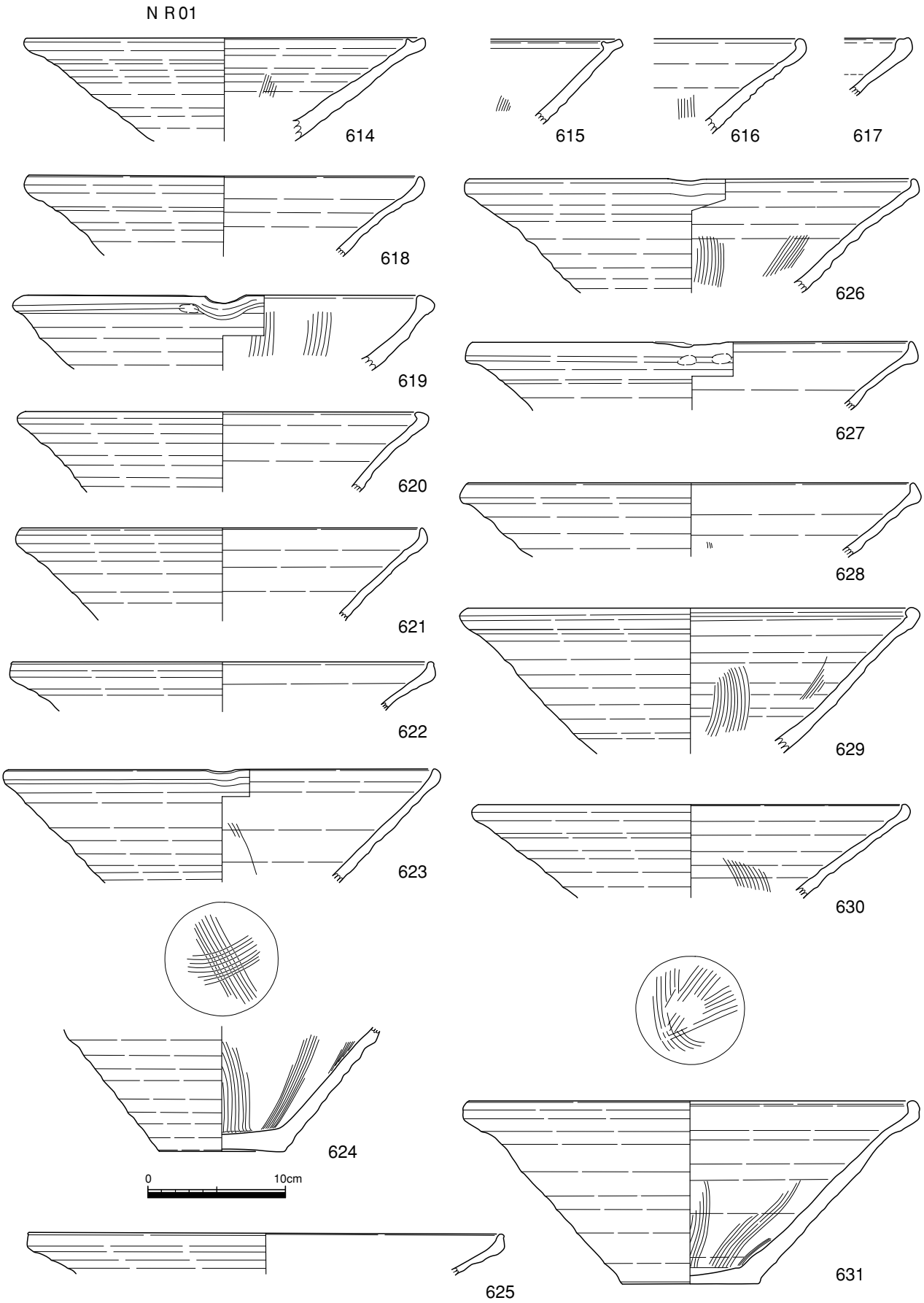
瀬戸美濃窯産陶器耳付小壺などが出土した。

N　SK16出土資料（第48図676～680）

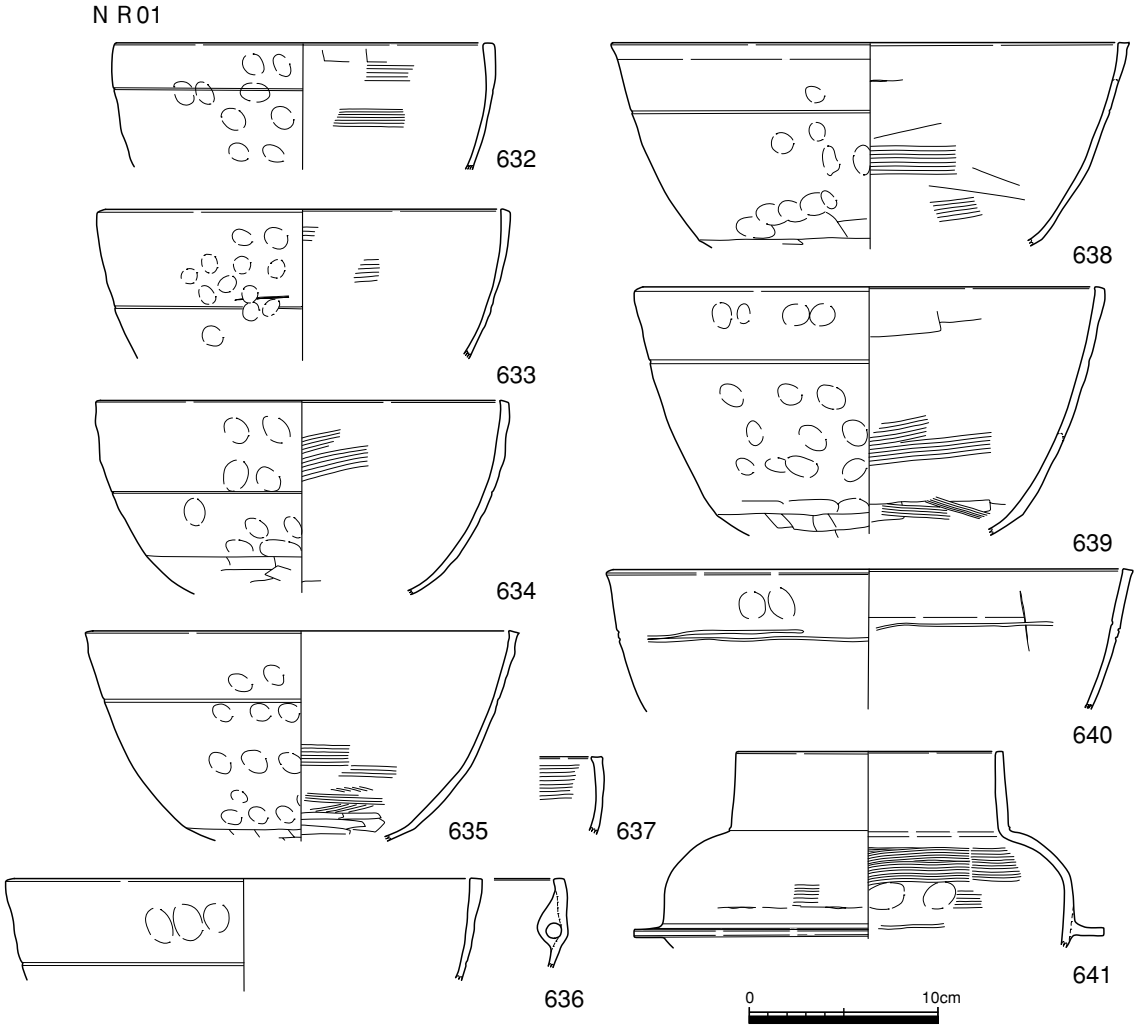
瀬戸美濃窯産陶器仏餉具や東濃型山茶碗や中国産青磁碗などが出土した。肥前窯産磁器碗も含まれることから宿場町期に属する資料と考えられる。

O　NR00出土資料（第49図681～691）

肥前磁器碗（681）などの宿場町期に属する遺物が少なからず出土し新しい遺構と推測されるが、城下町期の遺物の中で抽出したものを紹介する。683と684は瀬戸美濃窯産陶器端反皿、689は広口有耳壺、690は匣鉢である。690は体部が穿孔されている。ま



第 46 図　97B 区出土遺物実測図（9）

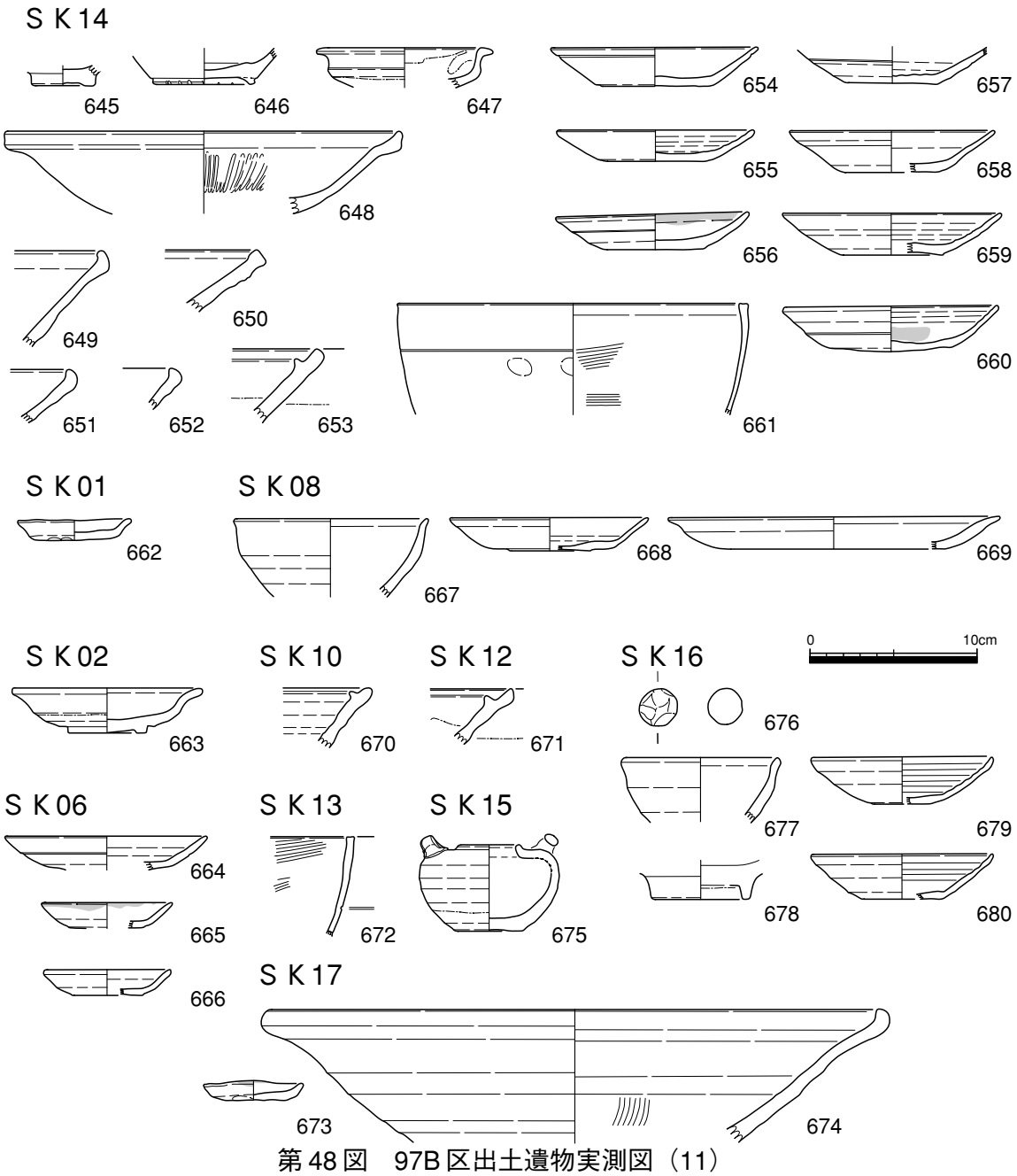


第 47 図　97B 区出土遺物実測図（10）

た、686 は楽系軟質陶器の碗で黒色の鉛釉が施されている、いわゆる黒楽茶碗の口縁部である。

P　NRA 出土資料（第 50 図 692 ～ 714）

若干の古い時期の遺物を含むものの、多くは江戸時代に属するものである。瀬戸美濃窯産陶器には腰錆茶碗（692）、丸碗（693・695）、大皿（707）、半胴甕（708）、こね鉢（709）などがある。美濃窯産陶器には無高台皿（灯明皿：706）、徳利（713）などがある。これらは藤澤良祐編年の登窯第 8 ～ 9 小期に属するものが多い。肥前窯産磁器には丸碗（696）、蓋（700）、小瓶（702）などがある。698 と 699 は尾張型山茶碗で第6型式に属する資料、705 は中国産青花端反皿で城下町期Ⅰ期に多く見られるものである。711 は土師器の無頸壺状の製品である。これまでに本遺跡では類例が無く、機能や時期については明らかにし得ないが、土師器釜の体部のつくりに頚部との接



第 48 図　97B 区出土遺物実測図（11）

合部分で口縁端部の調整を施しており、煮沸に使用された製品の可能性が考えられる。

Q　NRB 出土資料（第 51 図 715 ～ 737）

ここで紹介する資料は NRB の護岸裏込め部分から出土したものが大半を占めている。NRA出土資料と同様に、若干の古い時期の遺物を含むものの、多くは江戸時代に属するものである。江戸時代に属する瀬戸窯産陶器にはせんじ碗（716）、腰錆茶碗（718）、丸碗（715）、丸皿（729・730）、秉燭半（731）、蓋（732・733）などがある。美濃窯産陶器には摺絵丸皿（728）、蓋（733）などがある。これらは登窯第7～9小期に属するものが多い。肥前窯産磁器には丸碗（717）などがある。一方、城下町期に属する資料に着目すると、瀬戸美濃窯産陶器仏餉具（台付碗：720）、縁釉皿（721・722）、重圏皿（723・724）、擂鉢（737）、常滑窯産陶器甕（736）などがある。瀬戸美濃窯産陶器は古瀬戸後Ⅳ期の新段階に属するものが多い。

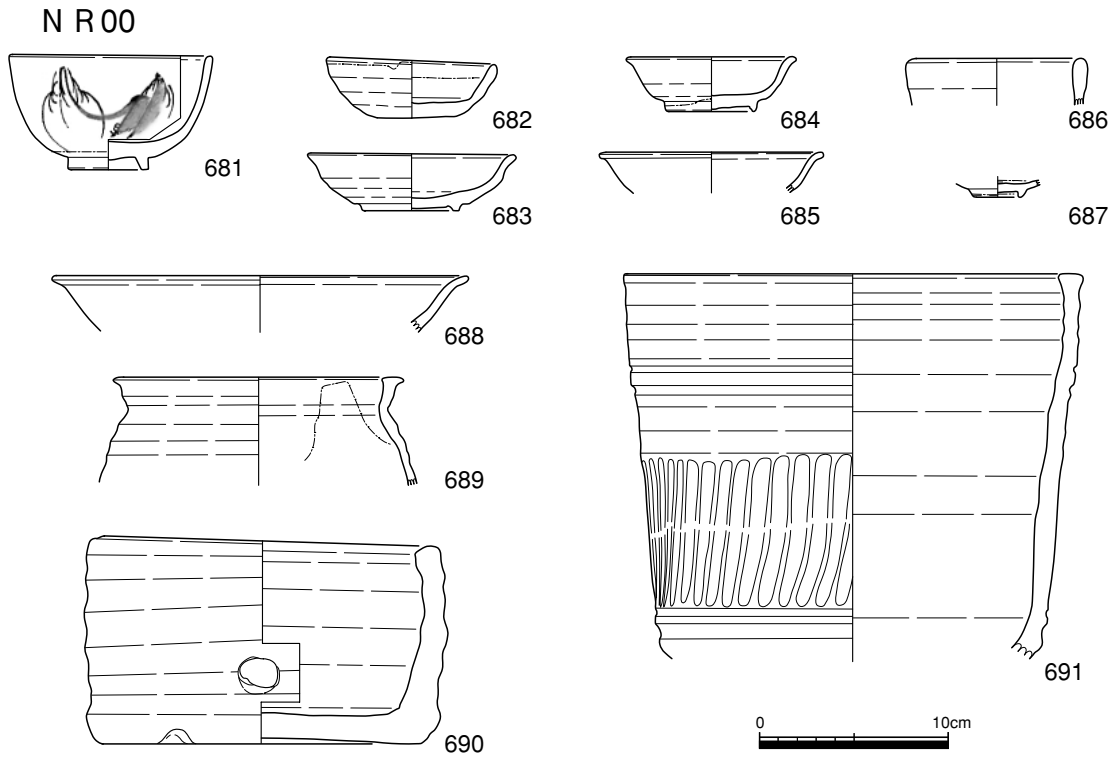
R　SE01 出土資料（第 51 図 739 ～ 744）

瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗（738）、重圏皿（739）、志野丸皿（740）、土師器ロクロ調整皿（741 ～ 743）、常滑窯産陶器赤物甕（744）などがある。740 はこの 97B 区では数少ない大窯第 4 段階後半に属するものである。

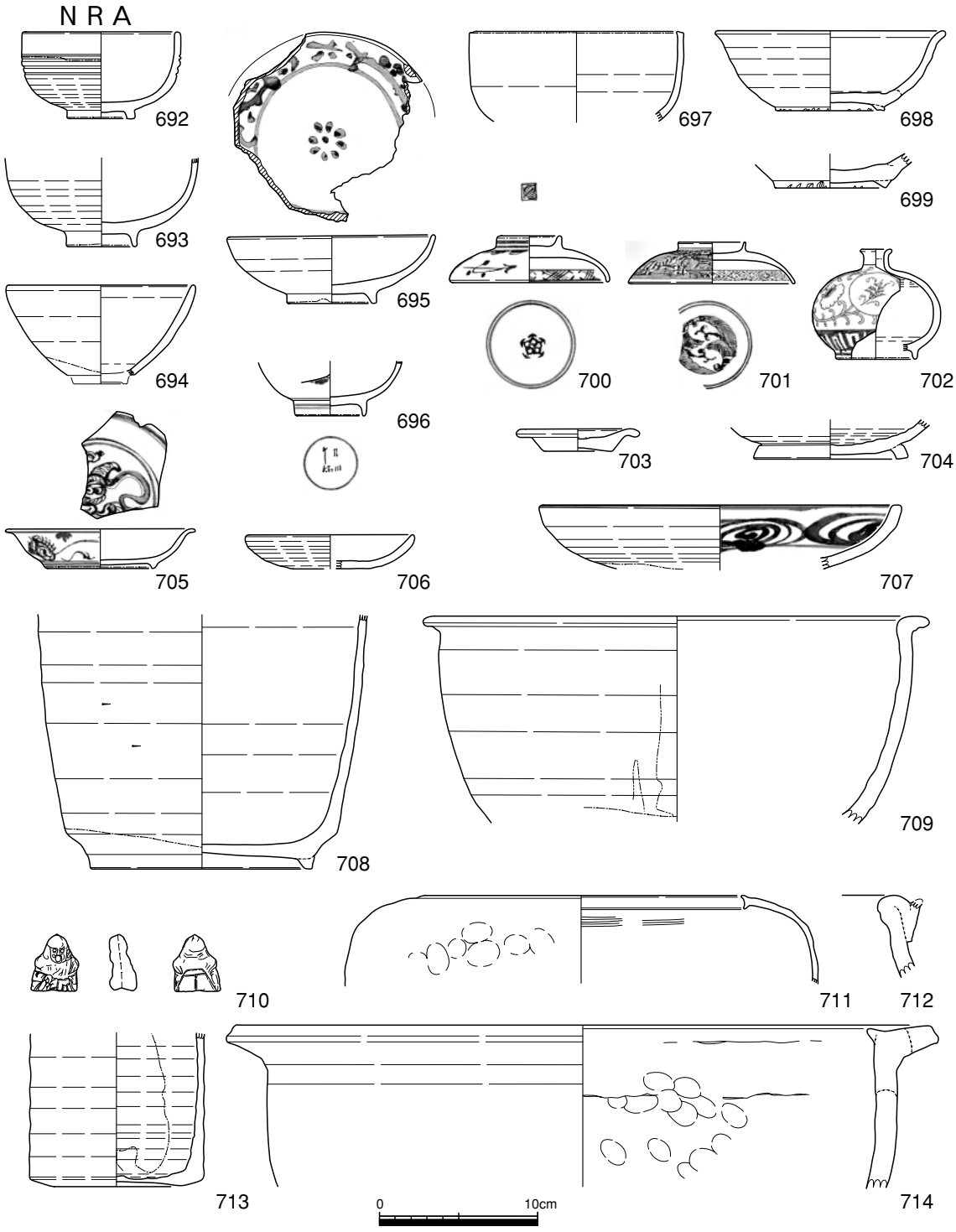
6　97C 区出土陶磁器・土器類

（1）概要

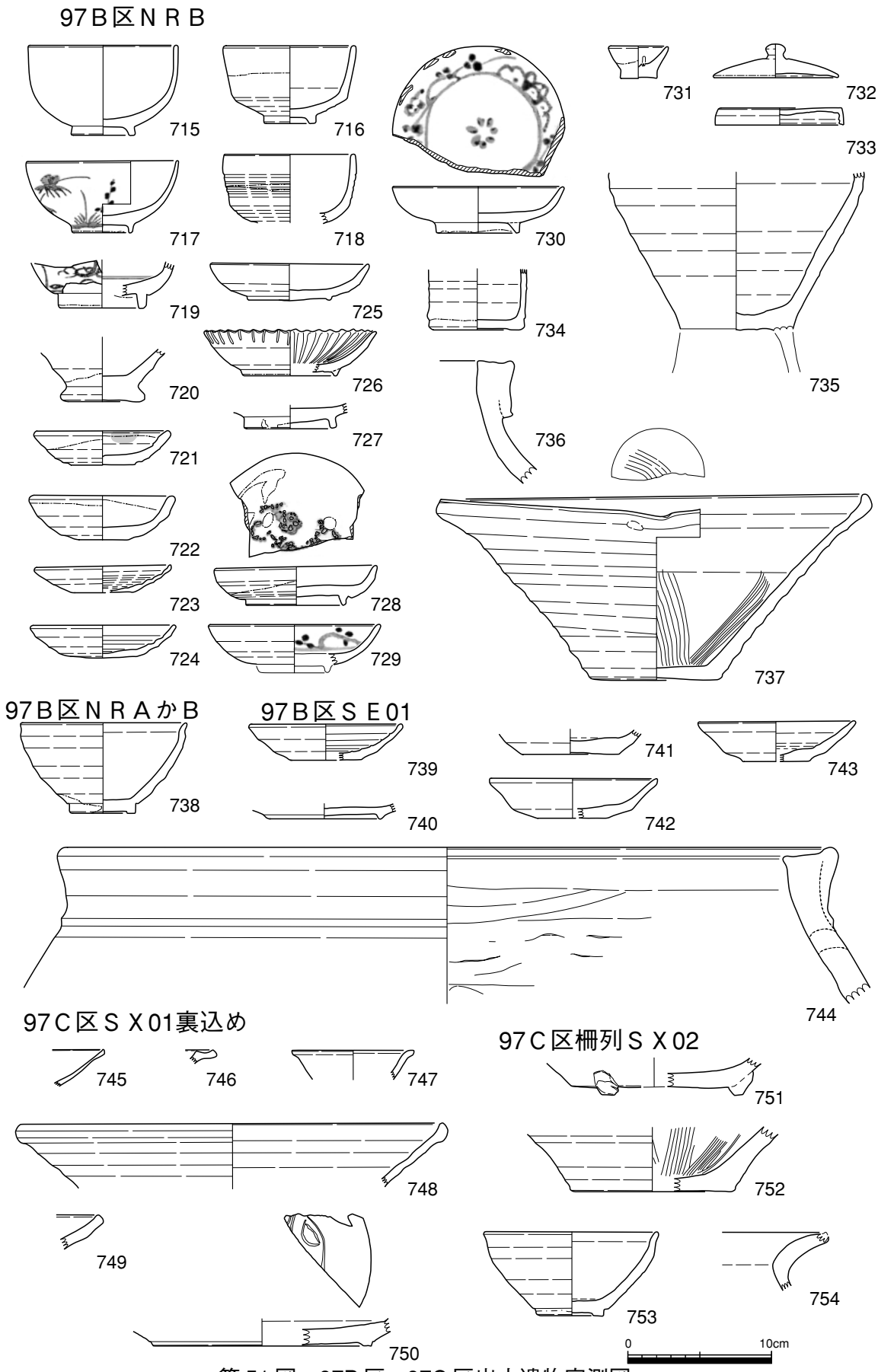
97C 区は 96 区で確認された石垣 SW01 の取り外し調査とその下層部分の調査を実施した調査区である。遺物は石垣 SW01 の裏込め部分の礫層から出土したものや下層で確認された杭列付近から出土したものなどがある。基本的には、既に報告を記述した 96 区の遺構外出土資料と類似した出土状況であると推測される。遺物としては杭などの木製品と瓦類が多く、陶磁器・土器類は他の調査区に比べてそれほど多くはない。ここでは、遺構一括出土資料を紹介するに止めておきたい。



第 49 図　97B 区出土遺物実測図（12）



第 50 図　97B 区出土遺物実測図（13）



第 51 図　97B 区・97C 区出土遺物実測図

（２）遺構一括出土資料

A　SW01 裏込め出土遺物（第 51 図 745 ～ 750）

ここで紹介する資料は、石垣 SW01 を取り外した際に石垣石の裏側に堆積した裏込めの栗石に混入していた遺物であり、石垣を構築した際に入り込んだ資料と考えることができるものである。

東濃型山茶碗（745）や瀬戸美濃窯産陶器折縁皿（746）、擂鉢（748）、大皿（750）、中国産白磁端反皿（747）などが存在する。この中で、最も新しい時期に属するものは 746 と 750 と考えられる。

B　SX02 付近出土遺物（第 51 図 751 ～ 754）

柵列 SX02 の付近から出土した遺物には瀬戸美濃窯産陶器平鉢（751）、擂鉢（752）、天目茶碗（753）、常滑窯産陶器甕（754）などがある。瀬戸美濃窯産陶器は古瀬戸後Ⅳ期に属するものと考えられ、754 は城下町期以前の時期のものである。

	95A区	95B区	96区	97B区	97C区	99A区	99B区
古代（須恵器～灰釉陶器）			356	140	99	21	15
山茶碗類（碗、皿、鉢等）			604	237	247	145	72
瀬戸美濃窯産陶器（城下町期まで）			989	1308	280	3000	4181
〃（天目茶碗）			83	151	39	669	883
〃（天目茶碗以外の碗）			29	25	13	127	161
〃（重圏皿以外の皿）			113	260	48	663	1141
〃（重圏皿）			—	145	15	211	206
〃（鉢類）			85	61	48	100	181
〃（擂鉢）			238	417	71	689	934
〃（大形製品）			425	210	43	250	211
〃（小形製品）			1	19	3	20	18
土師器	2025	1540	2613	6919	544	8787	5391
〃（ロクロ皿）	377	696	2060	6259	501	6751	2967
〃（手づくね皿）	50	43	404	102	31	234	209
〃（鍋類）	1424	696	137	834	10	1709	2339
〃（鍋類のうち内耳鍋）	18	26	14	108	4	153	67
〃（鍋類のうち羽付鍋）	0	1	2	0	0	13	1
〃（鍋類のうち釜）	68	45	6	6	2	53	113
〃（鍋類のうち焙烙）	83	21	3	5	0	183	224
粘土塊	13	238	6	69	0	306	196
瓦（城下町期）	306	64	68561	70	4066	388	288
常滑窯産陶器			644	317	80	224	314
中国産陶磁器			46	105	15	129	235
その他の生産地の陶磁器			21	20	1	134	119
宿場町期全体			1023	633	282	508	437
不明			19	18	10	12	23
合計	2344	1842	74882	9836	5624	13654	11271

第１表　調査区別焼物類出土量一覧表

7　99A区出土陶磁器・土器類

（1）概要

99A区から出土した陶磁器と土器類は接合前破片数で13266点である。その内訳は城下町期に属する資料が大多数を占めるものの、そればかりではなく城下町期以前や宿場町期の遺物も一定量認められる。この99A区では数多くの土坑や溝が重なりあって検出されており、確認された遺構は屋敷の区画溝や建物跡の基礎構造であったものと考えられている。こうした状況から見て、城下町期の段階で居住域（おそらく町屋か）であったと推測される。遺物はこうした遺構から出土したものが多いが、遺物の整理を行ってみると遺構をまたがって破片が接合する事例が相当量存在することが判明した。これは度重なって遺構が構築される間に遺物を包含する古い遺構が撹乱されるために生じたものと推測される。この結果、本来その遺物がどの遺構に所属しどの資料と共伴するのか不明確な状態となってしまっている。このような状態の中で遺構一括資料を紹介する方法で報告を行うと、遺構一括資料がどの程度有効なまとまりであるかといった疑問が生じ、報告に際しては同じ遺物を何度も紹介する煩雑さが障害となる。このため99A区という調査区全体を一つのまとまりと認識して記述を進めていき、具体的には産地材質別に報告する方法を採用した。

（2）資料の紹介

A　瀬戸美濃窯産陶器（第52～63図756～1109）

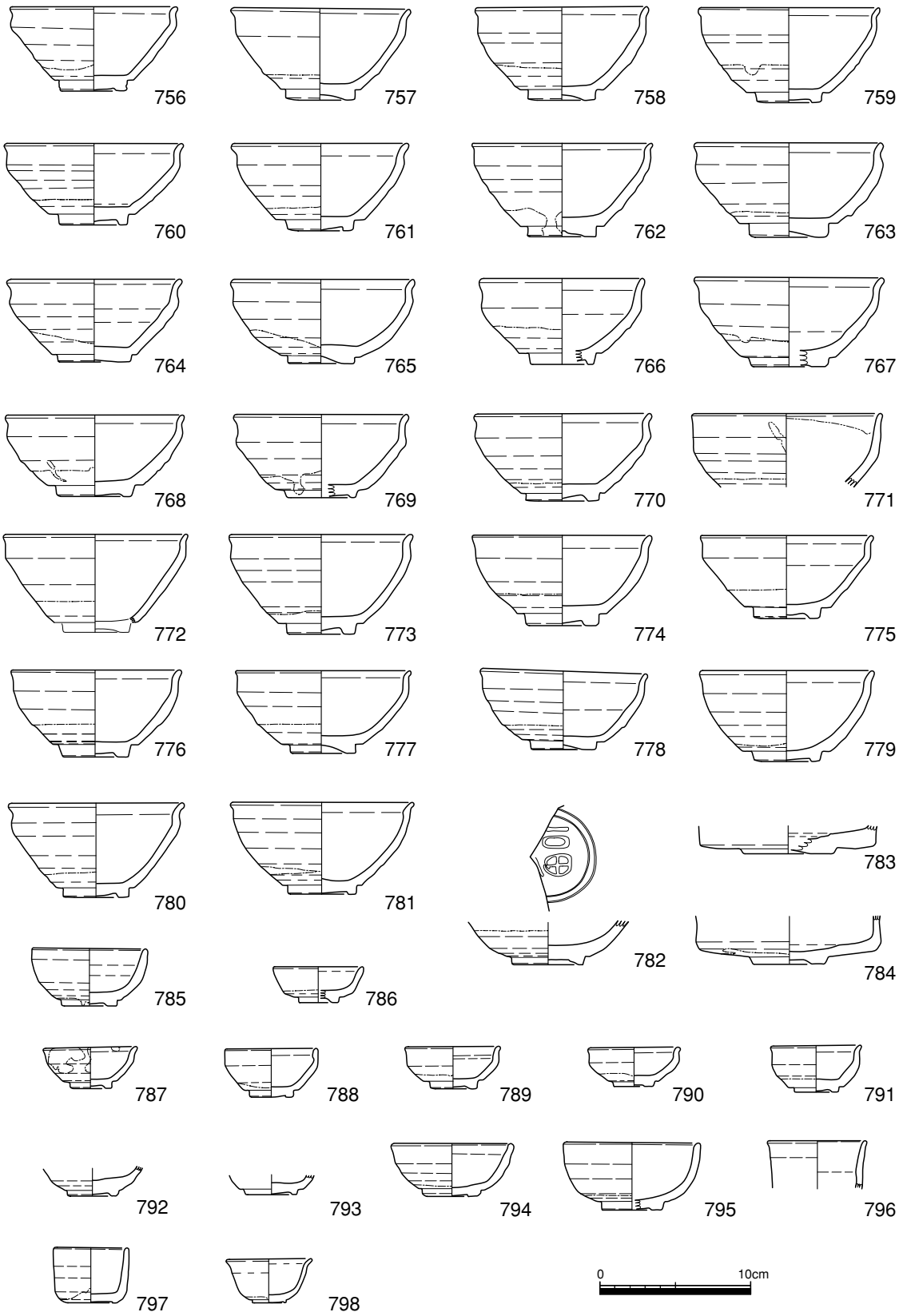
99A区から出土した瀬戸美濃窯産陶器は全部で3000点（接合前破片数）が出土した。これらは碗類、皿類、鉢類、擂鉢、大形製品、小形製品などに大別ができる。このうち、碗類には天目茶碗、小天目茶碗、丸碗、沓茶碗、小碗、小杯などがある。皿類には縁釉皿、端反皿、丸皿、折縁皿、稜皿、内禿皿、菊皿、志野丸皿、重圏皿など多種多様な製品が存在する。鉢類には浅鉢、深鉢、向付、大皿、盤などがあり、大形製品には建水、水指、緒桶、匣鉢、双耳壺、徳利、花瓶、甕などが、小形製品には茶入や水注などがある。

主要な器種別の出土量は接合前破片数で、天目茶碗が669点（瀬戸美濃窯産陶器全体の中で約22%：以下同様）、その他の碗類が127点（約4%）、重圏皿が211点（約7%）、重圏皿を除く皿類が663点（約22%）、鉢類が100点（約3%）、擂鉢が689点（約23%）、大形製品が250点（約8%）、小形製品が20点（約1%）となっている。従来の清須城下町の中の瀬戸美濃窯産陶器の出土傾向と同様に、天目茶碗と小皿類と擂鉢の主要3器種が多い傾向を読み取ることができる。ここでは器種別に遺物の紹介を進める。

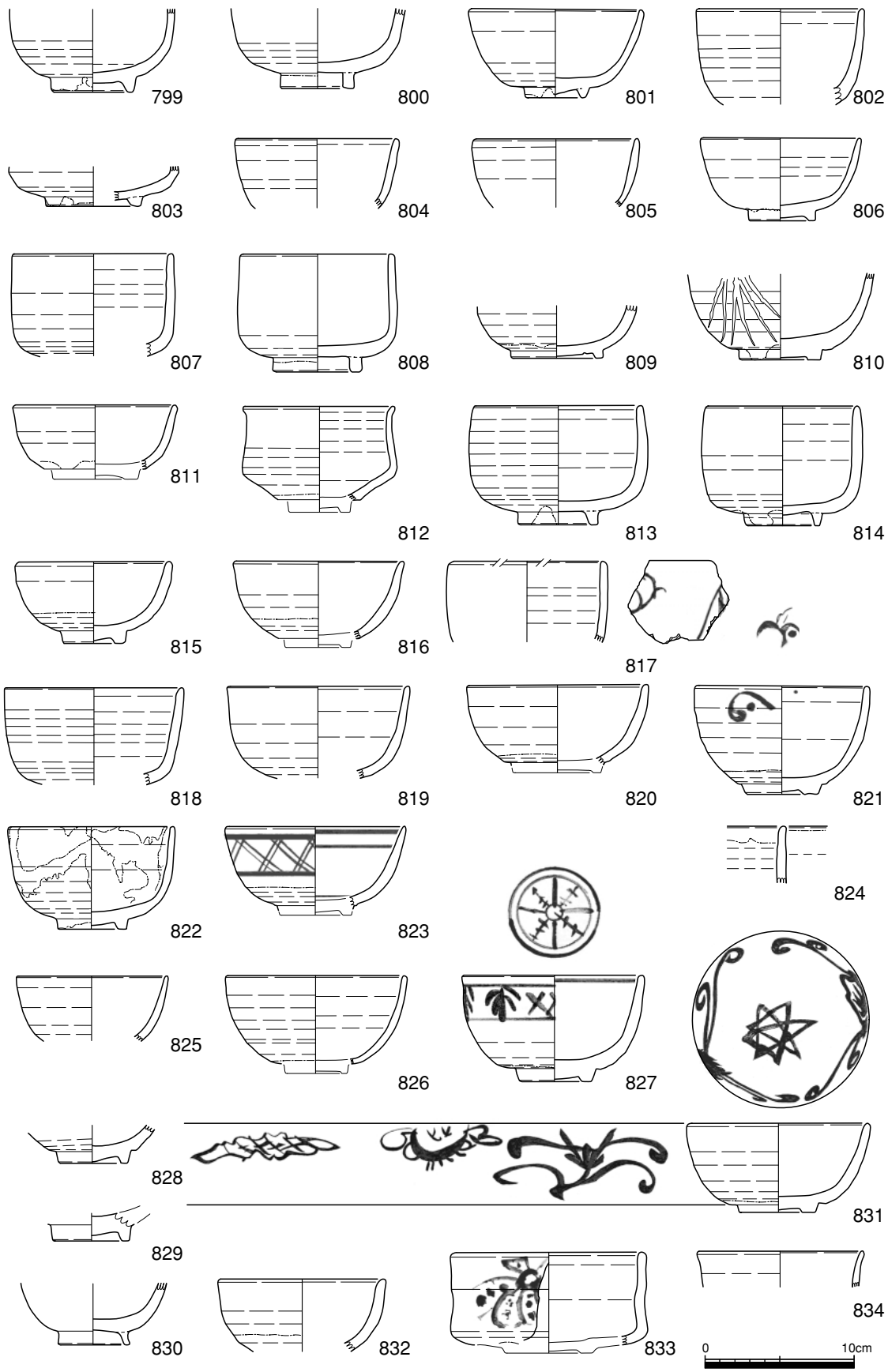
（A）天目茶碗（第52図756～781）

天目茶碗には様々な形状のものが存在する。1類は高台が輪高台で紫色の錆釉が施されるもの（781）、2類は体部が直線的に逆ハの字状に開き下半部に茶色の錆釉が施されるもの（772）、3類は輪高台で体部が直線的に開き口縁部が直立し短く折れるものでやや小振りなもの（756・760・761・775）、4類は高台中央部が緩やかに窪む内反高台で比較的器高が高くなるもの（757・758・762）、5類は輪高台で体部がやや丸みを帯びて口縁部に至り端部が短くS字状に屈曲するもの（759・773・774）、6類は輪高台で口縁部のくびれが緩やかでやや高く全体的に小振りなもの（766・767・776）、7類は6類と同様な口縁部形態で内反高台となるもの（777・778）、8類は輪高台で口縁部のくびれの屈曲が比較的明瞭でやや高く全体的に小振りなもの（768～770）、9類は口縁部のくびれが不明瞭なもの（771）、10類は輪高台で口縁部のくびれがやや強く器高が比較的高いもの（779・780）である。771は外面は鉄釉を、内面は長石釉を施した掛け分けの天目茶碗となり、外面は灰を流し掛けしたような状態となっているものである。

上記のような分類を藤澤良祐の大窯編年に当てはめるとおおよそ1類は大窯第1段階、2類は大窯第2段階、3類～5類は大窯第3段階、6類～9類は大窯第4段階、10類は連房式登窯第1小期に各々対応すると考えられる。この他にも古瀬戸後Ⅳ期新段階に



第 52 図　99A 区出土遺物実測図（1）



第 53 図　99A 区出土遺物実測図（2）

位置付けられるものや、登窯第2小期以降に属するものもいくつかはみられる。ただし、出土量からみると、最も多いのは大窯第3段階の180点（瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗全体の中で約27%）と大窯第4段階の107点（約16%）であり、大窯第3段階か第4段階か特定できない274点を含めると全体の約84%を占めている。このように検討すると、天目茶碗の時期的な主体は大窯第3段階から第4段階までの期間にあるといえよう。

（B）丸碗（第52・53図782・799～834）

半筒碗や筒形碗も含めて丸碗としてここでは一括して報告する。丸碗も様々な形状が存在するが、大窯前半以前に属するものはほとんど無く、大窯第3段階以降のものが多い。

1類は体部が緩やかに立ち上がり腰が張らない付高台のタイプで、鉄釉が施されたもの（799）、灰釉が施されたもの（800・801）がある。2類は腰がやや屈曲するように立ち上がる付高台のもの（803・806）、3類は体部が緩やかに立ち上がり腰が張らない削り出し高台のもの（809・810・815・816・819・820・821・823・827・831）で、後者は長石釉が施されたものが大半を占める。810は鼠志野と呼ばれる製品で、外面は薄く鉄釉を掛けた後に葉紋状に紋様を掻き落として長石釉を施す製品である。また、821と827と831は内外面に鉄絵が施されたものである。4類は腰がしっかりと張って口縁部に至るまで直立して伸びるもの（807・814・817・818）で、筒形碗と称されるものである。5類は腰がしっかりと張って口縁部がやや内傾するもの（808・803・833）で、これも筒形碗に分類されよう。ただし、833は体部の形状からみて沓茶碗と呼ばれるものであろう。6類は削り出し高台で腰が緩やかに彎曲しながら口縁部に至りやや逆ハの字状に開くタイプで器壁が比較的薄いもの（821・822・825・826）である。822は内外面とも鉄釉に灰釉が流し掛けられているもので、焼成は堅緻である。6類は登窯第1～2小期に属するものである。

（C）その他の碗類（第53図783～798）

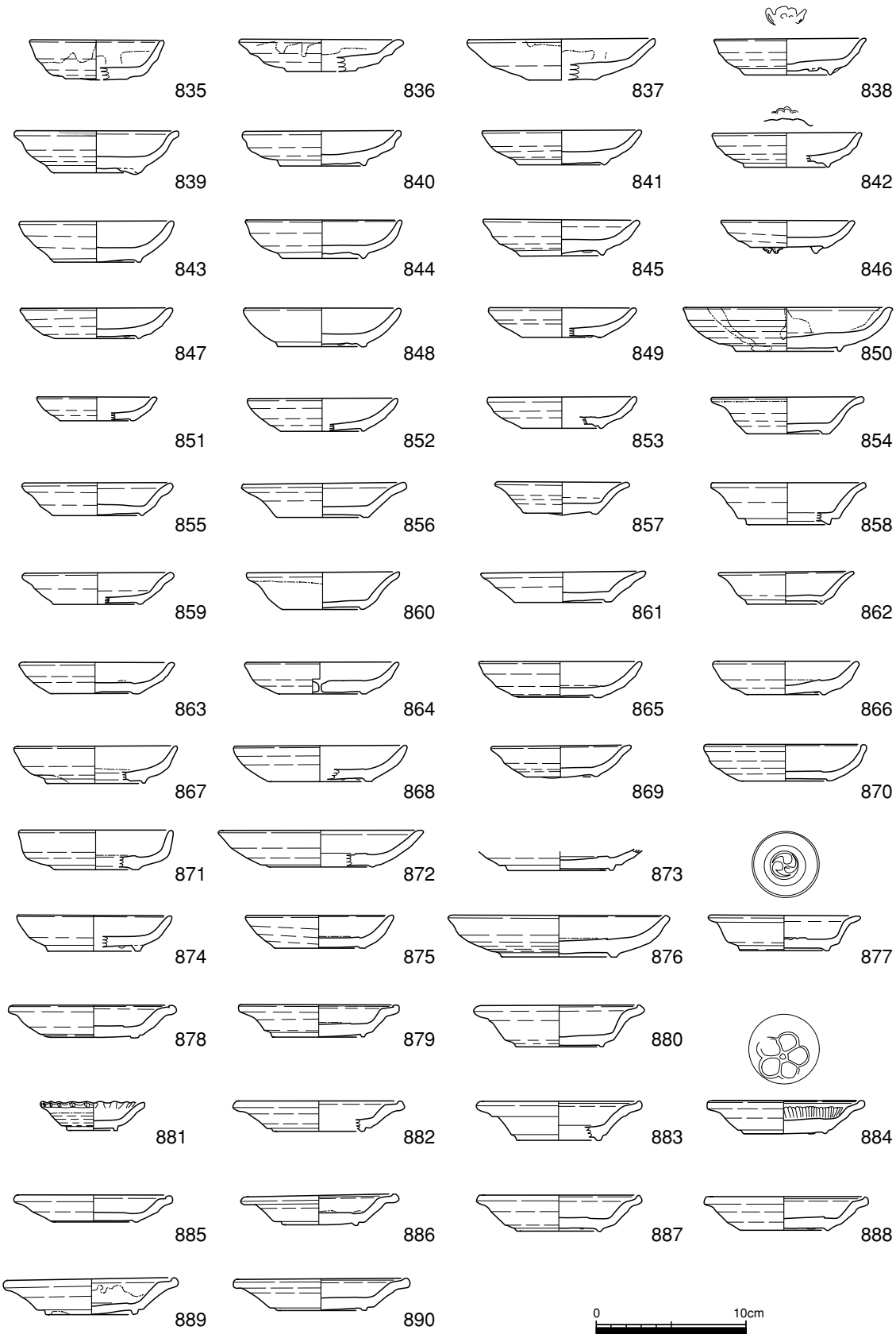
天目茶碗と丸碗に属さないものをここで一括して報告する。783と784は腰部が明瞭に屈曲する瀬戸黒沓茶碗で、削り出された高台は非常に低く底部内面（見込み）に茶溜り（一段下がった浅い窪み）が存在する。いわゆる引き出し黒と呼ばれる漆黒色の釉調を呈しており、底部外面は露胎となっている。ロクロ成形の製品である。787～791は小天目茶碗である。787と788は大窯第3段階に、789～791は大窯第4段階に属し、787は鉄釉に灰釉が流し掛けられている。また、790の内面には赤褐色の滓状の付着物が残存しており、銅製品を生産する際に使用された「とりべ」に転用されたものと理解されよう。785・786・792～795は丸碗形の小碗で、削り出し高台を持ち口縁部がやや開くものである。796は口縁部がやや外反する小杯のような製品と推察される。797と798は小杯で、797は底部が碁笥底状、798は口縁部が大きく外反するものである。両者とも大窯第3段階に位置付けられる。

（D）皿類（重圏皿を除く：第54・55図835～910）

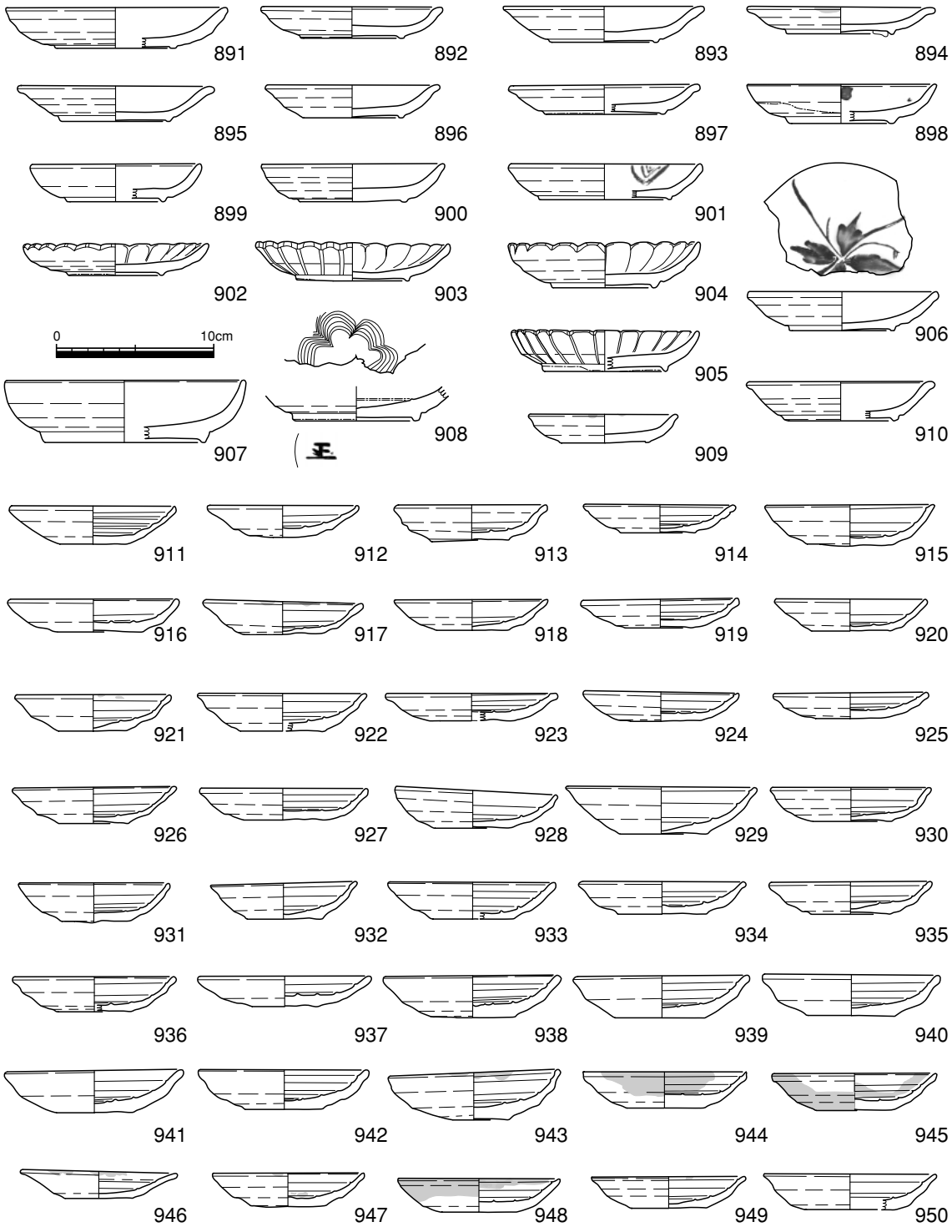
ここでは、重圏皿を除く施釉された皿類を取り扱うこととする。具体的には、縁釉皿（835～837）、端反皿（838・839）、丸皿（840～853）、稜皿（854～861）、反り皿（862・877）、内禿丸皿（863～871・875・876）、輪禿皿（872・873）、折縁内禿皿（878・879・885～890）、折縁皿（882～884）、志野丸皿（891～901・906）、志野菊皿（902～904）、志野中皿（907）などが存在する。

縁釉皿には口縁部が比較的直立ぎみになるもの（835）とやや外反するもの（836・837）がある。端反皿には見込みに印花を持つもの（838）と印花を持たないもの（839）がある。丸皿には底部に輪トチンの痕跡が残存するもの（843～851など）と円錐ピンが残存するもの（846）があり、後者は大窯第4段階後半に属する資料である。その他の丸皿も釉薬は光沢を持たない乳白色や黄白色の発色をした灰釉が施されたものが多く、大窯第3段階から第4段階に属するものである。850は口径が約14cmを測るやや大きめの鉄釉丸皿で、内外面に灰釉が流し掛けられている。

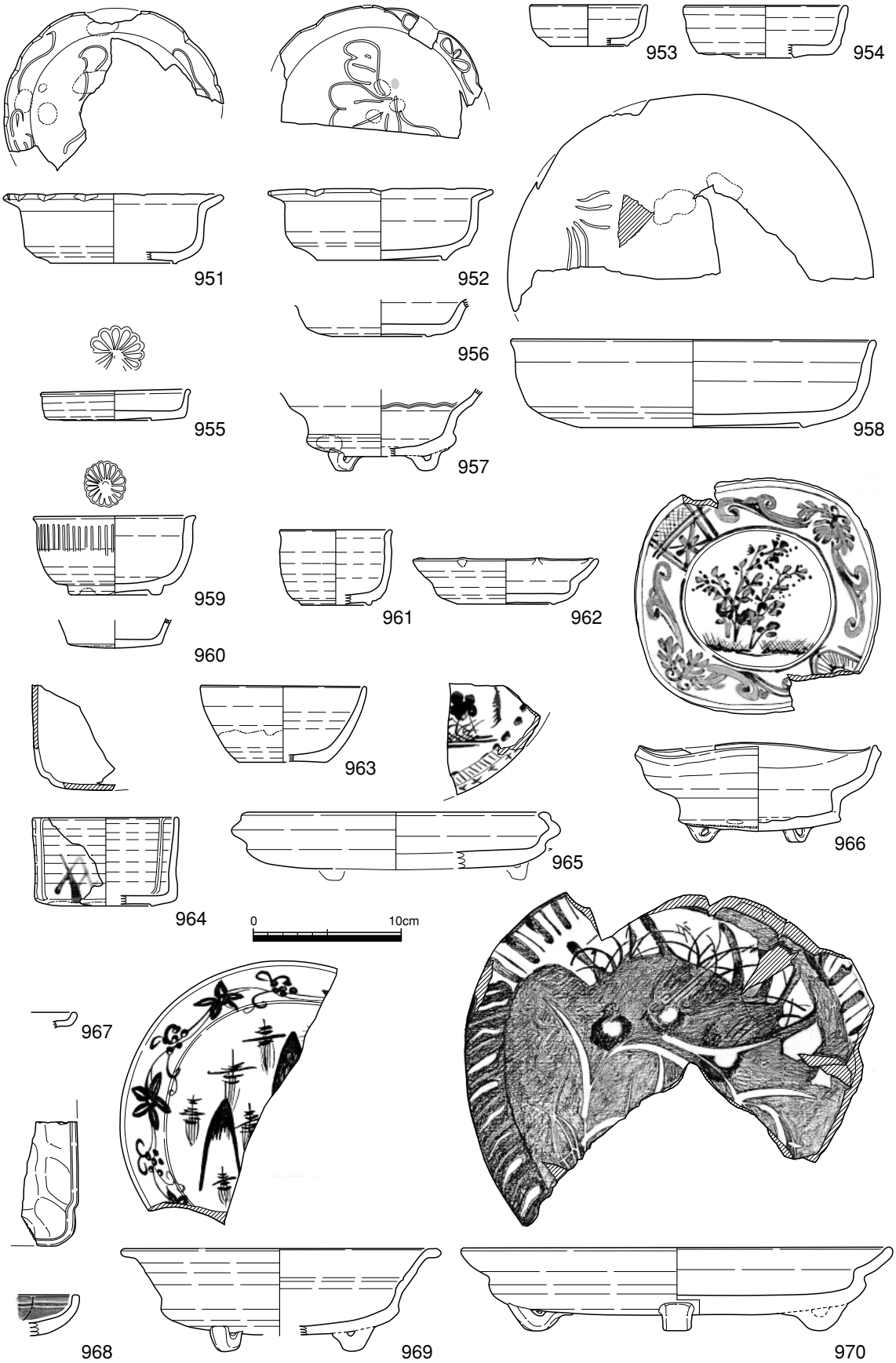
稜皿は底部が碁笥底状になり口縁部にかけて体部が大きく外反するものが多く（854～857・859～861）、858のような腰部に明瞭な稜線を持つ腰折皿



第 54 図　99A 区出土遺物実測図（3）



第 55 図　99A 区出土遺物実測図（4）



第 56 図　99A 区出土遺物実測図（5）

に近い形状のものがある。860は体部から底部にかけての外面に鉄釉を掛けずに錆釉を塗布したものである。内禿丸皿には底部内面の露胎部に明瞭な段差を有するもの（863・866など）と段差を全く持たない通常の丸皿の形状をしたもの（867など）に分けることができる。864は底部中央が焼成後に穿孔されたものである。また、871は体部から口縁部にかけて直立する内禿皿としては珍しいタイプのものである。輪禿皿（872・873）は露胎部分が段差状に盛り上がった形状を呈しており、器高が比較的浅いものである。これらは大窯第4段階に位置付けられる。折縁内禿皿は器高が高く折り曲げられた口縁端部が断面三角形状に尖るタイプと（887・888）と、器高がやや低く口縁端部が丸くなっているもの（878・879・885・886・889・890）に分けることができる。前者は大窯第3段階後半に、後者は大窯第4段階前半に各々位置付けられよう。折縁皿には体部内面にそぎが入らないもの（882・883）と入るもの（884）が存在する。884は底部内面（見込み）に梅紋の印花が押印されており、大窯第3段階後半に属する資料である。

志野丸皿は大半は底部に円錐ピンの付着した痕跡が残存するもので、鉄絵が施されたもの（901・906）と施されていないものがある。また、器壁特に底部の器壁が薄いもの（891～889など）と厚いもの（900）にも分けることができる。前者は長石釉の発色が赤みを帯びており、大窯第4段階後半に位置付けられるだろう。志野菊皿は内面が花弁状に成形されたもの（902～904）で、903が登窯第1小期に属すると考えられる。908は底部しか遺存しない資料であるが、内面底部（見込み）に花紋が描かれ底部に「玉」と墨書されたものである。

（Ｅ）**重圏皿**（第55図911～950）

重圏皿は大きく、無釉で黄白色や灰白色などの胎土を持ち圏線が不明瞭で螺旋状となる1類（911など）と、無釉で焼き締められた黒灰色などの胎土を持ち同心円の圏線が明瞭な2類（912～938など）と、焼き締められずに錆釉を掛けて作られ同心円の圏線が明瞭な3類（939～942）に分けることができる。数量的には2類が最も多く1類は少ない傾向を読み取ることができる。

2類の重圏皿はさらに、器高が高く体部から口縁部にかけて直線的に開く2a類（915・929・933など）と、器高がやや高く体部中央が丸みを帯び次に口縁部に向かって外反する2b類（921・922など）と、器高がやや低く体部中位がやや丸みを帯びて口縁部に向かって直線的に開く2c類（933～935など）と、器高が非常に低く底部から口縁部にかけて緩やかに開く2d類に分けることが可能である。ここでは具体的な根拠を全く示すことができないが、他の皿類がおおよそ同形式内で見ると新しいものほど器高が低くなる傾向を読み取ることができるとするならば、2a類→2b類→2c類→2d類という変遷過程を推測することが可能かも知れない。

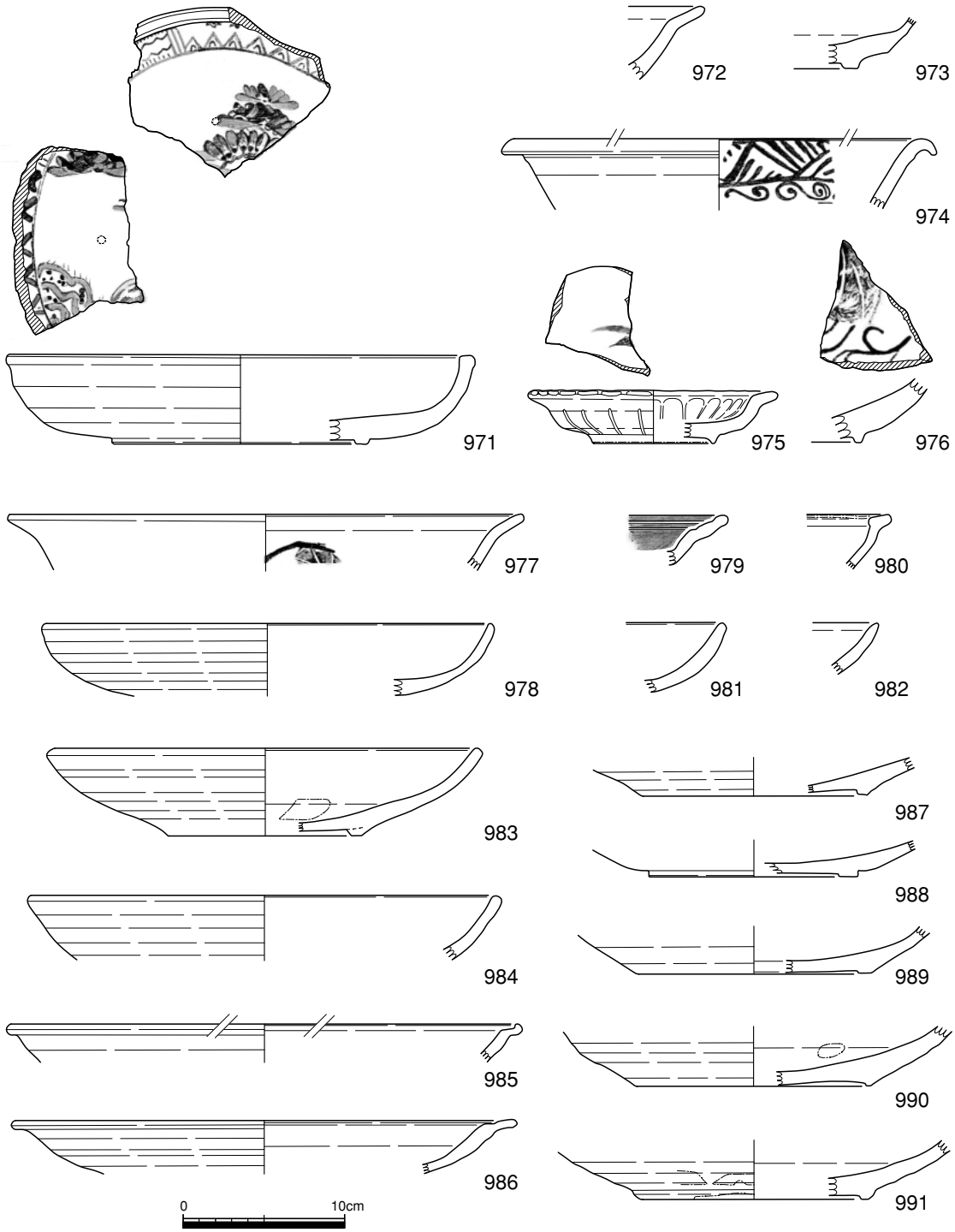
この重圏皿は他の皿類に比べ高い確率でタールが付着するものが多い。タールが付着する状態は、口縁部の一部分に1カ所ないし数カ所認められるタイプ（921など）と内外面のほぼ全体に付着するタイプ（944・945・948など）に分けることができる。前者は灯明に用いられた痕跡であると考えられるが、後者については別の使用痕跡の可能性を考えた方がよいかも知れない。

（Ｆ）**向付・盤類**（第56図951～970）

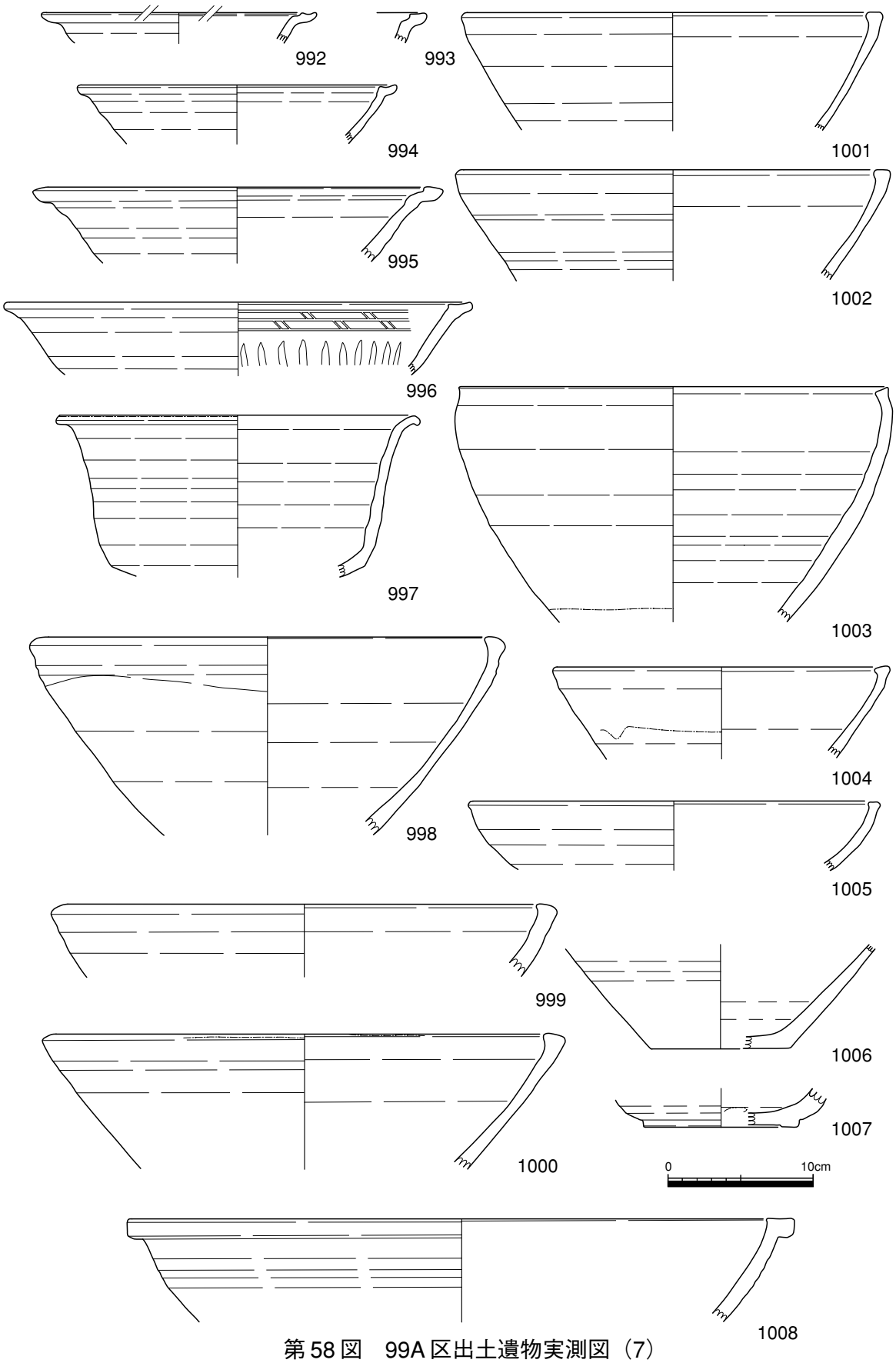
向付・盤類は黄瀬戸釉や長石釉が施された製品が多く認められ、大窯第4段階から登窯第1小期に属する資料が大半を占める。

951～959は黄瀬戸向付である。951と952は直立する体部に外側に折れ曲がる口縁部を持つ黄瀬戸向付で、内面に刻紋が描かれ緑釉のタンパンが施されている。底部は碁笥状に作られている。956も同様の製品と推測される。953～955は口縁部が直立する黄瀬戸向付で、955は内面に菊紋が印花されている。957は袴腰風に作られた体部に半環足が付くもの、958は体部が直立する大形の盤状の製品、959は筒形碗の形状を持ち見込み部に印花を持つ黄瀬戸向付である。

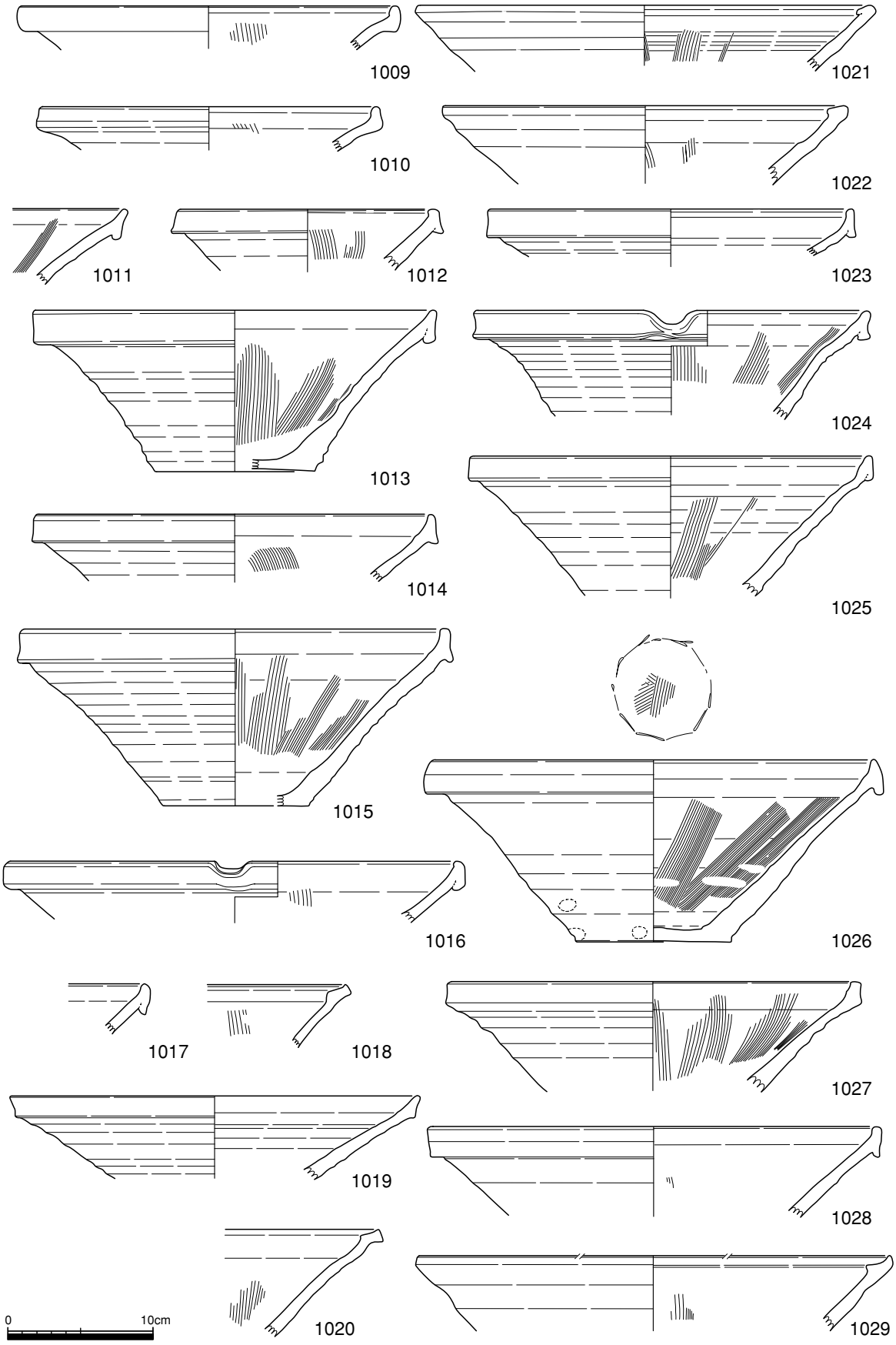
963は高台を持たない碗形の形状を呈した小鉢状製品である。体部外面上半に鉄釉が施され、外面下半部は錆釉が塗布されているが、内面には全く釉薬が無く露胎となっている。底部外面はヘラケズリ調整が認められ、輪トチン痕が残存する。胎土や釉薬



第 57 図　99A 区出土遺物実測図（6）



第 58 図　99A 区出土遺物実測図（7）



第 59 図　99A 区出土遺物実測図（8）

の状態から見て大窯製品と推測されるが、類例を見ないものである。

961・962・964～980は志野の向付あるいは盤である。964は体部が直立する四方向付で底部は碁笥底となっている。965は口縁端部が著しく内側に傾いたもの、966は内面に草花紋が鉄絵で描かれたものである。967は褐色の胎土に比較的透明に発色した長石釉が施されたいわゆる鳴海織部と呼ばれるものである。969は釉薬が茶褐色の発色をして鉄絵が描かれたいわゆる美濃唐津と呼ばれる製品である。970は鍔状の口縁部を持つ盤で半環足が4個付いている。長石釉に鉄絵が施されており、部分的に鉄絵が掻き落とされているものである。968と979は鼠志野向付である。

（G）大皿（第57図971～991）

大皿には志野に属する製品と焼締陶器または錆釉が施されたものの二者が存在する。

このうち前者は、前項目の盤と区分が難しいものがある。971は削り出し高台を持ち内面に鉄絵が施された志野大皿である。976と977は焼成が良好な盤または大皿で釉薬が透明に近い雰囲気となっている。登窯第1小期に属する資料である。

978・981・983・987などは焼締陶器で釉薬は施されないもので、大窯第3段階前半に位置付けられるものである。高台が残存するものは碁笥底で、口縁部が残存するものは直線的に開くタイプとなっている。一方、982・984～986・988～991は鉄釉または錆釉が施された大皿で、口縁部の形状からさらに口縁部が直線的に開くタイプ（982・984）と折縁状となるタイプ（985・986）に細分が可能である。底部も碁笥底状となるもの（987・989・990）と削り出し輪高台となるもの（988・991）に分けることができる。

（H）鉢（第58図992～1008）

体部から口縁部が逆ハの字状に開く大形製品を鉢として一括する。これらは口縁部の形状から、折縁になるもの（992～996）、口縁端部が斜上方に摘み上がるもの（998～1000）、口縁部上端に面を有するもの（1001～1005）、口縁部が外側に屈曲するもの（1008）に分類することができる。992～995は折縁深皿で古瀬戸中期から後期に属する製品である。996は内面にそぎが入る鉄釉の鉢で大窯第3か4段階に位置付けられよう。

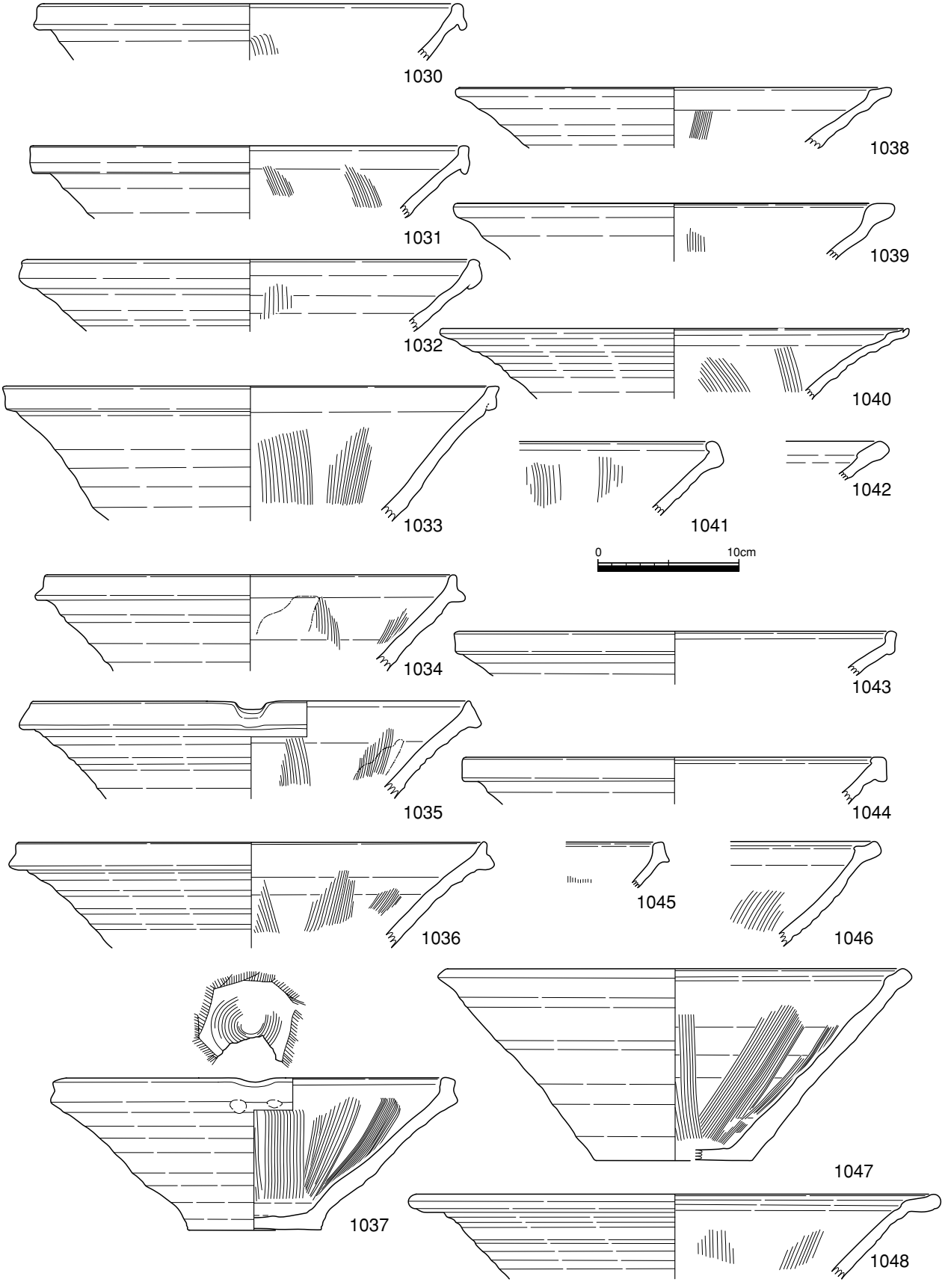
（Ⅰ）擂鉢（第59～61図1009～1057）

擂鉢は大きく口縁端部を外側に折り返して縁帯を形成するⅠ類と、口縁端部を内側に折り返すものあるいは外折するⅡ類に大別できる。

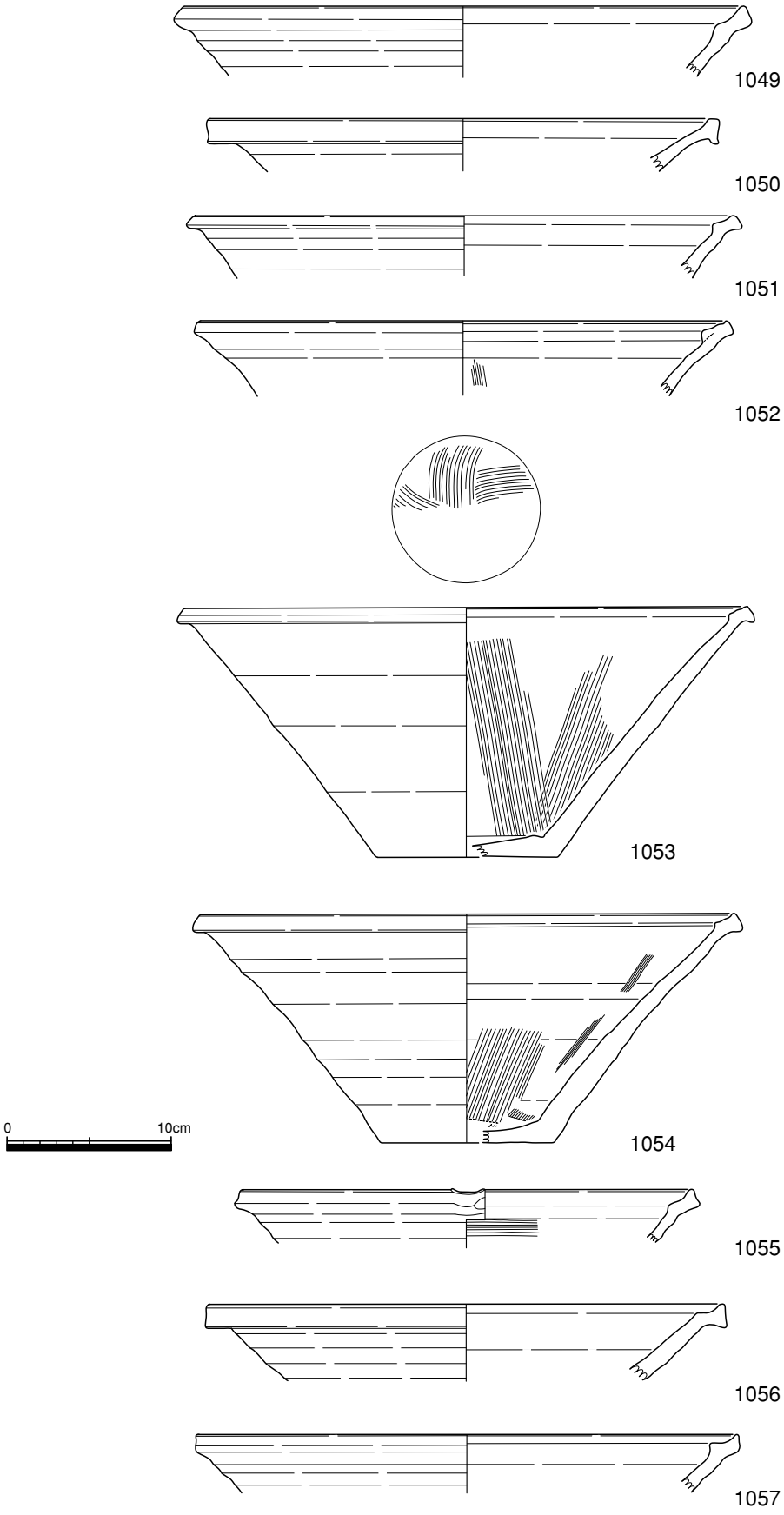
Ⅰ類はさらに7類に細分が可能である。1類は口縁端部が内側の斜上方にやや伸びるタイプ（1009・1010）である。2類は垂れ下がった縁帯の下端部が断面三角形状あるいは丸まっているもの（1011～1016など）である。3類は垂れ下がった縁帯の下端部が下方に伸びるもの（1030・1031など）である。4類は垂れ下がった縁帯の下端部が体部に向かってナデつけられたもの（1032・1033など）である。5類は垂れ下がった縁帯の下端部が断面三角形状となり横方向に伸びるもの（1034～1037など）である。6類は垂れ下がった縁帯の上端部が上方に伸びるもの（1043など）である。7類は垂れ下がった縁帯の上端部に面を有するもの（1044・1045・1050など）である。

Ⅱ類はさらに6類に細分が可能である。8類は内側に折り返された口縁端部の上面が内側に傾くタイプ（1021・1022）である。9類は内側に折り返された口縁端部の上面がほぼ水平で器壁が肥厚するタイプ（1039など）である。10類は内側に折り返された口縁端部の上面がわずかに内側に傾くが肥厚しないタイプ（1038・1040など）で、見た目では有段で折り曲げたような形状となっている。11類は外側に折り曲げられた口縁部が断面方形になるタイプ（1046・1047など）である。12類は外側に折り曲げられた口縁部の上面や端面や下面が横ナデされて窪むタイプ（1051～1054など）である。13類は外側に折り曲げられた口縁端部面が幅広く広がりT字状に近い形となるタイプ（1056・1057）である。

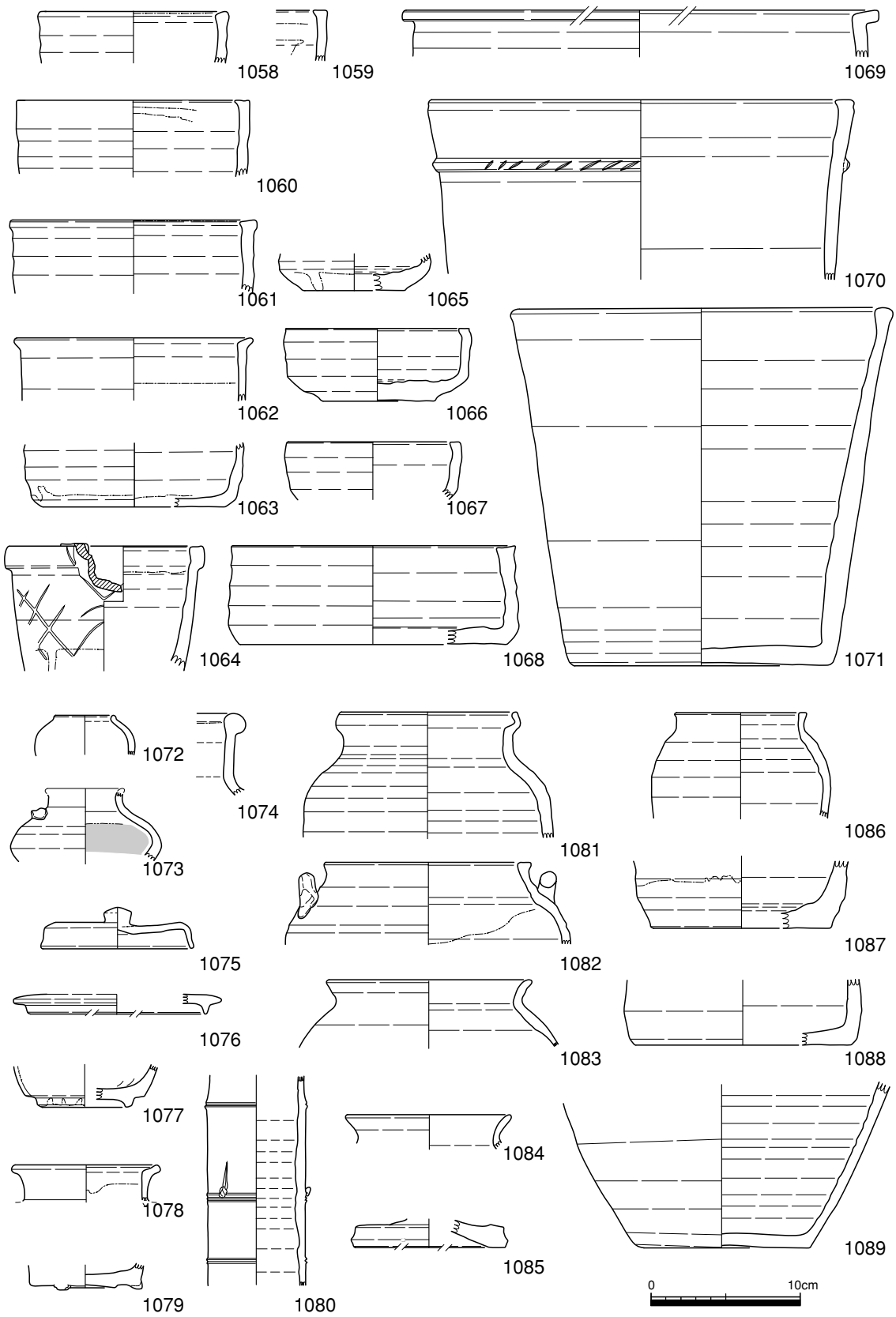
これらの分類と藤澤良祐の編年との対応関係はおおよそ次の通りである。1類は古瀬戸後Ⅳ期新段階、8類は大窯第2段階後半、2類と9類は大窯第3段階前半、3類と4類と10類は大窯第3段階後半、5類～7類と11類は大窯第4段階前半、12類は大窯第4段



第 60 図　99A 区出土遺物実測図（9）



第 61 図　99A 区出土遺物実測図（10）



第 62 図　99A 区出土遺物実測図（11）

階後半、13類は連房式登窯第1小期に属するものである。

（J）筒形容器類（第62図1058～1071）

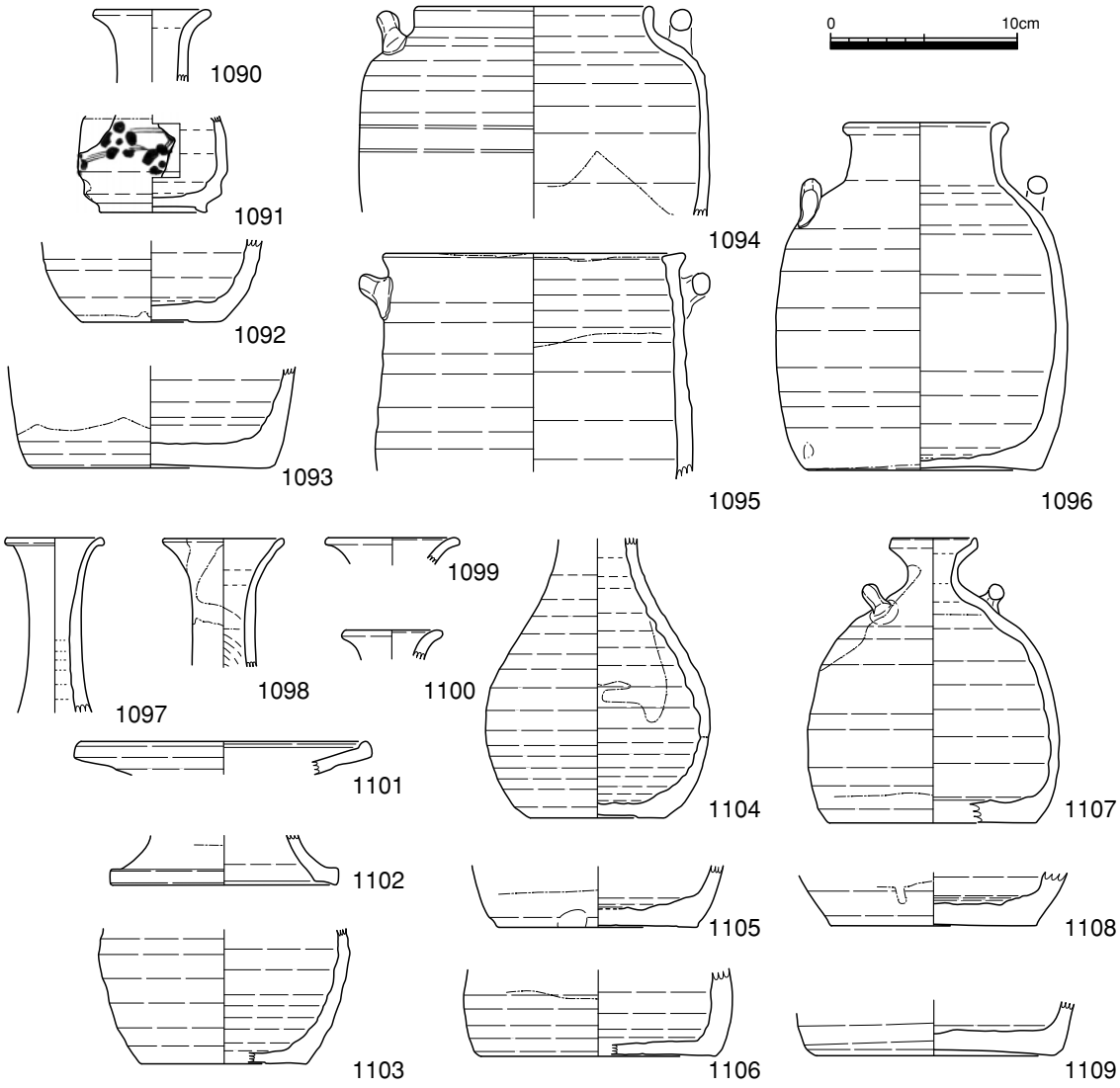
筒形容器類には建水、水指、緒桶、匣鉢などの器種があるが、破片では区分が難しい側面があるので口縁部などの形状で区分する。口縁端部の上端に面を持つタイプ（1058～1061・1066～1068・1070）と口縁端部が外側に折れるタイプ（1062・1069）と口縁端部が丸まるタイプ（1071）がある。1063は黄瀬戸釉が施されており、1064は灰釉が施された片口を持つ製品である。1066～1068は無釉の匣鉢で、底部は回転糸切痕が残存する。1071は錆釉が掛けられた大形の筒形容器で体部はやや逆ハの字状に開くものである。

（K）小形製品（第62図1072・1073）

1072は鉄釉が施された茶入、1073は耳付水注で内面に褐色の付着物が残存している。

（L）大形製品（第62・63図1081～1109など）

大形製品として一括したものには、茶壺（1074）、片口瓶（1081）、口広有耳壺（1082・1095）、祖母懐壺（1089）、徳利（1090・1092・1093・1097～1100・1103～1106など）、花瓶（1101）、瓶子（1102）、双



第63図　99A区出土遺物実測図（12）

耳瓶（1107）などが存在する。このうち1102・1109は古瀬戸後Ⅲ期に、1081・1082は古瀬戸後Ⅳ期に各々属する他は、多くの製品は大窯第3段階から大窯第4段階に属するものである。1091は銅緑釉などが施された繊部瓶類で、時期的には登窯第1小期に属する。

（M）その他の製品（第62図1075～1080）

これまでに報告されなかったものをここで紹介する。1075は錆釉が施された摘みを有する蓋であり、器壁が薄いタイプである。1076は鉄釉が施された蓋で口縁部に返しを持つものである。1077は平面形が方形となる筒状の体部に円形の高台を有する花生と推測される製品である。1078は袴腰形の香炉の口縁部、1079は筒形の形状をなす香炉の底部である。1080は外面に薄い錆釉を施した焼締陶器で竹を模した掛花生と考えられる製品である。沈線などにより節などがよく表現された精巧な作りを呈している。

99A区	天目茶碗	皿（除重圏皿）	小杯	その他の碗	向付	鉢	盤	大皿	擂鉢	香炉	茶入	小形製品	大形製品	筒形製品	不明	合計
古瀬戸前中期													2			2
古後3以前		3		2			3			1	1	1	16		15	42
古後4古		5		3												8
古後4		11					1						1	3		16
古後4新	14	26					8		20	1						69
古後4新or大1	2															2
大全		149							3	1			160	4	309	626
大1	12	18	2	2					8							42
大1or2		3														3
大2	5	13							8							26
大2or3		138														138
大3前		42							40							82
大3	185	23	1	7				6								222
大3後		164		5					45							214
大3or4	373			18		3		22		6	4	3		24		453
大4前		67	1	7					47							122
大4	174			3	9	13										199
大4後	1	410	25	48	82	26			56				1		2	651
大4後～登1															169	169
登1	63	69	2	30	6	1			5						1	177
登1or2					1				4							5
ケズリなし									574							574
ケズリあり									102							102
ケズリ不明									22							22
不明															11	11
合計	829	1141	31	125	98	43	12	28	934	9	5	4	180	31	507	3977

99B区	天目茶碗	皿（除重圏皿）	小杯	その他の碗	向付	鉢	盤	大皿	擂鉢	香炉	茶入	小形製品	大形製品	筒形製品	不明	合計
古瀬戸前中期						1				1			2			4
古後3以前		1		2		1	15		1				25	1	11	57
古後4古		5		1												6
古後4		7		1			9						1	10		28
古後4新	17	64		2			6		38	1						128
古後4新or大1	9															9
大全	2	91							5	3	1	2	195		156	455
大1	49	1		8					10							68
大1or2		11									1					12
大2	8	20							6							34
大2or3		91														91
大3前		36							18							54
大3	180	9	2	10				7				1				209
大3後		83		5				16	16							120
大3or4	274			15		6				5	3	2		16		321
大4前		53		7					20							80
大4	107		1	1	5	1										115
大4後		128	5	29	41	16			24						1	244
大4後～登1															73	73
登1	21	63	5	29	3	3			2							126
登1or2									1							1
ケズリなし									457							457
ケズリあり									73							73
ケズリ不明									18							18
不明															6	6
合計	667	663	13	110	49	28	30	23	689	10	5	5	223	27	247	2789

第２表　99A・99B区瀬戸美濃窯産陶器出土量一覧表（破片数）

B　土師器（第 64 ～ 70 図 1110 ～ 1371）

99A区から出土した土師器は全部で8787点（接合前破片数）が出土した。これらは皿類、鍋釜類、火鉢、その他の器種に大別ができる。このうち、皿類はロクロ調整土師器皿と非ロクロ調整土師器皿に区分できる。鍋釜類には内耳鍋、羽付鍋、釜、焙烙などが存在する。その他の器種としては火熨斗（フライパン）状製品、小壺、焼塩壺、形代（犬）、土鈴などがあげられる。

主要な器種別の出土量は接合前破片数で、ロクロ調整皿が6751点（土師器全体の中で約77％：以下同様）、非ロクロ調整皿が234点（約3％）、鍋釜類が1709点（約 19％）となっている。従来の清須城下町の中の土師器の出土傾向と同様に、皿類と鍋釜類の主要２種の製品が多いことが分かる。ここでは器種別に遺物の紹介を進める。

（A）ロクロ調整皿（第 64・65 図 1110 ～ 1241）

清洲城下町遺跡出土のロクロ調整土師器皿については、既に佐藤公保（佐藤 1986・1987）や筆者（鈴木編 1995）らによって分類が行われている。今回は筆者がかつて実施した分類を踏襲して99A区出土資料を大別する。具体的には、A類は口径が大きくて口縁部が大きく外反するもの、B類は口径が比較的大きくて体部から口縁部にかけて直線的に逆ハの字状に開くもの、C類は口径が比較的大きくて体部から口縁部にかけて内彎するもの。D類は口径が比較的小さくて口縁部が大きく外反するもの、E類は口径がやや大きく体部から口縁部にかけて逆ハの字状に開くものの途中で屈曲したりするもの、F類は口径が 8cm 前後の小さなもの、などに区分できる。

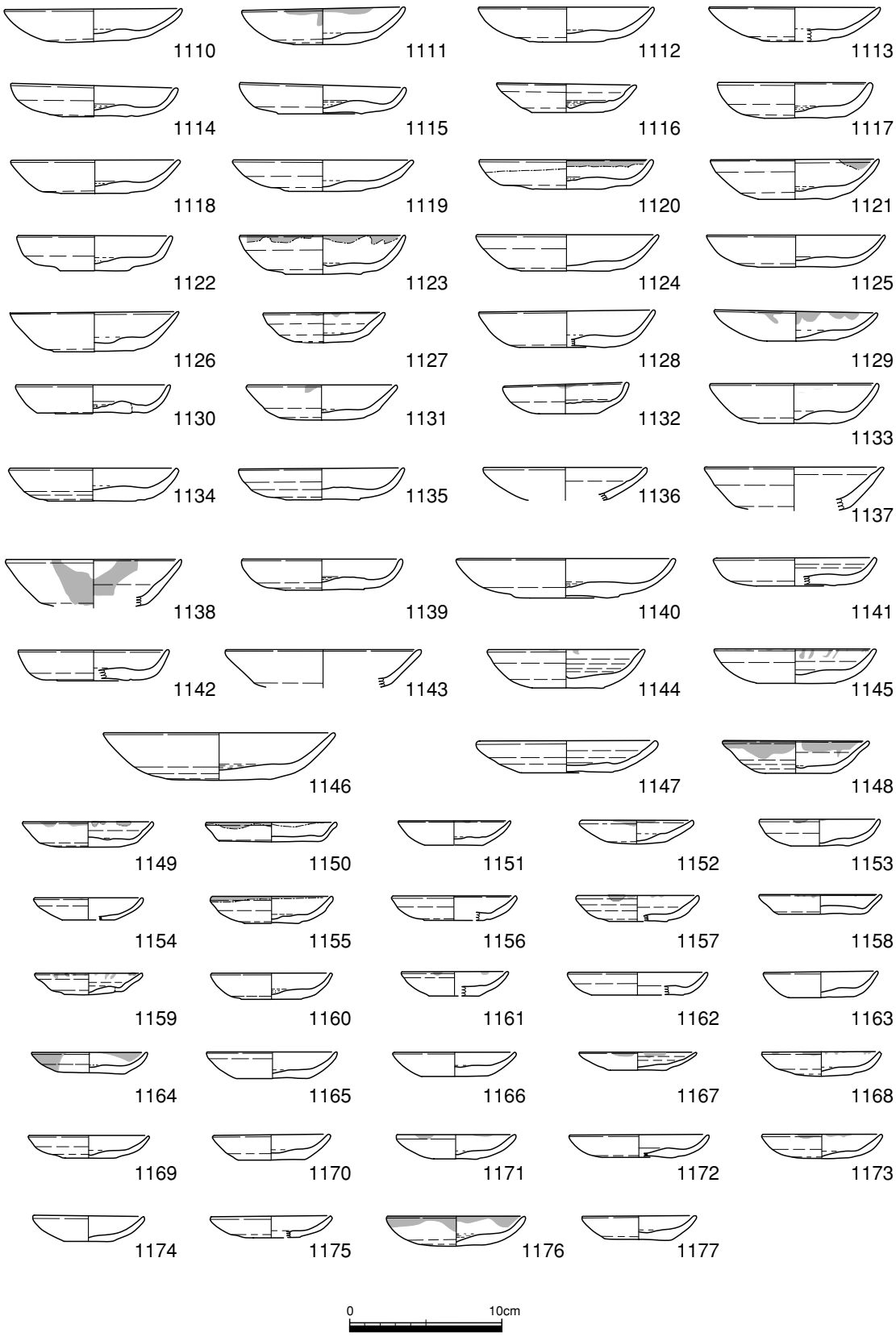
99A区出土資料は、上記の大別の中ではE類が最も多く、次いでC類、F類の順で多くなっている。一方、A類とB類とD類は非常に少なく、今回の報告でもほとんど紹介できない状態である。以下に、C類・E類・F類について詳述し、上記の分類では該当しない特殊なものについては別個に資料紹介を行いたい。

ロクロ調整土師器皿C類は次の5類に細分できる。C 1 類は口径が 14 ～ 16cm の規模で体部の腰が丸く張るタイプ（1140・1146）である。C 2 類は口径が 10 ～ 12cm の規模で体部の腰が丸く張るものの口縁部が比較的直線的に開くタイプ（1110 ～ 1113 など）である。C 3 類は口径が 10 ～ 12cm の規模で体部の腰が丸く張り口縁部が比較的直立ぎみになるタイプ（1114・1115 など）である。C 4 類は口径が 10 ～ 12cm の規模で体部の腰が屈曲して口縁部が比較的直立ぎみになるタイプ（1122 など）である。このC 1 類～C 4 類は底部内面中央部が凹み、底部外周部分が肥厚するものである。C 5 類は口径が 8 ～ 10cm の規模で体部の腰が丸く張るものの口縁部が比較的直立ぎみになるタイプ（1127・1130 など）で、底部中央部は凹まないものである。

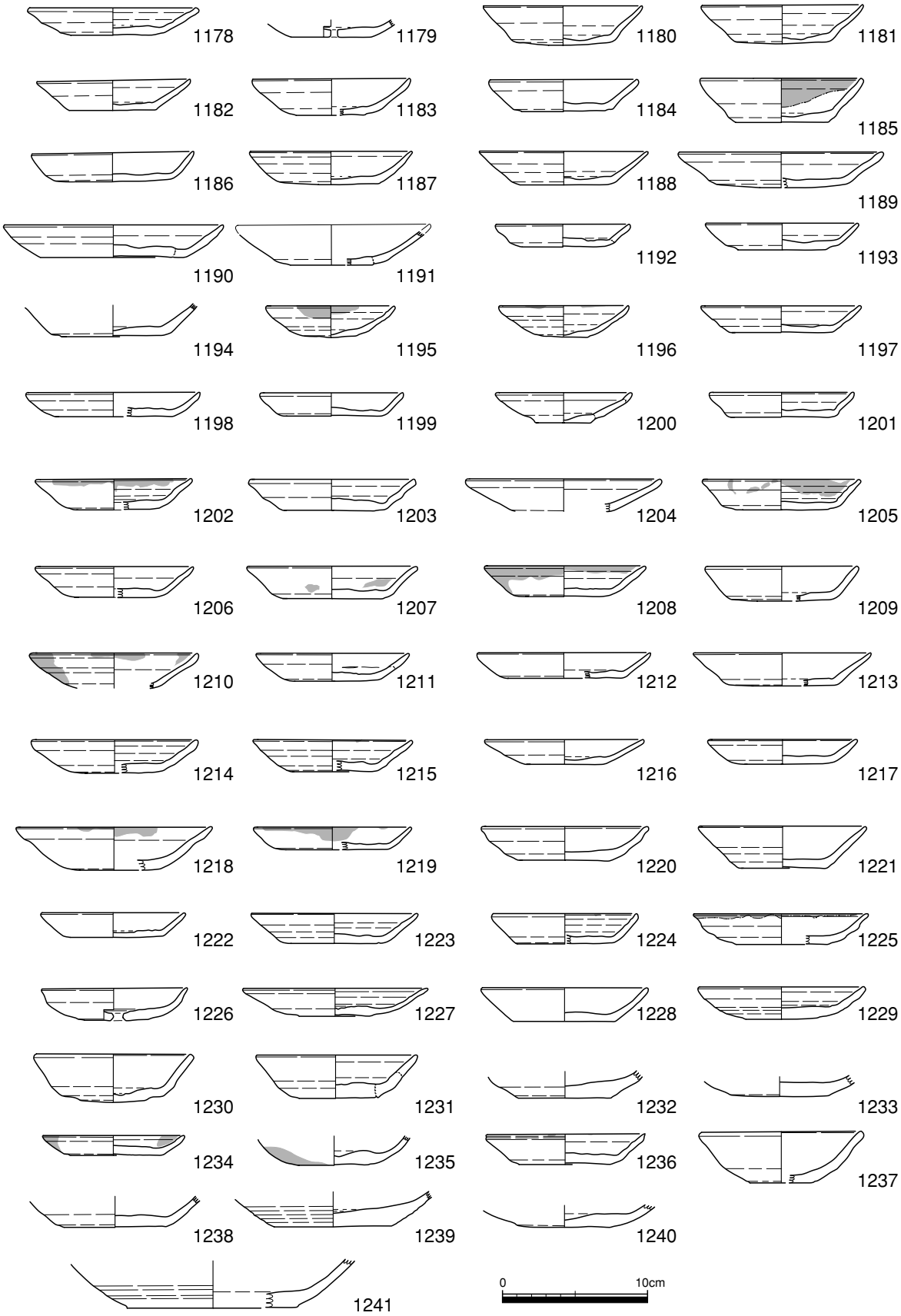
ロクロ調整土師器皿E類は次の5類に細分できる。E 1 類は口径が 14 ～ 16cm の規模で体部の腰が強く張り体部内面に弱い稜線を持つタイプ（1189・1190 など）である。E 2 類は口径が 10 ～ 12cm の規模で体部の腰が強く張り体部内面に弱い稜線を持つタイプであり、器高が高いもの（1180・1218 など）と器高が低いもの（1197 など）がある。E 3 類は口径が 10 ～ 12cm の規模で底部と体部の境界部分が屈曲し体部の内外面が凸凹するタイプ（1205 など）である。これは内面に 2 ～ 3 条の弱い稜線が残るものである。E 4 類は口径が 10 ～ 12cm の規模で底部と体部の境界部分が屈曲し体部が緩やかに少し外反するタイプ（1212 など）である。E 5 類は口径が 10cm 前後の規模で体部の内外面が凸凹しつつも緩く外反するタイプ（1227 など）である。これらの分類は、形態の相違が暫移的であり明瞭には区分し難いものである。

ロクロ調整土師器皿F類は次の3類に細分できる。F 1 類は体部の腰が丸く張り内彎しながら口縁部が立ち上がるタイプ（1153・1155 など）である。底部内面中央部が凹み、底部外周部分が肥厚するものである。F 2類は口縁部が内彎しながら立ち上がり、底部内面が凹まないタイプ（1161 など）である。F 3 類は体部の腰が屈曲して口縁部が比較的直立ぎみになるタイプ（1150 など）である。

上記のタイプ以外のものには次のようなものが存在する。1230・1231・1237 は口径の規模に比べ器高が高いタイプである。器壁が比較的厚くなるのが特徴である。1230と1231は底部が突出し腰部が屈曲す



第 64 図　99A 区出土遺物実測図（13）



第 65 図　99A 区出土遺物実測図（14）

るように体部に向かって立ち上がるものである。1237は底部は突出せず体部中央付近で弱い稜線が存在する。1239と1241は口縁部が残存しないが、底径が8cm以上と大きく体部は逆ハの字状に直線的に開くもので、体部下半外面にロクロの水引きの痕跡が残存する。本来は口径も非常に大きくなるものと推測される。

ロクロ調整土師器皿の概要をまとめると、A類とB類が少なく、C類とE類が多いことからみて、99A区出土資料は時期的には城下町期Ⅲ期が主体となるといえよう。出土遺構別に検討してみると、遺構一括資料ではC類やE類など各類の細分類ごとにまとまる傾向があり、細分類は時期差あるいは細かな系譜差などを表現している可能性がある。

（B）非ロクロ調整皿（第66・67図1242～1307）

一方、非ロクロ調整土師器皿には、体部（口縁部）を横ナデで立ち上げるもの（1265）、体部（口縁部）を連続する指オサエで立ち上げるもの（1268・1269など）、横ナデによる体部（口縁部）の立ち上げが無く内面にナデ調整などを施してわずかに凹ませるものの3種類が存在する。これらは『清洲城下町遺跡Ⅴ』（鈴木編1995）の非ロクロ調整土師器皿分類で、各々A類、C類、D類に対応するものであり、A類とC類はわずかに存在する程度で、大半はD類が占めている。

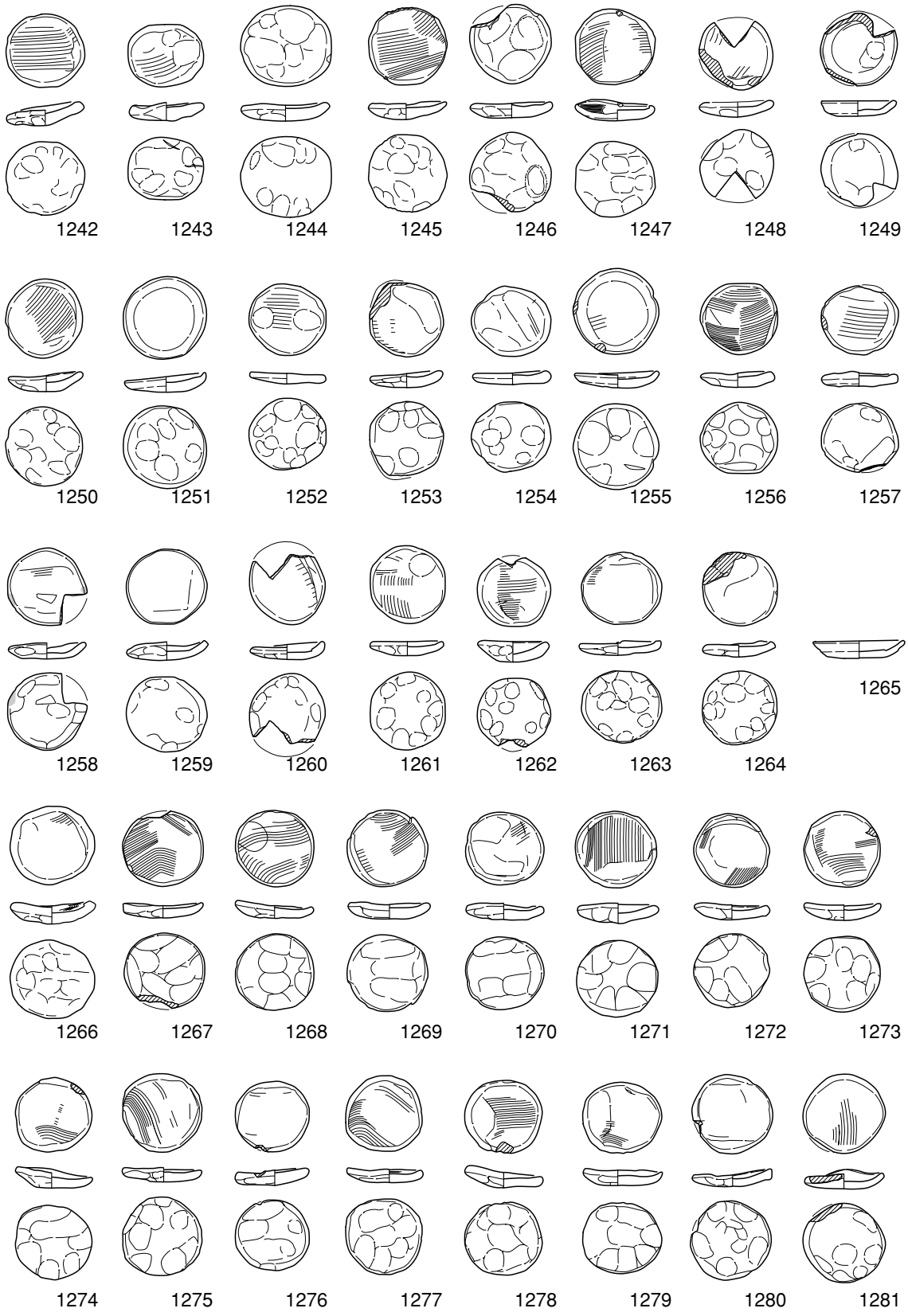
さて、非ロクロ調整土師器皿D類は調整のあり方でいくつかに分類が可能である。1類は指または掌で内面を一方向にナデ調整されるもの（1242など）である。ナデ始めの部分がやや強めに押さえるために凹むケース（1257の右端部など）が多く、この部分のナデ調整痕が歪む場合（1277など）がある。ナデ調整の痕跡は10数条の細かい並行する条線として残されている。外面には指などの圧痕が残るものが大半を占め、指を揃えた状態を想像することができるもの（1247など）が認められる。また、指オサエ痕が口縁部に近い部分に環状に巡る形となっているもの（1275）もある。2類は内面に半円状のナデ調整または指オサエ調整が残存するもの（1306など）である。このタイプの出土量は少なく、外面には指などの圧痕が残る。3類は内面の外周部分を横方向にナデ調整が施されるもの（1249・1251など）である。ナデ調整を一周させた結果、口縁端部が上方へわずかに立ち上がっている。外面には指などの圧痕が残っているが、その状態は口縁部に近い部分に環状に巡る形となっている。

非ロクロ調整土師器皿は、横ナデを施さないD類（鈴木編1995）が大多数を占めていることから、99A区出土資料は時期的に城下町期Ⅲ期が主体となっている様相を読み取ることができる。これらは口径が4～5cmの範囲内に収まっているものである。

（C）鍋釜類（第68～70図1308～1363）

鍋釜類には内耳鍋、羽付鍋、焙烙、羽付釜、羽無釜など主要な器種が存在する。各器種の出土量は内耳鍋が153点、羽付鍋が13点、焙烙が183点、釜が53点、器種不明の体部片が1703点であり、焙烙が多く出土する点が、近隣の他の遺跡では見られない特徴となっている。ここでは主要な器種ごとに記述を進める。

内耳鍋（1308～1327）はいわゆる半球形内耳鍋（鈴木1996）に属するものばかりである。99A区出土半球形内耳鍋は3類に細分ができる。1類は体部から口縁部にかけてほとんど直立しながらやや開くタイプ（1315～1317・1323～1327）であり、口縁端部から3～5cm程度下位の部分に浅い沈線が巡るもの（1316など）が存在する。1類は口縁端部の断面形が方形となっている点が特徴であり、これらは半球形内耳鍋の中で古いタイプと考えられているものである。2類は体部から口縁部にかけて内彎しながら内側に傾くもの（1309～1313など）で、口縁上端面をやや強く横ナデ調整するためにわずかに凹んでいる。口縁部の内面はハケ調整が、外面は指オサエ調整が施されている。確証はないが、底部の形状は1318の資料からみて体部と底部の境界部分が不明瞭で突出するような丸底になるものと推測される。これらは16世紀後半を主体とする時期が考えられる。3類は体部から口縁部にかけて屈曲して口縁部が内側に傾くもの（1319～1321など）で、口縁上端面を強く横ナデ調整するために内外両端が横方向に広がっている。底部の形状は1314・1320・1321などからみて、底部と体部の境界が明瞭に稜線を持っており、丸底では

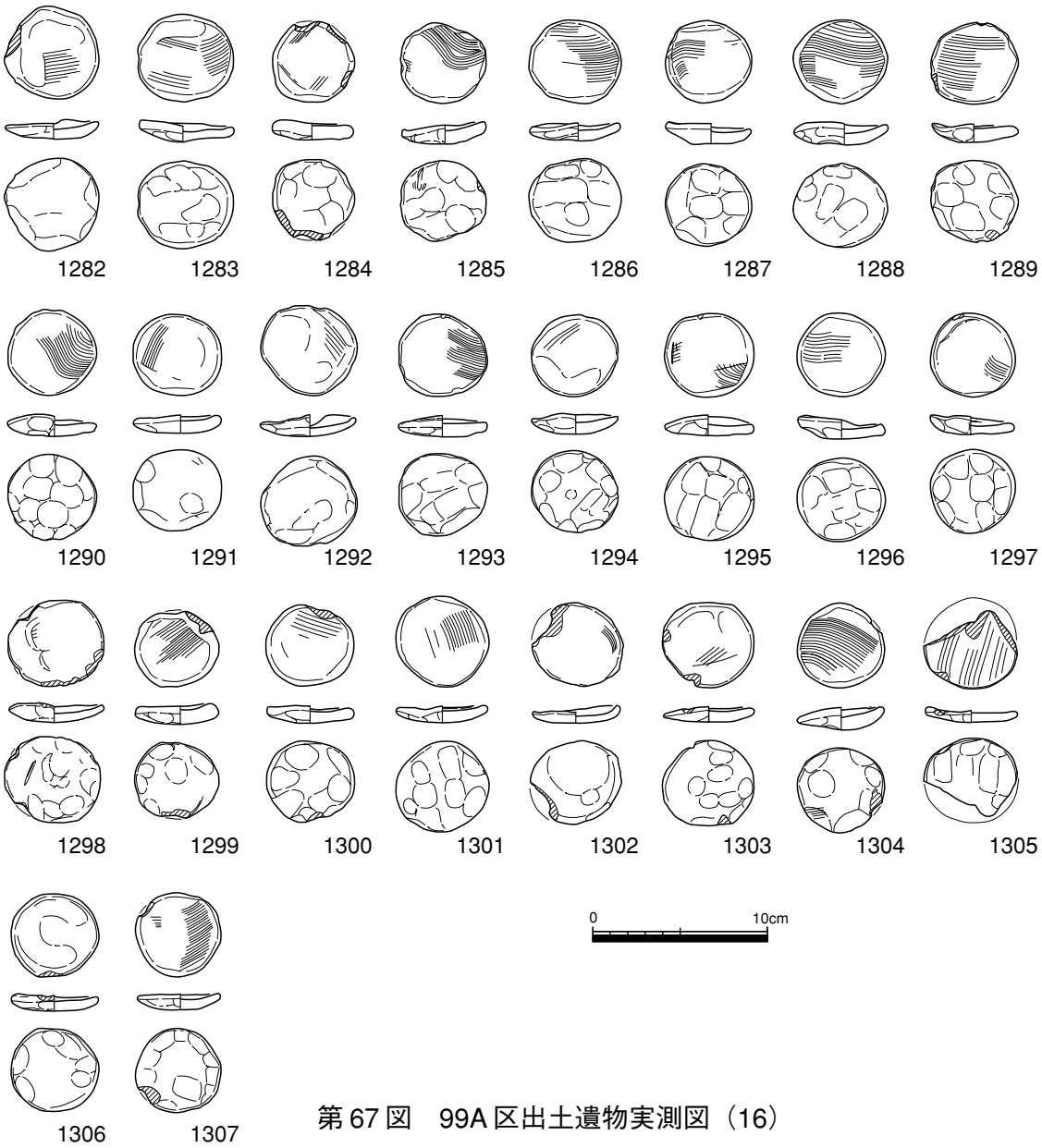


第 66 図　99A 区出土遺物実測図（15）

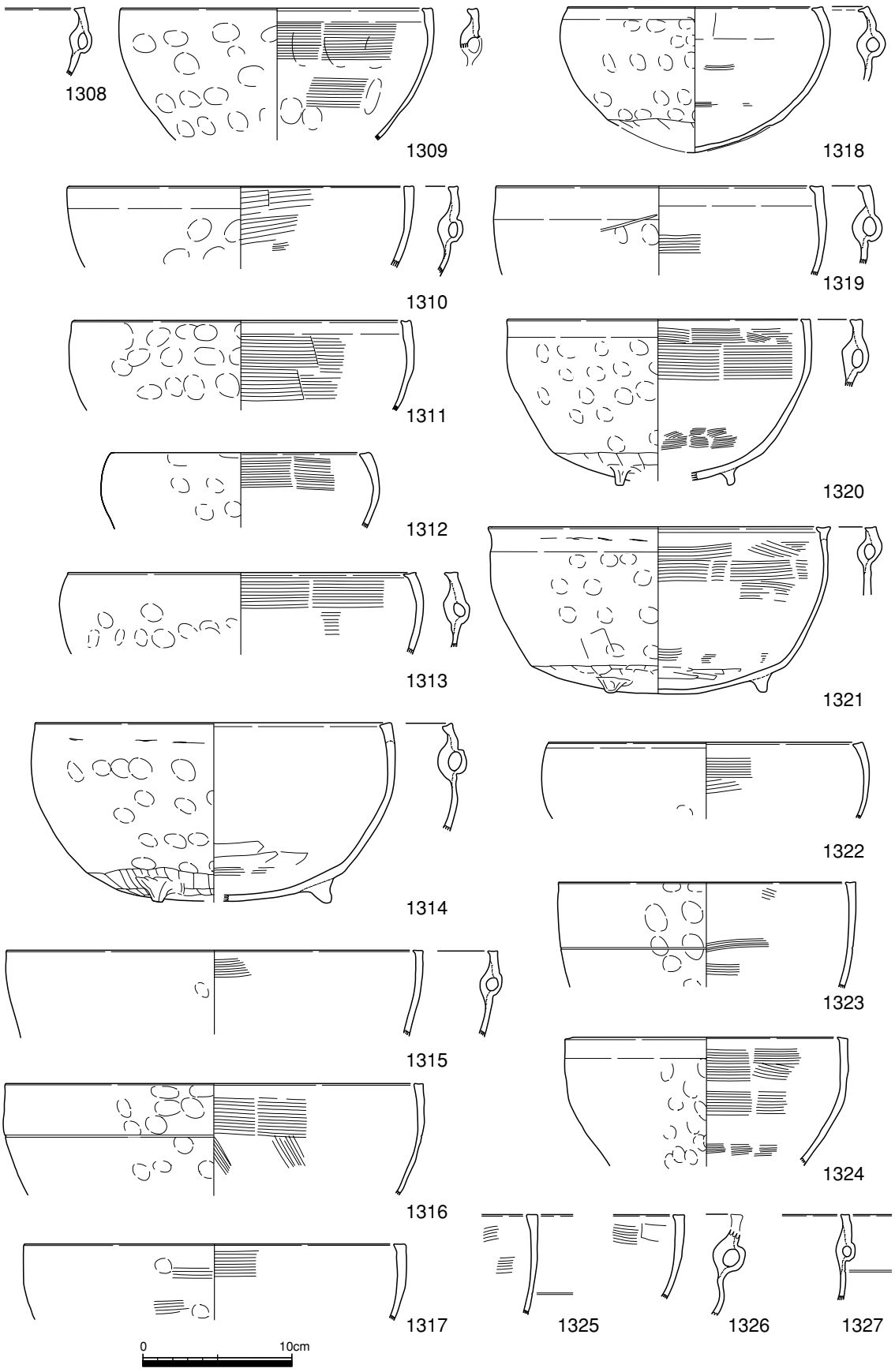
あるものの全体の形状は桶形となっている。これらも16世紀後半を主体とする時期が考えられる。

羽付鍋は、羽釜ともよばれることがある製品で、半球形の体部上方に鍔がつくもの（1352～1357）である。実測したものはいずれも口縁部が内彎しながら内傾するもので、口縁端部上面がやや強く横ナデされて内側の端部が広がっている。鍔は概して短く鍔の端面も横ナデ調整によって若干広がっている。内面上位に細かなハケ調整が残存し、鍔よりも下位の体部外面には指オサエ調整が施されている。99A区出土土師器羽付鍋は、口縁部から体部にかけての形状は内耳鍋の2類と近似していることからみて、16世紀後半を主体とする時期が考えられる。

釜には羽付釜（1359・1363）と羽無釜（1358）がある。羽付釜は口縁部が遺存する資料に恵まれなかったために全体の形状は不明である。ただし、鍔の状態から見て、鍔が非常に短く断面形が三角形状になるもの（1359）と羽付鍋と同様に鍔端面が横ナデ調整によって広がるもの（1363）に分類が可能である。羽無釜（1358）は体部に至る屈曲部分がなだらかとなっており、肩部に板状の耳が付く。また、口縁部が残存する釜類では、直立する口縁部が比較的高く立ち上がっているが、体部に至る屈曲部分がなだらかとなっているもの（1358・1360～1362）であ



第67図　99A区出土遺物実測図（16）



第 68 図　99A 区出土遺物実測図（17）

る。時期は、1363が比較的古いタイプで16世紀前半から中頃と思われるが、それ以外は16世紀後葉（城下町期Ⅱ-2期）以降に属するものと考えられる。

焙烙は4類に分類でき、1類は丸底の底部に逆ハの字状に開く口縁部が付き口縁部上端面が水平となるもの（1328など）、2類は丸底の底部に逆ハの字状に開く口縁部が付き口縁部上端面が斜めに外傾するもの（1329など）、3類は直線的に開く体部に口縁部が外側に折り返され突帯状になるもの（1346）、4類は体部から口縁部の立ち上がりが短く胎土が褐色となるもの（1343）である。このうち、1類と2類は半球形内耳鍋をそのまま浅くしたような形状を呈するものであり、圧倒的多数を占めている。口縁部内面には横方向のハケ調整が、口縁部外面には指オサエ調整が、底部外面にはヘラケズリ調整が施され、底部内面には明瞭な調整痕を見て取ることができないほど平滑に仕上げられている。口縁端部外面が横ナデ調整されているものとされていないものに区分することも可能である。3類は器壁が薄く1類と2類に比べて精巧な作りをしており、半球形内耳鍋とは別系譜の焙烙であると推測される。4類は宿場町期（江戸時代）に属する可能性がある。

（D）その他の製品（第70・75図1364～1371・1481～1485）

火熨斗状土器（1364～1367）は浅鉢状の杯部に円筒形の柄部が付くものである。杯部は丸底状の底部に逆ハの字状に開く体部を持ち、口縁端部がやや肥厚する。柄部は粘土板を円筒形に丸めて作り、大きく穿孔された杯部に接合される。内面に黒色のしみ込み状の使用痕が確認される他は、煤などの痕跡は全く確認できなかった。このことから、外から火を当てて内容物に熱を加える容器ではなく、内部に熱した物体を入れて使用されたものと考えられる。火鉢（1369～1371）は口縁部が外側に屈曲する浅鉢状に中空の三足が付くものである。1369は折り曲げられた口縁部に複数の孔が開けられたものである。1371は火鉢の三足部分に相当する。焼塩壺には蓋（1484）と身（1485）がある。1484は手づくね成形による焼塩壺蓋と推測される資料で、胎土はにぶい黄橙色を呈している。1485は手づくね成形による焼塩壺身で、胎土はにぶい橙色を呈している。内面は被熱痕が認められ、口縁部はくの字状に折り曲げられた形状となっている。1481と1482は犬形の形代である。1481は陶器質の焼成で、全く欠損しておらず、目や耳がリアルに表現されている。一方、1482は土師器質で頭部や脚部が欠損している。土鈴（1483）は上半部のみが遺存する。

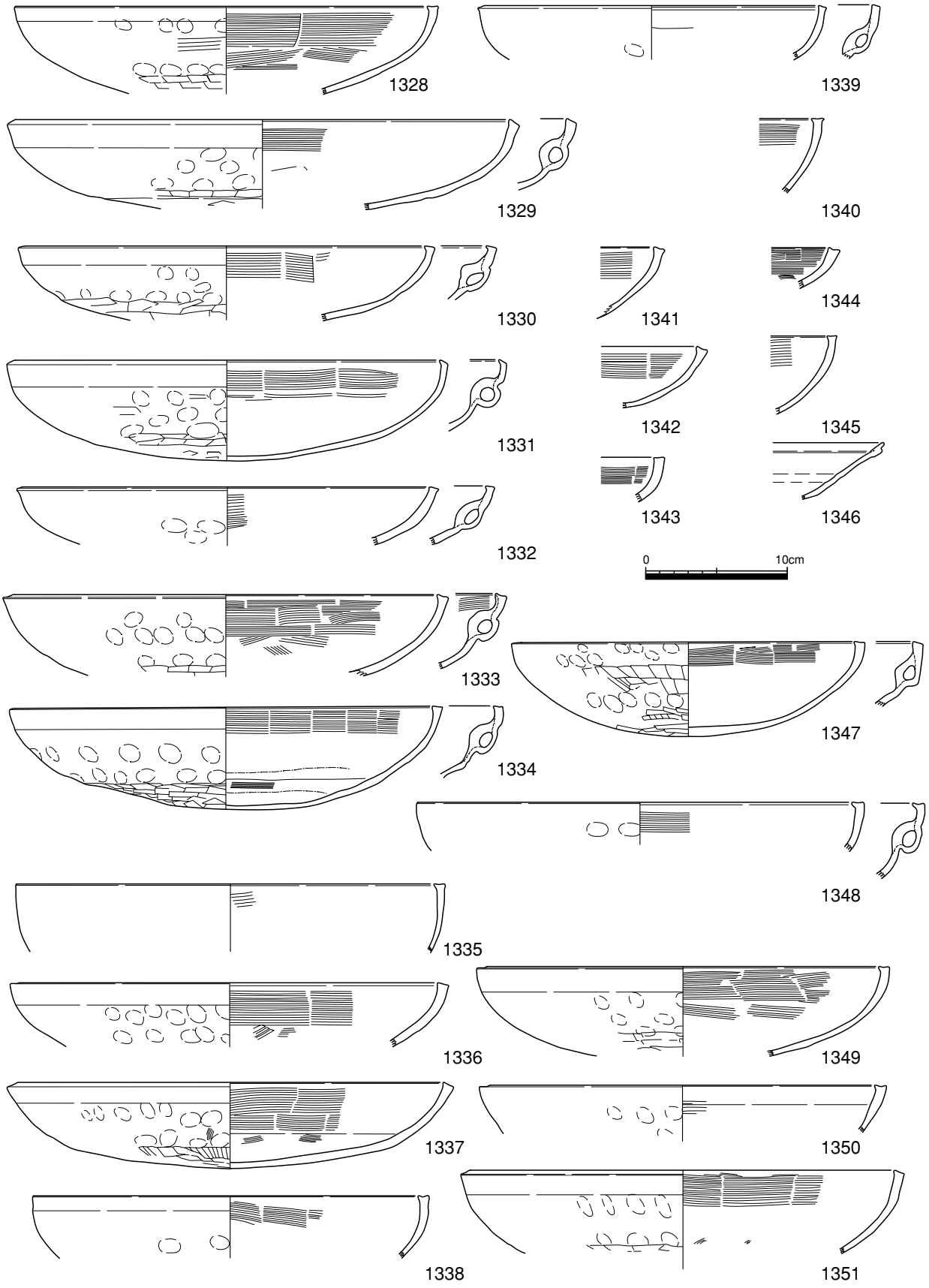
C　常滑窯産陶器（第43～47図1372～1392）

99A区からは常滑窯産陶器も多く出土しているが、器種は壺、甕、鉢などに限定されている。大形の器種が破損して出土しているために全ての資料を器種同定できないが、この中でも甕類が最も多く出土している。また、常滑窯産陶器は焼成の状態から、胎土が黒灰色などを呈する焼き締められた真焼製品と胎土が橙色などの明るい色を呈する焼成温度が低い赤物製品に区分される。99A区から出土した資料には両者が認められる。図化したものでは、1376・1378・1379が赤物である。

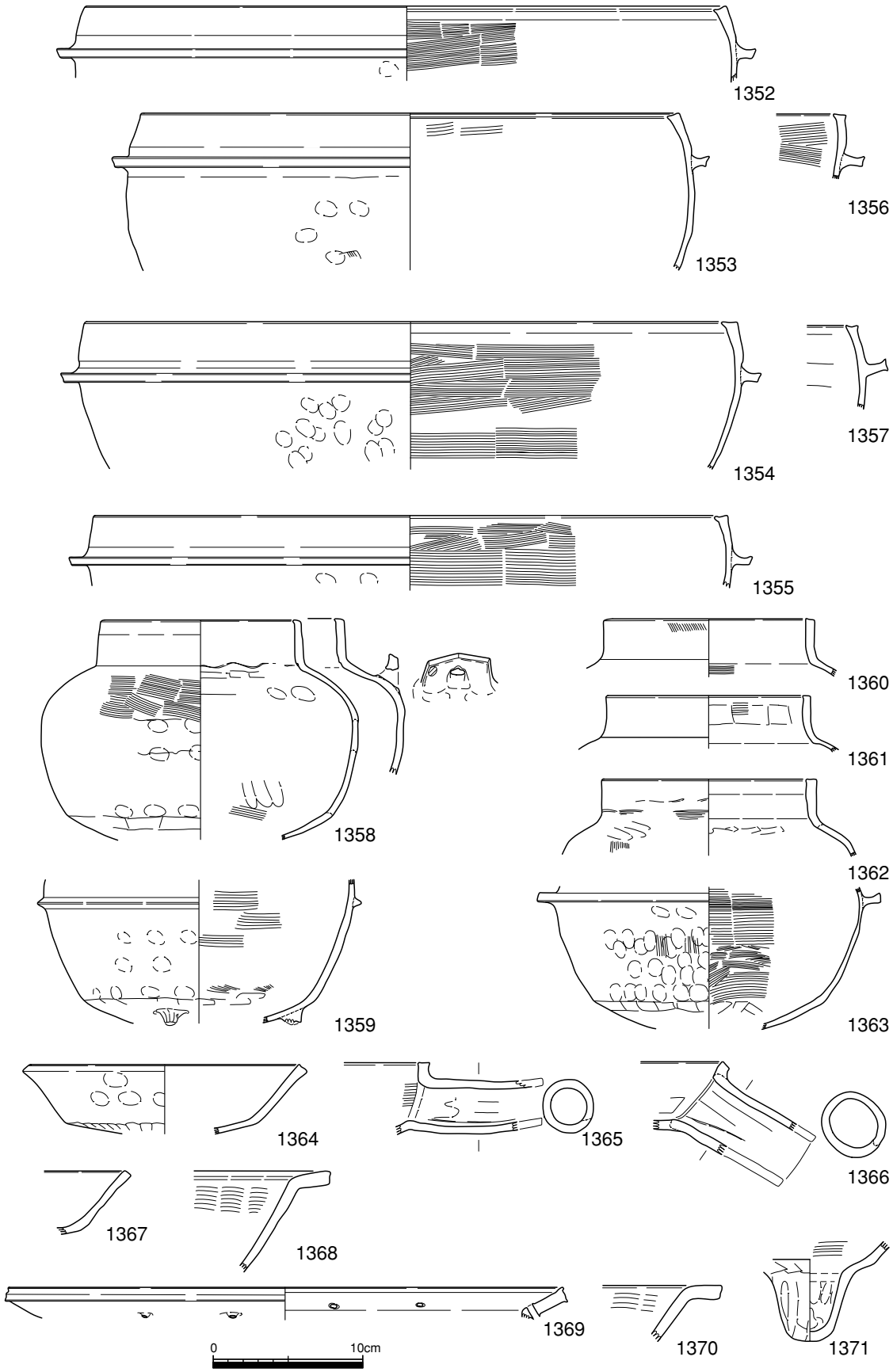
（A）甕

甕の口縁部にはいくつかの形状が認められる。1類は折り返された口縁部の縁帯が体部に張り付いたもので、上端面の内側部分が大きく丸まるもの（1373）である。2類は縁帯が体部に張り付き上端面がほぼ平坦になるもの（1374）である。上端面には1条ないしは2条の凹線状の窪みが巡ることが多く、上端部の内側はあまり張り出さない。3類は縁帯が張り付き上端面が平坦で上端部の内側が突帯状に張り出すもの（1372）である。張り付けられた縁帯は高くなっている。4類は折り返し張り付けられた縁帯が不明瞭となり、上端面が斜めに傾くもの（1386）である。上端面の外側に張り出した部分は厚手で先端が丸められている。5類は縁帯の痕跡は全く認められず口縁部が断面三角形状になるもの（1387～1389）である。このタイプには口縁外端部が摘み出されるもの（1387・1392）とそうでないもの（1388・1389）に細分できる。6類は5類に比べ口縁部端面が水平に近付き、外端部が外側へ摘み出されるもの（1390・1391）である。

これらは形状からみて、1類から順に6類に変化していったものではないかと想定され、3類までが城



第 69 図　99A 区出土遺物実測図（18）



第 70 図　99A 区出土遺物実測図（19）

下町期に属する資料と考えられる。4類以降は宿場町期に属するものであり、形状からみると壺と表現した方がよいかも知れないものである。赤羽中野編年との対応関係は1類が10型式くらい、2類が11型式くらいに相当すると考えられる。

（B）壺

壺には頸部が存在する一般的？な壺A類と、頸部がないか短く括れる程度の壺B類（無頸壺）に大別できる。

壺A類は口縁部の形状から2類に分類できる。1類は口縁部が外側に折り返され体部に張り付いて口縁部上端部が丸められるもの（1383）である。2類は体部から口縁部にかけてくの字状に屈曲して逆ハの字状に伸び口縁部上端部が丸められるもの（1385）である。1類は城下町期、2類は宿場町期にそれぞれ属すると考えられる。

壺B類は、口縁部の外側を強くナデてわずかな頸部を形作るもの（1380）が出土した。外面には横方向や斜め方向のヘラケズリ痕が残存し、内面には指オサエ痕や粘土紐積上痕の他にやや傾いた縦方向に施されたハケ状の痕跡が残されていた。底部外面は大量の砂が付着している。

（C）鉢

鉢は平底の底部に体部が逆ハの字状に開く形状の製品で、99A区では口縁部端面が断面方形になるもの（1378・1381）が出土した。

（D）その他

その他のものとして、器種が特定できない底部の破片を一部実測した。1375～1377は底部に砂目痕が残り、体部外面にはヘラケズリ痕が残存するもので、器種は特定できない。1379は内面に縦方向に施された沈線が残るもので、体部の立ち上がりが急であることなどから無頸壺（壺B類）になると想定される。1384も体部の立ち上がりは垂直に近く、壺類の底部の可能性が考えられる。

D　中国産陶磁器（第73・74図1393～1433・1437・1438）

中国産陶磁器はその出土量はあまり多くなく全体で129点にしか過ぎない。その内訳は磁器には青磁と白磁と青花が存在し、同じく陶器には褐釉の壺などが認められる。ここでは青磁と白磁と青花とその他に分けて報告する。

（A）青磁

中国産の青磁には蓮弁紋碗（1393・1935）、端反皿（1394）、稜花皿（1397）、盤（1400）などが認められる。1393～1395と1397・1400・1402は器壁が厚く胎土は灰色を呈しており、龍泉窯系の青磁と考えられる。1395は縦方向の線と連続する半円紋で蓮弁紋を描く比較的新しい資料である。1396と1398は胎土は白色で薄く作られており、景徳鎮窯系の製品と推測される。1398は内面に2段の鎬が入るもので青白磁とも考えられる。

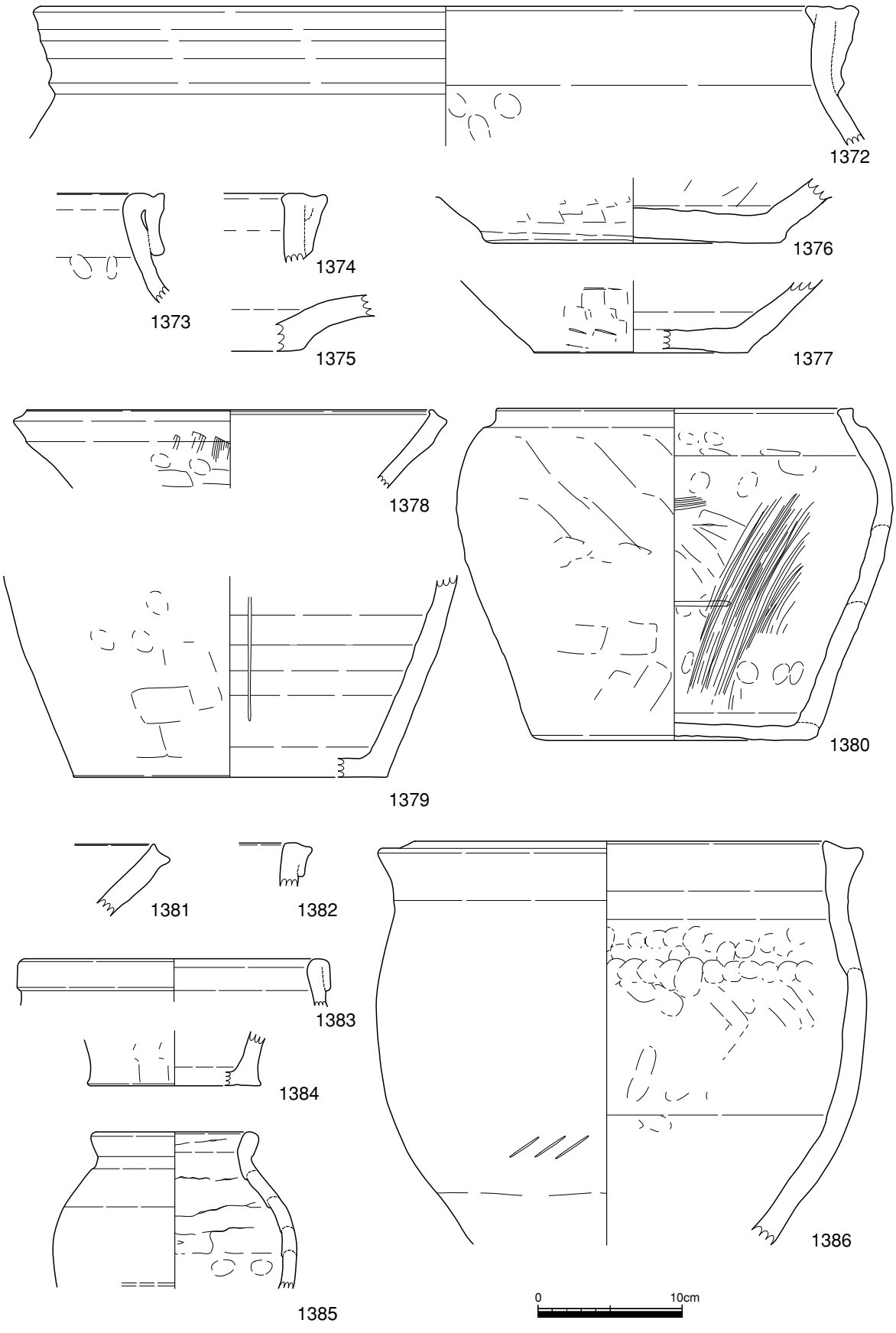
（B）白磁

中国産の白磁には端反皿（1401・1403など）、稜皿（1404）、小杯（1405）、丸碗（1438）などがある。1401・1403～1405は胎土が緻密で白色を呈しており器壁も薄手であることから、景徳鎮系白磁と考えられる。1399は10YR8/3浅黄橙色を呈する胎土を持ち、中国南部の窯の製品と推測される。1402は器壁が厚く胎土もやや黄色味がかっている。1405は底部内面が輪禿となっている。

（C）青花

青花は大きく碗と皿と大皿などの器種が存在する。出土量は碗や皿類が多く、その他の器種は非常に少ない。これらの産地については基本的には、胎土が緻密で白色を呈しコバルトの発色も鮮やかな青色となる景徳鎮窯系と、胎土が粗めで黄色味がかかりコバルトの発色も鈍い紺色となる漳州窯系とに大別され、これまでもその大別で報告を行ってきた。しかし、実際には焼成の状態、胎土の発色や緻密さ、釉薬や紋様部分のコバルトの発色、底部の削り出し調整痕や高台端部（畳付部）の状態などに相違が見られることから、さらにいくつかの系統に分類できることが予想される。ただ、ここではこれらを未だに系統だててうまく整理ができていないために、こうした観点からの分類は挫折した。ここでは従来通り、器種毎に記述を進めていきたい。

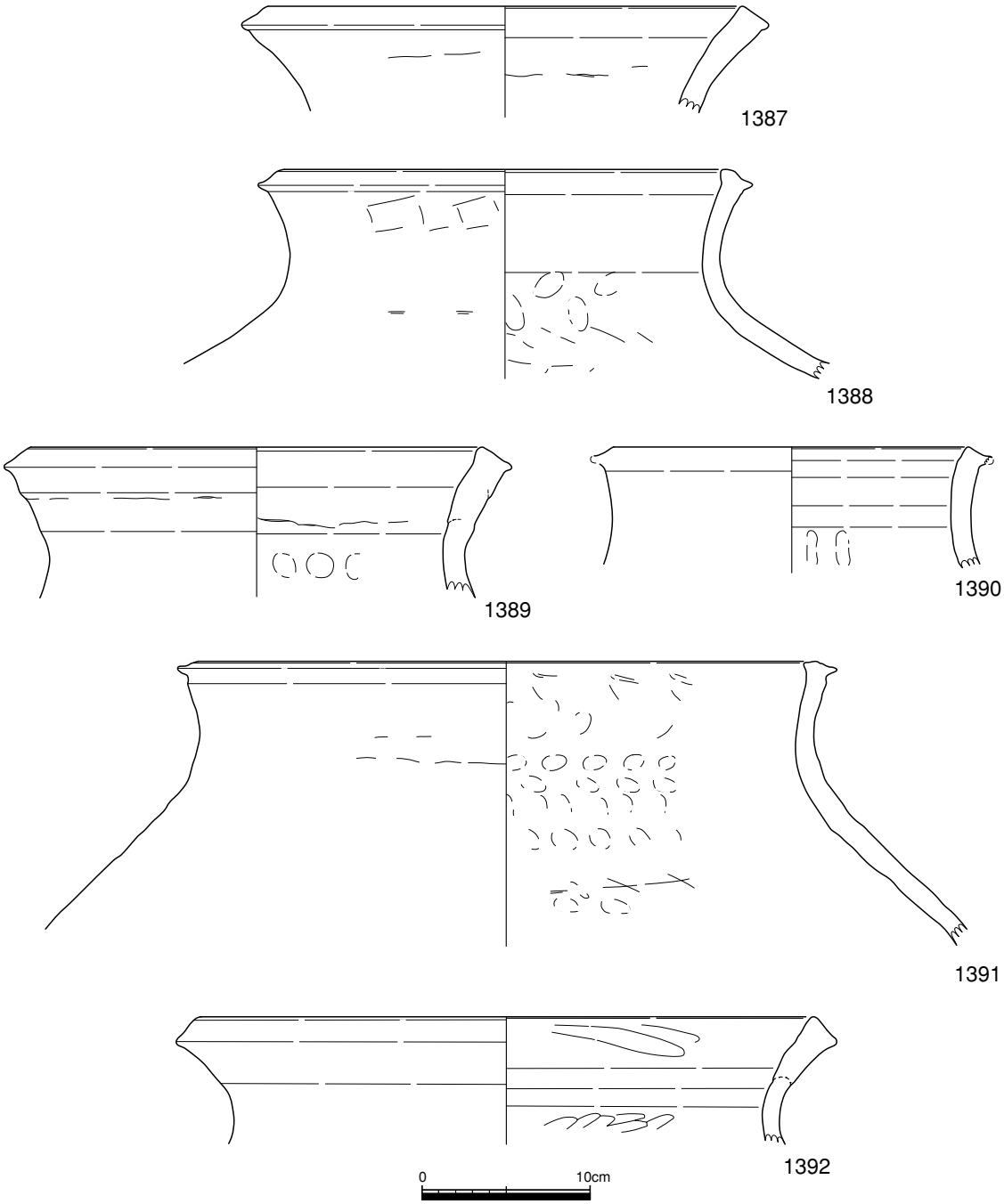
青花碗は5類に分類できる。1類は底部から体部にかけて半球形状に立ち上がり高台が付くもの（1407）である。2類は体部下半の腰が張り体部から口縁部



第 71 図　99A 区出土遺物実測図（20）

にかけて直線的に伸びるもの（1413）である。3類は底部が厚く見込み部分が大きくなり、腰が張りながら口縁部が立ち上がるもの（1412）である。4類は底部中央が上方へやや盛り上がり、腰が張って体部から口縁部がやや急に立ち上がるもの（1406・1409）である。5類は底部から口縁部が薄く高台が高くなっているもの（1408）である。1類や2類は城下町期の前半に属する資料と考えられ、4類は城下町期の後半に属する資料と位置付けられよう。5類は漳州窯系青花である。

青花皿は3類に分類できる。1類は口縁部が大きく外反するもの（1414～1418など）である。2類は口縁部が内彎して立ち上がるもの（1419・1420・1422～1425など）である。1類と2類は器壁が薄く高台の内側がシャープに抉られているものが多い。3類は高台が断面逆台形状になり器壁が厚いもの（1427）



第72図　99A区出土遺物実測図（21）

である。口縁部が残存していないために、全体の形状は復元できなかった。

1432は漳州窯系青花の大皿である。焼成がやや甘くなった製品である。

（D）その他の中国産陶磁器

1433は緑釉が施された交趾三彩小皿で、裏面に花弁が表現されている。1437は褐釉の茶壺である。褐灰色の胎土にやや光沢のある褐釉が施され、口縁部は外側に折り返され丸められている。図化した口縁部片以外にも体部の破片が数点存在する（写真図版16参照）。

E　朝鮮王朝産陶磁器（第74図1434～1436）

朝鮮王朝産陶磁器には、陶器の碗と徳利が出土した。1434と1435は碗で内面に重ね焼きのための目跡が残存する。1434はにぶい橙～褐灰色の胎土、1435は暗青灰色の胎土を持っており、両者とも透明釉が掛けられている。1436はラッパ状に開く徳利の口縁部で、褐灰色の胎土を持つ。

F　唐津（肥前）窯産陶器（第74図1439～1457）

唐津窯産陶器は灰釉が施された丸碗が大部分を占めており、その他の器種は非常に少ない。これらは16世紀後葉から17世紀前葉に位置付けられ、城下町期Ⅲ期に属する資料と考えられる。

丸碗は形状から2類に分類が可能である。1類は腰部が丸みを帯びて立ち上がり内彎しながら口縁部に至るもの（1439・1443など）であり、2類は腰部がやや屈曲して直立気味に立ち上がり口縁部が直線的に伸びるもの（1441など）である。両者とも高台は削り出されており、藁灰釉は底部外面を除く全面に掛けられている。釉薬の発色は透明な光沢を持つものと白味がかる光沢のないものなどがある。

その他の器種としては、1455の鉄絵が施された碗？と1457の底径が非常に大きい鉢状？のものが存在する。

G　楽系窯産陶器（第74図1458～1461）

楽系窯産陶器は軟質で鉛釉が施された焼物で、99A区では碗のみが存在する。

1458は明赤褐色の胎土に白色粘土で白化粧した上に鉛釉が施された筒形碗である。口縁部は内側に傾斜しながら立ち上がるもので、釉薬は大部分が剥げ落ちてしまっている。1459は灰白色の粘土に黄色あるいは茶色の鉛釉が掛けられた鉢状の碗である。1460は明赤褐色の胎土に鉛釉が施された筒形碗の腰部で、外面は白色粘土で白化粧されている。内面の鉛釉は黒色に発色している。1461も1460と同様な製品の高台部である。

これらの楽系窯産陶器は城下町期Ⅲ期に属する遺物として考えられよう。

H　備前窯産陶器（第75図1462～1472）

99A区出土の備前窯産陶器は擂鉢がある。胎土は灰色から灰赤色を呈しており、焼成は堅緻である。口縁部の形状から2類に分類できる。1類は肥厚する口縁部の断面形が三角形状となるもの（1462～1465など）、2類は口縁上端部が上方へ伸びていくもの（1466・1467・1470）である。擂鉢の底部は高台を持たず、底部外周部をヘラケズリ調整が施されて丸みを持っている。底部外面には砂目が残存している。これらの遺物は16世紀後葉くらいの時期が考えられよう。

I　信楽窯産陶器（第75図1473・1474）

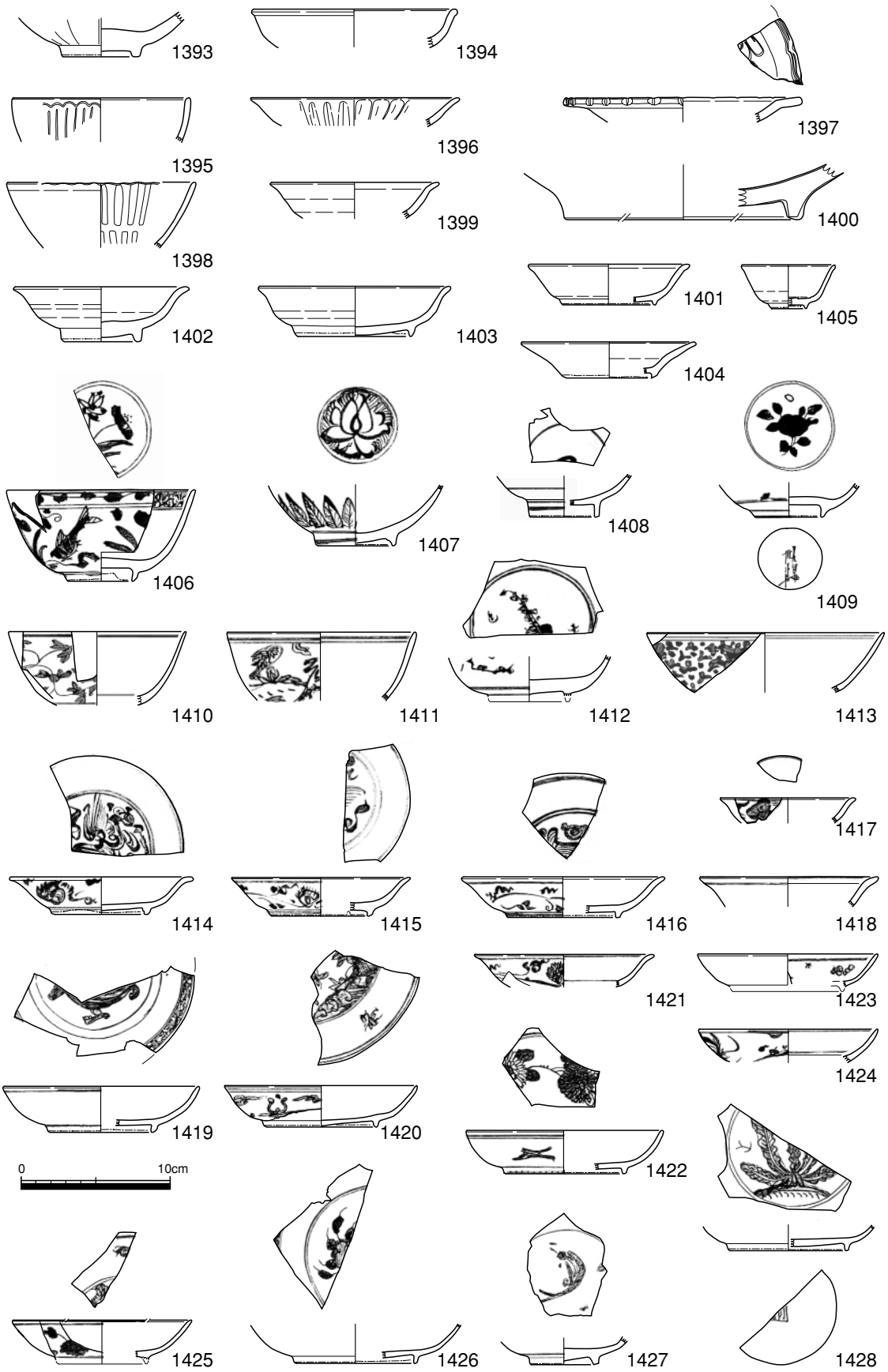
信楽窯産陶器には壺または甕の底部片（1473）と無頸壺（あるいは建水か：1474）が出土した。白色の胎土中に長石粒が混じるのが特徴である。これらの時期については城下町期に属するが、これ以上は特定できない。

J　城下町期以前の土器・陶磁器（第75図1486～1490）

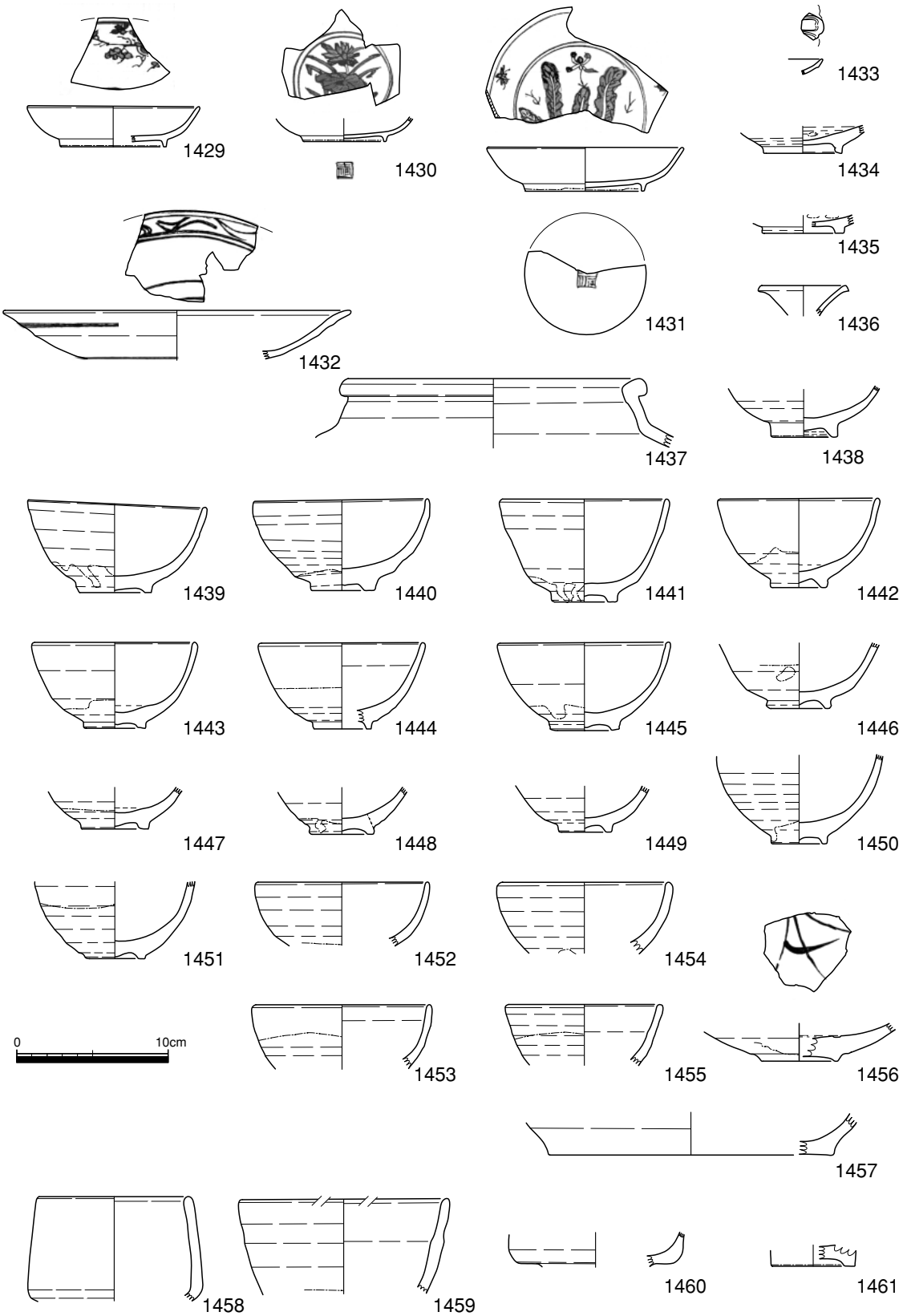
城下町期よりも前の時期の遺物には須恵器や山茶碗類などが出土しているが、ここでは山茶碗類の鉢と陶丸（1489・1490）を紹介する。1486は片口鉢の口縁部、1487と1488は鉢の底部である。

K　その他の製品（第75図1475～1480）

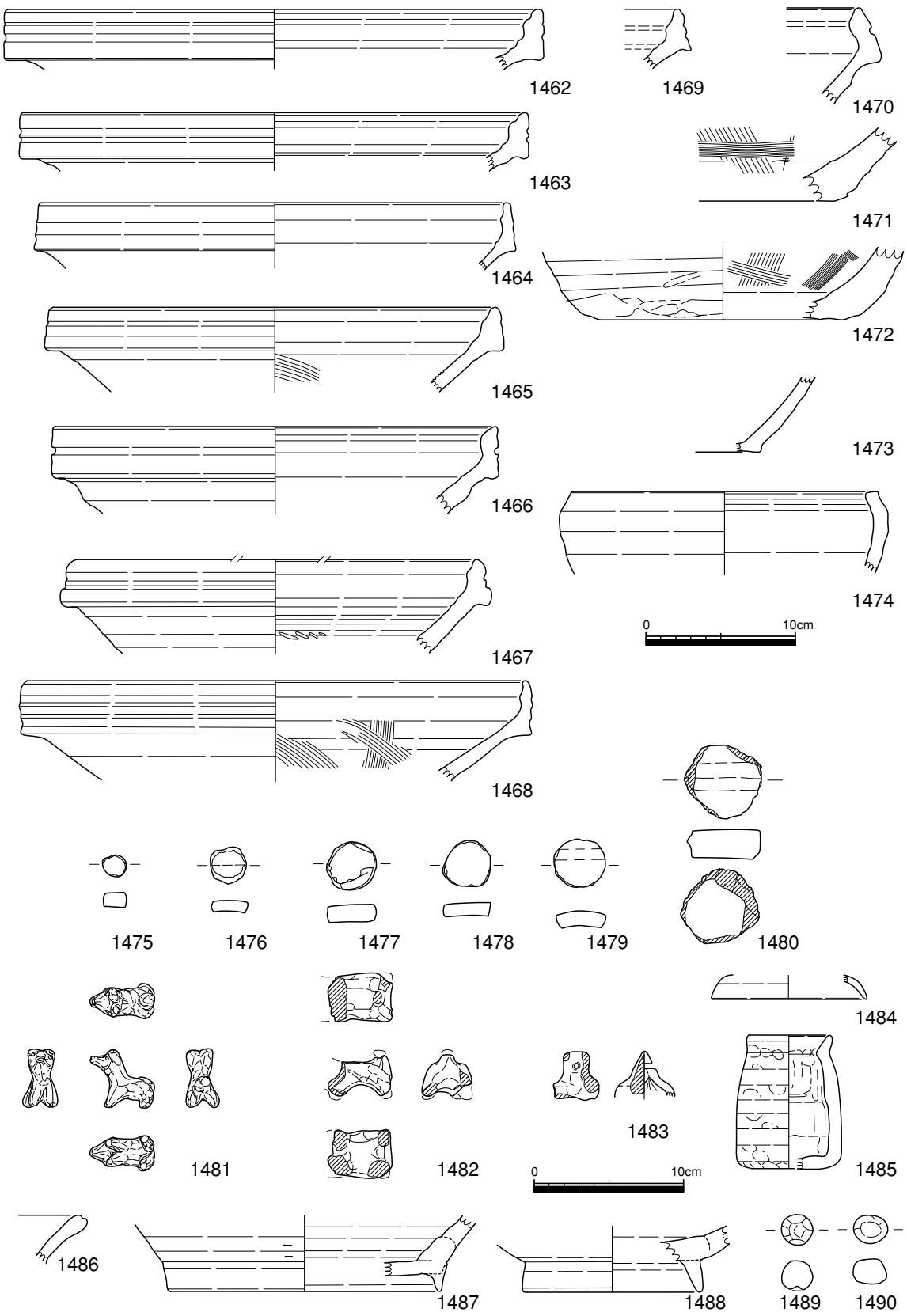
ここでは、その他の製品としていわゆる加工円盤を紹介する。加工円盤は本来は別の器種として生産された陶器片を円盤状に打ち欠いて製作されたものである。1475～1480は瀬戸美濃窯産陶器を利用したものである。1475は大窯期の大形製品、1476は18世紀代の大形製品、1477と1478は古瀬戸後Ⅳ期の甕、1479は大窯第3か4段階の徳利、1480は大形製品の破片を各々用いている。



第 73 図　99A 区出土遺物実測図（22）



第 74 図　99A 区出土遺物実測図（23）



第 75 図　99A 区出土遺物実測図（24）

8　99B区出土陶磁器・土器類

（1）概要

99B区から出土した陶磁器と土器類は接合前破片数で10983点である。その内訳は城下町期に属する資料が大多数を占めるものの、そればかりではなく城下町期以前や宿場町期の遺物も少なからず存在する。この99B区では数多くの土坑や溝が重なりあって検出されており、確認された遺構は屋敷の区画溝や建物跡の基礎構造であったものと考えられている。こうした状況から見て、城下町期の段階で居住域（おそらく町屋か）であったと推測される。この他に整地層なども確認されており、遺物はこうした遺構や整地層から多数出土している。実際に遺物の整理を行ってみると、99A区と同様に、遺構をまたがって破片が接合する事例が相当量存在することが判明した。これは遺構が構築される間に遺物を包含する古い遺構や整地層が撹乱されるために生じたものと考えられる。このため、その遺物が本来どの遺構に所属してどの資料と共伴するのか判別が難しくなっている。このような状態の中で遺構一括資料を紹介する方法で報告を行うと、遺構一括資料がどの程度有効なまとまりであるかといった疑問が生じ、報告に際しては同じ遺物を何度も紹介する煩雑さが障害となる。したがって99B区という調査区全体を一つのまとまりと認識して記述を進めていき、具体的には産地材質別に報告する方法を採用した。

（2）資料の紹介

A　瀬戸美濃窯産陶器（第76～91図1491～1927）

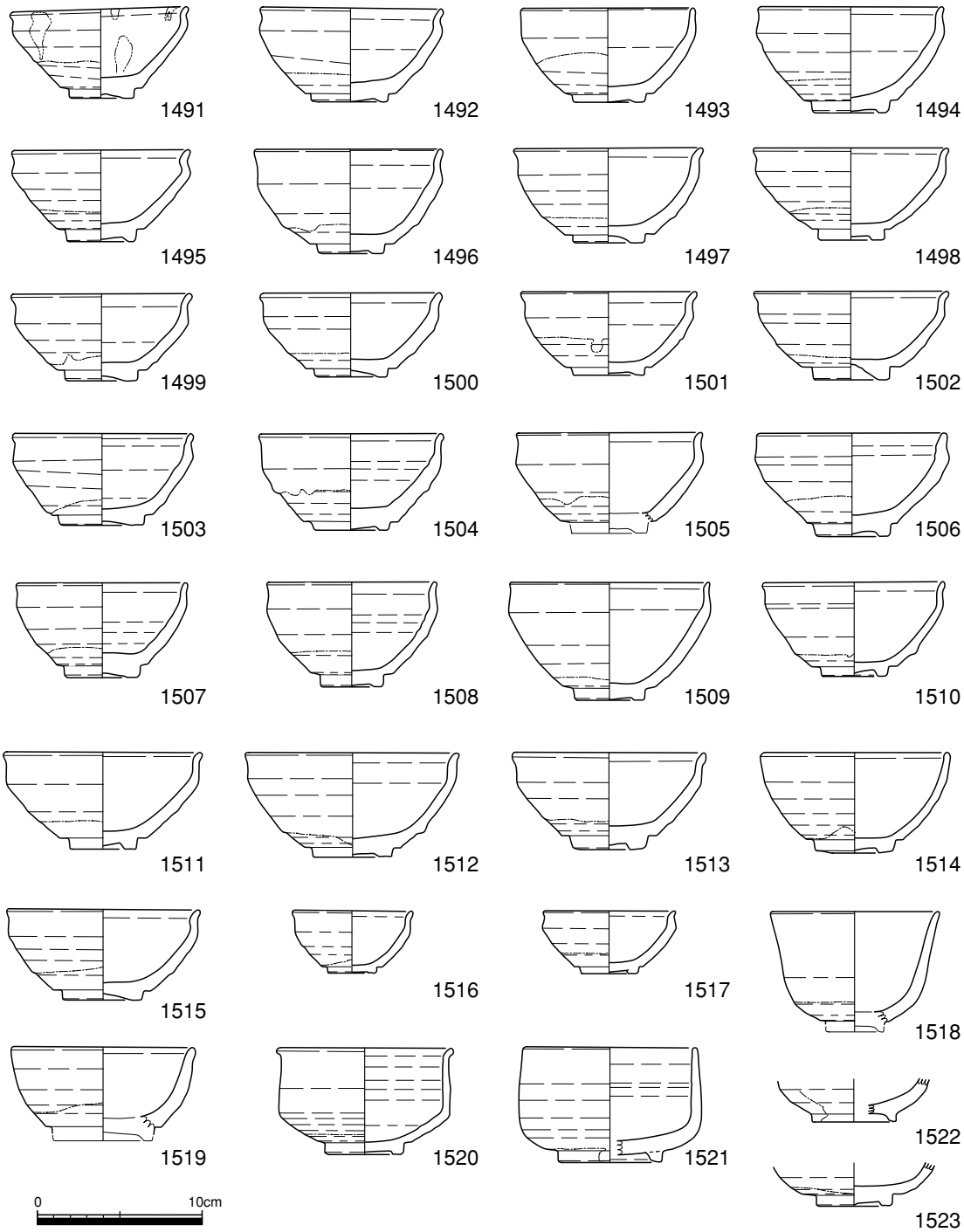
99B区から出土した瀬戸美濃窯産陶器は全部で4181点（接合前破片数）が出土した。これらは碗類、皿類、鉢類、擂鉢、大形製品、小形製品などに大別ができる。このうち、碗類には天目茶碗、小天目茶碗、丸碗、端反碗、沓茶碗、小碗、小杯、仏餉具などがある。皿類には縁釉皿、端反皿、丸皿、折縁皿、稜皿、内禿皿、ひだ皿、菊皿、志野丸皿、重圏皿など多種多様な製品が存在する。鉢類には浅鉢、深鉢、向付、大皿、盤などがあり、大形製品には建水、水指、緒桶、匣鉢、祖母懐壺、双耳壺、徳利、花瓶、甕などが、小形製品には茶入や水注などがある。

主要な器種別の出土量は接合前破片数で、天目茶碗が883点（瀬戸美濃窯産陶器全体の中で約21％：以下同様）、その他の碗類が161点（約4％）、重圏皿が206点（約6％）、重圏皿を除く皿類が1141点（約27％）、鉢類が181点（約4％）、擂鉢が934点（約22％）、大形製品が211点（約5％）、小形製品が18点（約0.5％）となっている。従来の清須城下町の中の瀬戸美濃窯産陶器の出土傾向と同様に、天目茶碗と小皿類と擂鉢の主要3器種が多い傾向を読み取ることができる。ここでは器種別に遺物の紹介を進める。

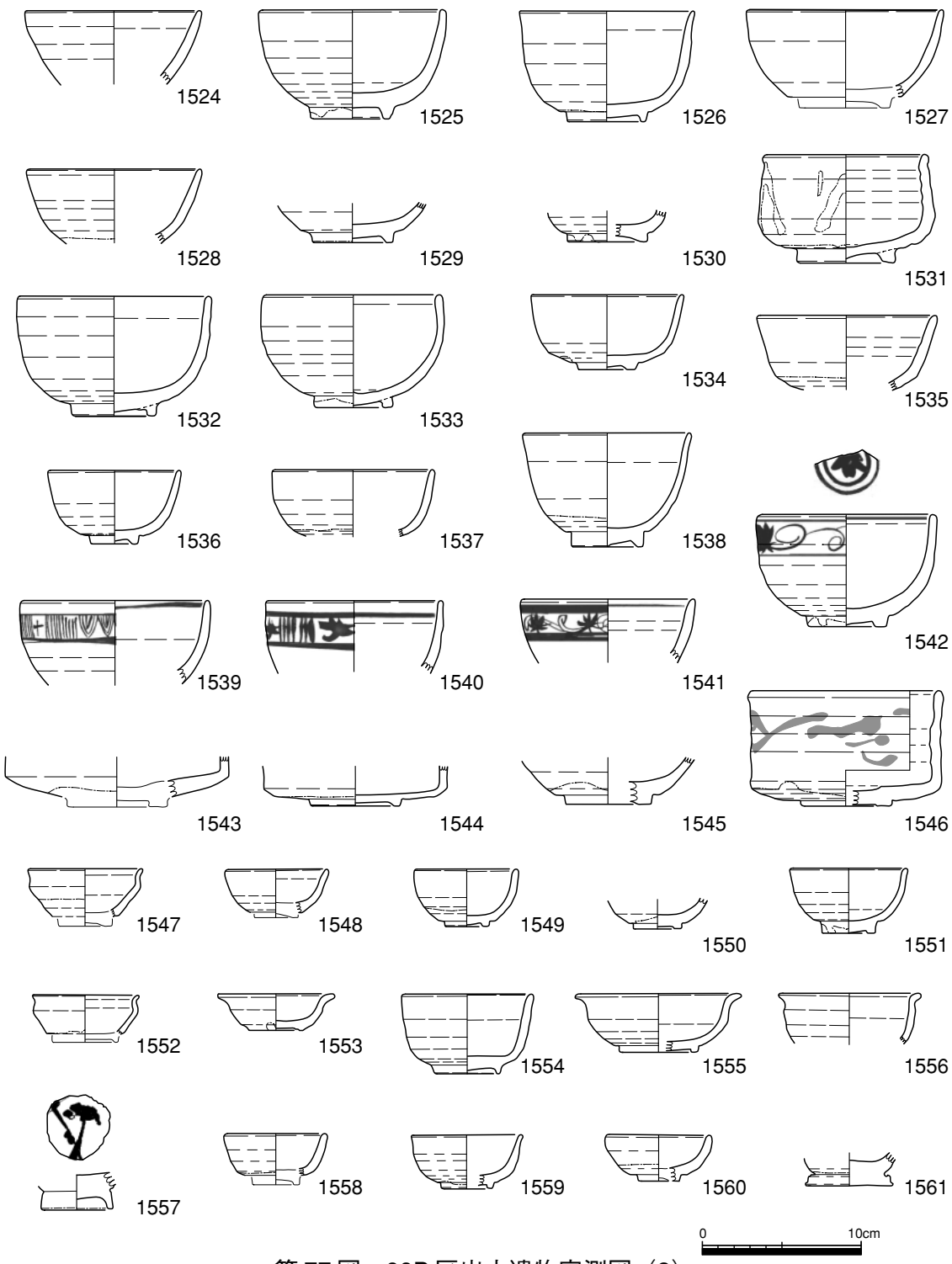
（A）天目茶碗（第76図1491～1515）

天目茶碗には様々な形状のものが存在する。1類は体部が直線的に逆ハの字状に開き内反高台となるもの（1491）、2類は輪高台で体部が直線的に開き口縁部が直立しS字状に屈曲するものでやや小振りなもの（1492・1495・1498・1511）、3類は高台中央部が緩やかに窪む内反高台で体部がやや丸みを帯びるもの（1497）、4類は輪高台で体部がやや丸みを帯びて口縁部に至り端部が短くS字状に屈曲するもの（1493・1494・1496・1512）、5類は内反高台で体部が直線的に開き口縁部のくびれが緩やかでやや高く全体的に小振りなもの（1499・1500・1502・1503・1515）、6類は輪高台で口縁部のくびれが緩やかでやや高く全体的に小振りなもの（1501）、7類は底部から体部にかけて器壁が厚く口縁部が直立しS字状に屈曲するもの（1504・1506・1507・1513）、8類は輪高台で口縁部のくびれがほとんど見られないもの（1514）、9類は輪高台で口縁部のくびれが弱くやや内側に傾くもの（1508）、10類は輪高台で口縁部のくびれが弱く器高が高いもの（1509）である。1491は鉄釉の上に灰釉を流し掛けた製品で、流し掛けを施した配置は平面形でみて十字の位置に4ケ所行っている。1502は外面下半部に非常に薄い錆釉を施し、高台端面に回転糸切痕が残存するものである。

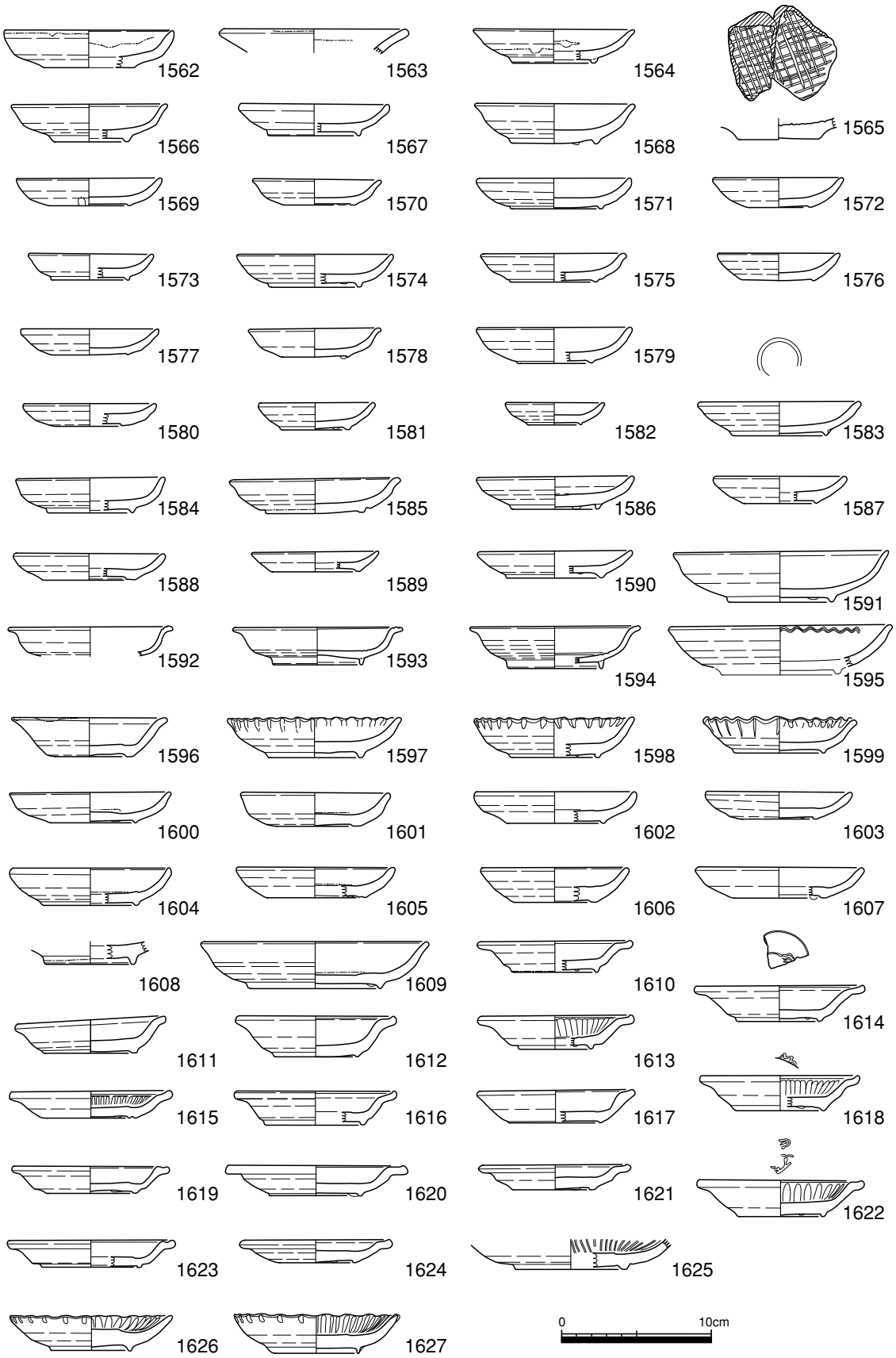
上記のような分類を藤澤良祐の大窯編年に当ては



第 76 図　99B 区出土遺物実測図（1）



第 77 図　99B 区出土遺物実測図（2）



第 78 図　99B 区出土遺物実測図（3）

めるとおおよそ1類は大窯第2段階後半、2類～4類は大窯第3段階後半、5類～8類は大窯第4段階、9類と10類は連房式登窯第1小期に各々対応すると考えられる。この他にも古瀬戸後Ⅳ期新段階に位置付けられるものや、登窯第2小期以降に属するものもいくつかはみられる。ただし、出土量からみると、最も多いのは大窯第3段階の185点（瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗全体の中で約22%）と大窯第4段階の174点（約21%）であり、大窯第3段階か第4段階か特定できない373点を含めると全体の約88%を占めている。また、登窯第1小期以降に属するものも63点存在する。このように検討すると、天目茶碗の時期的な主体は大窯第3段階から第4段階までの期間にあるといえよう。

（B）**丸碗**（第76・77図1519～1542）

半筒碗や筒形碗も含めて丸碗としてここでは一括して報告する。丸碗も様々な形状が存在するが、大窯前半以前に属するものはほとんど無く、大窯第3段階後半以降のものが多い。

1類は体部が緩やかに立ち上がり腰が張らない付高台のタイプで灰釉が施されたもの（1525・1529）である。1527と1528も1類に属すると思われ、これらは大窯第3段階に属すると考えられる。2類は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる付高台のもの（1526・1532・1533）で、鉄釉が施される。3類は腰が張ってやや屈曲するように立ち上がり体部が内傾する付高台のもの（1531）である。1531は鉄釉の上に灰釉を部分的に流し掛けている。4類は体部が緩やかに立ち上がり腰が張らない削り出し高台のもの（1519・1539～1542）で、長石釉が施される。1539～1542は外面上位に2条の圏線内に紋様が描かれた鉄絵が存在する。これらは登窯第1小期に属する。5類は腰がしっかりと張って口縁部がやや内傾するタイプ（1521）で、筒形碗と呼ばれるものである。6類は削り出し高台で体部が屈曲して直立しながら口縁部に至り口縁端部が短く外折するやタイプで器壁が比較的薄い筒形碗（1520）である。紫色の鉄釉が掛けられており、登窯第1小期に属する資料である。7類は削り出し高台で体部がやや直立ぎみに立ち上がるもの（1538）で、器高が高く口縁部がわずかに外反する。

（C）**その他の碗類**（第77図1518・1543～1561・1766）

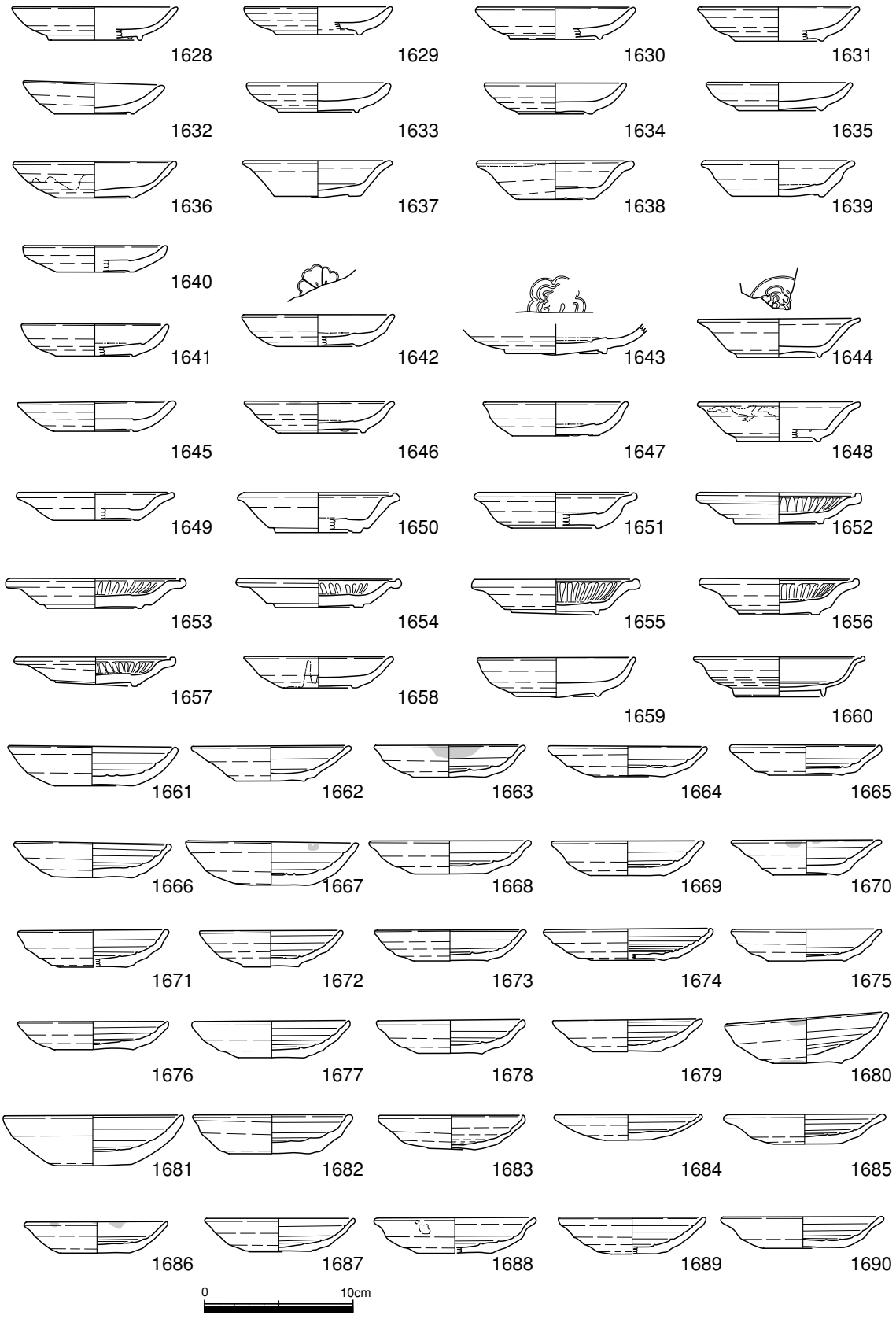
天目茶碗と丸碗に属さないものをここで一括して報告する。

1543と1544は腰部が明瞭に屈曲する沓茶碗である。1543はいわゆる引き出し黒と呼ばれる漆黒色の釉調を呈しており、底部外面は露胎となっている。ロクロ成形の製品で大窯第4段階に属する。1544は薄い器壁を持ち鉄釉が掛けられたもので、底部内面（見込み）に茶溜り（一段下がった浅い窪み）は存在しない。1766は黒織部茶碗で、外面に長石釉鉄絵に灰釉や銅緑釉が流し掛けられたもので登窯第1小期に属する。1518と1545は端反碗で、前者は銅緑釉が掛けられた登窯第1小期に属するもので、後者は灰釉が掛けられた古瀬戸後Ⅳ期に属するものである。1547と1552は小天目茶碗である。1547は大窯第3段階に、1552は大窯第4段階に属する。1548～1551・1557～1560は丸碗形の小碗で、削り出し高台を持ち口縁部がやや開くものである。1557は高台部が高く内面に鉄絵が描かれており、登窯第1小期に属する。1553～1556は小杯で、1553・1554は長石釉が、1556は灰釉が掛けられている。1553・1555・1556は口縁部が大きく外反するものである。1554は体部から口縁部が直立しながら立ち上がる。小杯はいずれも大窯第4段階に位置付けられる。1561は鉄釉が施された仏餉具で、大窯第1段階に属する。

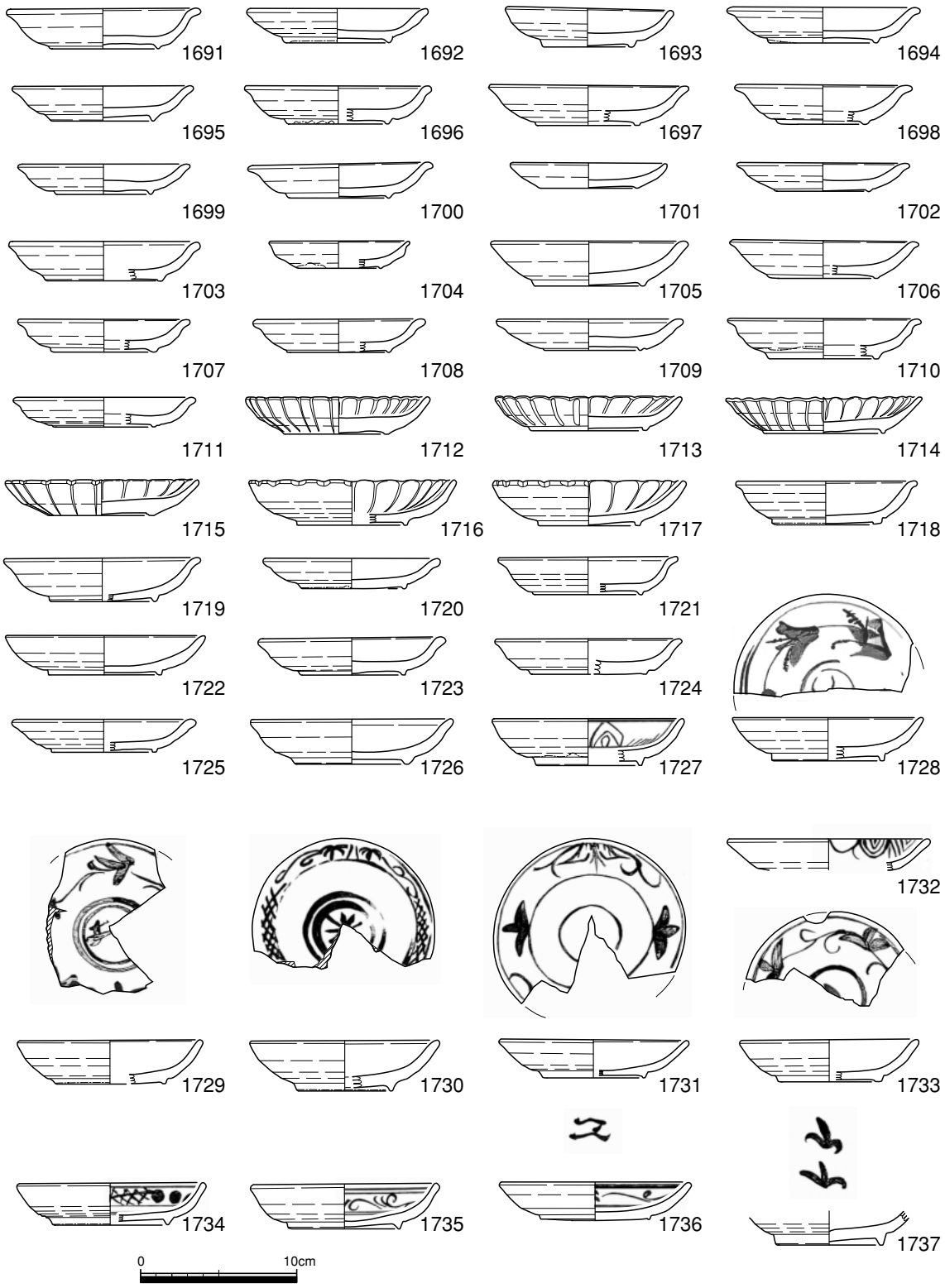
（D）**皿類**（重圏皿を除く：第78・80図1562～1660・1691～1737）

ここでは、重圏皿を除く施釉された皿類を取り扱うこととする。具体的には、縁釉皿（1562・1563）、卸皿（1565）、端反皿（1564・1566・1658・1659）、焼締端反皿（1592～1594・1660）、丸皿（1567～1591・1628～1636）、稜皿（1596・1637～1639）、ひだ皿（1597～1599）、反り皿（1644・1648）、内禿丸皿（1600～1607・1640～1643・1645～1647）、輪禿皿（1609）、折縁皿類（1610～1624・1649～1657）、菊皿（1625～1627）、志野丸皿（1691～1711・1718～1737）などが存在する。

縁釉皿には口縁部が比較的直立ぎみになるもの



第 79 図　99B 区出土遺物実測図（4）



第 80 図　99B 区出土遺物実測図（5）

（1562）とやや外反するもの（1563）がある。前者は古瀬戸後Ⅳ期新段階、後者は大窯第1段階に位置付けられる。卸皿は底部のみが残存しており、古瀬戸後期に属する。端反皿には底部下半部が露胎のもの（1564・1658）と全面施釉されたもの（1566・1659）がある。1564は大窯第1段階に、1566・1658・1659は大窯第3段階に属する。焼締端反皿は付高台がやや高く、口縁部が強く外反するものである。底部内面および口縁端部内面に沈線が巡っている。胎土が灰色で焼き締められており、大窯第3段階に位置付けられる。

丸皿には底部に輪トチンの痕跡が残存するもの（1567・1568など）と円錐ピンが残存するもの（1569・1570）があり、後者はおおよそ大窯第4段階後半に属する資料である。その他の丸皿も釉薬は光沢を持たない乳白色や黄白色の発色をした灰釉が施されたものが多く、大窯第3段階から第4段階に属するものである。1587は灰志野風の釉薬が施されている。1591は口径が約14cmを測るやや大きめの鉄釉丸皿で、大窯第3段階前半に位置付けられる。1595は口径が約14cmを測る灰釉丸皿で口縁部内側に波状紋が施される。1636は外面下半部に錆釉が施された灰釉丸皿で、底部が碁笥底となっている。

稜皿は底部が碁笥底状になり口縁部にかけて体部が大きく外反するもので、鉄釉が施されている。外面下半部に錆釉が施されるもの（1596・1639）や、内面底部（見込み部）に釉薬が拭き取られ露胎となるもの（1639）もある。ひだ皿は鉄釉の製品のみが確認され、大窯第3段階に属する資料である。反り皿は灰釉が施され、1644は内面に印花が認められる。内禿丸皿には底部内面の露胎部に明瞭な段差を有するもの（1603・1604など）と段差を全く持たない通常の丸皿の形状をしたもの（1600・1601など）に分けることができる。輪禿皿（1609）は露胎部分が段差状に盛り上がり、口径と器高が大きい大振りなものである。大窯第4段階に位置付けられる。

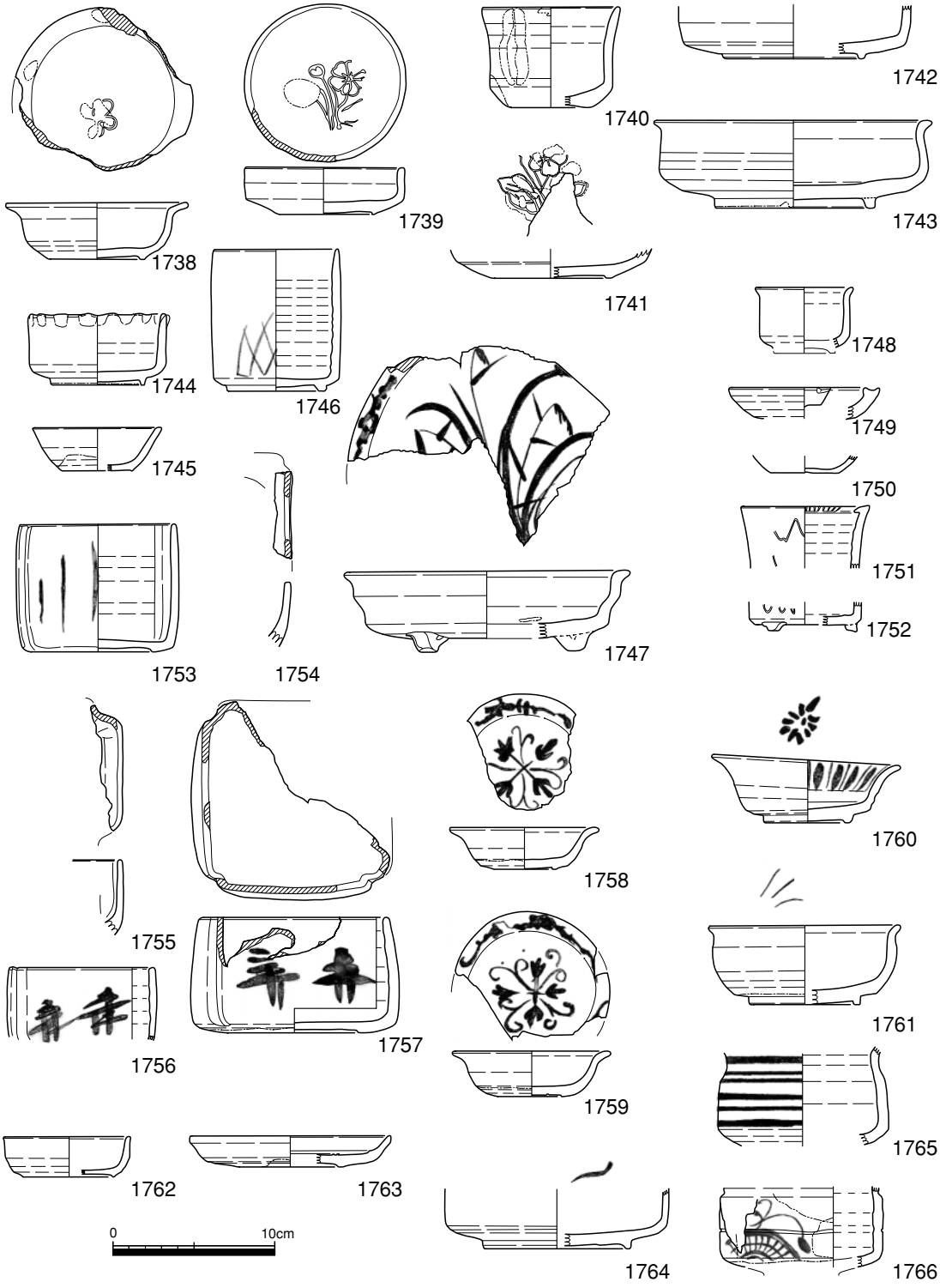
折縁皿はいくつかの基準で分類ができる。底部内面の状態から、底部内面にも釉薬が施されるもの（1610～1612など）と内禿となり露胎部に明瞭な段差を有するもの（1615など）と内禿で段差を全く持たないもの（1620など）に区分できる。体部内面の状態から、そぎが入るもの（1613など）と入らないもの（1610など）に分けられる。形状からは、器高が高く折り曲げられた口縁端部が断面三角形状に尖るタイプと（1610・1612など）と、器高がやや低く口縁端部が丸くなっているもの（1619・1623など）、口縁端部が水平となり器高がさらに低くなるもの（1621・1624）に分けることができる。これらは順に大窯第3段階後半に、大窯第4段階前半に、大窯第4段階後半に各々位置付けられよう。1614などには底部内面（見込み）に印花が押印されている。1626と1627は内禿ソギ皿で口縁部が丸皿の形状となっている。1625も同様の製品の可能性がある。

志野丸皿は大半は底部に円錐ピンの付着した痕跡が残存するもので、鉄絵が施されたもの（1727～1737）と施されていないものがある。1728～1732は大窯第4段階後半に、1727と1733～1736は登窯第1小期に位置付けられる。1737は登窯第2小期に属し宿場町期の遺物となる。志野菊皿は内面が花弁状に成形されたもので、外面に花弁を描く沈線が存在するもの（1712～1715）と存在しないもの（1716・1717）がある。後者の方が器高が高く古い様相を呈している可能性も考えられる。

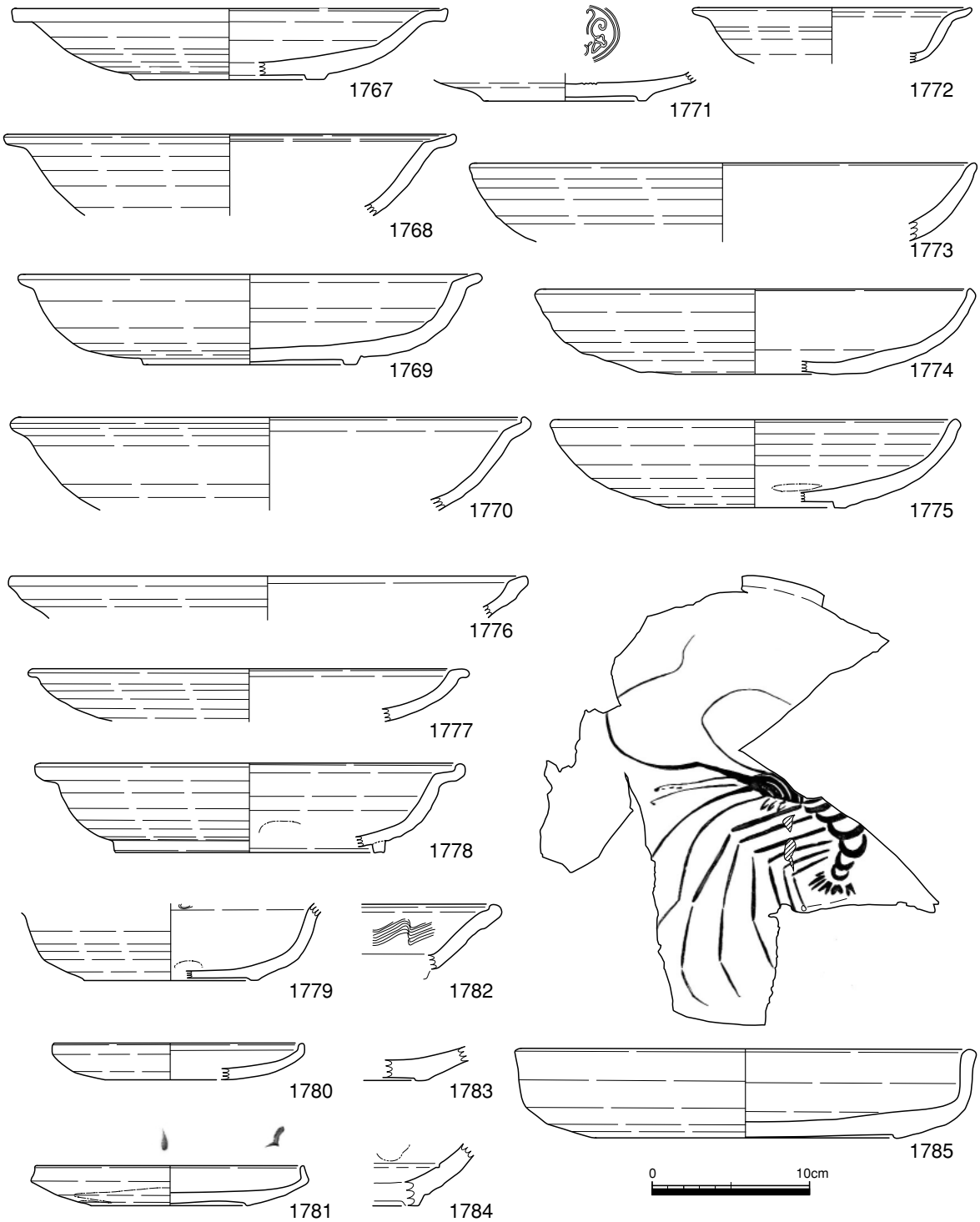
（Ｅ）**重圏皿**（第79図1661～1690）

重圏皿は大きく、無釉で黄白色や灰白色などの胎土を持ち圏線が不明瞭で螺旋状となる1類（1674）と、無釉で焼き締められた黒灰色などの胎土を持ち同心円の圏線が明瞭な2類（1661～1677など）と、焼き締められずに錆釉を掛けて作られ同心円の圏線が明瞭な3類（1678～1682・1690）に分けることができる。99A区と同様に、数量的には2類が最も多く、1類は少ない傾向を読み取ることができる。

2類の重圏皿はさらに、器高が高く体部から口縁部にかけて直線的に開く2a類（1661・1667など）と、器高がやや高く体部中央が丸みを帯び次に口縁部に向かって外反する2b類（1663・1668など）と、器高がやや低く体部中位がやや丸みを帯びて口縁部に向かって直線的に開く2c類（1673～1675など）と、器高が非常に低く底部から口縁部にかけて緩やかに開く2d類（1684・1685など）に分けることが可能であ



第 81 図　99B 区出土遺物実測図（6）



第 82 図　99B 区出土遺物実測図（7）

る。99A区で記述したように、2a類→2b類→2c類→2d類という変遷過程を推測できるかも知れない。

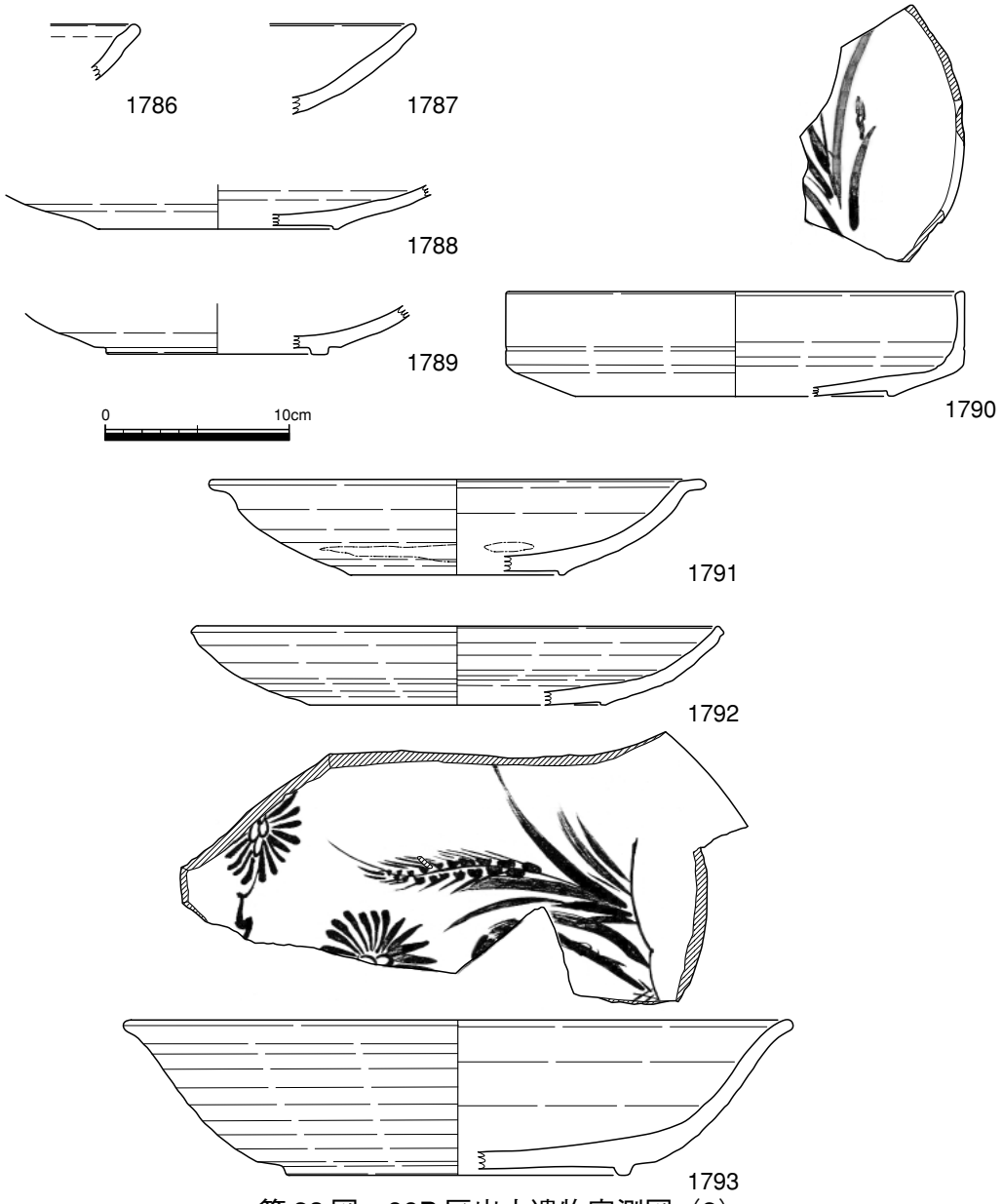
3類の重圏皿はさらに、2b類と同様な規模と形状の3a類（1678・1679）と、器壁が非常に厚く器高がやや高い3b類（1682）と、さらに器高が高く作りが粗雑になる3c類（1680・1681）に分類できる。作りの粗雑さを手がかりに考察すると、3a類→3b類→3c類という変遷過程を推測できるかも知れない。

この重圏皿はタールが付着するものが多いが、付着する状態は口縁部の一部分に1カ所ないし数カ所認められるもの（1667など）が存在するものの、内外面のほぼ全体に付着するタイプは確認できなかった。

（F）**向付・盤類**（第81～83図1738～1764・1778～1781・1785・1792・1793）

向付・盤類は黄瀬戸釉や長石釉が施された製品が多く認められ、大窯第4段階から登窯第1小期に属する資料が大半を占める。

1738・1739・1741・1742・1779は黄瀬戸向付である。1738は直立する体部に外側に折れ曲がる口縁部



第83図　99B区出土遺物実測図（8）

を持つもの、1739は口縁部が直立するもので、両者とも内面に刻紋が描かれ緑釉のタンパンが施されている。底部は碁笥状に作られている。1740は緩やかに外反する口縁部を持つ湯呑状の向付で、灰釉に鉄釉が流し掛けられている。1743は直立する体部に外折する口縁部が付く向付で灰釉が施されている。

1744は口縁部がひだ状となる志野向付、1745は碁笥底となる小鉢状志野向付、1746は器高が高い筒向付である。1753～1757は四方志野鉄絵向付で、体部が直立するもの（1753～1756）と体部がやや内傾するもの（1757）がある。1758と1759は小形の皿状志野鉄絵向付で内面に十字花紋が描かれている。両者は本来ワンセットで存在したものと考えられる。1760と1761は登窯第1小期に属する向付で、後者は釉の下に墨書らしき線が描かれている。1764は灰志野向付で内面に鉄絵が施されている。

盤には口縁部が内傾する小形のタイプ（1780・1781）、体部が屈曲し口縁部が直立するタイプ（1785・1792）、口縁端部が上方に折り返されるタイプ（1778）と口縁部が大きく外反するタイプ（1793）がある。1785には海老紋が、1793には草花紋が鉄絵によって描かれている。

（G）**大皿**（第82・83図1761～1777・1782～1784・1786～1791）

大皿には灰釉が施されたもの（1777・1782～1784・1790）、鉄釉が施されたもの（1769・1770・1773・1775・1789）、錆釉が施されたもの（1767・1768・1771・1772・1776・1787）、露胎で焼締陶器であるもの（1774・1788）が存在する。

これらは、口縁部では内彎するもの（1773～1775など）と外反し折縁になるもの（1767～1770など）に分けられ、底部では削り出し輪高台になるもの（1767・1771など）と碁笥底になるもの（1775・1788など）に分類できる。1771は見込みに印花紋が残存し、1784は銅緑釉が流し掛けられている。1775や1791のように底部内面に重ね焼きのため露胎となった部分が残存するものもある。

（H）**鉢**（第92図1922・1923）

体部から口縁部が逆ハの字状に開く大形製品を鉢として一括するが、99B区ではそれほど資料は多くない。1922と1923は両者とも鉄釉が施され、前者は大窯期の深鉢、後者は古瀬戸後Ⅳ期の鉢類である。

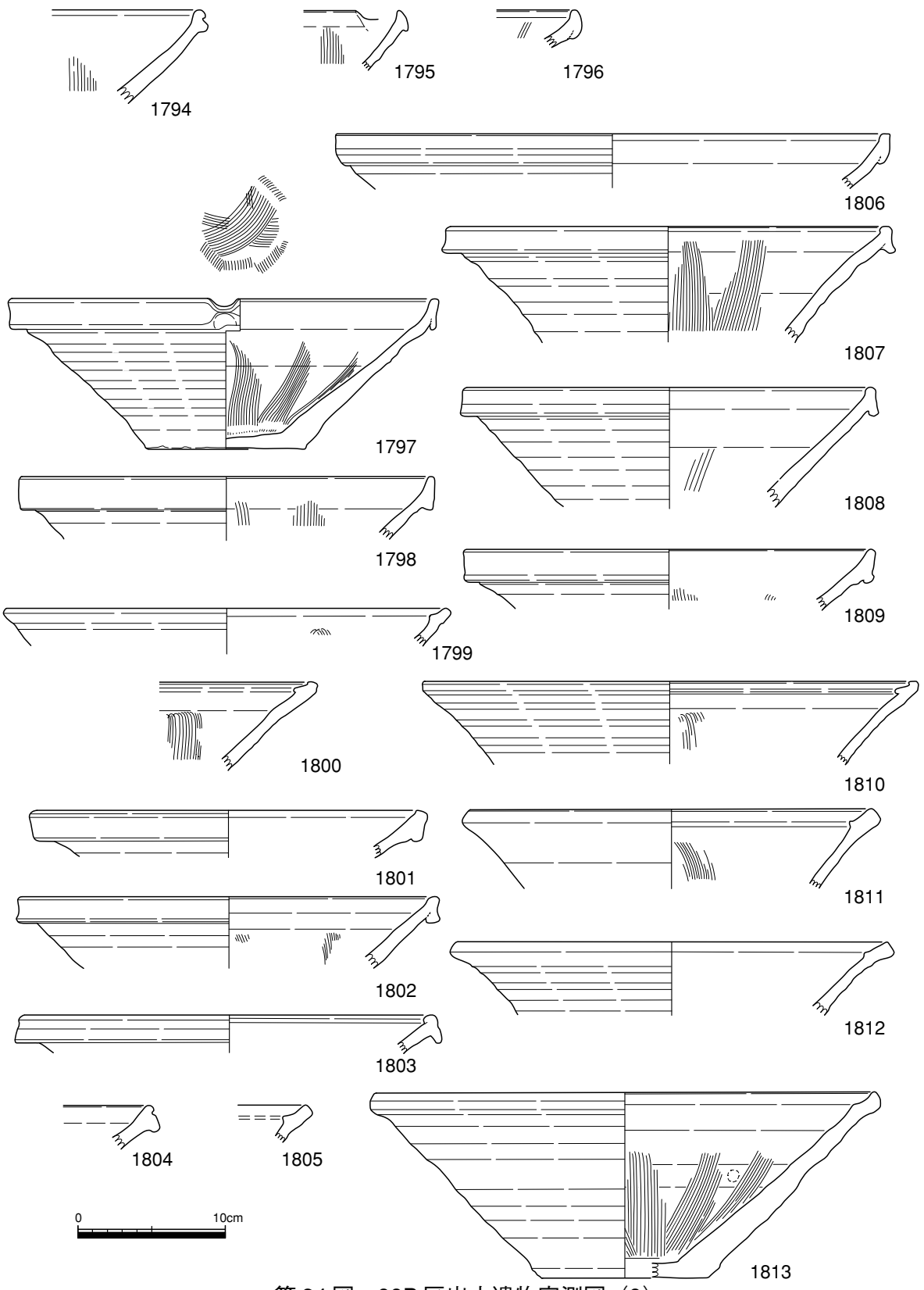
（Ⅰ）**擂鉢**（第84～89図1794～1860）

擂鉢は大きく口縁端部を外側に折り返して縁帯を形成するⅠ類と、口縁端部を内側に折り返すものあるいは外折するⅡ類に大別できる。

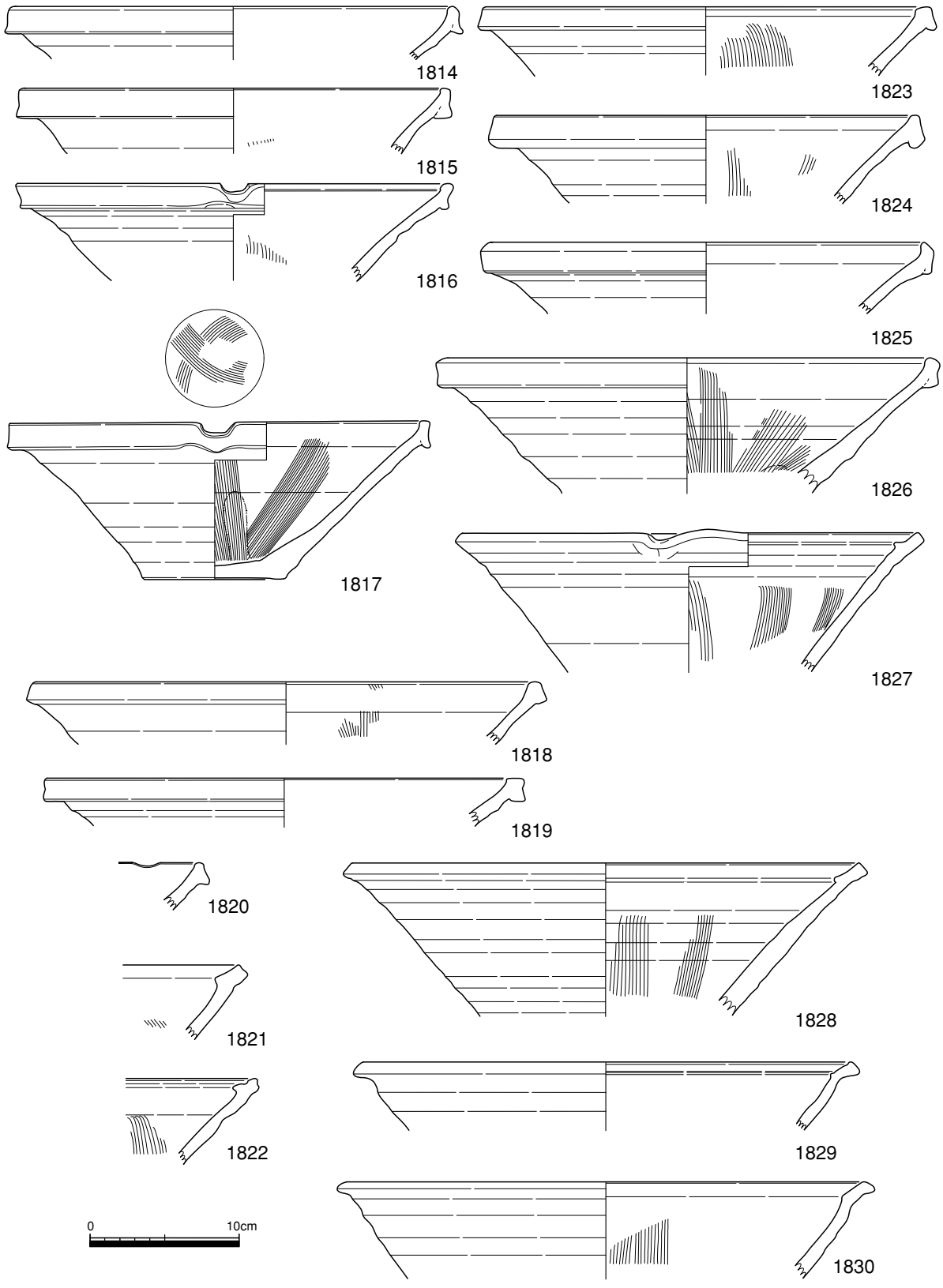
Ⅰ類はさらに9類に細分が可能である。1類は口縁端面が凹線状に窪むタイプ（1794）である。2類は口縁部が断面三角形状で下端が少し垂れ下がるもの（1795）である。3類は垂れ下がった縁帯の下端部が断面三角形状あるいは丸まっているもの（1796・1798など）である。4類は垂れ下がった縁帯の下端部が下方に伸びるもの（1797など）である。5類は垂れ下がった縁帯の下端部が体部に向かってナデつけられたもの（1825など）である。6類は垂れ下がった縁帯の下端部が断面三角形状となり横方向に伸びるもの（1847など）である。7類は垂れ下がった縁帯の上端部が上方に伸びるもの（1825など）である。8類は垂れ下がった縁帯の上端部に面を有するもの（1801など）である。9類は口縁部上端面が平坦で縁帯の高さが低くなるもの（1818・1819など）である。

Ⅱ類はさらに6類に細分が可能である。10類は内側に折り返された口縁端部の上面がほぼ水平で器壁が肥厚するタイプ（1831・1838など）である。11類は内側に折り返された口縁端部の上面がわずかに内側に傾くが肥厚しないタイプ（1841など）で、断面三角形状となっている。12類は折り返された口縁部が同じ厚さとなり断面が隅丸方形状となるもの（1845・1853など）である。13類は外側に折り曲げられた口縁部が断面方形になるタイプ（1811～1813など）である。14類は外側に折り曲げられた口縁部の上面や端面や下面が横ナデされ口縁部が外折するタイプ（1828～1830など）である。15類は外側に折り曲げられた口縁端部面が幅広く広がりT字状に近い形となるタイプ（1836）である。

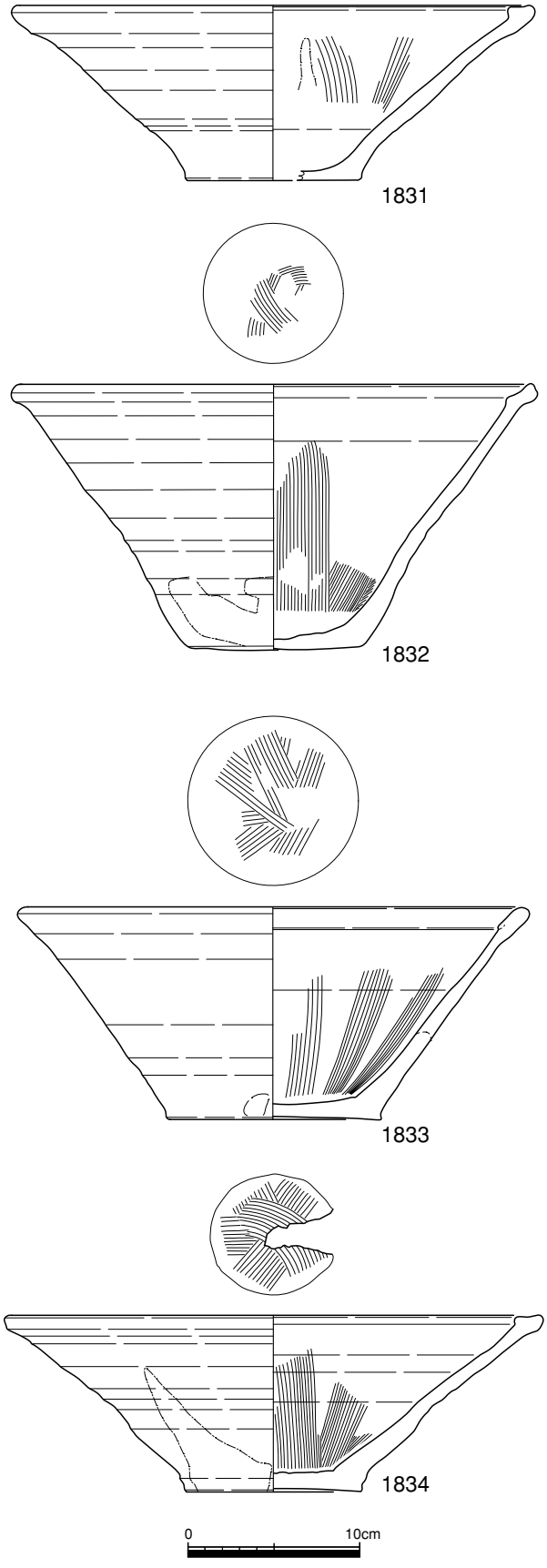
これらの分類と藤澤良祐の編年との対応関係はおおよそ次の通りである。1類と2類は大窯第1段階、3類と10類は大窯第3段階前半、4類と5類と11類と12類は大窯第3段階後半、6類～8類と13類は大窯第4段階前半、9類と14類は大窯第4段階後半、15



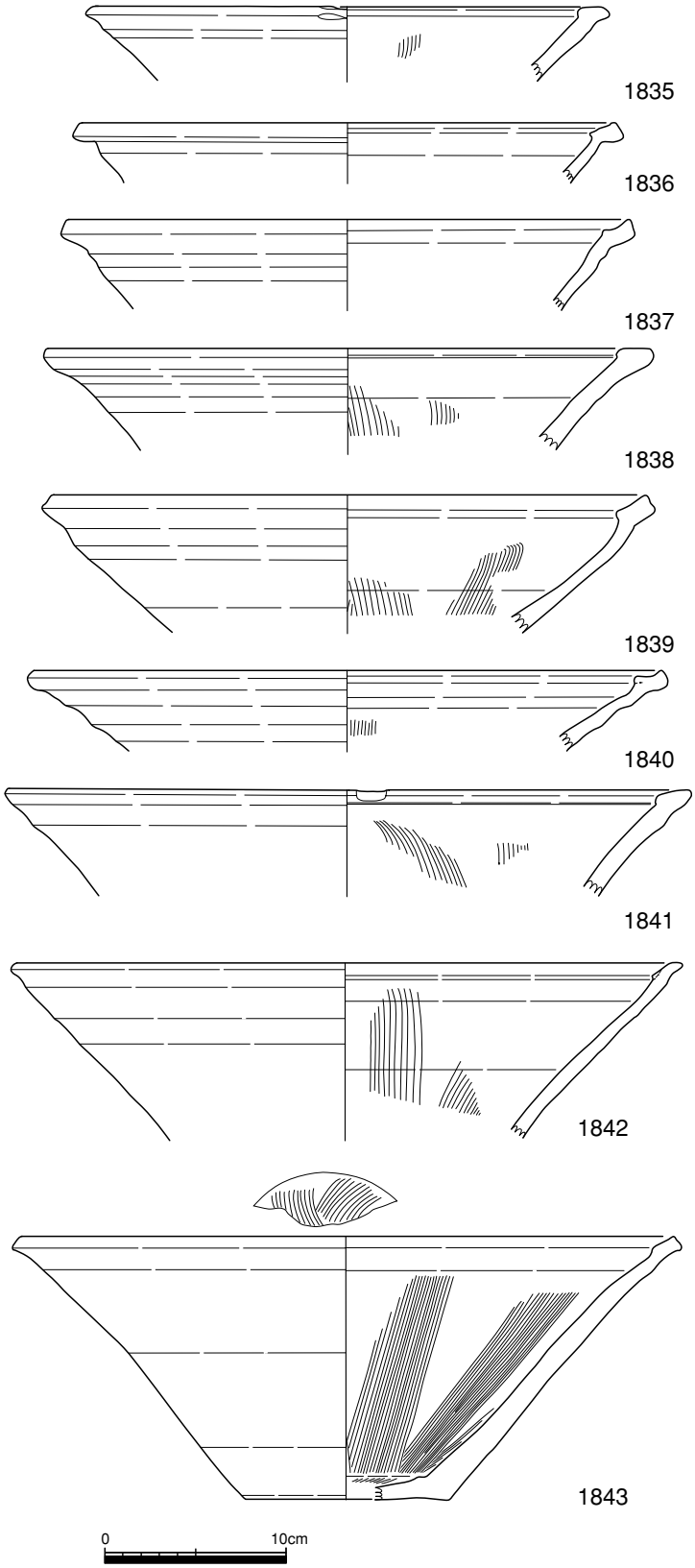
第 84 図　99B 区出土遺物実測図（9）



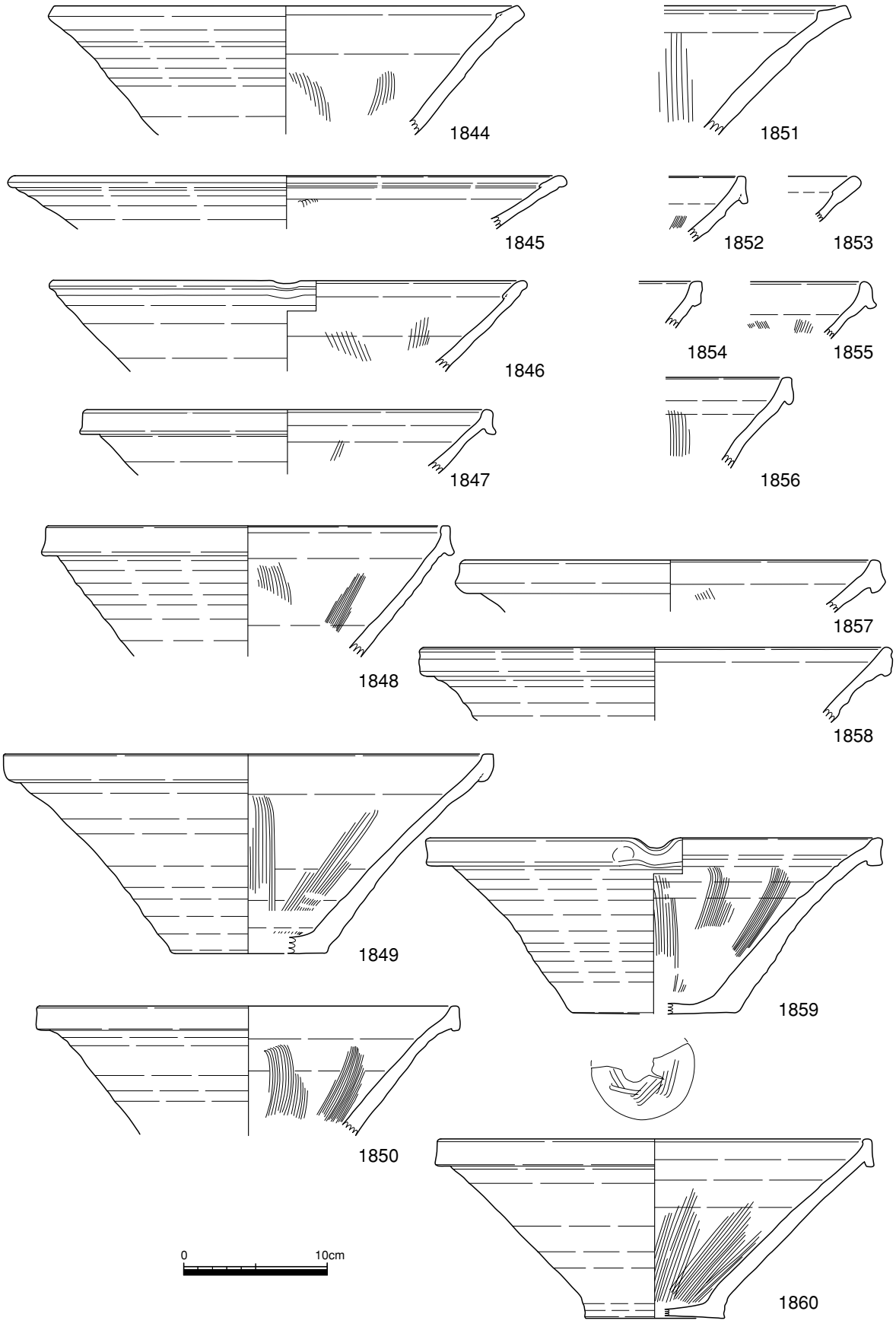
第 85 図　99B 区出土遺物実測図（10）



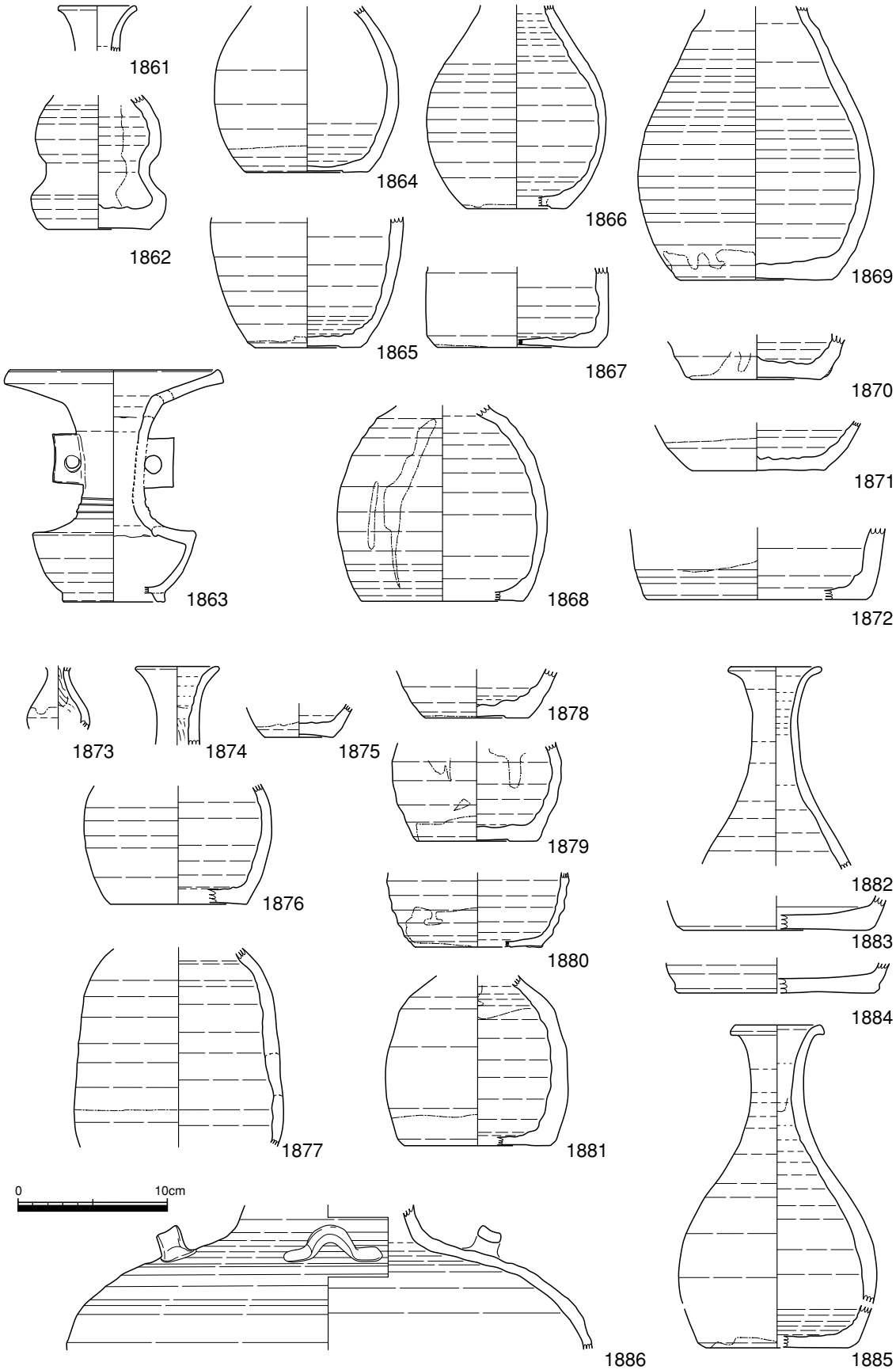
第 86 図　99B 区出土遺物実測図（11）



第 87 図　99B 区出土遺物実測図（12）



第 88 図　99B 区出土遺物実測図（13）

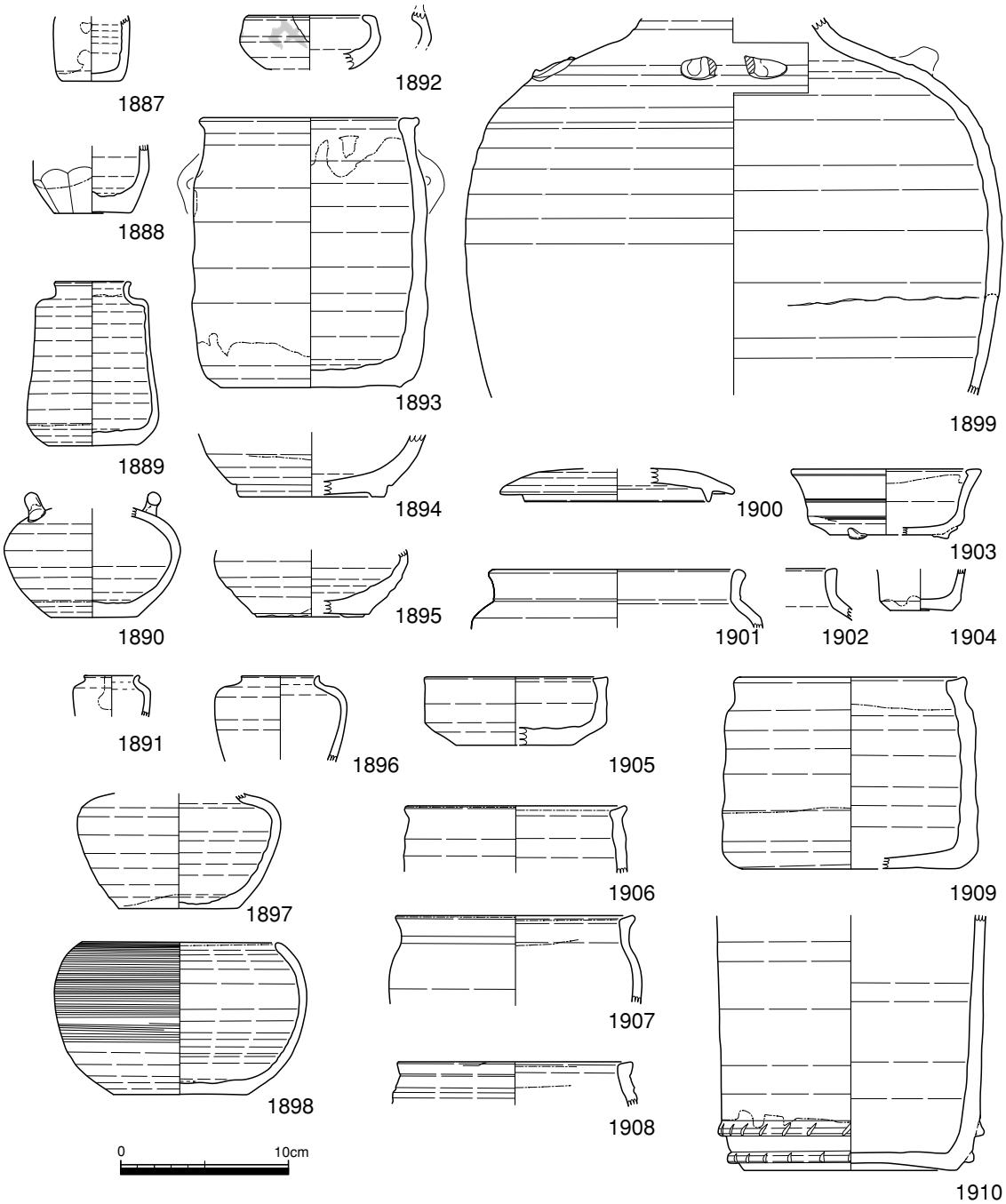


第 89 図　99B 区出土遺物実測図（14）

類は登窯第1小期に属するものである。

（J）筒形容器類（第91・92図1905～1921）

筒形容器類には建水、水指、緒桶、匣鉢などの器種があるが､破片では区分が難しい側面があるので、99A区と同様に、口縁部などの形状で区分する。口縁端部の上端に面を持つタイプ（1905・1913・1914・1917）と口縁端部が外側に折れるタイプ（1906・1920）と口縁端面が斜めになるタイプ（1909・1912・1915・1916・1921）がある。1907と1908は口縁下部がやや括れ壺類になるかも知れない。1909は紫色の錆釉が塗布された水指で下半部は露胎となっている。1910と1911は下半部に結桶のタガを模した突帯が巡る緒桶で鉄釉が施されている。1918と1919は片口部分で筒形容器の体部に別の粘土板で張り付けて作

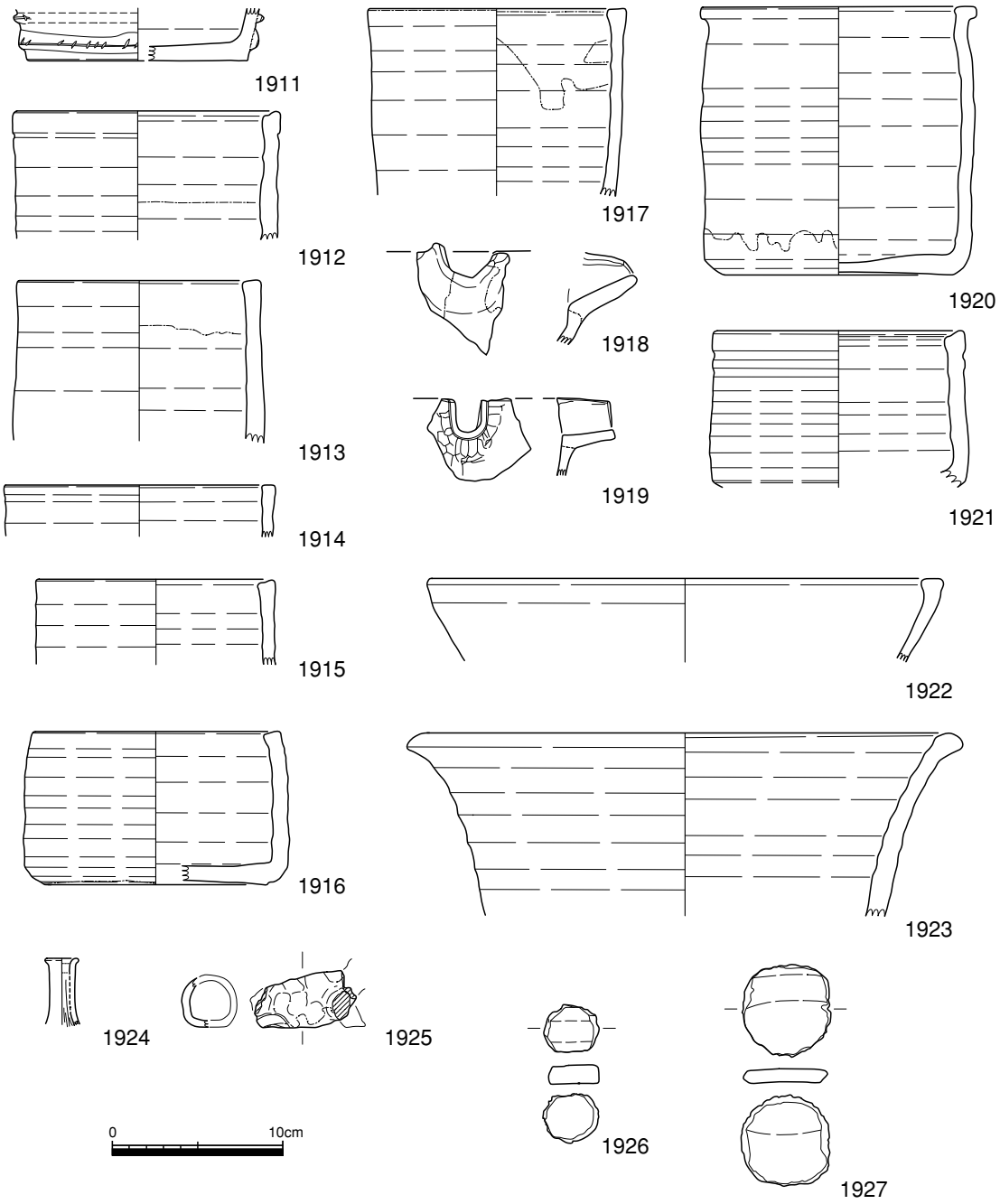


第90図　99B区出土遺物実測図（15）

られている。これらはおおよそ大窯第3～4段階に属するものである。

（K）小形製品（第91図1887～1891・1895～1897など）

小形製品には茶入、耳付水注などがある。1887と1888は口縁部が遺存しない茶入で、後者は底部が縦方向にヘラケズリ調整が施されている。1889は鉄釉肩衝茶入で器壁が薄く作られている。登窯第1小期に属する。1891は灰釉に銅緑釉を流し掛けた茶入で、大窯第4段階後半に属する。1896は大窯第1段階に属する、99B区では古いタイプの茶入である。1890は耳付水注で内面に褐色付着物が残存する。



第91図　99B区出土遺物実測図（16）

1897は底部外面に錆釉が施された鉄釉壺である。また、1873と1924は登窯第1小期に属する小瓶、1925は動物形を呈した水滴である。

（L）**大形製品**（第90図1861～1872・1876～1885など）

大形製品として一括したものには、徳利（1861・1864～1872・1876～1885など）、祖母懐壺（1886・1899）、花瓶（1862・1863）などが存在する。99A区に比べると器種のバラエティーは少なく徳利が多い点が特徴となっている。

徳利の口縁部はラッパ状に開き、端部がそのまま丸められるもの（1861・1874・1882）とやや厚くなるもの（1885）がある。底部は平底で回転糸切痕が残存するもの（1876）と、平底で回転ヘラケズリ痕が残存するもの（1867～1872など）と、蛇の目高台状に削り出されたもの（1864～1866）に分けられる。1865は灰釉徳利で大窯第4段階に属する。1866・1868～1870・1879は灰釉が流し掛けられた鉄釉徳利、1867・1871・1872・1877・1880・1881は外面下部に錆釉が施された鉄釉徳利である。1882は外面も露胎となる焼締陶器徳利で大窯第3段階に属する。1885は銅緑釉が施された大窯第2段階に属する徳利で内面は薄い錆釉が施されている。

花瓶は、瓢箪形を呈するもの（1862）と肩が著しく張り頸部に方形の板状耳が付くもの（1863）があり、両者とも錆釉が塗布されている。前者は大窯第3段階、後者は大窯第1段階に属するものである。1886・1899は大窯段階の祖母懐壺である。1893は紫色の錆釉が施された縦耳付口広有耳壺で、耳部は剥がれて欠損する。1898は内面は鉄釉が、外面は錆釉が施された無頸壺で、大窯第3段階の建水と考えられる遺物である。

（M）**その他の製品**（第91・92図1900～1904・1926・1927）

これまでに報告されなかったものをここで紹介する。1900は錆釉が施された蓋で、茶釜の蓋と推測される。1901と1903は茶釜の口縁部と推測され、直立する口縁部は短くなっている。1902は沈線が2ケ所巡る香炉であり、体部は外傾し大窯第3段階に属する。1926・1927は他の器種で作られた製品を転用したいわゆる加工円盤である。両者とも大形製品の破片を利用している。

B　土師器（第 93 ～ 97 図 1928 ～ 2069）

99B 区から出土した土師器は全部で 5391 点（接合前破片数）が出土した。これらは皿類、鍋釜類、その他の器種に大別ができる。このうち、皿類はロクロ調整土師器皿と非ロクロ調整土師器皿に区分できる。鍋釜類には内耳鍋、羽付鍋、釜、焙烙などが存在する。その他の器種としては火鉢、火熨斗（フライパン）状製品、小壺、焼塩壺、形代（犬）、土鈴などがあげられる。

主要な器種別の出土量は接合前破片数で、ロクロ調整皿が 2967 点（土師器全体の中で約 55％：以下同様）、非ロクロ調整皿が 209 点（約 4％）、鍋釜類が 2339 点（約 43％）となっている。従来の清須城下町の中の土師器の出土傾向と同様に、皿類と鍋釜類の主要２種の製品が多いことが分かる。ここでは器種別に遺物の紹介を進める。

（A）ロクロ調整皿（第 92 図 1928 ～ 1976）

99B 区出土のロクロ調整土師器皿については、99A 区と同様に、かつて筆者が分類したＡ類からＦ類までの区分を援用して報告する。99B 区出土資料は、99A 区と同様に、Ｅ類が最も多く、次いでＣ類、Ｆ類の順で多くなっている。一方、Ａ類とＢ類とＤ類は非常に少ない。

ロクロ調整土師器皿Ｃ類は次の5類に細分できる。Ｃ１類は口径が 10 ～ 12cm の規模で体部の腰が丸く張るものの口縁部が比較的直線的に開くタイプ（1928・1932 など）である。Ｃ２類は口径が 10 ～ 12cm の規模で体部の腰が丸く張り口縁部が比較的直立ぎみになるタイプ（1944・1945 など）である。Ｃ３類は口径が 10 ～ 12cm の規模で体部の腰が屈曲して口縁部が比較的直立ぎみになるタイプ（1935・1940 など）である。このＣ１類～Ｃ３類は底部内面中央部が凹み、底部外周部分が肥厚するものである。器高や形状に着目すると、Ｃ１類→Ｃ２類→Ｃ３類と変遷したことが推測される。

ロクロ調整土師器皿Ｅ類は次の5類に細分できる。Ｅ２類は口径が 10 ～ 12cm の規模で体部の腰が強く張り体部内面に弱い稜線を持つタイプ（1949・1955 など）である。Ｅ３類は口径が 10 ～ 12cm の規模で底部と体部の境界部分が屈曲し体部の内外面が凸凹するタイプ（1952・1953 など）である。これは内面に２～３条の弱い稜線が残るものである。Ｅ４類は口径が 10 ～ 12cm の規模で底部と体部の境界部分が屈曲し体部が緩やかに少し外反するタイプ（1960・1971 など）である。これらの分類は、形態の相違が暫移的であり明瞭には区分し難いものである。

ロクロ調整土師器皿Ｆ類は、体部の腰が屈曲して口縁部が逆ハの字状に開くタイプ（1973・1974 など）がある。

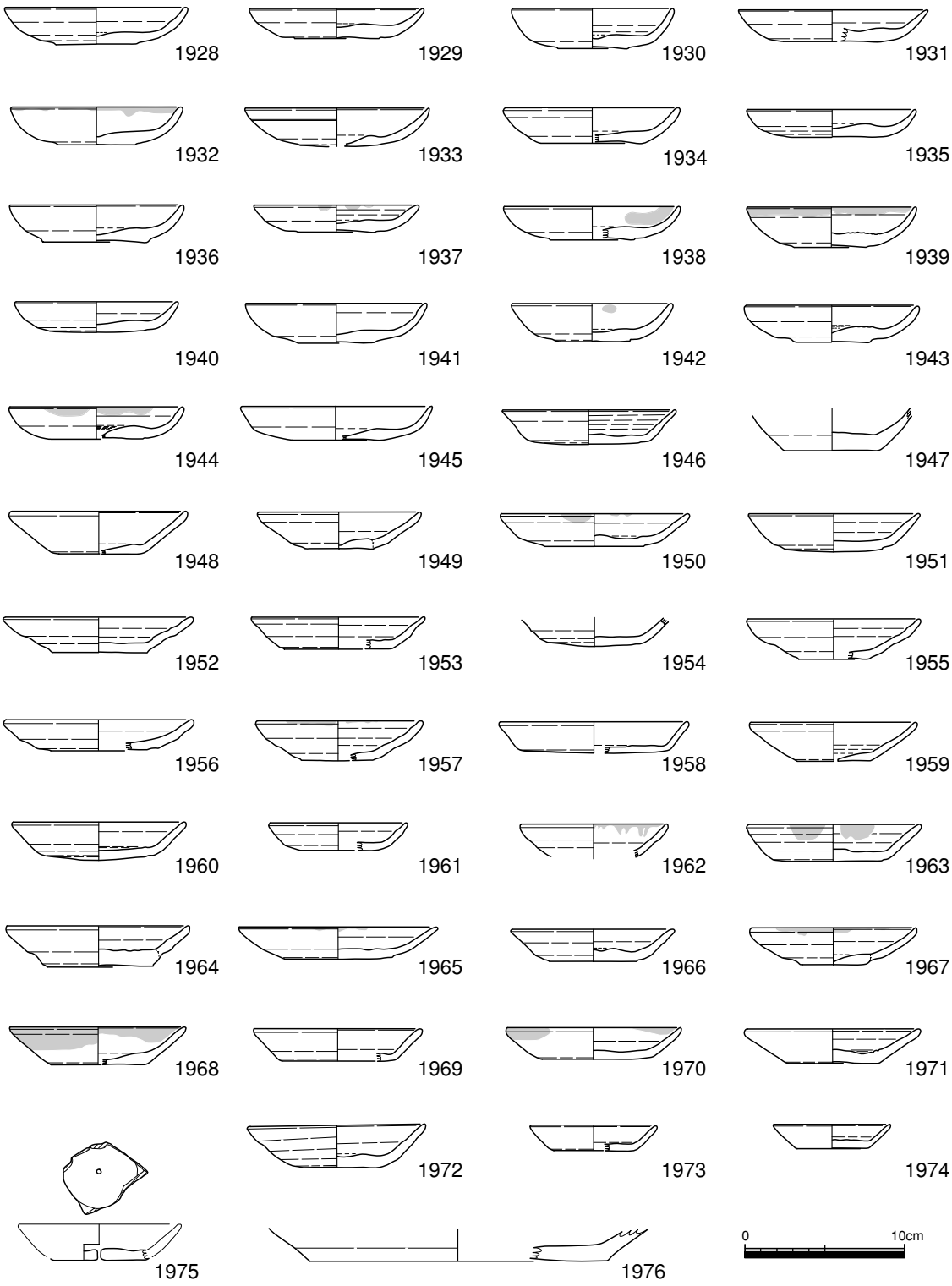
上記のタイプ以外のものには次のようなものが存在する。1947 は口縁部が遺存しないが、底部が厚く体部に向かって屈曲するものである。1958 は薄作りで体部は比較的急に立ち上がり器高が低いものである。1975 は口縁部が遺存せず形状は不明であるが、底部中央に焼成後の穿孔が認められる。1976 は底径が推定で 19.0cm に及ぶ特大の土師器ロクロ調整皿である。

ロクロ調整土師器皿の概要をまとめると、Ａ類とＢ類が少なく、Ｃ類とＥ類が多いことからみて時期的には城下町期Ⅲ期が主体となる。また、使用痕に着目すると３割程度の資料についてタールが付着した痕跡を見ることができ、相当量の皿が灯明皿として使用されていたと思われる。

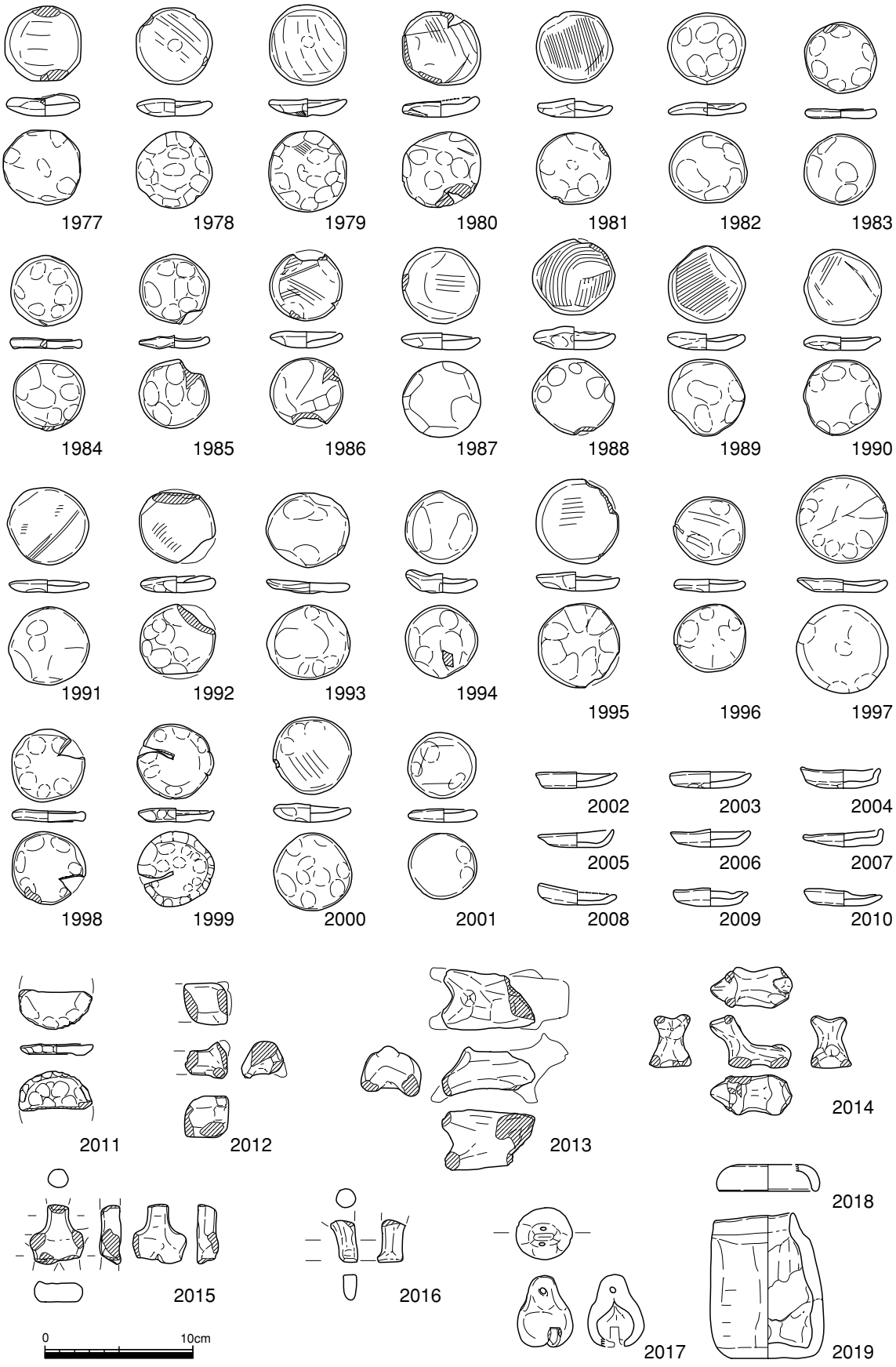
（B）非ロクロ調整皿（第 93 図 1977 ～ 2011）

一方、非ロクロ調整土師器皿には、体部（口縁部）を横ナデで立ち上げるもの（2002 ～ 2010）、体部（口縁部）を連続する指オサエで立ち上げるもの（1999 など）、横ナデによる体部（口縁部）の立ち上げが無く内面にナデ調整などを施してわずかに凹ませるもの（1977 ～ 1982 など）、体部を全く立ち上げない円盤状のもの（1983・1984・1998）の４種類が存在する。前三者は『清洲城下町遺跡Ⅴ』（鈴木編 1995）の非ロクロ調整土師器皿分類で、各々Ａ類、Ｃ類、Ｄ類に対応するものであり、後者のものは今回新たに分類したタイプで、ここでは非ロクロ調整土師器皿Ｆ類と仮称する。Ａ類とＣ類とＦ類はわずかに存在する程度で、大半(約７割)はＤ類が占めている。

さて、非ロクロ調整土師器皿Ｄ類は調整のあり方でいくつかに分類が可能である。１類は指または掌で内面を一方向にナデ調整されるもの（1977 ～ 1981



第 92 図　99B 区出土遺物実測図（17）



第 93 図　99B 区出土遺物実測図（18）

など）である。ナデ始めの部分がやや強めに押さえるために凹むものが多く、ナデ調整の痕跡は10数条の細かい条線として残されている。外面には指などの圧痕が残るものが大半を占め、指オサエ痕が口縁部に近い部分に環状に巡る形となっているもの（1978など）が多い。2類は内面に指オサエ痕が口縁部に近い部分に環状に巡る形となっているもの（1982・1985など）である。なお、D2類のタイプの土師器皿で、体部を上に立ち上げなくなるものが、先の分類のF類に相当すると考えられる。非ロクロ調整土師器皿F類は、円盤状の粘土板の外周囲両面に指オサエ痕が環状に巡っており、裏表の判別が難しいものである。F類はD類がさらに退化してできた製品と考えられ、城下町期最末期に位置付けられる資料と想定される。

（C）**鍋釜類**（第94～96図2020～2069）

鍋釜類には内耳鍋、羽付鍋、焙烙、羽付釜、羽無釜など主要な器種が存在する。各器種の出土量は内耳鍋が67点、羽付鍋が1点、焙烙が224点、釜が113点、器種不明の体部片が1725点であり、焙烙が最も多く、内耳鍋が意外と少ない。ここでは主要な器種ごとに記述を進める。

内耳鍋（2020～2028）は半球形内耳鍋（鈴木1996）に属するものばかりであり、3類に細分ができる。1類は体部から口縁部にかけてほとんど直立しながらやや開くタイプ（2020・2021）である。1類は口縁端部の断面形が方形となっており、半球形内耳鍋の中で古いタイプである。2類は体部から口縁部にかけて内彎しながら内側に傾くもの（2022・2024～2027）で、口縁上端面をやや強く横ナデ調整するためにわずかに凹んでいる。3類は体部から口縁部にかけてほとんど直立しながら立ち上がり、口縁上端面をやや強く横ナデ調整するためにわずかに凹んでいるもの（2023・2028）である。

釜には羽付釜（2053）と羽無釜（2057）がある。羽付釜は口縁部が遺存する資料に恵まれなかったために全体の形状は不明である。2053は鍔の状態からみて、鍔端面が横ナデ調整によって広がっており16世紀中頃と思われる。羽無釜（1358）は体部に至る屈曲部分がなだらかとなっており、肩部に板状の耳が付く。

口縁部が残存する釜類では、その形状から5類に分類できる。1類は口縁部が直立し高く立ち上がっているもの（2049～2051・2059・2069）、2類は口縁部がわずかに内傾するが高く立ち上がるもの（2052・2060）である。3類は内傾する口縁部が低くなり口縁端部が断面方形となるもの（2054・2056～2058・2061～2063・2065～2068）、4類は内傾する口縁部が低くなり口縁端面が斜になるもの（2055）、5類は直立する口縁部の器壁が厚く端部が丸まるもの（2064）である。口縁部と体部の接合部分の屈曲の度合いからみて1類→2類→3類→4類と変遷すると推測される。

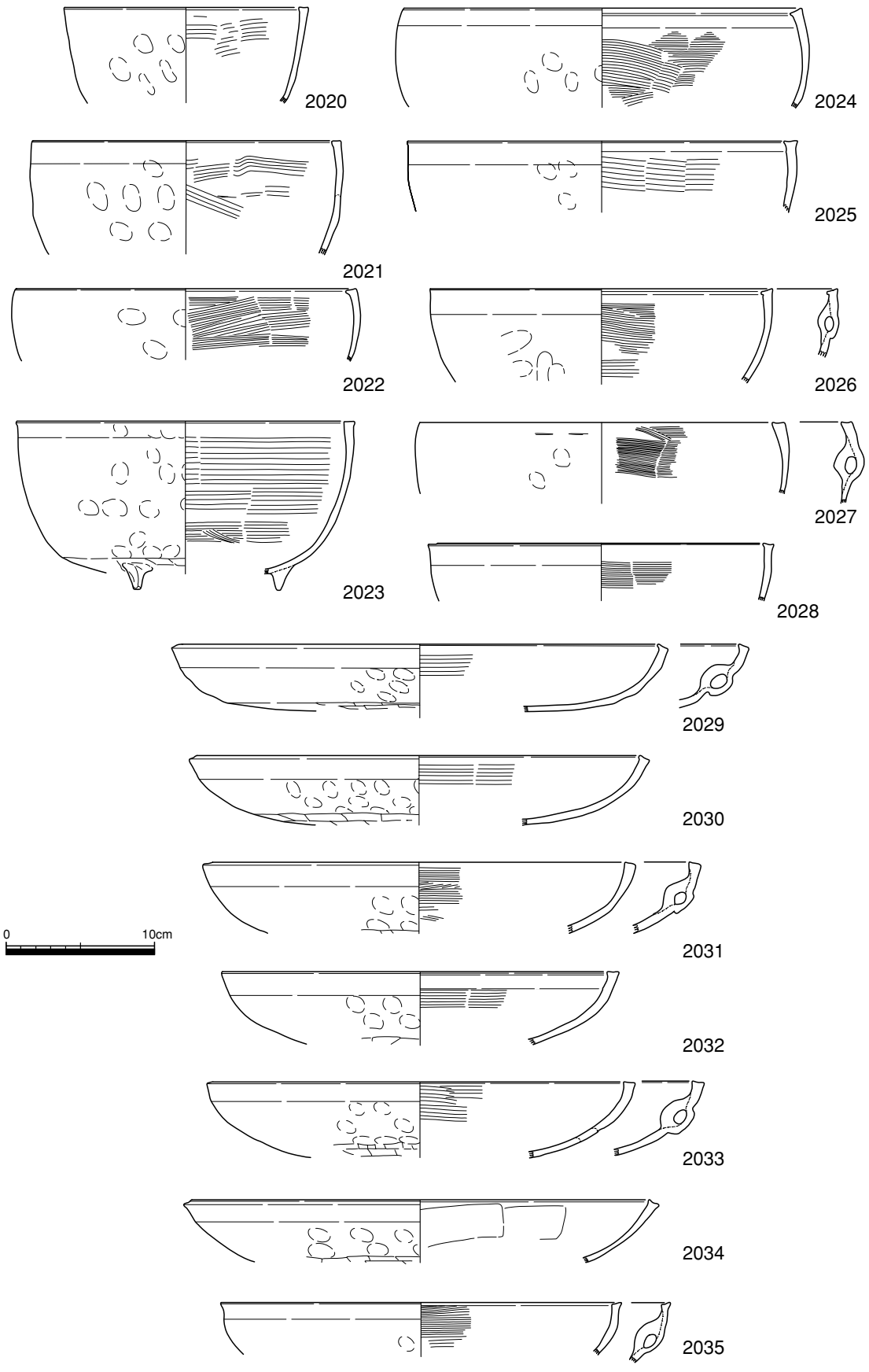
焙烙は4類に分類でき、1類は丸底の底部に逆ハの字状に開く口縁部が付き口縁部上端面が水平となるもの（2032・2033など）、2類は丸底の底部に逆ハの字状に開く口縁部が付き口縁部上端面が斜めに外傾するもの（2029～2031など）である。これらは16世紀後葉から17世紀初頭に位置付けられるものである。

（D）**その他の製品**（第93・97図2012～2019・2070～2075）

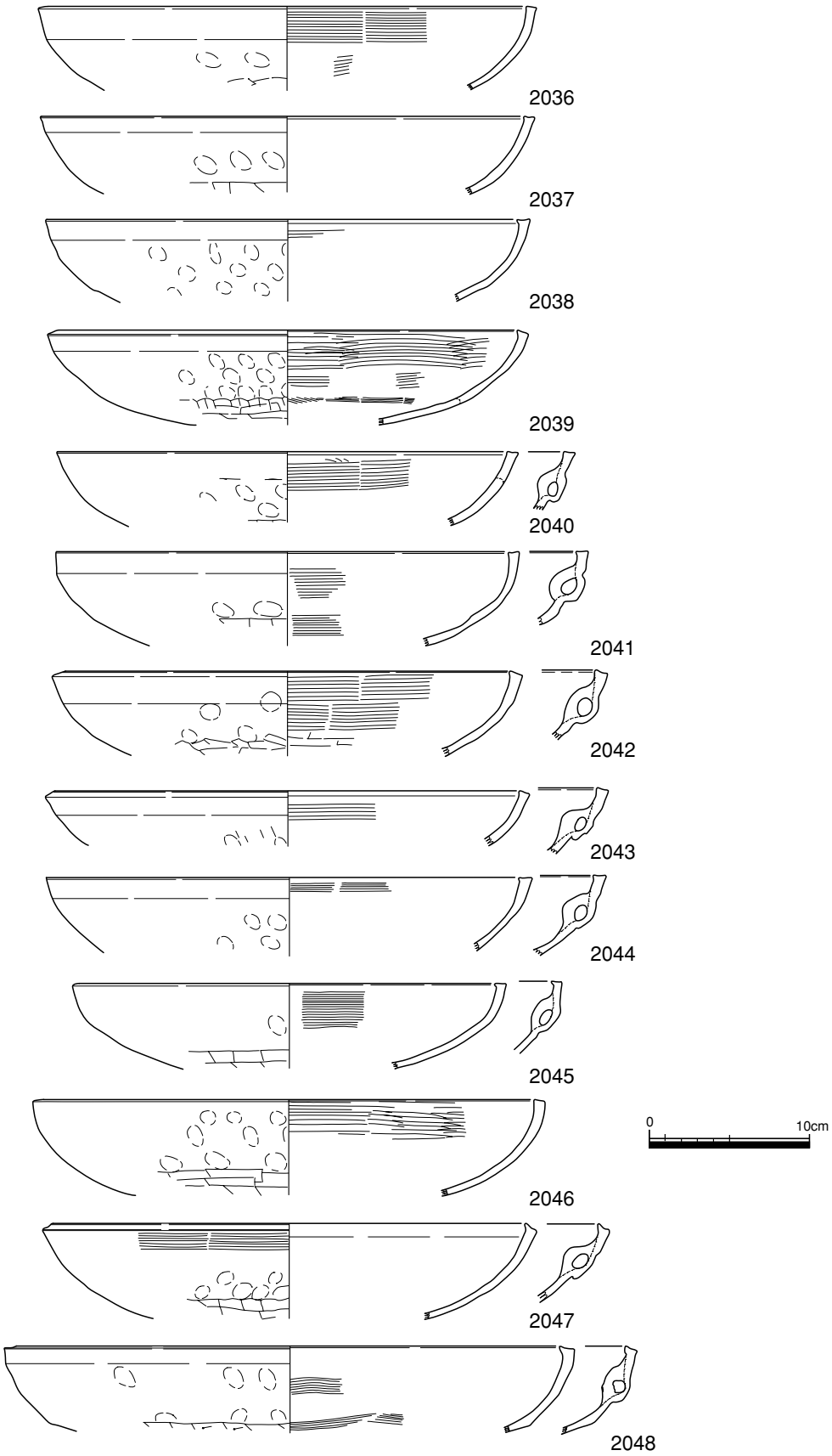
火鉢（2070～2072）は口縁部が外側に屈曲する浅鉢状に中空の三足が付くもので、2070は折り曲げられた口縁部に複数の孔が開けられている。火熨斗状土器（2073～2075）は浅鉢状の杯部に円筒形の柄部が付くものである。焼塩壺には蓋と身がある。2018は手づくね成形による焼塩壺蓋と推測され、2019は手づくね成形による焼塩壺身で全体が大きく歪んでいる。内面は被熱痕が認められ、口縁部外面は横ナデが施されている。2012～2014は犬形の形代で、脚部や頭部などが欠けているものである。2015と2016は人形の形代と考えることができる土製品である。2015は人形だとすれば頭や両手、両足が欠損した胴体部分となる。2016は同様に脚部と推測される。

C　常滑窯産陶器（第97図2076～2089）

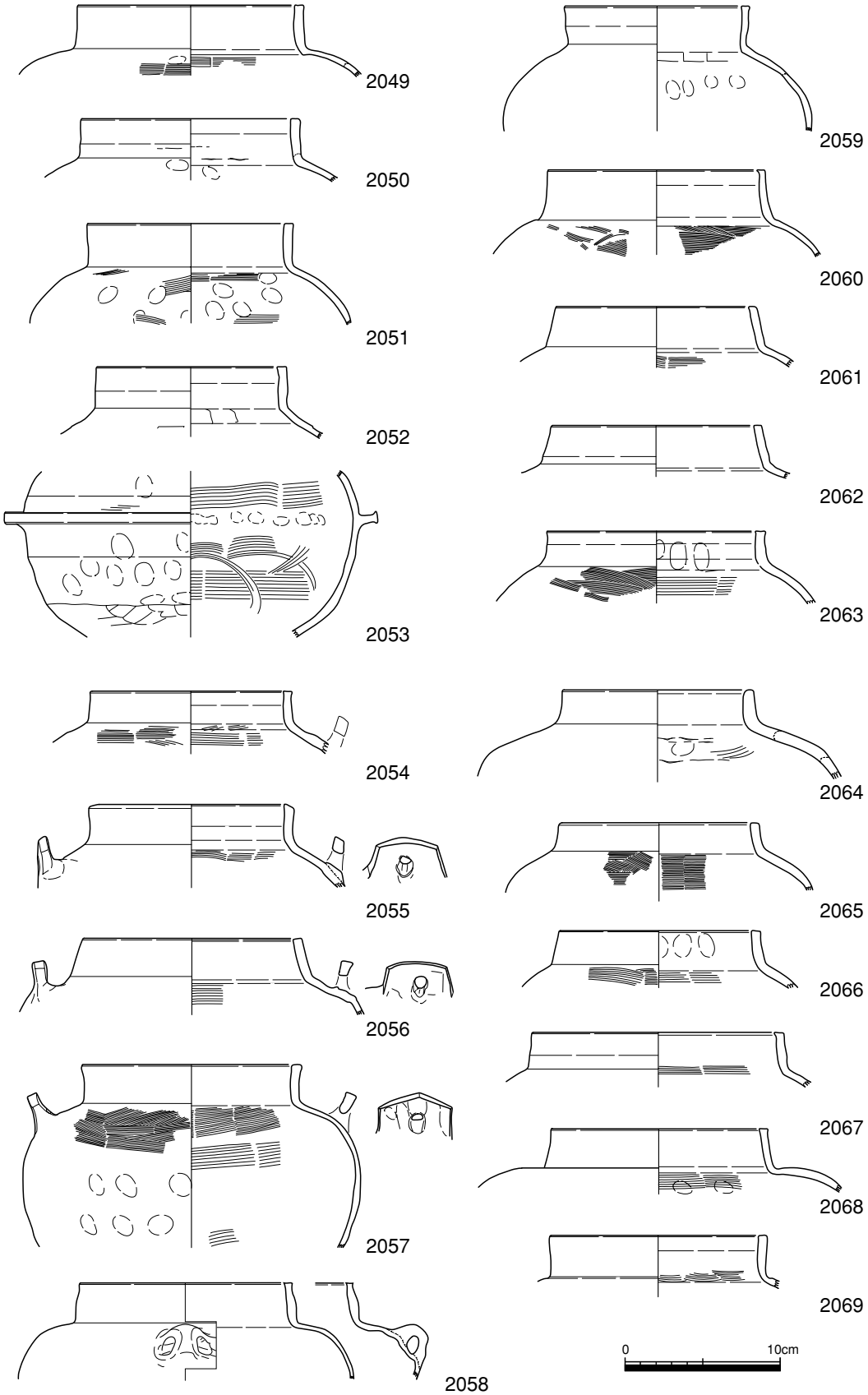
99B区からも常滑窯産陶器が出土しており、器種は壺、甕、鉢などがある。焼成の状態から、胎土が黒灰色などを呈する焼き締められた真焼製品（2076・2077・2079～2081・2085・2087～2089）と



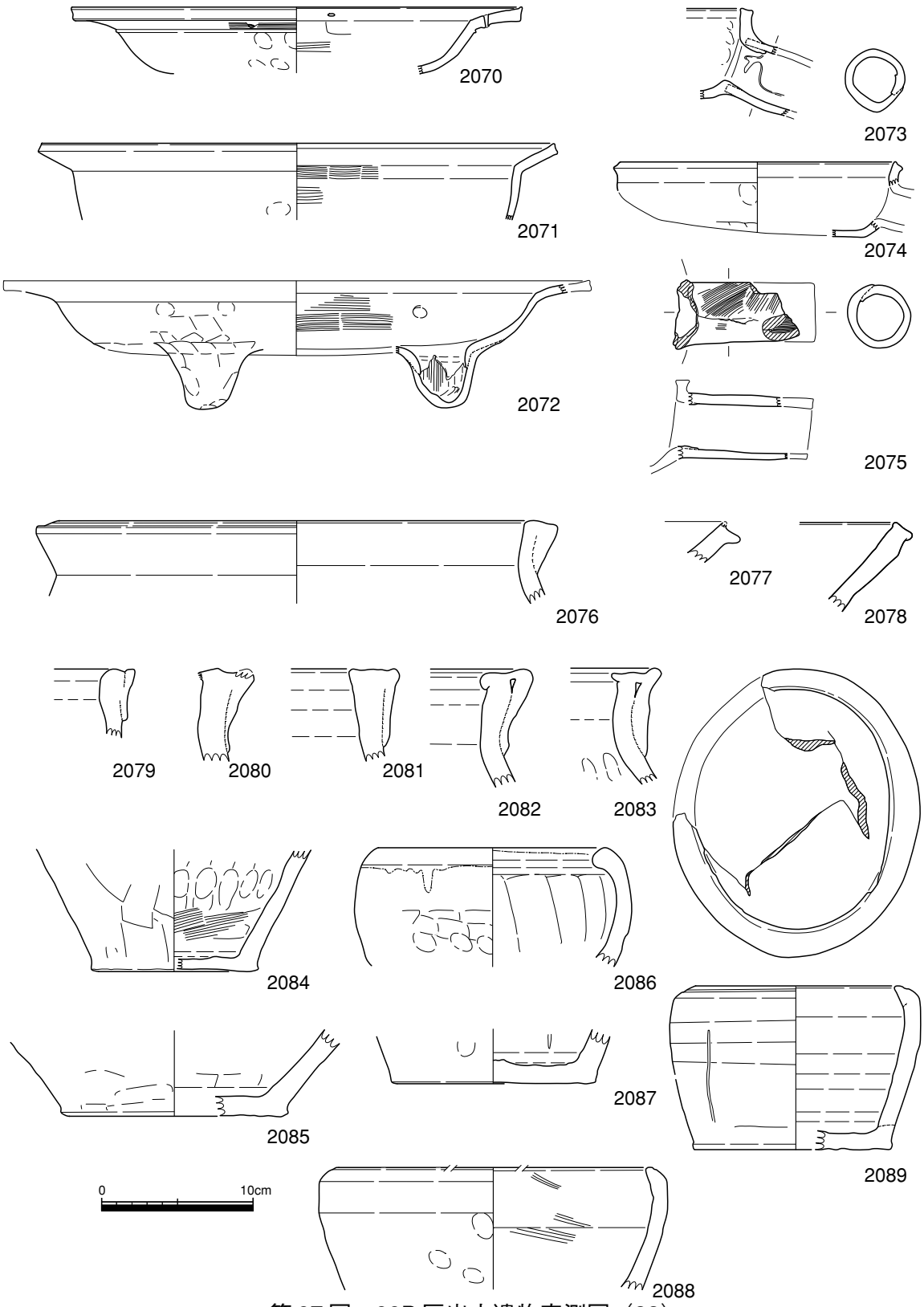
第 94 図　99B 区出土遺物実測図（19）



第 95 図　99B 区出土遺物実測図（20）



第 96 図　99B 区出土遺物実測図（21）



第 97 図　99B 区出土遺物実測図（22）

胎土が橙色などの明るい色を呈する焼成温度が低い赤物製品（2078・2082～2084・2086）に区分される。

甕の口縁部にはいくつかの形状が認められる。1類は折り返された口縁部の縁帯が体部に張り付いたもので、上端面の内側部分が大きく丸まるもの（2079）である。2類は縁帯が体部に張り付き上端面がほぼ平坦になるもの（2076・2081）である。3類は縁帯が張り付き上端面が平坦で上端部の内側が突帯状に張り出すもの（2080・2082・2083）である。張り付けられた縁帯は高くなっている。これらは形状からみて、1類から順に3類に変化していったものではないかと想定され、赤羽中野編年との対応関係は1類が10型式くらい、2類が11型式くらい、3類が12型式くらいに相当すると考えられる。

壺には頸部がない無頸壺が存在する。口縁部の形状から、口縁部先端が尖るもの（2088・2089）と先端が丸められるもの（2086）に分けられる。2089は平面形が楕円形に歪み、外面に縦方向の沈線が施されている。鉢は口縁端部が断面方形になるもの（2077・2078）が認められる。

この他に器種が特定できない底部の破片を一部図化した。2084・2085・2087は底部に砂目痕が残るものである。

D　中国産陶磁器（第98・99図2090～2127）

中国産陶磁器はその出土量はあまり多くなく、青磁と白磁と青花が認められる。

（A）青磁

中国産の青磁には稜花皿（2101・2127）などが認められる。これは龍泉窯系の地方窯産の青磁と考えられる。2127は本遺跡では珍しく完形の状態で出土した。

（B）白磁

中国産の白磁には端反皿（2091～2097など）、稜皿（2100）、小杯（2090）、丸皿（2099）などがある。2090・2093～2100は胎土が緻密で白色を呈しており器壁も薄手であることから、景徳鎮系白磁と考えられる。2091と2092は白色の胎土を持ち、底部の厚さが厚いものである。高台は断面方形となる。2092は内面が輪禿となっている。

（C）青花

青花は大きく碗と皿と大皿などの器種が存在する。出土量は碗や皿類が多く、その他の器種は非常に少ない。これらの産地については、99A区出土資料で記述したようにいくつかの系統に細分できると思われるが、基本的には胎土が緻密で白色を呈しコバルトの発色も鮮やかな青色となる景徳鎮窯系と、胎土が粗めで黄色味がかかりコバルトの発色も鈍い紺色となる漳州窯系とに大別する。ここでは器種毎に記述を進めていきたい。

青花碗は口縁部がやや直立するもの（2102～2105）とやや開くもの（2106）があり、後者は漳州窯系青花である。2108と2110は底部が盛り上がる饅頭心碗である。2107・2109は小杯で、後者は外面が五彩となっている。

青花皿は5類に分類できる。1類は口縁部が大きく外反するもの（2111・2113・2118など）、2類は口縁部が内彎して立ち上がるもの（2114・2119・2121）である。1類と2類は器壁が薄く高台の内側がシャープに抉られているものが多い。3類は底部が碁笥底となるもの（2112）、4類は口縁部が屈曲して横に広がるもの（2117）である。5類は漳州窯系青花の丸皿（2122～2124）である。

2125は景徳鎮窯系青花の大皿で、口縁部が外折して開くもの、2126は漳州窯系青花の大皿である。

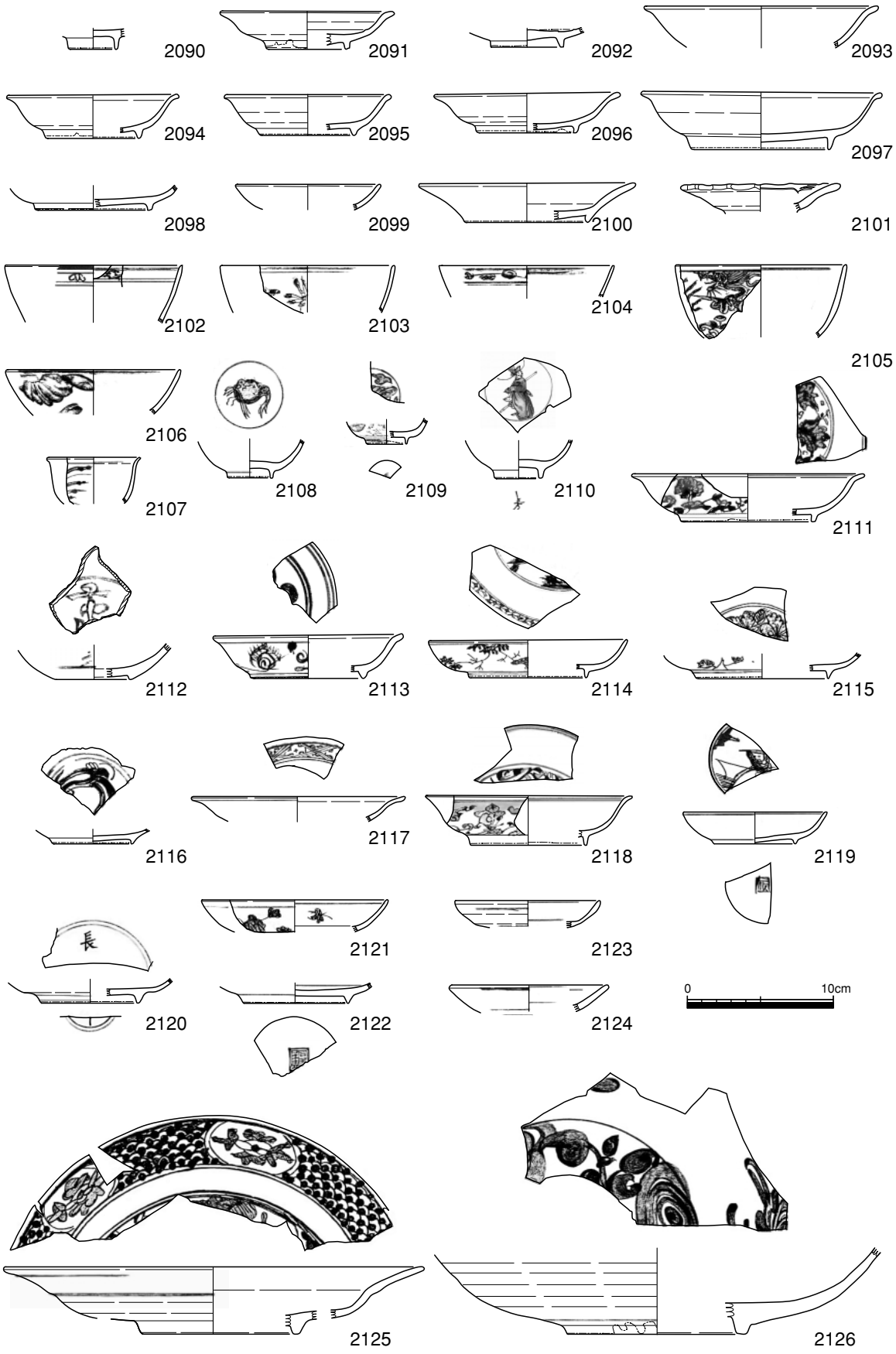
E　朝鮮王朝産陶磁器（第99図2128～2130）

朝鮮王朝産陶磁器には、陶器の碗と鉢が出土した。2128と2129は碗で内面に重ね焼きのための目跡が残存する。2130は赤灰色の胎土で口縁部を水平に折り曲げる鉢状の製品である。産地は確定できないが、表面には透明釉が施されており、朝鮮王朝産陶器と推定した。

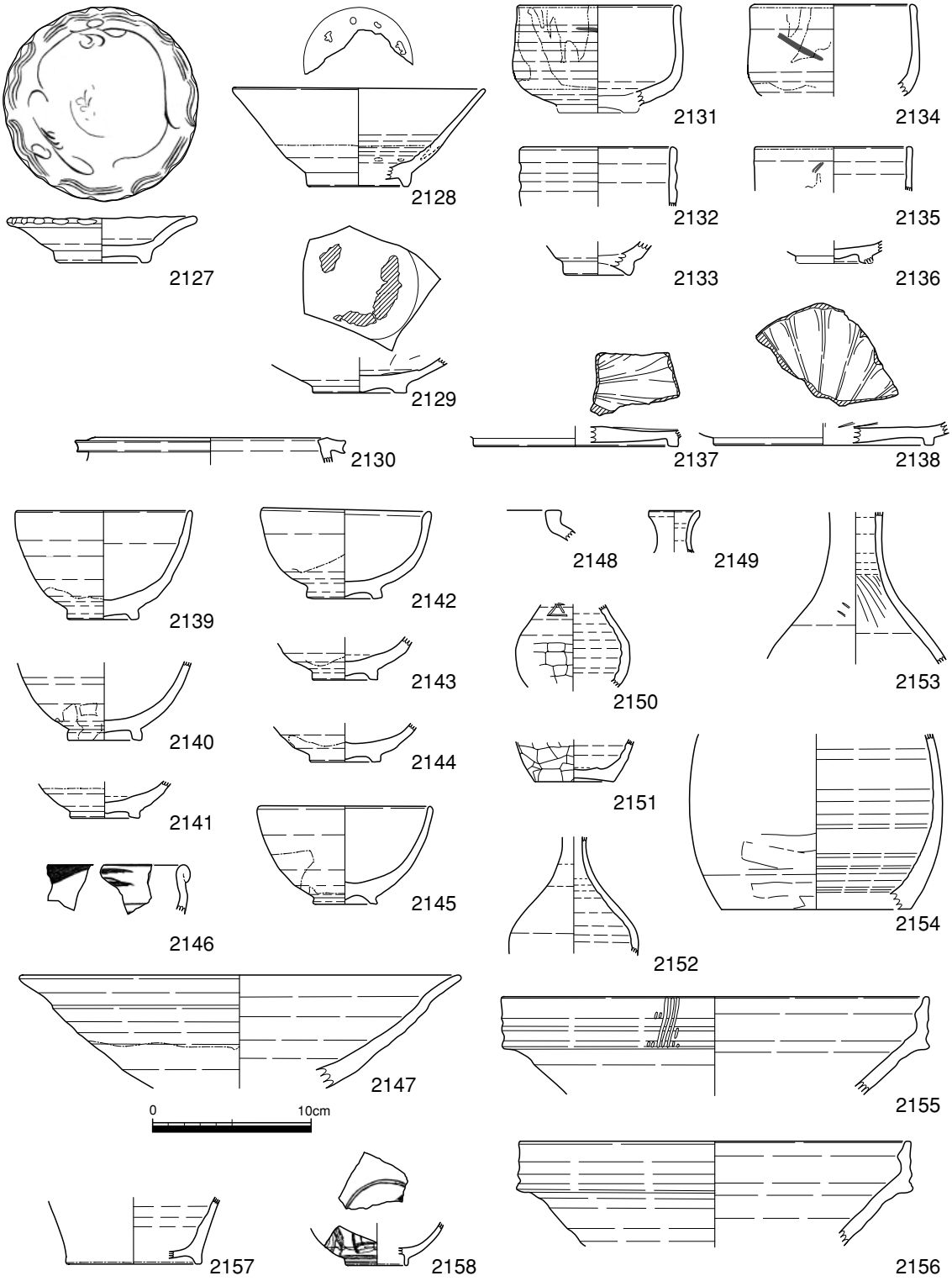
F　唐津（肥前）窯産陶器（第99図2139～2147）

唐津窯産陶器は灰釉が施された丸碗が大部分を占めており、その他の器種は非常に少ない。

丸碗は腰部が丸みを帯びて立ち上がり内彎しながら口縁部に至るもの（2139～2145）である。高台は削り出されており、藁灰釉は底部外面を除く全面に掛けられている。釉薬の発色は透明な光沢を持つものと白味がかる光沢のないものなどがある。



第 98 図　99B 区出土遺物実測図（23）



第 99 図　99B 区出土遺物実測図（24）

その他の器種としては、2146の鉄絵が施された沓茶碗と2147の平鉢が存在する。前者は焼成が良好である。これらは16世紀後葉から17世紀前葉に位置付けられ、城下町期Ⅲ期に属する資料と考えられる。

G　楽系窯産陶器（第99図2131～2138）

軟質で鉛釉が施された楽系窯産陶器は碗と菊花皿が存在する。

2131と2134と2135は橙色の胎土に、外面は白色粘土による白化粧の後に鉛釉を施し緑釉を流しかけ鉄絵らしき紋様が存在し、内面は茶色または黒色に発色した釉が施された筒形碗である。2132と2136は内外面とも黒色に発色する鉛釉が施されたいわゆる黒楽茶碗である。2137と2138は内面全体に菊花紋が表現される軟質施釉陶器で黄色に発色する鉛釉が施されている。産地は確定できないが、ここでは楽系窯産陶器として報告する。胎土は白っぽく緻密ではない。

H　備前窯産陶器（第99図2149～2156）

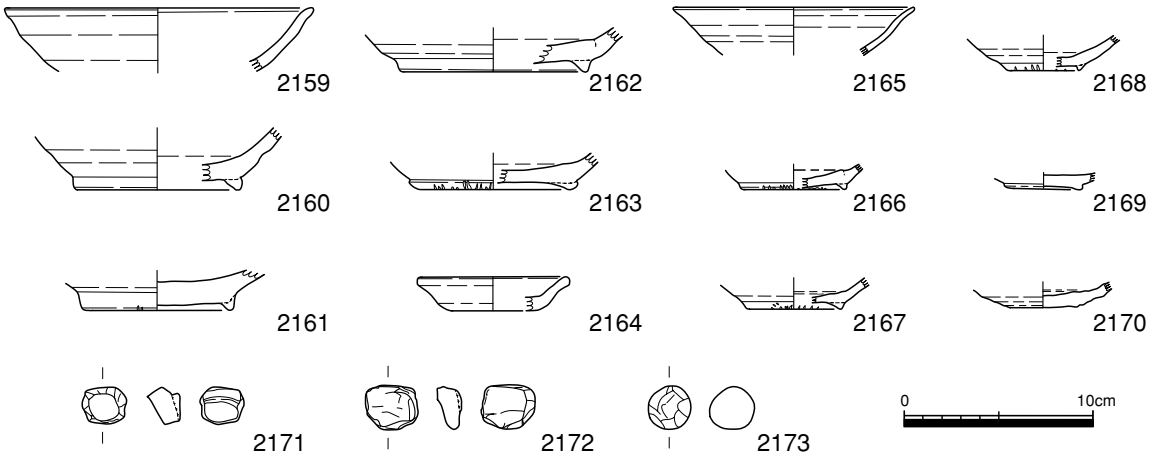
99B区出土の備前窯産陶器は擂鉢、徳利、小瓶などがある。胎土は灰色から灰赤色を呈しており、焼成は堅緻である。2149～2151は小瓶で、2150の肩部には「△」の刻紋が存在する。2152～2154は徳利、2155と2156は擂鉢である。2155は口縁部外面に櫛目が見られるものである。これらの遺物は99A区と同様16世紀後葉から17世紀初頭までくらいの時期が考えられよう。

I　信楽窯産陶器（第99図2148）

2148は信楽窯産陶器と思われる口縁部で、壺または筒形容器の破片と考えられる。

J　城下町期以外の土器・陶磁器（第99・100図2157～2173）

宿場町期の遺物は、上記以外に肥前窯産磁器などがある。2157は白磁瓶類、2158は染付丸碗である。城下町期よりも前の時期の遺物には須恵器や山茶碗類（2159～2170）などが出土している。山茶碗類は尾張型と東濃型の二者があり、時期的には藤澤良祐編年の第4型式から第11型式まで存在する。2171と2172は尾張型山茶碗の底部を利用したいわゆる加工円盤、2173は山茶碗類の陶丸である。



第100図　99B区出土遺物実測図（25）

	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p
9							1				
10						11	40	162	123	45	
11			99A区			30	915	224	153	10	
12						97	2348	152	176		
13						289	1228	356	88		
14						70	1190	907	50		
15						229	540	1240	88		
16						68	339	682	63		
17											
18											
19											
20											
1		99B区									
2				2	6	19	11				
3				58	130	318	41				
4			33	231	277	1087					
5		4	117	165	1246	874					
6			253	427	667	708					
7			31	26	259	203					
8			8	15	34	6					
9		8	182	461	445						
10		10	25	168	59						
11		62	16	38							
12	5	103	594	69							
13		26	228								
14			6								
15											

凡例

方眼の1マスは、平面垂直座標Ⅶ系によって設定された5mグリッドを示す。

マスの中の数値はそのグリッドから出土した陶磁器・土器類の総破片数を示したものである。

第101図　99A・B区出土分布図

（Ⅲ）　瓦類

1　概要と分類の方法

瓦類は96区で検出された石垣の前面を中心に大量に出土しており、27リットル入りコンテナにして約800箱が出土した。96区の下層に相当する97Ｃ区や、96区の対岸に当たる97Ｂ区からも一定量の瓦類が出土し、95Ａ・Ｂ区や99Ａ・Ｂ区では若干量が出土している。これらの膨大な瓦類を整理、報告するために、下記のような方法を採用した。この方法は、報告書『清洲城下町遺跡Ⅶ』（鈴木編1997：以下同様）で実施した方法を一部簡略化したものである。

（１）瓦を大分類で類別する

全瓦類を軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦（軒丸瓦を除く）、平瓦（軒平瓦を除く）、飾瓦、道具瓦、古代瓦、近世桟瓦などに区分した。整理の方法はこの類別によって異なっている。

（２）軒丸瓦・軒平瓦の分類

軒丸瓦と軒平瓦は瓦当面の紋様によって細分する。清須城関連の軒瓦の分類は、小澤一弘が行った分類と、これを受けて鈴木とよ江が実施した分類と、報告書『清洲城下町遺跡Ⅶ』で筆者が実施した分類の３種が存在する。前二者の分類は名古屋環状二号線建設関連の発掘調査で出土した資料を用いているのに対し、後者は94Ａ区から出土した資料を中心に用いた点が異なっている。今回取り扱う資料は、94Ａ区に隣接する96区が大部分を占めていることから、報告書『清洲城下町遺跡Ⅶ』で筆者が実施した分類に依拠するのが妥当であり、これに若干の補足、修正作業を行うこととした。具体的な分類の手法は瓦当面の規模で大別した後に、紋様構成、同紋関係、同笵関係を検討して細別する方法である。この分類結果は第２、３項で詳述する。次にこの分類結果をもとに、全軒瓦を類別し各種のデータを接合後破片1点ずつ記録した（付表）。各データの詳細な内容は、報告書『清洲城下町遺跡Ⅶ』を参照されたい。

（３）丸瓦のカウント方法

丸瓦は、筒部の厚さや調整痕などによる類別毎に、破片数、重量、隅数、端面の長さを算定することを目的とした。具体的な方法は以下の通りである。

丸瓦１点（簡易な接合作業後）につき１データを記録する。記録する内容は、a出土情報（調査区、グリッド、遺構、日付）、b筒部左長、c筒部右長、d筒部頭長、e玉縁部幅、f筒部尻長、g隅数、h筒部厚さ、i筒部径、j重量、k接合前破片数、lコビキの類別、m備考の13項目である。次に収集したデータをコンピューターに入力し、最後に表計算ソフトを用いて集計した。以下に、各項目の概略を補足説明する。

b筒部左長、c筒部右長、d筒部頭長、f筒部尻長は、筒部端部の残存する長さを記録する。筒部左長と筒部右長が区別できない場合はその数値をb筒部左長に記録した。

e玉縁部幅は、玉縁部頭の端部の残存する長さを記録する。

g隅数は、尻小口面両端部の隅の数（最大で２個）を記録する。

h筒部厚さは、玉縁部付近を除く筒部の中で最大の厚さを記録する。

i筒部径は、筒部の直径を11cm以下、13cm、15cm、17cm、19cm以上の５段階に区分して記録した。測定方法は、大きめの型枠に各々直径が13cm、15cm、17cmの半円形を切り抜いた型紙を作成し、筒部の外周に型枠を当てはめ比較的合致する直径のものを筒部径として記録する。

j重量は、10g単位で記録する。

lコビキの類別は、粘土塊から粘土板を成形する際の切断方法による区分で、コビキＡ手法とコビキＢ手法がある。コビキＡ手法は糸を張った弓状工具を使用して切断する方法で、痕跡としては斜め方向の緩弧状の並行する筋が残存する。コビキＢ手法は鉄線を張った張力の強い工具を使用して平行に切断

する方法で、痕跡としては小口に並行する直線状の筋が残存する。

（4）平瓦のカウント方法

平瓦も、丸瓦と同様に、厚さなどによる類別毎に、破片数、重量、隅数、端面の長さを算定することを目的とした。具体的な方法は以下の通りである。

まず、平瓦1点（簡易な接合作業後）につき1データを記録する。記録する内容は、a出土情報（調査区、グリッド、遺構、日付）、b左長、c右長、d頭長、e尻長、f隅数、g厚さ、h重量、i接合前破片数、j備考の10項目である。次に収集したデータをコンピューターに入力し、最後に表計算ソフトを用いて集計した。以下に、各項目の概略を補足説明する。

b左長、c右長、d頭長、e尻長は、各端面の残存する辺の長さを記録する。左右または頭尻の区別ができない場合は各々b左長またはd頭長の部分に記録した。

2　軒丸瓦

（1）分類の方法

軒丸瓦と分類できたものは96区で2183点、97C区で16点が出土した。この中で瓦当面が残存しある程度瓦当面の紋様が特定できるものが1293点存在する。ここでは瓦当面の紋様構成から分類を行い、その類別毎に特徴を記述する。

清須城出土軒丸瓦の分類は、大きく小澤・鈴木分類（小澤1987・鈴木1990）と『清洲城下町遺跡Ⅶ』分類（鈴木1997）の二者が存在する。両者の分類の相違は、分析対象資料が前者は清須城城郭北部に相当する名古屋環状2号線関連の調査出土資料、後者は清須城城郭東部に相当する河川改修関連の調査出土資料と異なっていること、および分類における大別の視点が異なっていることに起因する。今回使用する分類方法は、対象資料が清須城城郭東部に相当する調査地点の出土資料であることから、後者の方法を採用することとした。

分類の方法は、以下の方針に則り実施した。

f隅数は、四隅の数（最大で4個）を記録する。

g厚さは、鰭部・桟部・水返し部などの突出部を除く最大の厚さを記録する。

h重量は、10g単位で記録する。

（5）飾瓦・道具瓦等のカウント方法

飾瓦・道具瓦などのカウントは、分類別に破片数と重量を算定することを目的とした。カウントの方法は以下の通りである。

まず、飾瓦や道具瓦をあらかじめ設定した分類に従って区分し、各破片に通番を付けた。次に瓦1点（簡易な接合作業後）につき1データを記録する。記録する内容は、a出土情報（調査区、グリッド、遺構、日付）、b種別、c分類、d外周長、e隅数、f厚さ、g重量、h接合前破片数、i備考の9項目である。そして収集したデータをコンピューターに入力し、最後に表計算ソフトを用いて集計した。なお、種別や分類の具体的な内容は各報告を参照されたい。

A　瓦当面径による大分類

今回出土した軒丸瓦の瓦当面径はおおよそ、直径17cm前後、直径15～16cm、直径13～14cm、直径10cm前後の4類に区分できる。この瓦当面径による大別は瓦当面周縁幅が異なる場合があるために笵の規模と必ずしも一致しないが、おおよそ丸瓦部の規模と連動すると考えられる。ここでは瓦当面径の規模の大きいものから順にそれぞれ100番台、200番台、300番台、400番台と名付ける。

B　紋様構成による中分類

次に、紋様構成に着目すると桐紋のみで構成されるもの、左巻三巴紋に珠紋20個を配するもの、左巻三巴紋に珠紋16個を配するもの、左巻三巴紋に珠紋12個を配するもの、左巻三巴紋に珠紋8個を配するもの、右巻三巴紋に珠紋12個を配するもの、左巻三巴紋に珠紋15個を配するもの、左巻三巴紋に珠紋17個を配するものに区分できる。『清洲城下町遺跡Ⅶ』分類に比べると後二者が新たに発見されたものである。この段階の分類は意匠が類似するという意味で

「近似意匠瓦」に位置付けられよう。上記の紋様型式を、順に00番台、10番台、20番台、30番台、40番台、50番台、60番台、70番台の型式名を与える。

C　同紋及び同笵関係による細分類

次に、同じ瓦当面径で同じ紋様構成のものの中で、桐紋や巴紋の形状の相違あるいは珠紋の配置の相違などから同紋関係の軒丸瓦を類別する。この類別によって同類とされたものは、基本的に同じ型紙による笵型によって製作された軒丸瓦群を示していると推測される。また同紋関係の軒丸瓦のうち、笵傷などから同笵関係が判明するものや笵が明白に異なるものについてはさらに細分が可能である。

『清洲城下町遺跡Ⅶ』では同紋関係の小分類を1桁台の数値で命名し、同笵関係の細分類を小文字アルファベットで表現することを試みた。そして、このような瓦当面径、紋様構成、同紋関係、同笵関係という階層的な分類方針から得られた型式名をM121a型式などの呼び方で表記した。

この結果、M120型式群などについてはある程度整備された分類体系を構築することができた。しかし最も出土量が多いM340型式群については暫定的に4類に分類したが、決して十分な分類体系を得ることができなかった。今回取り扱う軒丸瓦類は『清洲城下町遺跡Ⅶ』よりも点数が多い上に、資料の出土地点からみて『清洲城下町遺跡Ⅶ』の資料も加えて検討する必要があるため、数量が多く分類結果も複雑化したため、結果的に筆者の力量では十分な分類体系を構成することができなかった。したがって、今回の報告では、大分類と中分類による整理に記述を止めざるを得なくなったことをご容赦願いたい。

（2）資料の紹介

A　M101型式（桐紋軒丸瓦：第102図2174～2177）

瓦当面径が約17cmで、紋様構成は五七桐紋のみを配置するものである。今回の調査では5点が出土した。五七桐紋は、枝が短く花蕾は丸みを帯びた唐花の花弁形となっていることから、『清洲城下町遺跡Ⅶ』と同様に黒田分類のＡⅡａ（黒田1993）に属すると推測される。丸瓦部裏面が残存するものが1点存在するが、これにはコビキＢ手法の痕跡が認められる。

B　M121型式（左巻三巴紋に16珠紋軒丸瓦1類：第102図2178～2181）

瓦当面径が約17cmで、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を16個配置するものである。巴の形状が全体としてなだらかとなっており、特に巴の内側外郭線が弧状になり先端が尖っているものである。圏線は持たず、珠紋が平面形と高さともに大きい。今回の調査では77点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキＡとＢの両手法の痕跡が認められるが、コビキＡ手法が大半を占める。また、丸瓦部内面に桟を持つものも1点確認された。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では笵傷や巴紋の間隔や珠紋の位置関係などから3型式に細分したが、この区分で全てを整合的に分類することができなかった。ただし、M121a型式と同様の笵傷を有するものは今回でも確認される。

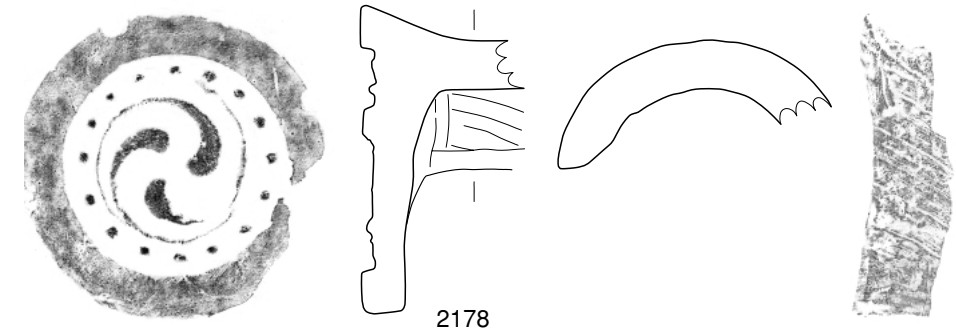
C　M122型式（左巻三巴紋に16珠紋軒丸瓦2類：第103・104図2182～2187）

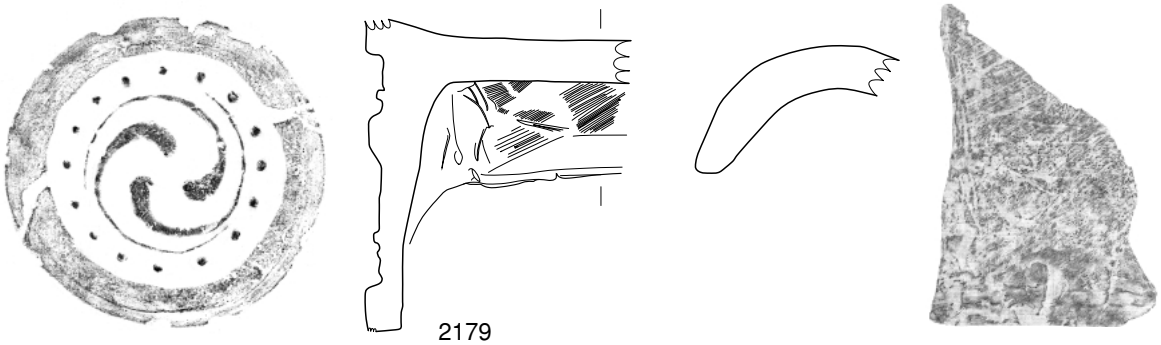
瓦当面径が約17cmで、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を16個配置するものである。巴の形状が円形の体部に尾部が取り付くような形となっており、巴の内側外郭線が鋭角に屈曲している。圏線を持たず、珠紋が平面形と高さともに大きい。今回の調査では98点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキＡとＢの両手法の痕跡が約半々で認められる。また、丸瓦部内面に桟を持つものが2点確認された。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では巴紋の形状や珠紋の位置関係などから3型式に細分したが、この区分で全てを整合的に分類することができなかった。

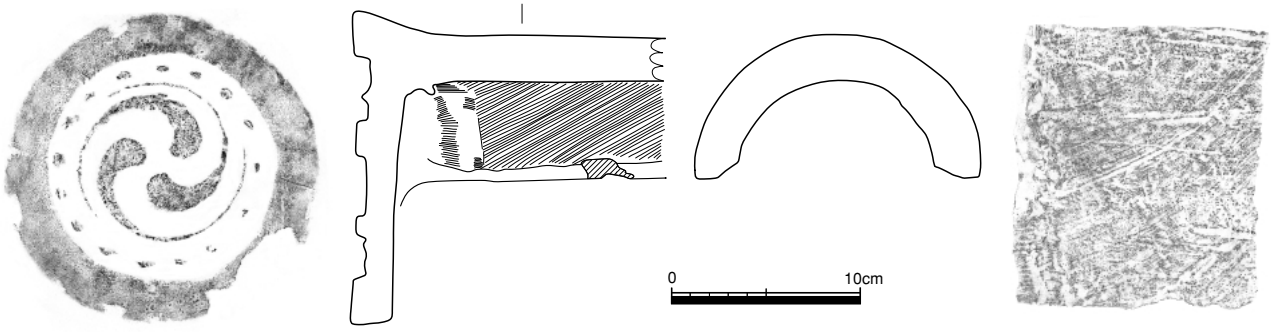
D　M123型式（左巻三巴紋に16珠紋軒丸瓦3類：第104～105図2188～2192）

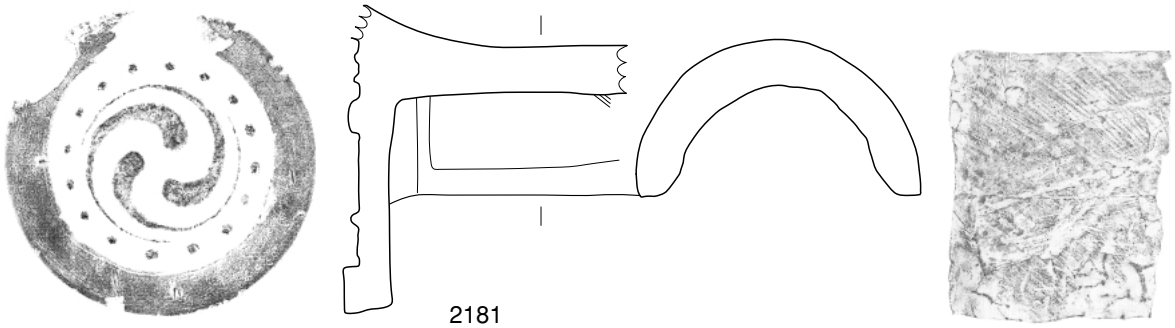
瓦当面径が約17cmで、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を16個配置するものである。巴の形状がM121型式と同様に全体としてなだらかとなっており、圏線は持たない。外区の幅が比較的広く、珠紋が小振りである。今回の調査では111点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキＡ手法の痕跡のみが認められる。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では巴



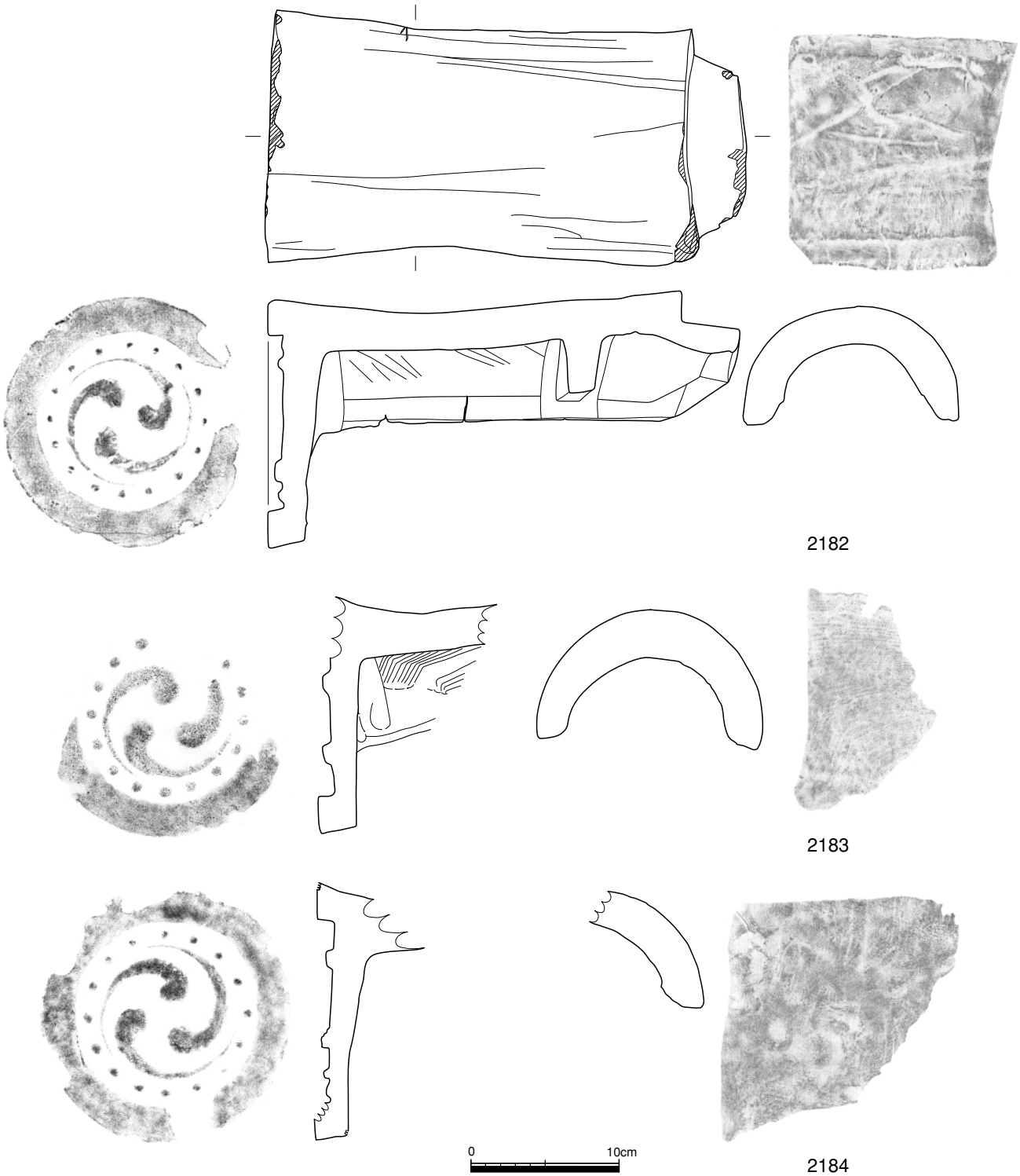




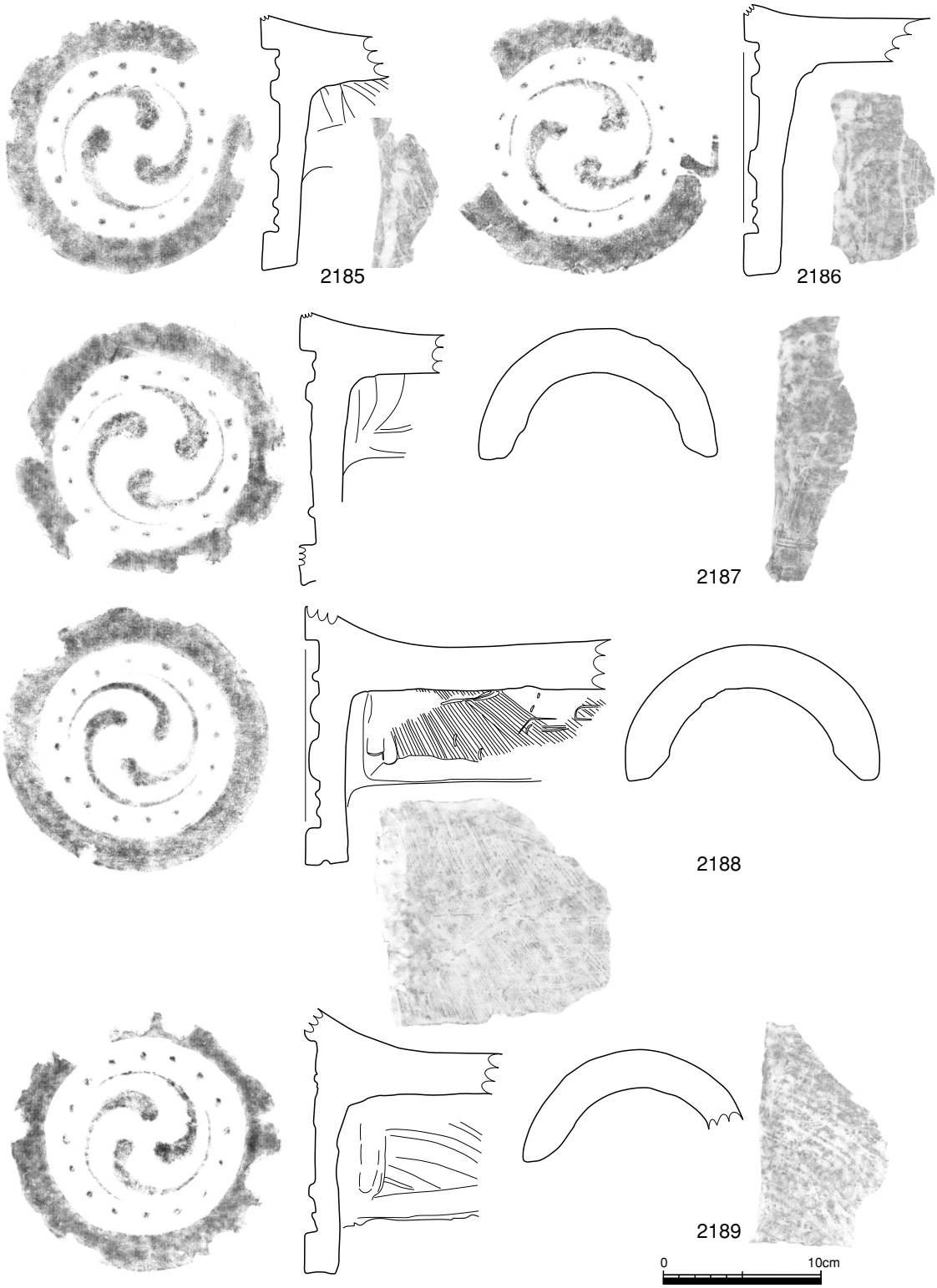




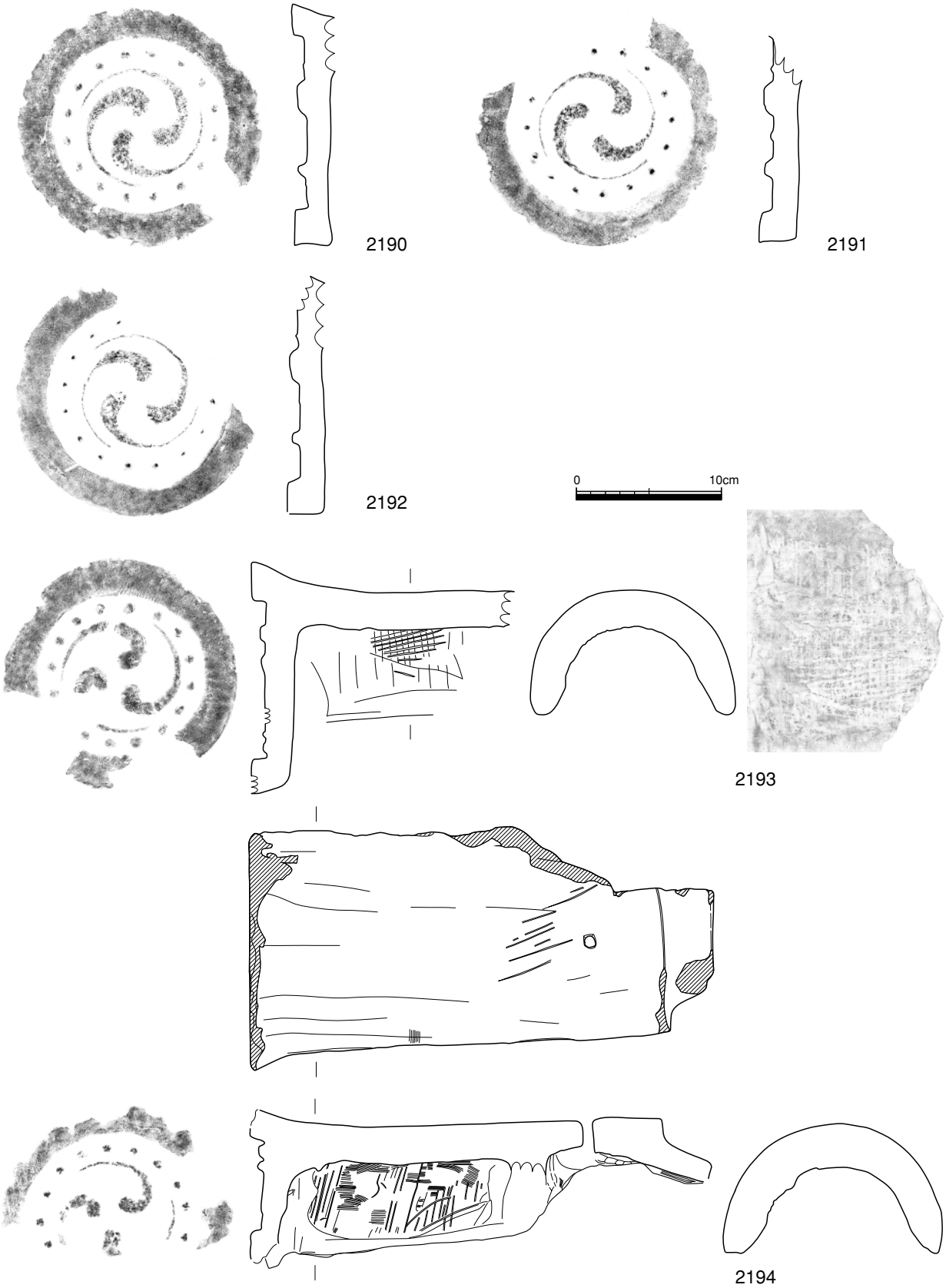
第 102 図　軒丸瓦実測図（1）



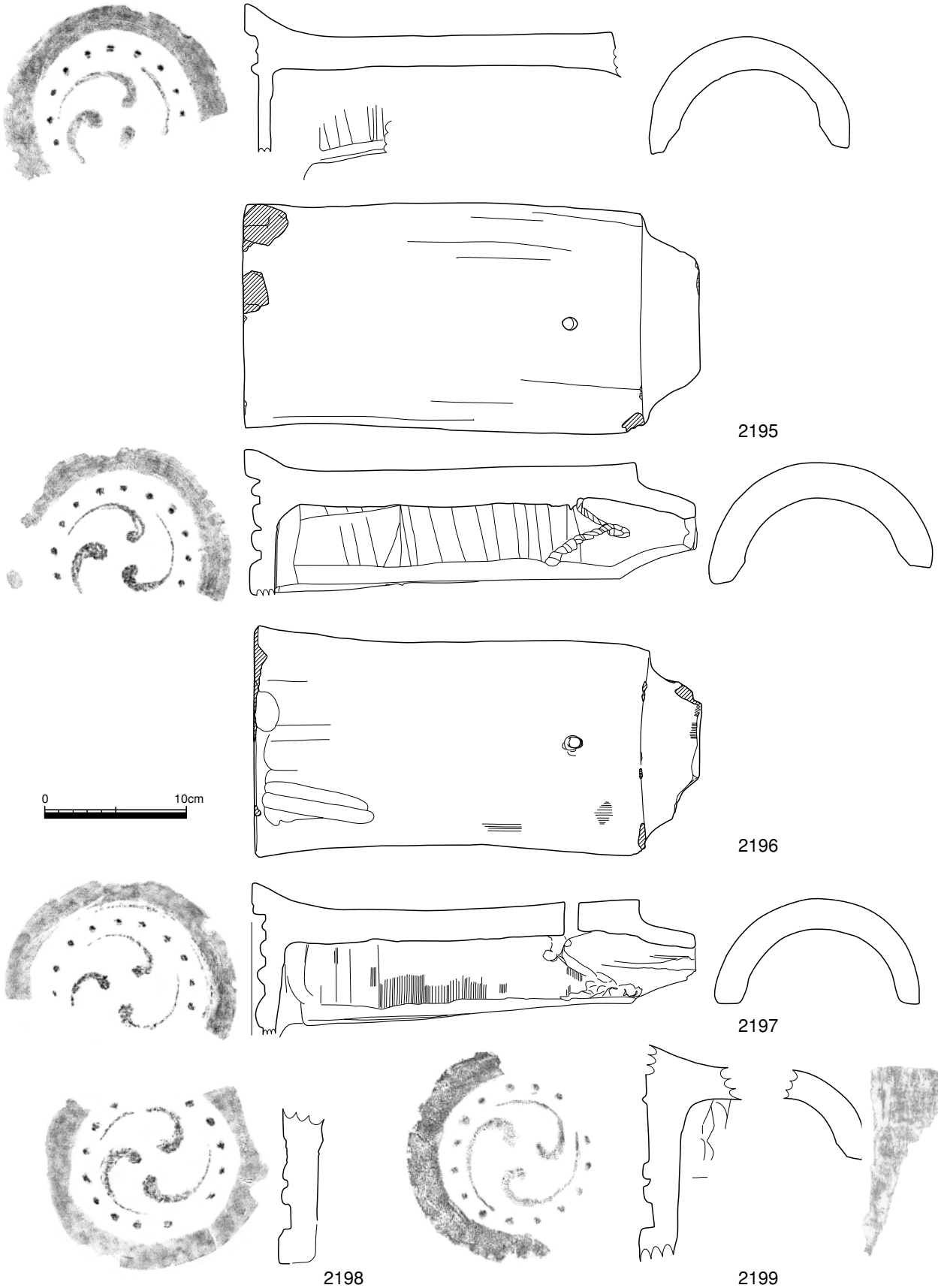
第 103 図　軒丸瓦実測図（2）



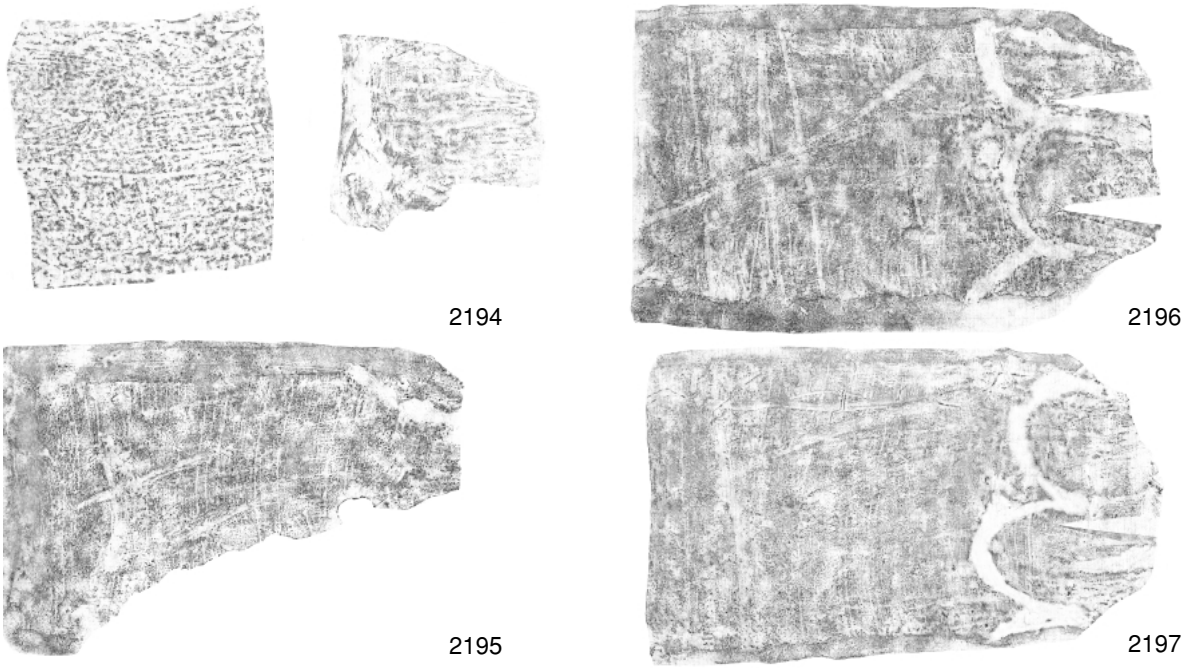
第 104 図　軒丸瓦実測図（3）



第 105 図　軒丸瓦実測図（4）



第 106 図　軒丸瓦実測図（5）



第 107 図　軒丸瓦実測図（6）

紋や珠紋の位置関係などから 2 型式に細分したが、この区分で全てを整合的に分類することができなかった。

E　M124 型式（左巻三巴紋に 16 珠紋軒丸瓦 4 類：第 105 ～ 111 図 2193 ～ 2212）

瓦当面径が約 17cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 16 個配置するものである。巴の形状が M122 型式と同様に巴の内側外郭線が鋭角に屈曲している形となっており、三巴紋どうしの間隔が比較的広い。圏線は持たず、珠紋は大振りである。今回の調査では 198 点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキＡとＢの両手法の痕跡が認められるが、コビキＢ手法が49点と大半を占めている。また、丸瓦部内面に桟を持つものが 5 点、孔を持つものが 10点確認された。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では巴紋や珠紋の位置関係などから 2 型式に細分したが、この区分で全てを整合的に分類することができなかった。

F　M131 型式（左巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦 1 類：第 111 図 2213・2214）

瓦当面径が約 17cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴の尾部がやや細く、巴の内側外郭線が弧状に緩やかにカーブする。圏線は持たず、珠紋の高さが低い。今回の調査では 5 点が確認されたが、丸瓦部裏面の調整痕を観察できる資料は認められなかった。

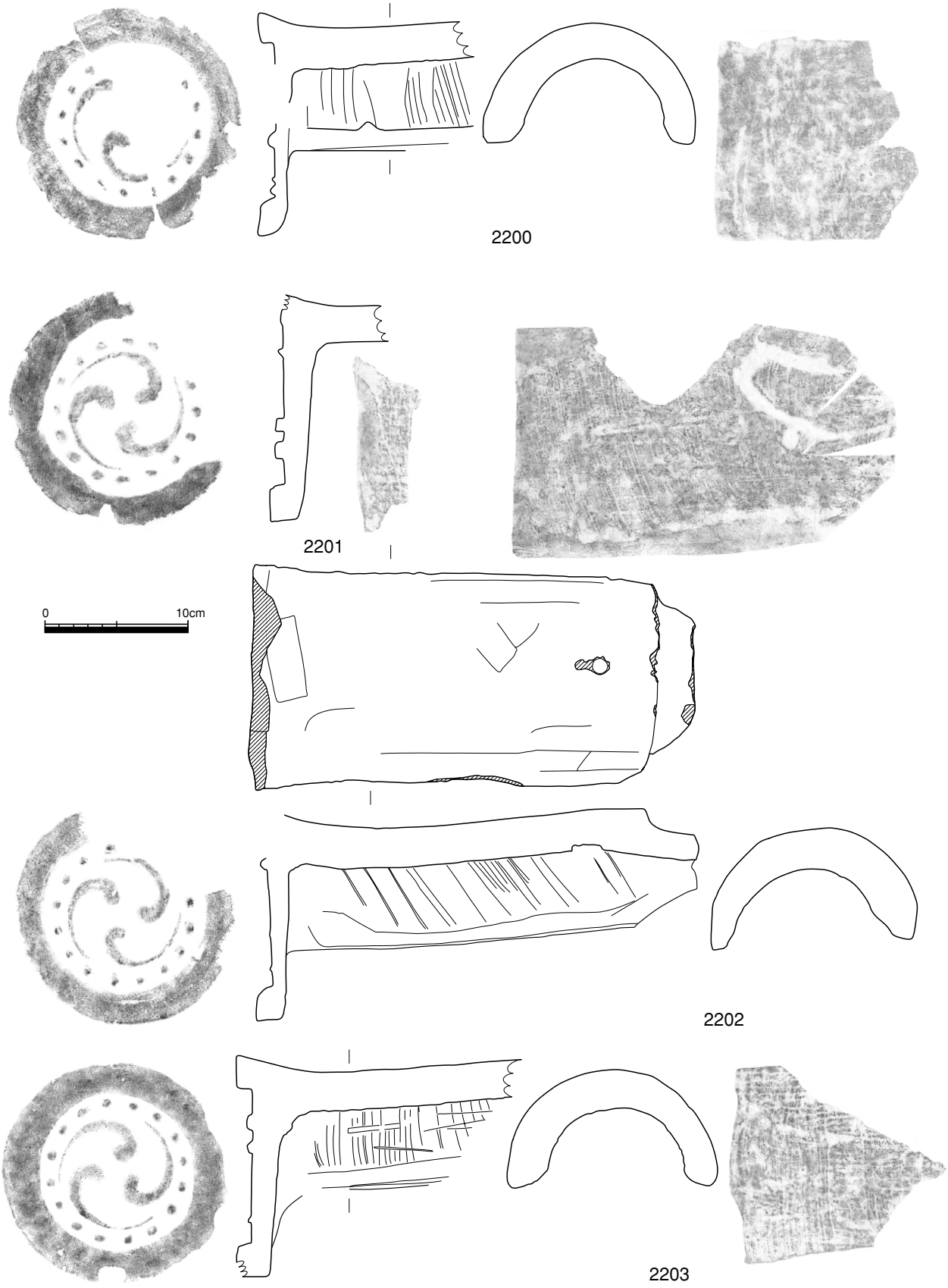
G　M132 型式（左巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦 2 類：第 111 図 2215）

瓦当面径が約 17cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴の尾部が他類では見られないほど太く短いものである。圏線は持たず、珠紋は巴紋に比例して大きい。今回の調査では 3 点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕を観察できる資料は認められなかった。

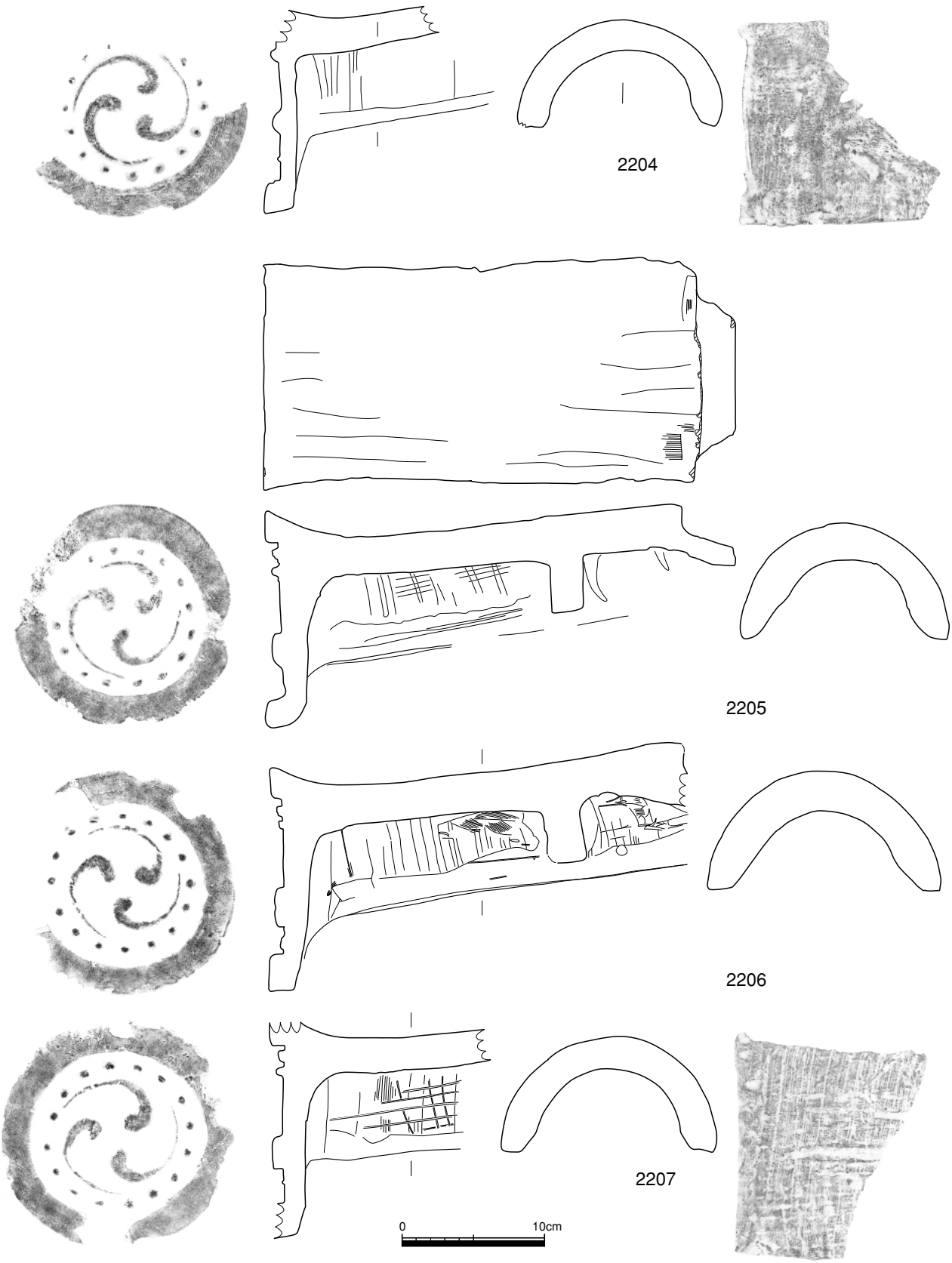
H　M151 型式（右巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦：第 136・137 図 2349・2359）

瓦当面径が約 17cm で、紋様構成は中心に右巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴の尾部が細長く伸びて隣の巴紋と接するが、圏線とはなっていない。珠紋の大きさは非常に小さい。周縁区及び紋様区周縁部は丁寧なミガキ調整が施され、紋様区の凹部に金箔が残存するものが多い。今回の調査では 6 点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキＡ手法の痕跡のみが認められる。

I　M161 型式（左巻三巴紋に 15 珠紋軒丸瓦：

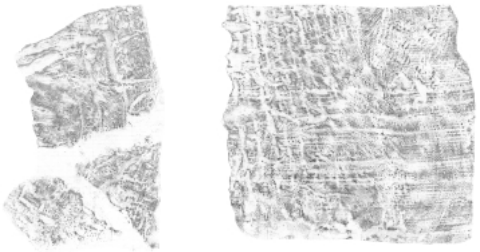


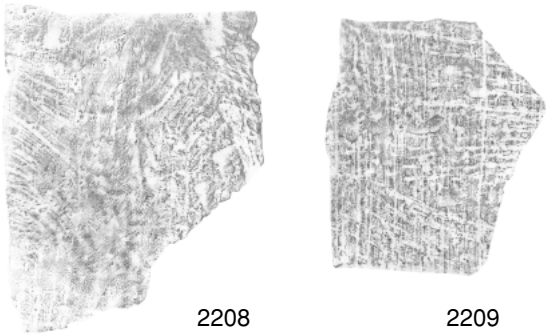
第 108 図　軒丸瓦実測図（7）



第 109 図　軒丸瓦実測図（8）


2205


2206


2208　2209

第 110 図　軒丸瓦実測図（9）

第 112 図 2216 ～ 2217）

瓦当面径が約 17cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 15 個配置するものである。巴の形状がいびつで正確な円弧を描いていない。圏線は持たず、珠紋の規模は小さい。珠紋の周囲には一定方向に向く笵傷が認められ、おそらく M161 型式に属するものは同笵関係にあるものと推測される。今回の調査では26点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキＡ手法の痕跡のみが認められ、鳥衾瓦に使用されたもの（2216）も存在する。

Ｊ　M211 型式（左巻三巴紋に 20 珠紋軒丸瓦：第 112 図 2218）

瓦当面径が約 15cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 20 個配置するものである。巴紋は圏線は持たず、珠紋が比較的小さい。今回の調査では5点が出土し、このうち丸瓦部裏面の調整痕にコビキＡ手法の痕跡が認められるものが1点存在する。『清洲城下町遺跡Ⅶ』ではこの型式の中に異笵のものが認められたが、分類するには至らなかった。

Ｋ　M221 型式（左巻三巴紋に 16 珠紋軒丸瓦：第 112 図 2219 ～ 2220）

瓦当面径が約 15cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 16 個配置するものである。巴紋は全体に緩やかにカーブする形状でやや間隔が広く、圏線は持たない。紋様の高さが低く不鮮明である。今回の調査では 33 点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキＢ手法の痕跡のみが認められる。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では巴紋や珠紋の位置関係などから 2 型式を特定したが、この区分で全てを整合的に分類することができなかった。

Ｌ　M231 型式（左巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦：第 112・113 図 2221 ～ 2230）

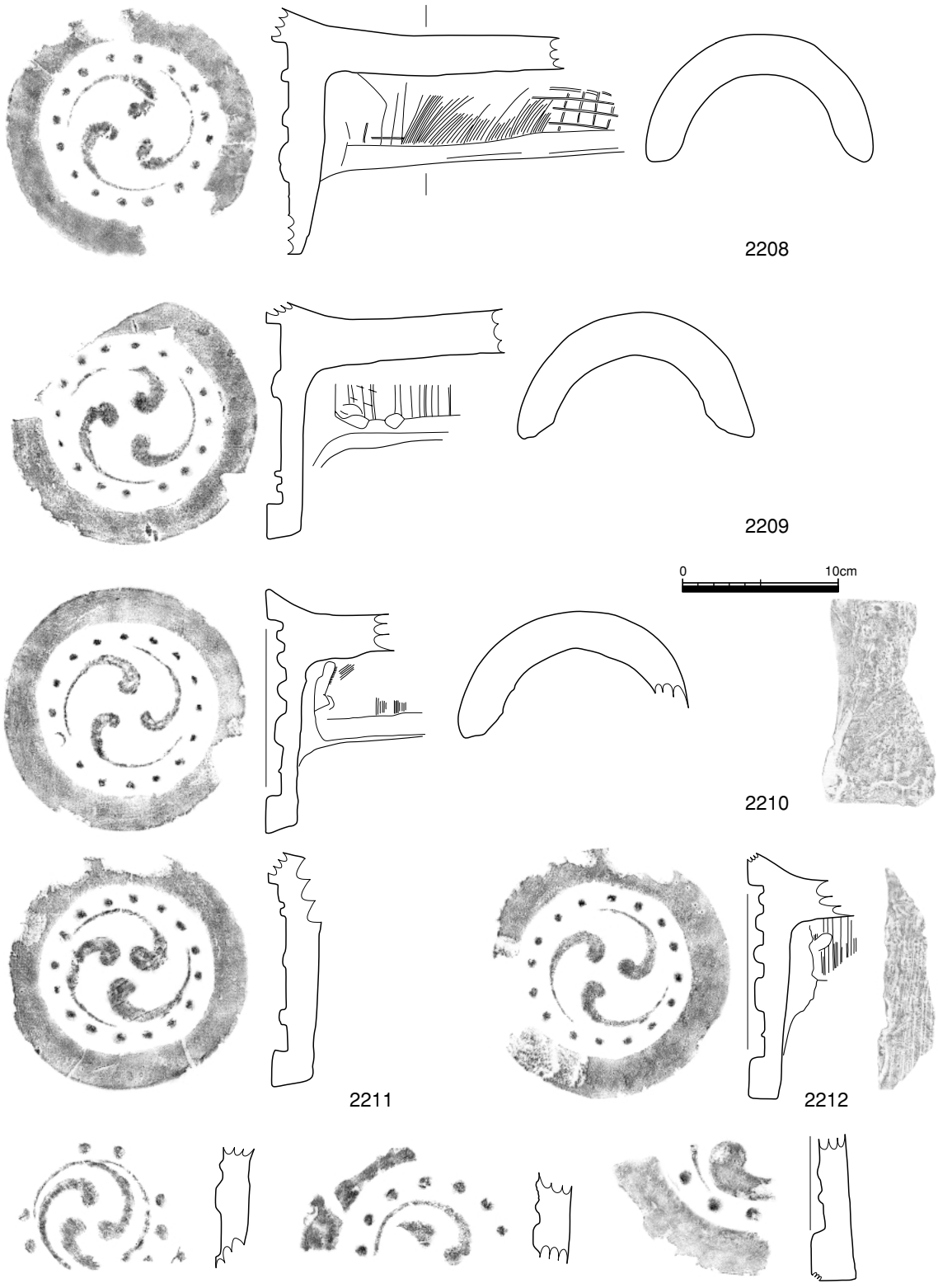
瓦当面径が約 15cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴紋の尾部が長く伸びて隣の巴紋と接続し、圏線を持つ形状となっている。珠紋の規模は外区の幅の割に大きい。今回の調査では 81 点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキＡとＢの両手法の痕跡が認められるが、コビキＡ手法の方がやや多い。この型式もさらに細分が可能と思われるが、全てを整合的に分類することができなかった。

Ｍ　M241 型式（左巻三巴紋に 8 珠紋軒丸瓦：第 115 図 2240 ～ 2241）

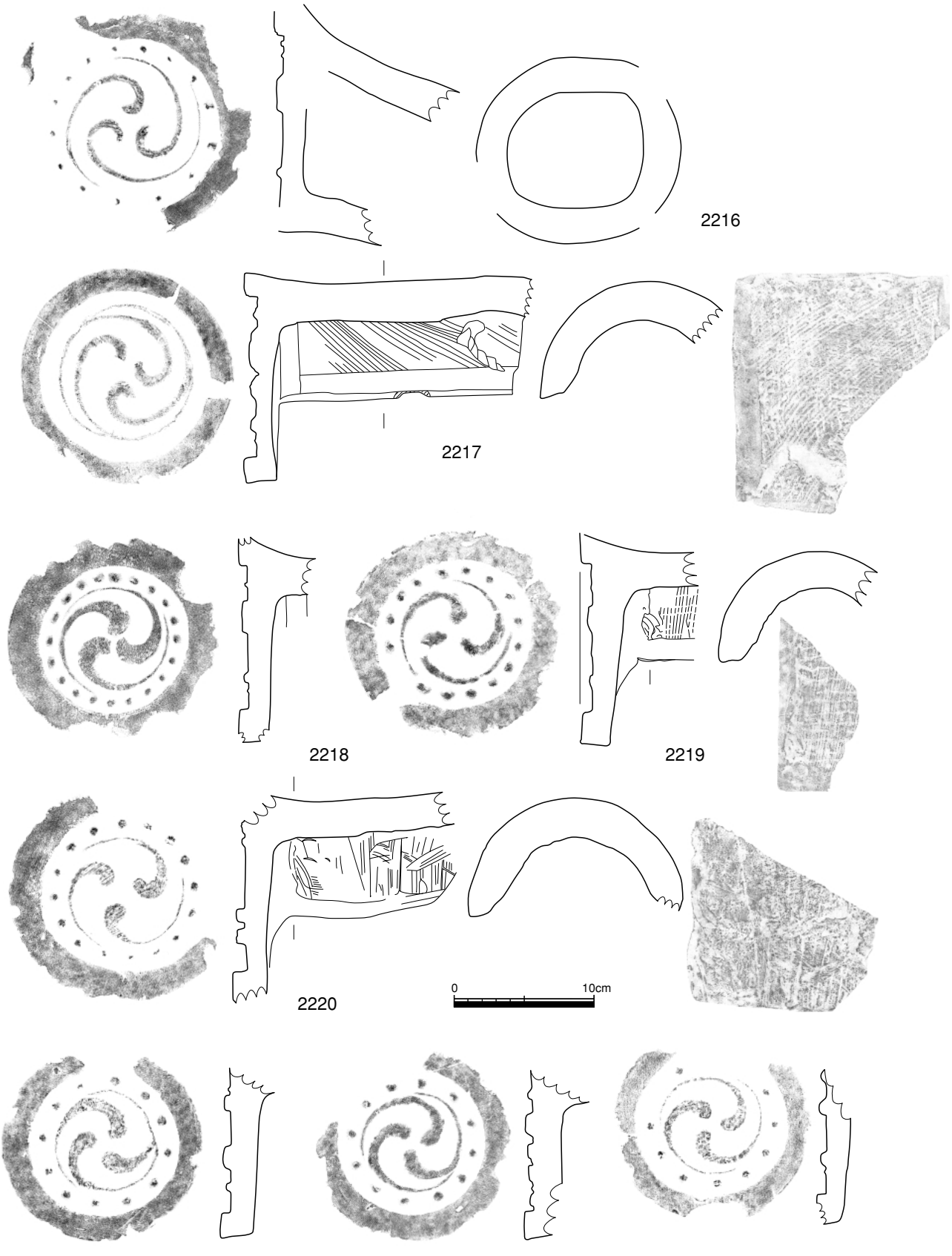
瓦当面径が約 15cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 8 個配置するものである。巴紋は全体が緩やかにカーブし、圏線は持たない。今回の調査では 21 点が出土し、このうち丸瓦部裏面の調整痕にコビキＡ手法の痕跡が認められるものが2点存在する。

Ｎ　M251 型式（右巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦：第 114 図 2232）

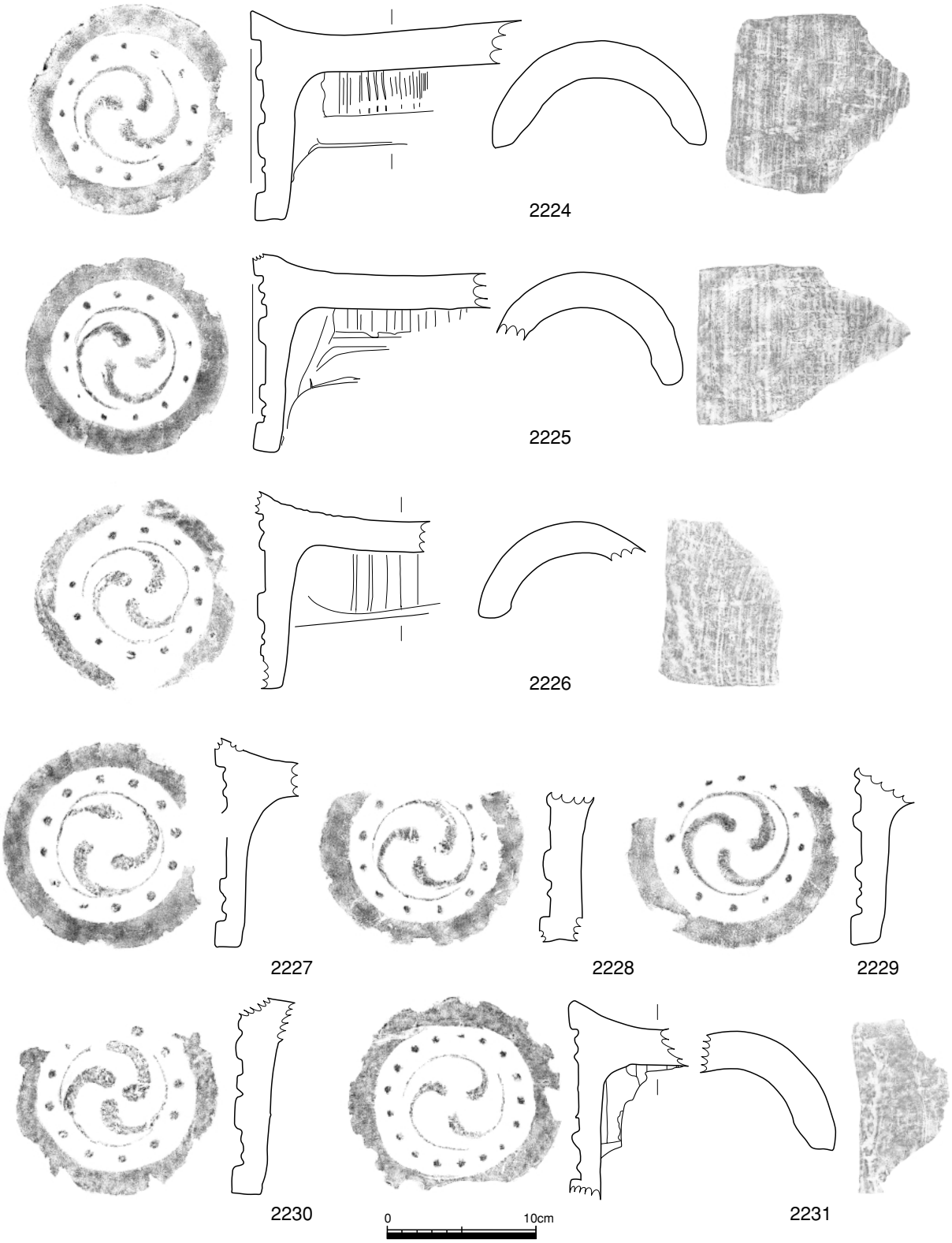
瓦当面径が約 15cm で、紋様構成は中心に右巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴紋



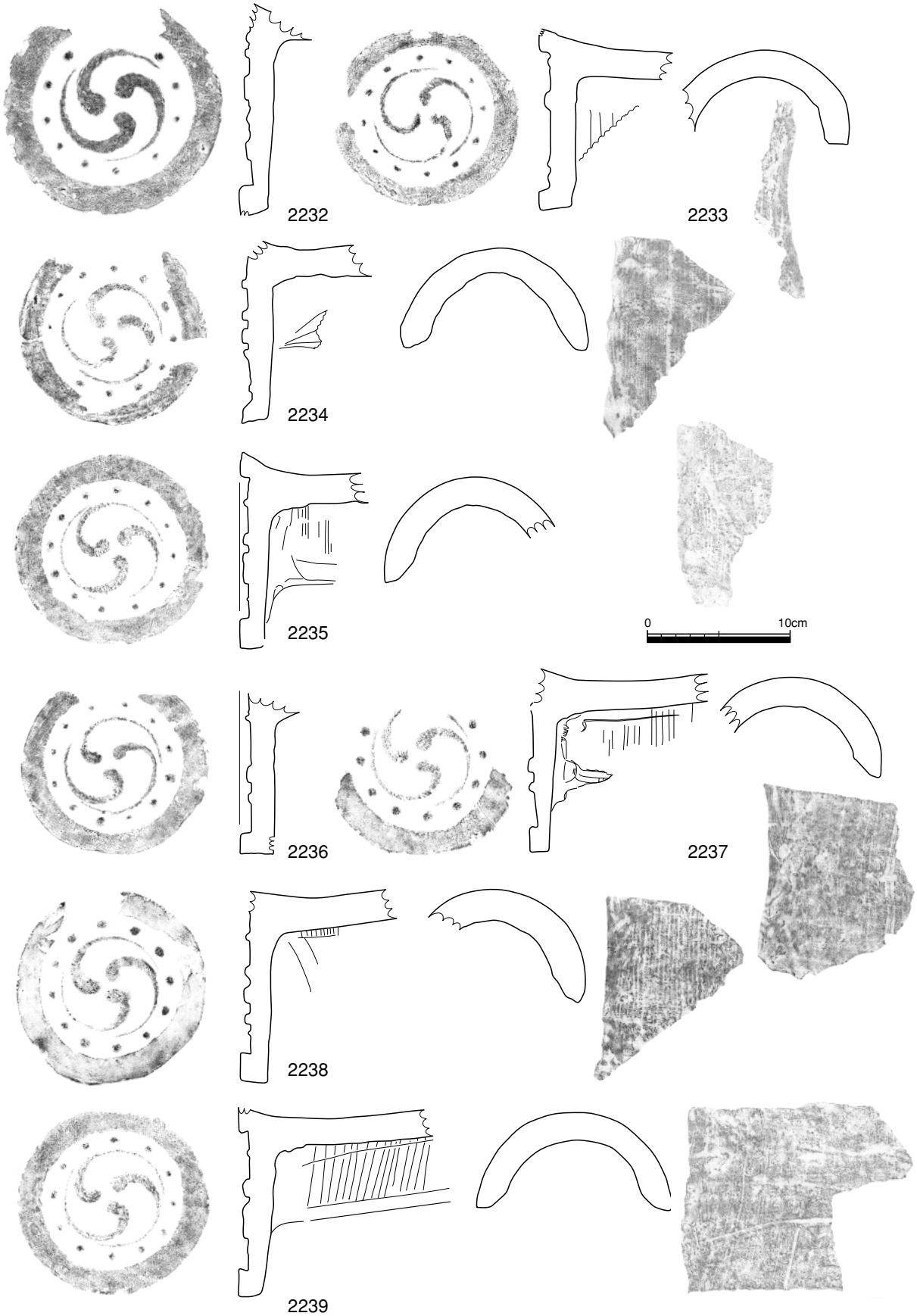
第 111 図　軒丸瓦実測図（10）



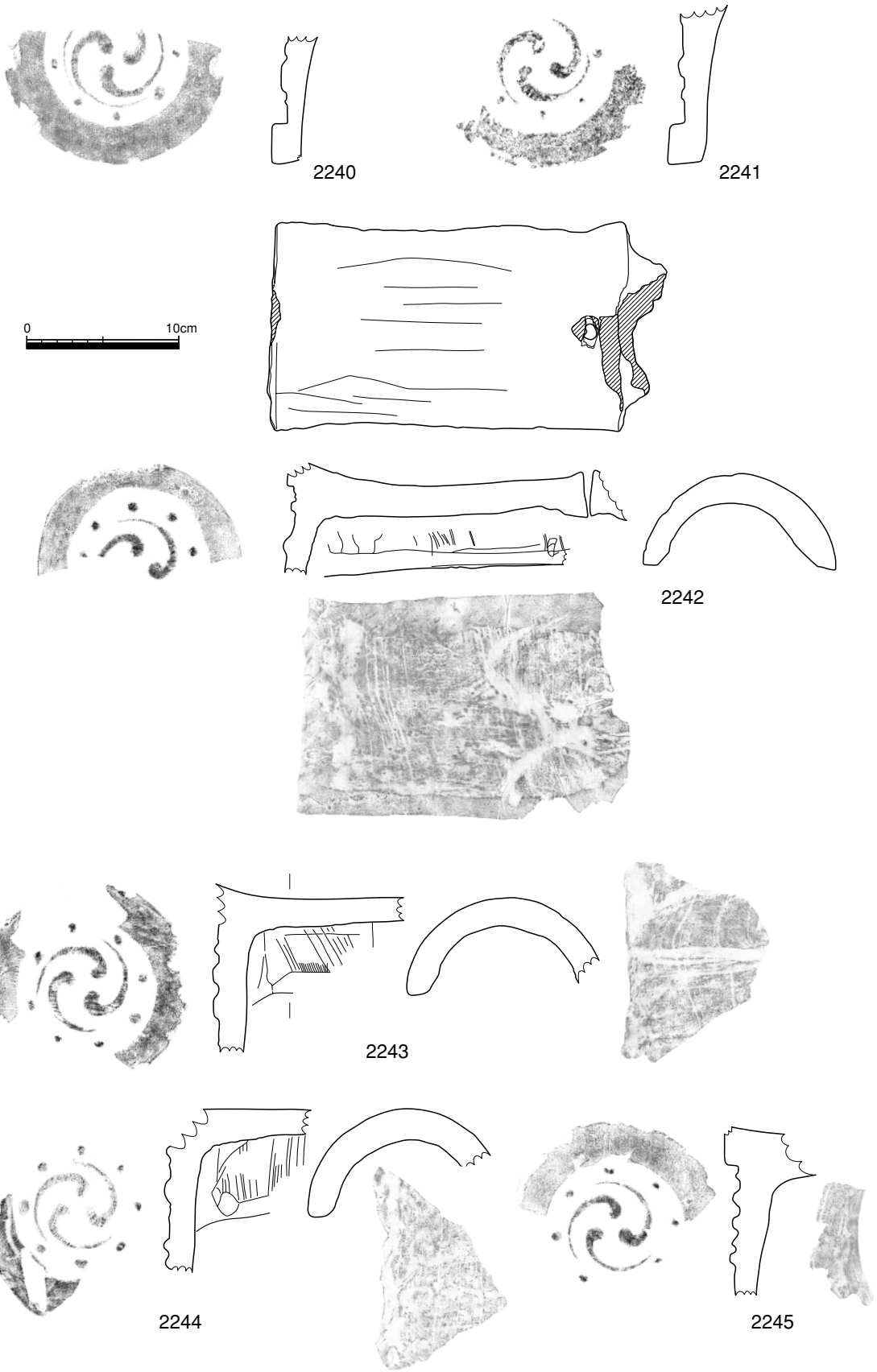
第 112 図　軒丸瓦実測図（11）



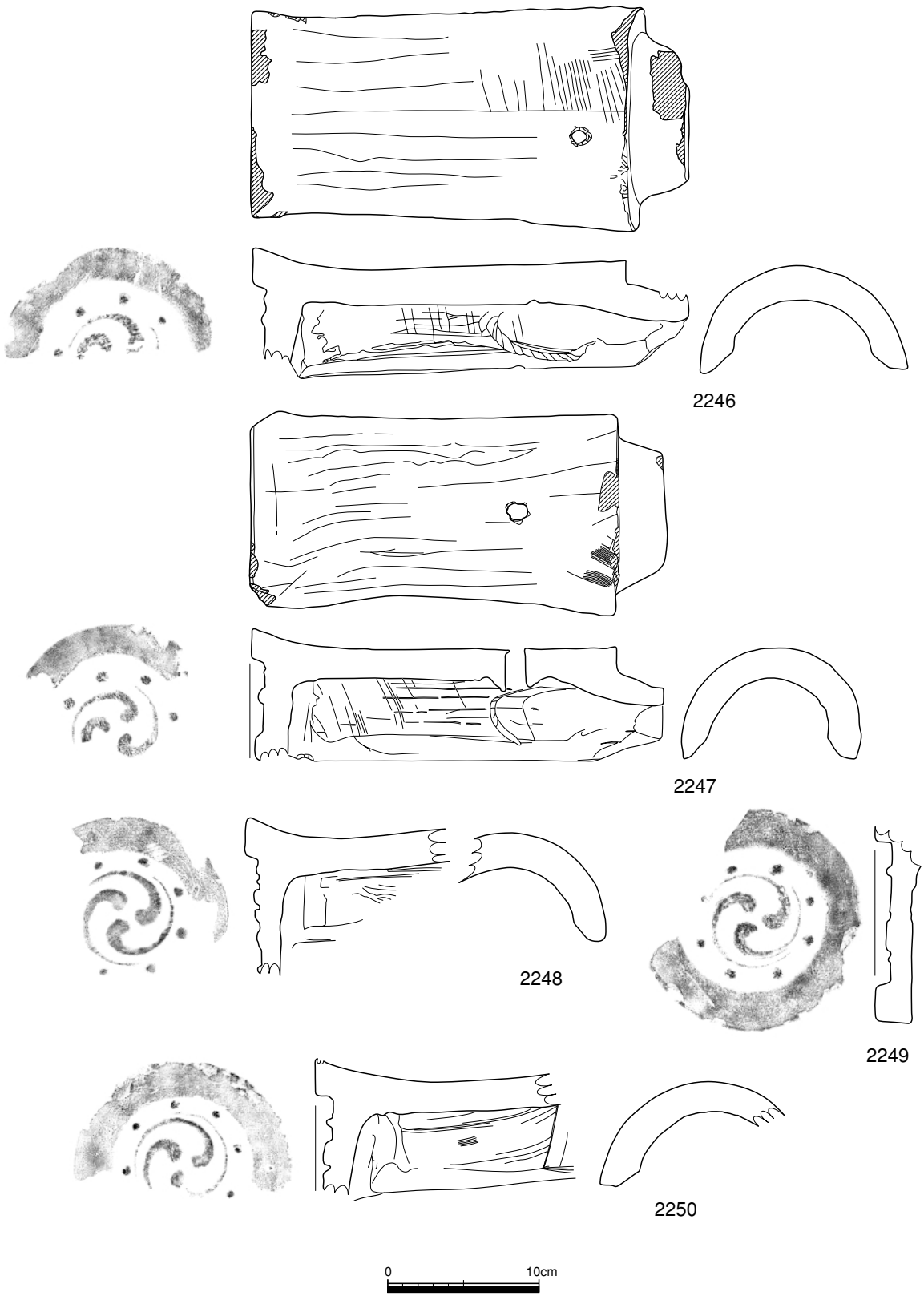
第 113 図　軒丸瓦実測図（12）



第 114 図　軒丸瓦実測図（13）



第 115 図　軒丸瓦実測図（14）



第 116 図　軒丸瓦実測図（15）

は全体に緩やかにカーブする形状でやや間隔が広く、しかも太く大振りである。圏線は持たない。今回の調査では6点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕が判明するものは認められなかった。

O　M271型式（左巻三巴紋に17珠紋軒丸瓦：第113図2231）

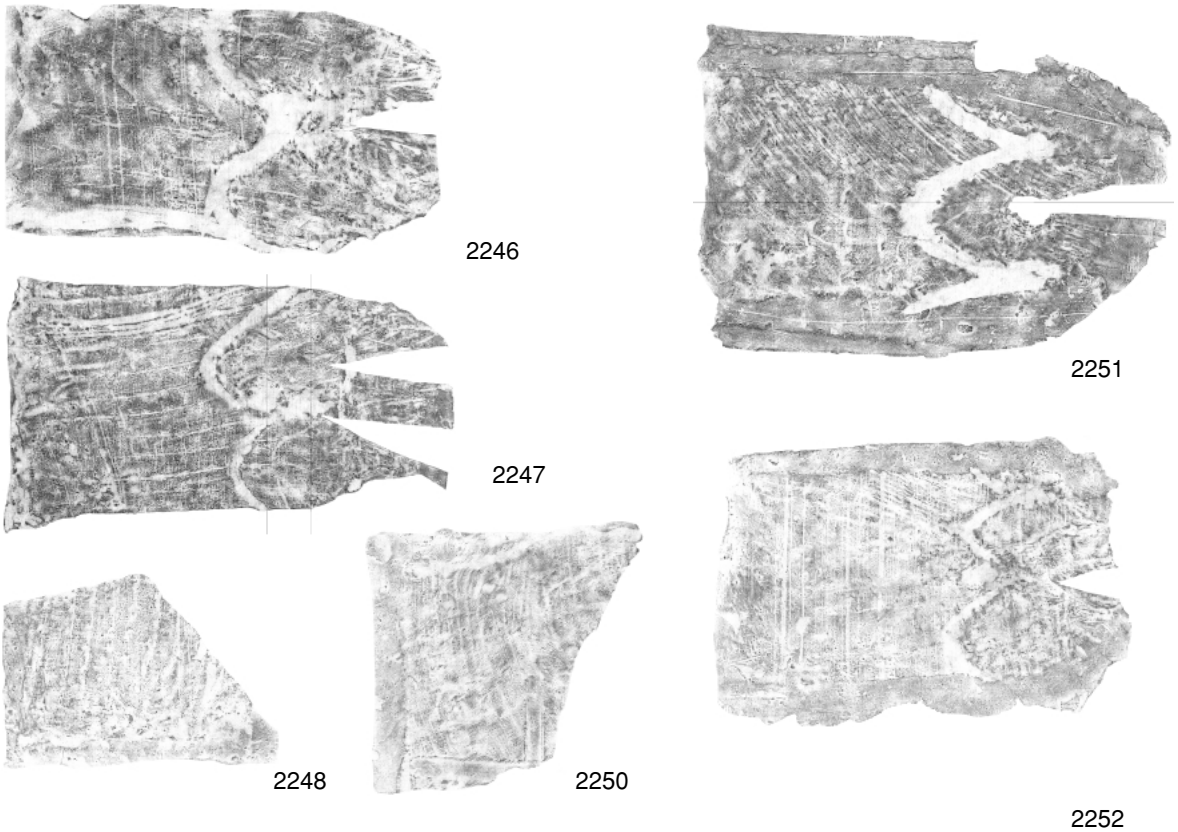
瓦当面径が約15cmで、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を17個配置するものである。巴紋は全体が緩やかにカーブするが、少しいびつとなっている。巴紋の形状はM161型式に類似するような感がある。今回の調査では1点のみ確認され、丸瓦部裏面の調整痕にはコビキB手法の痕跡が認められる。このM271型式はおそらく左巻三巴紋に16珠紋の紋様モチーフを模倣しようとしたものが珠紋の割付を間違えたものであると推測される。

P　M341型式（左巻三巴紋に8珠紋軒丸瓦：第115～120図2242～2273）

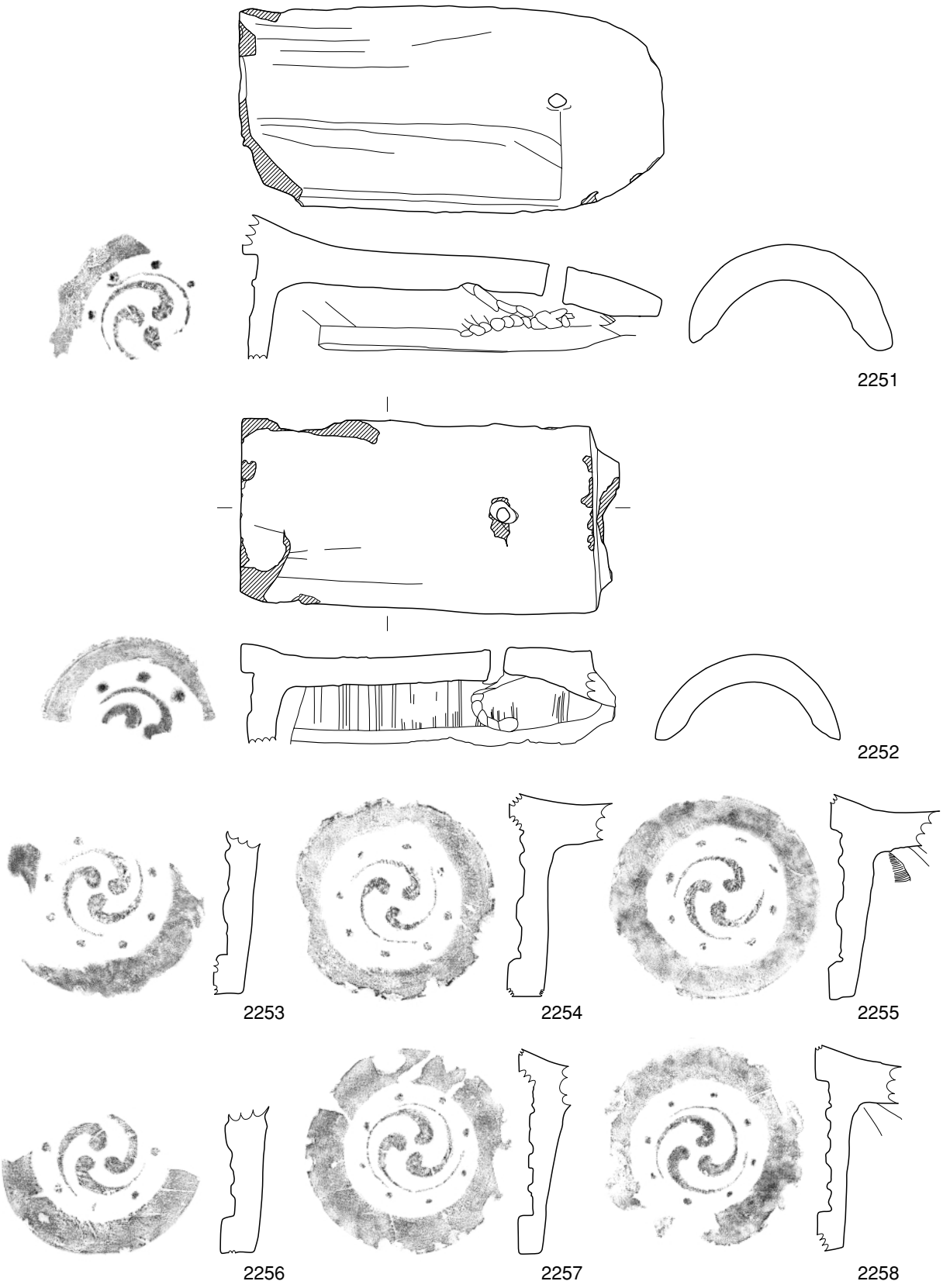
瓦当面径が約13cmで、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を8個配置するものである。巴紋の尾部は短く圏線は持たない。今回の調査では571点と最も多く出土しており、同紋関係や同笵関係の分類について全てを整合的に分類することができなかった。しかし、少なくとも三巴紋の巴どうしの間隔が狭いものと広いものに区分することが可能である。丸瓦部裏面の調整痕に着目すると、コビキA手法が残存するものは23点、コビキB手法が残るものは68点存在しており、桟を持つものが2点、孔を持つものが9点認められる。

Q　M351型式（右巻三巴紋に12珠紋軒丸瓦：第114図2233～2239）

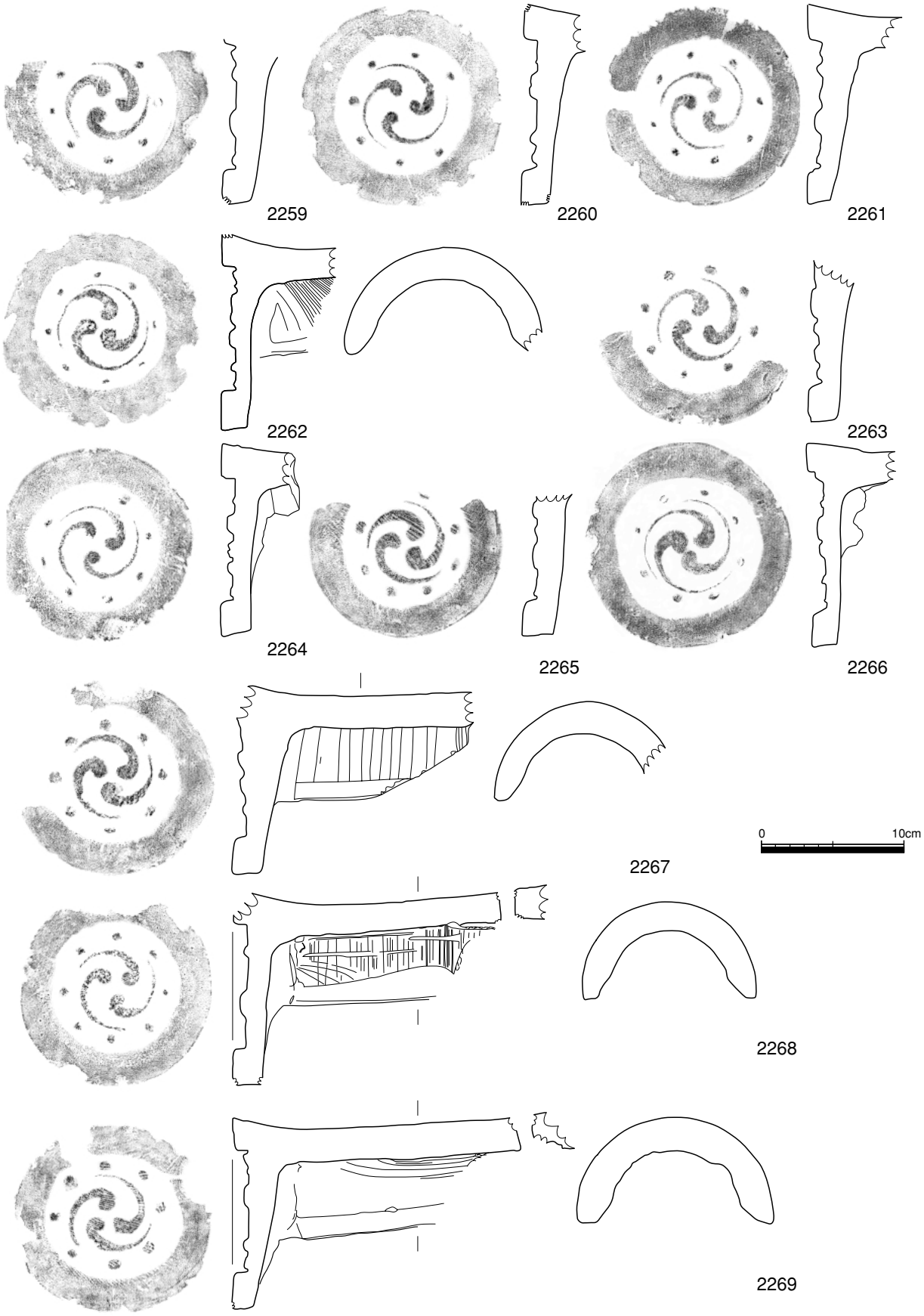
瓦当面径が約13cmで、紋様構成は中心に右巻三巴紋、外区に珠紋を12個配置するものである。今回初めて発見されたタイプの軒丸瓦である。巴紋は全体が緩やかにカーブし、その尾部が細長く伸びて隣の巴紋と接して圏線となる。今回の調査では38点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキAとコビキBの両手法が認められるが、数量的にはコビキB手法の方が多い。



第117図　軒丸瓦実測図（16）



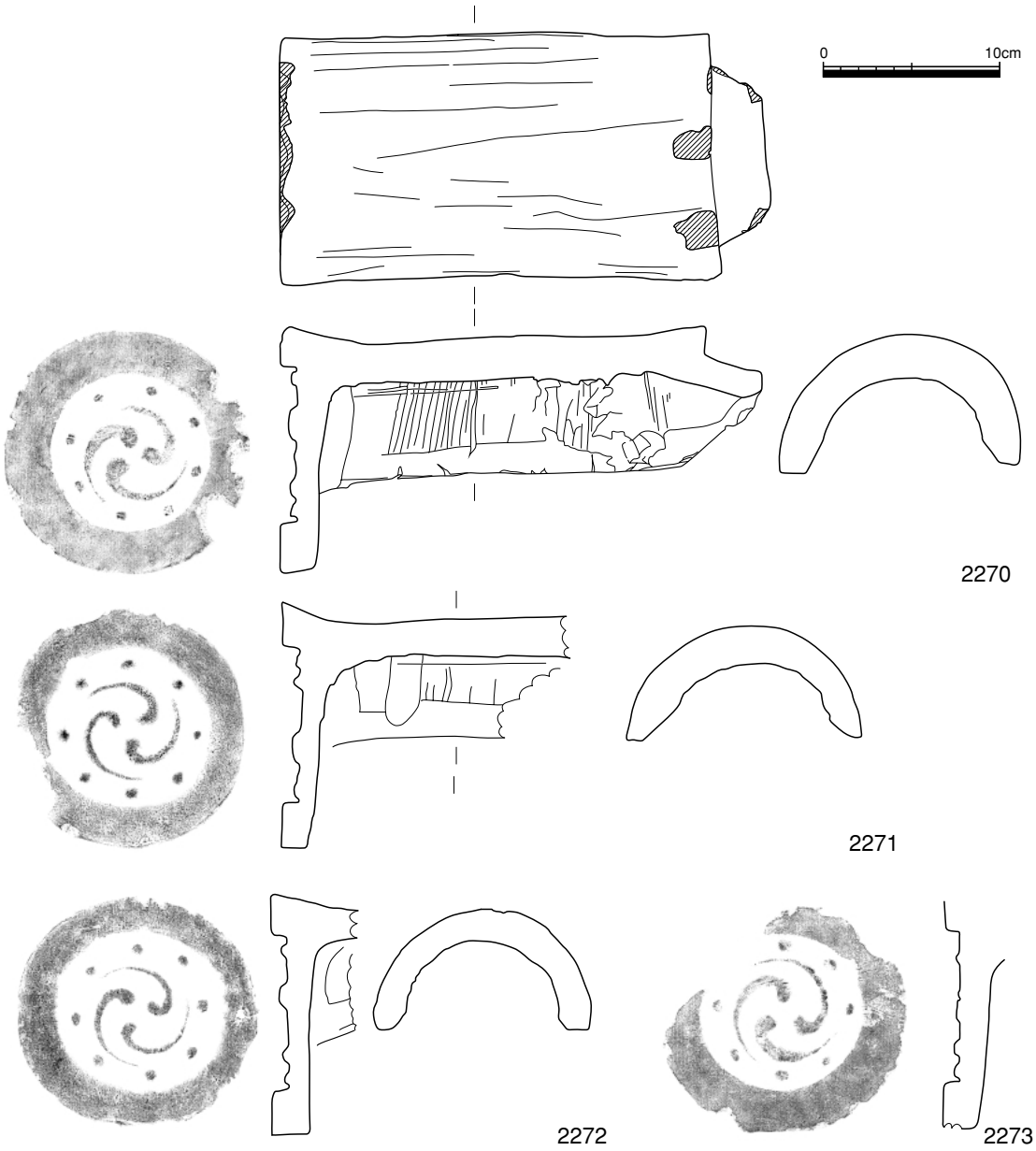
第 118 図　軒丸瓦実測図（17）



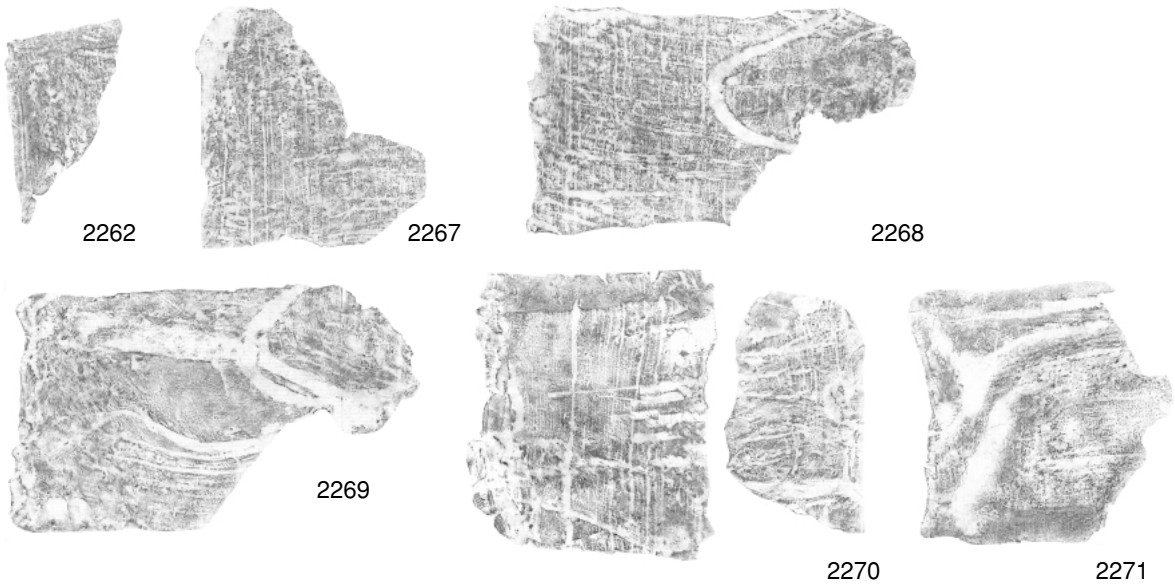
第 119 図　軒丸瓦実測図（18）

R　M441 型式（左巻三巴紋に 8 珠紋軒丸瓦）

瓦当面径が約 10cm で、紋様構成は中心に右巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴紋は尾部が短く、圏線は持たない。今回の調査では8点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕が判明するものは認められなかった。



第 120 図　軒丸瓦実測図（19）



第 121 図　軒丸瓦実測図（20）

軒丸瓦

型式名	総数	コビキA	コビキB	桟あり	孔あり	備考
M101	5	0	1			
M121	77	12	1	1	2	
M122	98	5	4	2		
M123	111	12	0		1	
M124	198	9	49	5	10	
M131	5	1	0			
M132	3	0	0			
M151	6	3	0			
M161	26	13	0			鳥衾
M100番台	133	8	5		1	鳥衾
M211	5	1	0			
M221	33	0	4			
M231	81	11	7	1	1	
M241	21	2	0			
M251	6	0	0			
M271	1	0	1			
M200番台	18	2	0			
M341	571	23	68	2	9	
M351	38	3	9			
M441	8	0	0			
不明	755	82	135	175	12	
合計	2199	187	284	186	36	

軒平瓦

型式名	総数	鰭あり	桟あり	孔あり	水返しあり
H101	31	4			
H102	49	10	1	1	
H111	13			3	3
H112	130	32	2		
H131	26	17	4	2	
H211	10	2	1		1
H212	14				
H213	9				
H214	32	9			
H215	11				
H221	83	4			
H222	42	3			
H331	24	3			
H332	2				
H333	7				
H341	195	11			1
H351	9				1
H491	42	4			
H不明	709	253	50	7	57
合計	1438	352	58	13	63

第 3 表　軒丸瓦・軒平瓦の型式別出土量一覧表

3　軒平瓦

（1）分類の方法

軒平瓦と分類できたものは96区で1352点、97C区で85点、97A区で1点が出土した。この中で瓦当面が残存しある程度瓦当面の紋様が特定できるものが765点存在する。ここでは瓦当面の紋様構成から分類を行い、その類別毎に特徴を記述する。

清須城出土軒平瓦の分類は、軒丸瓦と同様に、大きく小澤・鈴木分類（小澤1987・鈴木1990）と『清洲城下町遺跡Ⅶ』分類（鈴木1997）の二者が存在する。今回使用する分類方法は、対象資料が清須城城郭東部に相当する調査地点の出土資料であることから、後者の方法を採用する。

分類の方法は、以下の方針に則り実施した。

A　瓦当面幅による大分類

今回出土した軒平瓦の瓦当面幅はおおよそ、26～28cm、24～25cm、22～23cm、20cm前後の4類に区分できる。この瓦当面幅による大別は瓦当面脇区の幅が異なる場合があるために笵の規模と必ずしも一致しないが、おおよそ本体の平瓦部の規模と連動すると考えられる。ここでは瓦当面幅の大きいものから順にそれぞれ100番台、200番台、300番台、400番台の型式名を与える。

B　紋様構成による中分類

次に、紋様構成から分類する。軒平瓦の瓦当紋様は、一部のものを除き、中心飾りとその両脇にある唐草紋で構成されている。このうち中心飾りには桐紋、三子葉紋、五子葉紋、桔梗紋、三角形紋、剣菱紋、中心飾りがないものに区分できる。ここではこの中心飾りによる区分を軒丸瓦で示した中分類に対応させ、『清洲城下町遺跡Ⅶ』分類と同様の型式名を与える。この段階の分類は意匠が類似するという意味で「近似意匠瓦」に位置付けられよう。具体的には、上記の区分で順に00番台、10番台、20番台、30番台、40番台、50番台、90番台と名付ける。

C　同紋関係による小分類

次に、同じ瓦当面幅で同じ中心飾りを持つものの中で、唐草紋の形状と配置などから同紋関係の軒丸瓦を類別する。この類別によって同類とされたものは、基本的に同じ型紙による笵型によって製作された軒平瓦群を示していると推測される。それぞれに一桁台の名称を与える。

D　同笵関係による細分類

最後に同紋関係の軒丸瓦の中で、笵傷などから笵が明瞭に異なるものを細分した。この類別が同笵関係にある可能性が高いと考えているが、断定はできない。この細分類を小文字アルファベットで表現する。

E　各型式の命名

上記のような瓦当面径、紋様構成、同紋関係、同笵関係という階層的な分類方針から得られた型式名をH111a型式などの呼び方で表記した。この結果、『清洲城下町遺跡Ⅶ』の分類とほとんど変わらない結果となっているが、H330番台の型式で齟齬が生じてしまっている部分がある。ここでは無用な混乱を避けるために『清洲城下町遺跡Ⅶ』分類の名称をそのまま用い、本文の記述で変更点を指摘するのみに止めたい。

（2）各型式の説明

A　H101型式（桐紋に4反転均整唐草紋軒平瓦1類：第122図2274～2276）

瓦当面径幅が約28cmで、紋様構成は五三桐紋の中心飾りに4反転の均整唐草紋を配置するものである。4番面（両端）の唐草が3番目の唐草の中位から始まるもので、唐草紋は比較的左右が対称的になっている。五三桐紋は葉が大形の掌状で欠刻が非常に緩やかな波状となり、枝は短く花蕾は三又に枝分かれした形状となっている。黒田分類のＡⅡｂ（黒田1993）に属するものである。今回の調査では31点が出土した。このうち平瓦部両端に鰭を持つものが4点存在する。

B　H102型式（桐紋に4反転均整唐草紋軒平瓦2類：第123図2277・2278）

瓦当面径幅が約28cmで、紋様構成は五三桐紋の中心飾りに4反転の均整唐草紋を配置するものであ

る。4番面（両端）の唐草が3番目の唐草の下位から始まるもので、4番目の唐草紋は左右が被対称的である。H101型式に比べて、1番目の唐草が上へ持ち上がり、五三桐紋は不明瞭になっている。今回の調査では49点が出土した。このうち平瓦部両端に鰭を持つものが10点、平瓦部裏面に桟を持つものが1点存在する。

H102a型式（桐紋に4反転均整唐草紋軒平瓦2類：第123図2278）

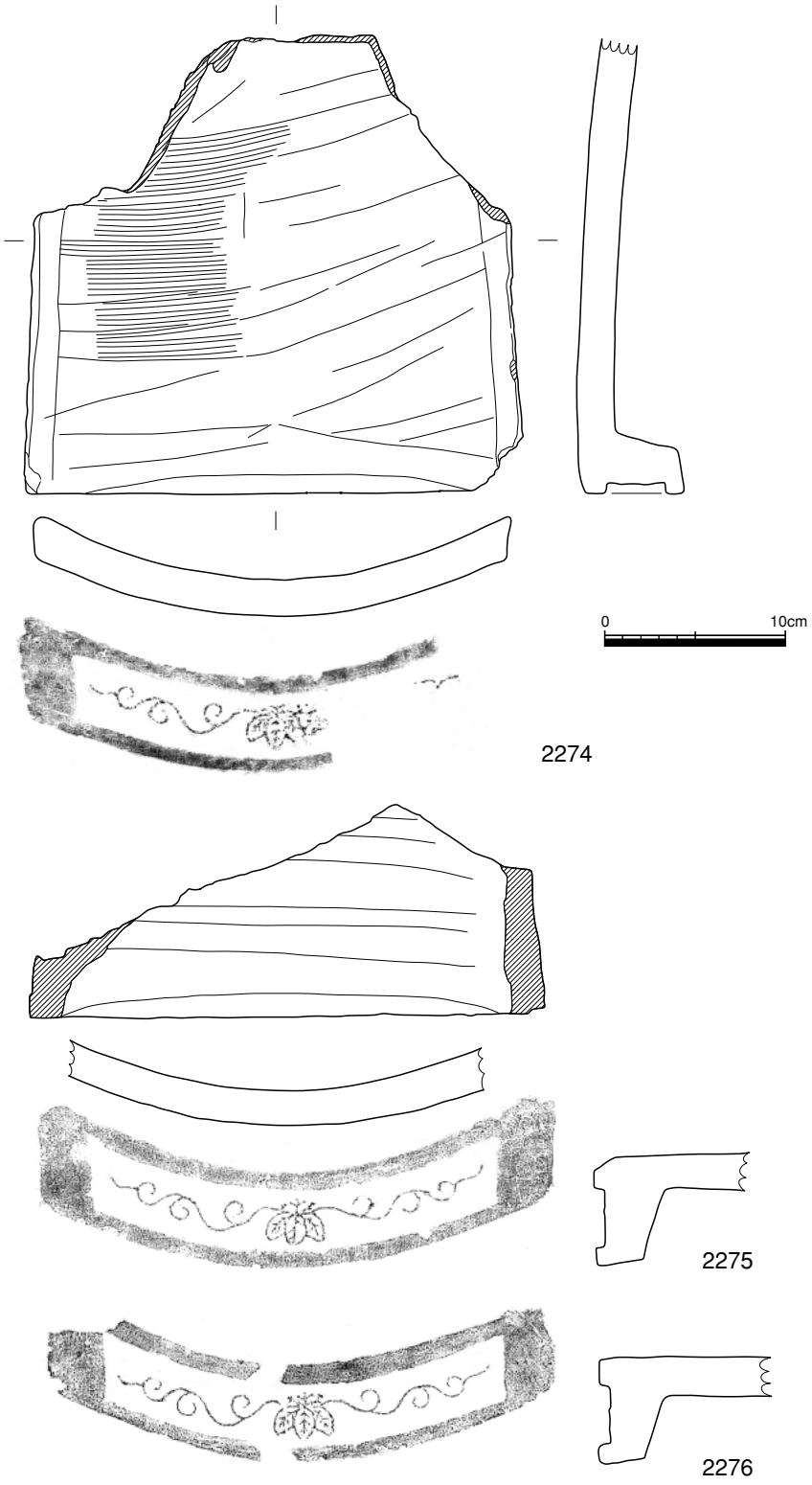
五三桐紋の下位の花蕾が簡略化されて膨らみを持たず、葉の欠刻はやや緩やかな波状となるもので、黒田分類のＡⅡｃ？に属するものである。

H102b型式（桐紋に4反転均整唐草紋軒平瓦2類：第123図2277）

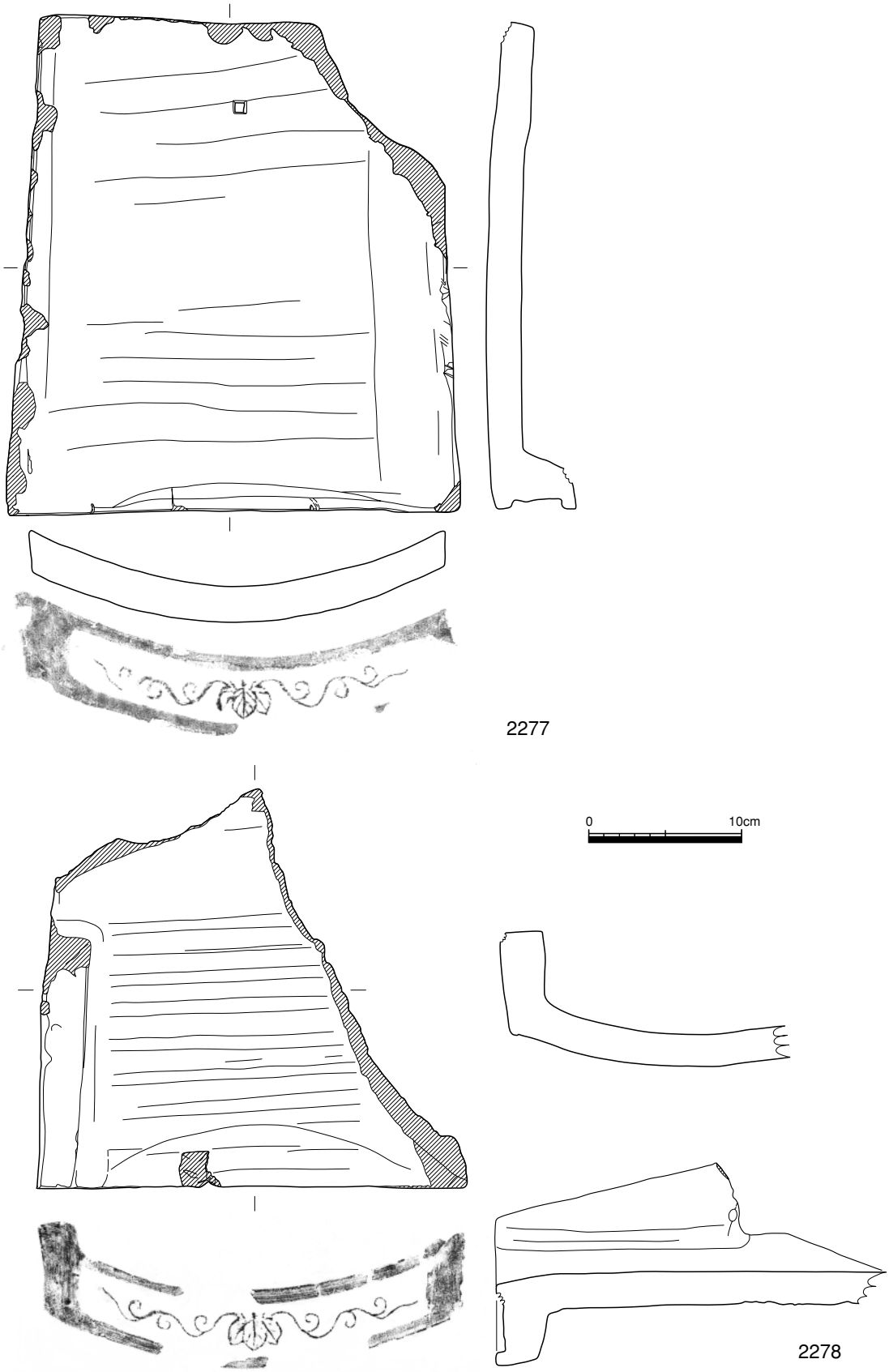
五三桐紋の全花蕾が簡略化されて膨らみを持たず、葉が欠刻のない橘の葉状となるもので、黒田分類のＣⅠⅡｄ？に属するものである。葉の葉脈が外郭線まで伸びている。

Ｃ　H111型式（三子葉紋に3反転均整唐草紋軒平瓦：第124・125図2279～2284）

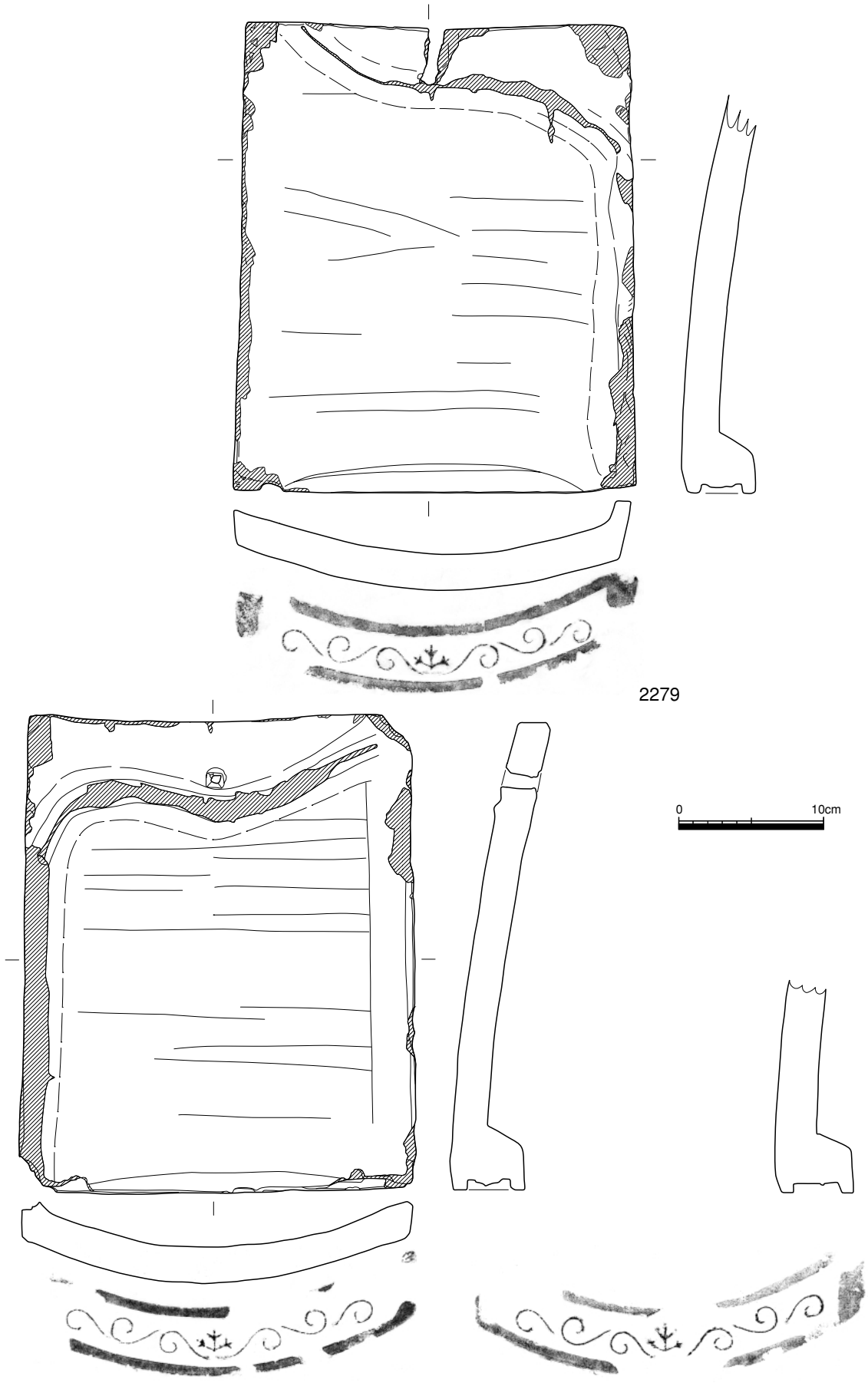
瓦当面幅が約26cmで、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに3反転の均整唐草紋を配置するものである。各三子葉は明瞭に三又に分岐しており、唐草紋は十分に内側に巻



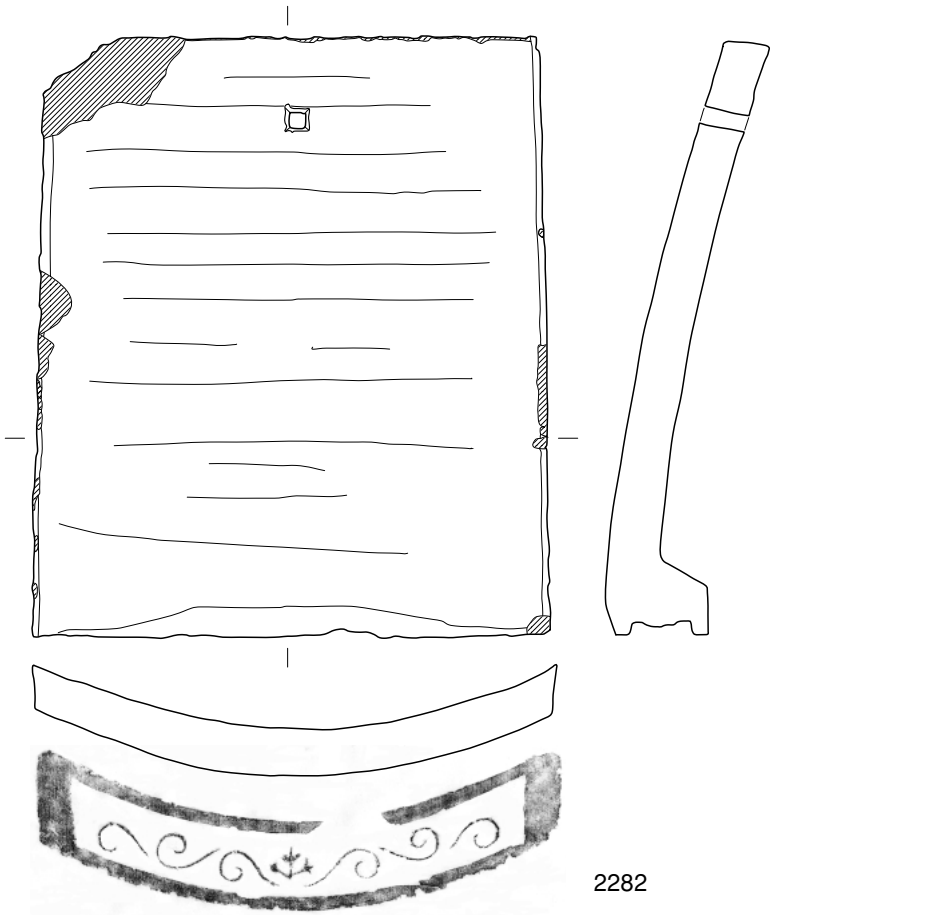
第122図　軒平瓦実測図（1）



第 123 図　軒平瓦実測図（2）



第 124 図　軒平瓦実測図（3）



第 125 図　軒平瓦実測図（4）

いている。周縁区と紋様区の周囲に丁寧なミガキ調整が施されており、これに類する調整が施されたものは軒丸瓦M151型式のみである。平瓦部頭端が残存するものについては全て釘孔と考えられる孔が1個存在している。今回の調査では13点が出土した。平瓦部表面に水返しを有するものが3点認められる。

D　H112型式（三子葉紋に4反転均整唐草紋軒平瓦：第126・127図2285～2294）

瓦当面幅が約26cmで、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに4反転の均整唐草紋を配置するものである。各三子葉は剣菱状となり、唐草紋は上下に重なり合いながら展開する。4番目（両側）の唐草紋下端が波状になっている。今回の調査では130点が出土した。このうち平瓦部両端に鰭を持つものが32点、平瓦部裏面に桟を持つものが2点存在する。平瓦部頭端が残存するものについては全く穿孔されたものは全く存在しない。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では、さらに2型式に細分したが、今回の資料は全てH112a型式に属しており、またこれらを細分することはできなかった。H112b型式はH215型式等に属するものだったかも知れない。

E　H131型式（桔梗紋に4反転均整唐草紋軒平瓦：第128～130図2295～2301）

瓦当面幅が約26cmで、紋様構成は桔梗紋の中心飾りに4反転の均整唐草紋を配置するもので、紋様区の上端と両脇端に圏線を1条配置する。唐草紋の巻き込みは非常に弱い。今回の調査では26点が出土した。このうち平瓦部両端に鰭を持つものが17点、平瓦部裏面に桟を持つものが4点存在する。平瓦部頭端が残存するものは2点確認された。

F　H211型式（三子葉紋に2反転均整唐草紋軒平瓦1類：第130図2302～2303）

瓦当面幅が約24～25cmで、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに2反転の均整唐草紋を配置するものである。各三子葉は長くシャープでその先端は比較的明瞭に三又に分岐しており、唐草紋の巻き込みは弱い。外区の高さが非常に低くなっている。今回の調査では10点が確認されたが、このうち平瓦部両端に鰭を持つものが2点、平瓦部裏面に桟を持つものが1点、平瓦部表面に水返しを有するものが1点認められる。

G　H212型式（三子葉紋に2反転均整唐草紋軒平瓦2類：第131図2304・2305）

瓦当面幅が約24～25cmで、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに2反転の均整唐草紋を配置するものである。各三子葉は幅太の剣菱状となり、唐草紋は内側に十分に巻き込まれている。外区の高さは比較的高い。今回の調査では14点が出土した。このうち平瓦部に鰭、桟、水返しを観察できる資料は認められなかった。

H　H213型式（三子葉紋に3反転均整唐草紋軒平瓦1類：第131図2309）

瓦当面径が約24～25cmで、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに3反転の均整唐草紋を配置するものである。各三子葉は幅狭の剣菱状となり、唐草紋を内側に十分に巻き込んでいる。3番目の唐草は外区に接して途切れていることから、別型式の笵型を切断し転用した可能性が考えられる。今回の調査では9点が出土したが、平瓦部に鰭、桟、水返しを持つものは認められなかった。

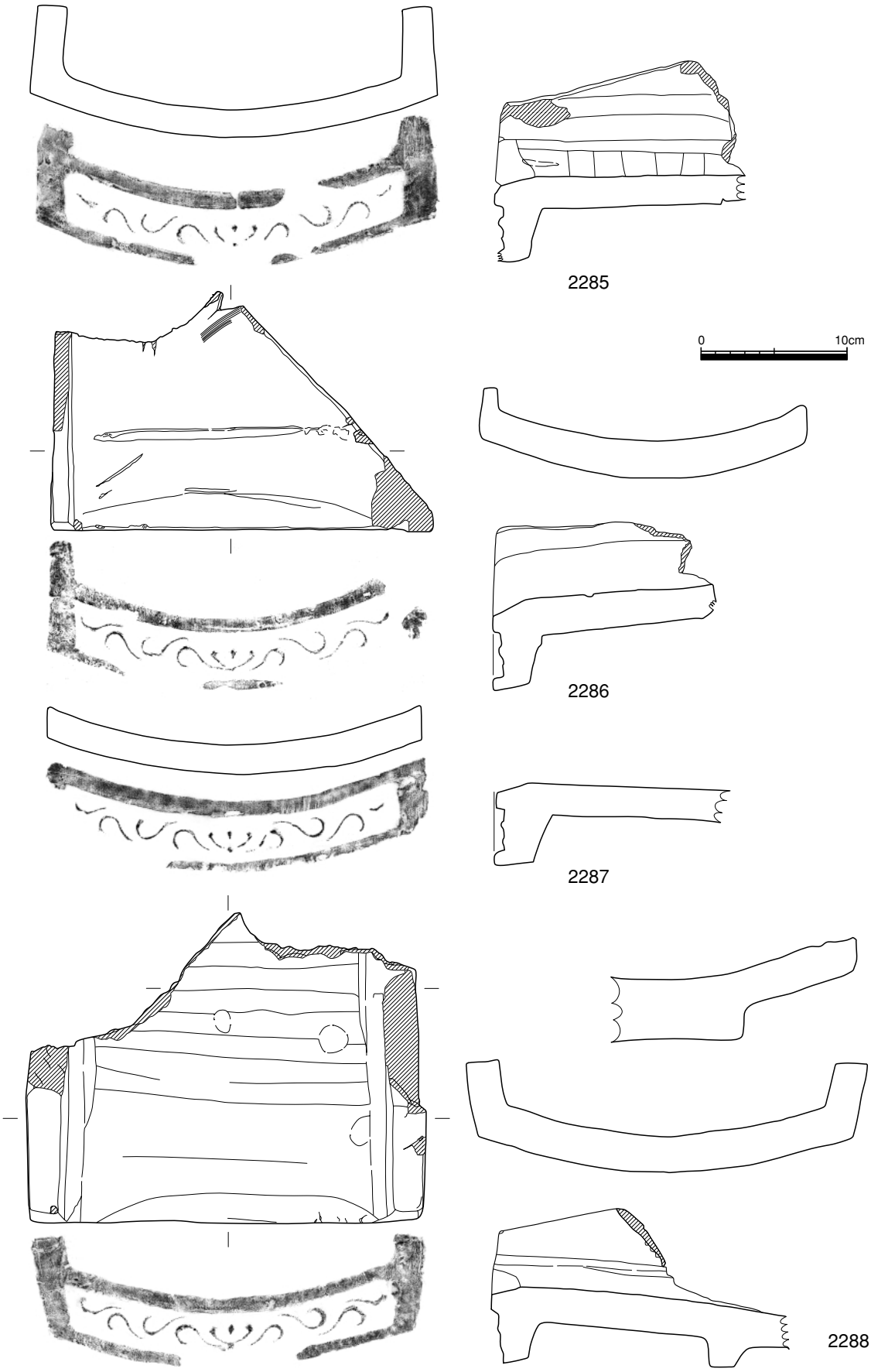
I　H214型式（三子葉紋に3反転均整唐草紋軒平瓦2類：第131図2306～2308・2310）

瓦当面幅が約24～25cmで、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに3反転の均整唐草紋を配置するものである。各三子葉は短く丸みを帯びており、外側の子葉の方が太い。3番目（両側）の唐草下端が波状になり、他の唐草は巻きあがっている。今回の調査では32点が出土した。このうち平瓦部両端に鰭を持つものが9点確認された。

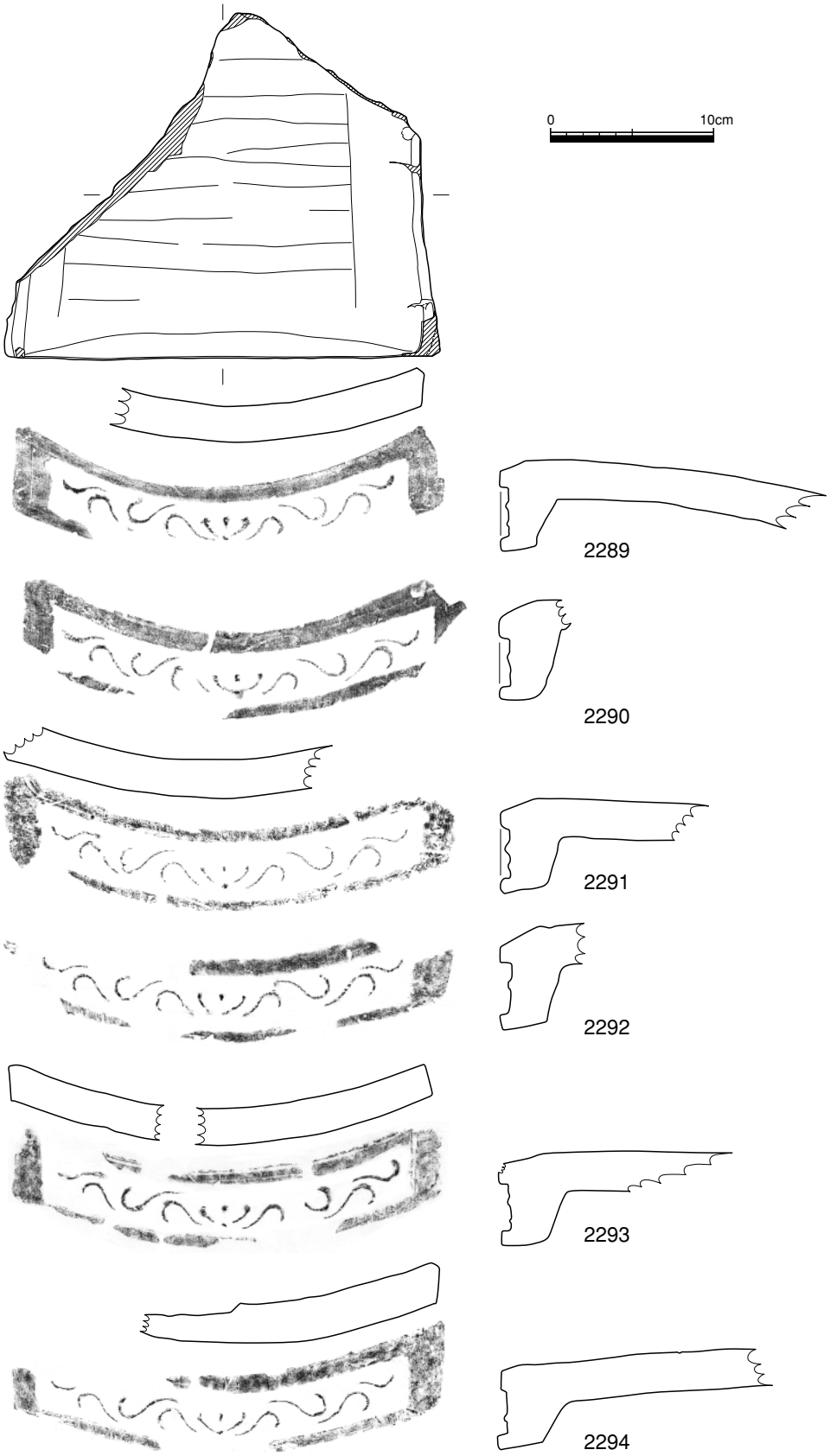
J　H215型式（三子葉紋に3反転均整唐草紋軒平瓦3類：第131図2311～2313）

瓦当面幅が約24～25cmで、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに3反転の均整唐草紋を配置するものである。各三子葉は長く先端が尖っている。2番目の唐草と3番目の唐草が連続しており、2反転の唐草紋と表現することも可能である。H211型式と同様に、外区の高さが非常に低くなっている。今回の調査では11点が出土したが、平瓦部に桟、鰭、水返しが認められるものはなかった。

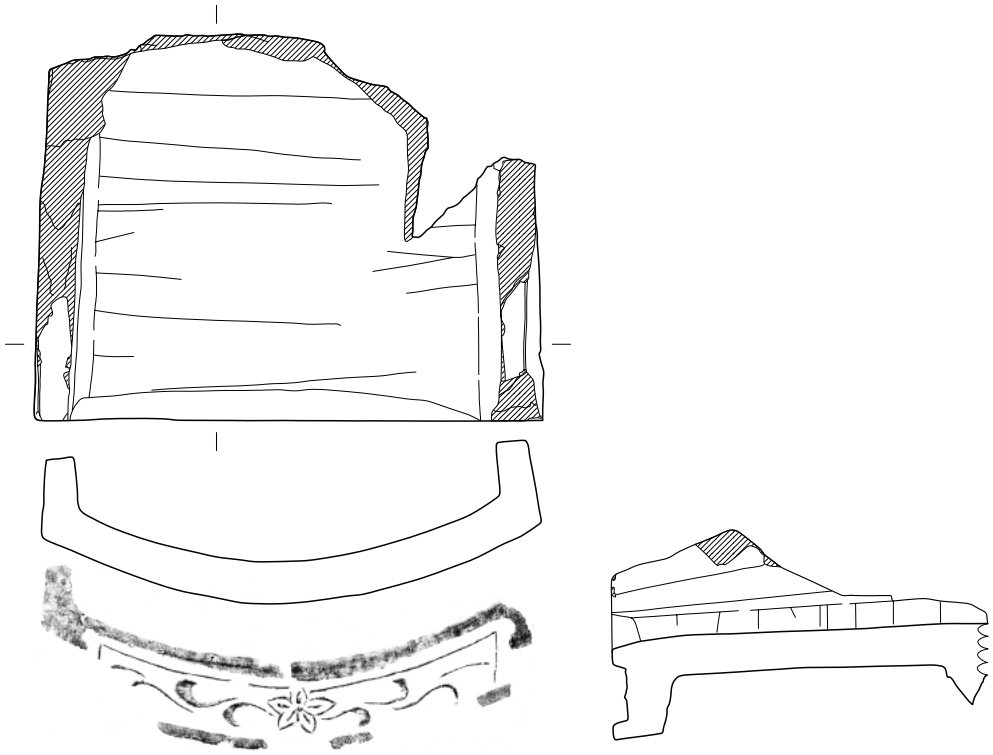
K　H221型式（五子葉紋に2反転均整唐草紋

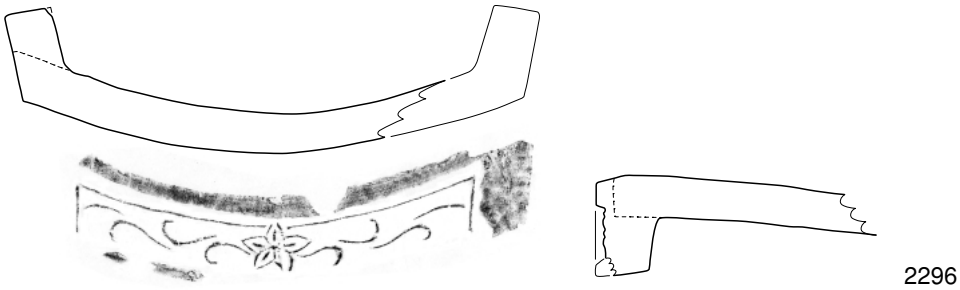


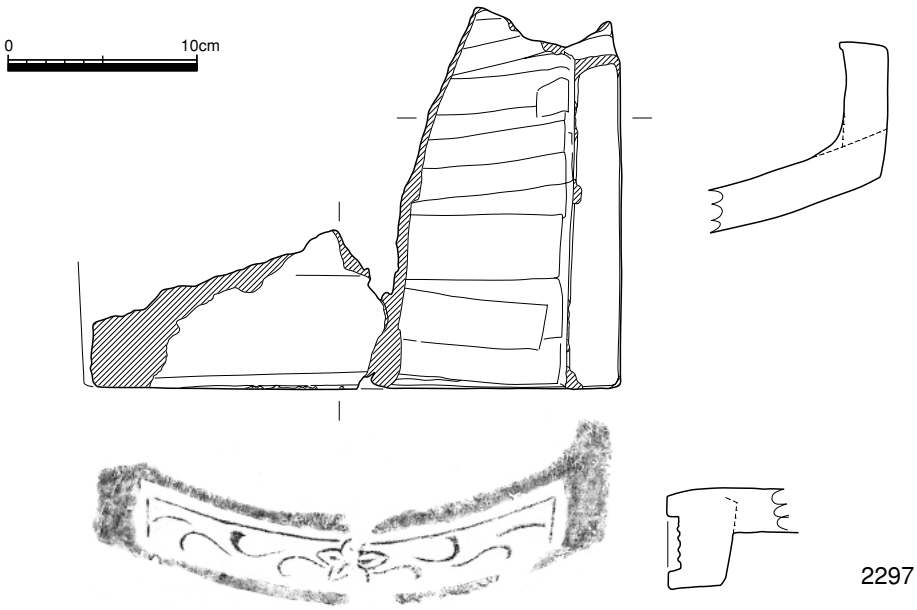
第 126 図　軒平瓦実測図（5）



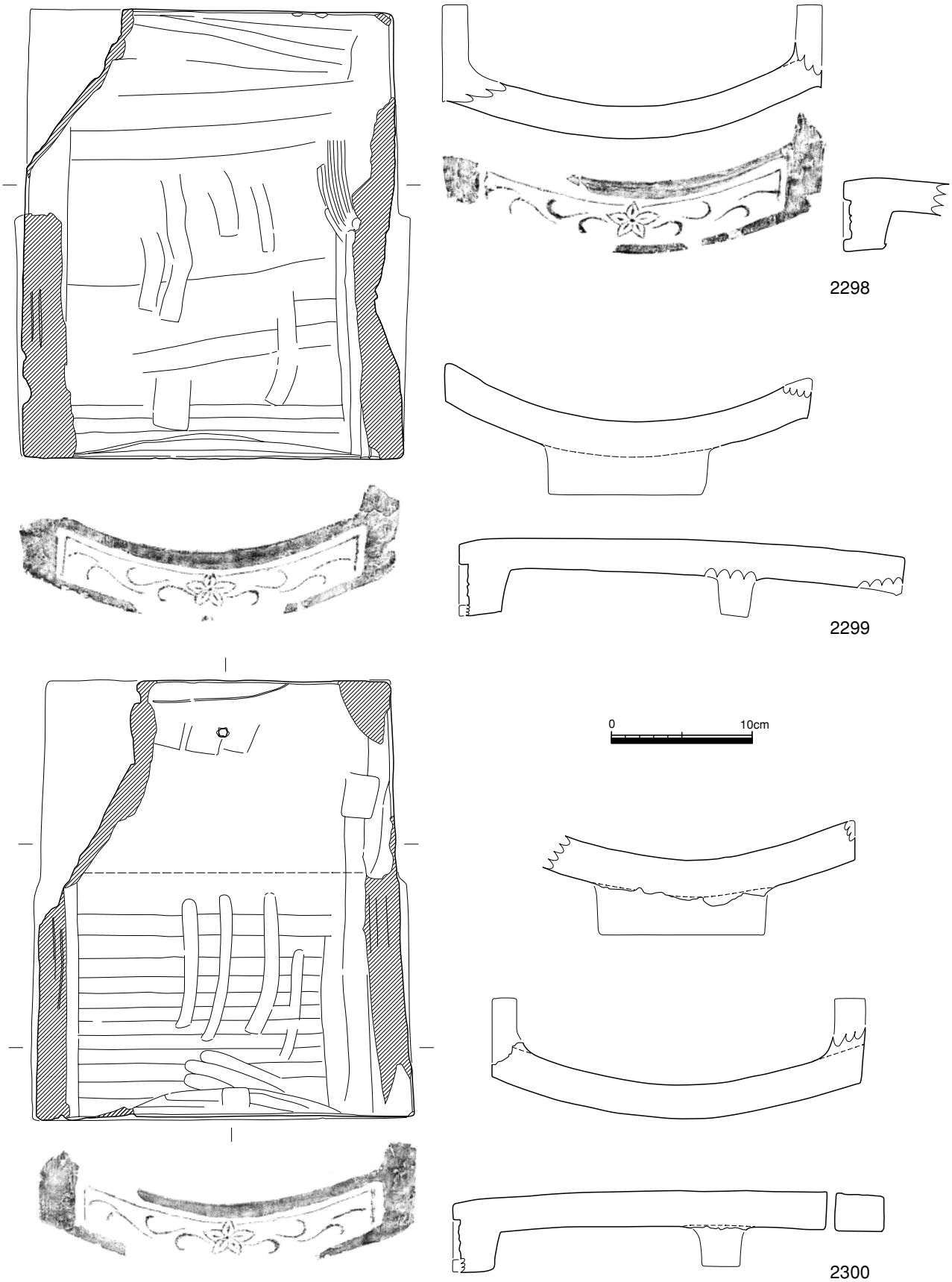
第 127 図　軒平瓦実測図（6）



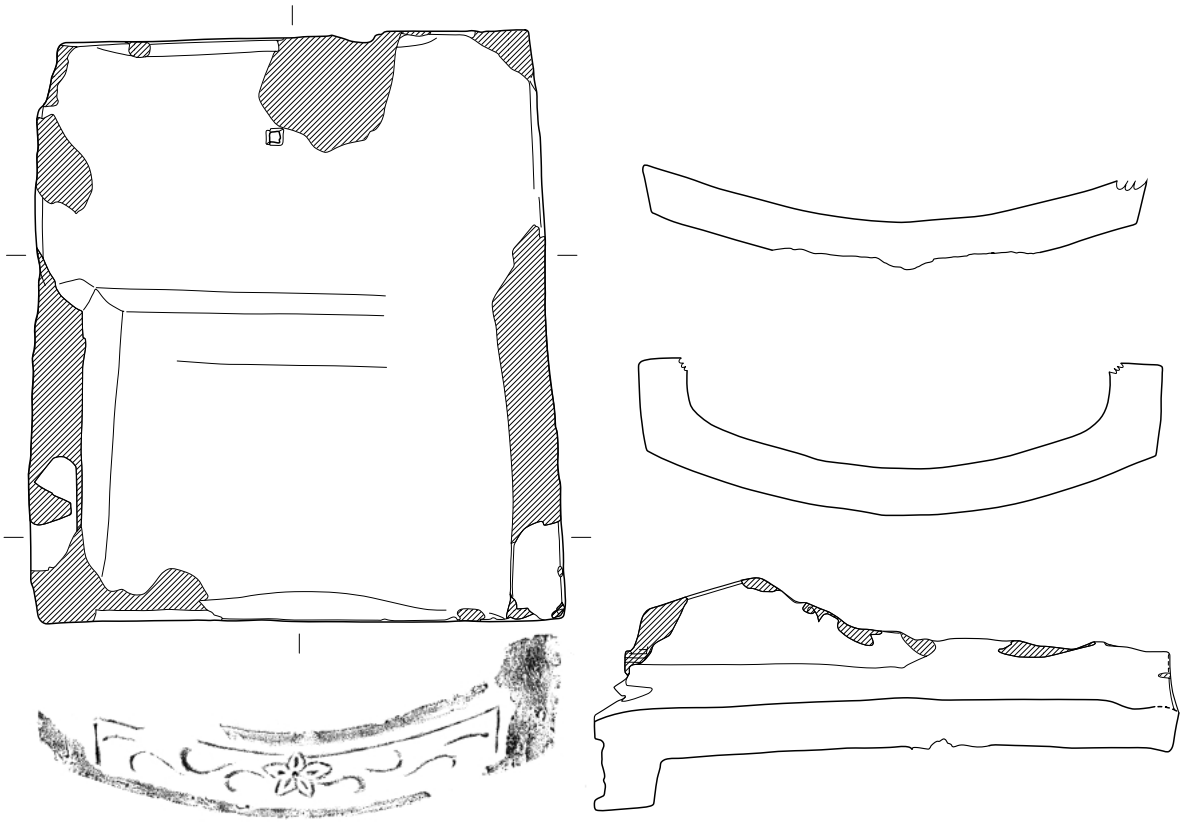


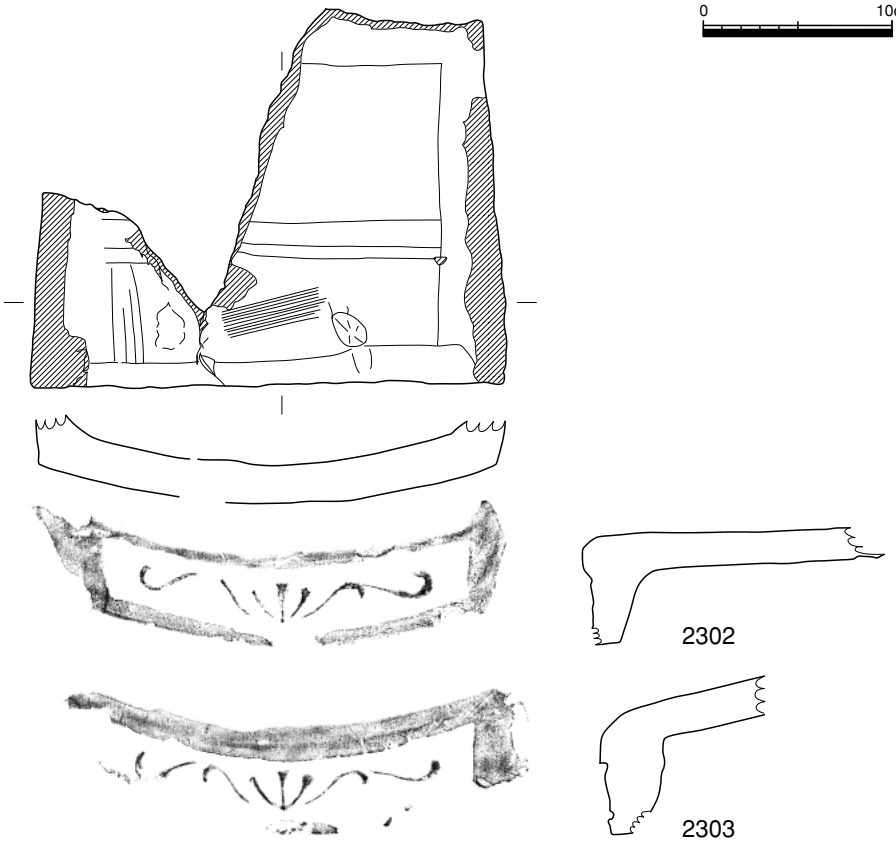


第 128 図　軒平瓦実測図（7）

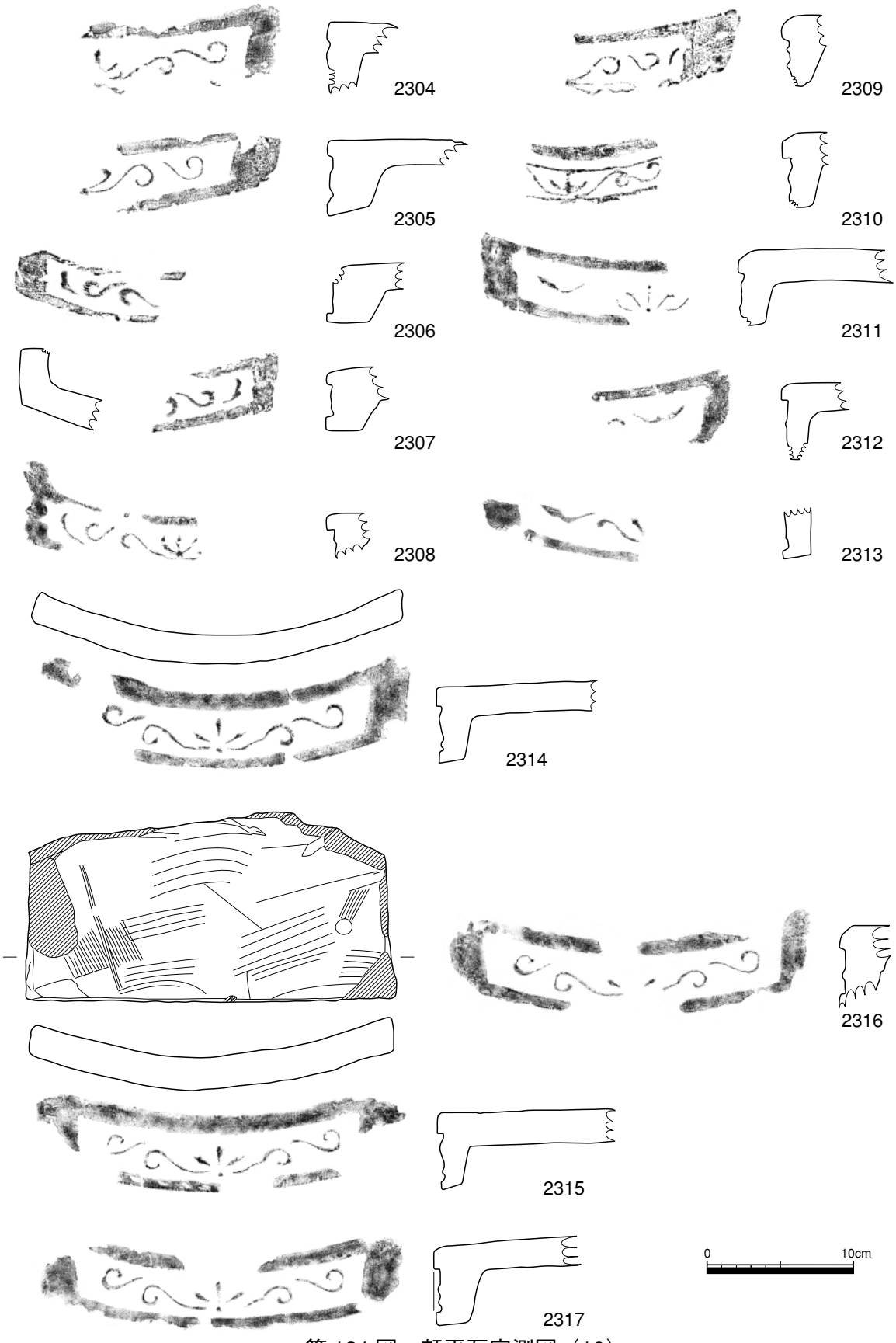


第 129 図　軒平瓦実測図（8）

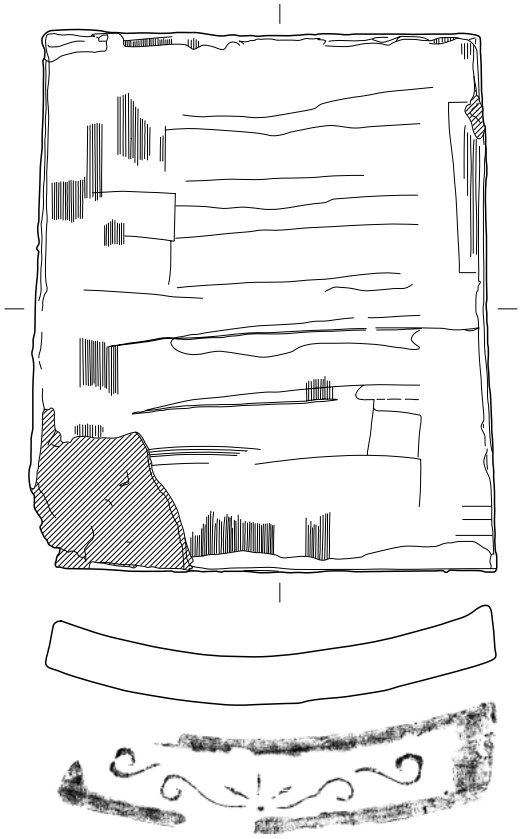


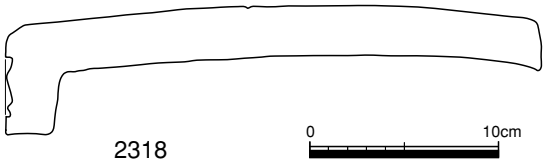


第 130 図　軒平瓦実測図（9）

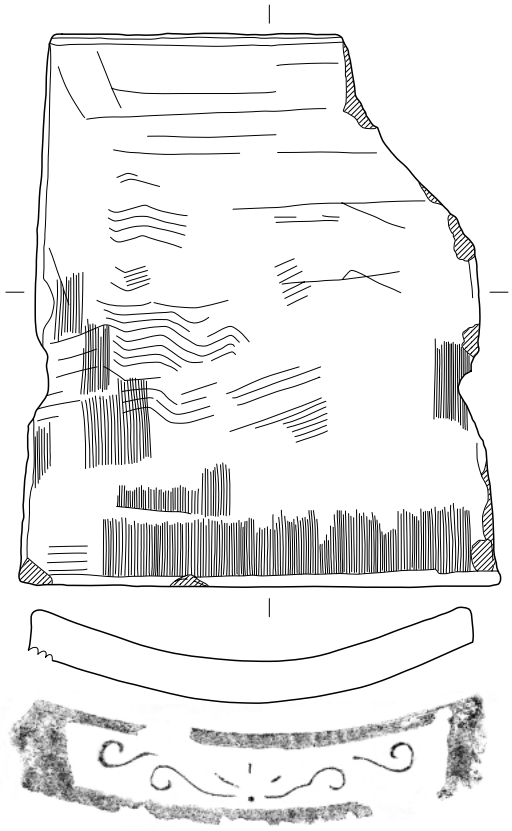


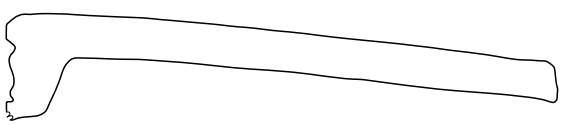
第 131 図　軒平瓦実測図（10）





2318





2319

第 132 図　軒平瓦実測図（11）

軒平瓦1類：第131・132図2314～2319）

瓦当面幅が約24～25cmで、紋様構成は五子葉紋の中心飾りに2反転の均整唐草紋を配置するものである。上位の三子葉は比較的短い剣菱状に、下位二子葉は1番目の唐草と連続する形状となっている。下位二子葉を唐草紋と解釈することも可能であるが、ここでは五子葉紋と理解した。唐草紋は十分に内側に巻き込んでいる。今回の調査では83点が出土した。このうち平瓦部両端に鰭を持つものが4点存在する。

L　H222型式（五子葉紋に2反転均整唐草紋軒平瓦2類：第133図2320～2322）

瓦当面幅が約24～25cmで、紋様構成は五子葉紋の中心飾りに2反転の均整唐草紋を配置するものである。各五子葉は丸みを持つ剣菱状で、比較的短い。唐草紋の巻き込みはH221型式よりも弱い。今回の調査では42点が確認され、平瓦部両端に鰭を持つものが3点認められた。

M　H331型式（桔梗紋に3反転均整唐草紋軒平瓦1類：第133図2323～2327）

瓦当面幅が約22～23cmで、紋様構成は桔梗紋の中心飾りに3反転の均整唐草紋を配置するものである。桔梗紋は星形の輪郭を持つ楓状のもので、輪郭の入角部から内側に短い線が入る。3番目の唐草上位に羽状の紋様が加えられている。今回の調査では24点が出土したが、平瓦部側端部に鰭を持つものが3点認められる。これまでこのH331型式と認識されたものは中心飾りから左側の部分に限定されていたが、今回H333型式に分類されたものと接合された事例を発見するに至り、H331型式とH333型式は同じ型式の瓦である可能性が高くなったといえる。

N　H332型式（桔梗紋に3反転均整唐草紋軒平瓦2類：第133図2328～2329）

瓦当面幅が約22～23cmで、紋様構成は桔梗紋の中心飾りに3反転の均整唐草紋を配置するものである。桔梗紋は星形の輪郭を持つ楓状のもので、輪郭から伸びる線は存在しない。2番目の唐草中位から枝分かれして外側に巻き込む唐草が存在する。今回の調査では2点が出土したが、平瓦部に桟、鰭、水返しが認められるものはなかった。

O　H333型式（桔梗紋に3反転均整唐草紋軒平瓦3類：第133図2330～2332）

瓦当面幅が約22～23cmで、紋様構成は桔梗紋の中心飾りに3反転の均整唐草紋を配置するものである。桔梗紋は星形の輪郭を持つ楓状のもので、輪郭から伸びる線は存在しない。2番目の唐草から枝分かれする紋様はない。今回の調査では7点が出土したが、平瓦部に桟、鰭、水返しが認められるものはなかった。これまでこのH333型式は中心飾りよりも右側の部分しか発見されていなかったが、H331型式とH333型式が接合する資料（2327）が存在し、両者は同じ型式の瓦である可能性が高い。

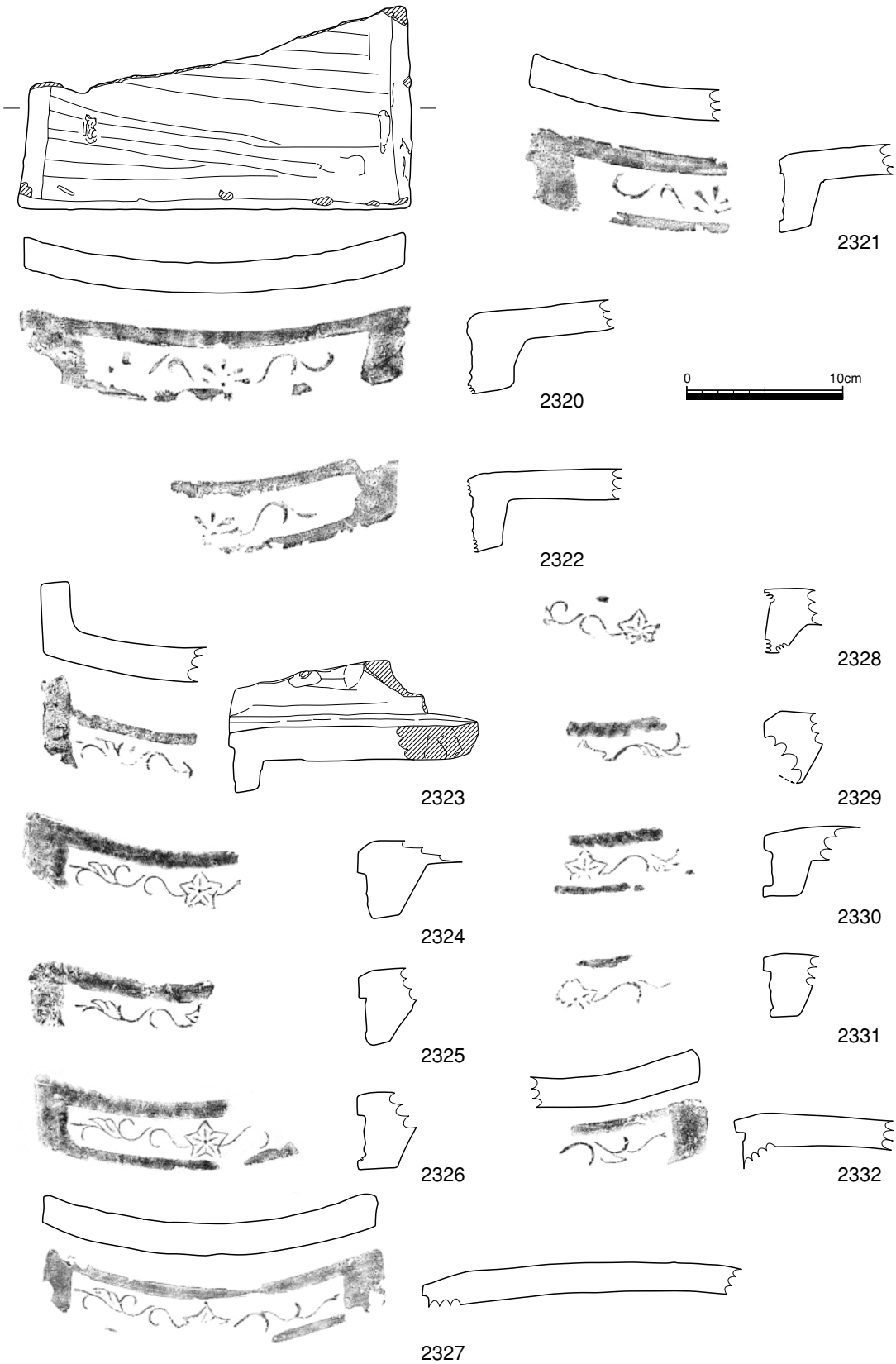
P　H341型式（三角形紋に3反転均整唐草紋軒平瓦：第134・135図2333～2341）

瓦当面幅が約22～23cmで、紋様構成は三角形紋の中心飾りに3反転の均整唐草紋を配置するものである。三角形紋は三角形の輪郭の内側に下辺と接続する三角形の突出部が存在するもので、上位に珠紋がある。3番目（両端）の唐草はほぼ直角に屈曲し段が付く。今回の調査では195点が出土したが、平瓦部側端部に鰭を持つものが11点、水返しをもつものが1点認められた。軒平瓦の中で最も多く存在するタイプであり、細部に見ていくといくつかのタイプに区分することが可能である。ただし、これらの相違を総合的に同紋関係や同笵関係として整合的に分類することは今回もできなかった。

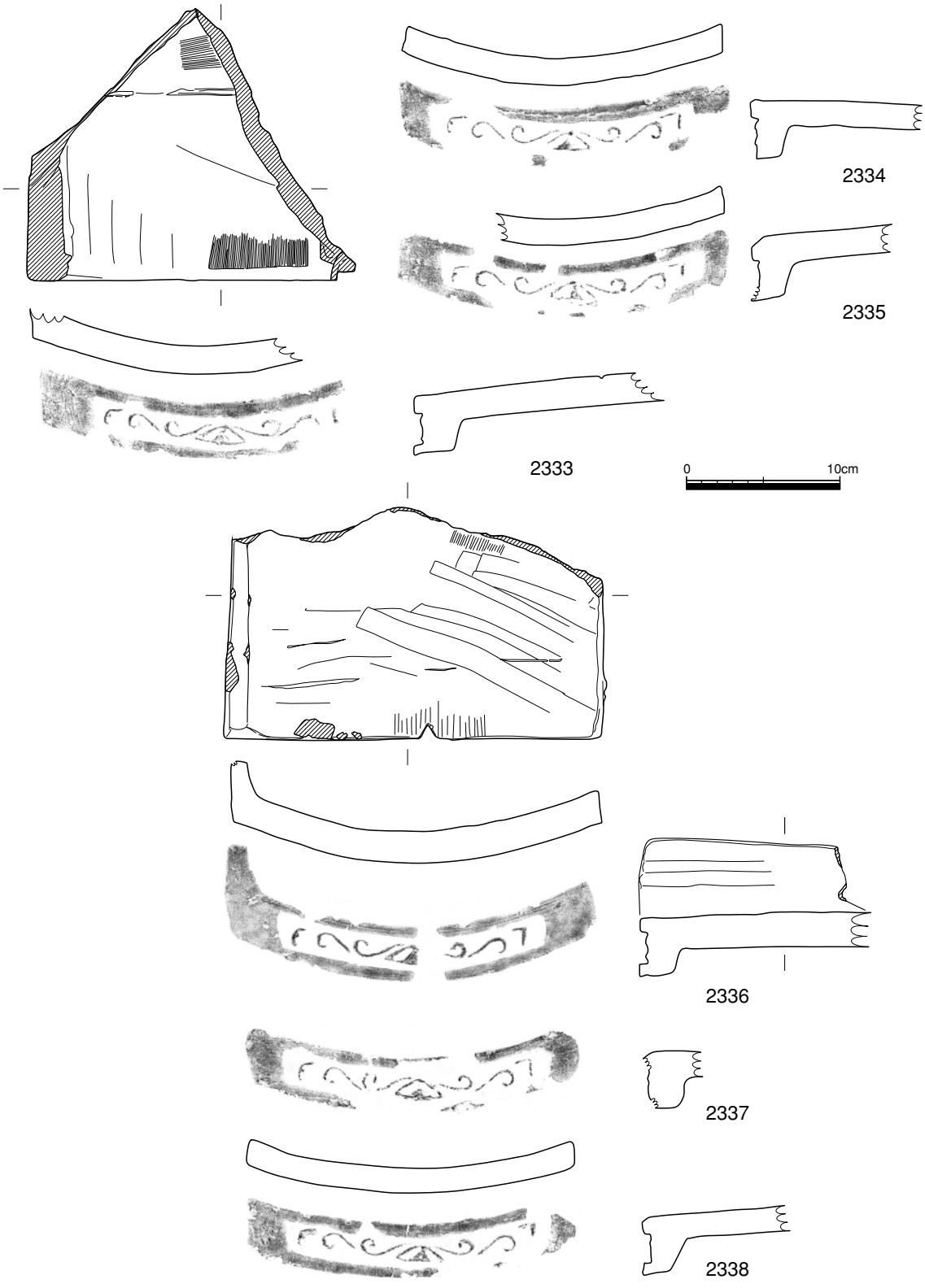
中心飾りの三角形紋に着目すると、上位に存在する珠紋が明瞭なもの、不明瞭なもの、ほとんど消滅したものに区分できる。左側3番目の唐草紋の内側にある突出部に着目すると、突出部がシャープに尖るもの、丸みを持って突き出るもの、ほとんど突出しないものに分類できる。右側3番目の唐草紋に着目すると、丸みを帯びて屈曲し先端部が外側に折れるもの、ほぼ直角に屈曲し先端が外側に折れないものに分けられる。これらの相違は暫移的なものである。

Q　H351型式（剣菱紋に4反転均整唐草紋軒平瓦：第135図2342～2345）

瓦当面幅が約22～23cmで、紋様構成は剣菱紋1個の中心飾りに4反転の均整唐草紋を配置するもの



第 133 図　軒平瓦実測図（12）

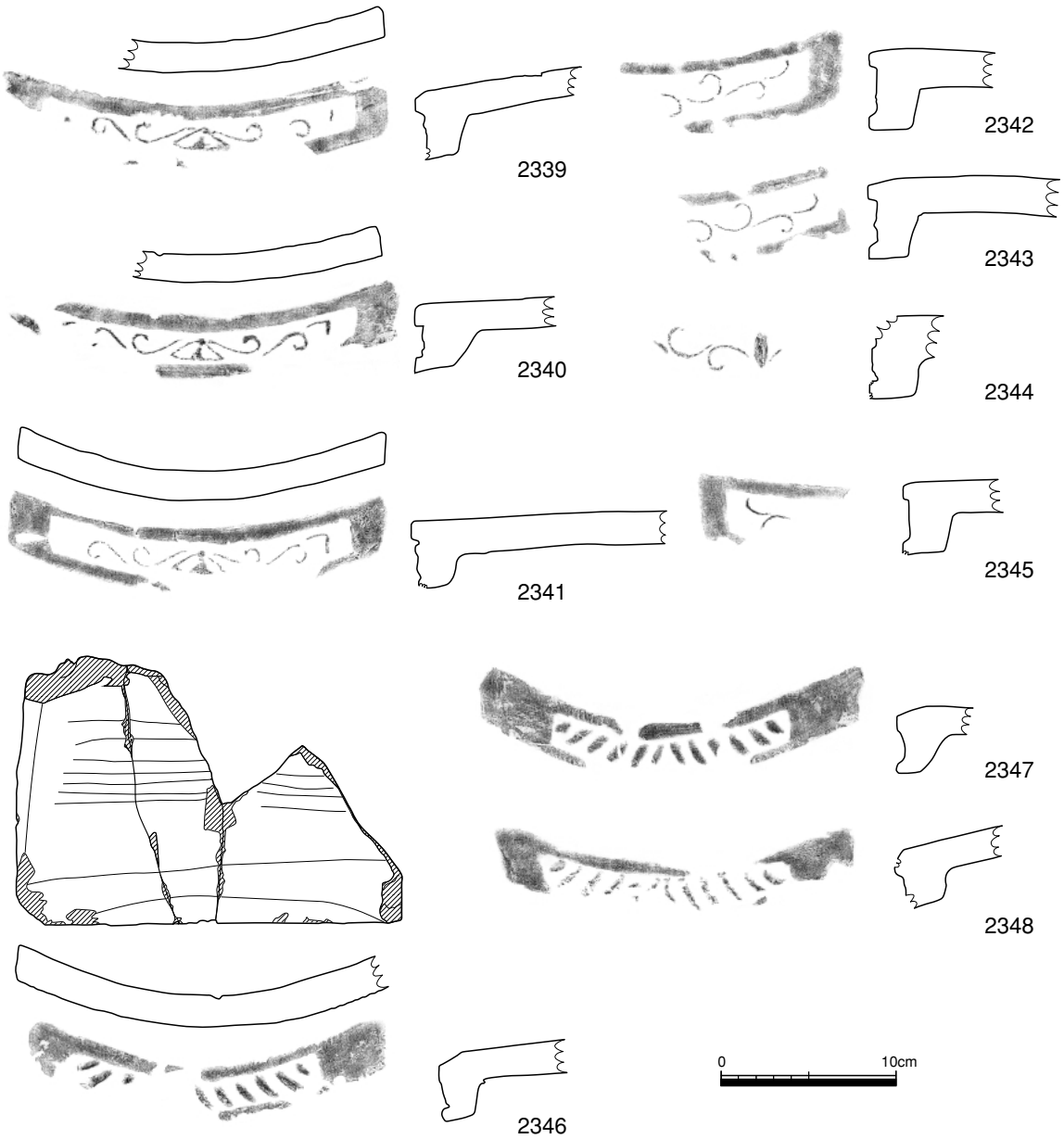


第 134 図　軒平瓦実測図（13）

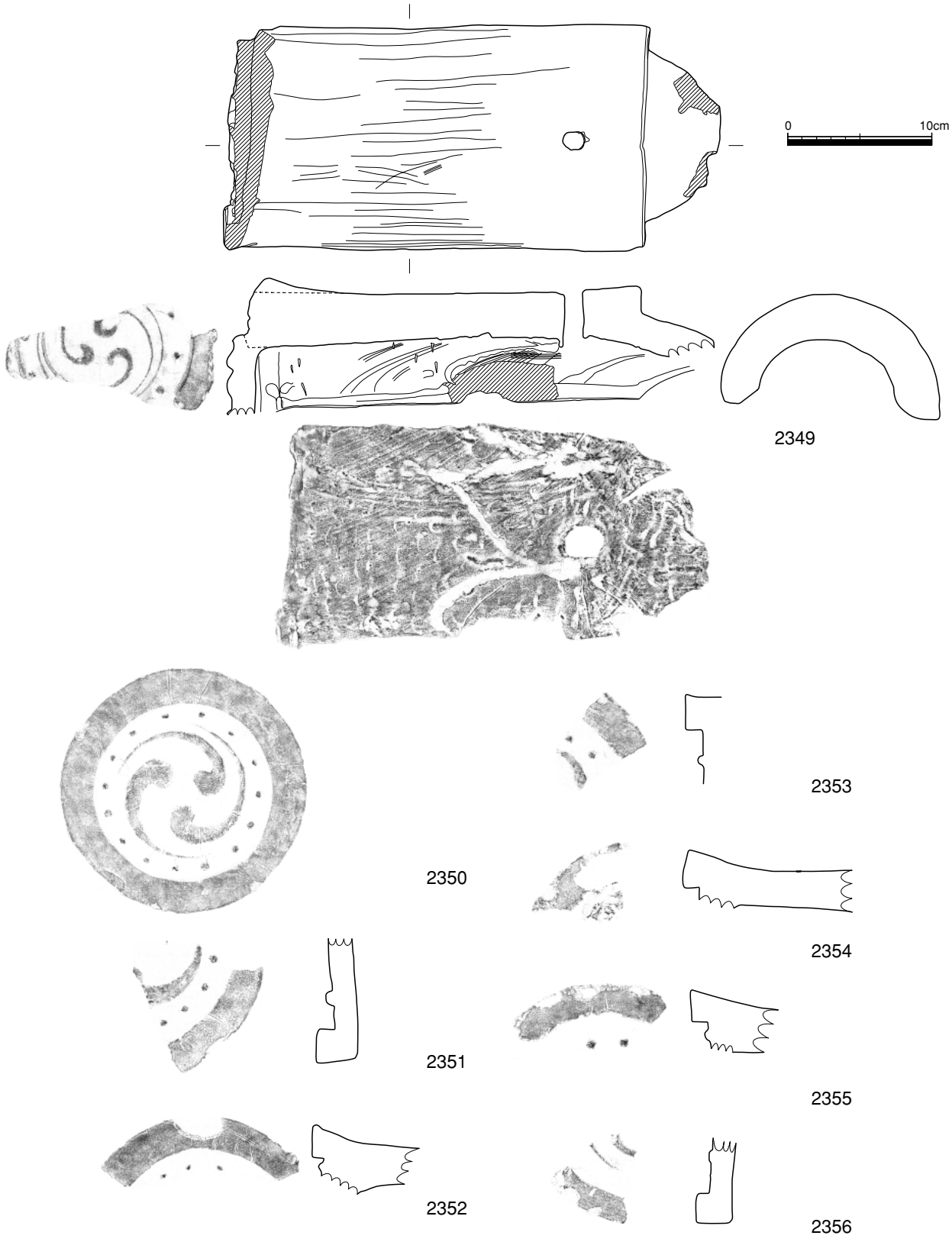
である。剣菱紋の上部は低く平坦となっている。唐草紋の巻き込みは弱い。今回の調査では9点が出土したが、平瓦部表面に水返しが認められるものが1点存在する。

R　H491型式（6順転均整唐草紋軒平瓦：第135図2346～2348）

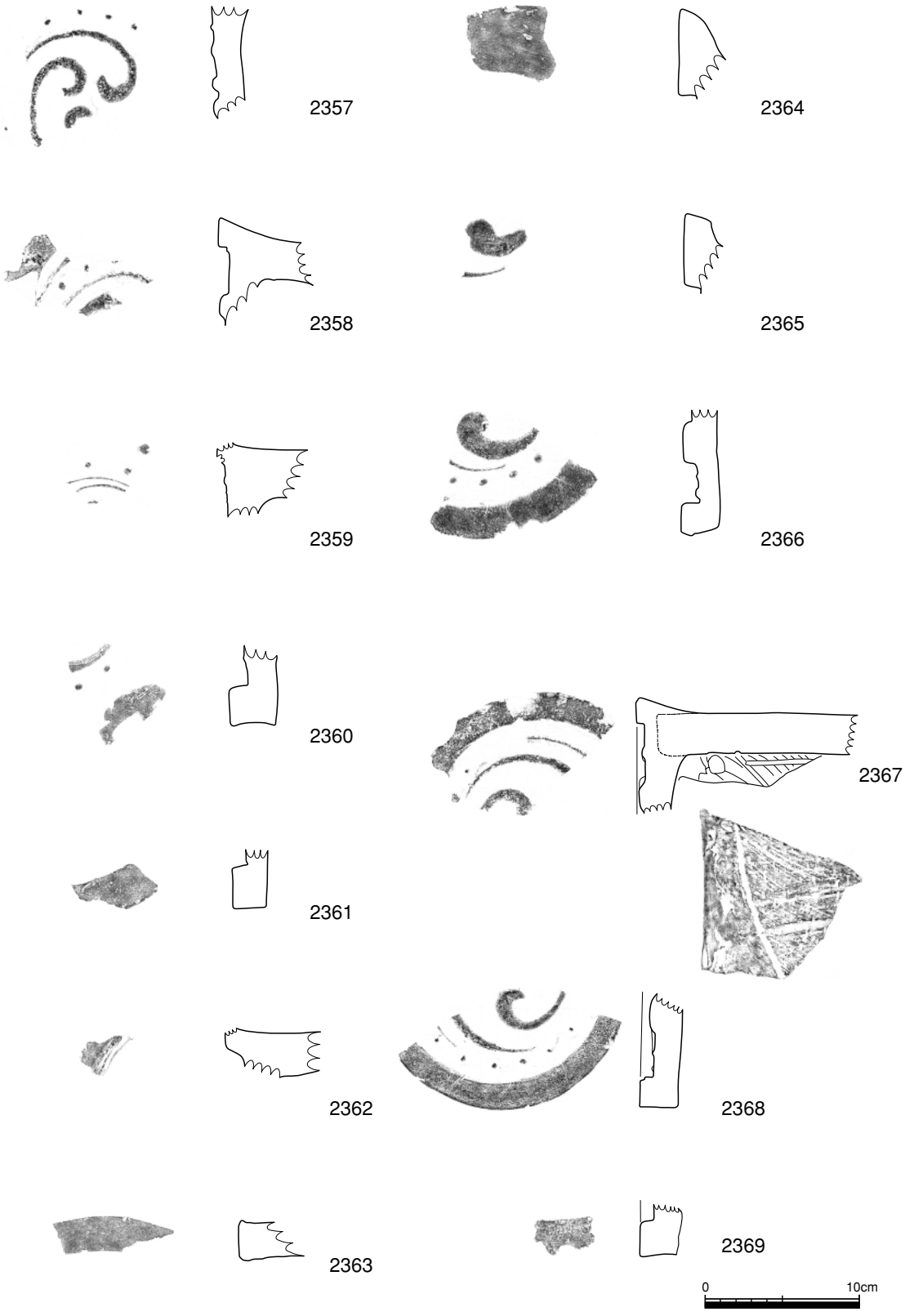
瓦当面幅が約21～22cmで、紋様構成は中心飾りを持たず6個の直線的な唐草紋？を対称的に配置するものである。中心部は「ハ」字状となっている。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では直線的唐草紋の太さから2類に分類したが、今回はこれをあえて分類しなかった。今回の調査では42点が出土したが、平瓦部側端部に鰭を持つものが4点認められた。



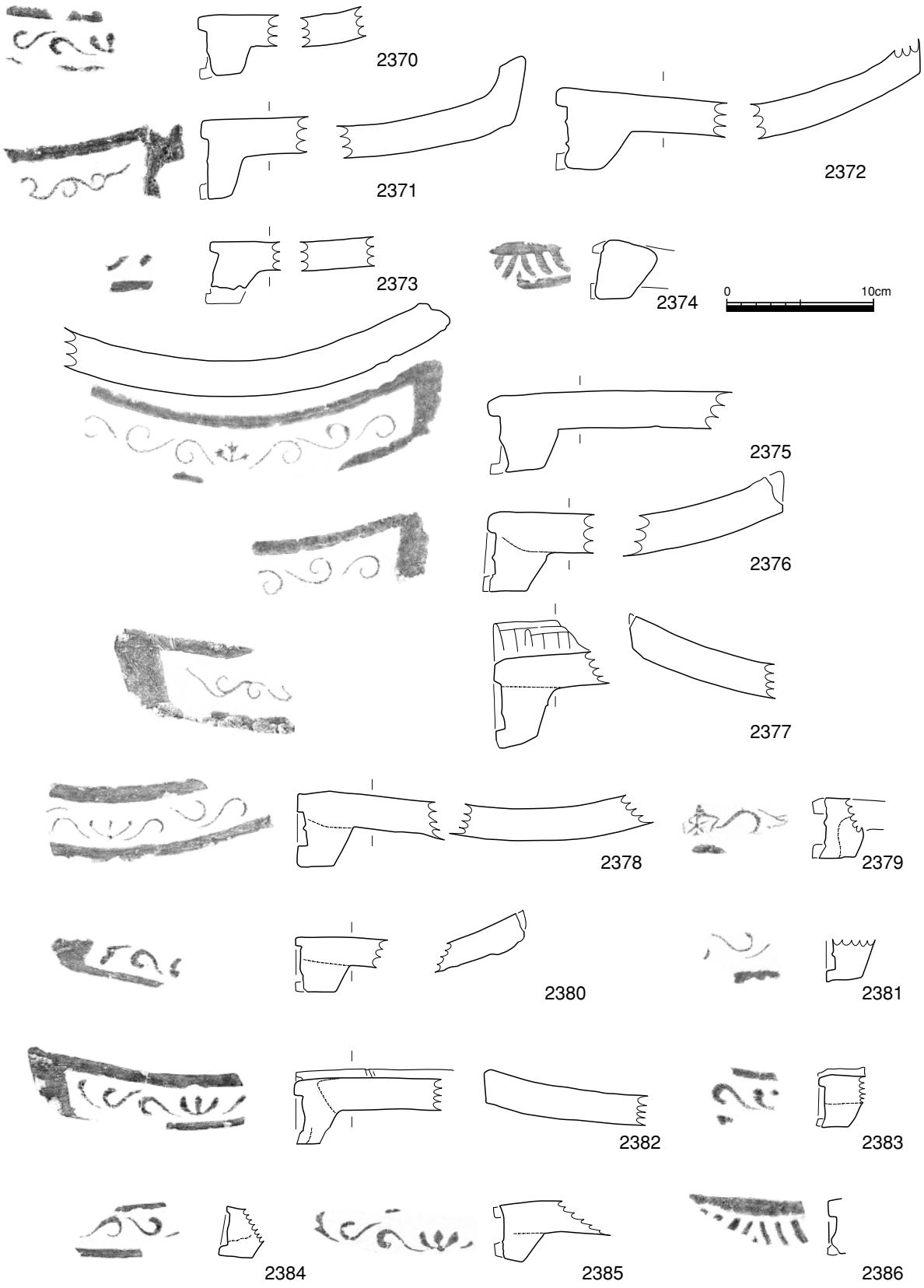
第135図　軒平瓦実測図（14）



第 136 図　金箔軒丸瓦実測図（1）



第 137 図　金箔軒丸瓦実測図（2）



第 138 図　金箔軒平瓦実測図（20）

4　金箔押軒瓦

（1）概要

軒丸瓦と軒平瓦のうち、瓦当面に金箔が押されたものを金箔押軒瓦として、ここでは別項目を立てて報告する。ただし、瓦当面の分類は軒丸瓦と軒平瓦の各項目の分類をそのまま採用する。

今回、図化して資料紹介する金箔押軒瓦は38点である。これらは金箔押瓦といえども、瓦当面の金箔の残存状況は著しく不良で大部分が剥げ落ちた状態となっており、残存した部分は少なく下地に塗布された漆膜片がかろうじて残存しているに過ぎないものも多い。このような状況から見て、今回出土した軒丸瓦や軒平瓦の大部分は、本来は金箔が押されていた可能性が高いと推測される。もしこの仮説が正しければ、金箔押軒瓦のみを項目立てて報告することはあまり意義がないと思われるが、金箔が押された部位や下地の漆の状況などについてまとまった記述をすることも重要であると考えた次第である。

（2）金箔押軒丸瓦（第136・137図2349～2369）

金箔押軒丸瓦は、金箔が施された部位によって2類に分類できる。1類は金箔が紋様本体ではない平坦な地の部分（凹部）に押されたもの、2類は金箔が紋様本体の張り出した部分に押されたものである。なお、外区上に金箔が押されていたものは今回は数点しか確認できなかったが、先述したように金箔の遺存状況が不良であるために、確認できなかったものが本当に外区上に金箔が押されていなかったか否かについては確証は得られない。

2349はM151型式の軒丸瓦で、巴紋や珠紋ではない地の部分に金箔が比較的明瞭に残存する1類の金箔押軒丸瓦である。2358と2359もM151型式の1類金箔押軒丸瓦である。2357はM161型式の軒丸瓦で、巴紋や珠紋ではない地の部分に金箔が残存する1類の金箔押軒丸瓦である。2350はM251型式の軒丸瓦で、巴紋や珠紋および外区に金箔が明瞭に残存する2類の金箔押軒丸瓦である。外区に金箔が残存する2類の金箔押軒丸瓦は2361～2365などがあるが、紋様構成は復元できない資料である。2364は鳥衾瓦の鳥休部（突出部）と考えられるものである。

（3）金箔押軒平瓦（第138図2370～2386）

金箔押軒平瓦は、金箔が施された部位によって2類に分類できる。1類は金箔が中心飾り紋様のみに押されたもの、2類と3類は金箔が中心飾り以外の部分にも押されたものである。2類については遺存状況が不良なため明確にはいえないが、紋様ではない地の部分に金箔が押されていると推測されるもの、3類は中心飾りの他に唐草紋の上面に金箔が押されているものである。

写真図版に示した3237はH101型式（桐紋に4反転均整唐草紋軒平瓦）の軒平瓦で、五三桐紋の中心飾りをちょうど覆い尽くすように金箔が押されている1類の金箔押軒平瓦といえる。H101型式やH102型式の桐紋部には褐色の漆膜が付着するケースが多く、これらも本来は3227のような状態で金箔が押されていたと推測できる。2379はH331型式の軒平瓦で、桔梗紋の中心飾りに金箔が押されている1類の金箔押軒平瓦である。1類の金箔押軒平瓦には、他にH131型式の軒平瓦も存在する。2375と2376はH111型式の軒平瓦で金箔が紋様本体ではない平坦な地の部分（凹部）に押された2類の金箔押軒平瓦である。2380～2385はH214型式の軒平瓦で、三子葉紋の中心飾りの他に唐草紋の上面に金箔が押されている3類の金箔押軒平瓦といえる。2382は外区上にも金箔が押されている。2374・2386はH491型式の軒平瓦で、ハの字状の唐草紋の上面に金箔が押された3類の金箔押軒平瓦である。

5　丸瓦（第 140 ～ 146 図 2387 ～ 2399）

（1）概要

96区と97C区で、丸瓦と分類できたものは接合前破片数で15732点、総重量で約2.66tが出土した。この中には軒丸瓦の丸瓦部、丸瓦に類似した形態の道具瓦（例えば輪違い瓦など）などが含まれている可能性が高い。大多数の丸瓦は玉縁を有する丸瓦であり、出土量の多さに比べると形態的なバラエティーは非常に乏しいものとなっている。ここでは代表的な事例を数点取り上げて報告とする。

（2）資料の紹介

丸瓦は内面（裏面）に見られる調整痕で、軒丸瓦と同様に、大きく2類に大別できる。第一は粘土塊から粘土板を成形する際の切断方法に糸を張った弓状工具を使用して切断する、いわゆるコビキA手法の痕跡が残存するもの（2387・2388・2390・2391・2394 ～ 2399）である。第二は同じく粘土板を成形する際に鉄線を張った張力の強い工具を使用して平行に切断する、いわゆるコビキB手法の痕跡が残存するもの（2389・2392・2393）である。

粘土板を成形した後は、丸瓦の形状に曲げるために成形台にはめ込み半円筒形に造っている。この成形台と粘土板の脱着を容易にするために布を被せ、布には玉縁部の側に吊り紐を刺し込ませている。布目の縦糸と横糸の密度は細かく 1cm 当たり 10 ～ 16 本である。成形台から粘土板を外した後は、内面にはほとんど手を加えないものと考えられ、一部の資料で棒状工具によるタタキ調整が施されるものがある。この結果、内面にはコビキAまたはB手法、吊り紐痕、布面痕が残存するものが大半を占めている。

一方、外面については、成形台にはめ込まれた際に縄を巻いた叩き工具を用いて表面が叩かれ、後に縦方向に丁寧に磨くようにヘラケズリ調整が施されている。

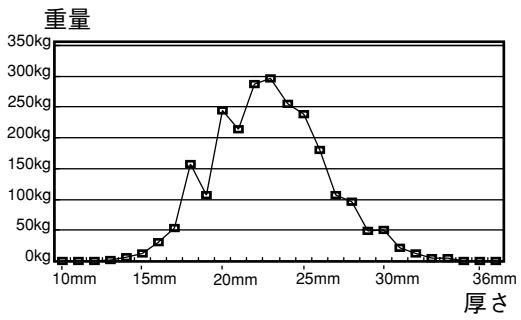
丸瓦の側端部は2段にヘラケズリ調整が施されている。大半は側端面（瓦を葺く際に平瓦部と接触する面）の幅は狭く、胴部裏側面（側端面のすぐ内側の面）の幅が広くなっている。表面と側端面で形成される角度は約80°（70～100°の範囲で分布する)、側端面と胴部裏側面で形成される角度は約 130°（100 ～ 145°の範囲で分布する)を計測する。

尻小口面裏面は幅広く面取りされ下位に葺かれる丸瓦玉縁部とうまく重なるように工夫されている。この面取りの幅は約 50mm を測る。尻小口端面はヘラケズリ調整が施され、砂が付着する場合も認められる。

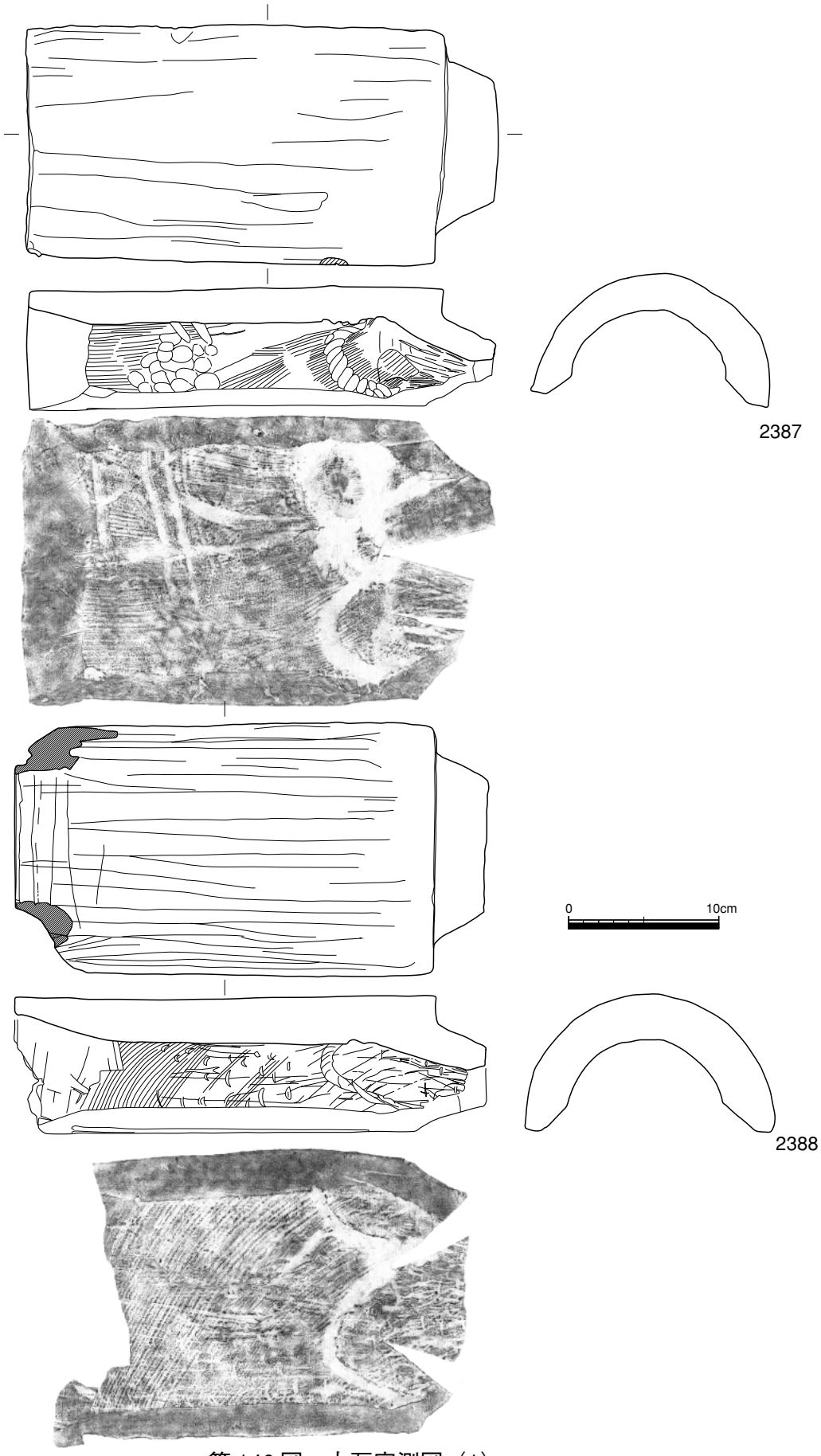
玉縁部の裏面は布袋が窄まった部分に相当するため布の皺状の痕跡が残っている。外面は縦または横方向に丁寧にヘラケズリ調整が施され、各側端面も同様である。玉縁部裏面側の両側端は筒部の上端部を含めて斜めにヘラケズリされている場合が多い。

（3）丸瓦の出土傾向

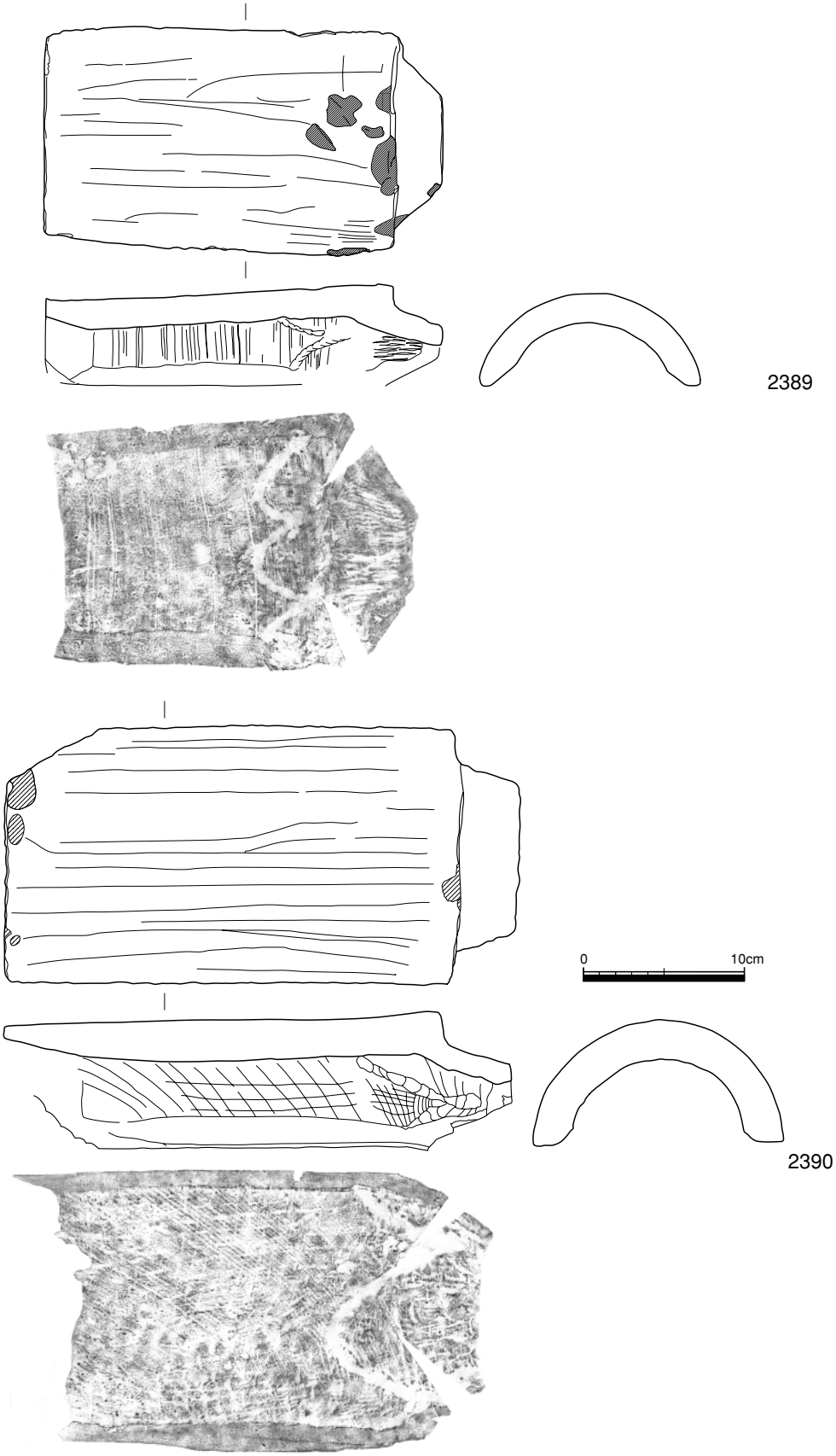
丸瓦の規模は、筒部の長さは平均27cmで、大きく31cm前後、28cm前後、26cm前後に分布のピークが認められる。筒部の幅については今回はデータ整理を実施しなかったが、筒部径については型枠による測定で 11cm 以下、13cm、15cm、17cm、19cm 以上に区分してその出土量を算出した結果、11cm以下は34点8.48kg、13cmは698点173.38kg、15cmは2986点1013.62kg、17cmは1032点467.29kg、19cm以上は25点14.83kgであることが判明した。この筒部径と厚さとの関係について表にまとめると、明瞭な対応関係は見出せないがおおよそ相関することが窺われる。厚さについては23～24cmのものが最も多く、18cmと20cmにもピークが存在する（第139図）。



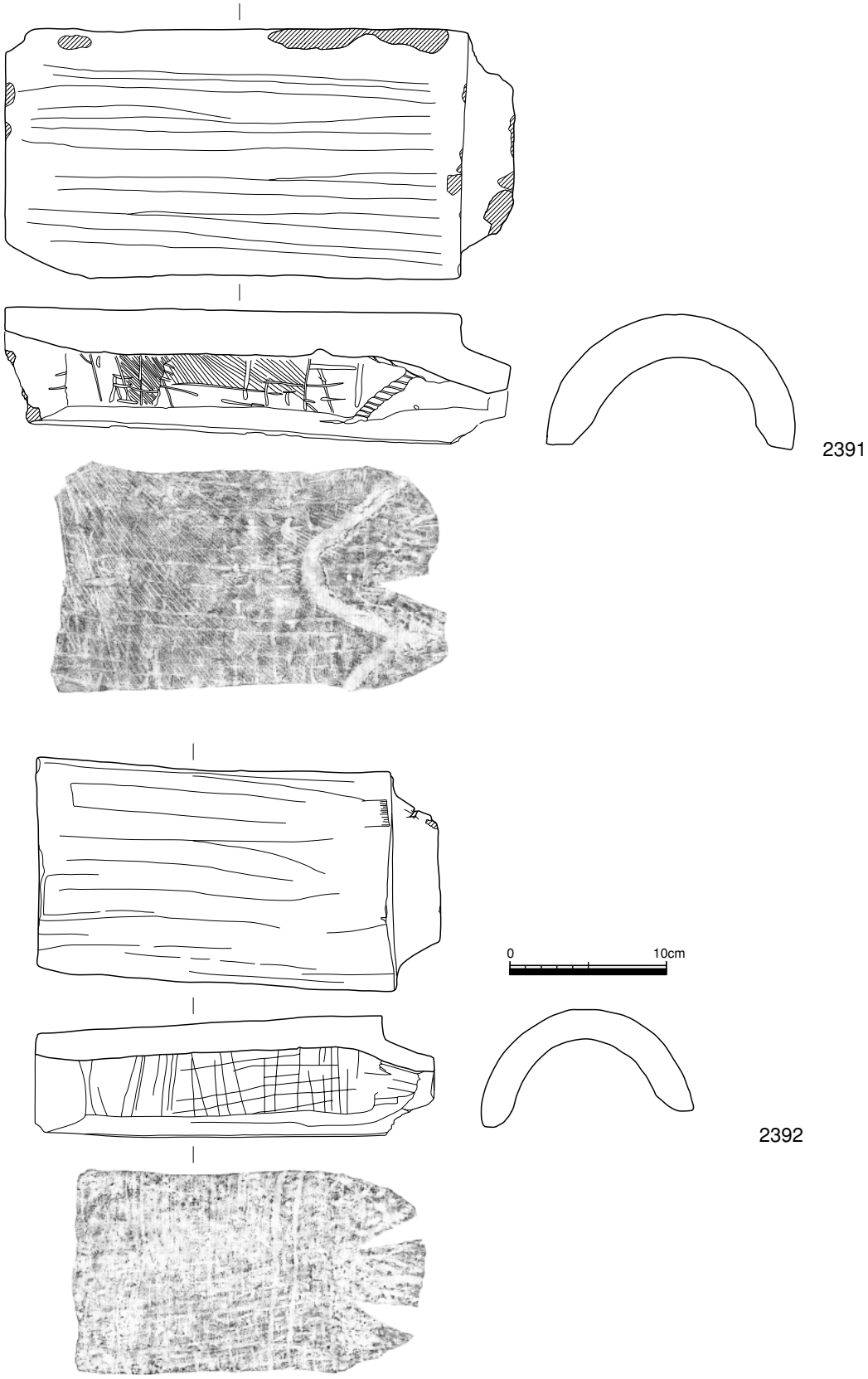
第 139 図　丸瓦厚さ別出土重量図



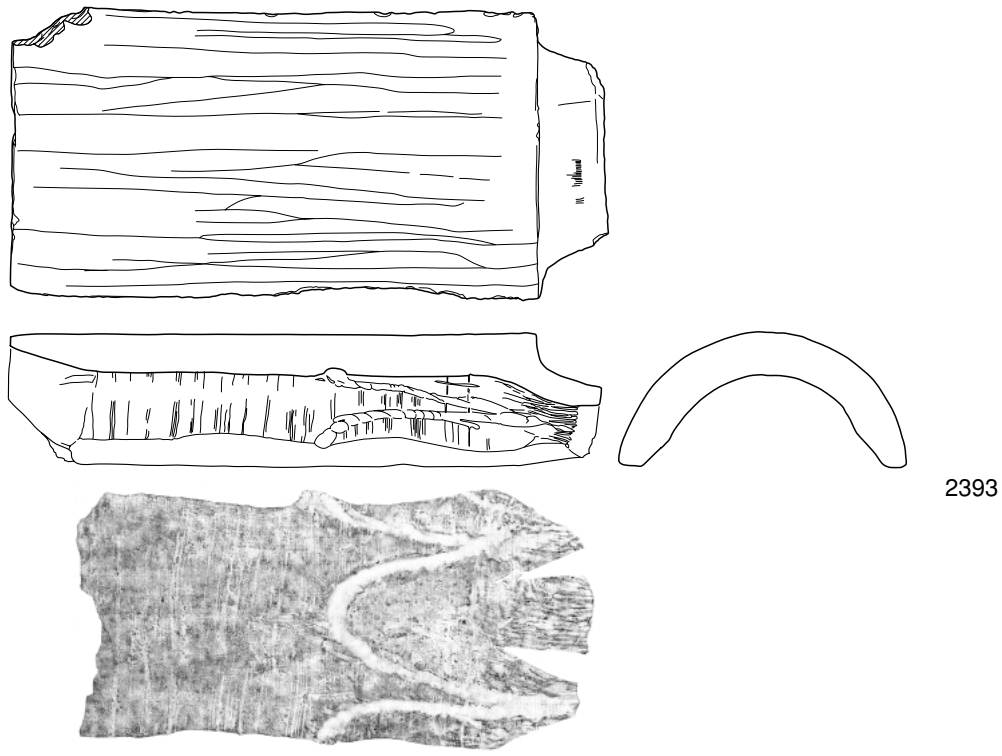
第 140 図　丸瓦実測図（1）

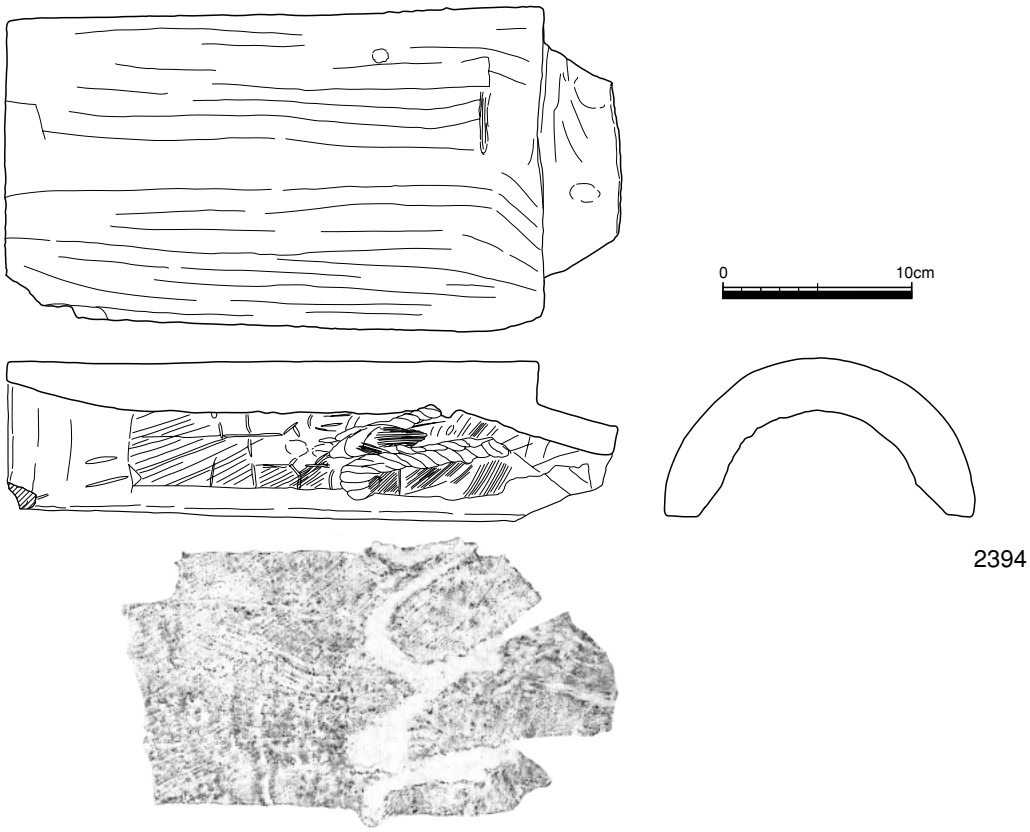


第 141 図　丸瓦実測図（2）

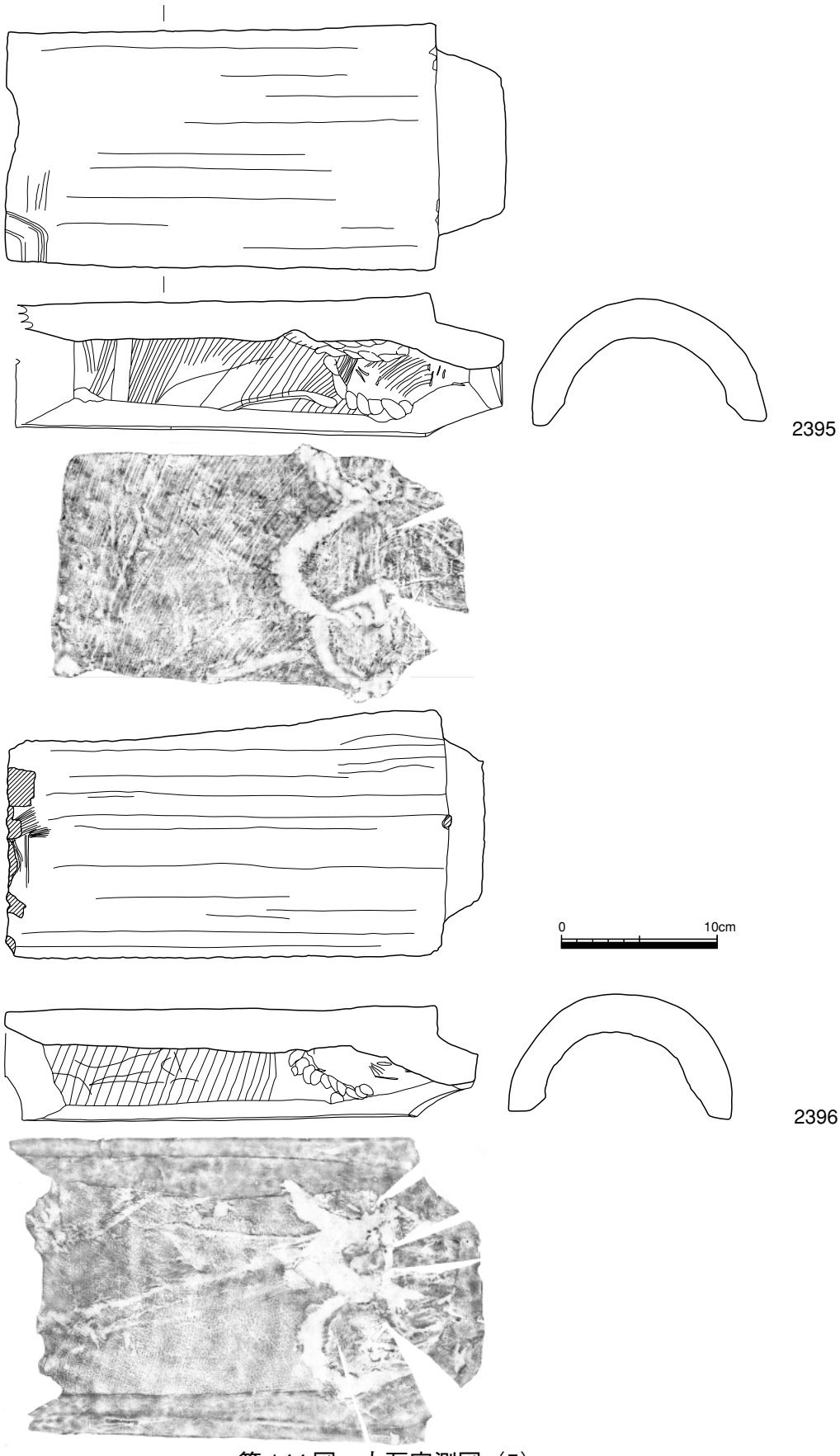


第 142 図　丸瓦実測図（3）

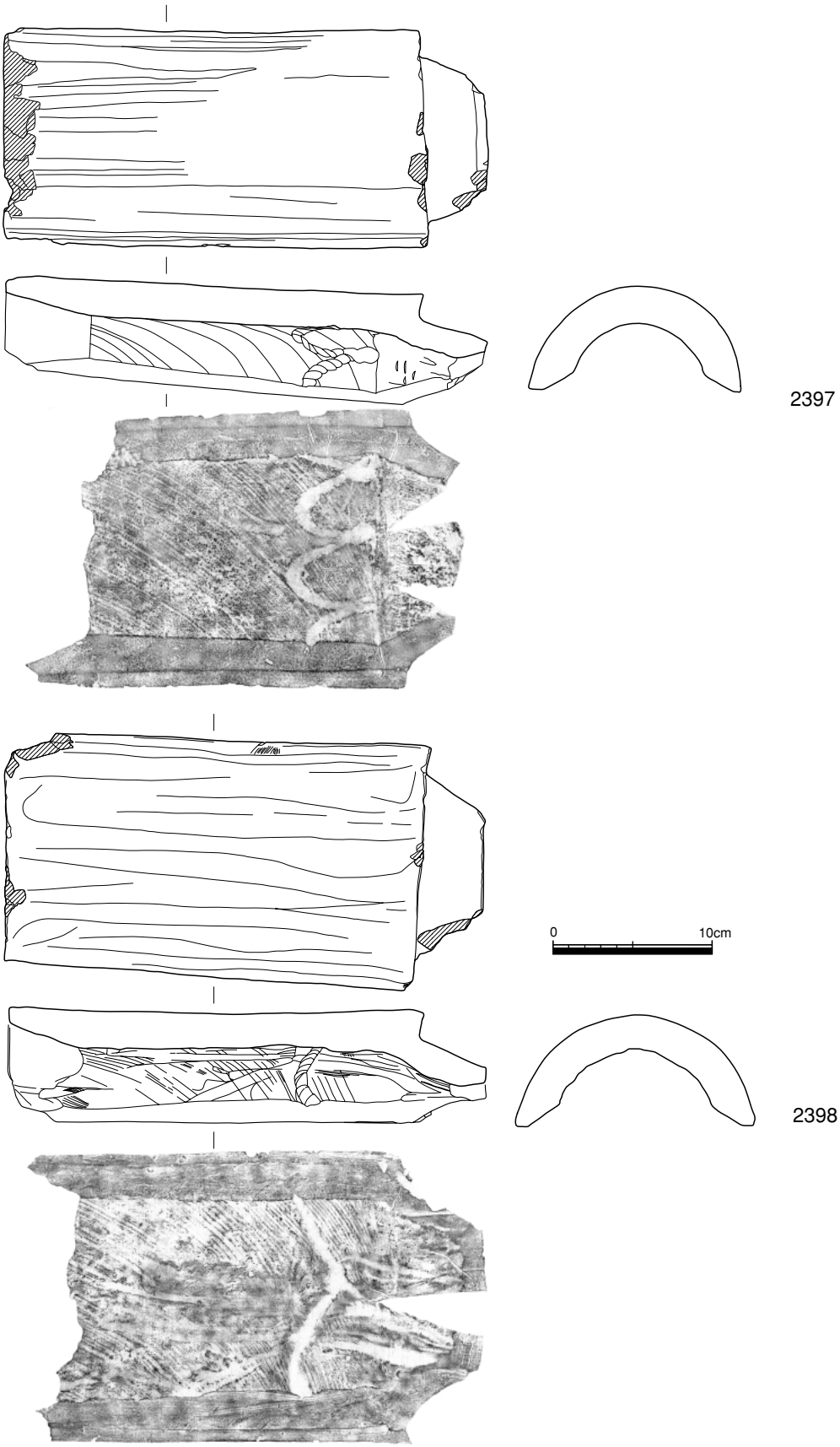




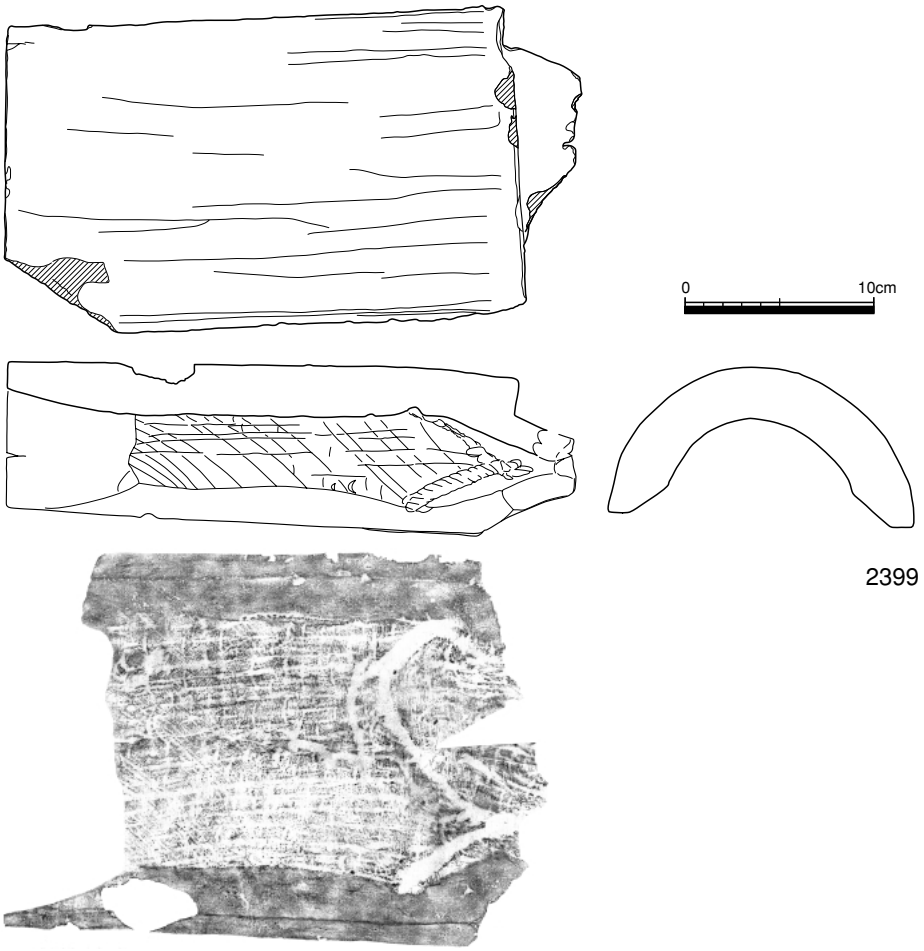
第 143 図　丸瓦実測図（4）



第 144 図　丸瓦実測図（5）



第 145 図　丸瓦実測図（6）



第 146 図　丸瓦実測図（7）

6　平瓦（第 147 ～ 152 図 2400 ～ 2410）

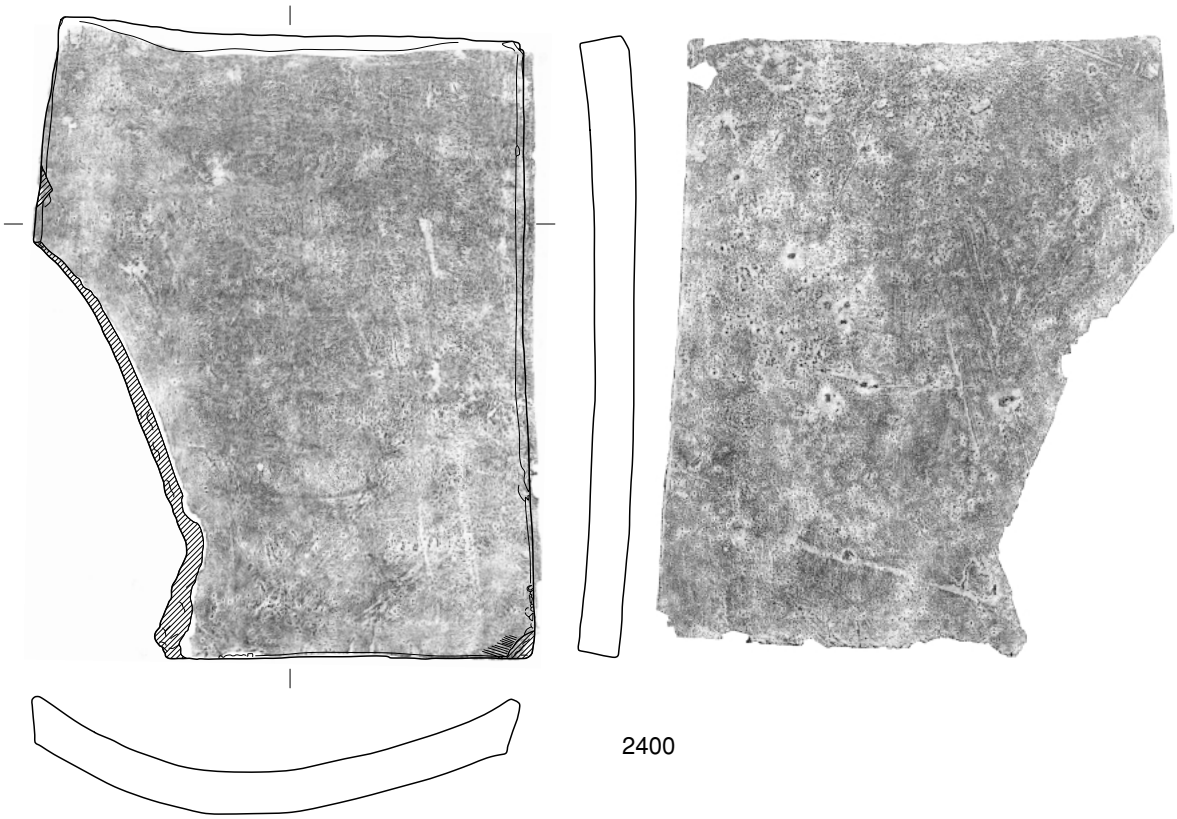
（1）概要

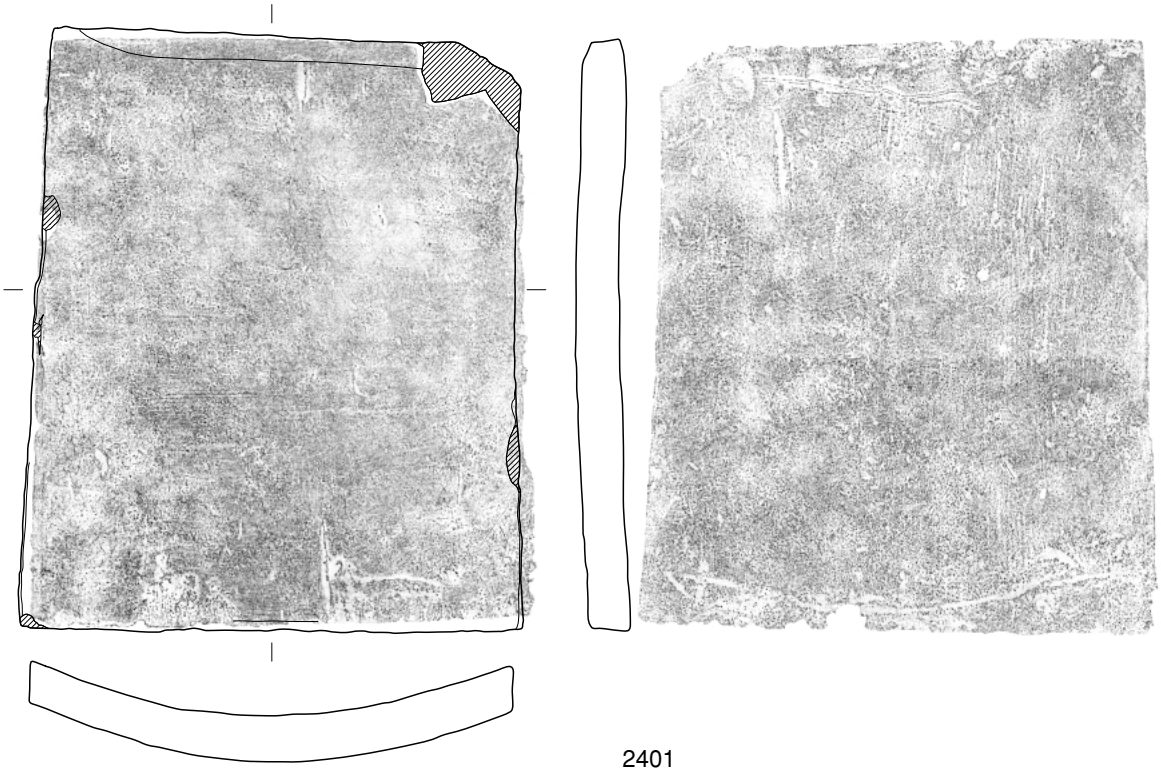
96区と97C区で、平瓦と分類できたものは接合前破片数で51540点、総重量で約6.61tが出土した。この中には軒平瓦の平瓦部、平瓦に類似した形態の道具瓦（例えば熨斗瓦など）などが含まれている可能性が高い。大多数の平瓦は玉縁を持たない平面形が台形の平瓦であり、出土量の多さに比べると形態的なバラエティーは非常に少ないものである。ここでは代表的な事例を数点取り上げて報告とする。

（2）資料の紹介

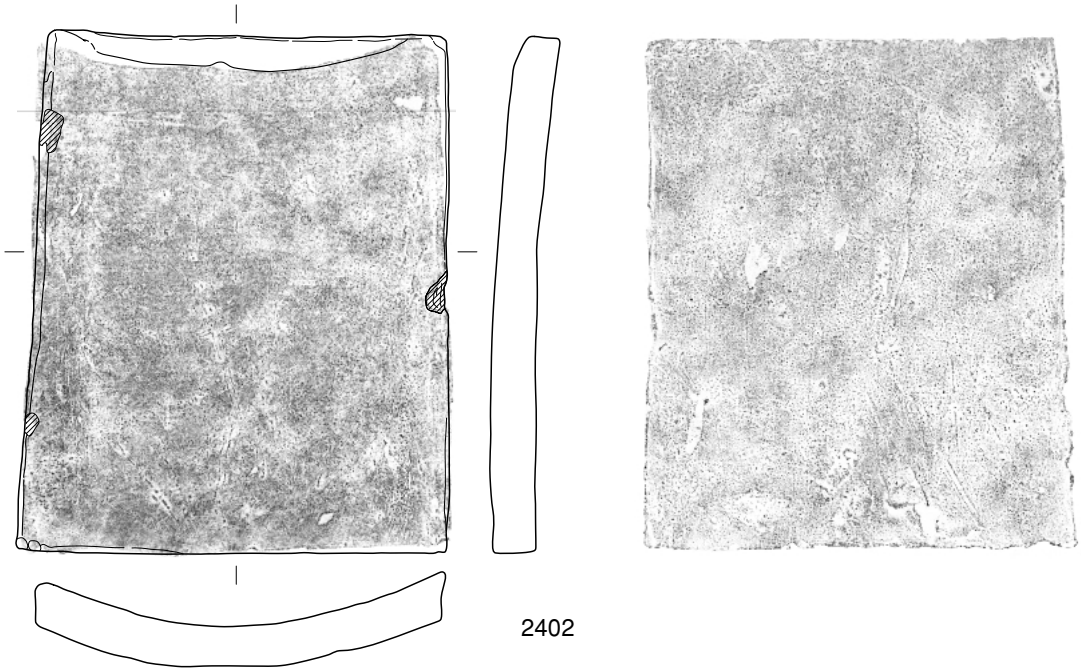
平瓦については丸瓦と同様な大別は難しい。粘土塊から粘土板を成形する際の切断方法にコビキＡ手法とコビキＢ手法の両者が存在するものと考えられ、実際にその痕跡を見いだすことができる事例は存在するが、大半の資料では後の調整痕によって消滅し観察することができない。この点に丸瓦と違って系統差や時期差を考察する手がかりが少ない特徴が現れている。

コビキＡ手法またはコビキＢ手法で粘土板を成形した後は、平瓦の形状に曲げるために成形台にはめ込んでいる。この成形台と粘土板の脱着を容易にするために布を被せるか、相当量の砂を播いている。表面（凹面）と裏面（凸面）の両方に砂が付着した痕跡や布目痕を見いだすことができるが、裏面（凸面）に砂が多量に残存する場合が多い。また、裏面（凸面）の頭小口部または尻小口部に近い部分に、小

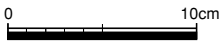


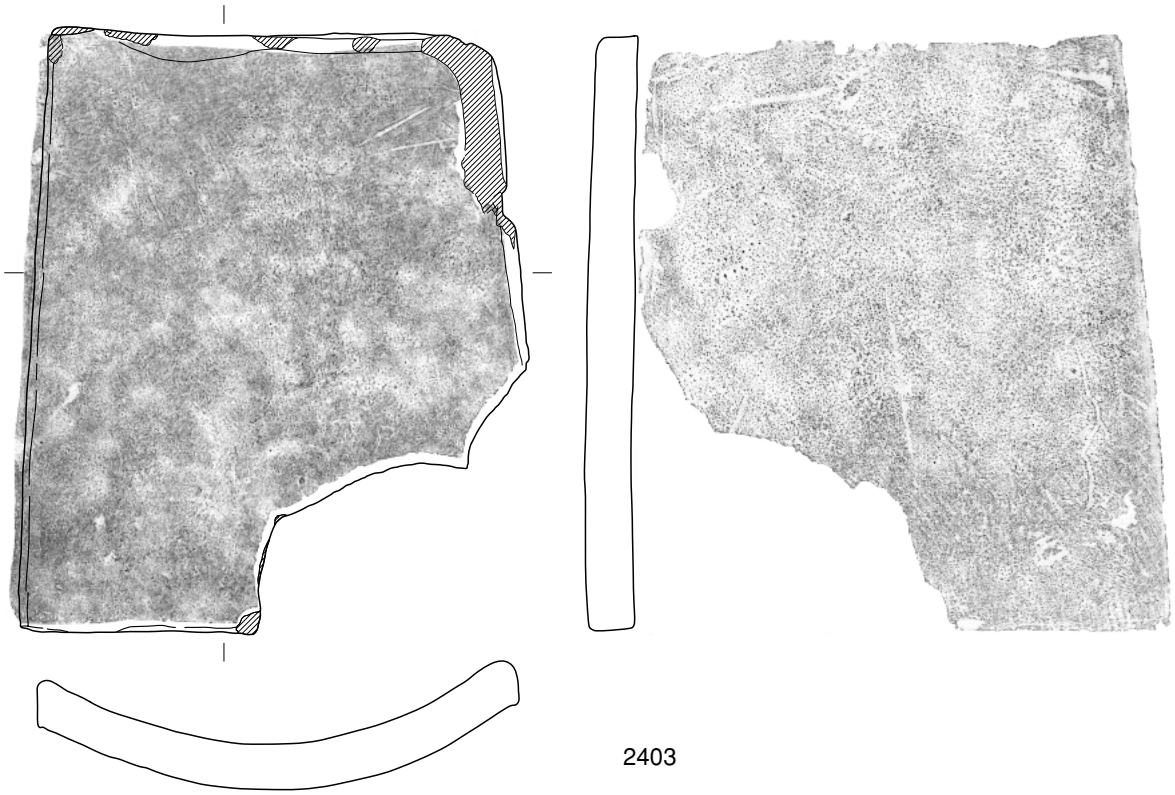


第 147 図　平瓦実測図（1）



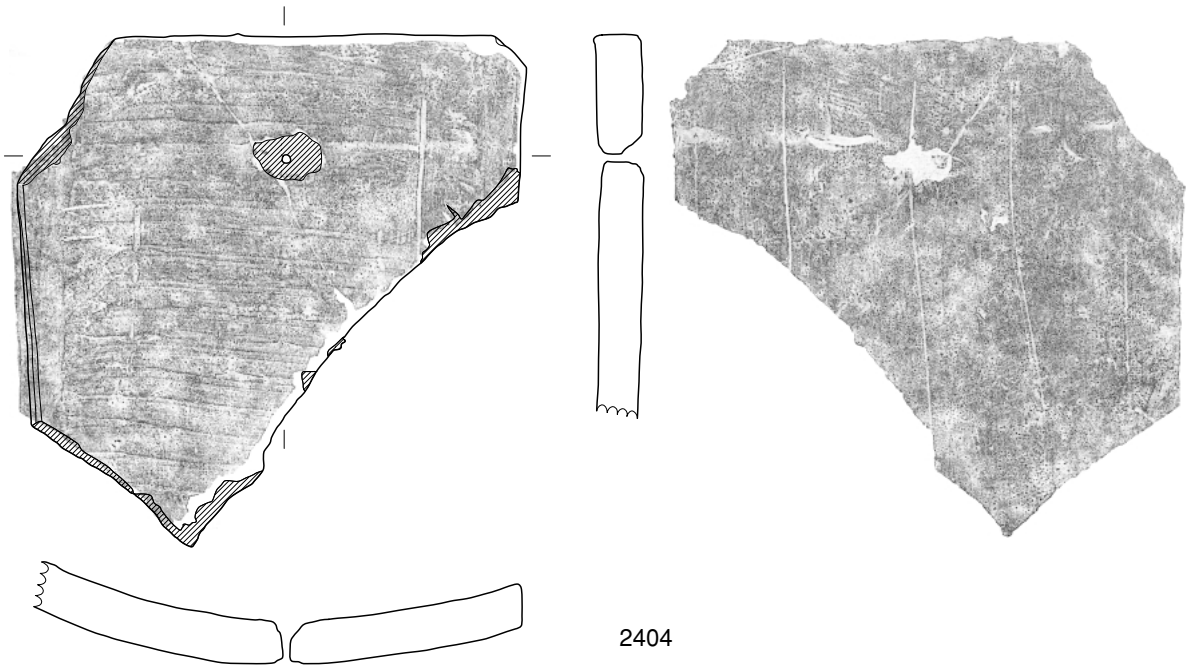
2402



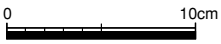


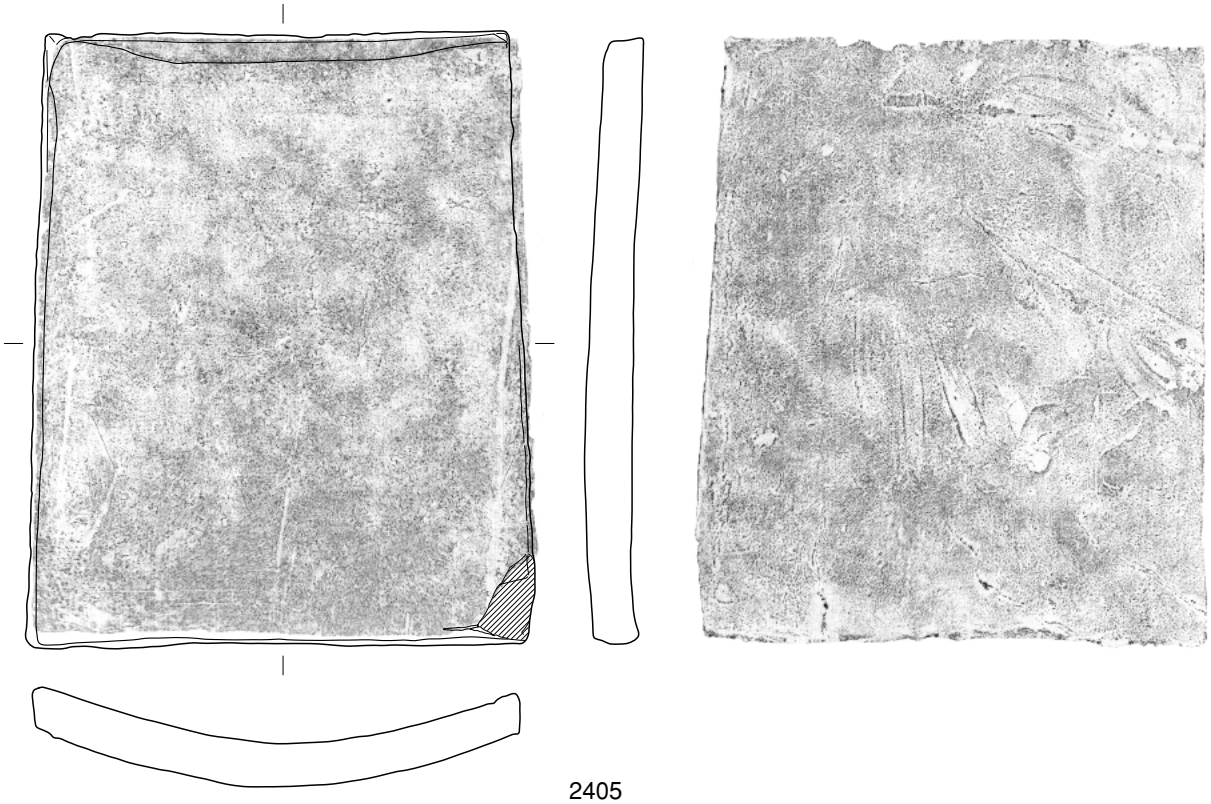
2403

第 148 図　平瓦実測図（2）



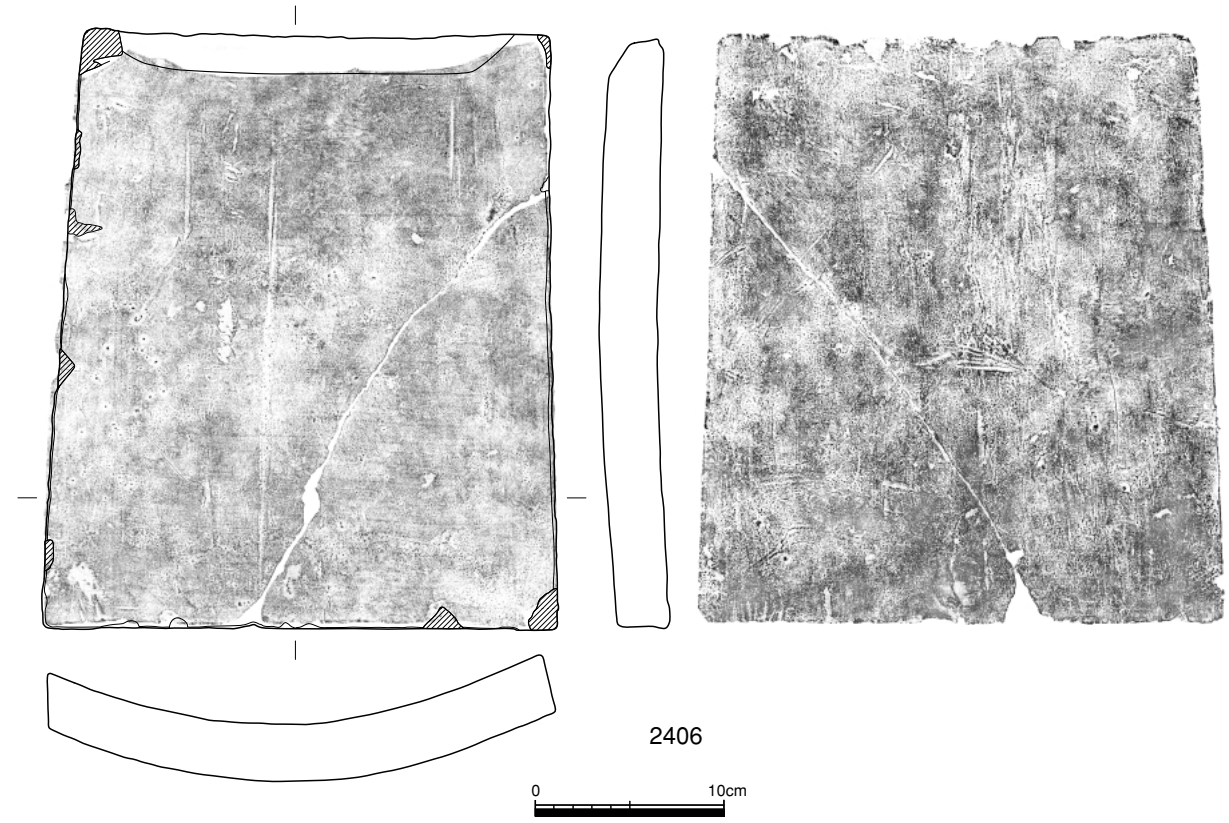
2404

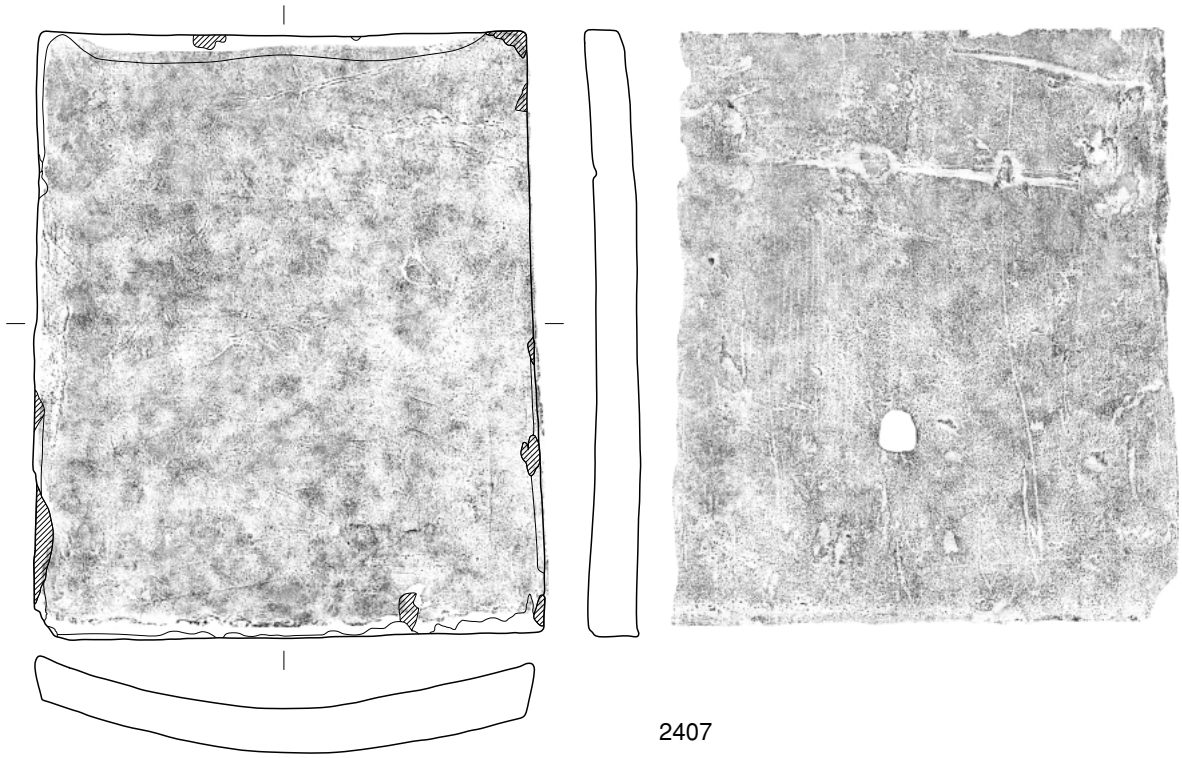




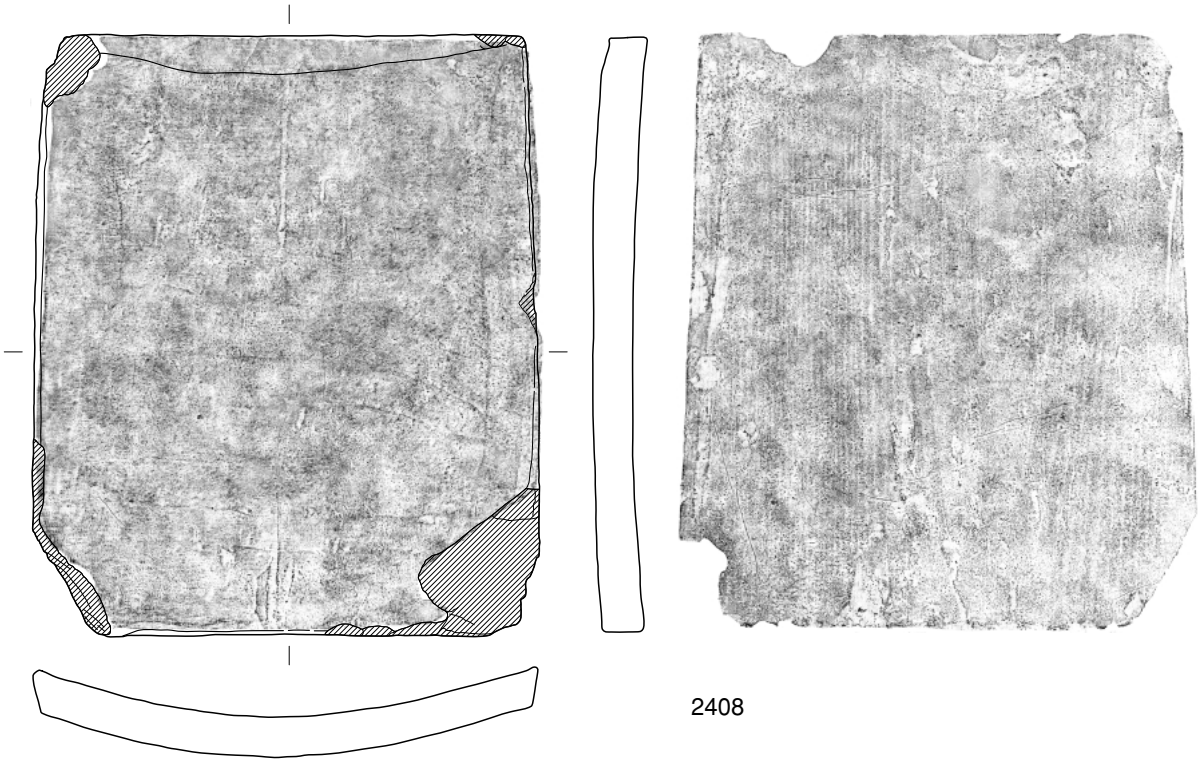
2405

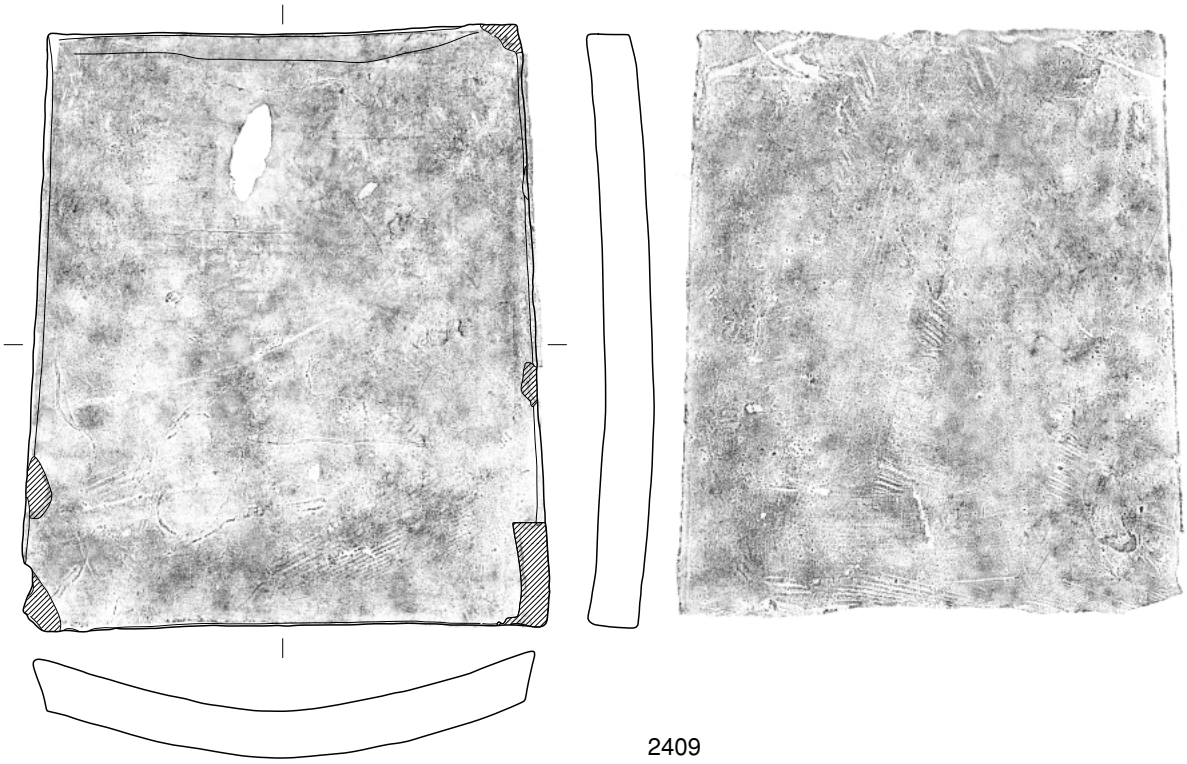
第 149 図　平瓦実測図（3）





第 150 図　平瓦実測図（4）





第 151 図　平瓦実測図（5）

口に平行する緩弧状の凹線が一定量認められる。これが成形台から粘土板を脱着する際に引き上げる紐の痕跡と仮定すれば、この痕跡が残る面が成形台に密着した面と考えられる。したがって、凹状成形台と凸状成形台の両者の存在が想定されるが、どちらかといえば凹状成形台が使用された確率が高いと考えられよう。

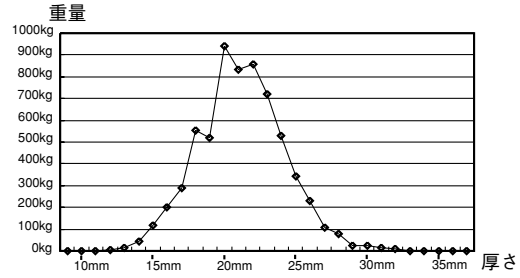
さて、表面（凹面）については、中央の大部分は横方向の非常に丁寧なミガキ状ヘラケズリ調整が施され、両側端部は縦方向にヘラケズリ調整がなされている。一方、裏面（凸面）については、コビキ痕、布目痕や砂目痕の他に粗いハケ状工具痕などが存在し、仕上げが雑である。

平瓦の側端部は垂直切りで切断され、上端部が面取りされる場合が多い。表面と側面で形成される角度は平均値で約75°（60～90°の範囲で分布する）、側面と裏面で形成される角度は約120°（100～145°の範囲で分布する)を計測する。

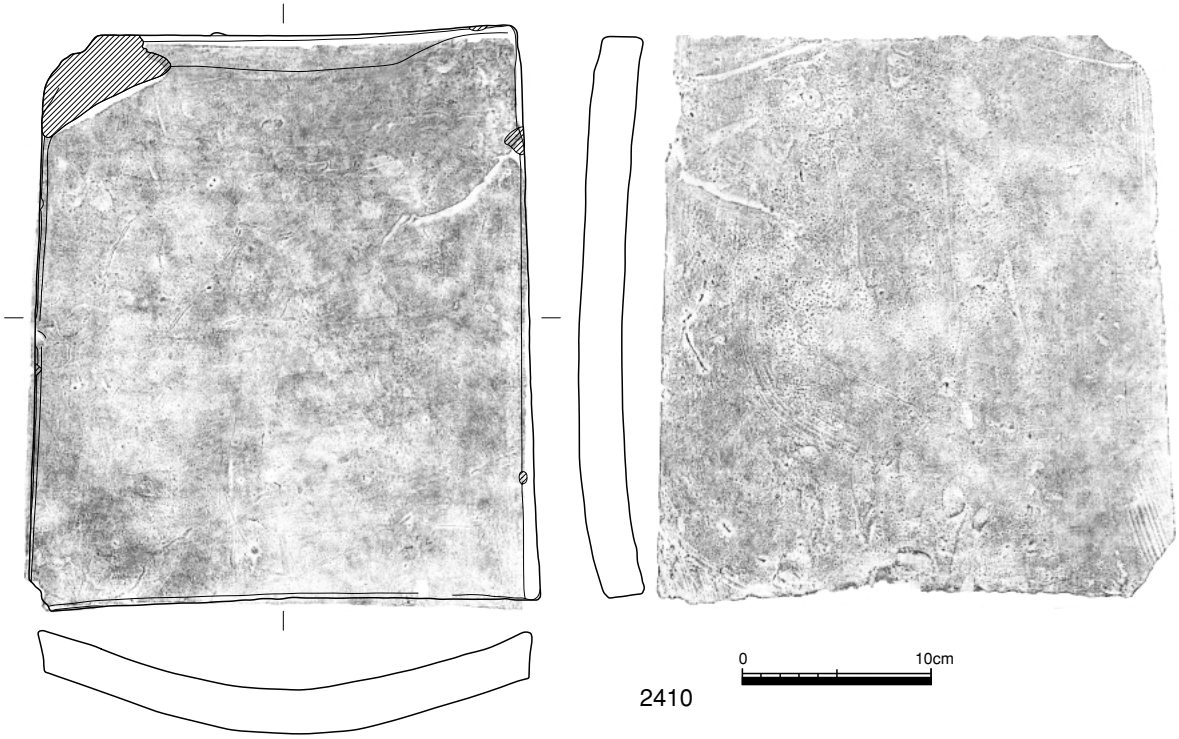
大部分の平瓦は、頭小口面と尻小口面ともに垂直切りで切断され、頭小口表面を幅広く面取りしたものが多い。この面取りは上位に葺かれる平瓦とうまく重なるように工夫されたものである。尻小口端面はヘラケズリ調整が施され、多量に砂や余分な粘土が付着する場合も認められる。

（3）平瓦の出土傾向

平瓦の規模は、長さは平均31cmで、大きく33cm前後、31cm前後、25cm前後に分布のピークが認められる。一方、厚さでは18mm、20mm、22mmの部分にピークが認められる（第153図）。



第153図　平瓦厚さ別出土重量図



第152図　平瓦実測図（6）

終了

	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s
5													0.52	8.46	7.83			
6												45.26	63.56	53.59	30.99	0.03		
7										0.35	0.63	0.08	2.55	10.96	26.13	13.55		
8										0.43		0.64	1.53	17.07	11.26	42.37	0.39	
9							0.87	14.81	4.48			2.76	10.64	60.90	24.89	9.51		
10						1.87	5.99	128.20	283.01	7.06		4.04	65.89	47.04	11.68	3.93		
11						0.42	12.86	23.52	73.72	29.15	5.55	38.54	34.12	7.78				
12						12.69	35.74	110.66	169.51	112.92	35.73	21.13	1.85					
13				0.19	0.24	18.39	92.51	80.81	76.38	88.35	12.79							
14			1.89	1.13	27.73	51.19	22.32	73.92	18.99	3.15								
15			0.97	61.07	51.67	38.70	17.32	2.06	0.76									
16		8.48	65.05	23.66	0.69	3.26												
17		27.66	7.58															

第 154 図　丸瓦グリッド別出土量分布図（単位は kg）

	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s
5														11.16	75.90			
6														114.76	111.12	0.60		
7												7.69	11.83	29.92	64.97	82.10	7.61	
8												12.75	8.73	41.01	34.64	90.26	7.84	
9							2.93	29.55	19.57	0.68	1.32	8.37	26.02	104.46	38.82	15.33		
10							40.73	467.96	576.85	20.06	1.46	17.81	120.09	103.28	22.12	6.26		
11						43.06	140.02	58.77	188.05	40.36	17.92	70.18	93.87	13.47				
12						66.45	109.51	305.81	301.11	338.69	64.36	45.02	2.30					
13				0.29	2.71	43.06	183.55	262.28	163.69	143.88	25.43							
14		0.08	6.49	7.98	63.88	156.53	58.10	198.65	47.39	9.61	17.32							
15		2.27	10.35	143.16	191.33	37.07	10.16	4.07										
16	1.92	32.21	134.65	58.99	2.45	7.73	1.95											
17	0.2	53.44	14.36	0.21	0.13													

第 155 図　平瓦グリッド別出土量分布図（単位は kg）

終了

合計 : 重さ

グリッド	厚 10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	38	不明	総計
5n											30				200	280													10	520
5o							50	20		90	440	20	610	470	410	3140		850			1810								550	8460
5p							70	180	340		1060	530	1650	730	860	1110	70	500				100							630	7830
6m					40	20	140	420	50	2330	760	2800	7890	10890	4450	5780	3610	1760	1050	190									3080	45260
6m,n							120		70	310	260	640	1150	1680	840	100	340		300										1840	7650
6n						20	760	470	2040	1910	6560	5290	6850	10200	6950	6660	3510	940	600	710	160								9930	63560
6o						40	1210	260	500	1270	3040	4120	4600	4430	4220	4590	3960	7210	1680	2090	370		80						9920	53590
6p					200	200	280		750	940	1930	2940	3620	4140	3750	1640	3700	1810	550	360	580		350						3250	30990
6q									30																					30
7k											250																		100	350
7l					60						140					20													410	630
7m							50				30																			80
7n								110	90		140			40			1670												500	2550
7o							150		910	460	800	470	660	2090	880	1160	50	150	30		450								2700	10960
7,8o									20	150		430	70	80															360	1110
7p	20					150		50	1420	2130	1900	2130	2680	1490	4050	3270	1510	260	560		570	450							3490	26130
7q							240	770	770	1040	1690	600	1220	2120	760	470	210	650	550										2460	13550
8k																													430	430
8m							170		60	80						270													60	640
8n									510		940																		80	1530
8o									1330	820		1280	1530	3520	2000		3670	700	720	590	170	160						580	17070
8p						320		760	460	410	1840	920	480	1260	700	1930	920	50		360									850	11260
8q					130	200	330	110	1630	1810	3200	2060	4730	5500	5940	4020	2960	400	950	980	1230	1090							5100	42370
8r									100							290														390
9h															680			30											160	870
9i					90	40	190	150	40	650	580	3850	770	1480	80	1230	1910	360		950			1670						770	14810
9,10i												120																		120
9j								180	60	630	250	350	130	30	840	300		690		220									800	4480
9,10j											80	230					310													620
9m									120	50	150	150	1440	160		150		280	90										170	2760
9n						120			270	290	430	1170	2420	3130	1330	980	20		280			110						90	10640
9o						20	90	130	4890	720	3620	2990	8160	8510	7570	8930	3520	4530	1690	370	1160	770					290		2940	60900
9p						70		830	150	1080	3120	1450	4150	1560	3040	1790	1850	1960	2050	210		230							1350	24890
9q								60	80		1130	1130	1430	630	2430	860		670			280	610							200	9510
10g													410			260	360	320											520	1870
10h									40	410		760	710	870	1350		560	320			710								260	5990
10i				40	140	910	1250	3660	6180	4310	12250	9270	12400	15090	15400	12540	6340	6650	940	360	1540		150						18780	128200
10j		20		20	1330	1950	1060	2890	9030	8200	22710	19350	31710	26280	34590	24950	23040	14490	15800	8750	7940	5010	2790	520					20580	283010
10k					30	40	110	80	310	130	230	640	930	310	370	990	1030		240										1620	7060
10m										80	1310		2060	120		90		220					40						120	4040
10n					40	60	190	820	2650	1550	4830	4010	7900	9010	9750	4790	3460	4890	5100	350	770	250		220				280	4970	65890
10o					50	140			1220	1320	2580	1760	4190	6140	5910	6450	5420	2510	1940	50	1480	1160		90					4630	47040
10p									540	450	160	920	1000	1930	1830	2130	940	400	280										1100	11680
10q									790		140	160	1050	580	560	300	220												130	3930
11g								30		70				250		70														420
11h					60	50	110	310	1790	870	940	650	1640	1790	660	2010	860	190	340		40								550	12860
11h,13j							40		690	140	200	150		100	240	50	130												430	2170
11i				160		50		640	410	770	4600	3440	1780	2200	1000	1460	2230	590		130									4060	23520
11j					170	380	1060	1370	3720	1800	8060	7780	5190	10710	7270	7140	4500	1180	3280	760	1550	1900	100						5800	73720
11k				420		110	50	190	1580	150	2410	740	2530	2750	4120	3660	3760	2280	1250	610		820	280							1440	29150
11l					70		500	250	290	260	1030	430	530	80		640	130		130										1210	5550
11m						110	170	110	1070	650	2070	4470	4070	4200	4030	3050	3640	1650	2180	50	390	850	610	930					4240	38540
11n						130	210	2040	580	2050	2510	3380	3830	3310	5590	1630	2350	120	1620	180	640	810			350				2790	34120
11o									670	180	540	430	650	1490	300	1510		310		120	910								670	7780
12g					40	240		10	1080	580	960	760	3290	890	900	2420	720				130								670	12690
12h					80	490	260	420	3170	1540	3460	5110	4330	4350	4240	1800	1740	850	730	490	160	80	70						2370	35740
12i		80		110	50	660	940	2640	7360	5790	10280	10480	14200	13450	10160	8210	8630	2590	2410	1820	1510	200	70						9020	110660
12j		60	80	110	530	800	2650	3290	12620	7550	21000	16890	15570	14430	14360	13470	13340	3050	5080	1710	5310	320	1970	430	420				14470	169510
12k			100	60	60	140	850	2880	4940	5610	7870	8420	10300	12880	11180	11730	6800	6550	3170	1940	1970			1860	60					13550	112920
12l						80	210	240	870	920	4870	3270	2350	4130	2370	2100	1010	990	1900	5560	1420	50	410						2980	35730
12m						80	230		630	50	880	2460	540	6630	1460	4210	2180	430	180						240				930	21130
12n											180	60		150	460	240	120				640									1850
13e														190																190
13f												40	50																150	240
13g					100		1050	660	1800	300	2090	2480	970	1330	1850	1560	680	250	2060		80				130				1000	18390
13h				180	210	420	1990	2990	10440	5680	9510	8230	14520	6560	4210	8270	4920	1020	3840	2050	250	290	1180	100					5650	92510
13i					300	390	2180	2770	7530	6270	7720	4990	10320	8400	7350	4860	2500	4020	1260	240		310							9400	80810
13j				40	70	410	1380	760	4780	1890	8560	5690	7980	10270	7000	6720	5170	2940	2950	1290	510	1330	180				460		6000	76380
13k				30	850	160	1140	2020	6180	2940	10490	6240	8050	11170	5470	9640	7170	3690	1630	680	3870	870	670		960	60			4370	88350
13l							100		70	40	420	120	1880		590	2590	1800		2540		2080								560	12790
14d									320		880					490	130												70	1890
14e					30									1050															50	1130
14f					70	660	370	790	4300	1490	3290	2230	4920	680	1480	640	1370	640	1310	1200									2290	27730
14g					20	380	630	1660	3710	1420	3700	3900	2990	2870	4820	2820	5610	3650	2480	3000	2650	300		270	1330					2980	51190
14h					190	60	80	1410	1650	680	1970	1940	1810	1460	1810	2150	500	460	590	3180										2380	22320
14i		10		50	60	500	1650	3200	6830	5180	6590	7000	9440	7820	5710	5830	3050	1570	1550	400	150	230			410					6690	73920
14j					80	30	970	210	1550	570	2630	850	2820	1130	3180	830	430	450	600	480			480		260					1440	18990
14k								50	720	170	310		160	820	490	140				70										220	3150
15,16d						100		130										210												440
15d												210	630																130	970
15e					290	540	1590	2130	8800	5050	7140	5880	2890	7880	4080	5640	1690	1130	2730	540	820									2250	61070
15f						60	540	1550	1930	2760	6200	1830	6330	3500	5360	5500	4790	3340	2210	520	280									4970	51670
15g				40			70	130	1110	730	2050	870	2010	4590	930	2020	4930	5060	4410	1340	3410	2450	240						280	2030	38700
15h							200	550	680	780	1990	300	1440	590	1020	1270	1270	1700	1300	800	1960									1470	17320
15i				60	60	50	140	70			350			150		120	600		200											260	2060
15j									50		540																			170	760
16c					120	360	180	200	1300	270	1060	540	2050	620	830		680													270	8480
16d				40	240	340	1220	800	6730	3280	8540	11320	7040	7540	3190	2780	1870	1340	4570	1080		170								2960	65050
16e					90	40	1050	1240	3450	1310	950	1720	1510	2670	1720	2030	1230	880	790	1660	70		380								870	23660
16f						100				300		120		170																	690
16g									90		590	620	110	150	350		610				270									470	3260
17c				30	870	180	380	2510	2950	2310	3970	2780	4030	1790	1090	2180	1130				160									1300	27660
17d						110		250	740	160	150	720	1430	390	750	780	830	200	850											220	7580
不明					20	80	480	570	940	490	2780	1300	2040	3940	1440	2990	210	30	750	100	130		70							2390	20750
総計	20	170	180	1390	6840	12590	31130	53020	157570	106670	244910	213380	286820	295990	254800	238720	180470	106960	96290	48540	50580	20920	11790	4420	4160	60	750	560	233710	2663410

第４表　丸瓦厚さ別出土量一覧表（重量：単位は g）

終了

合計：重さ	径						
グリッド	11	13	15	17	19	不明	総計
5n			480			40	520
5o			6030			2430	8460
5p			4320	990		2520	7830
6m		710	20060	15420		9070	45260
6m,n		310	2330	300		4710	7650
6n		1040	28200	15040		19280	63560
6o		420	16930	10410		25830	53590
6p	200	1090	15570	5440		8690	30990
6q						30	30
7k						350	350
7l						630	630
7m						80	80
7n			1940			610	2550
7o	280	240	4290	190		5960	10960
7,8o		430				680	1110
7p		2860	11250	3490		8530	26130
7q	360		5340	490		7360	13550
8k			340			90	430
8m						640	640
8n			510	940		80	1530
8o		310	6390	7500		2870	17070
8p			3490	1050		6720	11260
8q		1320	19420	5640		15990	42370
8r		100				290	390
9h			680			190	870
9i		740	7940	1250	1670	3210	14810
9,10i						120	120
9j			1100	300		3080	4480
9,10j			230			390	620
9m			2050	140		570	2760
9n			5910	2280		2450	10640
9o		2370	29770	16260		12500	60900
9p		830	13700	5830		4530	24890
9q		210	4130	4010		1160	9510
10g		390	190	360	220	710	1870
10h			1870	2330		1790	5990
10i	210	4120	40490	16750	590	66040	128200
10j	350	14800	105650	76110	4650	81450	283010
10k		310	1100	1000		4650	7060
10m		580	1520	1490		450	4040
10n	120	6090	33950	12340		13390	65890
10o		1660	16040	12530	870	15940	47040
10p	110	780	4910	470		5410	11680
10q			1060	2170		700	3930
11g						420	420
11h		1100	3170	1150		7440	12860
11h,13j		240	330			1600	2170
11i	110	1730	10300	1130		10250	23520
11j	200	5920	34040	13020	270	20270	73720
11k		2920	9280	12020		4930	29150
11l			370	170		5010	5550
11m		1370	13560	6180		17430	38540
11n		1460	17290	2650		12720	34120
11o			840	2590		4350	7780
12g		2720	3410	760		5800	12690
12h		4740	8940	5070	250	16740	35740
12i	640	9120	40700	13000		47200	110660
12j	440	13740	58180	20280	540	76330	169510
12k	500	4960	39020	13420	230	54790	112920
12l		780	15680	10050		9220	35730
12m		1590	11590	4660		3290	21130
12n			730	640		480	1850
13e						190	190
13f						240	240
13g		450	8590	2860		6490	18390
13h	1220	9440	37020	10460	410	33960	92510
13i	730	5660	31260	7470	660	35030	80810
13j		7140	27420	8250	580	32990	76380
13k	150	5530	36030	13040		33600	88350
13l		570	1670	8100		2450	12790
14d		770		490		630	1890
14e			1050			80	1130
14f	360	2440	10620	2780		11530	27730
14g	260	4470	18700	15090		12670	51190
14h		1410	5230	4290		11390	22320
14i	1140	10510	20220	7310	450	34290	73920
14j		1250	7720	1760		8260	18990
14k			330			2820	3150
15,16d						440	440
15d		210	630			130	970
15e		9280	24780	6050		20960	61070
15f		2610	19980	9700	630	18750	51670
15g		1100	14760	16300	2410	4130	38700
15h		350	4910	4800		7260	17320
15i		190	850	120		900	2060
15j		430				330	760
16c		1450	4630	200		2200	8480
16d		5580	20540	8440		30490	65050
16e		1080	12710	4680		5190	23660
16f						690	690
16g			890			2370	3260
17c	480	4790	6810	3660	400	11520	27660
17d		870	1620	520		4570	7580
不明	620	1700	8040	1610		8780	20750
総計	8480	173380	1013620	467290	14830	985810	2663410

合計：破片	径						
グリッド	11	13	15	17	19	不明	総計
5n			2			2	4
5o			10			31	41
5p			11	3		24	28
6m		2	46	23		99	170
6m,n		2	12	1		73	88
6n		5	65	28		242	340
6o		2	47	18		265	332
6p	1	7	53	16		98	175
6q						1	1
7k						4	4
7l						11	11
7m						2	2
7n			2			9	11
7o	1	1	11	1		79	93
7,8o		1				13	14
7p		11	33	11		126	181
7q	1		17	4		89	111
8k			1			1	2
8m						5	5
8n			1	1		2	4
8o		1	18	14		23	56
8p			9	2		57	68
8q		7	61	16		150	234
8r		1				1	2
9h			1			3	4
9i		3	17	3	1	55	79
9,10i						1	1
9j			3	1		39	43
9,10j			1			3	4
9m			8	1		9	18
9n			11	3		20	34
9o		11	85	36		141	273
9p		3	40	20		72	135
9q		1	13	8		14	36
10g		2	1	1	1	18	23
10h			5	6		22	33
10i	1	18	111	43	2	729	904
10j	1	51	257	129	3	887	1328
10k		1	5	4		71	81
10m		1	5	2		8	16
10n	1	20	102	38		156	317
10o		8	46	23	1	140	218
10p	1	3	13	1		51	69
10q			3	5		9	17
11g						6	6
11h		4	12	2		72	90
11h,13j		1	1			22	24
11i	1	9	40	5		101	156
11j	1	30	117	30	1	293	472
11k		11	26	26		78	141
11l			1	1		60	62
11m		5	41	17		149	212
11n		6	45	9		124	184
11o			2	3		21	26
12g		7	10	3		63	83
12h		16	34	12	1	197	260
12i	3	42	142	41		547	775
12j	3	57	195	58	1	823	1137
12k	2	22	129	41	1	693	888
12l		6	42	11		123	182
12m		5	18	9		42	74
12n			4	1		5	10
13e						1	1
13f						4	4
13g		3	24	7		65	99
13h	6	37	98	21	3	380	545
13i	2	20	118	25	2	392	559
13j		36	106	19	2	413	576
13k	1	27	130	38		363	559
13l		2	4	5		22	33
14d		1		1		8	10
14e			2			2	4
14f	1	11	34	6		115	167
14g	1	20	54	29		127	231
14h		4	18	5		93	120
14i	4	41	67	25	1	385	523
14j		3	25	6		91	125
14k			3			22	25
15,16d						4	4
15d		1	1			1	3
15e		37	60	7		198	302
15f		14	48	16	2	166	246
15g		3	32	31	1	58	125
15h		1	8	8		58	75
15i		2	4	2		9	17
15j		1				4	5
16c		6	15	1		29	51
16d		14	57	16		288	375
16e		7	45	18		78	148
16f						4	4
16g			2			18	20
17c	1	14	20	7	2	112	156
17d		1	4	1		39	45
不明	1	9	22	7		134	173
総計	34	698	2986	1032	25	10957	15732

第５・６表　丸瓦筒部径別出土量一覧表（左が重量で単位はｇ，右は破片数）

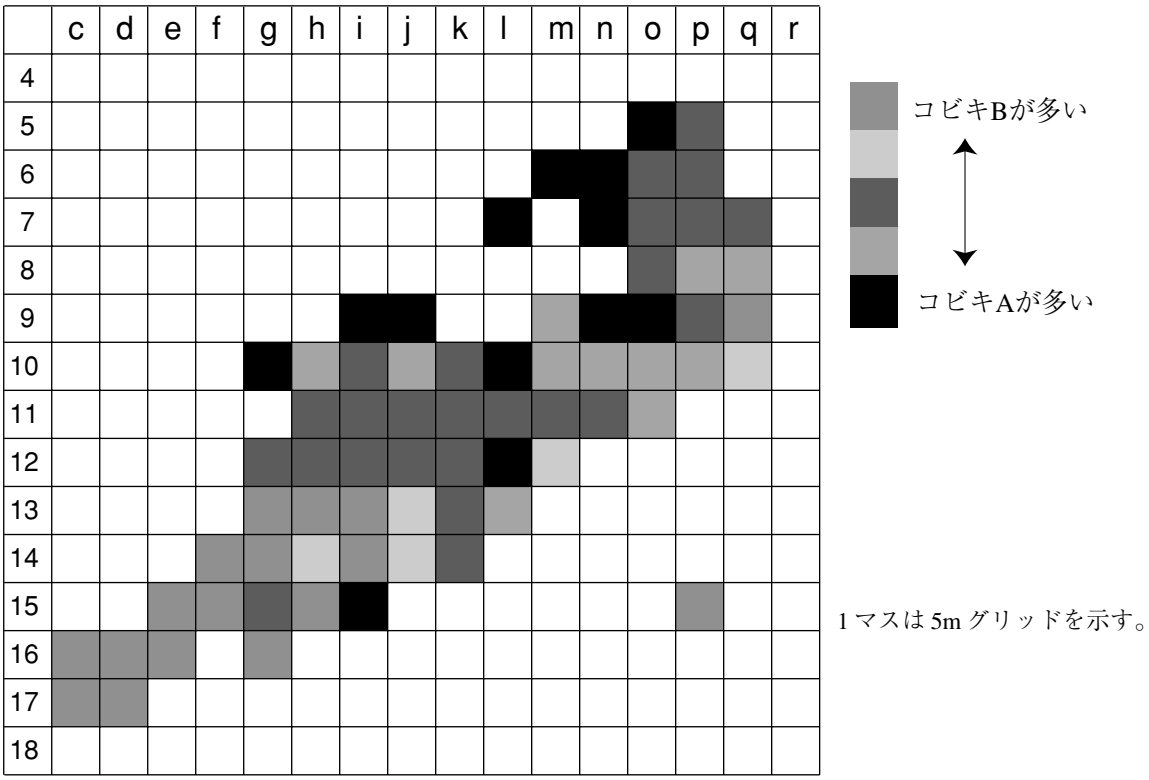
第７表　丸瓦の筒部径と厚さ別の出土量一覧表

破片数

厚＼径	11	13	15	17	19	不明	総計
10						1	1
11						5	5
12			1			1	2
13		2	1	1	1	14	19
14		7	9	2		58	76
15	1	9	6	2		139	157
16	2	26	36	4		256	324
17	4	38	54	7		347	450
18	9	108	172	30	2	775	1096
19	2	61	115	27	1	508	714
20	3	97	292	68		965	1425
21	5	70	281	61	1	758	1176
22	4	75	382	99	3	895	1458
23	3	81	387	128	2	767	1368
24	1	40	322	125	1	576	1065
25		24	274	104		509	911
26		21	229	98	2	322	672
27		12	104	78	2	173	369
28		6	100	75	4	111	296
29		1	34	28	3	52	118
30		3	38	30		50	121
31			16	16	1	17	50
32			9	10	1	11	31
33		1	5	3		2	11
34			9	1		4	14
35						1	1
36			2				2
38			1	1			2
不明		16	107	34	1	3640	3798
総計	34	698	2986	1032	25	10957	15732

重さ（単位はg）

厚＼径	11	13	15	17	19	不明	総計
10						20	20
11						170	170
12			100			80	180
13		210	420	60	100	600	1390
14		1720	1380	550		3190	6840
15	200	1520	1220	190		9460	12590
16	690	4970	6900	520		18050	31130
17	790	8790	13580	1840		28020	53020
18	1450	30650	46690	8760	480	69540	157570
19	750	14780	34690	7170	230	49050	106670
20	900	26250	97640	24630		95490	244910
21	1250	15310	90420	24290	210	81900	213380
22	1330	19420	127060	40230	490	98290	286820
23	910	21610	133540	56510	420	83000	295990
24	210	10400	118490	54590	230	70880	254800
25		6600	116700	47270		68150	238720
26		4450	83220	44460	2600	45740	180470
27		2470	39530	40440	890	23630	106960
28		1280	33290	42700	3160	15860	96290
29		250	15100	21480	3370	8340	48540
30		380	16270	24390		9540	50580
31			6790	11120	870	2140	20920
32			3290	5760	1670	1070	11790
33		180	1240	1400		1600	4420
34			3530	260		370	4160
35						60	60
36			750				750
38			280	280			560
不明		2140	21500	8390	110	201570	233710
総計	8480	173380	1013620	467290	14830	985810	2663410



第156図　丸瓦のコビキＡ・Ｂの出土量比分布図

終了

合計：重さ[g]																														
グリッド	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	41	不明	総計
5o							140	220	90	780	300	1850	1900	920	1450	1500	1060	160		460										330	11160
5p				90		840	1030	2720	1050	8470	3870	12680	9360	9040	12650	8590	9200	5180	1050	2640	140	400								2500	91500
6o			60		220	510	2090	3010	4990	8510	8560	20870	15890	11510	13790	9010	6060	2370	1360	860	1150	140								3800	114760
6p			20	100	160	1020	2080	3160	2960	9190	8720	20240	15390	13290	8950	11130	3660	2870	1260	2660					980					3280	111120
6q							20	50	30	240	50	90			100															20	600
7m								50	690	450	1190	680	1550	2070	290	120		350												250	7690
7n					80			300	30	650	280	1870	860	1520	2430	1320	840			1580										70	11830
7o					40	100	100	940	940	1700	3090	4660	6120	3210	1840	580	750	2140		90	40		190							3390	29920
7,8o						100	50	240	270	410	100	630	420	1020	1300	260	1600	60	160											140	6760
7p					120	180	570	3620	2480	4280	4900	11920	6600	6810	8130	5910	4010	940	180	890		670	240								2520	64970
7q					110	1330	2090	3040	4860	7790	5670	11260	12410	12320	7310	4640	3310	2760	860	620		360									1360	82100
7r						220	100	500	340	1280	490	730	850	290	830	1200	80	360					340									7610
8m								280	530	1040	1660	2420	3040	1040	1260	710	470		130											170	12750
8n							30		140	260	520	1570	360	1580	2590	1000	420		170											90	8730
8o							200	470	880	2050	5220	5090	9890	3720	5420	2700	990	2170	710	160										1340	41010
8o,p											940	410			210			140	80												1780
8p						150	1340	1180	1710	3010	3480	4870	3820	3720	3450	3520	2260	1100	360	50										620	34640
8q					170	330	1220	3860	2760	7900	10700	15590	10540	15930	9220	4150	3360	1810	920	80					90					1630	90260
8r					100		260	1390	1090	1330	500	1130	460	1060	70	240	60													150	7840
9,10i							170	20	270	860	140	890	690	510				340												80	3970
9h							30					2030	380				430													60	2930
9i					170	20	310	950	1220	2470	3490	4890	4390	4030	2500	1900	1050	120	200	590	640									610	29550
9j			40		50	130	410	210	610	2630	3930	1850	1860	2420	2090	870	990	220		380		200	150							530	19570
9k											160				520																680
9l								250		110	20	360	170	110		150														150	1320
9m						20		120		400	210	1250	1440	180	2200	590	210	190	1560												8370
9n								80	280	620	2350	4040	4610	2740	2800	2810	980	3010	740	180			310							470	26020
9o				80	110	310	650	790	2700	8330	7980	18370	15860	18220	10740	5840	5100	1460	2170	1790	90		180								3690	104460
9p					140	140	380	320	1350	2880	2420	7070	3560	5990	4530	5620	1480	570	560	140	40	180									1450	38820
9q					40		40	110	150	1300	840	1630	1970	3090	1560	670	1690	690	480	610	170										290	15330
10h					400	560	450	1630	2480	3100	3690	6350	7010	3980	3650	2490	2880	560	390	440		270										400	40730
10i			30	630	1430	5150	14490	18740	26840	50760	42410	71380	62250	52410	46980	28690	18420	10690	3630	2590	530	1410	160		120	880				7340	467960
10j		200	50	200	1200	3750	7860	15300	26650	53090	52890	89420	87000	80470	62310	38330	18620	16710	6520	4590	610	1590	1240	870	370				530	6480	576850
10k					40	250	260	560	1350	1530	1270	2650	2620	3510	1570	1870	430	180	560				100								1310	20060
10l								170	230	110	60	530		130		30		30												170	1460
10m					40		120	120	490	730	1380	2510	3530	5070	1580	840	560	600												240	17810
10n						120	180	900	4650	9000	6640	20170	23190	22040	13800	6400	5230	4040	430	160	260	60								2820	120090
10o					100	560	280	2090	3420	6490	6350	19670	14020	21510	9380	8490	4220	1640	1930	660								690		1780	103280
10p							340	590	500	1840	1640	3280	3430	3860	2100	1460	690	1160	690	30										510	22120
10q							390	90		600	290	1770	660	1100	1000	320		20												20	6260
11,12h						30	300	720	110	390	490	1090	920	310	1320	320	620													80	6700
11g					70	200	350	1170	1430	4830	4210	5030	6160	6710	3840	3380	2340	1510	230	990										610	43060
11h				50	420	960	2640	5380	6900	13790	10950	24200	19770	17400	14600	9220	5200	3740	910	870	290		250	650							1830	140020
11h,13j							110	80	390	1090	1000	1230	620	480	550	210	340		120		340										290	6850
11i				20	530	1560	2400	2370	6760	5870	5930	6280	8030	5980	5810	2510	1240	1450	220											1810	58770
11j			40	150	370	1030	1730	4090	8650	16190	12540	27000	21140	23400	21960	24830	8840	5110	1740	1380	500	590	300								6470	188050
11k					70	140	760	620	1270	2100	4290	7150	5270	7720	3920	2680	2620	190	190	240											1130	40360
11l					110	270	900	790	470	490	1300	1300	1370	2450	2860	1370	1940	1330		90		50									830	17920
11m					60	210	1040	1610	2300	4640	5060	9360	8240	10460	7670	4570	5480	4110	830	1260	520			600							2160	70180
11n		20			50	630	620	1600	2200	4920	5750	12300	12020	16840	13920	8110	5430	2000	810	1440	120	130		1500							3460	93870
11o				140	80		30	440	530	670	1690	2930	2390	2180	410	160	20	830	710												260	13470
12g					120	190	1240	2000	1800	6710	4580	13180	8650	12540	7950	2270	1160	1090	1160	720	210										880	66450
12h				20	90	620	830	1930	3570	6660	10200	14600	13200	15210	18430	9430	5640	5130	1480	970		270		90		160					980	109510
12i		20	20	60	330	2060	6060	8850	14710	25380	25690	44770	40500	42070	31630	25340	18570	6880	3630	1270	1320	540	500								5610	305810
12j				330	1120	2920	5080	12370	14620	27420	22800	45210	34260	37540	33340	22320	11030	10520	5220	3830	1140	2020	660			210		150			7000	301110
12k	20		60	130	600	2540	6520	9550	16300	24970	28390	51260	45110	48710	30210	27140	13590	10510	7800	2020	560	700	420	330	60						11190	338690
12l		40		60	160	1310	810	1240	2870	5540	3350	9850	7860	8170	7950	4170	4200	3280	360			240									2900	64360
12m			60			40	2450	1100	830	2660	2620	7710	3400	6320	5210	6180	1700	850	940	1220	1040										690	45020
12n								180	80	350	340	340	500	100			300			110											2300
13e					60						80			140																10	290
13f				50					60	80	190	540		920	180		30			580										80	2710
13g				130	170	550	490	1800	3260	4410	4210	4300	7830	5170	3090	1710	2410	1460	1630		90	130								220	43060
13h		200		90	620	1330	3040	5150	7750	17570	16980	25270	23020	23520	18270	14670	10350	4750	1720	3190	280	1220	520	160	40						3840	183550
13i			10	240	690	1890	4130	8330	11550	25080	22220	38290	32800	35080	26410	18090	13470	7910	4510	1940	200	960	1420								7060	262280
13j		30	50	120	560	1150	3490	7470	7870	15430	9980	25250	20270	20090	19010	12100	7370	2080	2900	2010	380	730	70				150				5130	163690
13k				150	110	1340	3290	4240	4940	14200	10960	24100	15840	18310	19150	8990	6250	2120	2970	1740	460	120		180		300					4120	143880
13l				40	90	620	1530	530	2280	3290	1170	3380	2030	2780	1620	2070	1790	760	590	30			130								690	25420
14c														80																	80
14d						50	140	260	80	380	440	620	180	600	120	870	1740	40			790										180	6490
14e						470	280	760	50	430	260	1680	1070	810	280		560	260	580	300											190	7980
14f				210	540	830	930	3850	4720	6510	5320	3830	8820	6910	8420	6990	3040	430	1160	130	220										1020	63880
14g			200	70	860	970	4810	4300	7850	7280	9010	8550	13650	11380	17440	17260	12910	18350	9870	5450	3070			620							2630	156530
14h		420	30	550	260	490	1160	3390	3050	5140	7240	6290	6760	5950	4140	4010	2400	2620	120	180		2260	160								1480	58100
14i			120	240	970	1540	2880	6690	12780	23670	20220	25490	23970	22050	22520	12080	7660	5900	2860	1040	190	80		200		70		110			5320	198650
14j		40	90	230	170	350	1250	2500	4230	5510	4990	5250	6780	5140	3610	2010	3360	520	340	100											920	47390
14k					20	130	80	610	350	510	540	1620	1540	2010	340	950	230	210		320											150	9610
14q				90	50		360	390	1340	700	460	1140	1710	1170	2500	1680	1480	3710													540	17320
15,16d								90				1230		210			3730	3680	100												80	9120
15,16f									170				100	30	190	140																630
15c					30		90	130	160	330	80	300		190	450	240	240														30	2270
15d						30	160	410	20	1600	120	950	260	1500	1220	1470	1300	870	400												40	10350
15e				30	420	720	1440	3250	3370	7390	6940	11180	16730	20000	18810	26020	3960	12660	3100	3010	550	670	590								2320	143160
15f					190	660	2940	3660	6720	12550	12240	16980	16110	19360	24670	19060	16510	12800	8330	7130	2980	1380		2300								4760	191330
15g				30		710	1890	1330	2340	4440	3360	12730	11240	11110	11630	19260	17450	10650	7270	4280	4150	1800	4790								2550	133010
15h			110	40	100	280	480	2570	2300	3190	1800	3240	3640	2820	3480	3640	1800	2200	870	2460	310	1220									520	37070
15i				80	50	30	310	570	1420	1650	990	950	850	1130	1050	290	20	190													580	10160
15j						40	230	60	280	140		120	630	920	620	850															180	4070
16b					30	20	40	210	200	180	220	220	190	260						110	240											1920
16c					90	150	800	1580	1450	4030	2380	3170	2750	5680	2050	4430	2150		440	240	470										350	32210
16d					30	670	2460	3970	3400	8180	9300	15620	12080	17240	15120	12670	20040	4190	2530	2610	1300	990			320							1930	134650
16e					80	230	410	1350	960	3390	1780	6030	3670	7280	16390	5890	1010	3730	870	1770	550	1560		760	290							990	58990
16f						40	70	190		20	500		620	60		560	150															240	2450
16g					50		340	440	200	190	210	780	610	1230	140	1920	1340					160										120	7730
16h						140	40	520	90	250	110	460					80		250													10	1950
17b,c									130								140															270
17c			60	110	80	400	3680	2460	4570	6130	4150	9090	4910	6140	4500	2730	1610	1370		300		130									1020	53440
17d					70		160	430	1380	1260	2650	660	1340	1200	3480	420	290		340					460							220	14360
17e								50							140																20	210
17j																	130															130
不明				90	200	160	990	3170	3790	10260	8730	16320	12760	13070	7380	5770	3940	4220	30	1430	300										2160	94770
総計	20	970	1050	4650	15490	46490	115940	200870	289930	556230	519410	939090	832270	856550	720600	527000	342310	230850	107230	79010	26240	23230	12720	8720	2270	1620	150	950	530	149940	6612330

第８表　平瓦厚さ別出土量一覧表（重量：単位はｇ）

終了

合計：破片	厚																													
グリッド	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	41	不明	総計
5o							1	2	1	7	4	10	11	4	4	4	3	2		1										7	61
5p				2		9	10	22	11	59	32	75	41	41	41	22	26	9	4	2	1	1								98	506
6o			1		4	9	24	32	41	74	58	115	99	79	50	43	28	17	6	3	3	2								163	851
6p			1	2	4	16	24	31	31	82	64	120	82	77	51	42	21	12	5	10					1					184	860
6q							1	1	1	2	1	2			1															2	11
7m								1	6	6	13	5	12	8	4	2		1												7	65
7n					1			1	1	3	2	4	6	5	5	3	2			1										8	42
7o					1	2	2	8	12	11	21	35	30	16	11	5	5	5		1	1		1							77	244
7,8o						1	1	2	3	6	1	5	5	6	4	2	5	1	1											5	48
7p					4	4	11	30	31	41	37	75	46	52	39	25	21	8	2	2		1	1							162	592
7q					2	13	31	43	59	60	53	93	83	80	45	26	20	11	5	3		2								92	721
7r						4	2	8	5	14	4	7	6	3	7	3	1	2					1								67
8m								3	7	11	12	14	12	10	6	6	2		1											6	90
8n							1		2	3	3	11	2	7	8	4	1		1											4	47
8o							2	4	11	10	21	27	39	16	24	12	5	9	2	1										44	227
8o,p											2	3			2			1	1												9
8p						2	15	14	17	28	25	42	27	25	22	19	8	4	3	1										29	281
8q					1	4	12	32	33	52	53	94	65	74	47	25	17	5	3	1					1					68	587
8r					2		2	6	10	8	4	7	5	5	1	3	2													7	62
9,10i							2	1	4	7	2	5	7	8				1												6	43
9h							1					3	1				1													2	8
9i					4	2	9	16	11	23	28	31	33	27	13	11	8	2	1	2	1									51	273
9j			1		1	3	8	4	12	27	28	20	20	15	12	9	5	2		1		1	1							38	208
9k											1				1																2
9l								3		2	1	5	2	2		1														2	18
9m						1		2		3	3	4	6	3	7	4	1	1	1												36
9n								2	5	5	13	19	15	12	15	10	3	5	2	1			1							30	138
9o				1	2	3	8	12	26	62	59	98	88	90	68	31	20	5	9	6	1		2							130	721
9p					2	2	7	5	16	29	18	46	28	38	31	17	6	5	4	2	1	2								49	308
9q					1		1	2	3	14	8	11	11	13	11	3	7	3	2	2	1									4	97
10h					4	11	10	25	25	38	32	54	48	28	23	13	12	2	3	2		1								23	354
10i			1	13	19	85	207	255	323	485	377	556	426	358	264	160	126	48	18	8	3	5	1		1	1				415	4155
10j		2	2	4	16	48	104	168	234	452	398	540	512	422	302	170	73	57	23	20	2	7	2	1	1				1	534	4095
10k					1	3	5	9	15	17	18	26	20	30	19	13	4	2	2				1							70	255
10l								4	6	2	2	5		1		1		1												11	33
10m					1		2	3	3	8	11	21	21	21	12	5	4	2												12	126
10n						3	6	13	42	67	50	118	105	112	75	36	17	16	2	1	1	1								79	744
10o					2	6	4	25	25	55	42	111	76	96	40	30	15	7	5	4								1		59	603
10p							4	8	8	14	10	28	25	18	9	10	3	5	4	1										19	166
10q							3	1		5	3	15	9	4	2	1		1												1	45
11,12h						1	5	7	1	6	5	13	4	3	7	3	4													3	62
11g					1	3	9	20	22	47	46	42	48	44	28	24	12	12	3	4										28	393
11h				1	8	17	49	64	70	135	90	189	151	128	103	51	32	21	5	6	1		1	1						52	1175
11h,13j							3	2	7	7	5	9	5	5	5	2	3		1		2									8	64
11i				1	3	16	28	31	53	54	50	64	52	45	35	14	10	8	3											77	544
11j			1	4	6	18	38	64	107	163	123	199	162	157	119	87	37	22	10	5	2	3	1							267	1595
11k					2	7	14	18	17	23	26	58	45	37	21	16	10	3	2	1										87	387
11l					1	7	15	13	9	12	19	16	14	17	9	7	4	4		1		1								46	195
11m					1	6	18	23	31	49	49	89	62	58	49	23	26	19	3	4	1		1							102	614
11n		1			1	13	11	24	24	43	52	87	81	95	68	47	20	6	4	3	1	1		1						102	685
11o				1	1		1	5	3	6	9	15	12	17	2	2	1	3	2											8	88
12g					2	6	18	24	23	73	44	111	75	87	58	16	9	5	7	2	1									30	591
12h				1	3	13	15	34	51	79	90	138	121	122	117	62	44	27	7	6		2		1		1				47	981
12i		1	1	1	7	31	79	115	165	274	254	379	323	285	212	151	107	42	20	8	7	3	3							208	2676
12j				7	19	44	89	174	197	314	229	384	297	259	197	119	62	59	23	16	6	6	3			1		1		310	2816
12k	1		1	4	16	51	112	155	233	324	284	474	361	315	203	148	78	41	33	15	3	6	1	2	1					623	3485
12l		1		1	3	13	14	26	36	54	36	78	52	48	42	20	18	9	3			1								141	596
12m			1			1	14	14	14	26	18	42	20	23	16	15	9	4	3	5	1									31	257
12n								2	1	2	3	4	4	1			2			1											20
13e					2						1			1																1	5
13f				1					1	2	3	5		5	1		1			1										3	23
13g				1	3	10	7	14	19	37	28	26	30	28	15	11	7	5	3		1	1								18	264
13h		1		2	11	23	39	66	106	175	159	204	173	147	113	83	35	26	10	9	2	2	3	1	1					126	1517
13i			1	6	11	29	62	105	141	242	216	324	257	262	166	106	62	37	20	8	1	3	3							265	2327
13j		1	1	4	11	20	56	96	107	177	106	239	171	140	140	70	52	17	9	11	2	3	1				1			219	1654
13k				3	2	17	44	65	67	153	108	200	113	148	109	61	39	18	15	8	3	1		1		1				140	1316
13l				2	2	4	22	6	19	24	11	22	14	21	10	7	6	2	2	1			1							42	218
14c														1																	1
14d						2	3	3	1	3	2	3	3	2	1	2	3	1			1									7	37
14e						1	3	5	1	5	2	8	8	4	2		3	2	2	1										7	54
14f				4	8	10	14	43	50	65	47	41	49	33	31	22	14	4	1	1	1									39	477
14g			1	1	8	14	30	33	61	54	49	46	50	51	58	46	36	34	20	9	4			1						93	699
14h		1	1	6	3	6	13	32	33	40	34	42	30	30	23	11	8	6	1	2		3	1							49	375
14i			2	6	11	23	52	77	137	224	159	200	177	169	124	67	44	32	18	6	2	1		1		1		1		234	1768
14j		1	2	2	3	4	18	27	43	52	49	54	50	36	21	16	19	3	2	1										37	440
14k					1	2	2	7	6	6	3	13	11	8	5	6	1	1		1										7	80
14q				1	2		1	6	6	7	3	8	7	2	8	4	3	6												27	91
15,16d								1				2		1			2	2	1											3	12
15,16f									2				1	1	1	1															6
15c					1		2	3	2	5	2	1		2	3	2	1													1	25
15d						1	4	3	1	12	4	10	1	6	3	2	6	4	1											2	60
15e				1	3	11	16	29	35	61	37	73	70	73	64	56	16	34	11	7	2	2	2							64	667
15f					4	9	36	39	66	95	68	98	60	82	73	68	43	21	18	9	3	6		1						123	922
15g				1		7	16	13	12	34	17	45	44	40	36	41	32	23	15	7	3	2	4							91	483
15h			1	1	2	5	7	15	14	25	13	18	18	14	12	10	10	5	2	4	1	3								22	202
15i				2	1	1	5	9	16	19	6	8	7	6	5	2	1	1												16	105
15j						1	2	1	2	2		2	4	4	3	2														1	24
16b					1	1	1	3	2	3	3	2	3	3						1	1										24
16c					3	4	12	12	17	30	17	23	11	21	10	17	6		1	1	1									14	200
16d					1	10	24	43	42	80	51	83	68	81	67	58	42	17	6	5	2	4			1					93	778
16e					3	4	5	15	17	29	17	34	21	36	42	28	8	11	3	3	1	3		1	1					33	315
16f						1	1	1		1	1		4	1		3	2													11	26
16g					1		3	5	1	5	4	5	2	10	1	2	7					1								7	54
16h						1	1	3	1	2	1	1					1		1											1	13
17b,c									1								1														2
17c			2	2	3	8	39	32	48	55	32	42	31	28	20	7	10	3		1		1								42	406
17d					2		3	5	10	15	5	10	9	11	14	2	3		2					1						9	101
17e								1							2															1	4
17j																	1														1
不明				1	6	4	19	33	48	102	71	91	81	76	51	24	22	16	1	4	1									90	741
総計	1	9	21	90	255	711	1614	2464	3239	5324	4275	6834	5491	5136	3801	2415	1507	868	404	254	72	82	35	14	8	5	1	3	1	6606	51540

第９表　平瓦厚さ別出土量一覧表（破片数）

7　飾瓦（第 157 ～ 161 図 2411 ～ 2489）

（1）概要

飾瓦と分類できたものは総数で 96 区出土資料で 147 点（26.87kg）を数える。紋様の全容が判明するものは少なく、大部分は小破片となっている。飾瓦の分類については『清洲城下町遺跡Ⅶ』（鈴木編 1997）で実施されており、今回もこの成果を踏襲して一部変更を加えて報告することとしたい。飾瓦は紋様部の製作方法によって大きく3類に分類される。Ａ類は粘土板から削り出して製作するもの、Ｂ類は紋様の笵型を押して製作するもの、Ｃ類は無紋のものである。今回はこれ以外に、上記の分類では区分できない小破片のうち金箔が残る資料など（2473・2474・2483 ～ 2485 など）も一部紹介している。

（2）飾瓦Ａ類

今回出土した飾瓦Ａ類は、平面形が方形または長方形のもので、43 点以上が確認された。これらは紋様構成から 8 類に分けられる。

Ａ　飾瓦Ａ１類（第 159 図 2462 ～ 2468）

平行四辺形を交互に組み合わせた紋様構成のものである。平行四辺形紋の間の溝の部分に釘孔が穿孔されている（2462）。飾瓦Ａ 1 類は厚さによっていくつかに細分され、厚さが 40mm 程度のもの（2462・2468）、32mm 程度のもの（2463・2464・2466・2467）と厚さが 25mm 程度のもの（2465）に区分される。

Ｂ　飾瓦Ａ２類（第 157 図 2411 ～ 2422）

幅広の突帯を交差させ亀甲紋を形作る紋様構成のものである。凹部は六角形と小三角形の形状となり、厚さは 25mm 程度を測る。幅広の突帯の上面に金箔が押されたもの（2411・2413・2415 ～ 2417）が多く、残存状況は不良で金箔片や下地の漆膜片がかすかに残る程度に過ぎない。六角形状の凹部の隅角部に釘孔が穿孔されている（2412・2416・2419・2421）。

Ｃ　飾瓦Ａ３類（第 158 図 2461）

全体の紋様構成は復元することができないが、弧状の幅広い突帯を 2 列配置するものである。厚さは 20mm 以下の薄いもので、今回の調査では 94A 区に比べあまり出土していない。

Ｄ　飾瓦Ａ４類（第 159 図 2469）

木瓜紋を浮彫りで表現したものである。2469 は最厚部が約 40mm を測るもので、木瓜紋の上面に金箔が施されている。木瓜紋の外郭線部分は輪郭を描いたヘラ切りの痕跡が残存し、紋様部以外の下地部分や裏面にはヘラケズリ調整が施されていた。飾瓦の両端部は薄くなっており、隅角部に近い部分に穿孔されている。2472 も飾瓦Ａ 4 類の一部の可能性がある。

Ｅ　飾瓦Ａ５類（第 157 図 2423 ～ 2438）

亀甲紋に四星形を組み合わせた紋様構成のものである。亀甲紋の間の溝の部分に釘孔が穿孔されている（2423 ～ 2430・2433・2436）。厚さは 20mm 以下の薄いものが多く、厚いもの（2438）でも 25mm 前後である。亀甲紋の凸面上に金箔が残存するもの（2427・2431・2432）が確認され、裏面はヘラケズリ調整が施される。端部はやや斜めに切断されている。

Ｆ　飾瓦Ａ６類（第 158 図 2450・2451・2453）

全体の紋様構成は復元することができないが、剣かたばみ紋を配置すると考えられるものである。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では、紋様の笵型を押して製作したと考えて飾瓦Ｂ 3 類としたが、今回削り出された調整痕をみることができたため、Ａ 6類に変更した。紋様の突帯以外の部分で穿孔されている。

Ｇ　飾瓦Ａ７類（第 158 図 2455・2456）

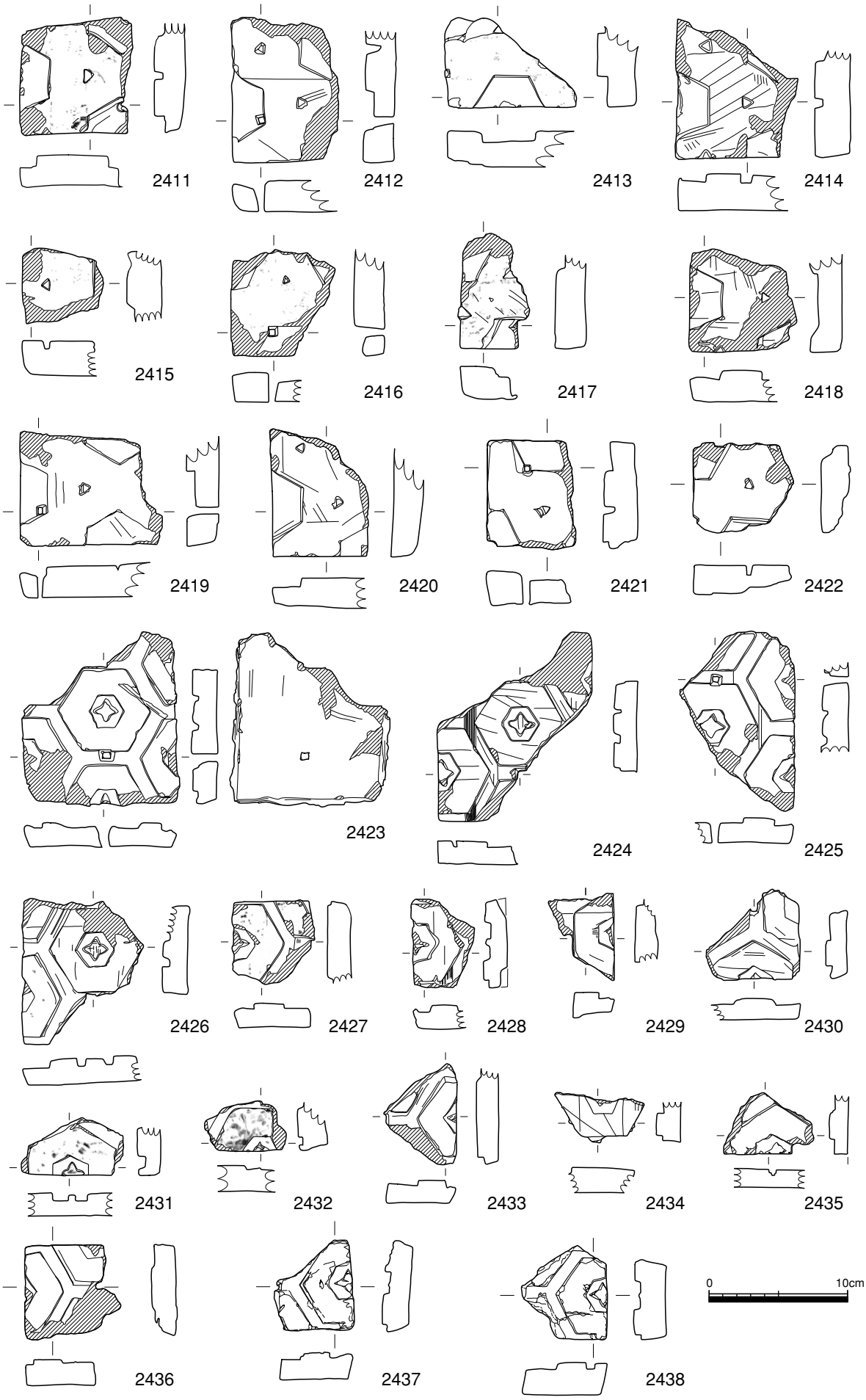
全体の紋様構成は復元することができないが、菱形花紋を配置するものである。厚さは 20mm 以下のもの（2455）と 25mm 程度を測るもの（2456）がある。

Ｈ　飾瓦Ａ８類（第 159 図 2470）

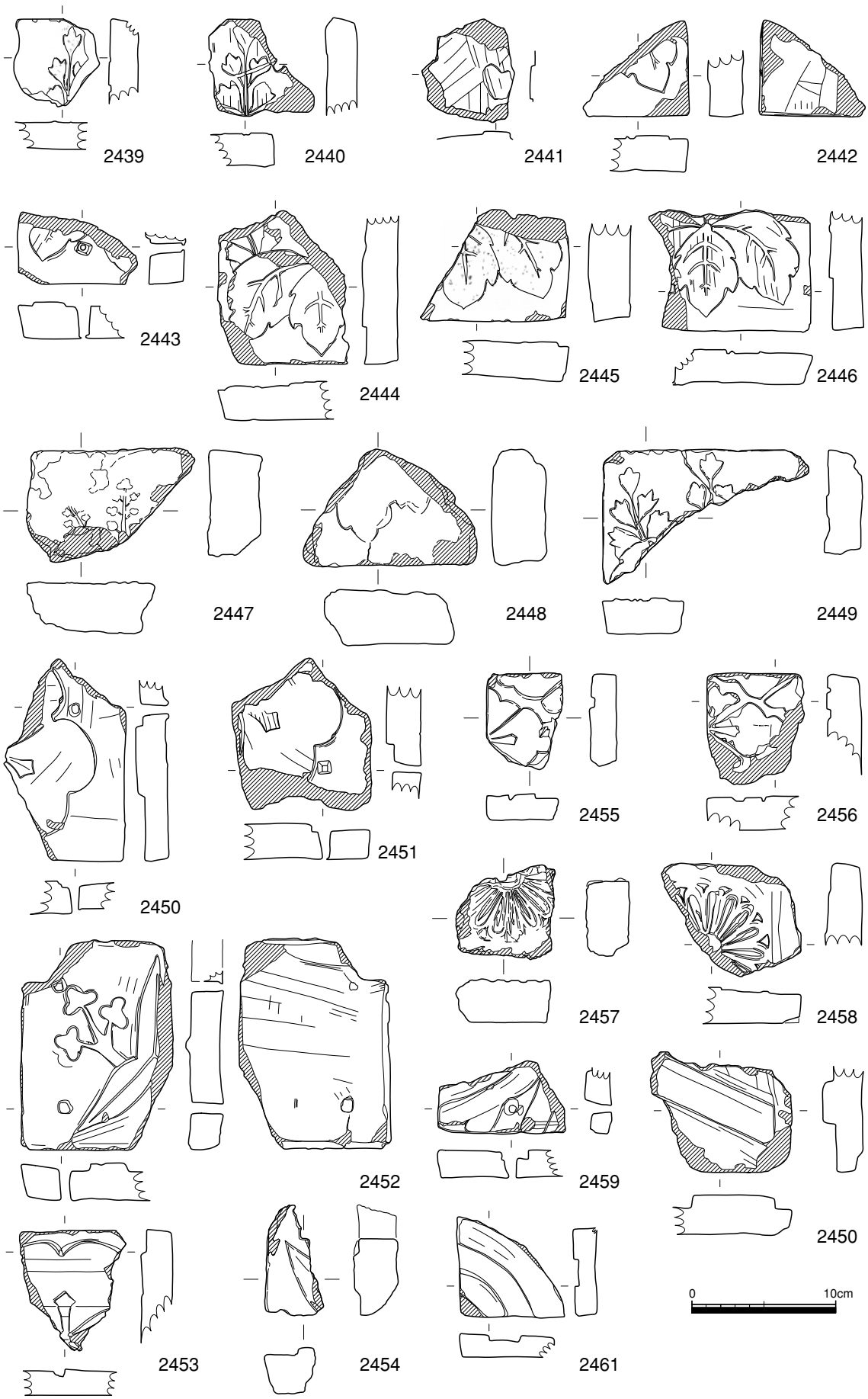
全体の紋様構成は復元することができないが、剣菱紋を配置するものである。表面には金箔が押された痕跡が残存する。

（3）飾瓦Ｂ類

今回出土した飾瓦Ｂ類は、平面形が方形と推測されるもので、14 点存在する。紋様構成から 3 類に分



第 157 図　飾瓦実測図（1）



第 158 図　飾瓦実測図（2）

類できる。

A　飾瓦Ｂ１類（第158図2439～2449）

五五桐紋のみを配置した紋様構成のものである。大部分が欠損したものばかりであるために、飾瓦Ｂ1類か飾瓦Ｂ２類かの判別は厳密にはできないが、ここでは桐紋が残存するものを飾瓦Ｂ1類として報告する。桐の葉は欠刻が鋭い「鬼桐」状（2442～2446）で枝が短く花蕾の先端が尖っている（2439・2440・2449）。黒田分類ＢⅡｂ（黒田1993）に該当するだろう。桐紋の下に穿孔されたもの（2443）がある。厚さは25mm程度の薄いものと40mm弱の厚いものの二者がある。

B　飾瓦Ｂ２類（第158図2457・2458）

五七桐紋と菊紋を交互に配置する紋様構成のものである。菊紋は16単弁紋と考えられるが、桐紋は残存せず不明である。

C　飾瓦Ｂ３類（第160図2482）

全体の紋様構成は復元することができないが、木瓜紋を配置するものである。おそらく、平面形が長方形かつ横断面形が直角に屈曲するものの直角に折れ曲がった端面に紋様が施されたものと推測される。

8　鬼瓦（第161～165図2490～2515）

（1）概要

鬼瓦と分類できたもの（96区出土資料）は総数で27点を数える。紋様の全容が判明するものは少なく、大部分は小破片となっている。形状がある程度判明するものについて分類を行うと、次のように分けることができる。鬼瓦Ａ類は偏平な粘土板に紋様部分を貼り付けたのみもの、鬼瓦Ｂ類は粘土板の表面に紋様を貼り付け裏側には外周部に厚い突帯を付けるもの、鬼瓦Ｃ類は破片全体が装飾的な形状となるものである。この分類は暫定的なものであり、取り上げた資料の中には鬼瓦でないものを誤認した可能性もあることをあらかじめ断っておく。

（2）鬼瓦Ａ類

鬼瓦Ａ類は偏平な粘土板に紋様部分を貼り付けたのみのものであり、外周部端部の断面形はおおよそ方形となっている。

2499は鬼瓦の中で唯一全体の形状をある程度復元できる資料である。幅約50cm、高さ約44cmの規模を持つ平面五角形の厚い粘土板の表面に紋様が施されるものである。紋様は上半部に幅約3cm、高さ約2cmの断面方形の突帯を2条傘形に貼り付け、下半部に3個の円形紋の沈線が刻まれたものである。上半の突帯の上位が4ヶ所穿孔され、下半の2個の円形紋の中心にも穿孔されている。円形紋は途中で途切れたりしており、きちんと装飾用に描かれたものとは考えにくく、その上に何らかの別の装飾を加えるための下絵である可能性を考えたい。裏面は突帯などの付属物はなく、ヘラケズリ調整やナデ調整などが施されているに過ぎない。

2490～2492などは2499に類似する資料群である。特に2492は左下円形紋の左下部分の破片と考えられ、2ヶ所で穿孔されている。2492の存在から少な

（4）飾瓦Ｃ類

今回出土した飾瓦Ｃ類は全部で29点が出土した。これらは平面形や断面形から3類に区分できる。

A　飾瓦Ｃ１類（第161図2489）

平面形が方形となるものである。2489は半分以上が欠損する資料で孔が2個存在する。2475は、2489よりもやや大きく端部の断面形態も異なるもので、Ｃ1類ではない可能性が残されている。

B　飾瓦Ｃ２類

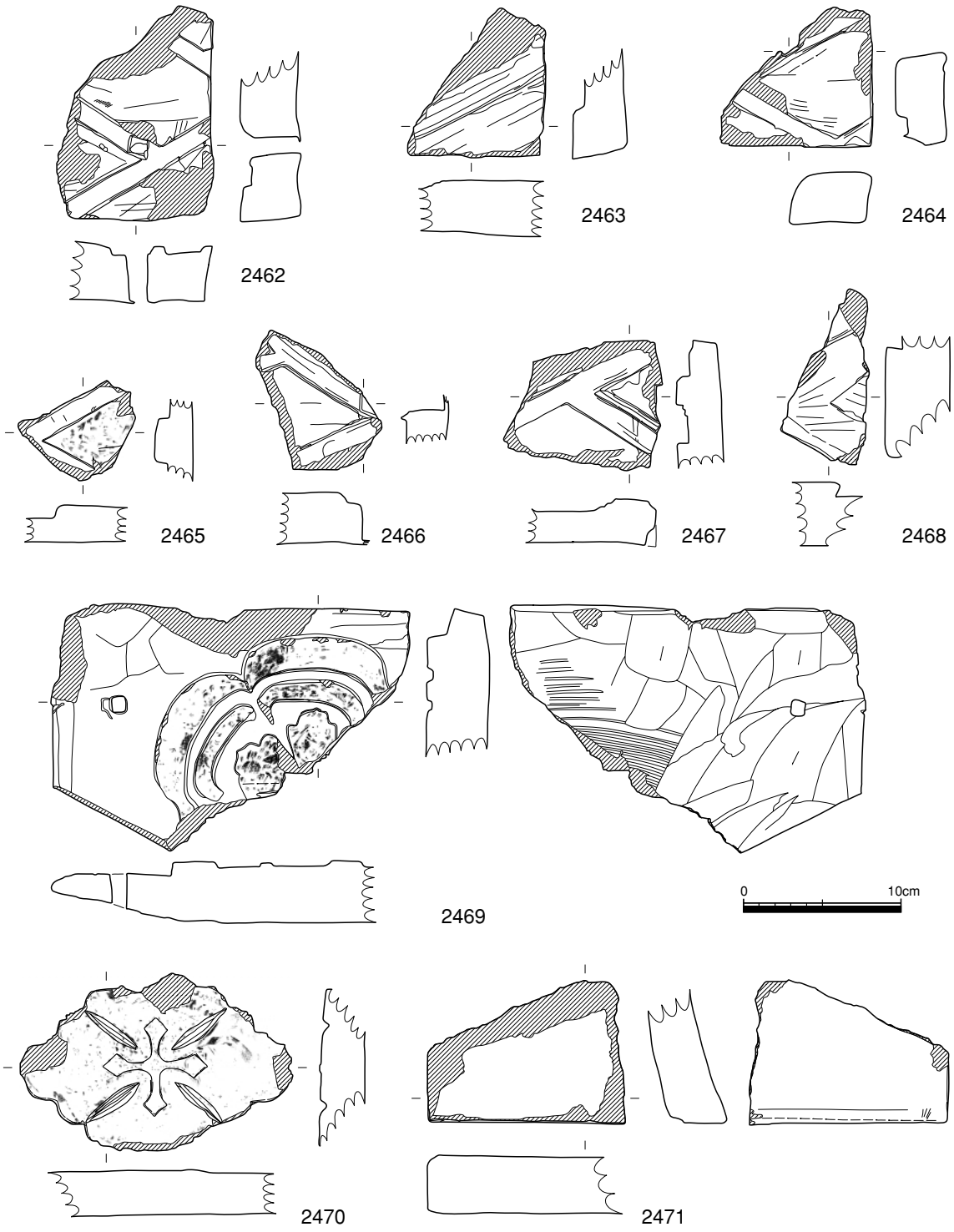
平面形が長方形となるものである。今回は明瞭なものは確認できなかった。

C　飾瓦Ｃ３類（第160図2478～2480）

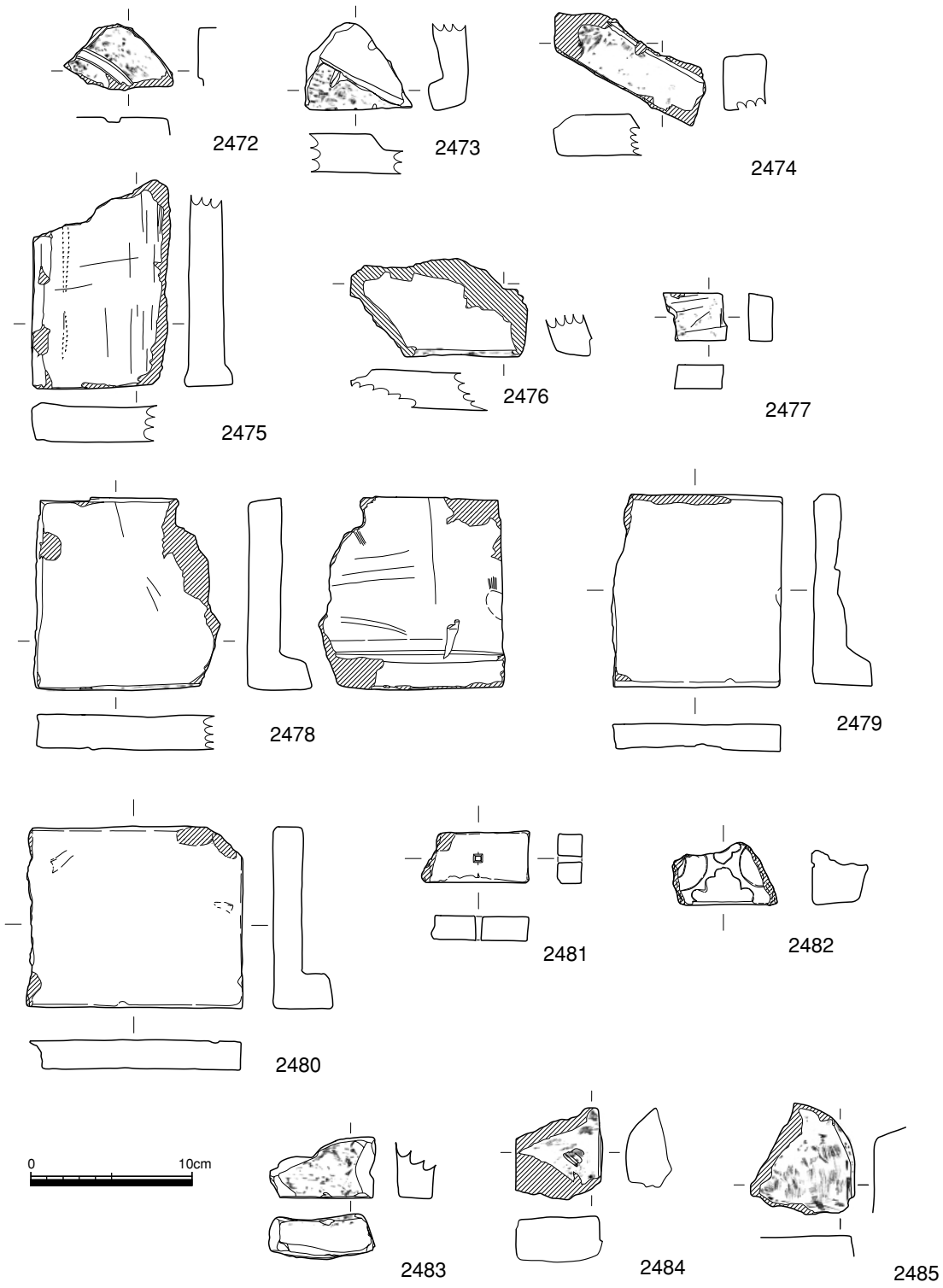
平面形が長方形、横断面形が直角に屈曲するものである。屈曲部の状態で、内側が鈍角に折れるタイプ（2478・2479）と内側が直角に折れるタイプ（2480）に分けられる。

C　飾瓦Ｃ４類（第160図2481）

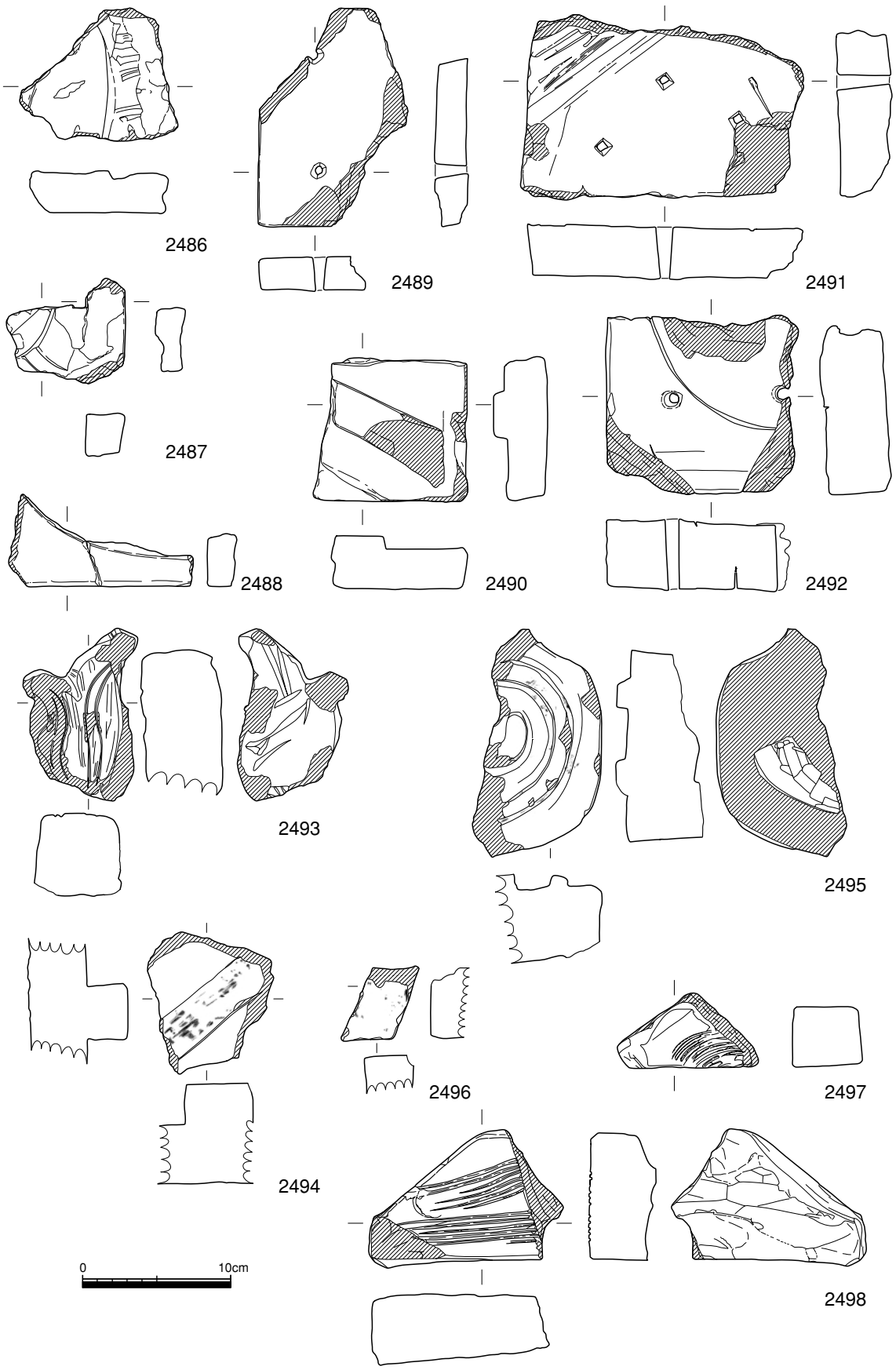
偏平な直方体の中央付近に穿孔されるものである。道具瓦の一種かも知れない。



第 159 図　飾瓦実測図（3）



第 160 図　飾瓦実測図（4）



第 161 図　飾瓦・鬼瓦実測図

くとも2499のような鬼瓦は一対以上が存在することが明らかである。2492の円形紋の沈線は非常に深く刻まれている。2490と2491と2494は2499とは形状が異なる可能性が高いものであるが、幅広の突帯が付く（付く痕跡が残っている）ものである。

（3）鬼瓦B類

鬼瓦B類は粘土板の裏側には外周部に厚い突帯を付けるもので、外周部端部の断面形はL字状に屈曲する形となるものが大半を占める。

2495は鬼瓦右袖端部の破片と推測されるもので、表面は雲紋？（渦巻き状紋様）が施されている。表面の突帯上には金箔が押されており、裏面外周部の突帯は剥落している。2500は表面に植物状の彫刻が貼り付けられた鬼瓦である。紋様の正確なモチーフは不明で、裏側には中央部に鬼瓦を支えるための把手が付き右側外周部には突帯が付着していた。表面はきれいにミガキ調整が施されるのに対して、裏面は乱雑なヘラケズリ調整が施されている。2501は鬼瓦B類か特定できないが2500のように把手がつくことから鬼瓦B類として報告する。表面は剣かたばみ紋が施されていると考えられる。2502と2503は把手本体である。2505と2506は鬼瓦B類の袖部分の破片と考えられる。先端が返り状に彎曲している。表面や側面は丁寧にミガキ調整がなされている。2513は鬼瓦B類の左側部分の比較的大きな破片資料である。表面は外側部分に突帯が存在し上位に紋様の痕跡が認められる。裏面は外周部に突帯が巡っており、その内側は粗くヘラケズリ調整されている。2508は外周の突帯部の裏側が彎曲するタイプで、他の鬼瓦B類とは異なる。表面には円形スタンプ紋が一列に並んでいる。

（4）鬼瓦C類

鬼瓦C類は破片全体が装飾的な形状となるもので、様々な形状があるが、本当に鬼瓦か否か確証が持てないものが多い。

2493は側端部の雲紋先端部分の可能性が考えられるものである。表面には装飾の沈線が施される。2497と2498は三角形状の平面形を持つ板状の製品で表面に櫛描き紋が施される。

9　鯱瓦（第165・166図2516～2528）

（1）概要

鯱瓦と分類できたもの（96区出土資料）は総数で15点を数える。全形が判明するものは少なく、小破片が多い。ここで取り上げた資料の中には、鯱瓦でないものを誤認した可能性もあることを断っておく。

（2）資料紹介

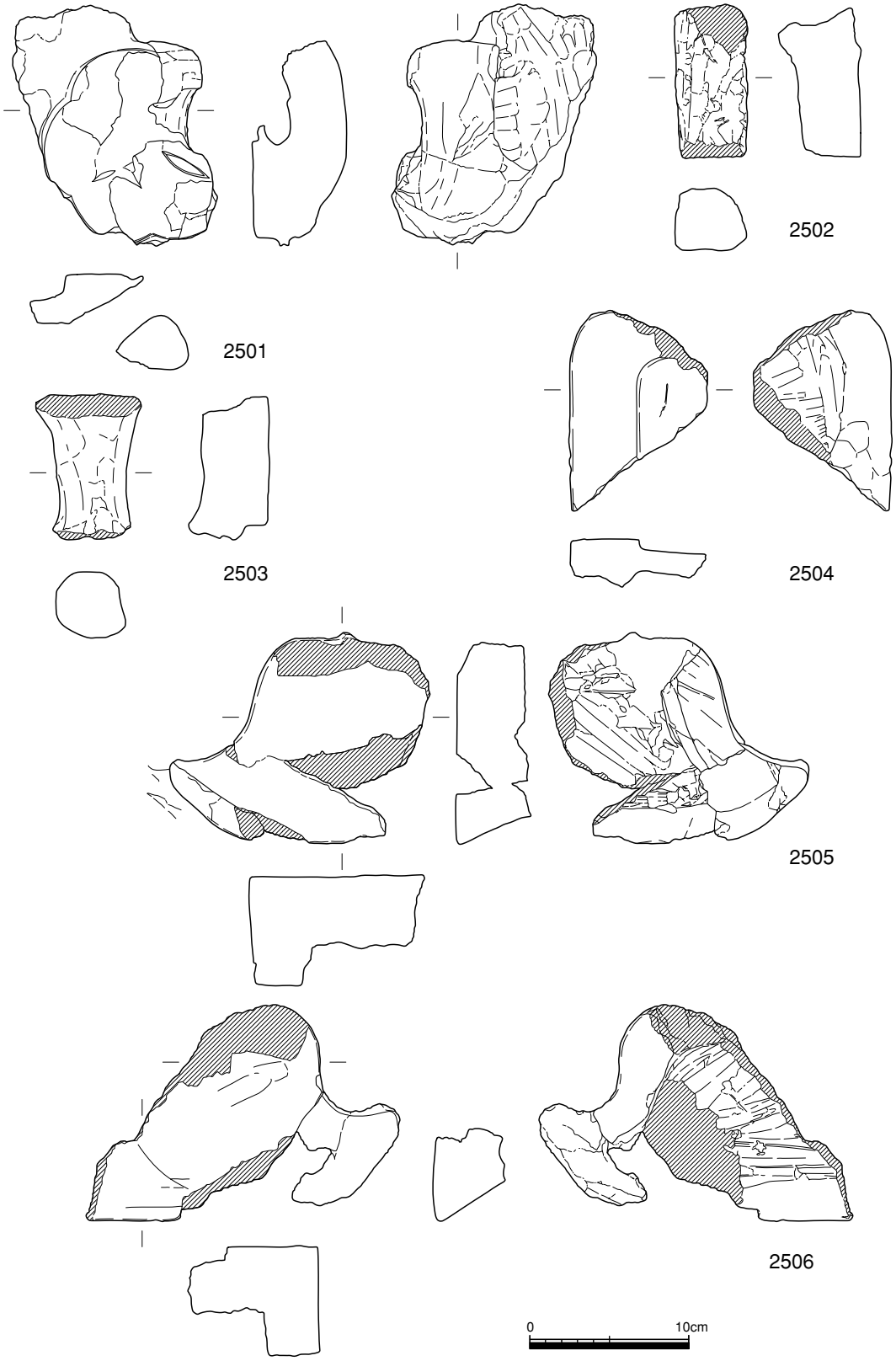
鯱瓦は体部、背鰭部、口部、鼻部、目部などが破片となって出土した。

体部には表面に鱗紋が施されたもの（2516～2519・2527・2528）と、裏面の粗いヘラケズリ調整が残存するもの（2520～2522）が存在する。前者に見られる鱗紋は全てスタンプで馬蹄形の沈線が連続して押印されたもので、鱗を貼り付けたものは存在しない。2527は下端部から尾部中央付近まで残存する資料である。粘土板によって本体が成形され、上部にやや大きな鱗紋が施され、下部に別粘土を貼り付けて口角部が形作られている。尾部には円形の大きな孔が2ケ所存在する。2528も、2527と同様に、下端部から尾部中央付近まで残存する資料である。粘土板によって本体が成形され、上部に小さめの鱗紋が施され、下部に別粘土を少量貼り付けて口角部が形作られている。鯱の後面にも上部は鱗紋、下部は波状の突帯が装飾され、上部には鰭の突起が2個確認される。横断面形はいびつな楕円形を呈すると推測される。

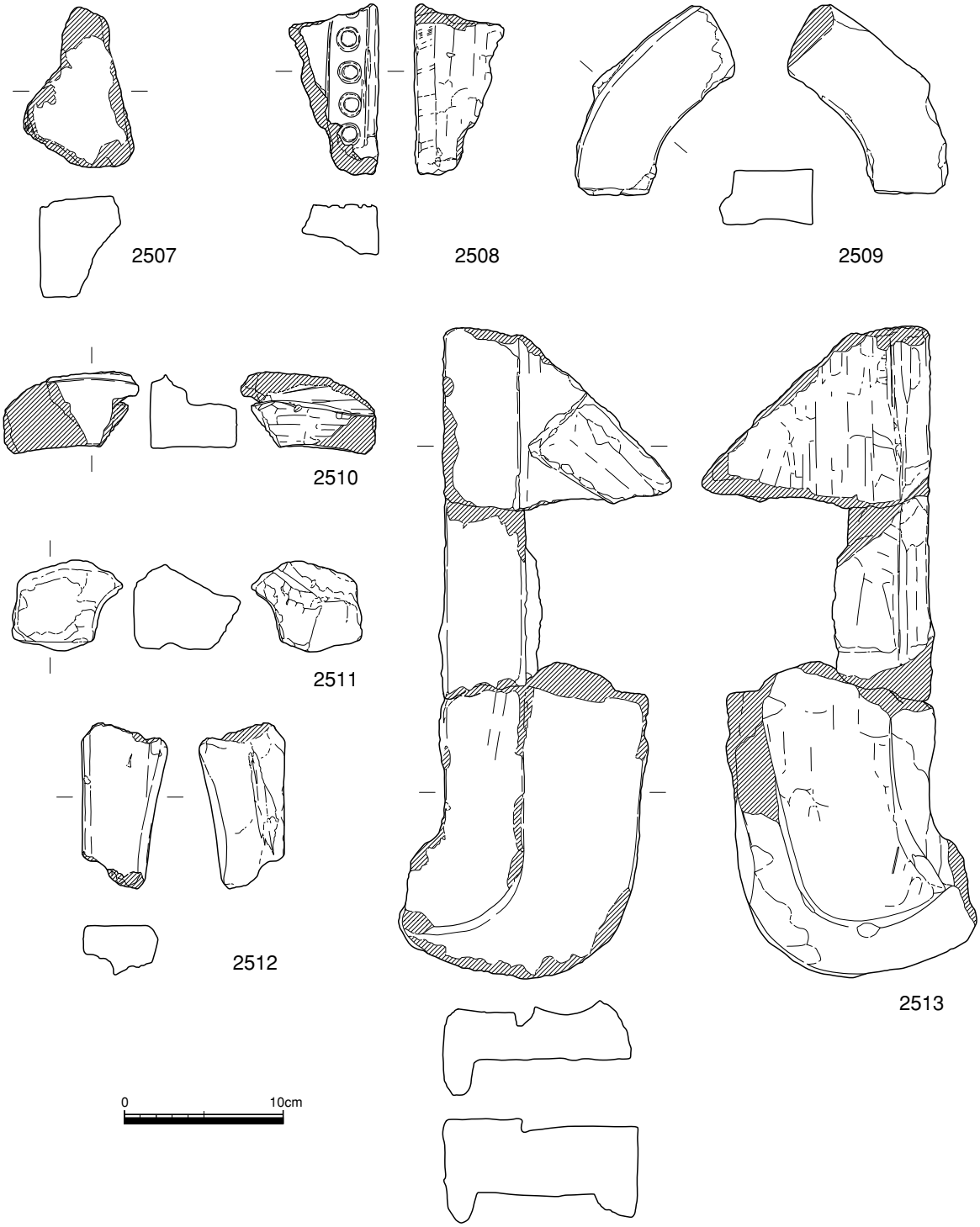
背鰭部が残存するものは2528の他に2526がある。2526は帯状となる背鰭に刻み紋が施されたものである。2524は鯱瓦の口部と思われる資料で、表面は同心円状に造形されている。2525は鯱瓦の鼻部と想定され、下端（鼻頭部？）は蓮弁状の形態で先端が尖っている。2523は鯱瓦の目部と考えられ、貼り付けられた目の輪郭が剥がれたものと推測される。



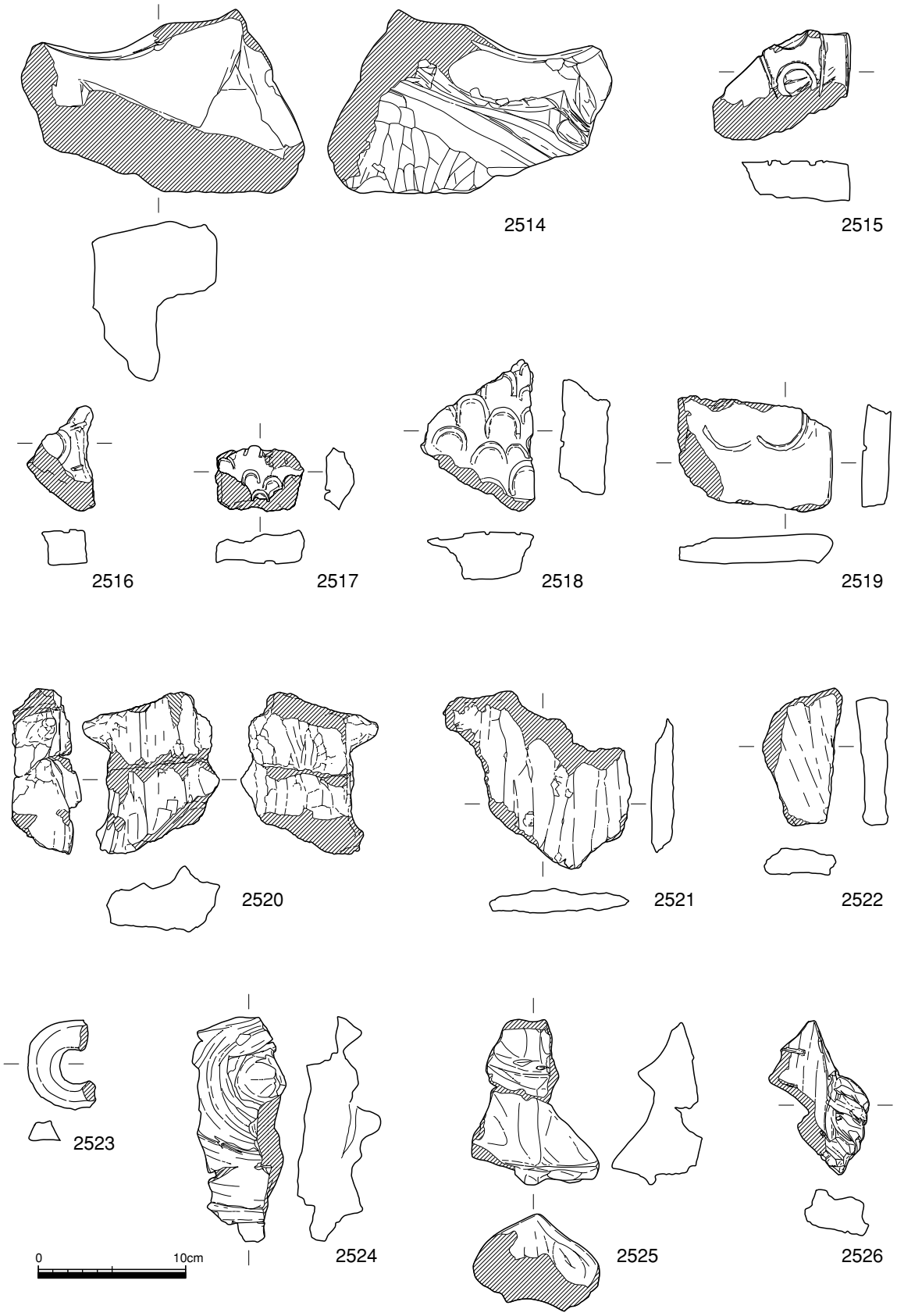
第 162 図　鬼瓦実測図（1）



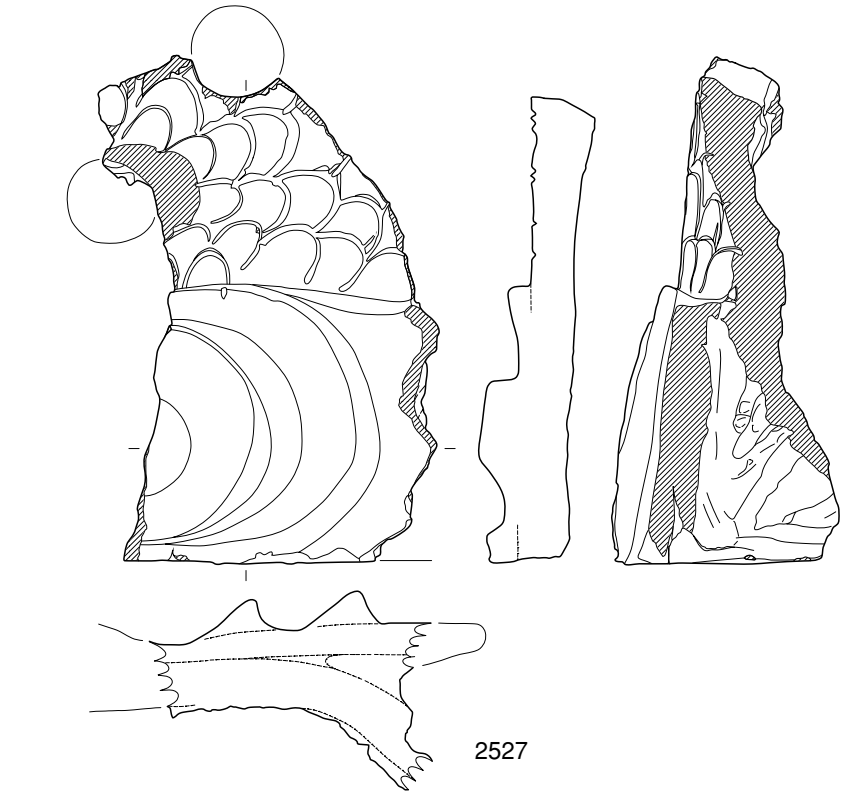
第 163 図　鬼瓦実測図（2）



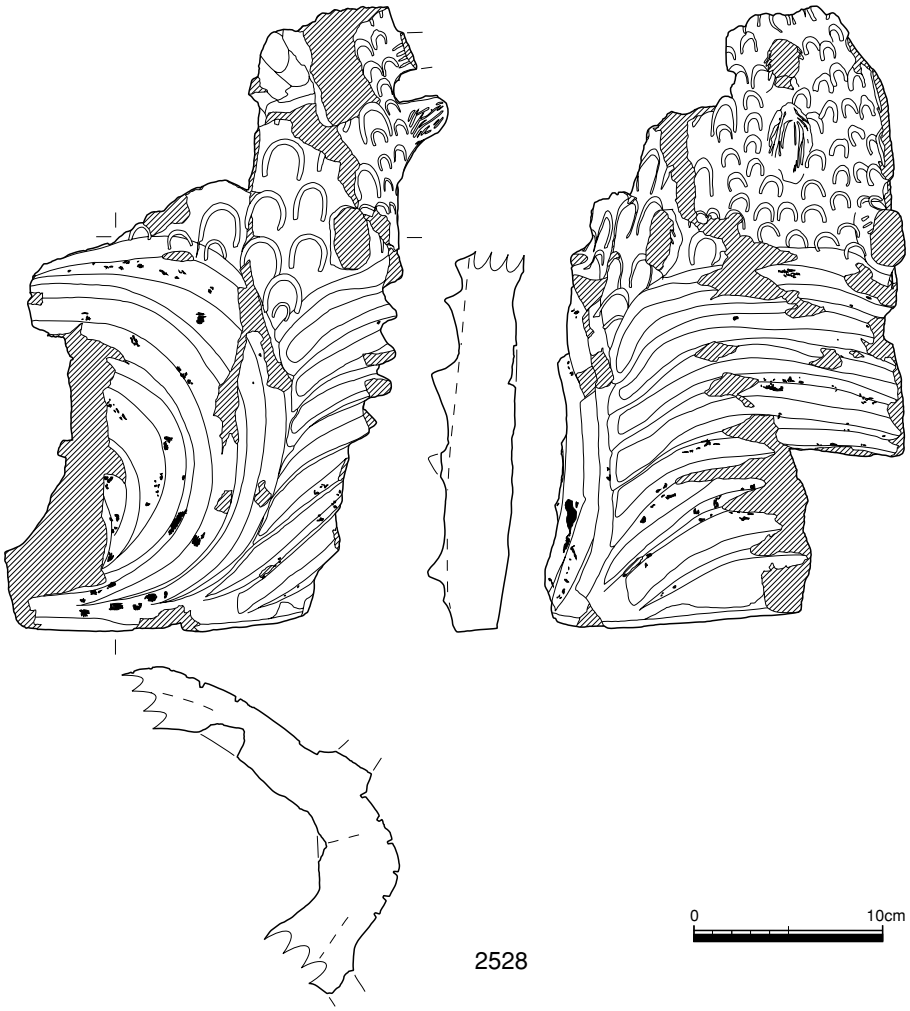
第 164 図　鬼瓦実測図（3）



第 165 図　鯱瓦実測図（1）



2527



2528

第 166 図　鯱瓦実測図（2）

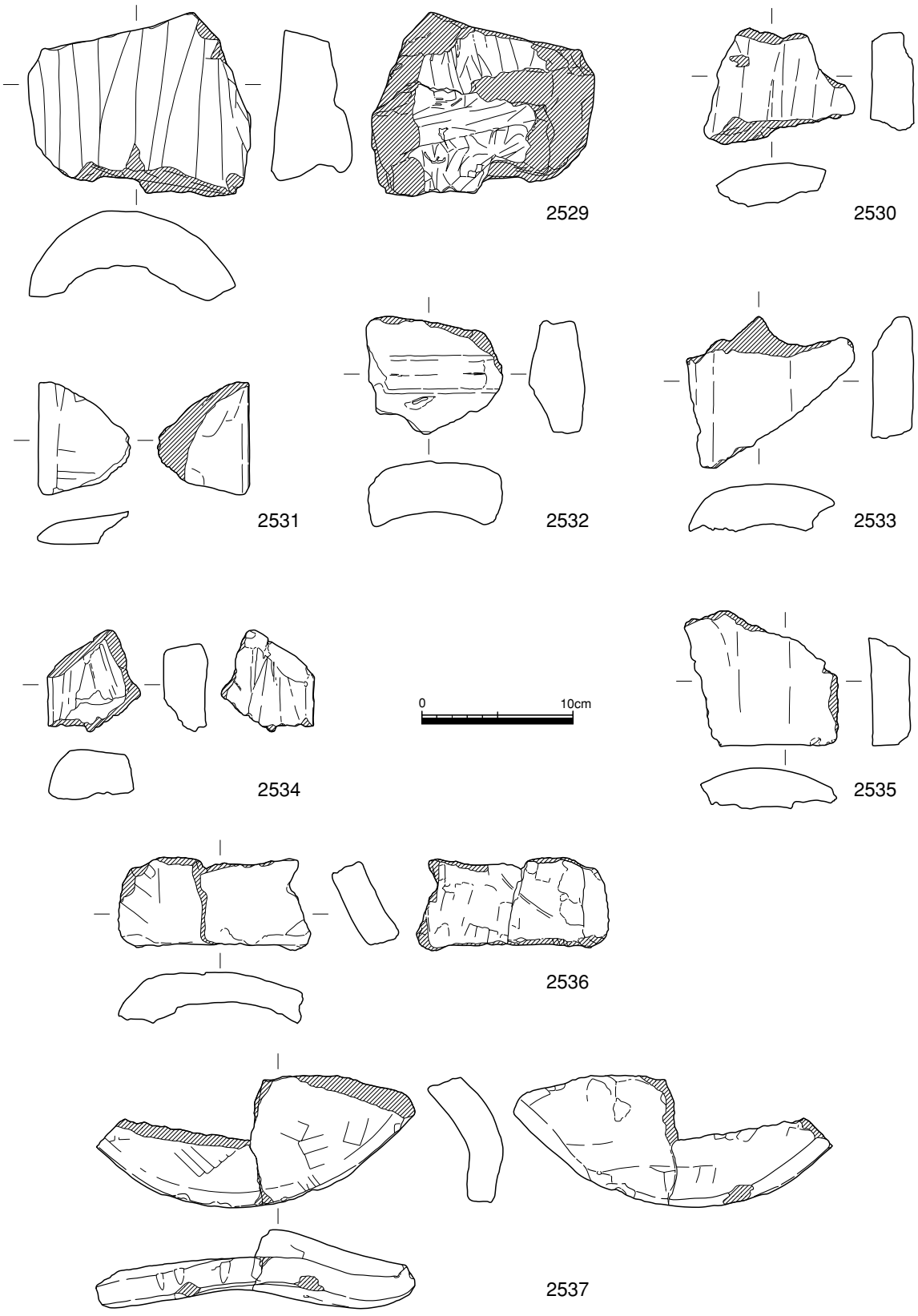
１０　造形瓦類（第 167 図 2529 ～ 2537）

（１）概要

飾瓦、鬼瓦や鯱瓦などと同定できないものを造形瓦類として一括して報告する。これらは、本来は特定の用途で使用された瓦類と考えられるが、現状の小破片では識別できないものである。96区の調査では総数で 33 点（4.2kg）が出土した。

（２）資料紹介

2529～2536は体部の破片と推測されるもので、表面と思われる面にはヘラケズリ調整やミガキ調整などが施されている。2529と2530は縦方向に連続するミガキ（ヘラケズリ）調整によって曲面が形作られたものである。2533と2535はやや幅広い面が緩やかに彎曲しながら展開するものである。2537は外周部が波状に彎曲する平面形が円形と推測される板状瓦で、留蓋瓦と推測できるものである。



第 167 図　造形瓦類実測図（1）

１１　道具瓦（第 168 ～ 179 図 2538 ～ 2601）

（１）概要

道具瓦には輪違い瓦、面戸瓦、伏間瓦や熨斗瓦などがある。ここではこれらの種別に記述を進めていき、これに属さない種類の道具瓦については丸瓦系道具瓦と平瓦系道具瓦に区分して報告する。

（２）輪違い瓦（第 168 ～ 171 図 2529 ～ 2553）

輪違い瓦は棟込瓦の一種で、丸瓦の形態を短く小形にした形状のものである。96区では933点（137kg）が出土しており、これらは大きく５類に分類できるが、個々の資料を見ていくと区分に迷うものが多く存在する。

Ａ　輪違い瓦Ａ類

行基葺丸瓦の形態を短くした形状のものである。製作方法は行基葺丸瓦とほぼ同様で、今回の調査では確実な資料で 132 点、可能性があるものまで含めて計算すると 317 点が出土した。裏面にコビキＡ手法が残存するものとコビキＢ手法が残存するものがある。頭部（斜めにヘラケズリ調整されたソケット状の部分）と胴部の形状から細分が可能である。

（Ａ）輪違い瓦Ａ１類

胴部の長さが頭部の長さよりも長いもの（2538・2539・2541・2542）である。大部分が裏面には吊り紐痕が残存している。

（Ｂ）輪違い瓦Ａ２類

胴部の長さが頭部の長さとほぼ同等のもの（2540）である。2540 の内面にはコビキＡ手法の痕跡が見られる。

（Ｃ）輪違い瓦Ａ３類

胴部と頭部の境界が不明瞭なもの（2543）である。

Ｂ　輪違い瓦Ｂ類

丸瓦胴部のみを切断したような形状のもの（2546 ～ 2548）である。斜めにヘラケズリ調整された頭部を持たず、小口裏面のみに面取りが施されている。製作方法は丸瓦とほぼ同様である。今回の調査では確実な資料で70点、可能性があるものまで含めて計算すると 115 点が出土した。

Ｃ　輪違い瓦Ｃ類

平面形が六角形状になるものである。裏側面のヘラケズリ調整の範囲が広いものである。今回の調査では確実な資料で 185 点が出土した。頭部と尻部の裏面のヘラケズリ調整の形状から２類に細分ができる。

（Ａ）　輪違い瓦Ｃ１類

裏側面で頭部と尻部の裏面ヘラケズリ調整がほぼ接するものである。

（Ｂ）　輪違い瓦Ｃ２類

頭部と尻部の裏面ヘラケズリ調整が離れており、胴部をなすもの（2549 ～ 2552）である。大部分の輪違い瓦Ｃ類はこれに属する。

Ｄ　輪違い瓦Ｄ類

『清洲城下町遺跡Ⅶ』では上記の区分に合致しないものを輪違い瓦Ｄ類としたが、本稿では平面形が平行四辺形状になるもの（2544・2545）を輪違い瓦Ｄ類と分類する。丸瓦胴部のみを斜に平行な形で切断したような形状となる。左側に傾斜するもの（2544）と右側に傾斜するもの（2545）がある。

（３）面戸瓦（第 172・173 図 2554 ～ 2562）

面戸瓦は瓦を葺いた場合に地葺瓦（平瓦）と棟瓦の間にできる隙間を埋める瓦の総称である。96区の資料では174点（19.1kg）が出土しており、全て蟹面戸瓦である。この他に2562のような変形の板状瓦が一点のみ存在し、これも面戸瓦としてここでは考えておくこととしたい。

Ａ　縦断面による分類

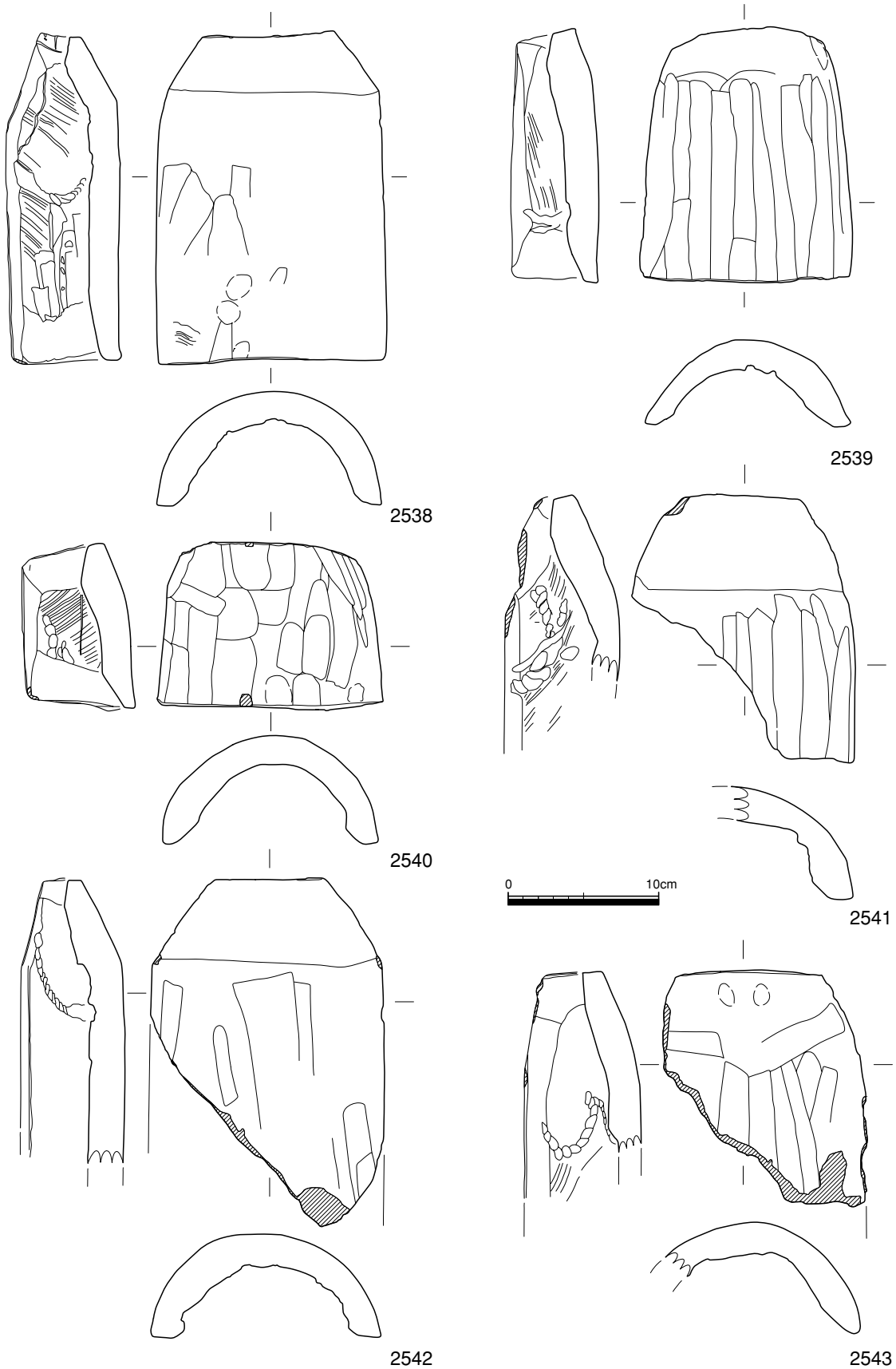
蟹面戸瓦は大棟下部に用いられる瓦で、ここでは縦断面の形状から大きく２類に区分できる。

（Ａ）蟹面戸瓦Ａ類

蟹面戸瓦のうち、頭の断面形が１回屈曲するもの（2554 ～ 2557・2559 ～ 2561）である。このＡ類には頭部の端面は斜めになるもの（2554 ～ 2557・2559）と水平になるもの（2560・2561）がある

（Ｂ）蟹面戸瓦Ｂ類

蟹面戸瓦のうち、頭の断面形が２回屈曲するもの



第 168 図　輪違い瓦実測図（1）

（2558）である。

B　裏面調整痕による分類

蟹面戸瓦は表面はヘラケズリ調整などを施して滑らかな面を形成するが、裏面は屋根に貼り込み易いように櫛目を入れている場合が多い。この櫛目の形状からも細分が可能である。

（A）蟹面戸瓦１類

裏面に櫛目を全く持たないもの（2554・2557・2558）である。

（B）蟹面戸瓦２類

裏面に4～10本を1単位とする櫛目が斜めに1回施されるものである。

（C）蟹面戸瓦３類

裏面に4～10本を1単位とする櫛目が「×」字形（2回）に施されるもの（2555・2556・2559）である。

（D）蟹面戸瓦４類

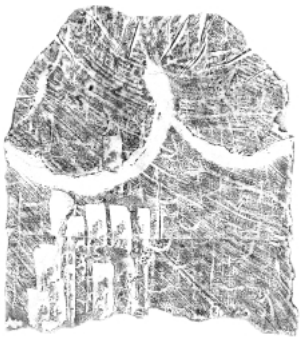
裏面に4～10本を1単位とする櫛目が3回以上施されるものである。

（E）蟹面戸瓦５類

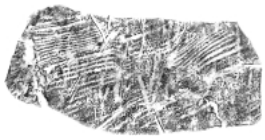
裏面に4～10本を1単位とする櫛目が外周囲に並行する形で巡るもの（2560・2561）で、多くは内側にも櫛目が認められる。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では確認されなかったタイプである。

（4）伏間瓦（第179図2601）

伏間瓦は最上段の両側の熨斗瓦の上に伏せる瓦を指し、雁振瓦とも呼ばれる。96区の資料では49点（18.83kg）が出土しており、横断面が「く」字状に彎曲した形状のもののみが確認された。表面（凸面）は丁寧なヘラケズリ調整が施されるのに対し、裏面（凹面）にはコビキA手法の痕跡が明瞭に残存しているものである。ここでは、この凹面にコビキA手法が明瞭に残存する特徴を持つ小破片も、平瓦とは別に伏間瓦として分類した。2601は頭部に玉縁を持ち、尻部の裏面には玉縁部が重なりあうために部分的に削り取られている。

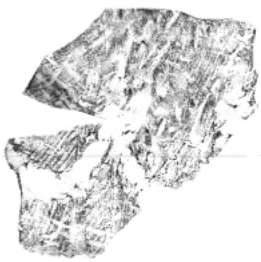

2538


2539

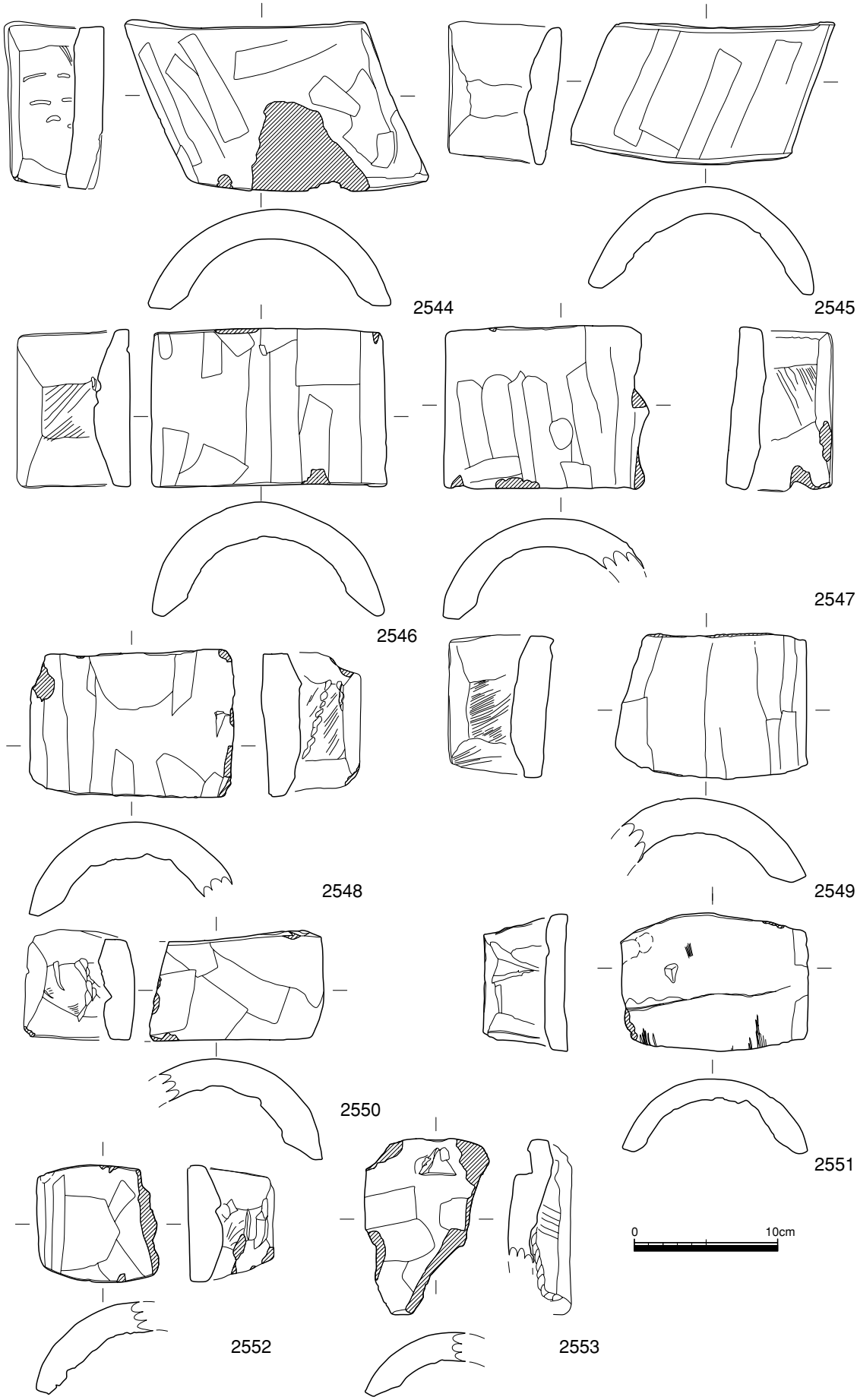

2540


2541


2542


2543

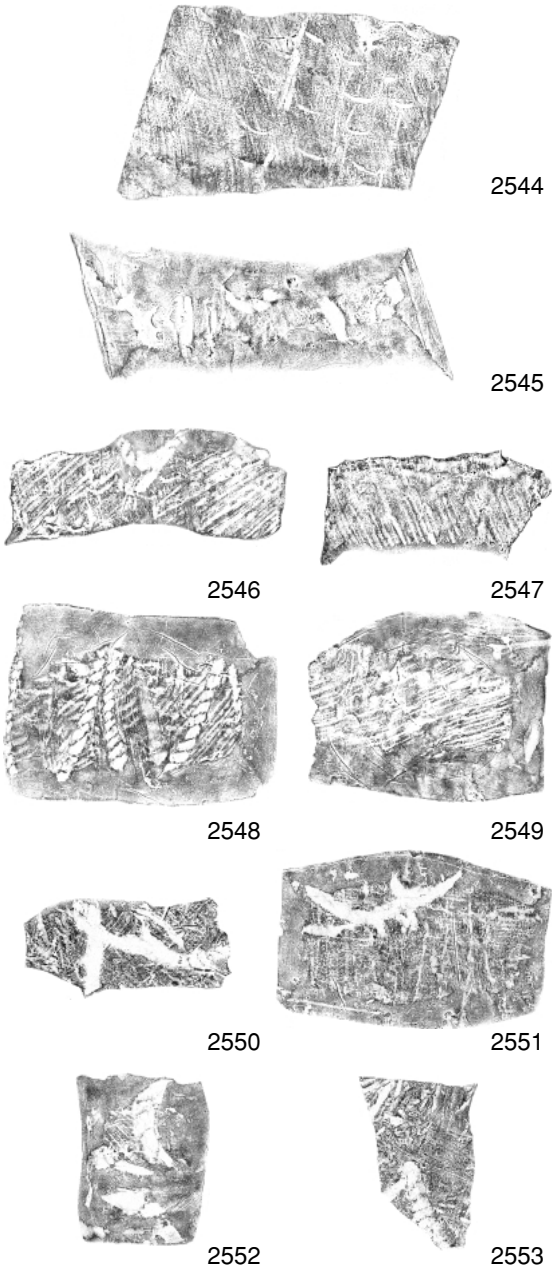
第169図　輪違い瓦実測図（2）



第 170 図　輪違い瓦実測図（3）

（５）熨斗瓦（第 178 図 2592 ～ 2596）

熨斗瓦は棟込瓦の一種で平瓦を半分に半裁した形状を呈する。したがって、大部分の資料では平瓦との識別は非常に困難である。今回の資料では 12 点（4.28kg）が確認された。側面の形態は、一方が平瓦と全く同じように垂直切りで面取りが施される場合が多いのに対して、もう一方の側面はヘラケズリ調整がスムーズではないもの（2593）が多い。おそらく平瓦が半乾燥の状態の時に熨斗瓦として切断されたものと推測される。この他に横断面形が台形に近いもの（2594）や平行四辺形に近いもの（2595・2596）なども存在する。2471 は側面に金箔が押された瓦で、熨斗瓦である可能性が考えられる。



第 171 図　輪違い瓦実測図（4）

（６）丸瓦系道具瓦（第 174・175 図 2563 ～ 2575）

丸瓦の形状をベースにした様々な形態の瓦を丸瓦系道具瓦として一括する。『清洲城下町遺跡Ⅶ』では小口面に着目して暫定的な分類を試みたが、ここでは全体の形状から分類を試みる。

A　丸瓦系道具瓦１類

丸瓦の玉縁部付近と胴部の２ケ所を斜めに平行に切断されたもの（2563 ～ 2565・2569）である。裏面の調整痕などは通常の丸瓦とほぼ同じ痕跡が残されており、丸瓦を作成した後に切断されて製作されたものと推測される。

B　丸瓦系道具瓦２類

丸瓦の胴部を斜めに切断し粘土板で仕切りを設けたいわゆる谷丸瓦と呼ばれるもの（2566）である。

C　丸瓦系道具瓦３類

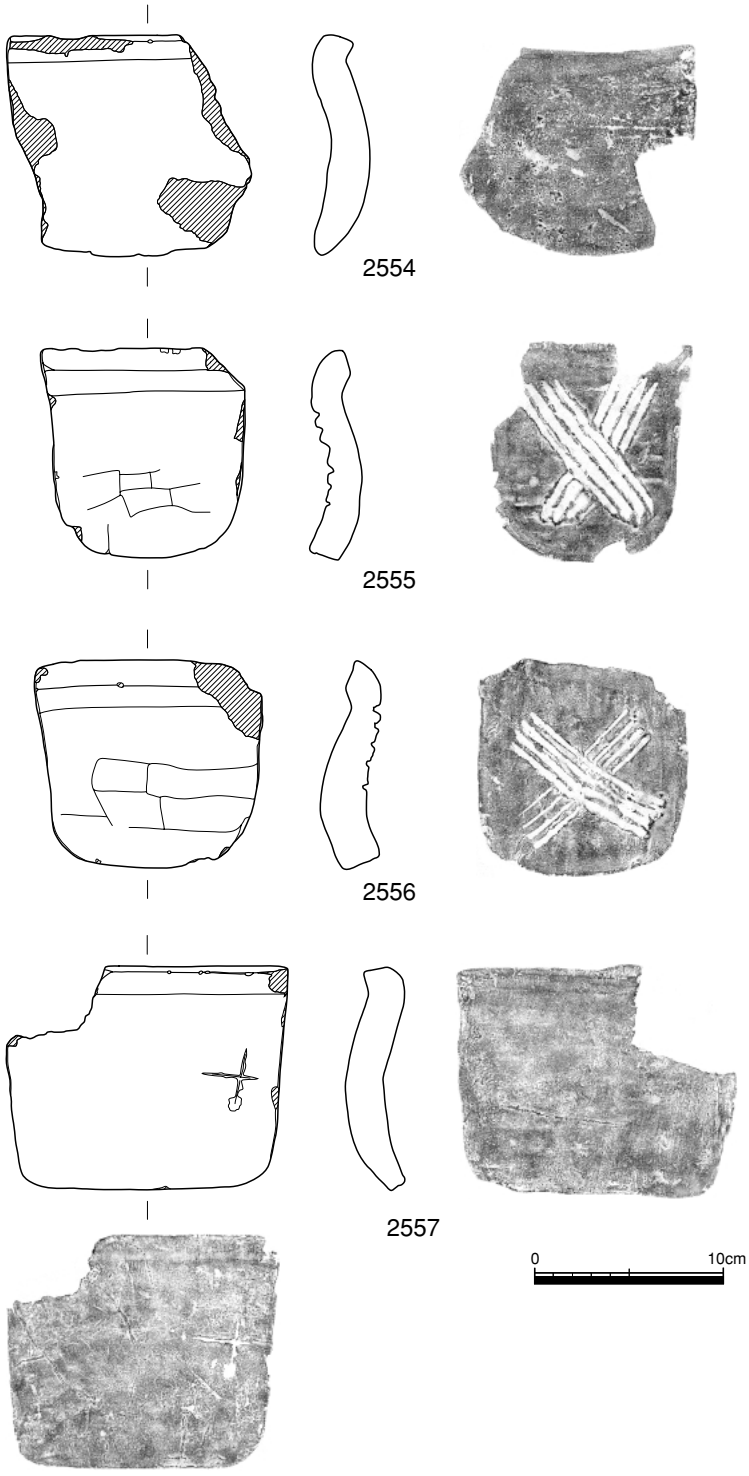
丸瓦の胴部の裏側を半円筒形にくり抜いたもの（2567）である。くり抜かれた部分は曲面を持ち、その部分に別の丸瓦が嵌るように作られたものと考えられる。

D　丸瓦系道具瓦４類

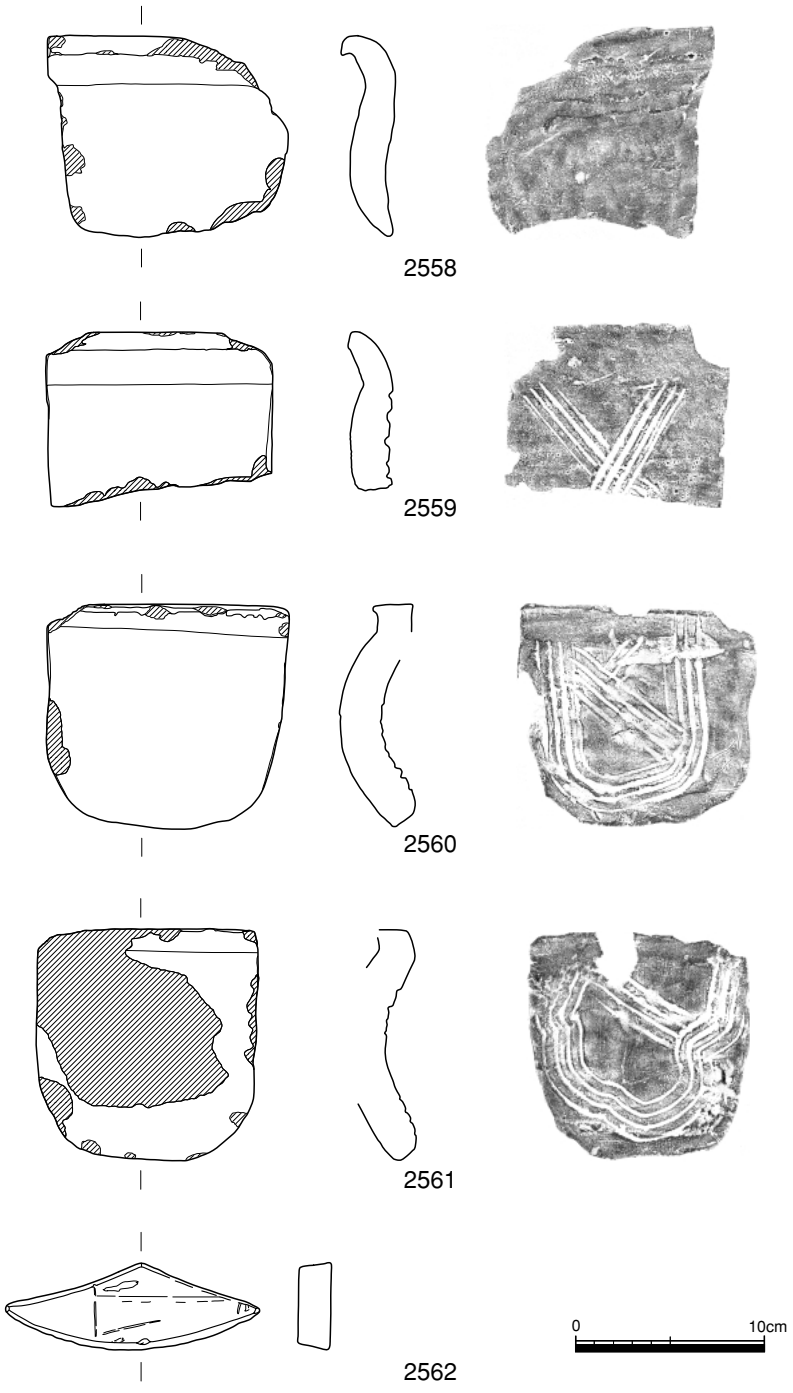
丸瓦の胴部が短く寸断されたもの（2568・2572）である。

E　丸瓦系道具瓦５類

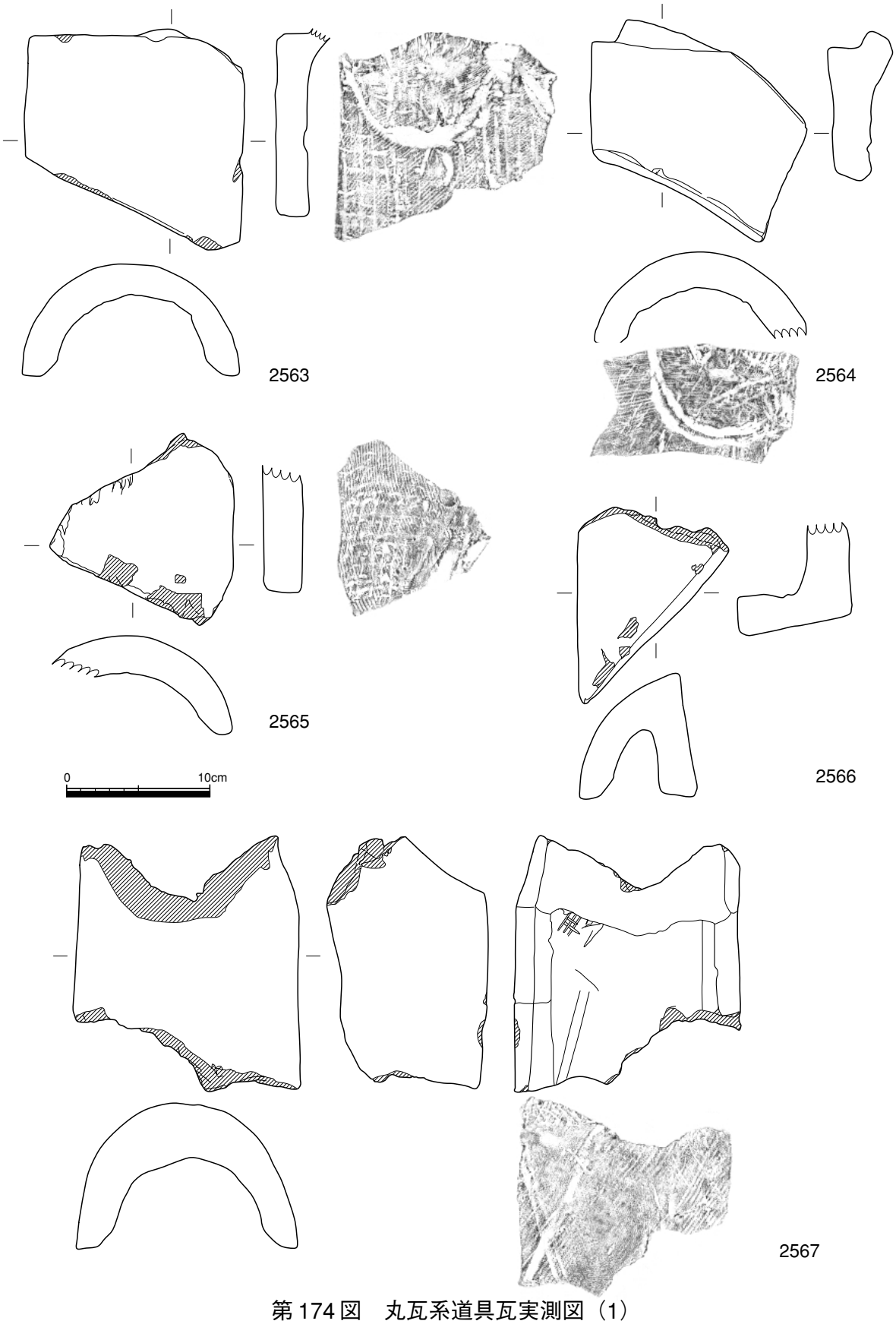
丸瓦系道具瓦4類と同様に丸瓦の胴部が寸断され、かつ玉縁部と尻小口部が平面円弧状に削り取られたもの（2571）である。



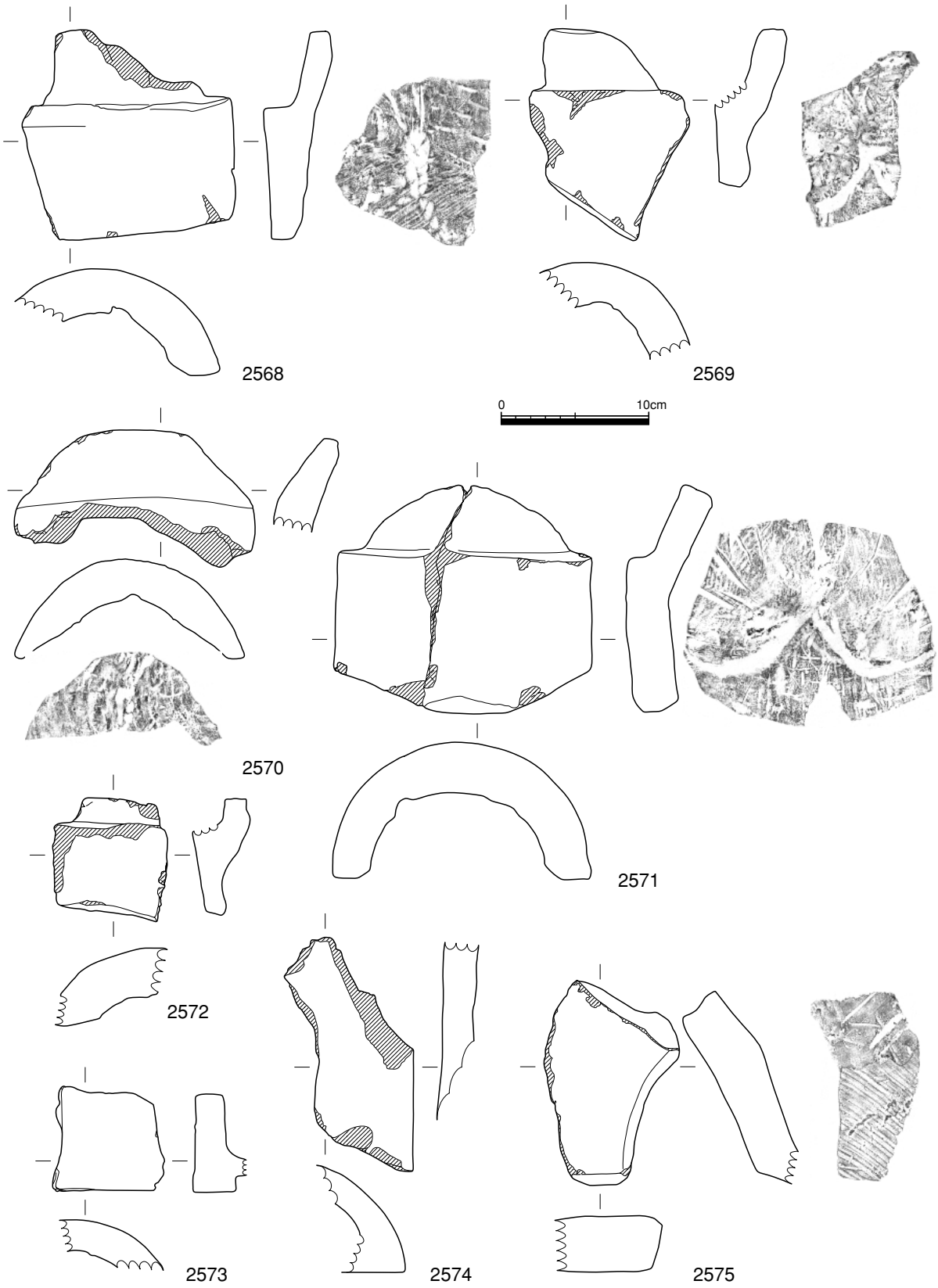
第 172 図　面戸瓦実測図（1）



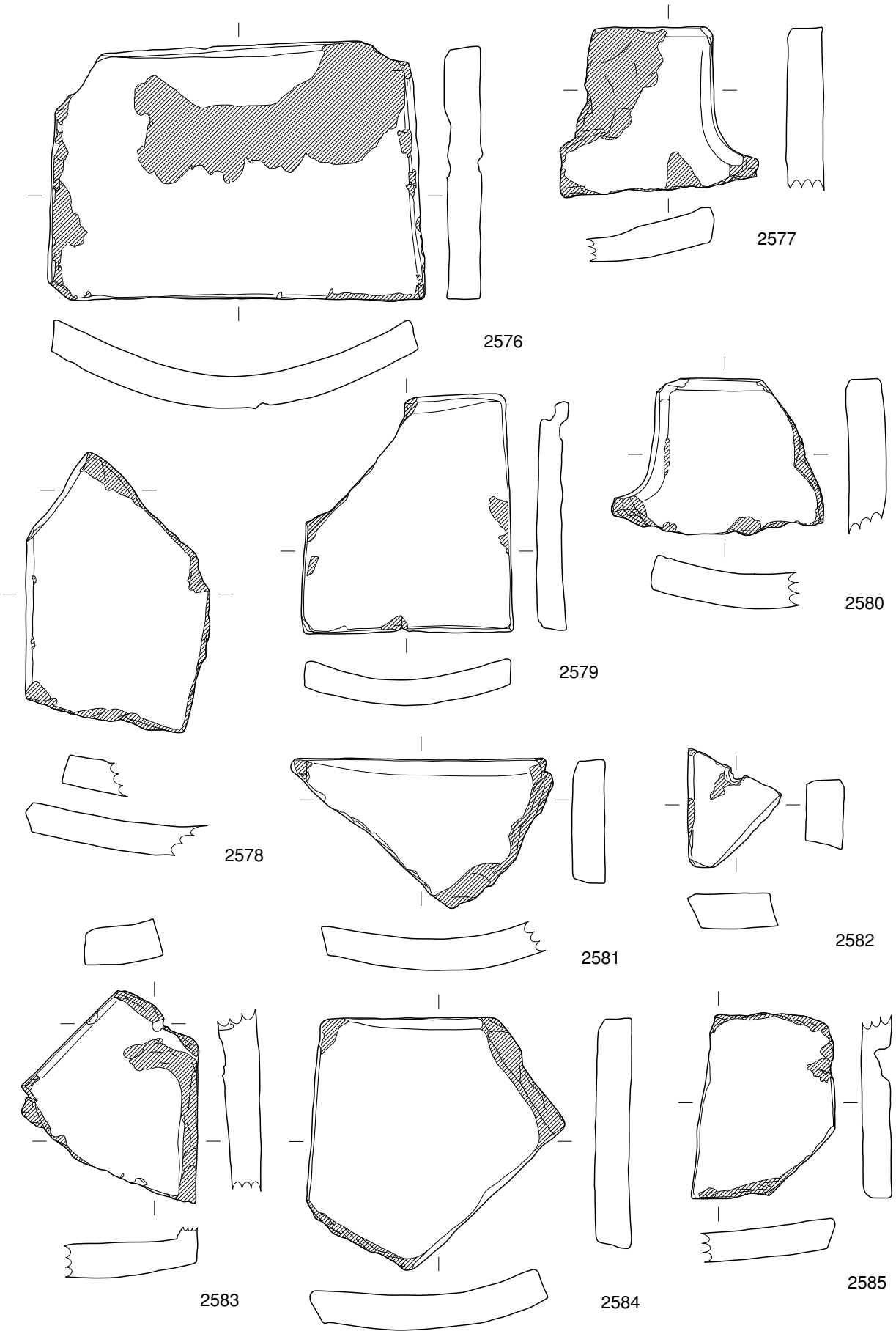
第 173 図　面戸瓦実測図（2）



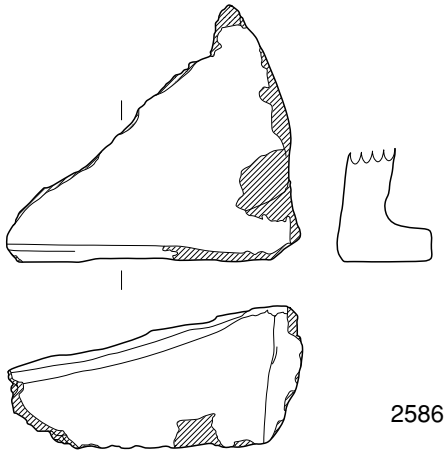
第 174 図　丸瓦系道具瓦実測図（1）



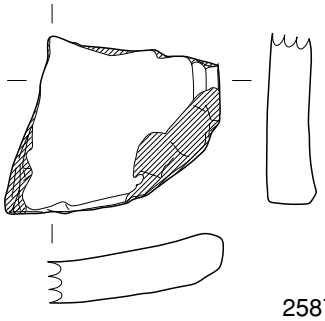
第 175 図　丸瓦系道具瓦実測図（2）



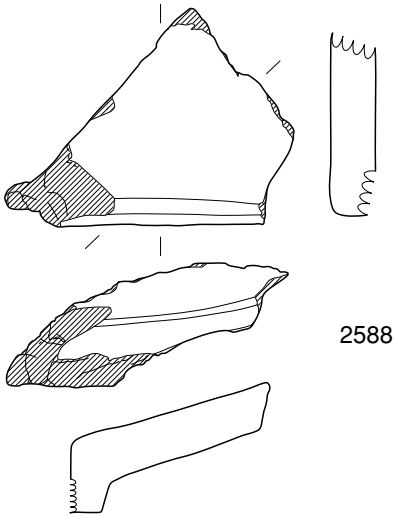
第 176 図　平瓦系道具瓦実測図（1）



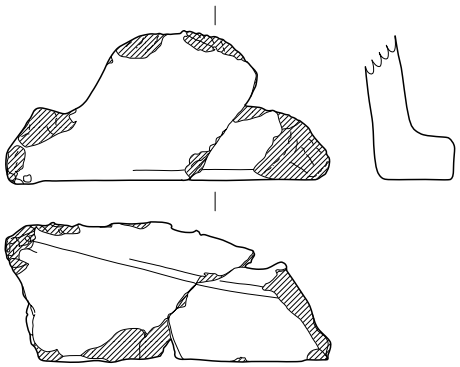
2586



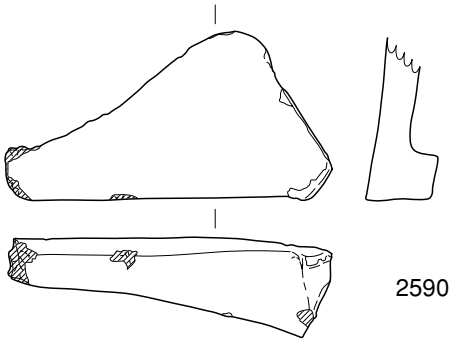
2587



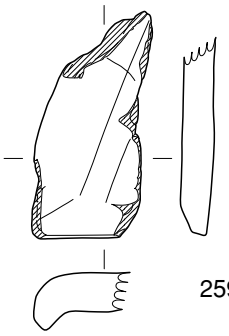
2588



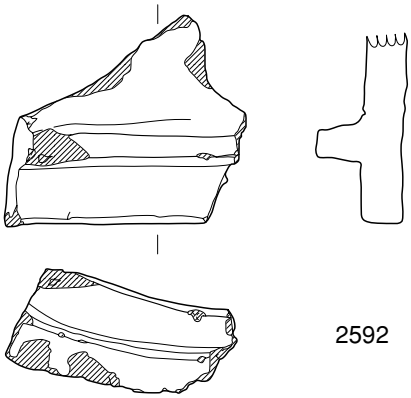
2589



2590

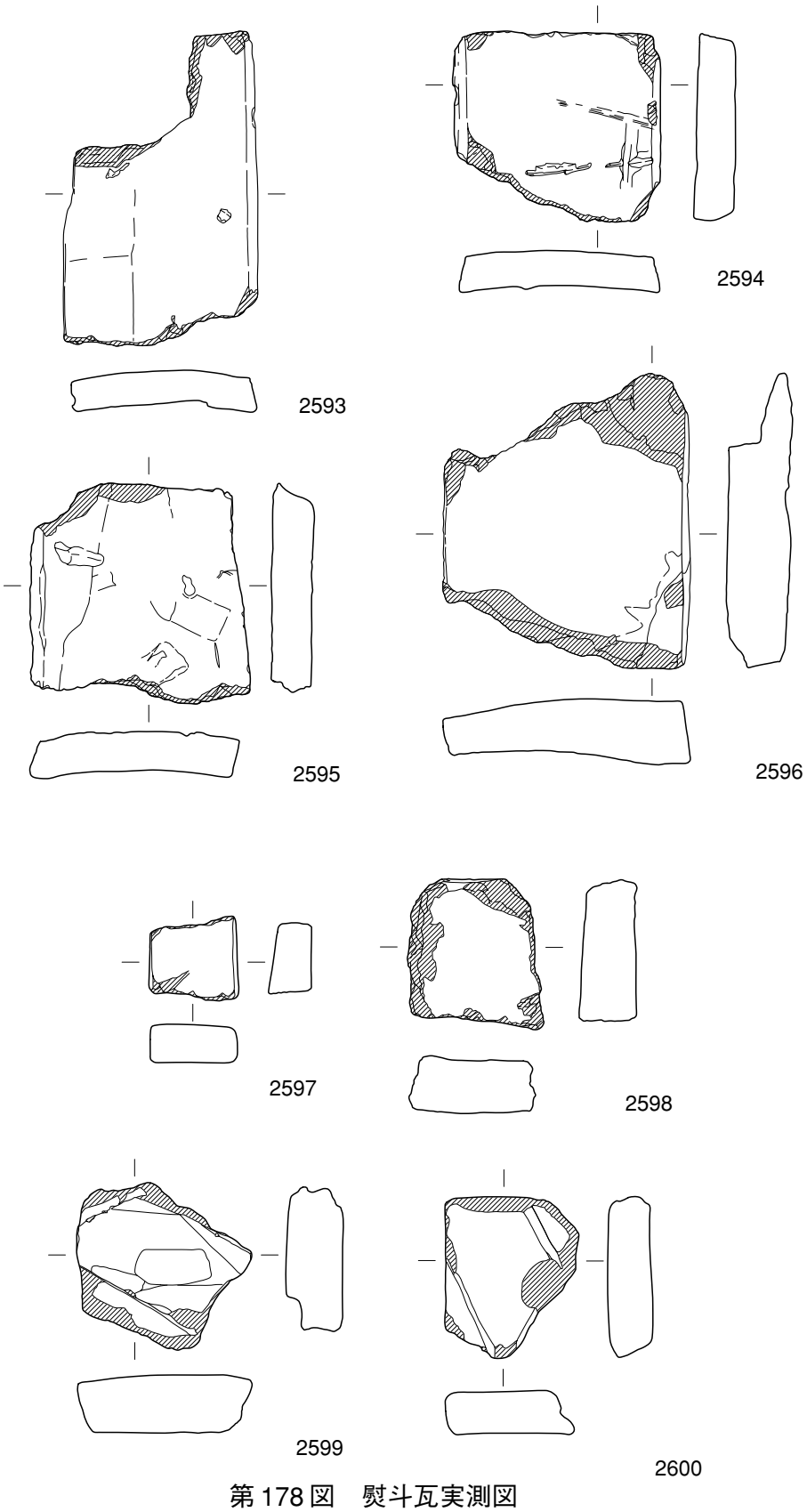


2591



2592

第 177 図　平瓦系道具瓦実測図（2）



第 178 図　熨斗瓦実測図

（７）平瓦系道具瓦（第 176・177 図 2576 ～ 2592）

平瓦の形状をベースにした様々な形態の瓦を平瓦系道具瓦として一括する。全体の形状が判明する資料は非常に少なく、このタイプの分類は難しい。ここでは『清洲城下町遺跡Ⅶ』と同様に、隅角部の加工に着目して分類した。

Ａ　平瓦系道具瓦Ａ類

隅角部を円弧状に内側に抉るもの（2577・2580）である。

Ｂ　平瓦系道具瓦Ｂ類

隅角部を直線状に角取りしたもの（2578）である。

Ｃ　平瓦系道具瓦Ｃ類

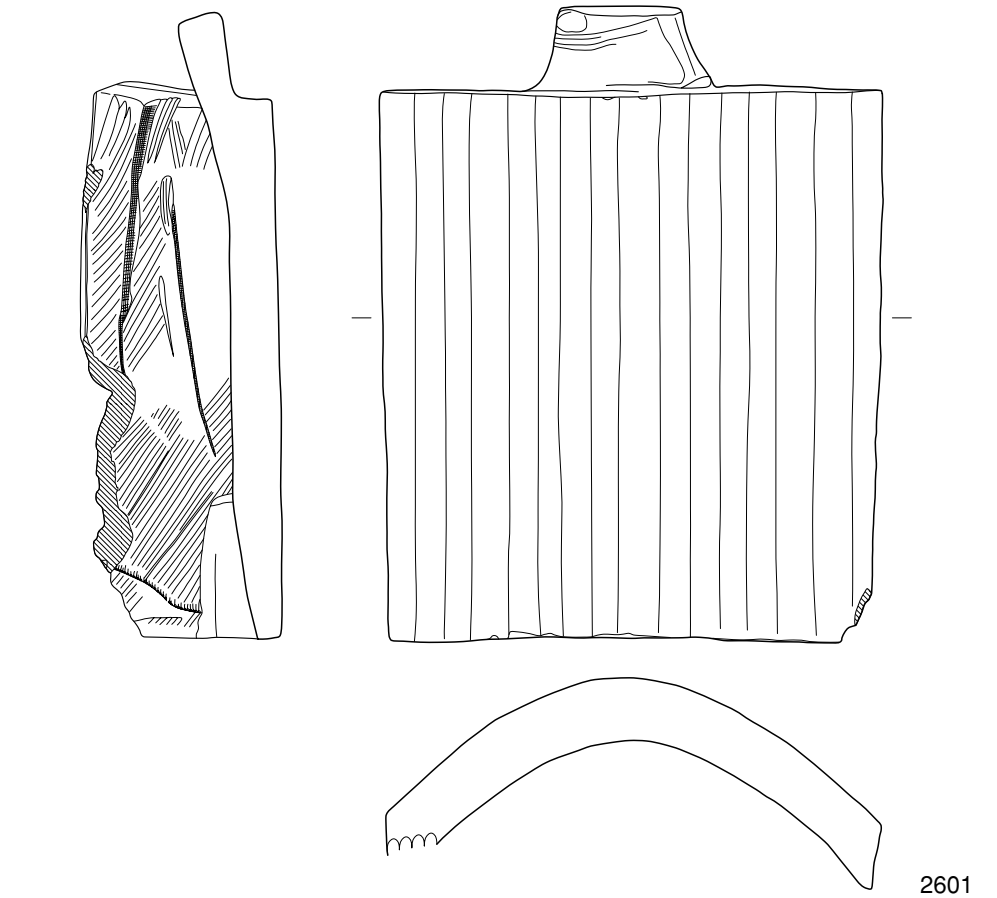
隅角部が鋭角に屈曲するもの（2581 ～ 2584）である。2583 は鋭角となる隅角部に近い部分が穿孔され、一方の側部に水返しの付着した痕跡が残存する。

Ｄ　平瓦系道具瓦Ｄ類

平瓦の小口面をＬ字に屈曲させた形状のもの（2586・2589・2590）を新たに平瓦系道具瓦Ｄ類としておく。

１２　文字瓦（第 179 図 2602 ～ 2605）

文字瓦には刻書で記されたもの（2602・2603）と墨書で記されたもの（2604・2605）がある。全て平瓦に記されたもので、刻書は凹面に、墨書は凸面に記されていた。



第 179 図　伏間瓦・文字瓦実測図

（Ⅳ）　木製品

1　概要と分類の方法

今回の発掘調査から出土した木製品は、木胎漆器類や曲物桶や結桶などの容器、折敷や箸などの供膳具、下駄やへらなどの生活道具類、屋根板や杭や石垣の土台木などの土木建築部材、木簡などの多種多様なものが認められる。これらの遺物が出土する地点は、滞水状況を呈する特別な環境の遺構埋土中かあるいは自然流路の堆積物中などに限られており、全ての調査区で良好な状態で出土しているわけではない。ここで報告の対象となる調査区で木製品が多量に出土しているのは、96区とその下層の97Ｃ区および97Ｂ区の旧五条川に近接する調査区であり、99Ａ区や99Ｂ区でもわずかに木製品が出土している。出土した地点や遺構が極めて限定されていることから、木製品の報告は調査区別、遺構別に一括出土資料として報告することとしたい。ただし、96区とその下層の97Ｃ区で確認された石垣の基礎構造となる土台木や杭については、内容が特殊であることなどから特別に別項目を立てて記述していきたい。

なお、木胎漆器類の器種分類の名称は筆者の論考（鈴木1992）に依拠して、高台が高い椀を椀Ａ類、高台の低い椀を椀Ｂ類と呼ぶこととする。なお、漆器の漆膜分析は本書第Ⅳ章（Ⅱ）を参考にされたい。また、樹種については本書第Ⅳ章（Ⅰ）を参考にされたい。

2　木製品の資料紹介

（1）96区

Ａ　96区SX01出土木製品（第180図2606～2617）

96区SX01から出土した木製品には、木胎漆器類、下駄、羽子板、へら状木製品、折敷、建築部材などがある。木胎漆器椀Ａ類（2606・2607）は高台裏の削り込みが浅いもので、2607には鶴紋が描かれている。2608と2609は木胎漆器椀Ｂで、2610は高台裏を除く内外面に赤色漆が塗布されたものである。

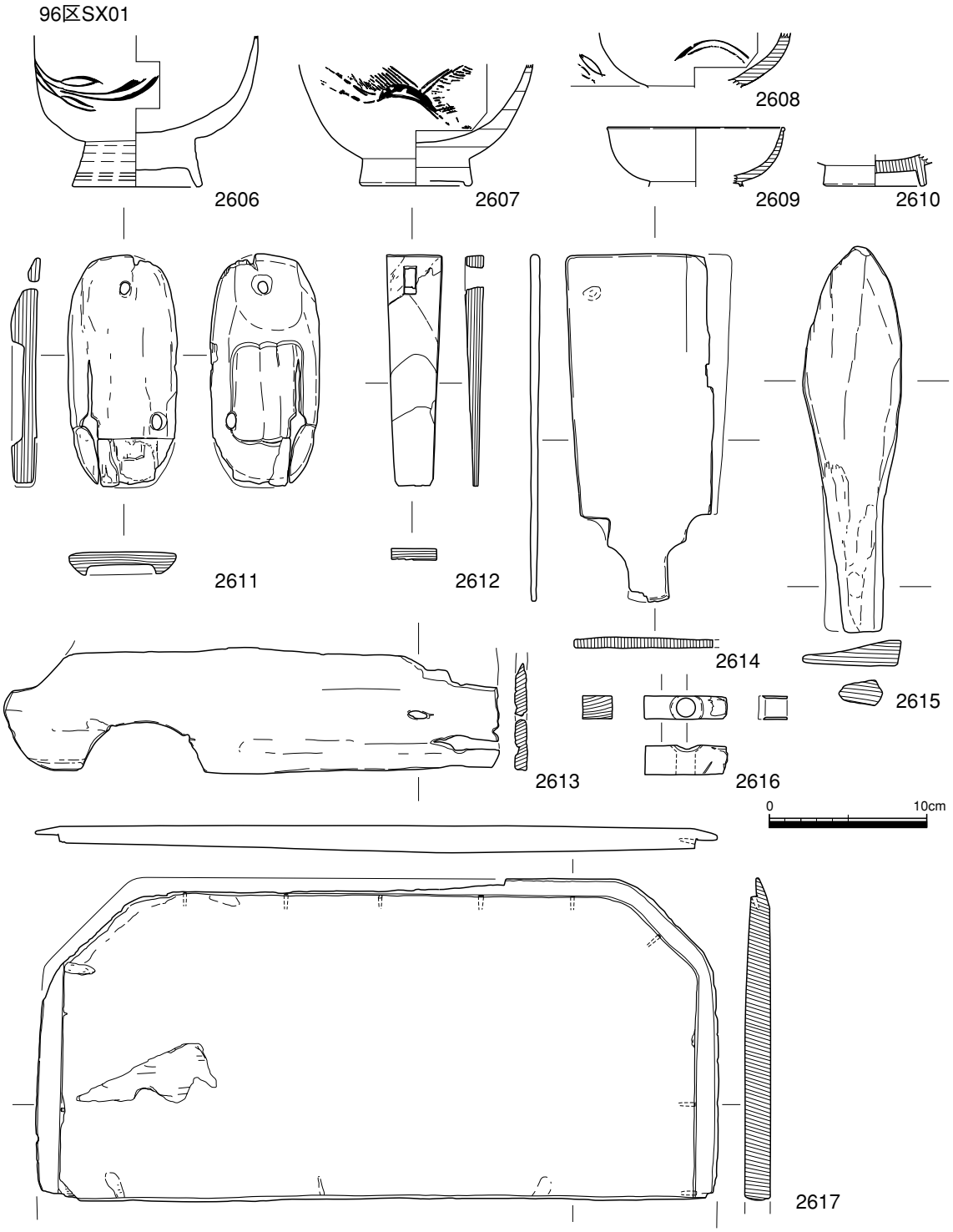
2611は一木作りの下駄で、下面中央部を平面方形状に抉り取って外周部を歯に作った製品である。2614はやや薄手の羽子板状木製品、2615は刃物状に刃部の一部を薄くしたへら状木製品である。2617は外周部に段差を持つ折敷で、平面形は方形の角を斜めに切断した不定八角形を呈している。段差の側面に側板を接続するための穴が多数認められる。

Ｂ　96区トレンチ出土木製品（第181図2618～2638）

96区では石垣などの城下町期Ⅲ期の遺構の下層から城下町期Ⅰ期からⅡ期の遺構や包含層が確認されている。こうした下面の遺構から出土した資料は97C区出土木製品として後述するが、96区の調査の段階で層位などを確認するために事前にトレンチを掘削しており、この際に出土した木製品をここでは報告したい。こうした理由は、97C区のように層位を厳密に区分していないために、97C区に合わせて報告することができなかったためである。

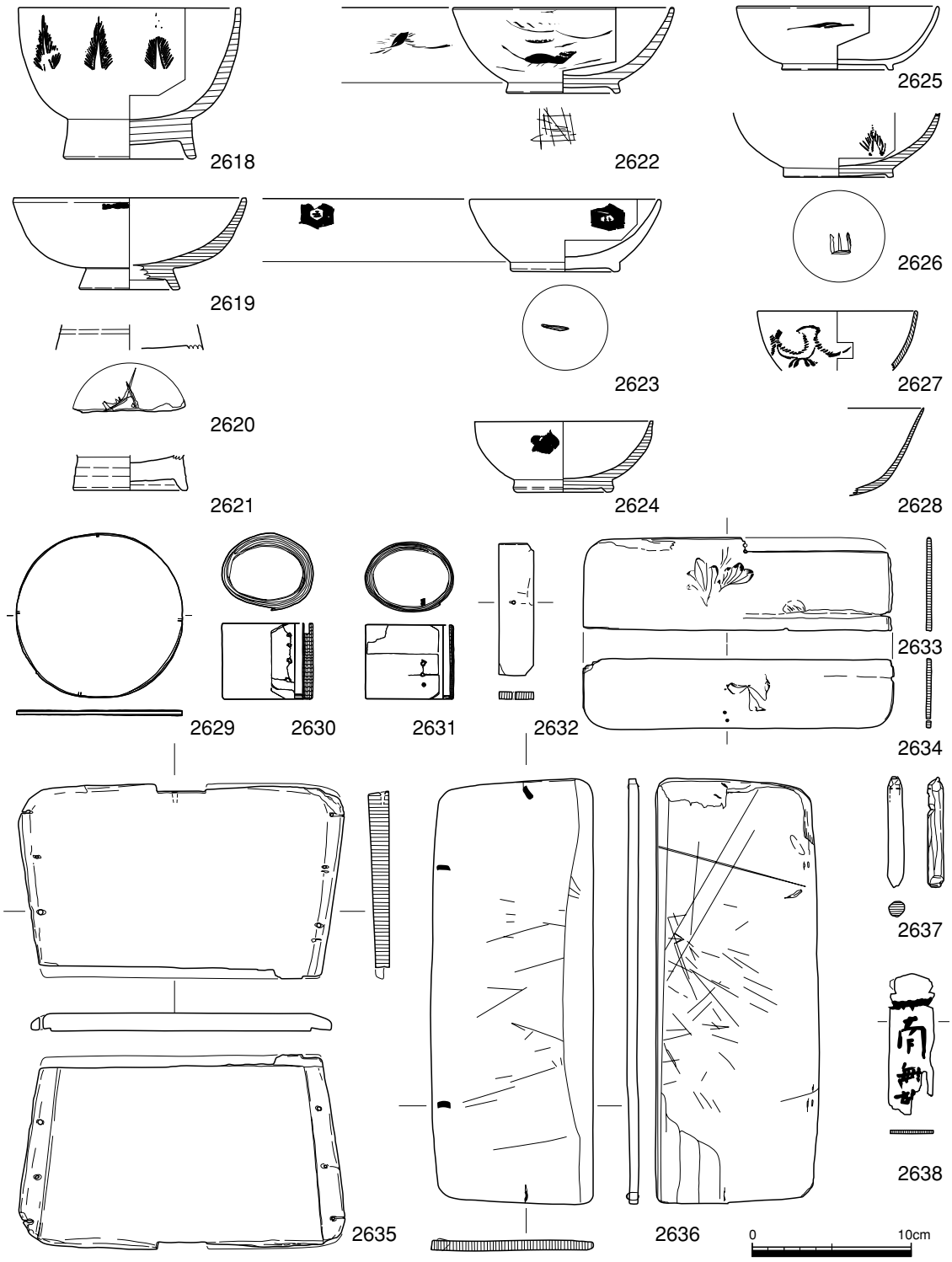
2618～2628は木胎漆器椀で、2618～2621はＡ類、2622～2626はＢ類に属する。2618と2626には杉の木状の植物紋が描かれており、両者は椀Ａ類と椀Ｂ類としてセットになっていた可能性を考えることができる。2623には亀甲紋、2622には鶴紋と亀紋が対になって描かれている。2627は小振りの椀で鶴類似紋？が施されている。木胎漆器の高台裏には漆を塗布した後に刻み込まれた傷がいくつかに見られる（2620・2622・2623・2626）。2623は一文字状に、2626は「ヨ」字状に、2622には多数の傷がランダムに施されていた。

2629は曲物桶底板で両端部に竹釘穴が認められるものである。一方、2630と2631は薄板を三重以上に巻いた小形の曲物桶側板で、底板は残存しない。2632は小形の箱物の部材と考えられ中央が穿孔されている。2633・2634・2636は折敷底板で、2636には



第 180 図　木製品実測図（1）

96区トレンチなど



第 181 図　木製品実測図（2）

側板を上位に接合させるための桜皮が残存していた。また、2633・2634には表面に墨書の絵画（草花紋）が描かれており、両者をここでは別材として実測したが同一個体である可能性も残される資料である。

2637は箸状の細長い棒材を利用して作られた形代（人形）で、顔部が削り出されている。2638は卒塔婆または柿経で、頭部は五輪塔状に作られていた。表面に「南無妙」と記され、その上に横線が墨書されている。

（２）97B 区

A　97B区NR01出土木製品（第182図2639 ～ 2641）

97B 区 NR01 から出土した木製品には、下駄、円板状木製品、折敷などが存在する。2639 は露卯差歯下駄で後ろの差歯が欠損して遺存しない。2640 は板の厚さが比較的厚い円板状の木製品で中央部に小孔が穿たれている。2641 は折敷底板の断片と考えられる遺物で板材の隅角部が鈍角に切り取られている。

B　97B区NR02灰色粘土層出土木製品（第 182 図 2642 ～ 2650）

97B区NR02灰色粘土層から出土した木製品には、木胎漆器類、折敷、箱物などが存在する。

2642 ～ 2646 は木胎漆器椀である。2642・2643・2645・2646は外面が黒色漆の上に赤色漆で紋様を描き、内面は赤色漆が塗布されたものである。2642は椀Ａ類で外面に亀甲紋が描かれている。2643・2645・2646は高台部が欠損しどの分類に属するか不明であるが、2643は亀甲紋と草花紋が、2645は木瓜紋、2646は鶴紋？が各々外面に描かれている。2644は内面と体部外面に赤色漆が塗布され、高台裏部分には黒色漆の上に赤色漆で「上」と記された高台の低い椀である。これらの椀類は清須城下町では通有に見られる形状と紋様構成であり、椀Ａ類の高台裏の削り込みが少ないことから比較的古い段階に属する資料群と評価できる。

2647・2648・2650は折敷部材であるが、各材の大きさなどからみてこれらが同一個体である可能性は低いと考えられる。2647は折敷側板の一部、2648は折敷側板の側板同士の合わせ部の部材片、2650は遺存状態が不良な折敷底板で、板の四隅が斜めに切り取られた形状となっている。2649は細長い板材に竹釘が一列に打ち付けられたもので、箱物部材の可能性が考えられる。

C　97B 区 NR02 植物層出土木製品（第 183 ～ 187 図 2651 ～ 2756）

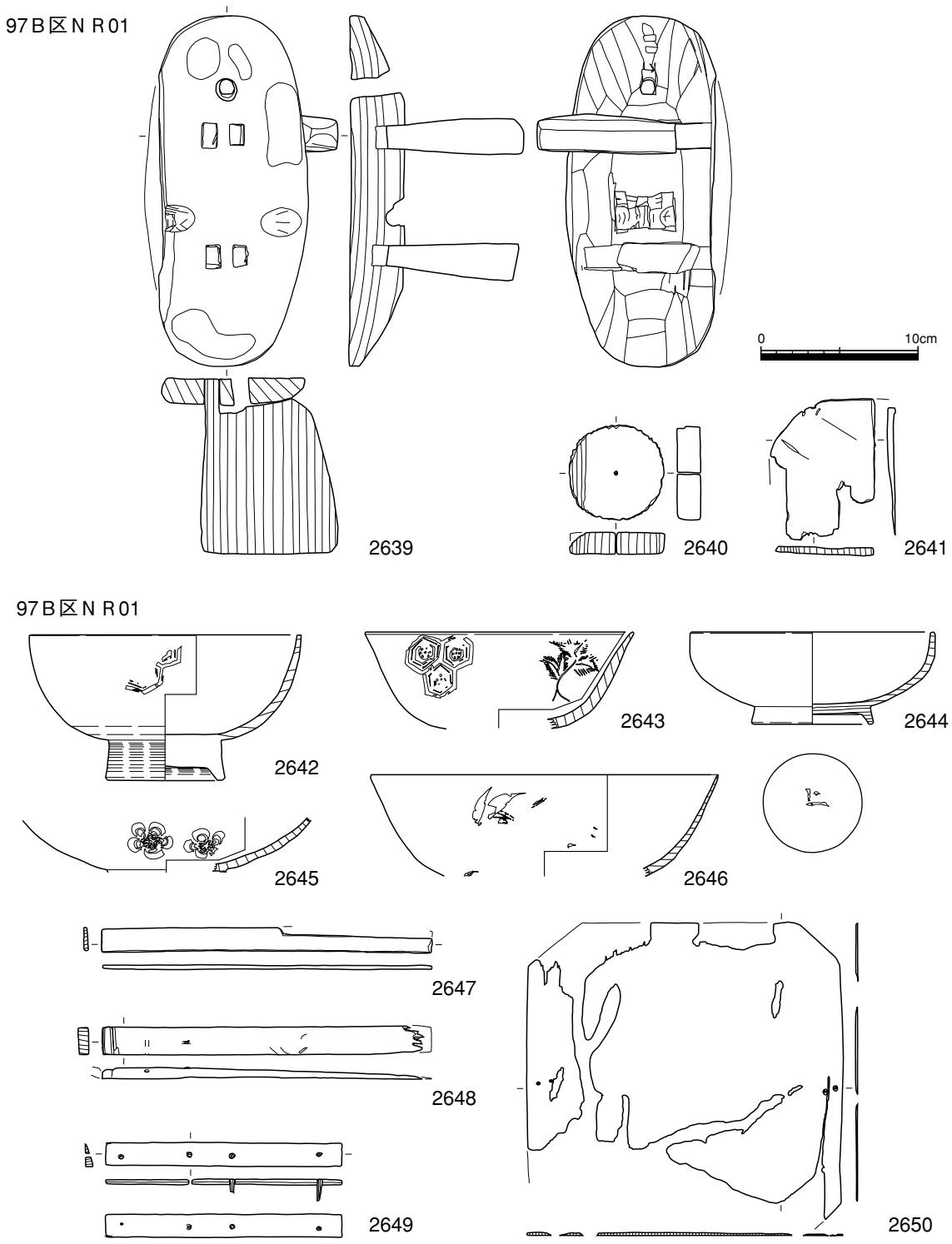
97B 区 NR02 植物層から出土した木製品には、木胎漆器類、曲物桶、折敷、箸、下駄、建築部材など多様な種類が認められる。

（Ａ）木胎漆器

2651 ～ 2657 は木胎漆器で、2651 と 2652 が椀Ａ類、2653 と 2654 は椀Ｂ類、2655 と 2656 は椀Ｃ類に属し、2657 は高台部が欠損して分類ができない。2651 ～ 2654 と 2657 は内面が赤色漆、外面が黒色漆が塗布され、外面にモチーフを特定し難い紋様が描かれている。2655 と 2656 は内面と体部外面に赤色漆が塗布され、高台裏部分には黒色漆の上に赤色漆で記号が書かれた高台の低い椀である。2655 は口縁部が外反するタイプである。施紋のモチーフが吉祥紋系のものと推察され『清洲城下町遺跡Ⅱ』のＳＤ66に類似するもの（134など）が存在することから清須城下町の古い段階の資料と想定される。

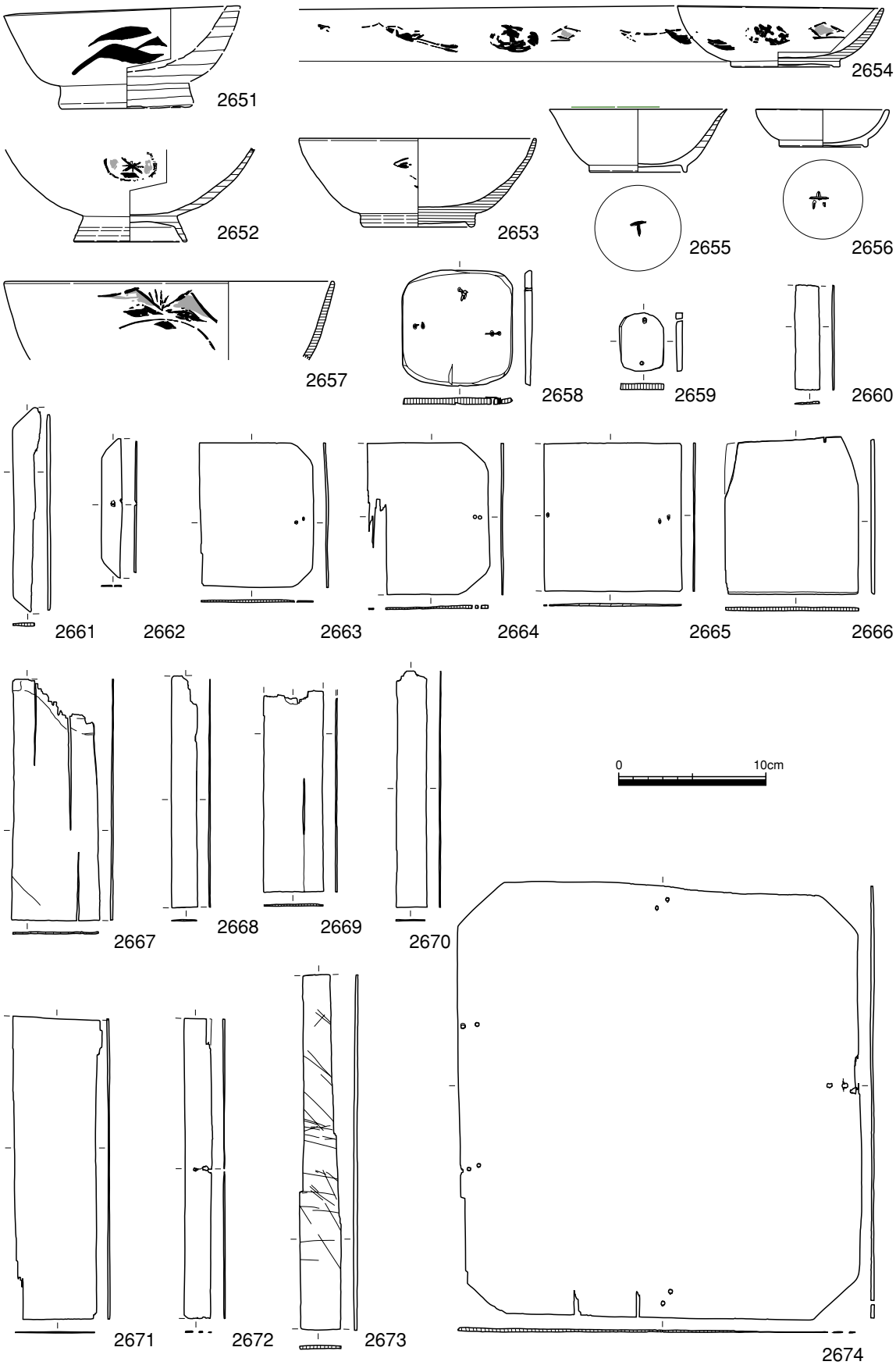
（Ｂ）曲物桶

2658 と 2659 は小形の曲物桶底板である。2658 は隅丸方形の板材に 3 ケ所 2 個ずつ孔が施されたもので、板の上位に円形曲物側板が桜皮などによって接続される部材と推定される。一方、2659 はさらに小形の小判状の平面形をもった板材で両端部に孔が穿たれている。おそらく板の外側に曲物側板を巻いた製品と推定される。2714 は曲物桶柄杓で、底板は側板の内側にはめ込まれ桜皮で綴じ合わされており、柄部の先端を固定する部材は残存していない。おそらく棒材による固定具があったと推測されるものである。2747 と 2748 は曲物桶そのものではないが、曲物桶などの容器を載せて吊り下げるための土台と推測される十字形木製品である。細長い板材を 2 枚十字に重ねた製品で、各板材の両先端が穿孔されており、この孔に吊り紐を通したものと思われる。板の表面はヤリガンナ状工具で調整されている。両者は 2 枚の板を重ね合わせる方法が異なり、2747 は重複



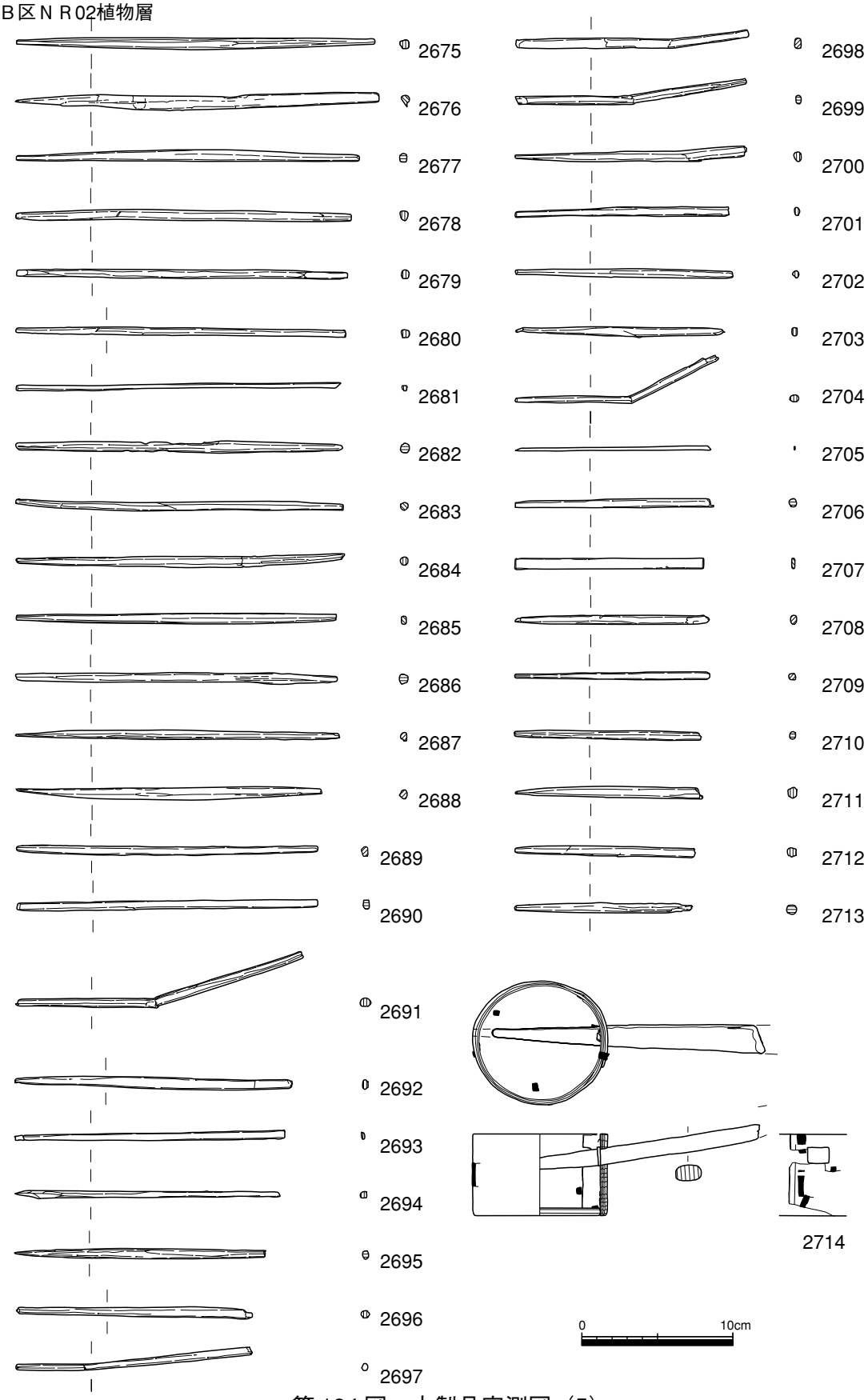
第182図　木製品実測図（3）

97Ｂ区ＮＲ02植物層



第 183 図　木製品実測図（4）

97Ｂ区ＮＲ02植物層



第 184 図　木製品実測図（5）

部分に斜め方向の配置に3個の孔を開けさらに十字の配置に穿孔されており、この孔を利用して板を固定したものと考えられる。一方、2748は板が重なる部分を段差に削り取ってそこに板材をはめ込んで重ねた「十字形相欠き継ぎ」がなされたものである。

（C）折敷

折敷は底板のみが確認され、板材の厚さで2類に区分することが可能である。2660～2674は厚さが1～3mmと非常に薄い折敷底板およびその部材である。2665は平面形が正方形の折敷の完形品で両端辺中央部分が2個ずつ穿孔されている。2674は正方形の隅角部を切り取った不定八角形を呈するほぼ完形の折敷で、外周部分が5ケ所で2個ずつ穿孔されている。両者とも穿孔された外周部分の上に方形の曲物側を載せたものと推測される。2661～2664・2666～2673も、2665と2674と同じような形状を呈していたと推察される部材であり、2673は表面に無数の細かい傷が見られる。

一方、2743～2745は厚さが4mm以上と厚い折敷底板の部材である。全て表面に無数の細かい傷がつけられており、俎板などに転用されていたものと考えられる。2744は一辺には3ケ所穿孔され、残りの辺は綴じ合わせのための桜皮が残存していた。外周部は片面が斜めに削り取られている。2475も側板を固定するための桜皮が残されている。

（D）箸

2675～2713は横断面形が方形や多角形となる箸で、大半は折損して全体の形状を止めないものである。全て、表面は何も塗布されていない白木の箸である。2756は長さが41cmを超える棒状製品で菜箸の可能性が考えられる。

（E）下駄

2749と2750は一木作りの連歯下駄、2753は差歯下駄の歯部である。2749は平面形が長方形となるもので、清洲城下町遺跡の城下町期の下駄としては珍しいタイプである。2750は楕円形に近い平面形を呈するもので後部が欠損している。

（F）建築部材など

建築部材と推定されるものも多数確認されている。2720は扁平な棒材で、一方の端部に溝が施されており、別材が組み合わされたものと思われる。建て具など組物の部材と想定される。2721と2722は一方の先端が鋭利に尖っており楔と考えられる。2721は先端が平面三角形状に加工されており、2722は先端は切り離されたままの状態となっている。2738はほぼ正方形の厚い板材から円柱形部分が削り出されたものである。用途は不明である。2740～2742は釘が打ち込まれたと推測される孔が確認できる板材であり、板葺き屋根や壁板の部材とも考えられるものである。2741と2742は平面が長方形を呈している。

2735～2739は平面形が不定形となる木っ端材である。表面にはチョウナなどによる加工痕が残存し、端部は削り離されたままの状態となっている。鋸痕などは確認されなかった。これらは木材をチョウナなどで大きく削る際にできた端切れ材と推測され、このような材は97B区NR02植物層からは多量に出土している。このことからこの付近では木材の製材や加工が比較的大規模に行われ、その廃材が自然流路NR02に廃棄されたものと考察できる。

（G）その他の製品

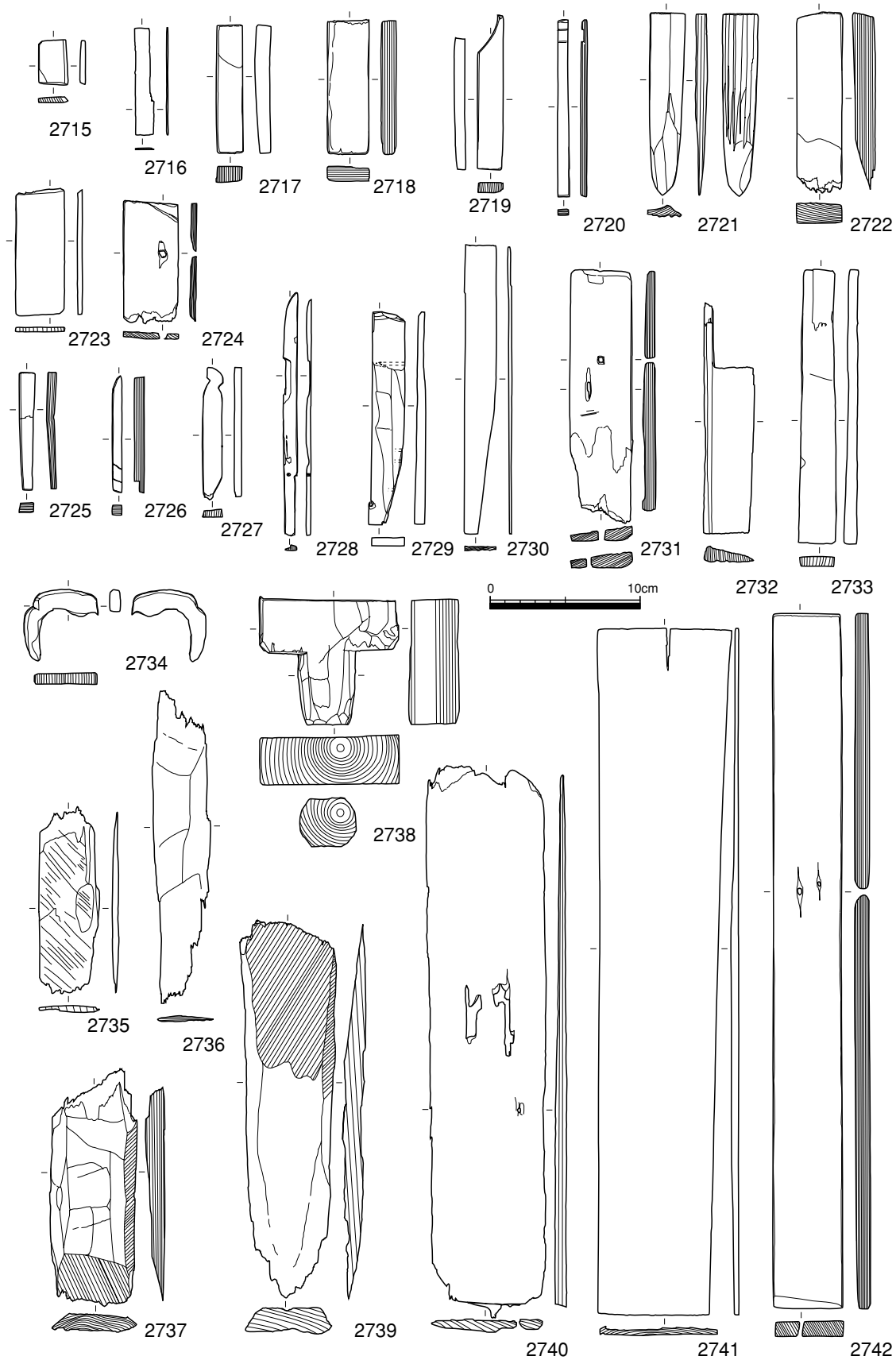
2727は一方の端部が平面「S」字状に削り出された細長い板材で形代である可能性が考えられる。2746はヘラ状木製品で刃部と柄部の境界部分が2個穿孔されている。一方の孔には植物製の釘材が残存していた。柄部よりも刃部の方が厚く、刃部先端はやや尖っている。2751は切匙の刃部で刃の先端も欠損している。2753はほぼ円柱形に作られた栓と思われ、側面は細かく削られている。

D　97B区NR02下層出土木製品（第187図2757～2768）

97B区NR02下層から出土した木製品には、木胎漆器類、刀子柄部、折敷などが存在する。

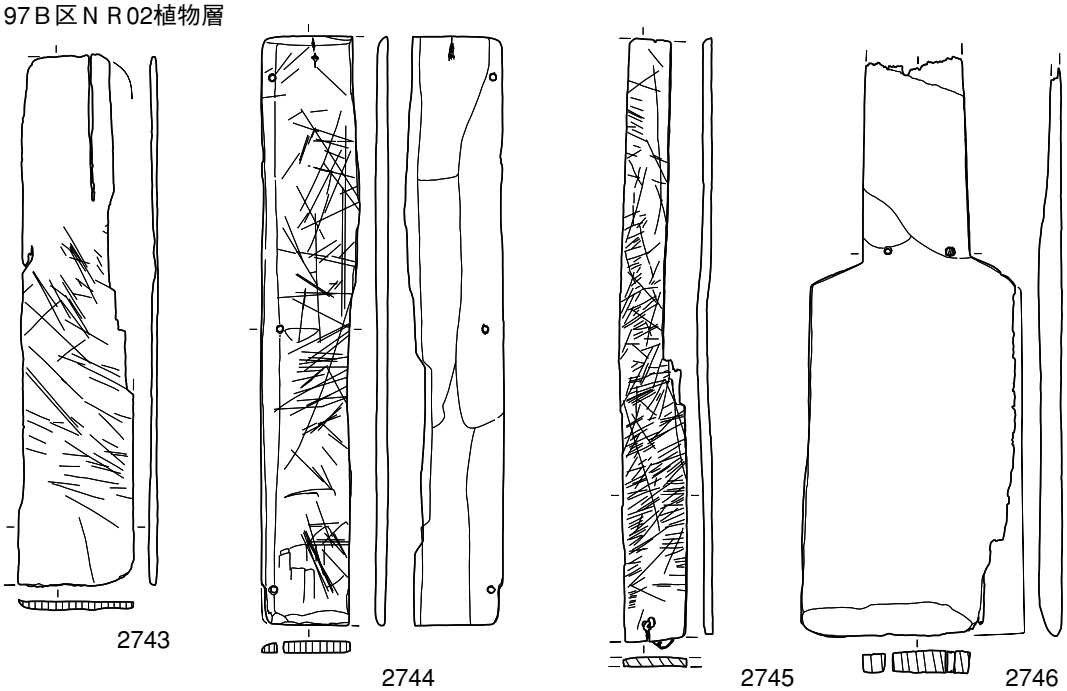
2757は高台部が残らない木胎漆器椀で、外面に鶴紋と亀紋が描かれている。2759は刀子柄部の部材と考えられ、中子が入る部分は段差状に凹んでおり、外面両端部には圧痕が残存する。同様な別材と共に中子を挟み込み外から両端部を金輪で締め付けたものと想定される。2762は二股に枝分かれした自然木であるが、毬杖の可能性が考えられるものである。2767と2768は折敷底板と考えられ、2768には外周

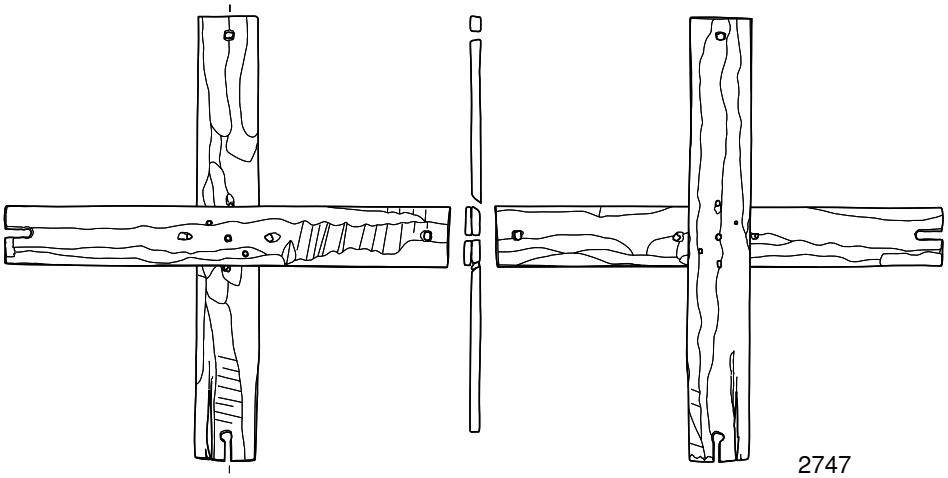
97Ｂ区ＮＲ02植物層

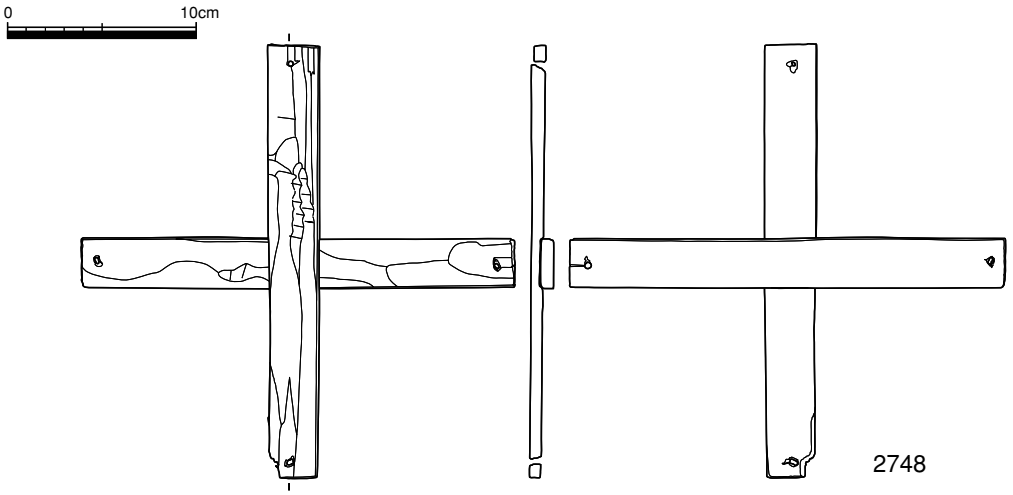


第185図　木製品実測図（6）

97Ｂ区ＮＲ02植物層

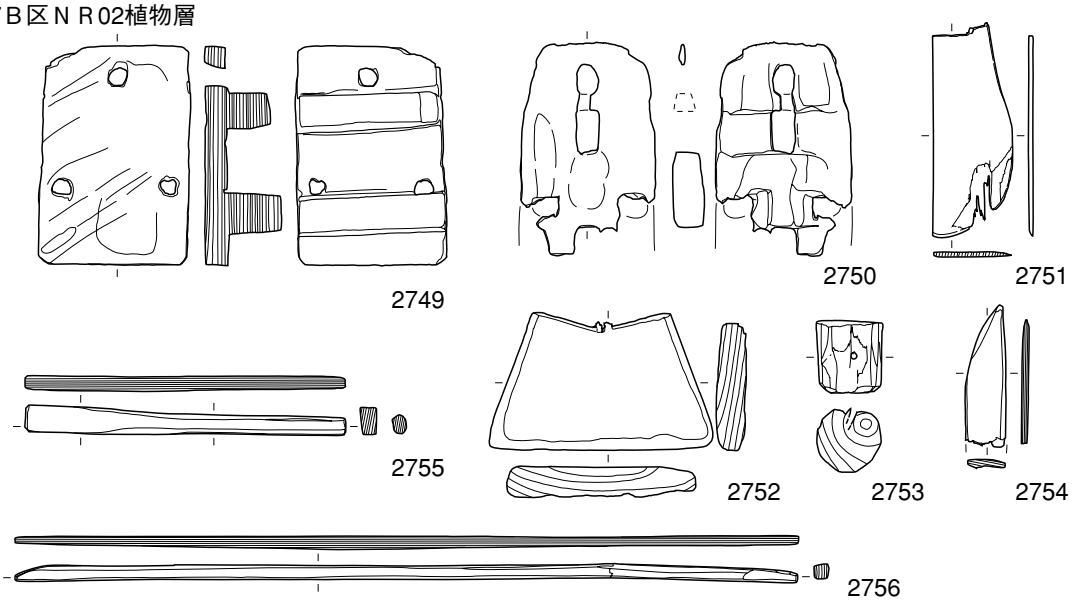




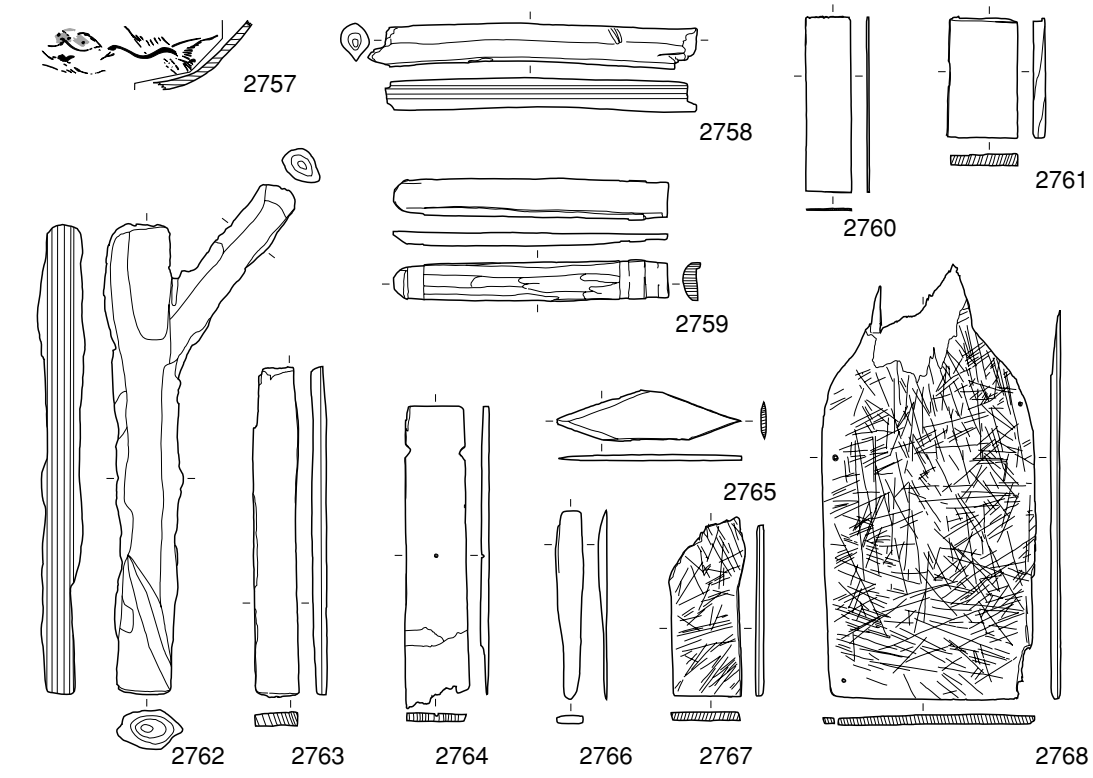


第 186 図　木製品実測図（7）

97Ｂ区ＮＲ02植物層

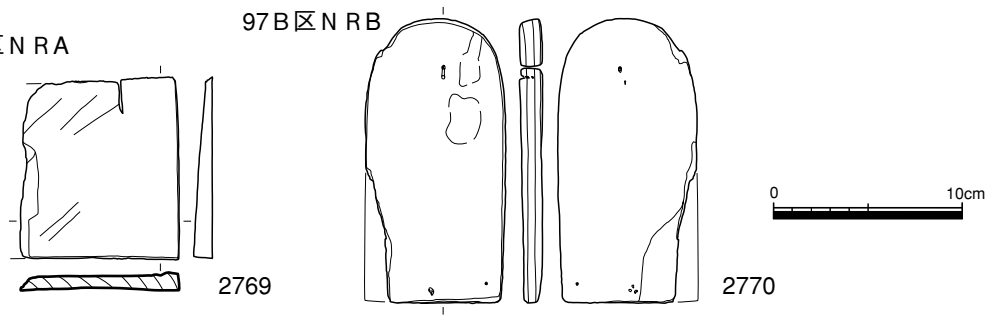


97Ｂ区ＮＲ02下層



97Ｂ区ＮＲＡ

97Ｂ区ＮＲＢ



第187図　木製品実測図（8）

部に側板をつけるための釘孔が残存している。両者とも表面全体に無数の細かな傷が認められる。

E　97B区NRA出土木製品（第187図2769）

2769は平面がほぼ正方形となる板材で、一方の辺が薄くなっているものである。用途は不明。

F　97B区NRB出土木製品（第187図2770）

2770は頭部が丸く加工された厚手の板材で、頭部に1ケ所、尻部に2ケ所釘孔状の穿孔が認められる。

（3）97C区

A　97C区NR01出土木製品（第188図2771）

97区NR01から出土した木製品には、木胎漆器類がある。2771は木胎漆器椀で高台部が欠損するもので、外面は黒色漆が塗布されその上に赤色漆で桐紋が描かれている。桐紋は2種認められ、濃い赤色漆のみで描かれたものと濃い赤色漆で輪郭を描き朱色のような赤色漆で隙間が塗られたものが交互に配置されていた。桐紋が描かれた漆椀は清須城下町では初めての事例である。

B　97C区SX01出土木製品（第188図2772～2774）

97C区SX01瓦溜りから出土した木製品には、木胎漆器類と曲物桶がある。2772は木胎漆器椀B類で体部内外面に赤色漆が塗布された後に、外面には黒色漆によって扇紋？が描かれている。高台部分には黒色漆が塗布されていた。2773は曲物桶底板で側板を綴じ合わせるための桜皮が残存していた。2774は小形の曲物桶の完形である。二重巻きされた側板の端部は斜めに切断され幅が狭くなっている。

C　97C区SW01出土木製品（第188図2775・2776）

石垣97C区SW01から出土した木製品には、曲物桶底板（2776）と不明棒状木製品（2775）がある。2775はヤリガンナ状工具によって表面が削られた横断面が楕円形を呈する棒状製品で、用途は不明である。

D　97C区SX02出土木製品（第188図2777・2778）

97C区SX02から出土した木製品には、木胎漆器椀B類（2777・2778）がある。2777は内面は赤色漆が、外面は黒色漆が各々塗布され、外面には赤色漆で紋様が描かれている。2778は内外面とも黒色漆が塗布され外面には赤色漆で鶴紋などが施されていた。2778の底部には漆塗布後に付けられた傷が残存する。

E　97C区SW02出土木製品（第188図2779～2782）

石垣97C区SW02から出土した木製品には、木胎漆器類、結桶、ヘラ状木製品と箱物などがある。2779は外面にタガの圧痕が残り、内面には底板が嵌っていた痕跡が認められることなどから、結桶の側板と考えられるものである。側板の上半部に隅丸方形の大きな孔が存在し、その上位に木釘が打ち付けられていた。孔の存在する位置の両側は側面が削られて凹んでいる。大きな孔の存在から、棒材を渡して作る把手が付いた結桶の一部と推測される。内面にはヤリガンナによる加工痕が残存する。2780は刃部の頭部が半円形に作られ、刃部下端は直角に屈曲して柄部に至る形状で、柄部はばち状に開いている。刃部には細かな傷がわずかに認められる。2781は木胎漆器椀A類で、高台裏の削りが深く器壁が非常に薄くなっているものである。内面は赤色漆、外面は黒色漆が塗布されていた。2782は小形の箱物の側板と推定されるものである。内面と外面は黒色漆が塗布され、外面には赤色漆による若干の施紋が施されている。内面には横方向には溝が切り込まれており、両端部は斜めに削られていた。

F　97C区検出1出土木製品（第189図2783～2809）

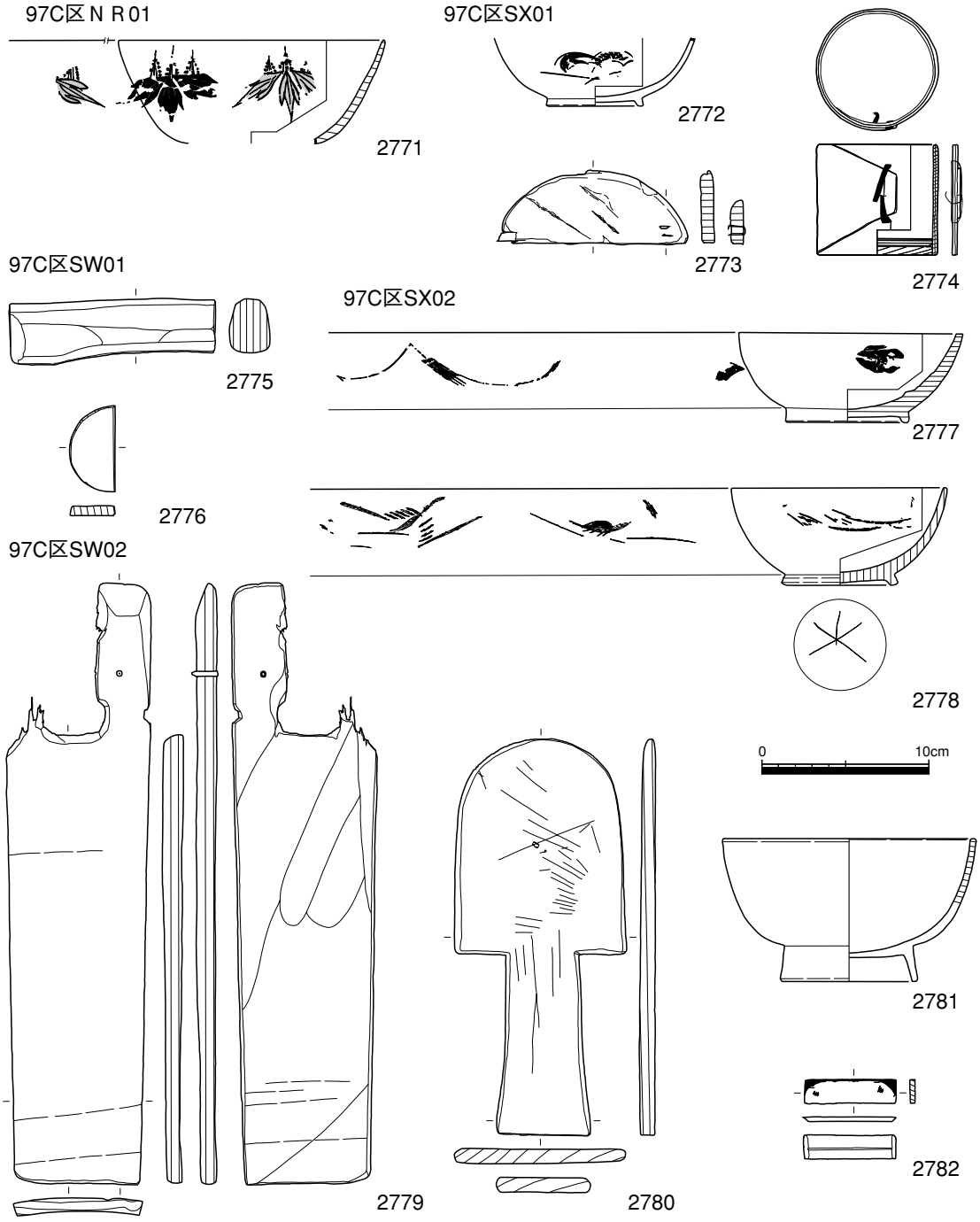
木胎漆器類、曲物桶、下駄、ヘラ状木製品など多様な製品がある。

（A）木胎漆器類

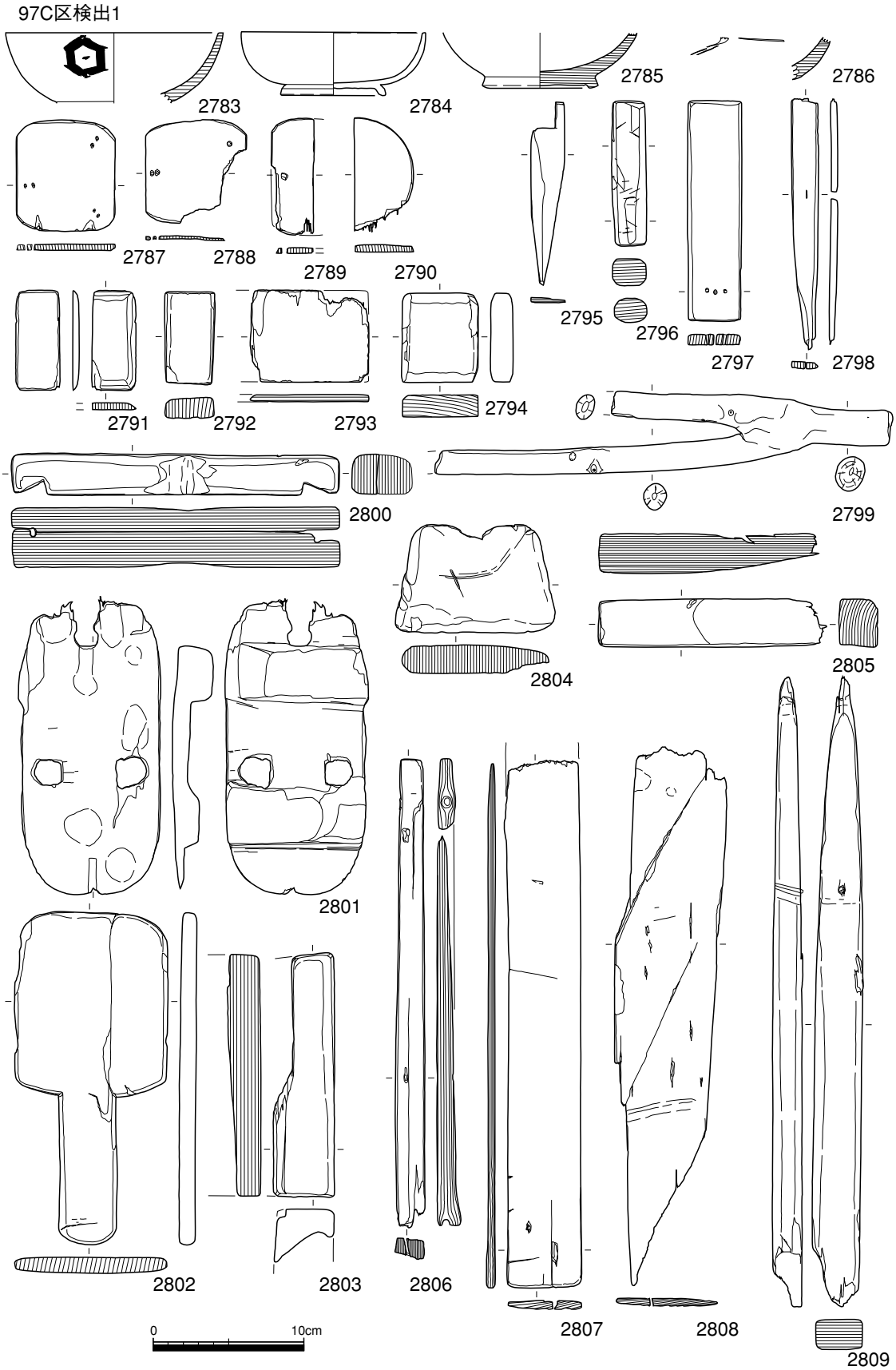
2783～2786は木胎漆器椀で、全て内面が赤色漆、外面は黒色漆が塗布されていた。高台が残存する2784と2785は椀B類と分類でき、2783と2786は外面に赤色漆で施紋されていた。2784は器壁が他のものに比べ薄い特徴が認められる。

（B）曲物桶

2787～2790は曲物桶底板である。2787～2789は平面が隅丸方形の板材に、推定3ケ所が穿孔された小形のものである。2790は平面が円形と推定される



第188図　木製品実測図（9）



第 189 図　木製品実測図（10）

底板で、半分が欠損していた。側板との接合のための付属物は確認されなかった。2809 は柄杓の柄で、状況からみて本体は曲物桶であったと推測される。柄の先端は尖り桶の外側にはみ出していた痕跡を見い出すことができる。

（C）下駄

下駄は一木の連歯下駄（2801）と差歯下駄の歯（2804）が存在する。2801 は小判形の平面形を持ち後歯がよく磨り減っている。2804 は下駄本体に差し込むためのほぞが欠損している。

（D）その他の製品

2791 は外周部が斜めに角が取られており、箱物の部材と推測される。2800 は両端部が断面三角形状に削り取られ、中央部が磨り減った角材であり、釣瓶の把手と考えられる。両端の削り込みに釣瓶の側板が嵌り釘で打ち止められていたと推測される。2802 はへら状木製品で、刃部は平面が隅丸長方形となっている。2805 は厚さが非常に厚い楔状木製品であり、先端が欠損する。2807・2808 は所々に釘孔が見られる板目板材で、建築部材と推測される。

G　97C 区検出 2 出土木製品（第 190・191 図 2810 ～ 2840）

97C区検出 2 から出土した木製品には木胎漆器類、折敷、木簡、結桶、建築部材などの製品がある。

（A）木胎漆器類

2810 ～ 2819 は木胎漆器類で、その多くが内面が赤色漆、外面は黒色漆が塗布されているものである。2810 ～ 2813 は高台が高い椀Aで、2810 は高台内の削り込みが深くなっているのに対して、2811 ～ 2813 は高台内の削り込みは浅い。2814 ～ 2818 は高台が残存しない椀、2819 は高台内を余り削らない皿である。体部外面に赤色漆で施紋されたものが多く、2817 は亀紋が描かれている。高台内に傷が認められるもの（2810・2813）もある。

（B）木簡

2820 と 2821 は平面が長方形の薄い板材に墨書が記された木簡である。判読は難しく釈文を提示できないが、仮名混じりの文言であると考えられる。折敷の底板に文字を記したものと推測される。

（C）折敷

折敷は、厚さが6mm前後と厚い板材が用いられたもの（2825 ～ 2827）であり、底板の側面に側板が釘で打ち止められているものと考えられる。2826 は釘孔の配置から底板と側板が接合できたものである。底板は半分が欠損しているが、残存した部分では側面に合計で 9 ケ所の釘穴が確認される。側板は 2 辺が残存しており、側板同士の接合は上下 2 ケ所に木釘が使用されて止められていた。側板の高さは約 1.6cm を測り、状況からみて折敷の平面形は一辺の長さが約 29cm を測る正方形と推測される。2825 は長辺が約30cmを測る板材で、折敷底板の一部と考えられる。側面に釘穴が残存しており、表面には夥しい数の細かな傷が存在する。規模などからみて、2826 と同一個体または同一規模の折敷と想定される。2827 は一端が欠損する折敷側板で、これも 2826 と同一個体であった可能性が考えられる。

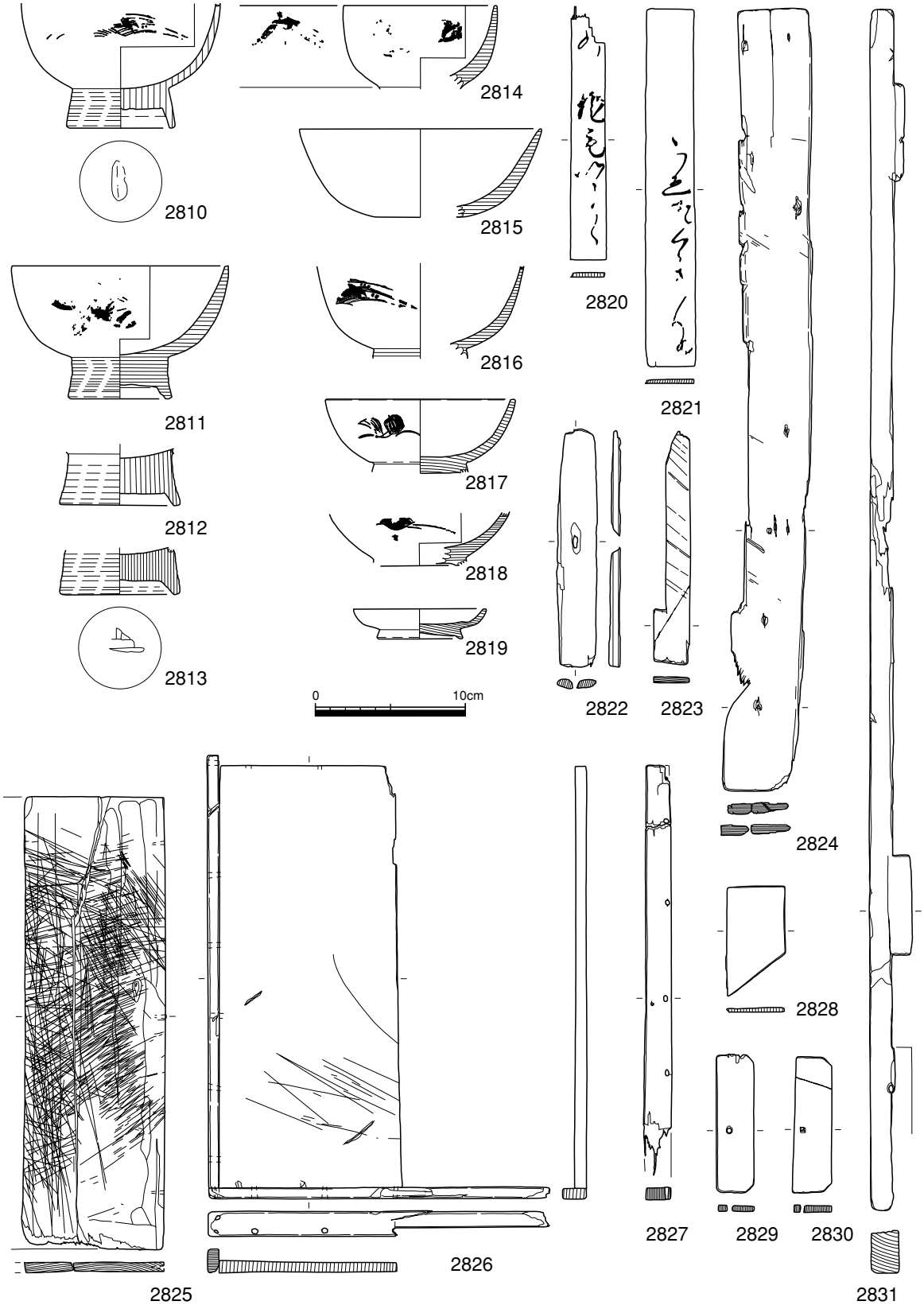
（D）結桶

2832 ～ 2836 は結桶側板である。板の厚さが1cm強とやや厚い彎曲した板材であり、内面に底板の圧痕が、外面にはタガの圧痕が各々残存している。内外面は丁寧に調整され加工痕を読み取ることができなかったが、側面は極めて平滑に仕上げられ、台鉋状の工具が使用されたものと推測される。2832 ～ 2834 は上半部が欠損し規模を復元し得ないが、最も小さいもの（2833）でも高さは 18cm 以上を測ることから、結桶の中でも中規模のものと思われる。一方、2835 と 2836 はほぼ全体が残存しており、側板の高さは 2835 が約 13.5cm、2836 が約 15.3cm を測ることから、比較的小規模なものと評価される。両者は内面の上半部に刺突痕のような傷跡が多数残存しており、これは何らかの使用痕と思われる。2837 も結桶側板の可能性があるものであるが、横断面が彎曲していない。

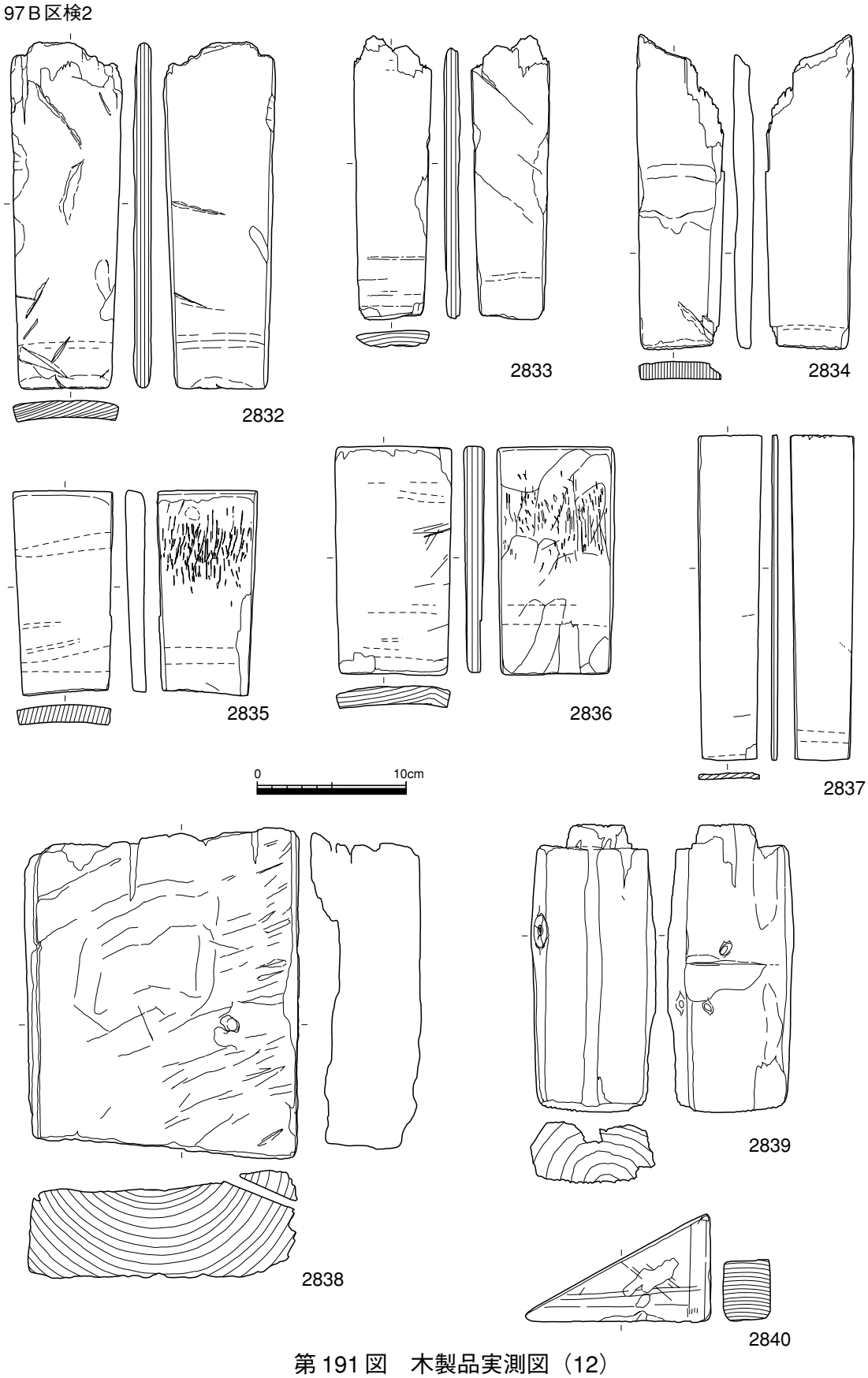
（E）建築部材

2824 は長さが 50cm を超える細長い板材でいくつかの釘孔と推測される孔が存在する。板葺き屋根や壁板の部材とも考えられるものである。2831 は 3 ケ所が方形に削り出された角柱状の棒材である。折損した削り出された張り出し部分には鉄釘が残存している。これは建具の一部の可能性が考えられるが、

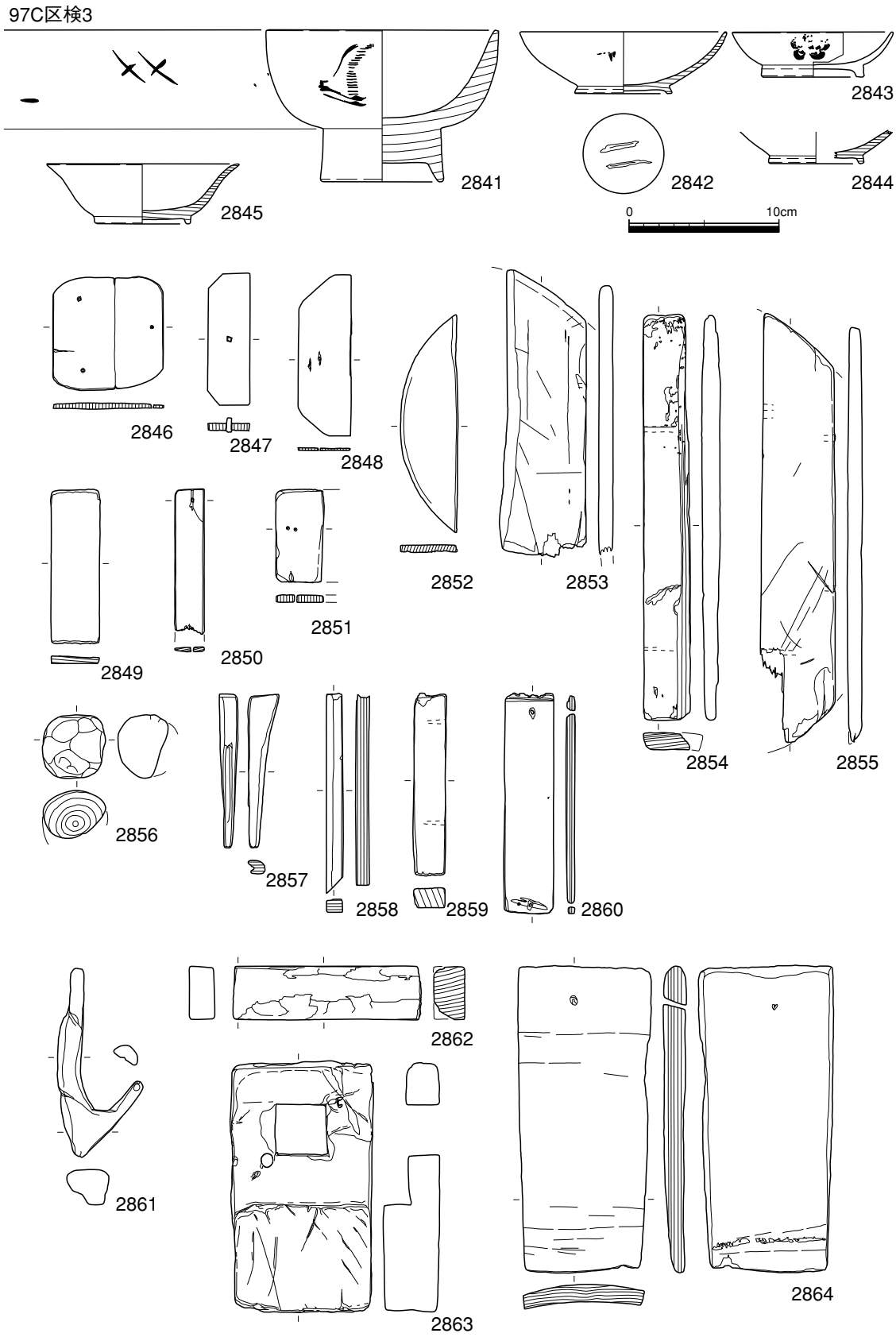
97C区検2



第 190 図　木製品実測図（11）



第 191 図　木製品実測図（12）



第 192 図　木製品実測図（13）

正確な用途は不明である。2838 は平面が約 18cm × 約 20cm の長方形を呈する厚さ約 7cm の厚手の板材で、材の中央部が何らかの圧痕などで凹んでいる。材には斜め方向に方形の孔が存在する。2838は礎板または作業台などの機能が想定されるものである。2839は横断面形が扁平な六角形を呈する短かい棒材で、一方の端部に平ほぞが存在し、片面に断面方形の溝が切られていた。建築材の端切れと推測される。2840 は平面が直角三角形を呈する厚手の板材で、これも建築材の端切れと推測される。

（F）その他の製品

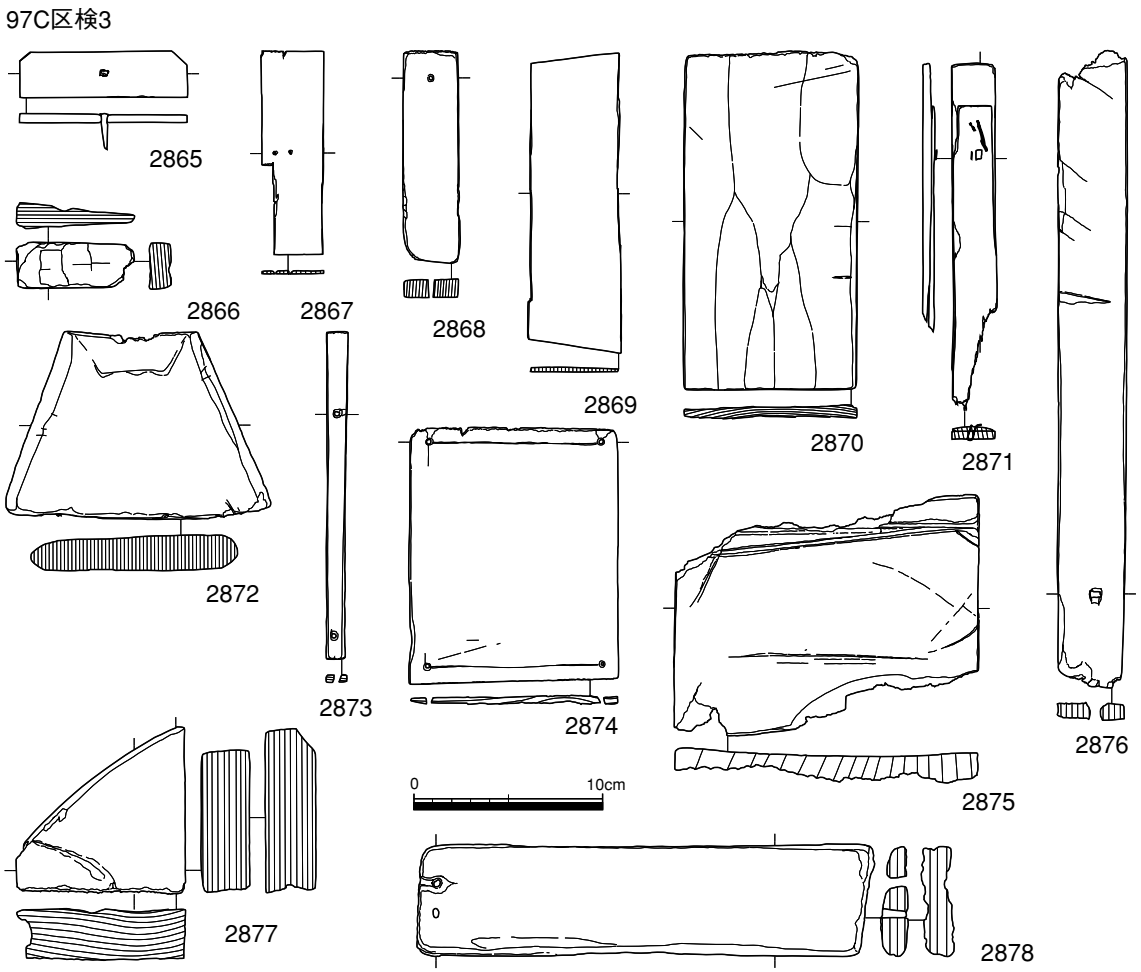
2829 と 2830 は隅角部を斜めに切断された方形の板材の中央部が穿孔されたものである。

H　97C 区検出 3 出土木製品（第 192・193 図 2841 ～ 2878）

木胎漆器類、曲物桶、折敷、結桶、建築部材などの製品がある。

（A）木胎漆器類

2841 ～ 2845 は木胎漆器類である。2841 は内外面とも黒色漆が塗布され、外面には赤色漆で鶴紋と亀紋？が描かれている椀Ａ類である。鶴紋は飛翔した鶴の羽が一枚一枚丁寧に描かれたものと、飛翔した鶴の全体が「×」字状に表現されたものの二種類が存在する。高台内はやや深く削られている。2842 ～ 2844 は内面が赤色漆、外面は黒色漆が塗布されているものである。2842 は高台内に「二」字状の傷が施された椀Ｂ類、2843 は外面に梅花紋が描かれた皿、2844 は外面の施紋が認められなかった皿である。2845 は体部内外面が赤色漆が塗布され、高台は黒色漆が施された椀で、口縁部が強く外反している。



第 193 図　木製品実測図（14）

（Ｂ）曲物桶

2846は隅丸方形の薄い板材で孔が3ケ所施されている。おそらく円形の曲物桶が板の上部に付いたものと推測される。2852は円板状の材が欠損したもので、曲物桶の底板と考えられる。

（Ｃ）折敷

2848は隅角部が斜めに切断された方形の板材で、板が薄く端部に桜皮が縫い綴じられた痕跡の孔が存在する。一方、2867は隅角部は斜めに切断されない方形の板材の一部で孔が2個穿たれている。2871は2枚の板材が桜皮によって縫い綴じられているものである。折敷の側板の合わせ部が遺存したものと推測される。

（Ｄ）結桶

結桶は側板と底板が別々に出土している。2853と2855は結桶底板の一部で、2855の破断面に穴が2ケ所開いている。これは別材による底板部材と接合させるための釘穴と考えられる。2854と2864は結桶側板である。2854は外面にタガの圧痕が残存し、内面の上位は丸く仕上げられ下部には底板がはまっていた圧痕が残っている。外面上半部には部分的に茶色付着物が残存し、漆が塗布されていたと推測される。2864は高さが20cm強の結桶側板で上部中央が穿孔されている。

（Ｅ）箱物

2874は平面がほぼ正方形を呈する薄い板材で、四隅に孔が穿たれている。この孔を結ぶように両側小口面に近い部分の表面に傷による直線が残存しており、このラインに沿って側板が接合されていたと考えられる。2847と2865は平面が長方形の板材の2ケ所の隅角部が斜めに切り取られた製品で、中央部が穿孔されている。2865にはこの孔の部分に木釘が残っており、別材と接合させるための孔と考えられる。箱物の側板の可能性を考えておきたい。2873は細長い扁平な材で2ケ所で穿孔されており、これも箱物の部材と思われる。

（Ｆ）建築部材

2863は長さが約17cmの角材で、材の半分以上は相欠き継ぎをするための平ほぞが加工されており、そのほぞの中央部に長方形の大きな孔が存在する。2878は端部に2ケ所穿孔された板材、2875は削り放たれた不定形材である。

（Ｇ）その他の製品

2856は球状にチョウナなどの工具によって成形された製品で、木毬と考えられる。2861は自然木の枝分かれした部分を利用して作られた鉤の手状の製品で、自在鉤の一部の可能性も考えられる。2866は楔、2872は差歯下駄の歯部である。

Ⅰ　97C区検出4出土木製品（第194・195図2879～2923）

木胎漆器類、曲物桶、折敷、結桶、下駄、建築部材などの製品がある。

（Ａ）木胎漆器類

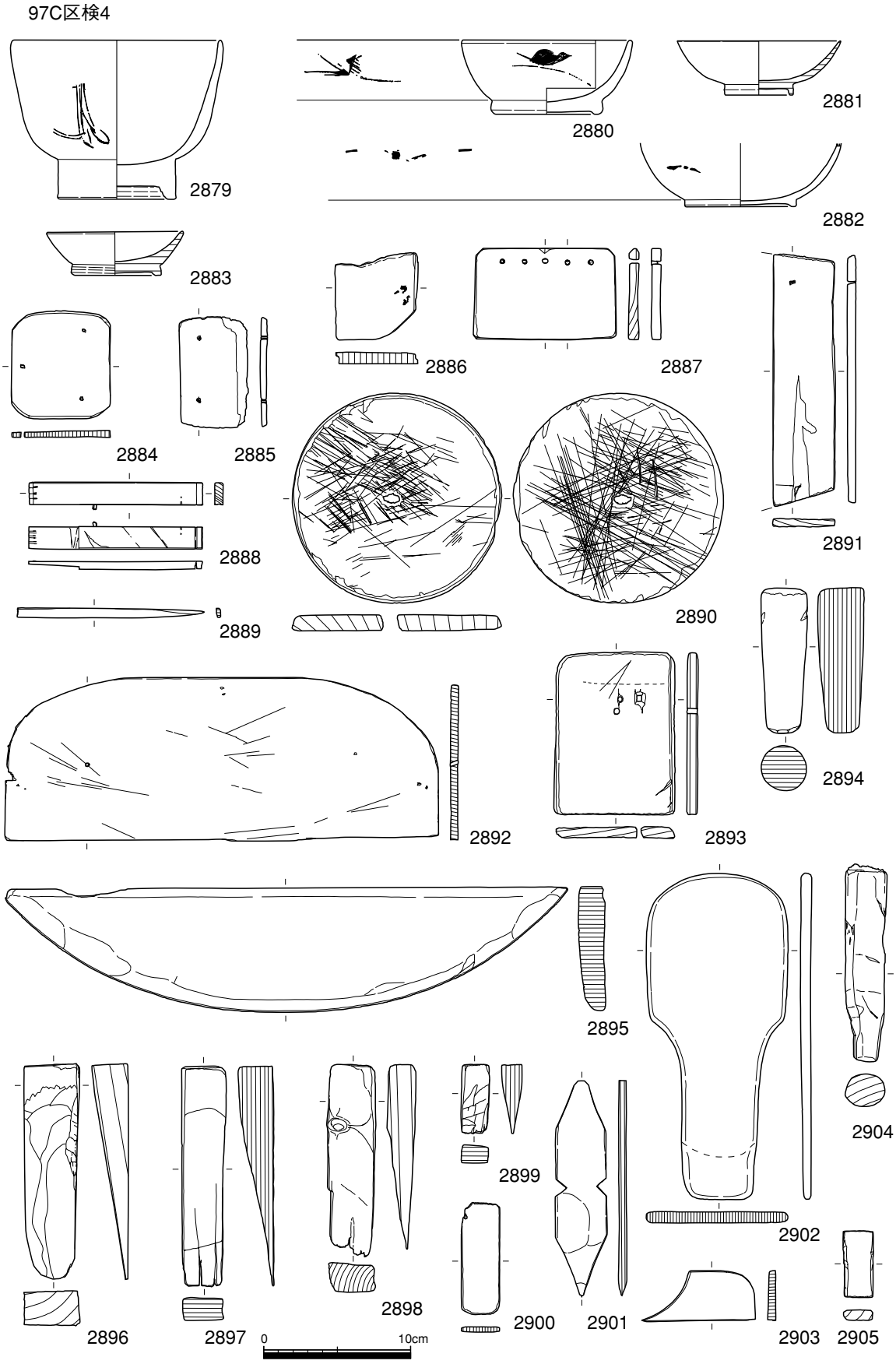
2879～2883は木胎漆器類である。2879～2882は内面が赤色漆が、外面は黒色漆が塗布されている。2879・2880・2882は外面に赤色漆で施紋され、2879は凧状の紋様、2880は鶴紋と亀紋のセットが描かれているが、2882は紋様構成は特定できない。2880の亀紋は頭部や尾部や脚部が明瞭に見られるもので、鶴紋は飛翔する姿が描かれるタイプのものである。2879は椀Ａ類、2880～2882は椀Ｂ類である。一方、2883は体部内外面が赤色漆が塗布され、高台は黒色漆が施された皿で、口縁部は短く逆ハの字状に開く。

（Ｂ）曲物桶

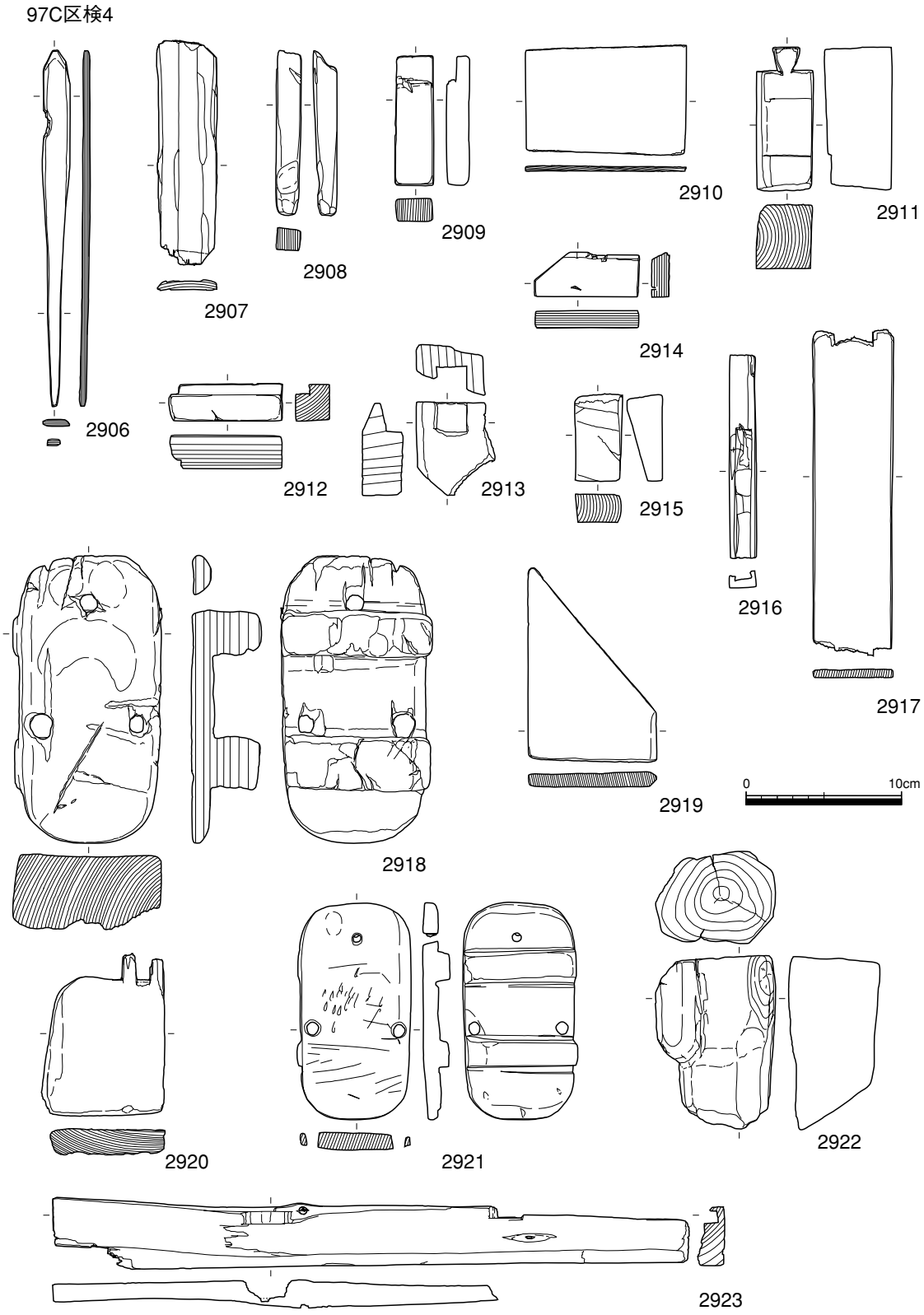
2884と2885は隅丸方形の薄い板材で、2884は孔が3ケ所施されている。2888は直径が14cm強の円板で中央部が穿孔されていた。表面と裏面ともに多数の直線的な細かい傷が重なりあうように存在している。孔の存在が疑問であるが、ここでは曲物桶の底板と考えておきたい。2892は長楕円形（隅丸長方形）の比較的薄い板材で外周部付近に2個ずつ孔が穿されている。板の上位に曲物側が付いたものと考えられる。

（Ｃ）折敷

2886は隅角部が斜めに切断された方形の板材の一部で、桜皮が残存する。2891は平面が台形状に形作られた薄い板材で桜皮が残存する。このような形状の折敷は、本遺跡ではまだ発見されていないが、桜皮の存在などからここでは折敷であると想定しておく。



第 194 図　木製品実測図（15）



第 195 図　木製品実測図（16）

（D）下駄

下駄は一木の連歯下駄（2918・2921）と差歯下駄の歯（2920）が存在する。2918・2921は小判形の平面形を持つもので、2921はやや小振りなものである。2820は半分程度が欠損している。

（E）建築部材

2911は一辺が約4cmの角材で、両端部がきれいに切断されている。一方の端部は先端がばち状に開く「ありほぞ」が作られており、建築部材の一部と推測される。2912は一辺の角が直角に削られた「しゃくり面」が作られた角材である。2913は平面が方形の穴がくり抜かれており、ほぞ穴と考えられる。2917は下端部が欠損する板材で、上端部は平面「M」字状に切断されている。2922は杭状の材が短く切断された材で、端切れ材と思われる。2923は2ケ所に平面方形の穴が穿たれた細長い板材で、建て具の部材の可能性も想定されよう。

（F）その他の製品

2887は平面が長方形の板材の端部付近に一列に配置された孔が5個存在する。用途は不明である。2894は裁頭円錐形の栓、2895は結桶底板の一部である。2896～2899は楔で、清洲城下町遺跡では井戸結桶のタガを締めるために使用される楔に類似している。2901は細長い六角形の中央部両側に切り込みが加えられた製品で、用途は詳らかにできない。2902はへら状木製品で刃部から柄部に向けて滑らかに削られている。

J　97C区検出5出土木製品（第196図2924～2931）

曲物桶、折敷、結桶、箱物などの製品が出土した。2924は箱物の側板の一部で、別材との接合部分以外の外面と内面に黒色漆が塗布されていた。板材の両脇に別の側板材が斜めに組み合わさるように加工され、上位から木釘が打ち込まれていた。板材の下面にも底板と接合するための釘穴が認められる。2927は小規模な方形の折敷底板であり、2928と2929は円形の曲物桶底板である。2932も折敷底板と考えられるが、全体の形状を復元できない。2930は結桶の側板で底板の圧痕とタガの圧痕が残存する。

（4）99A区

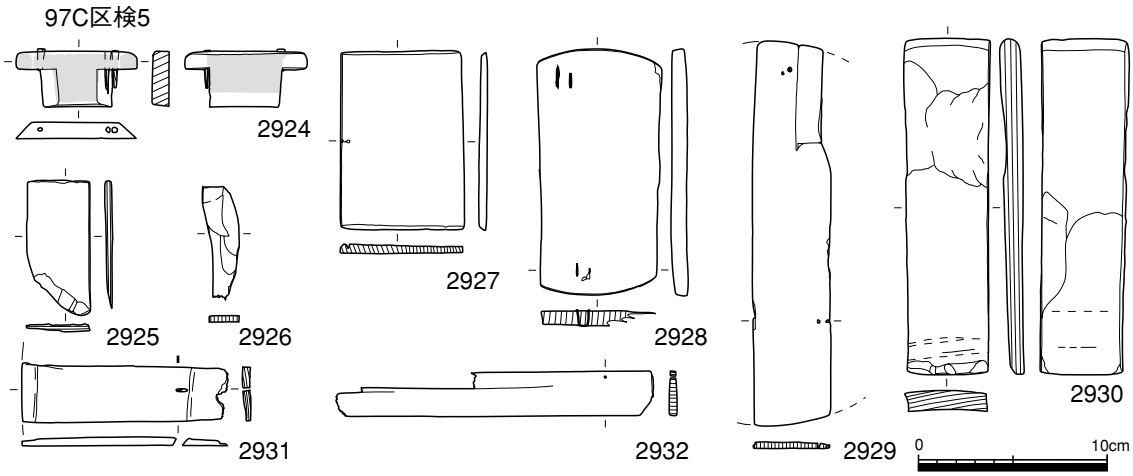
A　99A区SK248出土木製品（第197図2934・2936）

木胎漆器椀B類（2934）と結桶側板（2936）？が出土した。2934は体部と底部の外面に赤色漆による施紋が存在する。2936は非常に短く切断された板材で用途は不明であるが、上端部は結桶状に加工されていることから結桶側板の一部と推測した。

B　99A区SD11出土木製品（第197図2935）

2935は木胎漆器椀B類である。内面赤色漆、外面黒色漆が各々塗布されていた。

C　99A区SK33出土木製品（第197図2937）



第196図　木製品実測図（17）

2937は先端が尖り基部の中央が突帯状に削り出された製品で、木製農具の部材の可能性が考えられるものである。

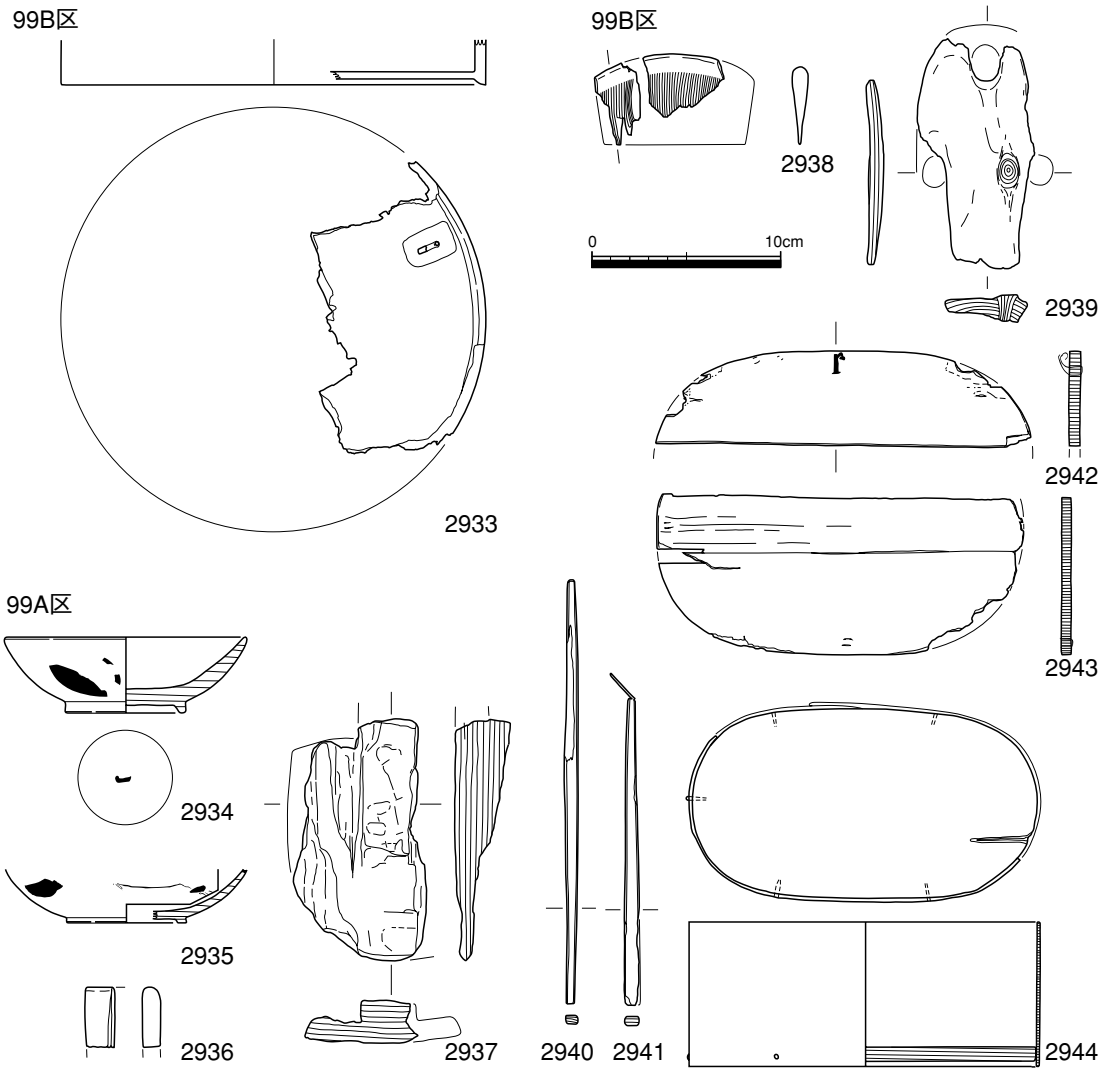
（5）99B区

99B区から出土した木製品は木胎漆器類や曲物桶などの生活用具類が若干出土している他に、今回は図示できなかったが、井戸側の井戸結桶なども存在する。ここでは他の調査区と同様に遺構毎に記述を進める。

A　99B区SK291出土木製品（第197図2933）

2933は木胎漆器曲物桶である。推定直径は26.8cmのやや大きな規模を持ち、器全体が茶色漆で塗布されていた。木質の遺存状態は不良で、厚く塗布された漆膜部分が良好に残存している。側板は一重に巻かれていたと推測され、底板は側板の内側にはめ込まれている。側板と底板の接合部分の状態は観察できなかった。底板の外面には1ケ所脚が付いたと考えられる漆膜が方形に遺存しない部分があり、その中央には脚を固定したと思われる釘孔が認められる。本遺跡では類例を見ない製品であり、SK291の共伴遺物からみて城下町期に属すると考えられる。

B　99B区SD20出土木製品（第197図2938・



第197図　木製品実測図（18）

2940・2941）

2938は横櫛、2940と2941は箸で、全て一部が欠損している。

C　99B区SX01出土木製品（第197図2939）

2939は一木作りの連歯下駄で孔部を中心に腐食が進み、本来の全体の形状は復元できないものである。

D　99B区包含層など出土木製品（第197図2942～2944）

2942～2944は平面形が楕円形を呈する曲物桶である。2942と2943は底板が欠損したもので、外周部に側板を固定するための桜皮が遺存している。両者は東壁を清掃した際に出土したもので、所属時期を特定することができない。2942は側板と底板が両方残存する曲物桶で、側板は一重巻で底板とは木釘などで止められていた。底板の厚さは比較的厚くなっている。

3　土台木

（1）概要

石垣SW01の基礎構造となる土台木（胴木）は全部で30本が出土している。土台木は線路のレール状に組み合わさった状態で検出されており、横木（線路の枕木相当部分）と縦木（線路のレール相当部分）で構成される。これらの土台木は配置された部位によって形態が異なっており、横木は土台木中央部付近に2ケ所の凹部を持つもの（土台木A類）、縦木は土台木両端部に相欠きほぞを設けるもの（土台木B類）となっている。ここでは土台木の類別毎に記述し、その主要なものについて図示し紹介していきたい。

（2）土台木A類（第200・201図2949～2954）

土台木A類は土台木中央部付近に2ケ所の凹部を持つもので、実際には横木として凹部を上面にして配置されており、2ケ所の凹部に各々2列の縦木の土台木が置かれていた。この土台木A類の凹部の幅は、縦木（土台木B類）の材の幅よりもかなり広く作られており、組み合わせる際には随分と余裕がある状態であった。

土台木A類は、木取りのあり方から3類に分類できる。A1類は丸太材をそのまま利用し多少の加工が施されているに過ぎないもの（2953）である。A2類は丸太材を縦方向に半裁したものを利用しそれに多少の加工を加えて製作されたもの（2949～2951・2954）である。A3類は丸太材を縦方向に四分の一以上に分割した材を利用し、それに多少の調整が加えられたもの（2952）である。以下に具体的な6つの事例を紹介する。

2949は「胴木26」として取り上げられた、全長225cm、最大幅32cm、最大厚21cmの規模を持つA2類の土台木である。丸太材を半裁した面を下にして配置されていた。上面に凹部を2ケ所持ち、上面と両側面にはチョウナによる加工痕が残存していたが、一部に樹皮を除去した状態のままの部分が存在する。下面には鋸による加工痕が残存しており、一方の端部から一気にもう一方の端部まで曳き切られていた。細かな節がいくつか残存する材が用いられていた。

2950は「胴木27」として取り上げられた、全長273cm、最大幅36cm、最大厚16cmの規模を持つA2類の土台木である。丸太材を半裁した面を下にして配置されていた。上面に凹部を2ケ所持ち、上面と両側面にはチョウナによる加工痕が残存していたが、一部に樹皮を除去した状態のままの部分が存在する。下面には鋸による加工痕が残存しており、両端部から曳き切られていた。細かな節がいくつか残存する材が用いられていた。

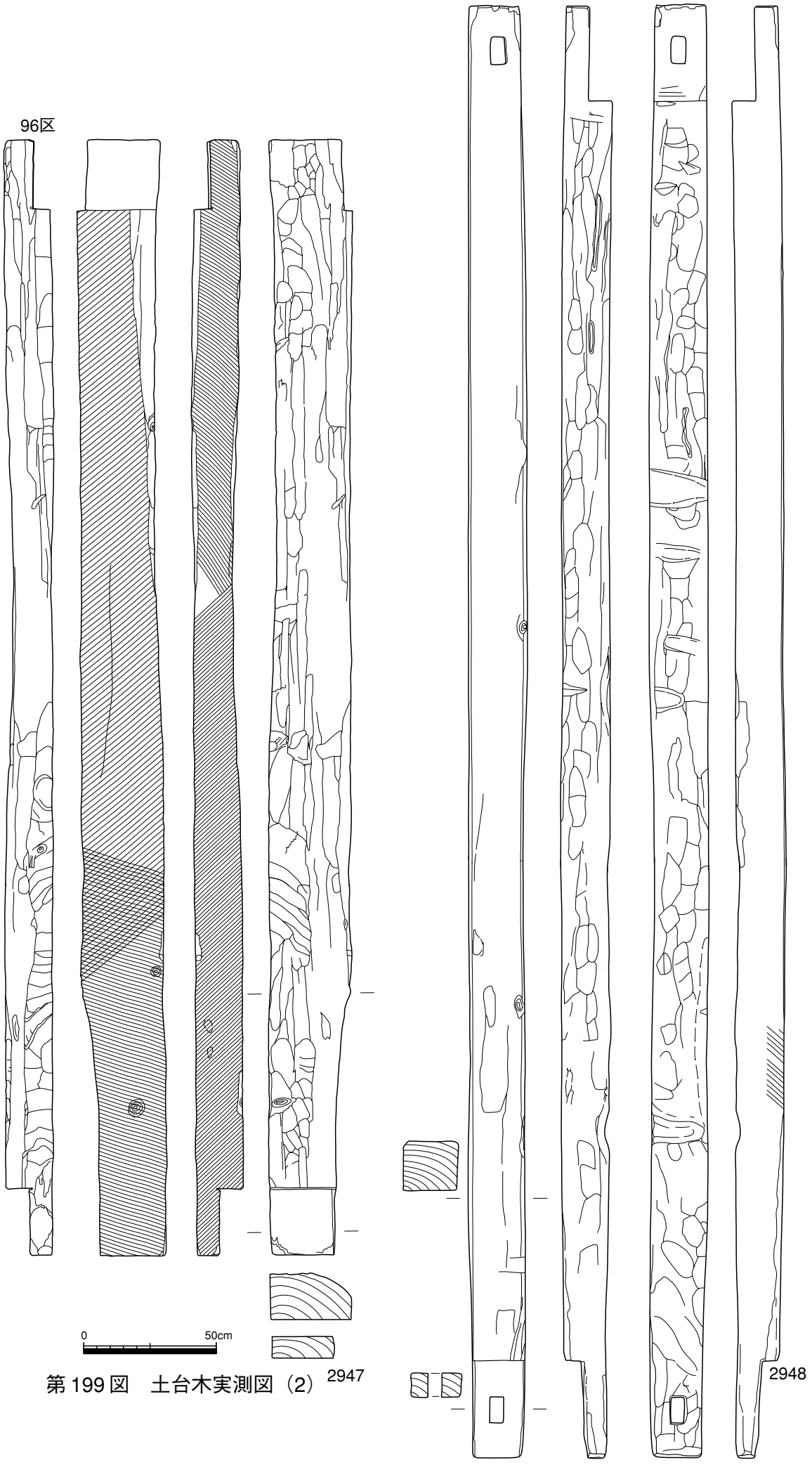
2951は「胴木28」として取り上げられた、全長285cm、最大幅28cm、最大厚16cmの規模を持つA2類の土台木である。丸太材を半裁した面を下にして配置されていた。上面に凹部を2ケ所持ち、上面と両側面にはチョウナによる加工痕が残存している。わずかに樹皮を除去した状態のままの部分が存在する。下面には鋸による加工痕が残存しており、両端部から曳き切られていた。細かな節がいくつか残存している。

2952は「胴木32」として取り上げられた、全長267cm、最大幅30cm、最大厚27cmの規模を持つA2類と推測される土台木である。一方の端部の木目が乱れているため正確な木取りを確認することができない。上面に凹部を2ケ所持ち、上面にのみチョウナによる加工痕が全体に残存していた。下面と両側面には鋸による加工（切断）痕が残存しており、一方の端部から一気にもう一方の端部まで曳き切られていた。下面は半分以上が遺存状態が不良で鋸痕が確認できなかった。また、一方の側面では斜めに割れていた。木目の状態が判然としないため正確に分類できないが、鋸痕が下面と両側面に残存することから、この3面が切断されて製材されたものと推測される。したがって、少なくとも丸太材を六分割以上に切り取った材を使用していたと考えられ、A3類と分類されよう。

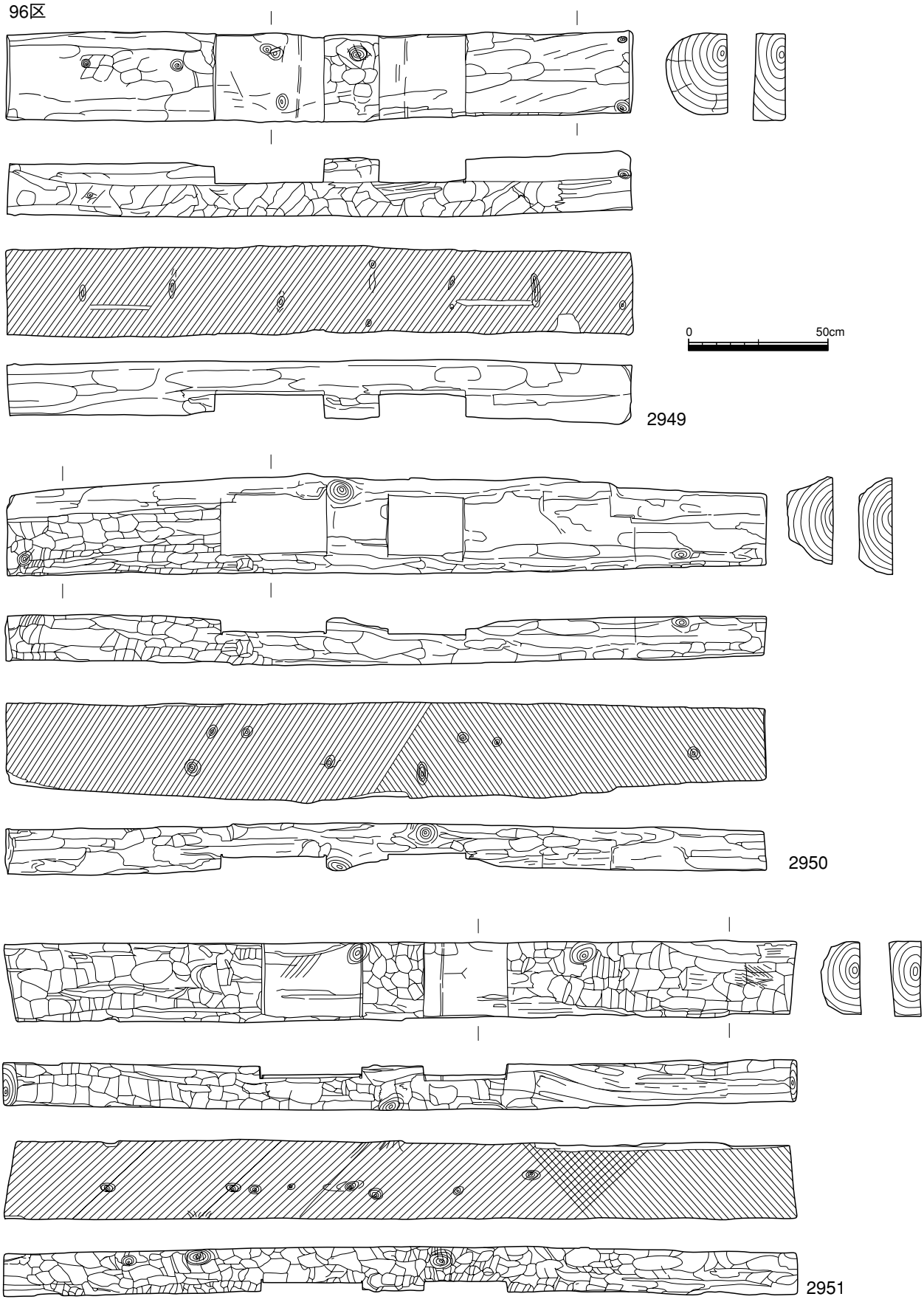
2953は「胴木33」として取り上げられた、全長



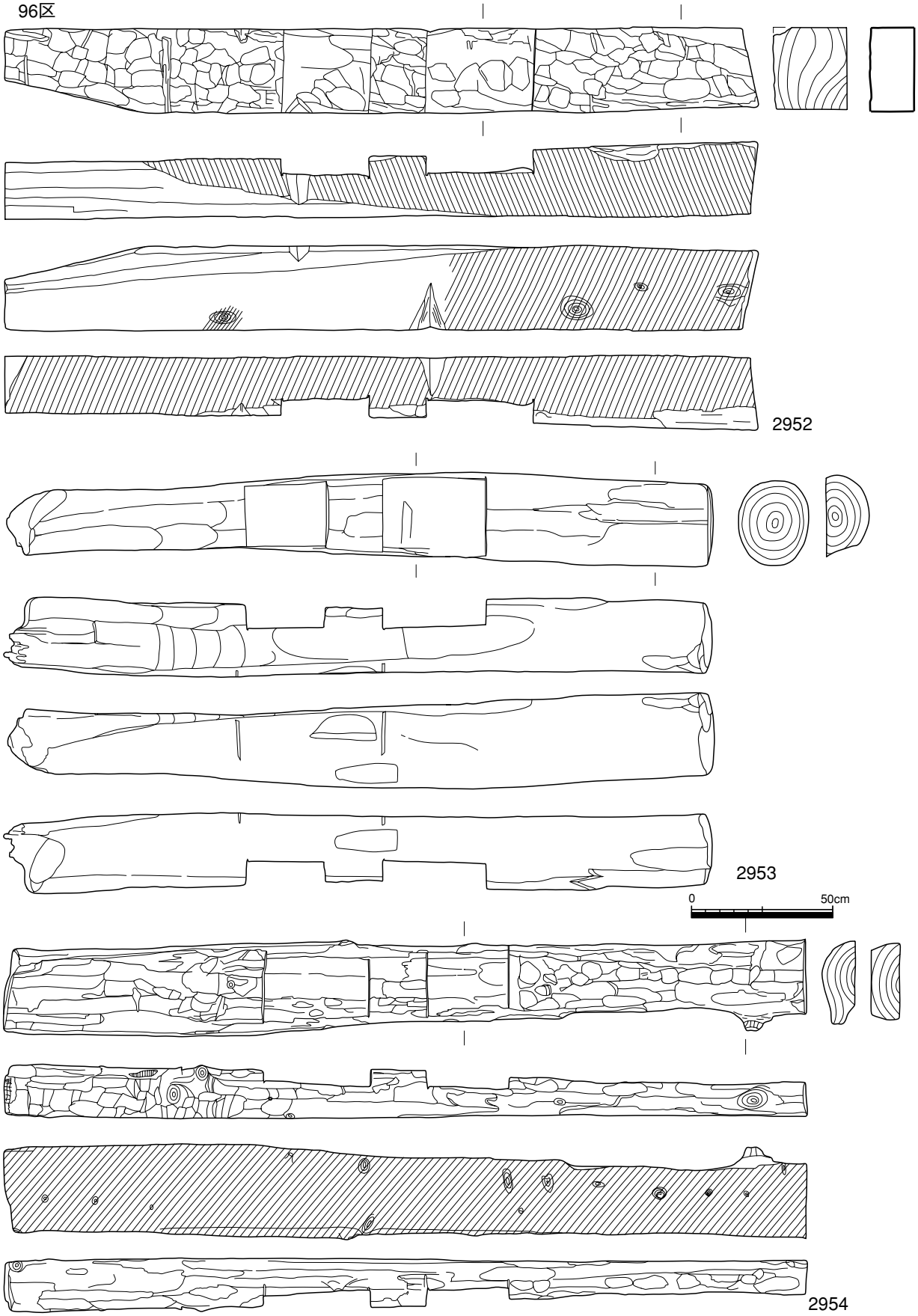
第 198 図　土台木実測図（1）



第 199 図　土台木実測図（2）



第 200 図　土台木実測図（3）



第 201 図　土台木実測図（4）

250cm、最大幅30cm、最大厚26cmの規模を持つA1類の土台木である。凹部と反対側の部分を下にして配置されていた。上面に深さ約9cmの凹部を2ケ所持ち、側面の一部などにチョウナによる加工痕が残存していたが、基本的には樹皮を除去した状態のままの部分が大部分である。節はあまり存在しない材が用いられていた。

2954は「胴木30」として取り上げられた、全長285cm、最大幅33cm、最大厚19cmの規模を持つA2類の土台木である。丸太材を半裁した面を下にして配置されていた。上面に凹部を2ケ所持ち、上面と両側面にはチョウナによる加工痕が残存していた。下面には鋸による加工痕が残存しており、一方の端部から一気にもう一方の端部まで曳き切られていた。一方の端部にはやや大きな節が、この他の部分には細かな節がいくつか残存する木材が用いられていた。

この他に、今回は図示できなかったが、実測可能な土台木は全部で17点存在する。ここでは、実測図を掲載しなかったものについては木取りの略図（第203図）を載せて報告しておきたい。これによると、胴木2・胴木3・胴木5・胴木13・胴木14・胴木20が土台木A1類に属し、胴木4・胴木8・胴木10・胴木11・胴木12・胴木22・胴木25が土台木A2類に所属し、胴木17・胴木19が土台木A3類に分類される。各土台木は、土台木の分類に関わらず幅や厚さがそれほど違わず同じような規模で製作されていることから、これらのA1類～A3類の区分は原材である丸太材の規模によって決められていると推測される。すなわち原材が細いものはA1類に属し、原材が著しく大きい場合はA3類に属すると考えられよう。

（3）土台木B類（第198・199・202図2945～2948・2955）

土台木B類は土台木両端部に相欠きほぞを設けるもので、実際には縦木として横木の上面に置かれていた。全部で6本が存在する。この土台木B類のほぞは材の厚さのおよそ半分に加工されており、別の縦木（土台木B類）とちょうど組み合わさるようになる状態であった。断面が正方形または長方形の角材が利用されている。

土台木B類は、ほぞ孔の有無で2類に分類できる。B1類は材の両端部にほぞ孔を設けるもの（2945・2948）である。B2類は材の両端部にほぞ孔を設けないもの（2946・2947・2955）である。土台木A類でみた製材の方法については、基本的には丸太材を縦方向に四分の一以上に分割した材を利用したものばかりであり、この要素での分類は難しい。以下に具体的な5つの事例を紹介する。

2945は「横木東2」として取り上げられた、全長407cm、最大幅29cm、最大厚15cmの規模を持つB1類の土台木である。上面と両側面にはチョウナによる加工痕が全体に隙間なく残存しており、下面には鋸による加工（切断）痕が残存している。下面の切断痕は一方の端部から一気にもう一方の端部まで曳き切られている状態が確認された。ほとんど節が残存しない材が用いられていた。調整痕からみて、2945は丸太材を半裁した材を利用し、上面や側面をチョウナで相当量削り取った製品と考えられる。組加工を施す際に切断し過ぎた鋸痕が残存している。ほぞ部に穿孔された孔は平面が長方形であるが、材に対してやや斜めに設けられている。両端のほぞは同じ面に作られている。

2946は「横木西3」として取り上げられた両端部が欠損するもので、残存長467cm、最大幅21cm、最大厚16cmの規模を持つB2類の土台木である。上面と一方の側面にはチョウナによる加工痕が残存しており、一部に樹皮を除去した状態のままの部分が存在する。もう一方の側面には鋸による加工（切断）痕が残存している。下面は調整痕を見い出すことが難しい状態であったが、木取り状態から推測すると下面も鋸による切断痕が存在していたと予想される。切断痕は一方の端部から材の途中まで曳き切られている状態であった。ほとんど節が残存しない材が用いられていた。調整痕からみて、丸太材を四分の一に分割された材を利用し、上面や側面をチョウナで相当量削り取った製品と考えられる。組加工を施す際に切断し過ぎた鋸痕が残存している。両端のほぞは異なる面に作られていた。

2947は「横木西1」として取り上げられた、全長

421cm、最大幅31cm、最大厚17cmの規模を持つB2類の土台木である。上面と一方の側面にはチョウナによる加工痕が残存しており、一部に樹皮を除去した状態のままの部分が存在する。もう一方の側面と下面には鋸による加工（切断）痕が残存している。鋸による切断痕は、両端部から曳き切られている状態が確認され、若干量の節が残存する材が用いられていた。調整痕からみて、丸太材を四分の一以上に分割された材を利用し、上面や側面をチョウナで相当量削り取った製品と考えられる。組加工を施す際に切断し過ぎた鋸痕が残存している。両端のほぞは異なる面に作られていた。

2948は「横木東1」として取り上げられた、全長549cm、最大幅21cm、最大厚19cmの規模を持つB1類の土台木である。上面と一方の側面にはチョウナによる加工痕が残存しており、一部に樹皮を除去した状態のままの部分が存在する。もう一方の側面と下面は遺存状態が不良で調整痕の判別が難しい状態であったが、わずかな痕跡から見て鋸による加工（切断）痕が残存していると判断することができる。若干量の節が残存する材が用いられていた。調整痕からみて、2948は丸太材を四分の一以上に分割された材を利用し、上面や側面をチョウナで相当量削り取った製品と考えられる。組加工を施す際に切断し過ぎた鋸痕が残存している。両端のほぞは異なる面に作られていた。

2955は「横木東3」として取り上げられた一方の端部が欠損するもので、残存長248cm、最大幅18cm、最大厚19cmの規模を持つB2類の土台木である。上面と両側面にはチョウナによる加工痕が全体に隙間なく残存しており、下面には鋸による加工（切断）痕が残存している。下面の切断痕は両端部から曳き切られている状態が確認された。節が残存する材が用いられ、調整痕からみて、丸太材を六分の一以上に分割された材を利用し、上面や側面をチョウナで相当量削り取った製品と考えられる。組加工を施す際に切断し過ぎた鋸痕が残存している。

図示しなかったが「横木西2」として取り上げられた土台木は、残存長408cm、最大幅31cm、最大厚18cmの規模を持つB1類の土台木である。節が残存する材が用いられ、調整痕からみて、丸太材を半裁した材を利用し、上面や側面をチョウナで調整した製品と考えられる。組加工を施す際に切断し過ぎた鋸痕が残存している。

4　杭

（1）概要

97C区（96区）の柵列からは、柵を構成する杭が多数出土している。これらについては柵列によって杭の形状などが異なっていることが判明している。したがって、ここでは遺構別に代表的な資料を提示して記述を進めていきたい。

まず、杭を大きく横断面形態で2類に区分する。杭A類は横断面形が多角形状となるもの、杭B類は樹皮が付いた自然木のままの状態のもの（結果として横断面形は円形となる）に分けられる。

（2）SA01出土杭（第204図2960）

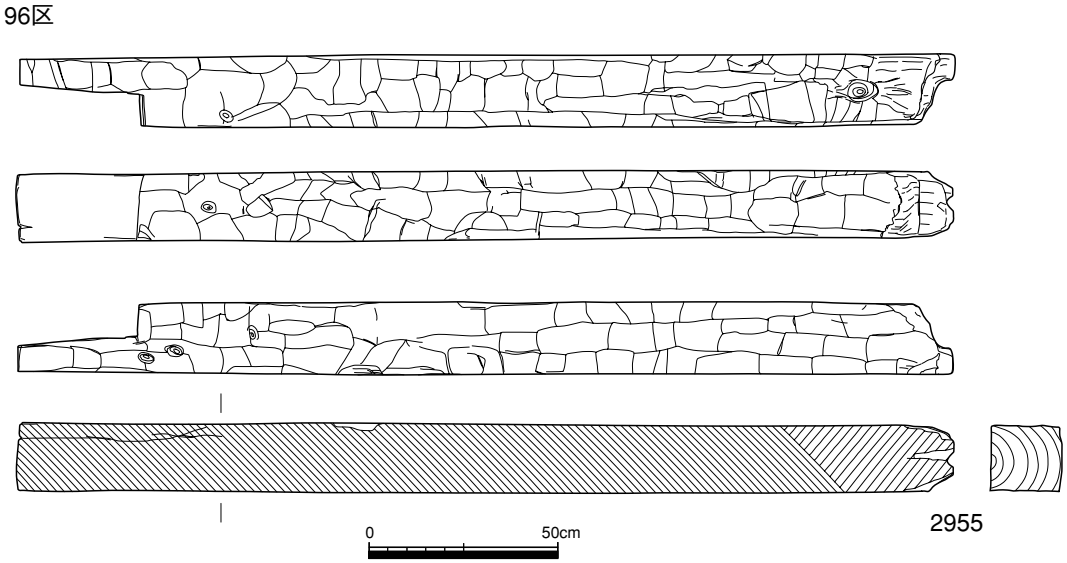
SA01は大部分が杭B類で構成された柵列であり、その杭の具体例として2960を取り上げる。2960は直径が4～5cm、残存長が109cmを測る杭B類である。下端部が鋭利に尖らせている他に加工痕は認められない。上端部は欠損している。

（3）SA04出土杭（第204図2958・2959）

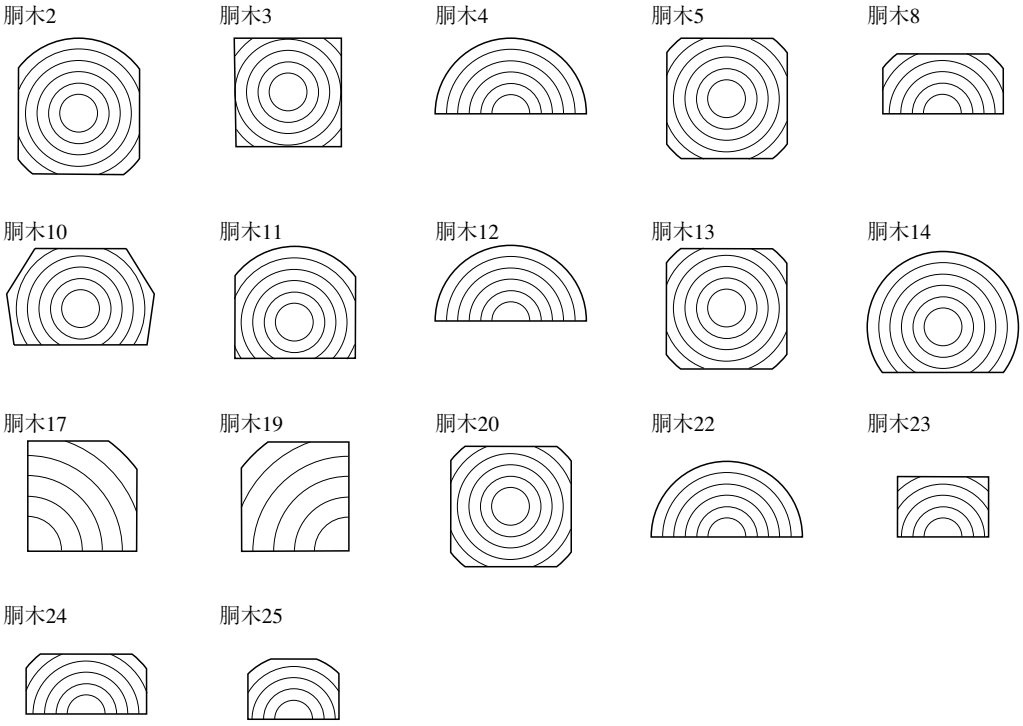
SA04は大部分が杭A類で構成された柵列で、その杭の具体例として2958・2959を取り上げる。2958は最大幅が約6cmで残存長が105cm、2959は最大幅が約8cmで残存長が106cmを測る杭A類である。両者は断面多角形を形作る杭の各側面はチョウナによって連続的に先端まで削られている。下端部は深く削ることにより鋭利に尖らせている。上端部の遺存状態は不良である。

（4）SA05出土杭（第204図2956・2957）

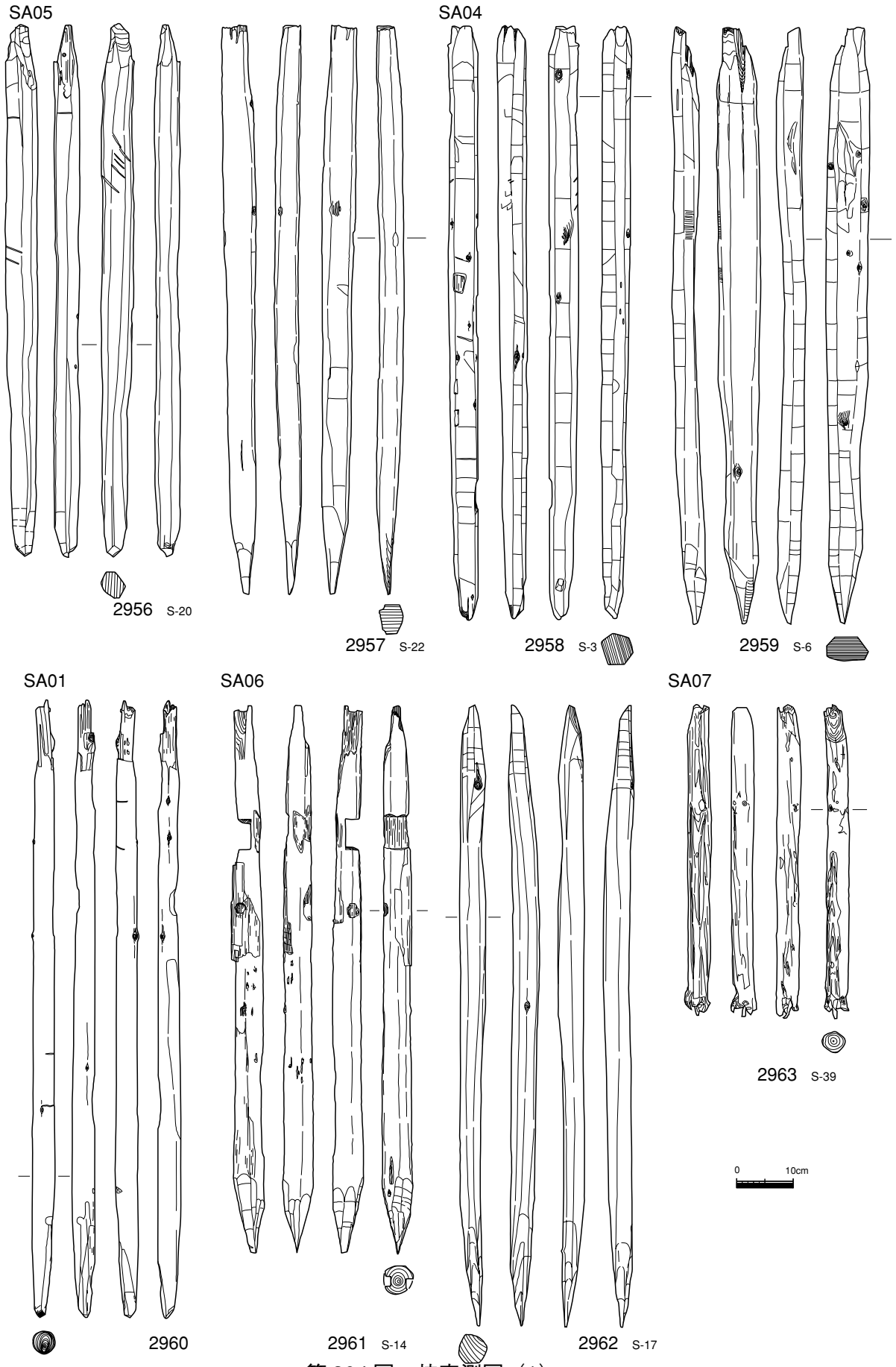
SA05は杭A類と杭B類で構成された柵列である。2956は最大幅が約6cmで残存長が94cm、2957は最



第 202 図　土台木実測図（5）



第 203 図　土台木断面模式図


SA05
SA04
2956 S-20
2957 S-22
2958 S-3
2959 S-6
SA01
SA06
SA07
2960
2961 S-14
2962 S-17
2963 S-39
0 10cm

第 204 図　杭実測図（1）

大幅が約 7cm で残存長が 101cm を測る杭Ａ類である。両者の各側面は上端から下端までほぼ一気に削られており、割裂法による成形かヤリガンナ状工具による加工が施されたと推測される。2956は下端部は短く先端を鋭利に加工し、2957は下端部は長く鋭利に尖らせている。2956は上端部も先端を尖らせている。

（５）SA06 出土杭（第 204 図 2961・2962）

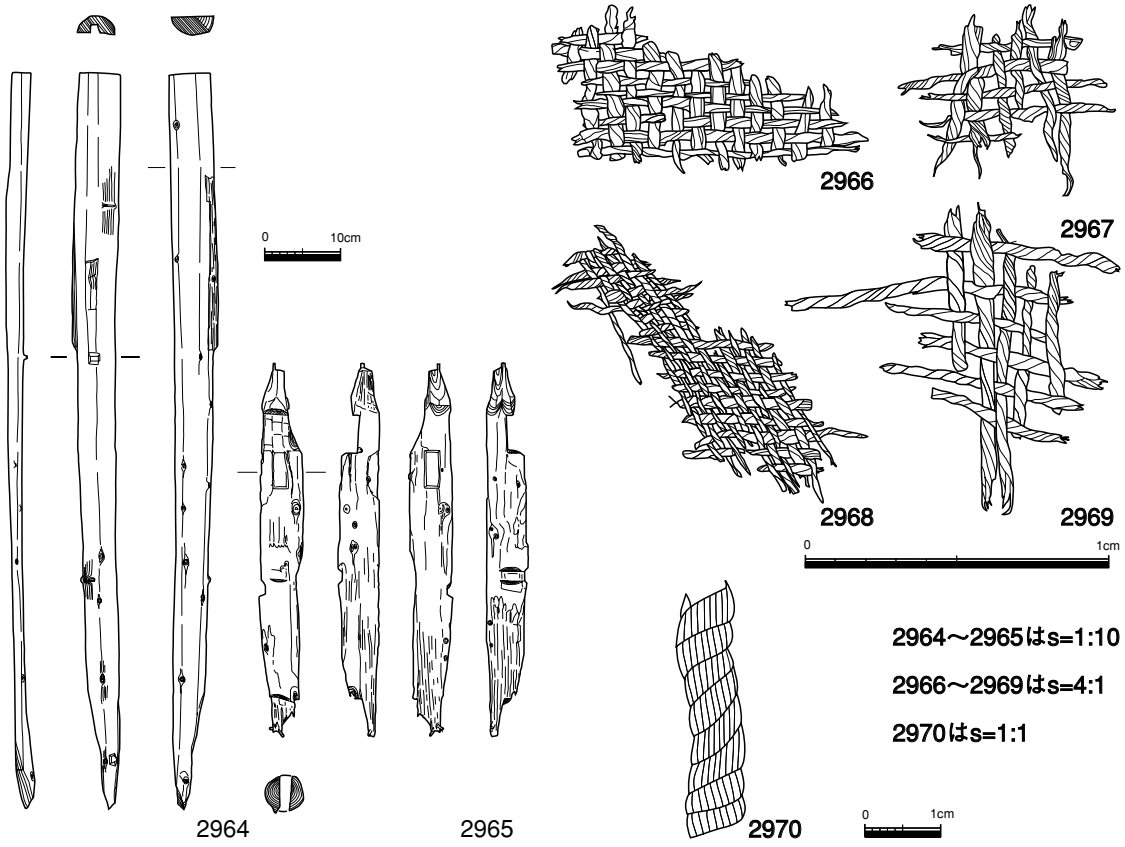
SA06 は大部分が杭Ａ類で作られた柵列で、具体的事例として2961・2962を取り上げる。2961は最大幅が約6cmで残存長が97cm、2962は最大幅が約6cmで残存長が110cmを測る杭Ａ類である。両者は断面多角形を形作る杭の各側面は上端から下端までほぼ一気に削られており、割裂法による成形かヤリガンナ状工具による加工が施されたと推測される。2961は上位に方形の溝を持つもので、転用材と推測される。2962は上端部もチョウナによって鋭利になっている。

（６）SA07 出土杭（第 204 図 2963）

SA07は杭Ａ類と杭Ｂ類で構成された柵列である。2963 は残存長が 55cm を測る杭Ｂ類である。先端がわずかに削られている。

（７）SA08 出土杭（第 205 図 2964）

SA08は大部分が杭Ａ類などで構成された柵列で、具体例として2964を取り上げる。2964は最大幅が約6cmで全長が97cmを測る杭Ａ類である。断面多角形に形作った材を半裁したものの先端を削って尖らせている。上端面はきれいに切断された状態である。



第 205 図　杭・布など実測図

5　繊維製品

（1）概要

繊維製品は本来別項目を立てるべきところであるが、ここでは木製品の項目の中で報告することとしたい。繊維製品は97B区NR02から出土した青磁皿の内部に遺存していた。実測図を作成することができたものは4点存在する（2966～2969）。この他に同じ遺構から紐（2970）も出土している。

（2）布

2966～2969は平編みされた粗い布状の製品である。2966は太さが約0.4mmの糸を編んだ布で、長さにして約1cmが残存していた。2967は太さが約0.5mmの糸を、2969は太さが約0.6mmの糸を編んだ布である。2968は太さが約0.2mmの糸を編んだ布で、斜めに崩れた状態となっている。長さにして約1cmが残存していた。

（3）紐

2970は長さが3.2cm残存する紐である。

（Ⅴ） 石製品

1　概要

今回の発掘調査から出土した石製品は、五輪塔や宝篋印塔などの墓石類、石臼や硯などの生活道具類、砥石などの生産道具類などの多種多様なものが認められる。五輪塔や宝篋印塔などの墓石類や石臼は96区および97C区の石垣裏込めの栗石に混入して出土したものが多い。その他の製品は99Ａ区や99Ｂ区などで出土している。出土した地点や遺構は96区および97C区の墓石類や石臼を除くと多様でありかつ出土量は少量しかないことなどから、石製品の報告は種類別に報告することとしたい。

2　資料紹介

（1）石臼

石臼には挽臼と茶臼の2種が存在する。

Ａ　挽臼（第206図2971 ～ 2976）

挽臼には上臼（2971～2973）と下臼（2974～2976）があり、全て花崗岩製である。上臼は上面中央部が緩やかに凹んでいるもので、今回出土した資料は大部分が欠損しているがその中で孔を持つものは存在しなかった。下面には溝が彫られており、2971は主溝6本、副溝6本以上の6分割6溝？の目が刻まれていると推測される。2972と2973は目の構成を復元することができなかった。一方、下臼は扁平な円盤状の石材の上面に溝が彫られたものである。2974は8分割4溝の下臼と推定され、2975は7本以上の溝が刻まれていた。石の厚さは5cm程度のもの（2976）と8cm前後のもの（2974・2975）がある。いずれも溝が刻まれた面はよく磨耗しており溝が浅い傾向がある。

Ｂ　茶臼（第209図3003・3004）

茶臼は下臼の受け皿部分の破片のみが確認された（3003・3004）。両者とも受け皿の口縁部上端面が水平となり、裏面には鑿痕が残存している。安山岩製。

（2）五輪塔

今回の調査では、組合せ五輪塔の部材と一石五輪塔の破片が認められた。大部分は組合せ五輪塔の部材で、空風輪と水輪が多く、火輪と地輪が若干量確認された。

Ａ　空風輪（第207図2977 ～ 2985）

空風輪は、空輪の形状で分類すると、空輪の中央付近で最大径があり下に行くにつれて径が小さくなる1類（2977 ～ 2981・2983）、空輪の中央付近で最大径があるが下位の括れ部まで径がほとんど変わらない2類（2984・2985）、空輪の下位に最大径を持つ3類（2982）に区分される。また、空輪と風輪の大きさに着目すると、空輪の最大径の方が風輪よりも大きいＡ類（2980）、空輪と風輪の最大径がほぼ同一のＢ類（2977・2978・2981・2983・2985）、風輪の最大径の方が空輪よりも大きいＣ類（2979・2982・2984）に分類することも可能である。空輪の頂部の形状が普通に尖るものとやや突出するもの（2983）があり、前者のものが多数を占めている。風輪は逆裁頭円錐形となり最下部には半球形のほぞが削り出されている。全て花崗岩製である。

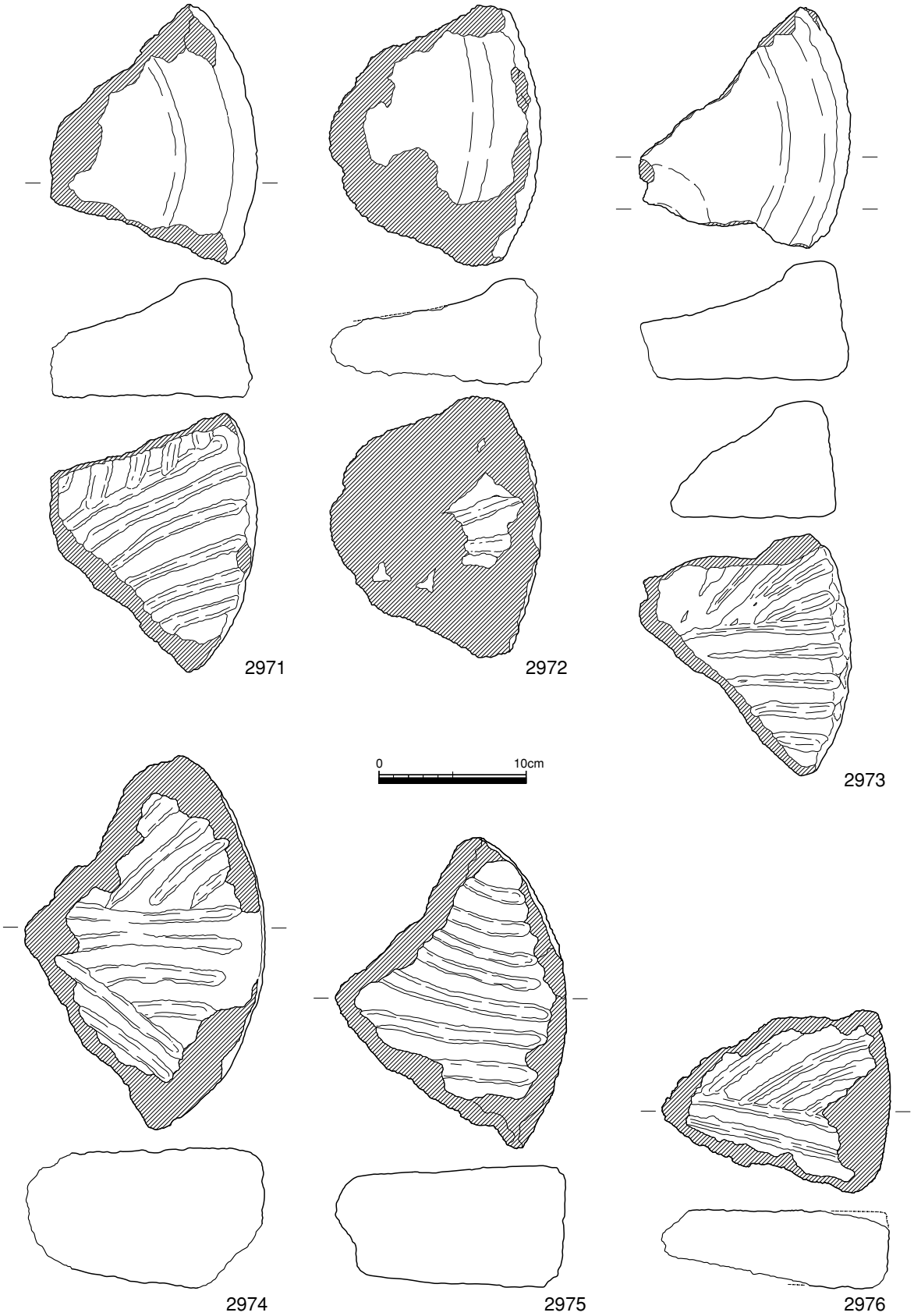
Ｂ　火輪（第207図2987）

火輪は非常に少なく、ここでは2987の資料を紹介する。2987は下面がほぼ平坦となるもので、自然石の面を利用したものではないタイプである。花崗岩製。

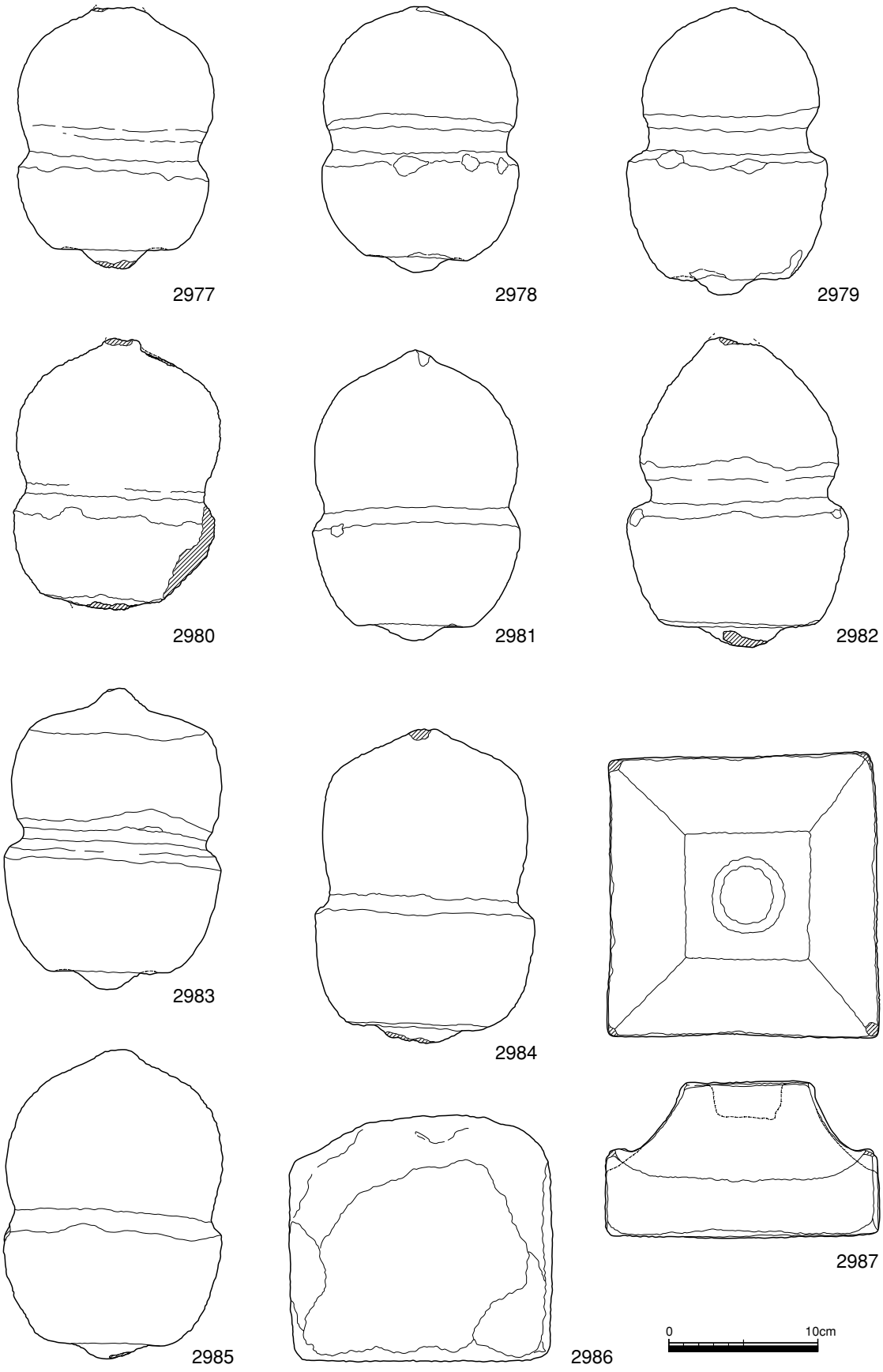
Ｃ　水輪（第208図2988 ～ 2993・2996）

水輪は縦断面形から2類に分類できる。1類は最大径がほぼ中央に位置する縦断面形が楕円形となるもの（2988・2989・2992・2993・2996）であり、2類は最大径がやや下方にある下膨れの形状となるもの（2990・2991）である。全て花崗岩製。2993は側面の一部に円形に一段高く削り出された部分が存在する水輪である。

Ｄ　地輪（第207図2986）



第 206 図　石製品実測図（1）



第 207 図　石製品実測図（2）

地輪は2986の1点のみが確認されたが、上半部が欠損しており全体の形状を復元できない。一辺が約17cmの角柱状を呈すると思われ、花崗岩製である。

E　一石五輪塔（第208図2994）

一石五輪塔は水輪と地輪が残存したと考えられる破片のみが確認された。一石五輪塔は清洲城下町遺跡では珍しいものである。

（3）宝篋印塔

宝篋印塔には相輪部、塔身と相輪部の請花・伏鉢と推測されるものなどがある。

A　相輪部（第209図2998）

2998は安山岩製の相輪部で上下端部が欠損する。相輪は8段が残存していた。

B　請花・伏鉢（第208図2995）

2995は、宝篋印塔とは確定できないが、相輪部の請花・伏鉢と推測されるもので、花崗岩製であった。

C　塔身（第209図2997）

2997は一辺が約13cmの立方体で上部に円柱状のほぞが付いている。正面には刻書で「為浄源霊　南無妙法蓮華経　長享二年九月十日」と記されている。長享二年は1488年である。上面と下面にはのみ痕が多数残存する。

（4）砥石

砥石は石材の種類で大別されるが、今回の資料では凝灰岩製の仕上げ砥に相当するものが多い。石材や規模・形状から以下の5類に分類できる。1類は幅が4cmを超え、長さが6cmを超える比較的大きな扁平な凝灰岩製砥石である。2類は幅が3～4cm前後の偏平な凝灰岩製砥石、3類は幅が2cm前後の偏平な凝灰岩製砥石、4類は幅が1cm前後の細長い凝灰岩製砥石、5類は砂岩製砥石で平面形はばち形となるものである。

A　砥石１類（第209図3005～3008）

全て上下端部が欠損し、全体の形状を復元できない。3005と3006の表面には細かい傷が残存しており、3007は使い込まれ中央部がやや凹んでいる。

B　砥石２類（第209図3009～3014）

3014のみが厚くなっている他は厚さが1cm前後と薄いものである。3009は下端部がややばち形に広がっている。

C　砥石３類（第209図3015～3017）

3015は角柱状の形状、3016はやや扁平な形状、3017は下端部がやや円弧状になるものである。

D　砥石４類（第209図3019・3021・3022）

非常に細長い扁平な凝灰岩製砥石である。3019は平面が滴形を呈するものである。

E　砥石５類（第209図3023）

3023は大部分が欠損し全体の形状を復元できないが、多角柱状の砂岩製砥石であったと推測される。

（5）その他の製品

A　硯（第209図2999～3002）

硯はいずれも上端部（海部）が欠損したものである。2999は裏面に「正壽庵」と細かく刻書されていた。3002は中央部が著しく磨り減って凹んでいる。

B　軽石（第209図3020）

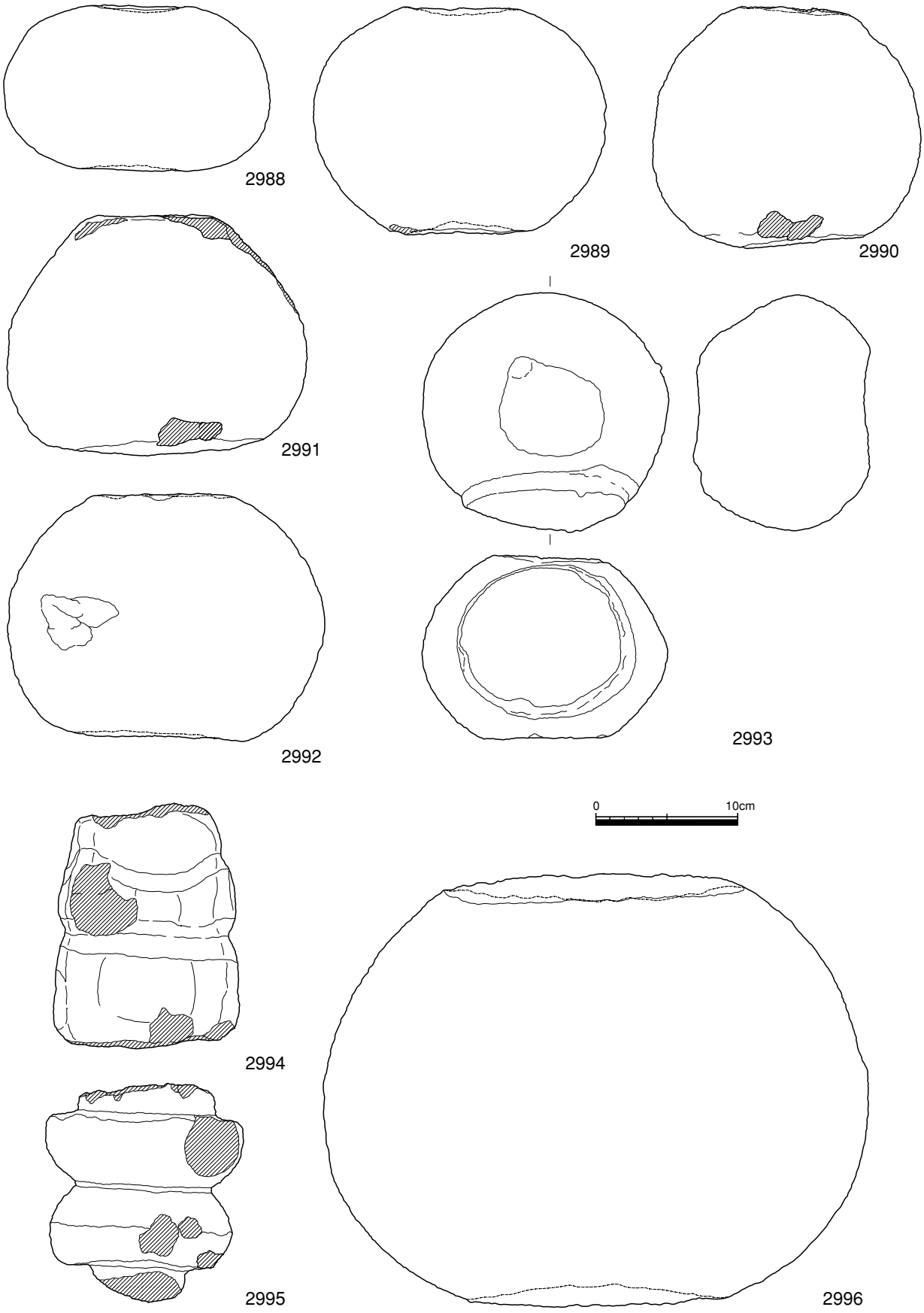
平面が半円形状で頂部に近い位置が穿孔されている。

C　火打ち石（第209図3024）

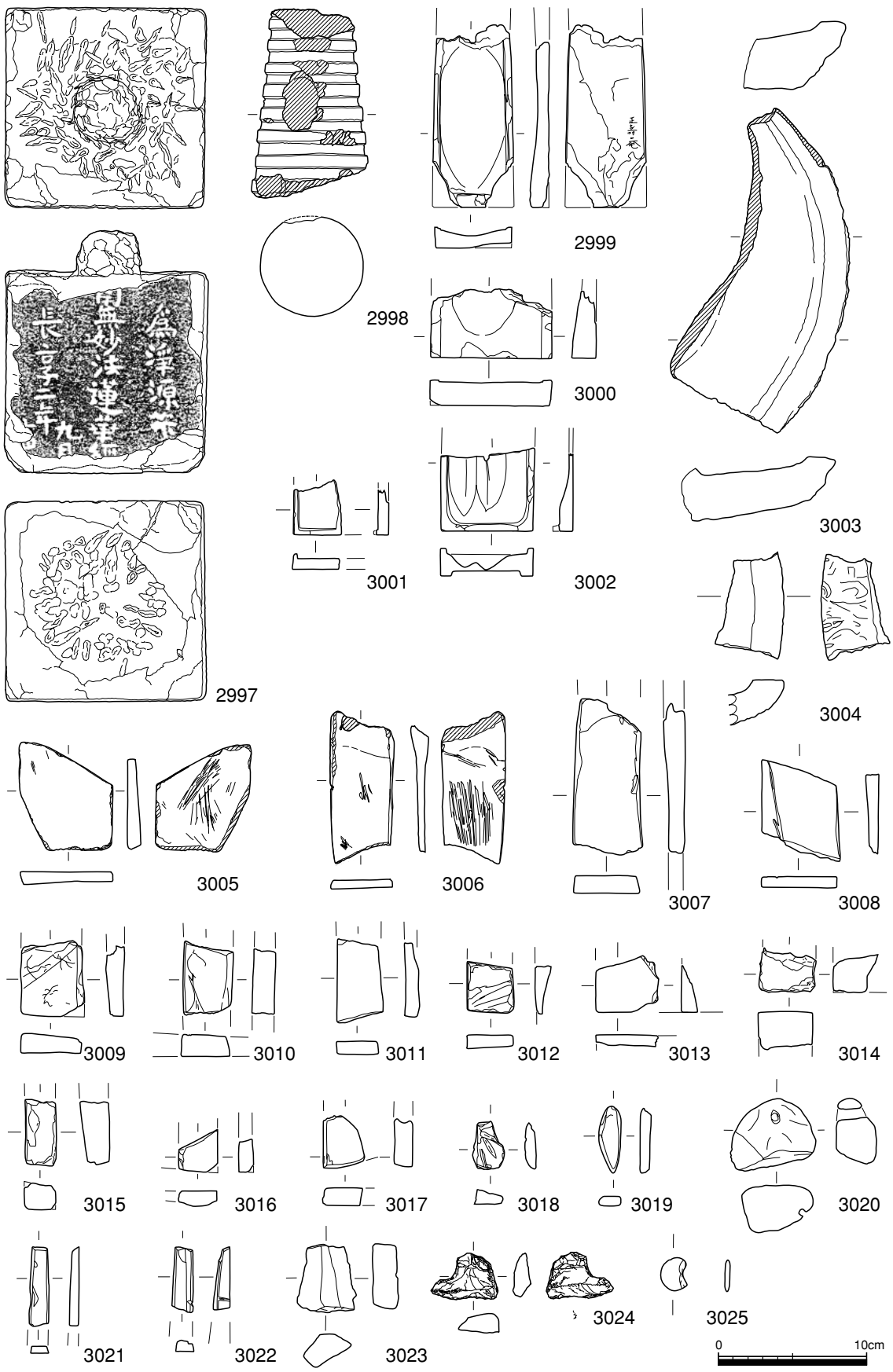
チャート製の火打ち石で、上端部に細かい使用痕が残存する。一部が鉄粉が付着し錆付いたためか茶色に変色していた。

D　碁石（第209図3025）

3025は黒色の石材で円形に作られた碁石と考えられるもので、一部欠損していた。



第 208 図　石製品実測図（3）



第 209 図　石製品実測図（4）

（Ⅵ）金属製品・金属関連遺物

1　概要と分析の方法

金属製品･金属関連遺物は全部で1862点が出土した。これらは材質から、鉄製品、銅製品、鉛製品、金属器製作に関連する鉄滓などの金属関連遺物に分けることができる。ここでは資料の紹介を材質毎に分けて行い、調査区別には記述しないこととした。

さて、金属製品・金属関連遺物については、まず全ての資料を選別抽出した後に、1点ずつ規模や着磁度とメタル反応について計測し発泡などの属性について肉眼観察を実施した。その具体的な内容は『門間沼遺跡』（石黒編1999）で実施した方法に準拠しており、同文献を参照されたい。その後、1800点を超える資料を全部図示することは難しいので、必要最低限の資料を選別し報告することとした。図示しなかった資料についてはCD-ROM掲載の一覧表を参照されたい。なお、甲冑類（小札と喉輪の月形）については磯村豊司氏のご教示を得た。

2　鉄製品

鉄製品には、小札、釘、鏃、火打鎌、刃物類、鍬先など様々な製品が存在する。

（1）小札（第210図3026 ～ 3041）

97B区NR02植物層から比較的多くの小札類が出土した。これらは形状から大きく4類に分類できる。1類は頭部が斜めに切断され孔が3列に配列される「小札頭三目札(こざねがしらみつめさね)」（3026 ～ 3032）、2類は頭部に半円形の山が3つ取り付き孔が3列に配列される「三山碁石頭三目札(みつやまごいしがしらみつめさね)」（3033 ～ 3036）、3類は頭部が平坦に切断され孔が3列に配列される「一文字頭三目札(いちもんじがしらみつめさね)」（3037）、4類は頭部が斜めに切断され孔が2列に配列される「本小札(ほんこざね)」（3039・3040）である。1類～3類の三目札は鉄札と革札を交互に重ね合わせて使用されるタイプである。1類は孔の形状がいびつであることや大きさなどからみて鎌倉時代に多い小札と考えられ、広島県厳島神社蔵浅葱綾威鎧に使用される札に類似する。2類と3類は室町時代に多い小札と推測され、表面に付着する褐色固着物は木屑を使用した韋包（かわづつみ）の残欠の可能性がある。また3033のように縦断面が彎曲するものが存在することから見て腹部分に用いられた小札の可能性が高い。1類から3類の組み合わせから見て、鎌倉期の小札を利用した室町期の韋包腹巻の一部であった可能性が大きいと言える。大阪府金剛寺蔵燻韋包腹巻に類似すると思われる。4類は下幅が広く、室町時代のしころ部分の本小札と想定される。

97B区以外にも数点の小札が出土したが、まとまった出土状態を呈しておらず、詳細は復元し得ない。

（2）喉輪の月形（第210図3042）

前述の小札群が出土した地点では喉輪の月形も出土した。平面が馬蹄形を呈した鉄板の端部が外側に折り曲げられた製品で、表裏両面には厚く黒色漆が塗布されていた。漆塗りの外側には部分的に布が残存していた。部分的に土砂が固着して不明な部分があるが、内側の外周部に沿って孔が並んでおり、両端にも2個ずつ孔が穿たれていた。形状などから見て室町時代に属すると考えられ、伝来する色々威胴丸大袖喉輪付の喉輪に類似するものと思われる。

（3）釘（第210図3043 ～ 3066）

釘は、長さが2～12cmくらいの範囲で分布しており、角柱状の鉄棒の頭部を扁平に一旦打ち伸ばした後に折り曲げて作成したものである。頭部が欠損したもの（3062など）や途中で折れ曲がったもの（3053など）があり、全体に土砂の固着が著しく遺存状態は不良である。3051は頭部を直角に折り曲げた鉄釘で、頭部の幅はそれほど打ち伸ばされてはいない。

一方、3054などは頭部が広く打ち伸ばされており、折り曲げた結果平面形が「T」字状となっている。

（4）鏃（第211図3067～3070）

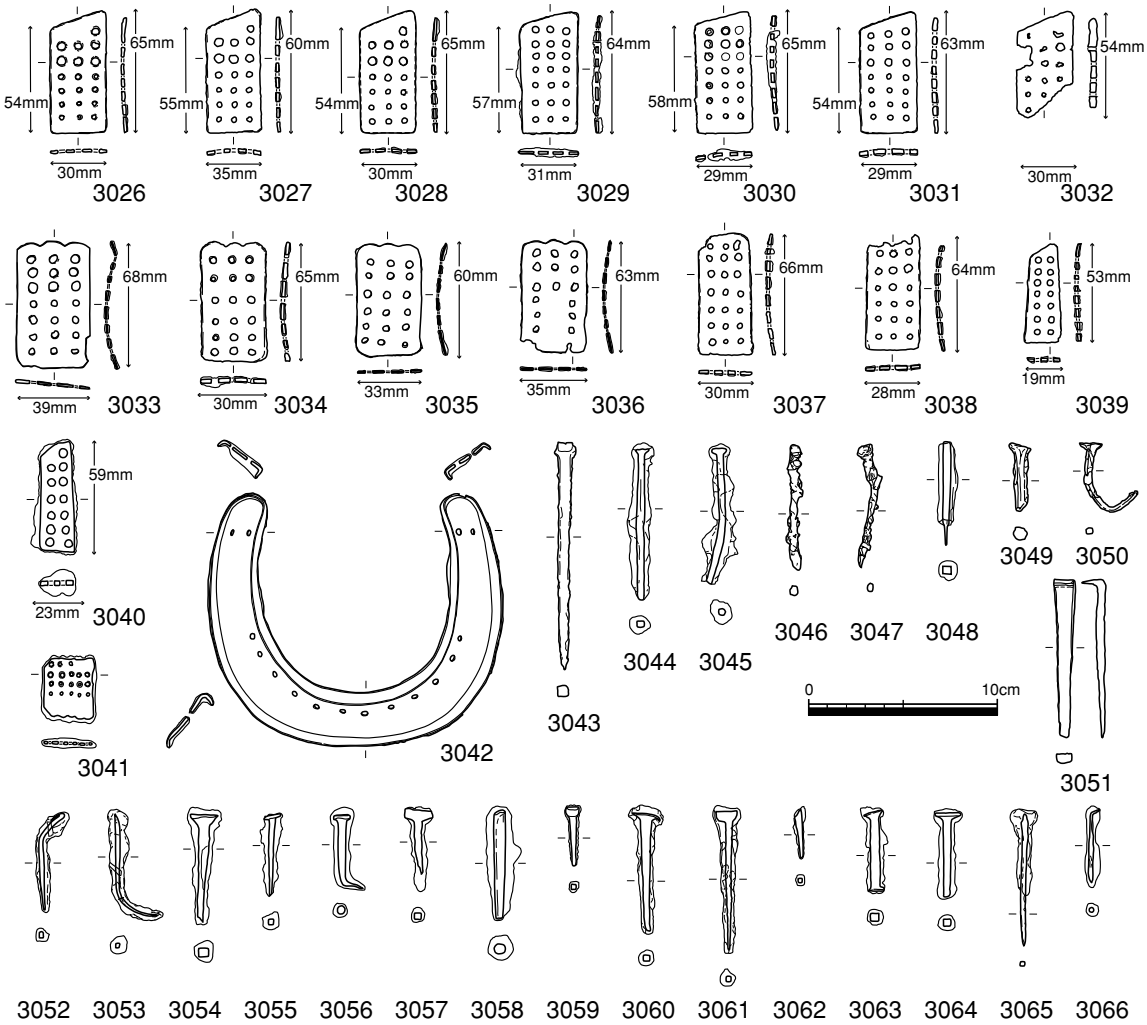
鉄鏃と推測される遺物は全部で4点が確認された。3067と3068は99B区東壁から出土した鉄製品で、両者は本来は同一個体であった可能性が考えられる。3067は鏃の基部、3068は刃部が残存する資料であり、後者の刃部は平面が幅広い「Y」字状を呈するものである。3069は97C区の石垣遺構の下の堆積層から出土した鉄鏃で、刃部の平面形は中央部が括れる長方形状、縦断面形は二等辺三角形状になるもので、基部の先端も鋭利に尖った状態となっている。3070は固着が著しく破損した資料であるが、刃部の平面形は菱形となるものである。この他に鏃ではないが、二股刺突具（3071）も出土している。

（5）火打鎌（第211図3072～3075）

火打鎌には平面形態から2類に分類できる。1類は中央上部が突出するタイプ（3072～3074）で、3073には突出部に孔が1個穿たれていた。2類は両端部が上方に直角に折れ曲がり「コ」の字状を呈するタイプ（3075）である。

（6）刃物類（第211図3076・3084）

刃物類には刀子や包丁？などがあるが、刀子は刃



第210図　鉄製品実測図（1）

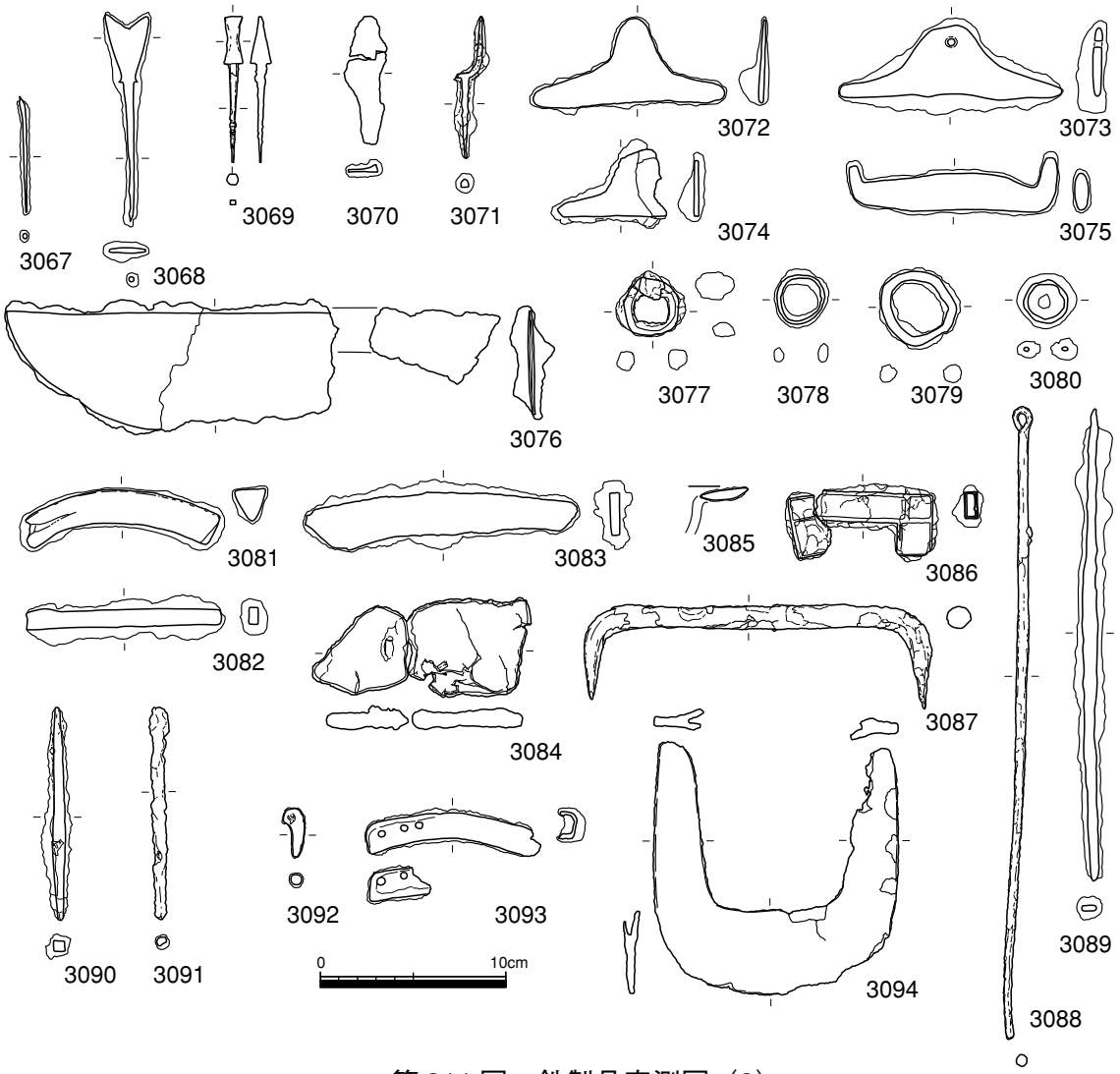
部が残存しておらず銅製の柄部が残るもので、ここでは報告しない。包丁と考えられる製品は3076などがある。3076の刃部の背は直線的になっている。

（7）鍬先（第211・212図3094・3095）

鍬先は2点が確認され、両者とも97C区の石垣の裏込め部分や石垣の下層から出土している。3094は全長約13cm、幅約13cmの鍬先で、横断面はV字形を呈している。平面形は丸みを持った「コ」の字状になっており、刃部の一部が欠損する。3095は全長約40cm、幅約21cmの大鍬の鍬先で、横断面はV字形を呈している。平面形は馬蹄形に近いが、刃部の幅は広く約22cmを測る。刃部の先端は丸くなっている。3095の内側には木製鍬身（3096）がはめ込まれていた。3096のやや上部には平面形が台形を呈する孔が存在し、そこに鍬柄が差し込まれたものと考えられる。3097は鍬身と鍬柄を固定するための楔と思われる。

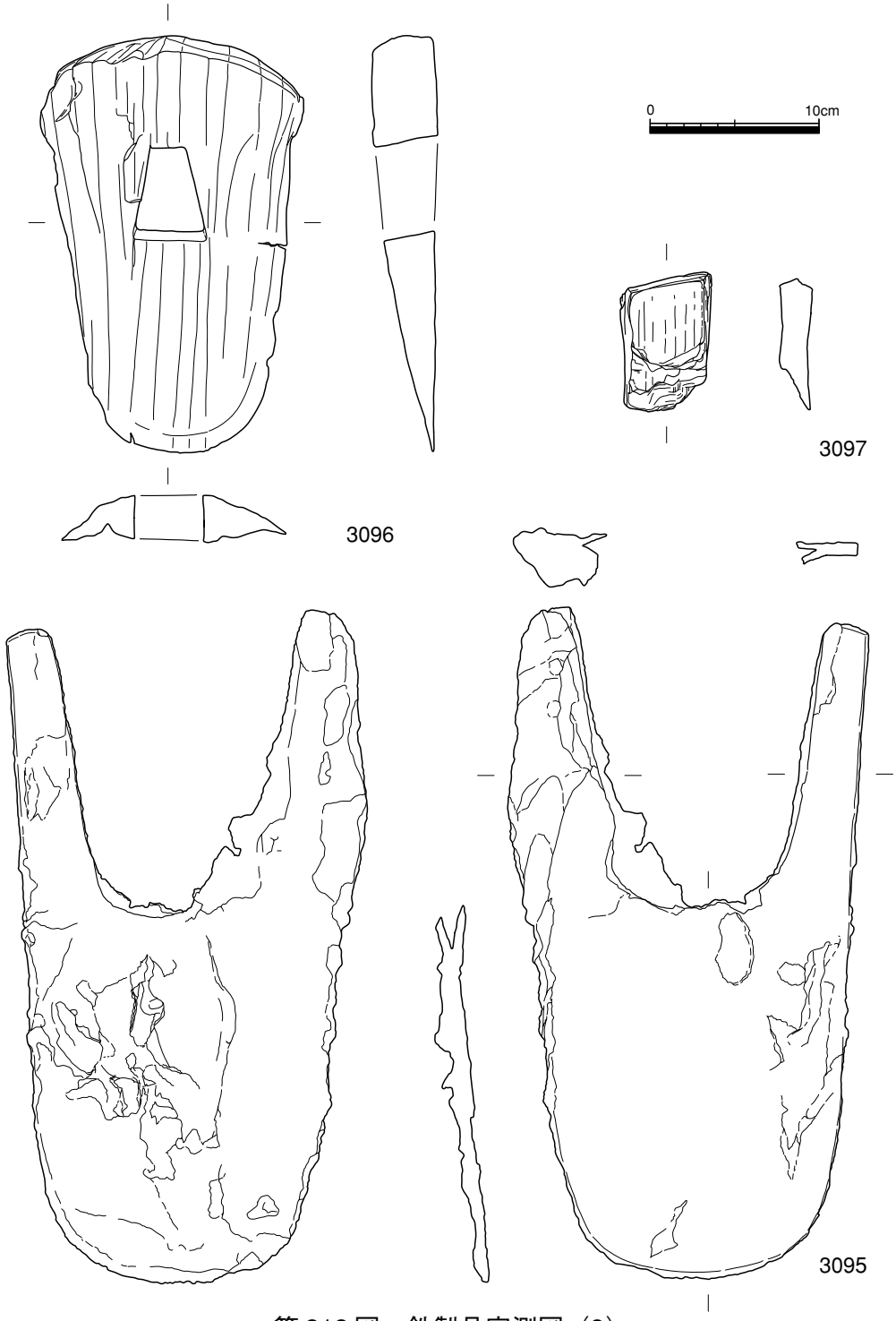
（8）その他の製品

3077～3080はリング状の鉄製品で、大きさから直径約3cmのもの（3077・3078・3080）と直径が4cm前後のもの（3079）がある。3085は容器の口縁部で外面に多量の煤が付着している。小破片のため口径



第211図　鉄製品実測図（2）

を推定できないが、直径はかなり大きいものと推測され鉄鍋の口縁部と思われる。3087は非常に大きな鎹、3088は頭部が環状に曲げられた火箸である。



第212図　鉄製品実測図（3）

3　銅製品

銅製品には、鏡、飾金具、刀子、煙管、笄、銭貨など様々な製品が存在する。

（1）鏡（第213図3105）

3105は97B区NR00から出土した鏡で、面径は約8.5cmを測る小振りなものである。外周部はL字状に折れ、端部は断面方形となっている。裏面には二重の圏線が巡っており、その内側の紋様構成は遺存状態が不良であるため不明である。

（2）飾金具（第213図3098・3099）

飾金具（目貫）としたものは3098と3099がある。3098は円形が2つ重複する形状で表面に草花紋が施されていた。3099は紋様のモチーフは不明である。

（3）刀子（第213図3100～3104）

今回の調査では刀子の柄が4点出土している。これらの刃部は鉄製、柄部は銅製のものと考えられ、全て刃部が欠損している。3100は銅製柄部に刃部の中子付近がかろうじて残存し錆膨れしているもの、3101は表面にモチーフが不明であるが、紋様が施されたものである。3104は刃物のはばきである。

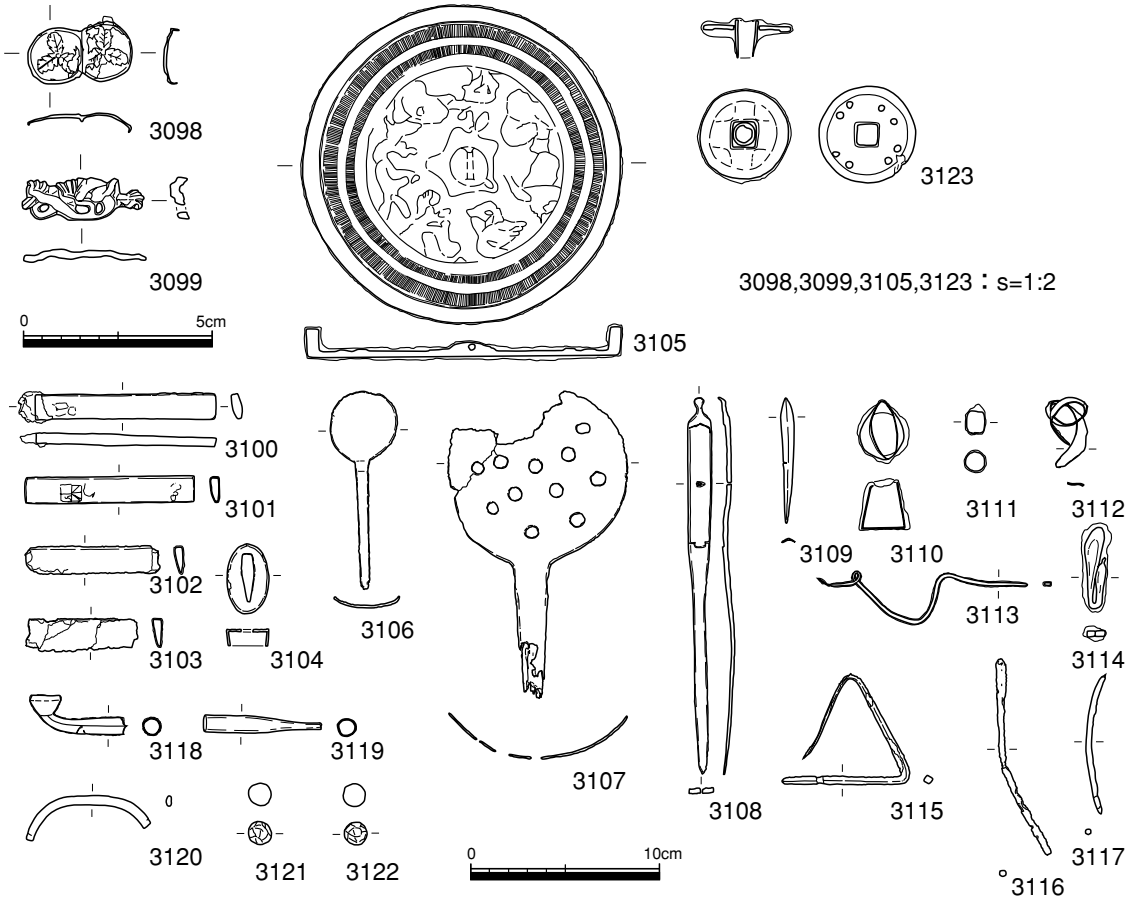
（4）煙管（第213図3118・3119）

煙管は雁首（3118）と吸口（3119）が出土した。これらは宿場町期に属する遺物と想定される。

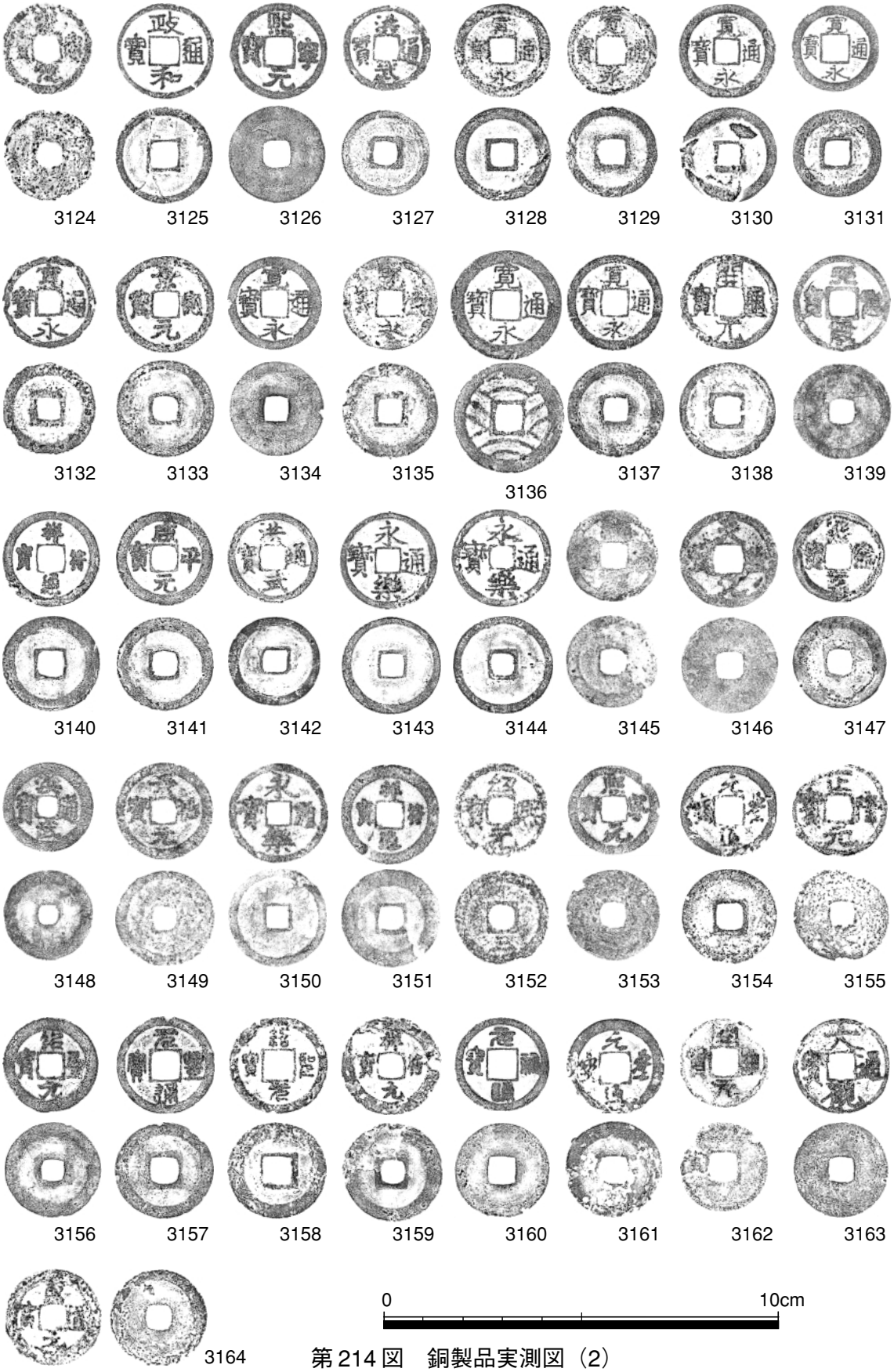
（5）銭貨（第214図3124～3164）

銭貨は各調査区から国内銭と渡来銭が全部で86点出土している。ここでは、数枚がまとまった状態で出土したものを中心に報告する。

3126～3131は96区SX01の2層から出土した銭貨



第213図　銅製品実測図（1）



第 214 図　銅製品実測図（2）

で、新寛永通寶などが出土している。

3138～3145は97B区NR02植物層から出土した一括資料で、巾着袋状のものに包まれた状態で出土したものである。遺存状態が不良なものも存在するが、全て渡来銭で構成されていたと推測され、洪武通寶や永楽通寶などが含まれている。3138は孔が所々開いており、3145は部分的に発泡した状態になっている。この他に97B区NR02植物層からは3146～3149なども出土している。3146は二次的に火を受けたためか表面が一部溶解して文字が不鮮明となっている天聖元寶である。3148は2枚が重複した状態で出土した資料で、うち1枚は洪武通寶である。

3163･3164は99A区包含層中から出土した銭貨で、少なくとも5枚が重なった状態で確認された。このうち1枚は大破し全形を復元できず、2枚は文字を読み取ることができない状態であった。確実に銭種が判明するのは3163の大観通寶である。

（6）その他の製品

3106は笄で中央が穿孔されているものである。3106と3107は匙状の銅製品で、3107の皿部には多数の円形孔が存在する。3110は円筒形の容器、3123は銭種不明の銭貨に4ケ所に2個ずつ計8個の小孔が穿たれている。

4　鉛製品（第213図3121・3122）

鉛製品には鉄砲玉が存在する。径が約1.2cmを測る球状を呈しており、表面は白色となっている。

5　金属関連遺物（第215・216図3165～3233）

今回の調査で出土した金属関連遺物には、椀型滓、炉底滓、流動滓、とりべ、銅塊、羽口など多様なものが存在する。これまで筆者等は金属関連遺物の出土分布から資料群のまとまりを見い出し、また椀型滓などについて遺跡毎に分類を行いその組成から金属器生産の様相を検討してきた。ここではこうした検討は時間的な制約等から実施できなかったため、主要な資料について種別に報告するのみに止めたい。なお、今回の報告に際しては、金属関連遺物の分類や分析の方法について『門間沼遺跡』（石黒編1999）などの一連の文献に依拠して記述している。

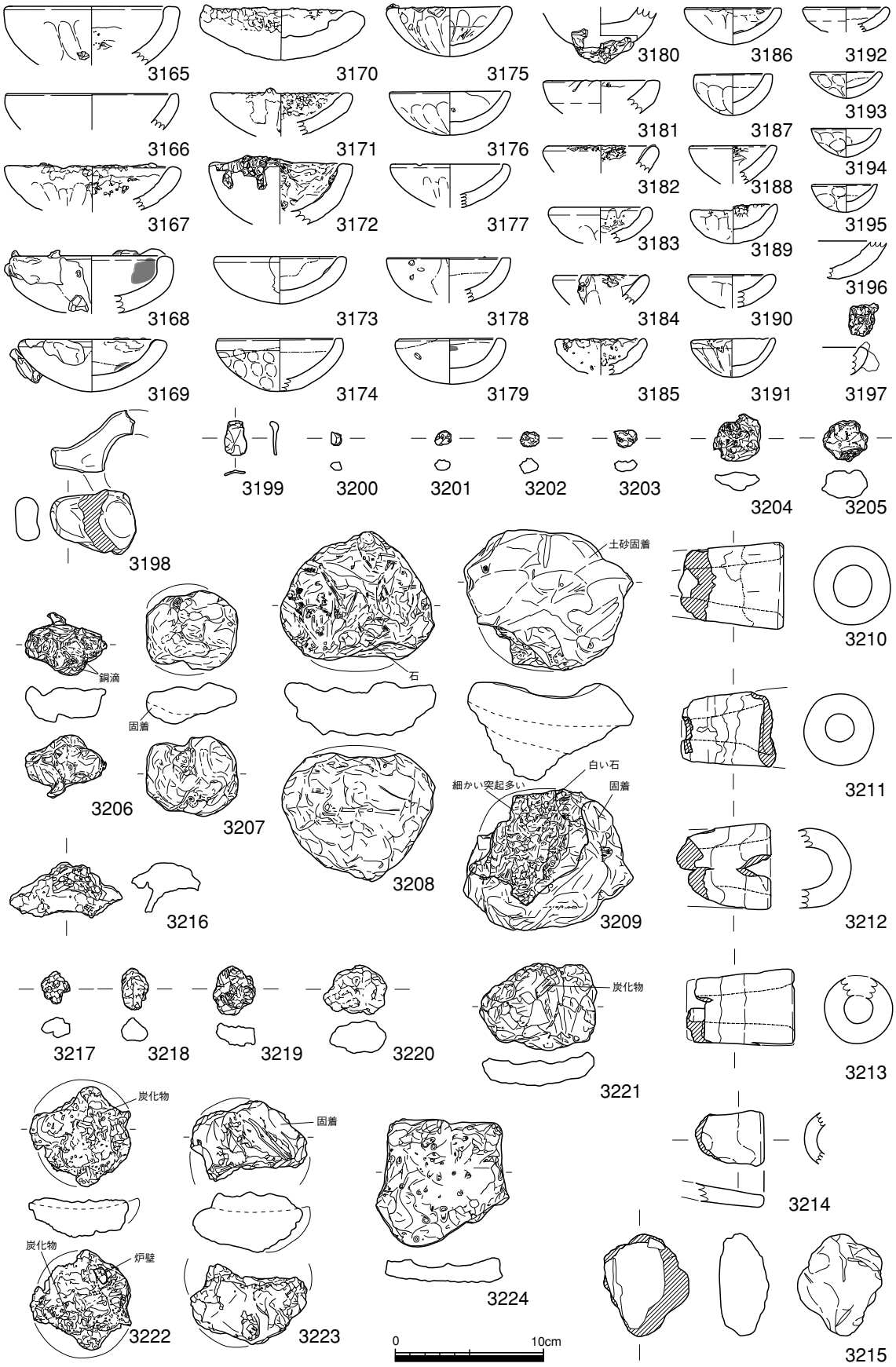
（1）椀型滓

椀型滓は鍛冶の段階に炉の底の部分に生まれる鉄滓である。炉の底の形を反映した平面が円形で断面が椀型の形状となる。これらは破割りされたものが多く、残存する部分の割合から2分の1分割椀型滓、4分の1分割椀型滓、8分の1分割椀型滓、8分の1以下分割椀型滓などに区分できる。形状や質感などから以下の5類に区分したが、今回の出土資料を全ては網羅していないことを断っておく。

椀型滓Aは最大長が5cm以下となる非常に小さな椀型滓（3219・3220）である。ガラス質は重く色調は黒～黒褐色を呈している。3219と3220は上面に植物質痕が残存している。椀型滓Bは最大長が5～10cm程度の規模を持ち、厚さが2cm以下と薄いもの（3221）である。3221には木炭が付着する。椀型滓Cは重く色調は黒～黒褐色を呈している通常の規模の椀型滓で、表面がやや凹凸するもの（3207･3223）である。土砂の固着が著しいものが多い。椀型滓Dはやや重く色調は黒～黒褐色を呈し、表面に炭化物や白い石や炉壁片などが付着するもの（3208・3209・3222）である。土砂の固着が著しいものがある。3222は下面に炭化物や白い石や炉壁片などが付着し、上面には炭化物が付着するものである。椀型滓Eは表面の凹凸が激しいもの（3206）である。黒色の比較的軽い質感の滑らかなガラス質を持ち、表面が赤紫色を呈し表面に銅滴が付着する。以上の観察から見て、椀型滓Eは銅製品生産に関わる滓と推測される。このタイプは99A区から多く出土している。ガラス質は質感が重い。

（2）炉底滓

炉底滓は、椀型滓と同様に、炉の底の部分に生まれる鉄滓であるが、形状は板状となり椀型を呈していないものである。下面全体に炉材の土砂様のもの



第 215 図　金属関連遺物実測図（1）

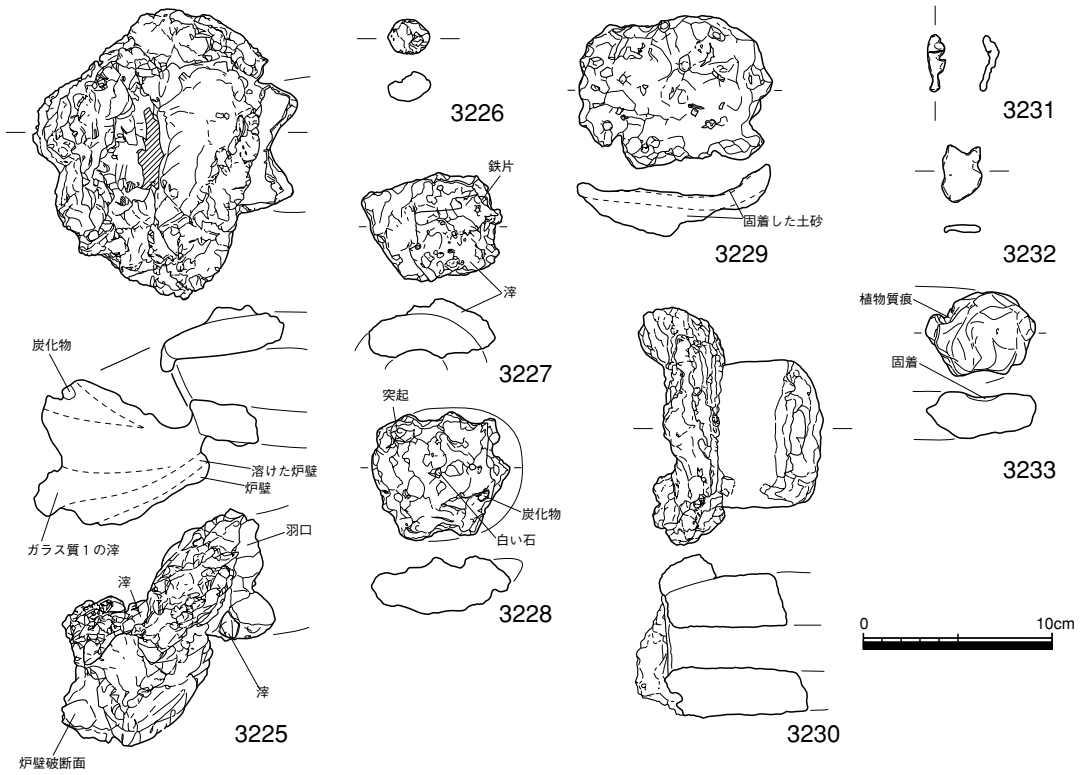
がびっしりと付着し、ねばりの非常に強い質感の滓が表面に広かっている状態などから、椀型滓とは区分して報告する。3224は着磁度3を測り、上面は黒～灰色滓が付着したものである。外面には粗砂礫を含む粘土が付着し表面に茶褐色の錆が浮いている。3229は97B区NR01灰色粘土から出土したもので260.9gを測る。下面に夥しい土砂の固着が認められ、これが炉材と考えられる。上面には小石や木炭などが付着している。

（3）流動滓

流動滓は、一般には炉の内外で生成された流動状の鉄滓を指すが、ここでは椀型滓や再結合滓以外のものをいう。ガラス質の状態からAとBに分けられるが、ここではこの他に表面が赤紫色を呈し銅滴や緑青などが付着する銅製品生産工程の際に生成したと推測される流動滓Cを設定する。3217･3218は99B区SK180から出土した比較的気泡が大きく多いガラス質を持つもので、流動滓Bに属する。3218は着磁度が3を計測するものである。3206は99A区SK94から出土した流動滓Cで全面赤紫色化し、凹部に緑青が残存する。銅滴も付着する。

（4）とりべ

とりべは丸底の椀型を呈する土器で、内面に滓などが付着し外面は被熱されている。内面に黄灰色付着物（3177など）や赤褐色付着物（3176など）が薄く付着する銅滓がわずかに認められるものや、銅滓や銅滴が比較的厚く付着するもの（3191など）などがある。口縁部付近が発泡するもの（3182など）や白い石が付着するもの（3185など）も見られる。口径は5～12cmに分布し、口径が小さいものは底部がやや尖る形状を持ち、口径が大きいものは口縁部が直立ぎみに立ち上がるものが多い傾向を読み取ることができる。3198は把手が付くとりべと推測されるものである。



第216図　金属関連遺物実測図（2）

（５）銅塊

銅塊は99A区から多く出土している。白い石が付着するもの（3202）、炭化物が付着するもの（3204）や赤色付着物が見られるもの（3205）などがある。最大長が4cm以下の非常に小さいものばかりで、表面は凹凸が激しい。97B区では3226、95A区では3231の他に、鉛塊（3232）も認められた。97B区や95A区出土の銅滴は比較的滑らかな表面を呈している。

（６）羽口

3210 ～ 3214は99A区で出土した羽口で、最大径が6cm前後と小振りなものが多い。表面に被熱痕が認められるが、先端が欠損するものが多いためか、滓が付着しているものはあまり見られない。

3226・3227・3230は97B区で出土した羽口で、最大径が8cm前後のものである。先端には多量の滓が付着している。3226は羽口先端部の下端に椀型滓が連続しているもので、椀型滓の下面には溶融した炉壁が付着していた。椀型滓の中央部は灰黒色の緻密なガラス質を持ち、上半部はやや軽い質感のガラス質が載る。表面には白い石や炭化物が多量に認められる。羽口の上部には黒色から紫色のよく溶けたガラス質が見られる。

（７）小結

今回の調査で特筆すべき調査成果は、銅製品生産に関わる99A区出土金属関連遺物であると考えられる。具体的には多量のとりべと共に、銅塊や流動滓C、やや小振りな羽口などが認められる。鋳型など破片は確認できなかったが、99A区では用途不明の粘土塊がやや多く出土しており、金属関連遺物との関連性が注目される。99A区付近で銅生産が行われていたとすれば、とりべや銅塊の大きさからみて小型の銅製品の生産（銅細工師）に関わる資料群ではないかと予想される。

（Ⅶ）自然遺体

ここでは、今回の調査で出土した動植物遺体のうち動物の骨について取り上げる。種や部位の同定は、調査研究員堀木真美子が行い、この結果をもとに筆者が原稿を執筆した。なお、昆虫遺体については、森勇一氏の分析が本書に掲載されているので、合わせて参照されたい。

動物遺体は96区と99B区から合計で17件が確認されており、ウシやウマなどの骨類とシジミの貝殻などが存在する。96区SX01出土動物遺体は城下町期Ⅲ期に属するもので、大型の動物遺体が多く見られる。99B区ではシジミが見られる他に、SK276からウマの右中足骨が出土しており、この骨には人工的な切断面が存在していた。

調査区	グリッド	遺構	日付	種	部位	備考
96区	ⅢG10n	SX01	970131	不明		
96区	ⅢG10o	SX01 2層	970131	不明		
96区	ⅢG8o	SX01 2層	970131	ウマ	左尺骨	
96区	ⅢG7o	SX01 2層	970131	不明	第2頸椎（近位）	
96区	ⅢG6o	SX01 2層	970125	不明		
96区	ⅢG10n	SX01 2層	970203	ウマ	右上腕骨	
96区	ⅢG11n	SX01 2層	970123	不明		
96区	ⅢG10i	TO1下層	970312	魚骨	椎骨	
96区	ⅢG10m	TO3	970117	不明		
96区	ⅢG10m	TO3 SU02	970117	ウシ	歯	
96区	ⅢG8o	TO4	970121	ウマ	左下顎骨（M3,M2,M1,P4,P3,P2）	
96区	ⅢG10m	検Ⅱ	970310	ウシ	右上腕骨	
96区	ⅢG10m	検Ⅱ	970310	ウマ	右尺骨・橈骨	
96区	ⅢG10n	検Ⅱ	970310	不明		
99B区	ⅧE5j	検Ⅱ	000225	シジミ	3個	
99B区	ⅧE13h	南トレンチ	000204	シジミ	2個	
99B区	ⅧE6k	SK276	000301	ウマ	右中足骨遠位端	切断面あり

第10表　動物遺体出土一覧表

（Ⅷ）石垣に記された墨書

1　調査の経緯と調査方法

96区（97C区）で確認された石垣SW01では、これを構成する石垣石の表面に墨書が記されていたことが明らかとなっている。まず、96区を調査した時点で、石垣石23の正面（石垣の前面）に「貳」と判読できるのではないかと考えられた墨書が初めて確認された。ついで97C区の調査で、石垣を解体し石垣石の正面以外の面について墨書の有無を確認した結果、合計で19点の石垣石に墨書またはそれらしき痕跡を見い出すことができた。この墨書については、当初からその史料的な重要性が認識されており、多くの研究者や調査研究員によって確認調査が行われた。1997年度に実施した石垣石の墨書の調査方法の概要を以下にまとめておく。

まず、石垣石に五条川に向かった面を正面として石番を打ち、詰石や栗石をはずしてから一つ一つ重機で取り上げていった。取り上げた石は現五条川堤防の上の空き地に並べ、水洗いをしたり、スポンジでたたいたりして土を落とした。検出状態での上面と側面をまず観察してから、重機で石を反転させて下面も確認作業を実施した。石の種類については堀木真美子（調査研究員）が石を取り上げるときに1つずつ観察し、必要に応じてサンプルを採取した。

石番	字の内容	字数	大きさ　縦×横　センチ	字の位置	種類	位置
1	文字か記号かわからない 墨付あり（墨である）	?	?	上面	砂岩	根石
2	３文字あり　□ふ仁か？ 仁は「に」か「太」かも	?	?	左側面	砂岩	根石
3	「いぬかい」「ち□」	6	い2×4ぬ1,5×3か2×3 い2×3ち3×3	正面	砂岩	根石
4	□雜賀	3	雜6×7　賀4×4	下面	砂岩	根石
5	□□　前の字は升か	2		上面	砂岩	根石
7 7	雜賀（草書） □年（草書）貳・未？ １と２とは字の手が違う	2 2	雜15×10　賀17×12 ２字で　22×5	右側面 左側面	砂岩	根石
8	墨書あり（１文字）	1	?	下面	砂岩	根石
9	□雜賀	2	雜6×7　賀4×4 雜の左肩に文字がある	上面	砂岩	根石
12 12	雜賀 孫一郎	2 3	雜17×14　賀　13×17 孫4×3一1×4朗3×3	上面 右側面	砂岩	根石
13 13	六十五 判読不能（墨書あり）	3 ?	六5×6,5十5×3五4×6 ?	右側面 左側面	砂岩	根石
16 16	判読不能（墨書あり） 判読不能（墨書あり）	2 1?	? ?	右側面 下面	砂岩	根石
18 18	□□□ 判読不能（墨書あり）	3 ?	３文字とも字　真中は賀 梵字かも。 ?	左側面 下面	砂岩	
19	雜賀	2	雜5×4　賀5×4	左側面	砂岩	
20	卆□　□□　□ ３つに分かれている	5?	?	下面	砂岩	
21	十□　（墨書あり）	2	十3×4	下面	砂岩	
23	雜□（行書）	2	雜9×6	正面	砂岩	
35 35	判読不能（墨書あり） 判読不能（墨書あり）	? ?	文字か記号かわからない 〃	下面 左側面	砂岩	
37 37	判読不能（墨書あり） 雜□	1 2	? 雜13×8	右側面 下面	砂岩	
39	判読不能	?	?	下面	砂岩	

判読不可能・・・墨付はあるが、文字がはっきりと読めないもののことをいう。

第11表　石垣墨書一覧表

調査は平成10年1月14日、22日、28日、30日、2月2日、28日、4月17日、5月22日の合計8回に及び、指導者の先生方をはじめとして多くの調査員の目で確かめた。墨書の文字の解読については最終的に福岡猛志氏・下村信博氏にご指導をお願いした。この時の調査成果は、早速浅井厚視（調査研究員）がまとめ、墨書に見られる「雑賀」「孫一郎」などの記述について詳細な検討を加えた論文（浅井1998）が発表されている。本報告は、この浅井がまとめた論文を基本的に踏襲したものであり、合わせて参照されたい。

石の各面の呼称であるが、石垣石などに番号（石番）を付した面を正面と設定し、それ以外の各面を裏面、上面、下面、左側面、右側面と命名することとした。また、文字がはっきりと判読できない墨書については「墨書あり」と記述した。

なお、96区で検出された石垣SW01は、現在五条川西岸の大手橋付近で愛知県建設部河川課によって移築復元されており、石垣石や根石の大部分は移築復元された石垣として用いられている。ただし、墨書が明瞭で記述内容が重要と考えられる石番3、石番7、石番12については、石垣石そのものを愛知県埋蔵文化財調査センターに持ち帰り、墨書部分の仮保存処理を行った後、遺物として保管している。このため移築復元した石垣の石番3、石番12、石番19に相当する部分は別石材が使用されている。

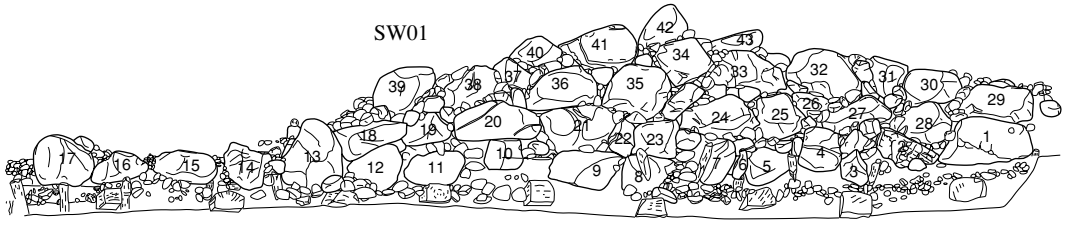
2　墨書の紹介

SW01の根石や石垣石は43個存在し、砂岩が37個、濃飛流紋岩が3個、チャートが2個、細粒花崗岩が1個、花崗岩が1個である。墨書が確認された19個の石は全て砂岩である。墨書は鮮明に観察できたものもいくつか存在したが、墨跡をかろうじて見い出せる程度のものも多く見られる。このため、墨書石垣石が全て砂岩であったことは、墨書を施す際に石材を選択して記していたと考えるよりも、石種による墨書の遺存状態の相違によるものかも知れない。

墨書は一面に記されるものと二面に記されるものがある。二面に墨書が施されているものが7点確認された。この中には「雑賀」と「孫一郎」と書かれたもの（石番12）、「雑賀」と「□年」と書かれたもの（石番7）などがある。また、一面だけに墨書が施されていたものが12点認められた。「雑賀」と書かれたもの（石番19）、「□雑賀」と書かれたもの（石番4・9）、「雑□」と書かれたもの（23・37）、「いぬかい」や「ち□」と書かれたもの（石番3）、「十□」と書かれたもの（石番21）などがある。墨書らしきものが書かれ墨付けがあるものの、判読不可能なものも多数見つかっている（石番1など）。

石に墨書が書かれた位置は正面が2点、上面が3点、下面が9点、右側面が5点、左側面が6点存在し、特に規則性は持たないようである。風雨にさらされることのない、目の届かない位置から多数見つかったことが読み取れる。また石垣遺構全体から考えると根石部分が10点、その一段上の石垣石部分が5点認められることから、石垣の下側の部分の残存状況が良好であったといえる。

個々の墨書の内容については第11表に、墨書の実際については第218～224図に示したので参照されたい。

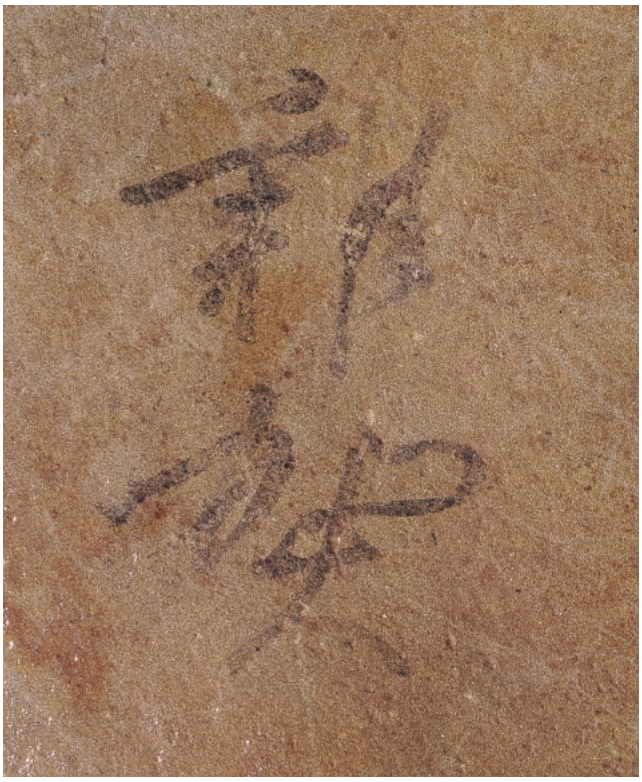


第217図　石垣SW01の石番対照図

石番 7



石番 12

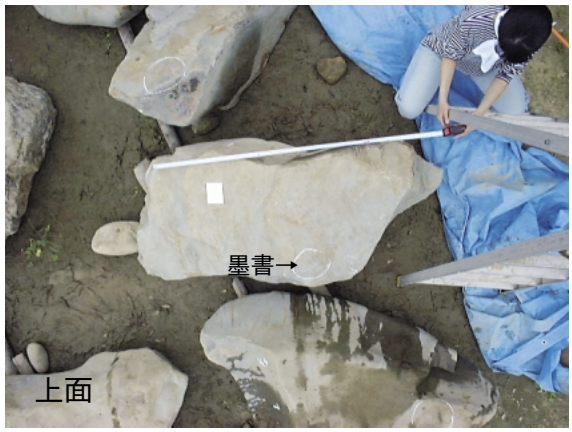


第 218 図　石垣に記された墨書（1）

石番１

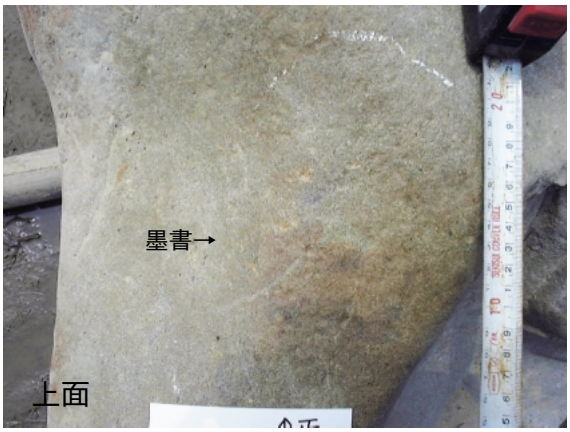


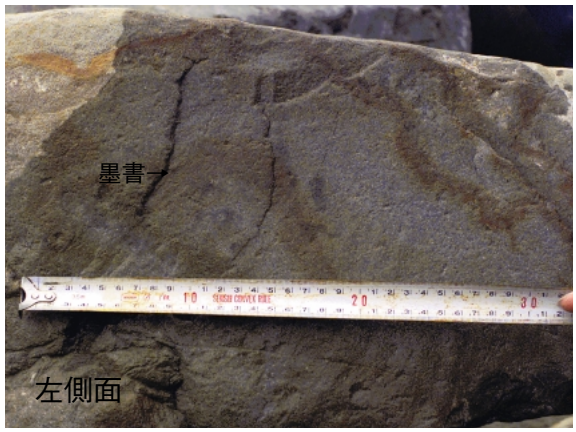
石番２





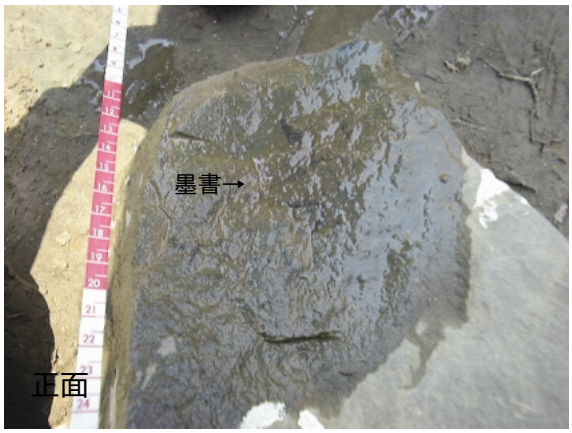






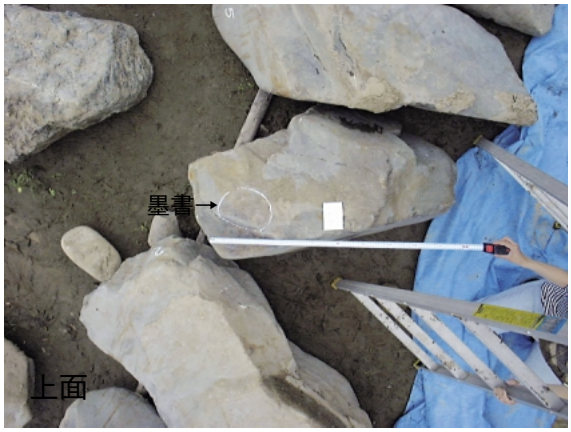
石番３

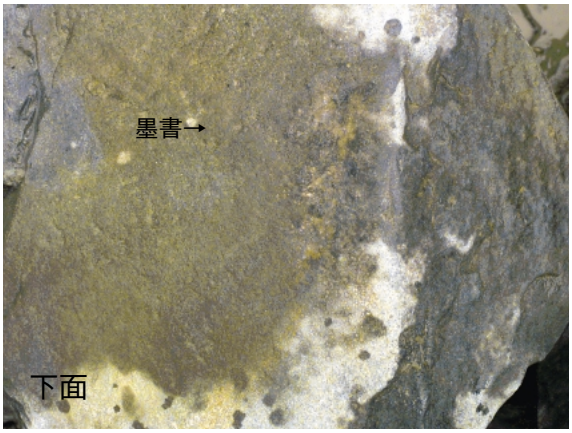




第 219 図　石垣に記された墨書（2）

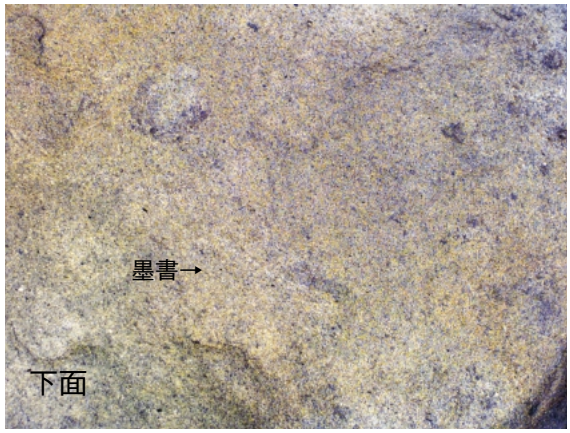
石番４



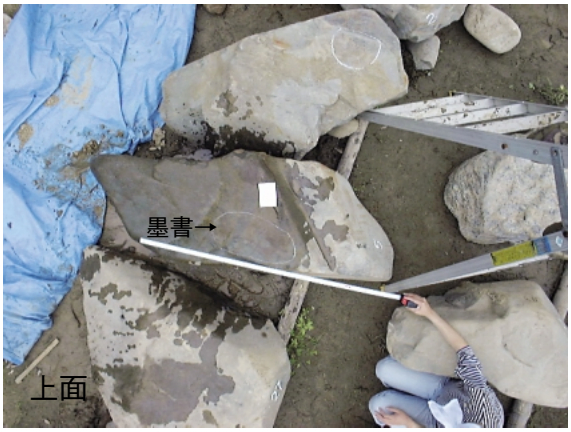


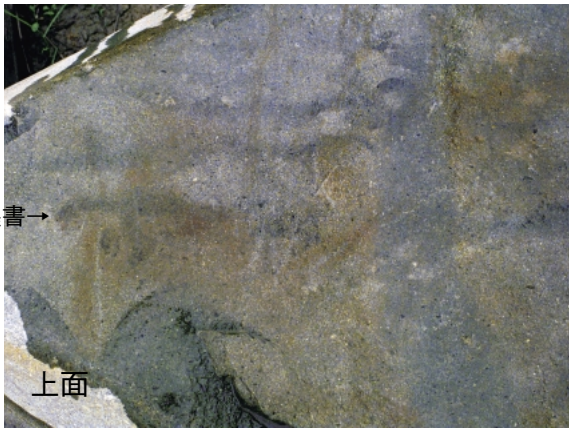
石番８



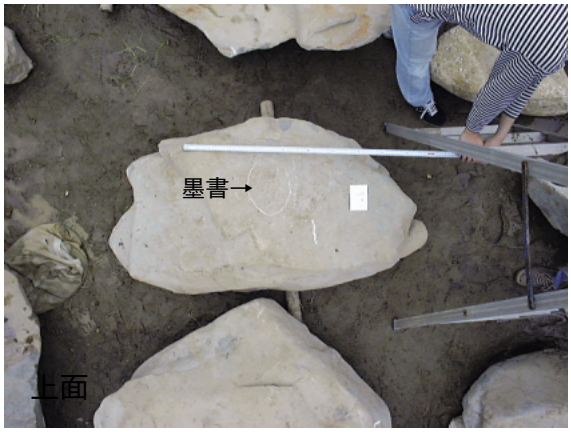


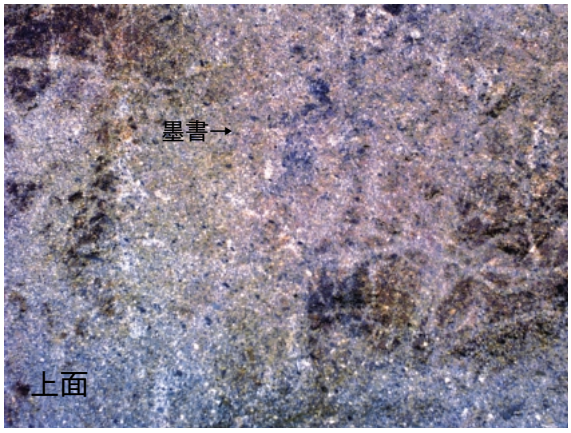
石番５





石番９



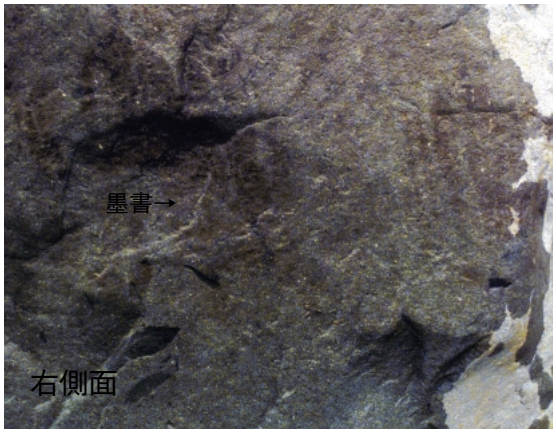


第 220 図　石垣に記された墨書（3）

石番 13

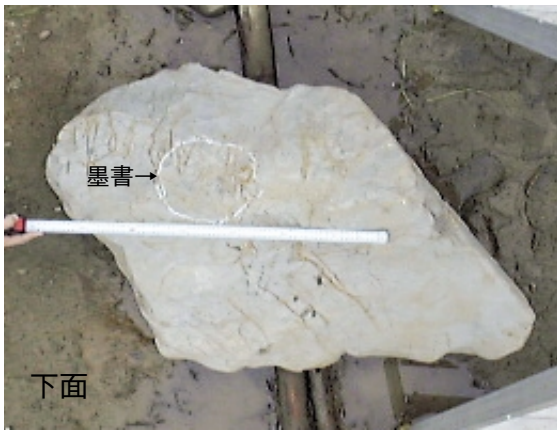


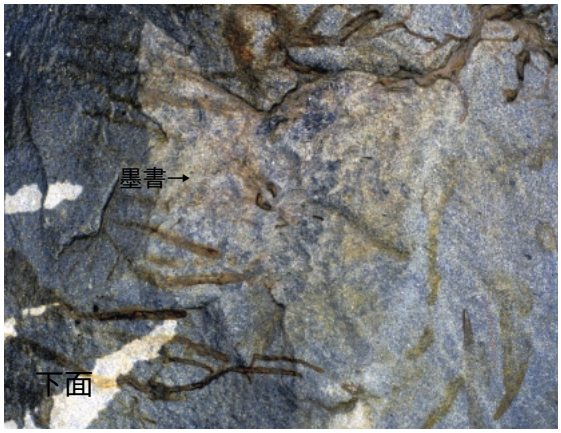


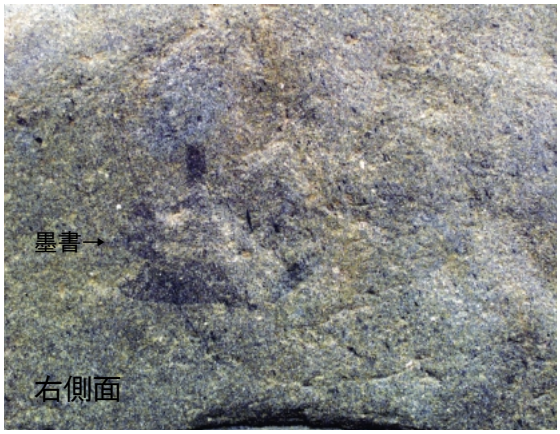




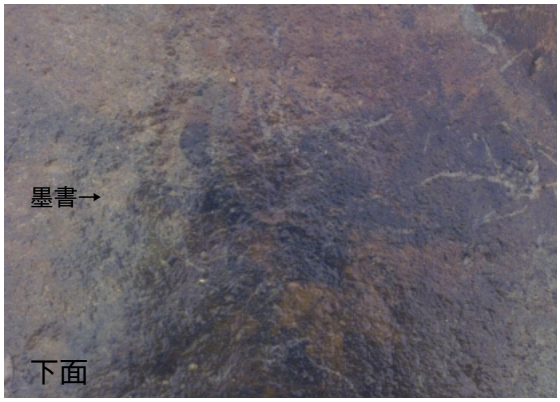
石番 16





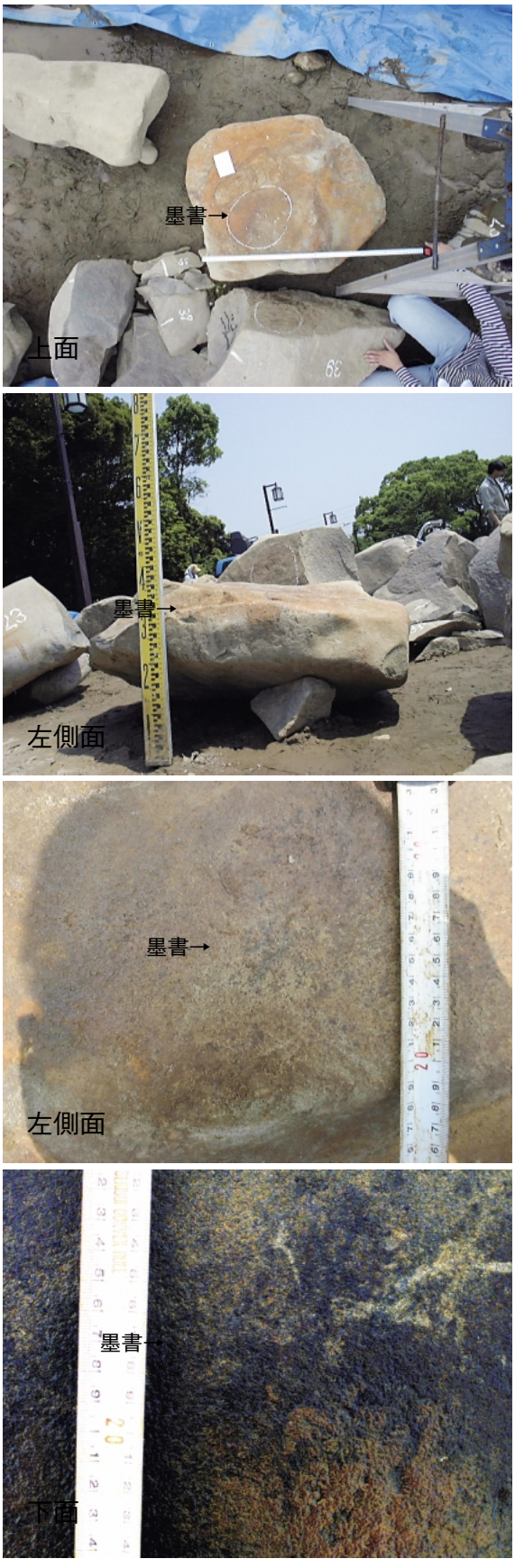


石番 39



第 221 図　石垣に記された墨書（4）

石番 18



第 222 図　石垣に記された墨書（5）

3　考察

以下に今回の石垣の墨書に関して、浅井厚視氏の論考を再録する（一部鈴木が改変した）。

（1）石垣の墨書の時期

これまでの発掘調査から清須城は、居館を中心とした城から、石垣や瓦葺建物を伴い、総構の城下町をもつ城へと変化したと考えられる。天正大地震後の天正 14 年(1586)、織田信雄が行った清須城の改修が画期となっている。この改修によって、清須城は４つの曲輪と天守をもつ城となり、本丸は石垣や総瓦葺建物で造られ、軒先は金箔瓦が施された黄金の城に生まれ変わった。石垣は軟弱な五条川沿いに造られたため、胴木と呼ばれる土台木の上に造られたことがわかった。その後、清須城の城主は天正～慶長の短い期間に豊臣秀次・福島正則・松平忠吉・徳川義直と代わった。豊臣秀次も城の改修を行ったとされている。今回見つかった石垣の墨書は信雄の行った改修に伴うものかそれ以降のものと考えられる。

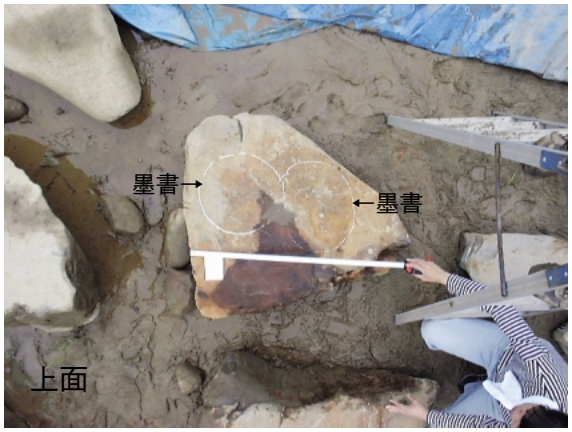
とすれば、清須城の石垣は天正年間に造られた「野面積み」の石垣となる。先行の調査・研究から考えると、豊臣期の大坂城と同時期のものとなり、刻印と共に墨書がよく用いられた頃のものと考えられる。豊臣期の大坂城のように石垣普請を担当した大名なり家臣の人名が多く残っている時期と重なってくる。

（2）地名としての「雑賀」

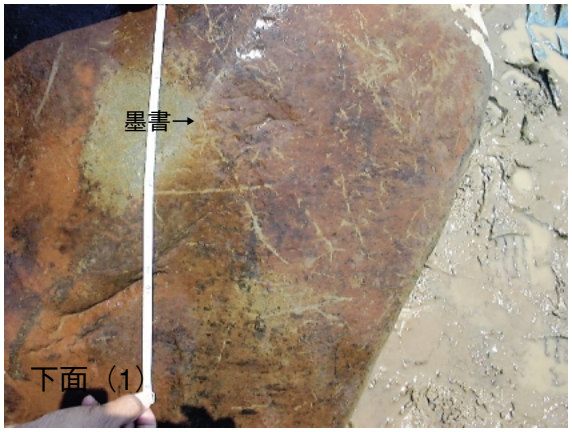
『墨書』の「雑賀」が、石材を切り出した場所か、石垣普請に従事した作業グループか、石材を運搬したグループか、普請奉行または工事責任者の出身地を示す地名とすれば、紀伊国雑賀庄（和歌山県和歌山市）以外には考えられない。例外として島根県松江市に雑賀町という地名があるが、これも紀州雑賀に由来した地名である。

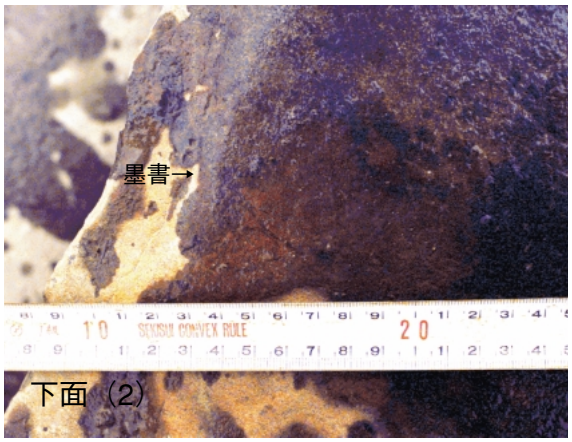
雑賀は一般的には「さいが」とよばれる。雑賀孫一は「さいがまごいち」と通称でよばれている。しかし現在和歌山県和歌山市に残る地名は「雑賀町」

石番 20

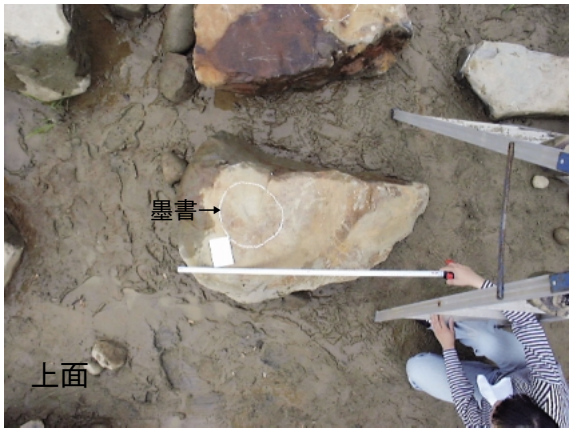




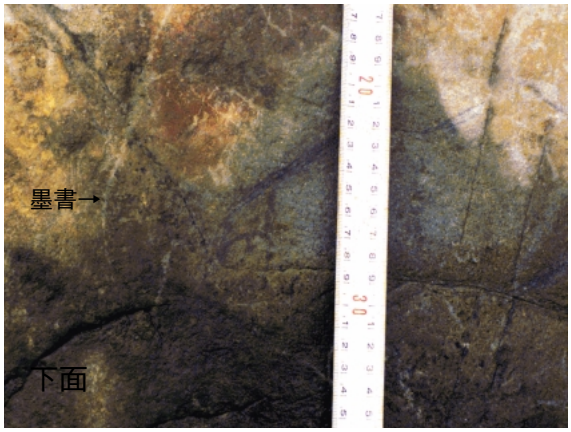


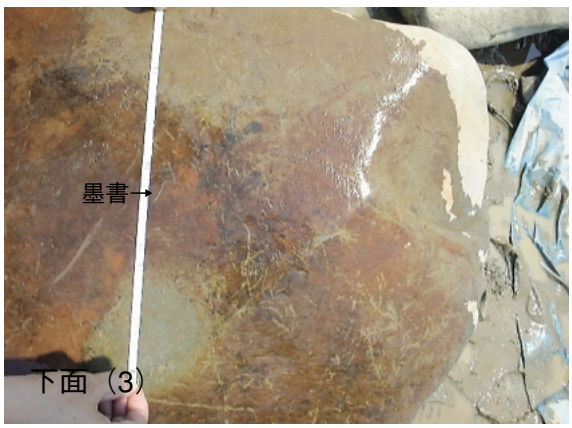


石番 21









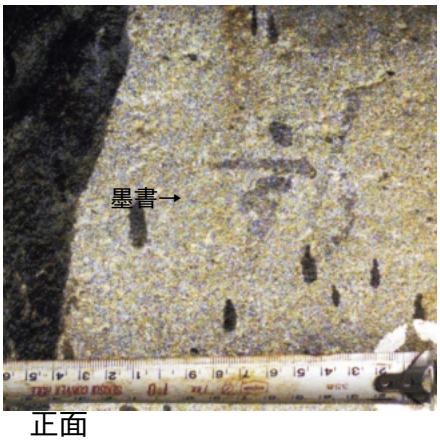
第 223 図　石垣に記された墨書（6）

石番 23





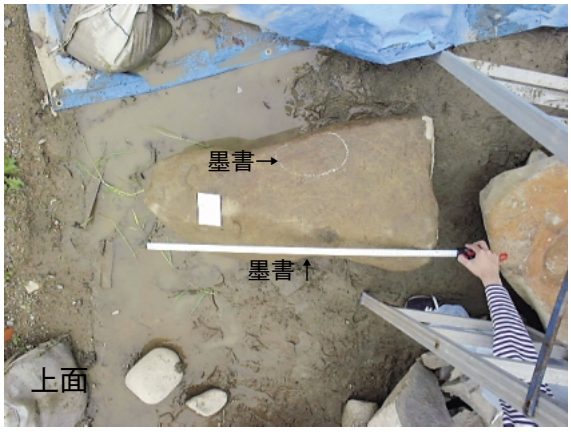


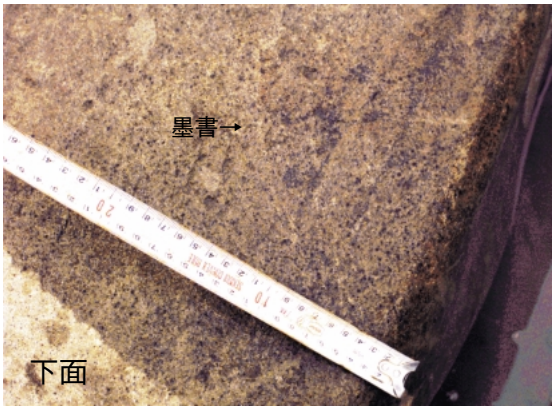


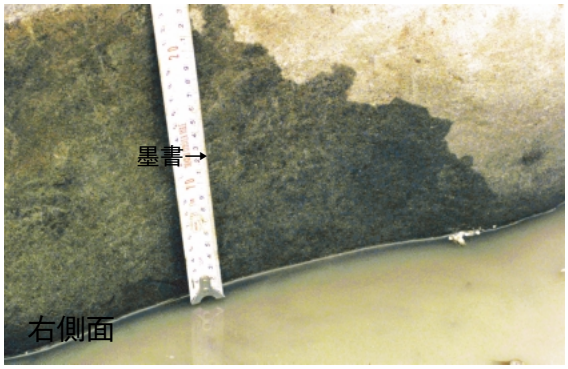
石番 35



石番 37







第 224 図　石垣に記された墨書（7）

「雑賀屋町」「雑賀崎」「雑賀道」はいずれも「さいか」と呼ばれ、「小雑賀」のみ「こざいか」と濁ってよんでいる。『万葉集』には「狭日鹿」と記され、また戦国時代の『山科言継卿日記』でも「さいか」と書かれているので、「さいか」とよんだ方が正しい。

雑賀の地名の起源は「鉏処であって、刀鍛冶の技術のこと」「障処ということで障害のある険しい地名をさす」という両説があるが、一般的には鉄を鋳造するところという意味と考えられている。戦国時代に根来衆や雑賀衆を生み出す鉄砲生産や「雑賀鉢」とよばれる鉄兜が生産される下地はこの地名からも推測することができる（註1）。

（3）人名としての『雑賀』

A 「雑賀」「孫一郎」とは

今回の『墨書』が、石材を切り出した人物か、石材を運搬した人物か、石垣普請に従事した人物か、割普請を担当した大名、大名の家臣、普請奉行または工事責任者の姓名をあらわしている可能性は非常に高い。「雑賀孫一郎」とひと続きで書かれていれば人名に違いないが、今回の墨書では「雑賀」「孫一郎」が分かれて書かれていただけに名字と断定することはできない。しかし「雑賀」が地名であれば、「雑賀住」「雑賀衆」と書かれることが多いだけに、名字と考えるのが自然のように考えられる。

雑賀を名字とするか、孫一郎を名前としている戦国期に登場した人物として、織田信秀の家臣「雑賀修理」、織田信雄の家臣「雑賀松庵」「雑賀猿」「山本孫一郎」、紀州雑賀衆「雑賀孫一郎」、「その他の雑賀氏」をあげることができる。

B 織田信秀の家臣「雑賀修理」

『信長公記』に「雑賀修理」という人が登場する。1554年の清須攻めで討ち死にしている。美濃出身の人物で『山科言継卿記』に書かれている「さいか右京進定直」と同一人物と考えられている。清須城の築城が天正大地震後の織田信雄の時期と考えると活躍した時期が早すぎると思われる（註2）。

しかし清須城の石垣が信長以前からのものであり、それを転用したと考えるならば、可能性が全くないわけでない。

C 織田信雄の家臣「雑賀松庵」「雑賀猿」

『織田信雄知行宛　奉行人連署奉書』に「雑賀松庵」と「雑賀猿」という人物が登場する。雑賀松庵は織田信雄の５人の奉行人の１人で、上級家臣に属している。1500貫を所領し、後に小牧・長久手の戦いでは、秀吉より人質を要求された重臣６人のうち１人でもある。松庵は信雄が南伊勢を領有していた時期（天正３年～）から信雄の代表的な奉行人として活躍した人物で、家臣全体の知行割決定に際しても信雄政権の重要な役割を果たした人物である。その姓からして、室町幕府の奉行人雑賀氏の系譜を引く可能性があると考えられている。雑賀猿は尾張国葉栗群と丹羽群に知行を得た人物である（註3）。

なお「孫一郎」という名前の家臣としては、山本孫一郎という人物が「分限帳」に記載されている。蟹江、鰯江（弥富町）で400貫の知行を所領している。

清須城の改修に際して、信雄が家臣に割普請を命じた可能性は高く、石垣の墨書が信雄の有力な奉行人である松庵なり、山本孫一郎のことを示していると考えることも十分にできる。

D 紀州雑賀衆「雑賀孫市」

この「雑賀」の墨書が見つかったとき、石山合戦以来信長と対時した雑賀孫市ではないかと初め考えた。「孫一郎」の名前が確認されてからは、信長と対決した後、何らかの理由で信雄と手を結んだ証拠ではないかとその思いを強めた。

雑賀孫市は謎に満ちた人物である。彼が石山合戦(1573年)で討ち死にしたのか、秀吉の雑賀攻め(1586年)で藤堂高虎によって謀殺されたのか、小田原攻め(1590年)にも参陣し、秀吉の鉄砲頭として生涯を終えたのか、さらに関ヶ原の戦い(1600年)では石田方につき、後に許されて水戸藩士となったのか諸説があってわからない。以下では孫市と考えられる３人の人物に分けて考えていく（註4）。

（A）鈴木孫一重秀

石山合戦の侍大将として活躍したとされる孫一は彼である。孫一は信長の雑賀攻め(1577年)では雑賀衆の指導者として、徹底的に信長と交戦した。その後信長に近づき、土橋若大夫平次を滅ぼす際(1582

年)には、信長の従兄弟の織田信張の助力を得ることとなる。孫一は信長が本能寺の変(1582年)で倒れると、後ろ盾を失って、実権を土橋氏に奪われ、雑賀を離れたようである。秀吉の雑賀攻め(1585年)では秀吉側につき、雑賀衆・根来衆を滅ぼす道案内の役を果たした。秀吉の雑賀攻めの後、孫一は姿を消した。

孫一と信張の関係については、「正月廿七日、紀州雑賀の鈴木孫一、同地の土橋平次を生害させ、・・・右の趣注進申し上ふるの処、鈴木御見次として、織田左兵衛左大将（織田信張）として、根来、和泉遣わされ・・」（『信長公記』）と記され、更に信長が信張に与えた書状の一節には「鈴木孫一参上、弥忠勤を抽んずべきの旨、神妙の由、能々其方に於いても、申し聞かせらるべく候」（『本願寺文書』）とあることによっても知ることができる。孫一を助けた織田信張は紀伊方面の軍政を担当し、後に織田信雄の有力な家臣となっている。『墨書』の「雑賀」「孫一郎」が鈴木孫一重秀であるとすれば、彼こそが信雄と孫一をつないだ人物と考えられ、彼の仲介によって清須城の石垣普請を手伝ったとも考えられる。

しかし、本人の署名のある文書や本人宛て所とする文書、同時代の覚書などから見る限り、彼は一貫して「鈴木孫一」「鈴木孫一入道」であり、重秀のことを「雑賀」姓や「孫一郎」という名で記した資料は未だに見つかっていない。

（B）鈴木孫三郎重朝（雑賀孫市）

小田原攻めの陣立書（『伊達家文書』）に「鈴木孫一郎」、名護屋城の駐屯者を記した『名護屋古城記』に「鈴木孫三郎」とあるが、これは同一人物をさし、豊臣家の鉄砲頭として活躍した孫三郎重朝でないかと考えられる。

関ヶ原の戦いでは石田方につき、戦いの口火となった伏見城攻め(1600年)を行った。慶長11年(1606)には徳川家康に起用され、徳川頼房に付けられ、水戸藩の家老となった。孫三郎重朝は後に雑賀孫市とも雑賀孫一郎とも称したと言われている。『墨書』の「雑賀」「孫一郎」が孫三郎重朝であるとすれば、豊臣秀次の時代の清須城改修で石垣普請に辣腕を振るったことが想像できる。

しかし、もし彼が豊臣秀次期の清須城の改修に関わっているとすれば、その前後の信頼できる文書と照らしてみると、姓名を「鈴木孫三郎」と書いていていたように考えられる。

（C）平井孫一郎義兼

和歌山市平井の蓮乗寺には雑賀孫市の墓と伝えられている「平井孫一郎」の墓碑が残っている。蓮乗寺には本願寺顕如から下付された方便法身像もあり、孫市本人かあるいはその縁者に賜った物と考えられる。小牧長久手の戦い(1584年)では雑賀衆の指導者として信雄・家康側に立ち、和泉国の背後から秀吉を牽制したと考えられる鈴木孫一郎は彼のことでないかと考えられる。

E　その他の雑賀氏

その他雑賀姓を名乗った人物としては、毛利家の家臣である「雑賀三郎兵衛」「雑賀太郎」に繋がっていく地頭系の雑賀氏があげられる。また有力な雑賀衆の１人である「岡崎三郎大夫」（鈴木三郎兵衛重教）も雑賀姓を名乗っていた。

（4）　まとめ

清須城の本丸付近から出土した石垣に書かれた墨書について考えてきたことをまとめたい。

A、織田信雄の清須城大改修に伴う石垣普請のものとすれば、『墨書』は墨書と刻印が共に施された時期のものであり、安土城、豊臣期の大坂城と同じ石垣に施された天正年間の墨書と考えることができる。

B、墨書の内容としては、大坂城や名古屋城などで見つかっている墨書・刻印と同じように石垣の割普請に関わった大名、家臣、普請奉行などの人名をあらわしていると考えることが有力ではないか。

C、「雑賀」「孫一郎」は人名を示し、織田信雄の有力な奉行人にあり、重臣であった雑賀松庵と考えることができるのでないか。

D、もし雑賀衆であったとすれば、織田信張を仲立ちとして織田信雄と関係のあった鈴木孫一重秀と考えることができるのでないか。

註

（1） 『和歌山県の地名』日本歴史地名大系（平凡社）『和歌山県地名大辞典』（角川書店）

（2） 奥野高広 『信長公記』（角川書店　1997 年）

（3） 加藤益幹 「織田信雄の尾張・伊勢支配」（有光友学『戦国権力と地域社会』吉川弘文館　1986 年）

（4） 鈴木真哉 『紀州雑賀衆　鈴木一族」（新人物往来社　1984 年）『和歌山市史　本文編』

引用文献・主要参考文献

浅井厚視 1999「清須城本丸付近の石垣の墨書―「雑賀」「孫一郎」について考える―」『年報　平成 10 年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
石黒立人編 1999『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 80 集
小澤一弘 1987「清洲城下町出土の瓦について」『年報昭和 61 年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘編 1992『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 27 集
小澤一弘編 1992『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 28 集
蟹江吉弘編 1996『清洲城下町遺跡Ⅵ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 65 集
京都国立博物館 1989『日本の甲冑』
黒田慶一 1995「織豊期城郭から出土する桐紋瓦」『織豊城郭第 2 号』織豊期城郭研究会
鈴木とよ江 1992「瓦」『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 27 集
鈴木正貴編 1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 17 集
鈴木正貴編 1994『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 50 集
鈴木正貴編 1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集
鈴木正貴編 1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集
鈴木正貴編 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
鈴木正貴編 1997『清洲城下町遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 70 集
鈴木正貴・蔭山誠一 2000「愛知県における鉄器生産を考える（4）―朝日西遺跡を中心に―」『研究紀要第 1 号』（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 2001「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯産陶器」『研究紀要第 2 号』（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 1996『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界―その生産と流通―資料集』
（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 2001『戦国織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』
赤羽一郎・中野晴久 1994「生産地における編年について」『「中世常滑焼」をおって　資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
藤澤良祐 1993『瀬戸市史　陶磁史篇四』愛知県瀬戸市
藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 3』三重県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1998『瀬戸市史　陶磁史篇六』愛知県瀬戸市
藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第 10 輯』

終了

Ⅳ　自然科学的分析・考察

（Ⅰ）清洲城下町遺跡出土木製品樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）・堀木真美子

1．はじめに

濃尾平野の西部、西春日郡清洲町に広がる清洲城下町遺跡から出土した木製品の樹種同定結果を報告する。今までにも、12世紀～20世紀の漆椀・漆皿・下駄・曲物・井戸側などの樹種調査が報告されている（鈴木編1990、小澤編1992、鈴木編1995）。そのうち漆器類に関してはトチノキとブナ属が多く、クリ・カバノキ属・ケヤキなど多種類の落葉広葉樹材が使用されている。漆器以外の木製品では、全体的にヒノキ属が圧倒的に多く使われていることが報告されている。また、武家屋敷と町屋では出土した樹種や器種に大きな差異は見られないが、時期が新しくなるにつれてトチノキの割合が増加する傾向が指摘されている。

今回の試料は、主に戦国時代（16世紀前半）の木製品である。町屋（庶民）の地域の調査区97B区から出土した66点と、本丸跡の調査区97C区から出土した109点である。製品の器種は、折敷・箱物・曲物・結桶・杓子（へら状）・下駄・建て具部材・建築部材・楔・不明板材・不明角材などである。また、清須城の石垣の下に敷かれていた16世紀後葉の土台木44点および杭133点の樹種同定結果も報告する。

2．樹種同定の方法

材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の3方向を薄く剥ぎ取りスライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し永久プレパラートとした。光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し同定を行った。一部試料については、製品の形状を損なう恐れがあるので3方向は採取できなかったものもある。胴木の多くは保存処理が行われていたので、破片を採取して水に浸けて放置し溶剤を貫いた後に、同様に組織標本を作成した。

3．結果

第14～19表に、各試料ごとの結果を示した。第12表では、胴木以外の木製品について器種別に使用樹種を集計した。また、庶民の生活域であった調査区97B区と本丸跡の調査区97C区では、検出樹種に差があるかどうかを比較した。第13表では、土台木に使われていた樹種とその点数を集計した。

・同定された樹種の材組織記載

モミ属　*Abies*　マツ科　図版1　1a-1c（97C胴木29）

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞は無い針葉樹材。傷害樹脂道が出現する（97C胴木6）。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において接線壁に数珠状肥厚があり、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のスギ型やヒノキ型で、1分野に1～4個、壁孔の配置は一定ではない。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は暖帯から温帯上部の山中に生育する常緑高木で、モミ・ウラジロモミ・シラベ・アオモリト

ドマツなどがある。材組織は類似性が高く、種類の識別はできていない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

ツガ属　*Tsuga sieboldii* Carr.　マツ科　第225図　2a-2c（97C胴木28）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。傷害樹脂道が出現する（97C胴木16）。早材から晩材への移行は急で、晩材部の量は多く仮道管は厚く肥厚している。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚がある。放射組織の上下端に有縁壁孔を持つ放射仮道管がある。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に2～4個ある。

ツガ属は本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコメツガがあるが、材組織からは2種を区別することはできない。材は重硬で割裂性も大きく耐久性もよい。

アカマツ　*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.　マツ科　第225図　3a-3c（94A胴木A-6）

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の量は多い。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管があり、その内壁は鋸歯状の肥厚が発達している。

アカマツは低地から山地の陽光地や乾燥地に分布する針葉樹で、人間活動との関係が深く二次林の主要樹となる。材は耐水性に優れる。

マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツが属する。放射仮道管内壁の肥厚の形状が、アカマツは鋭利な鋸歯状をなし、クロマツは比較的ゆるやかな山型の肥厚をなす。しかし組織の保存が悪いため、この特徴が不明であり2種を識別出来なかった試料である。

自然分布ではアカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多いといわれている。

マツ属単維管束亜属　*Pinus subgen. Haploxyon*　第226図　4a-4c（97C胴木14）

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。年輪幅は狭く、晩材部の量は少ない。分野壁孔は窓状、放射仮道管の内壁は平滑で肥厚が見られない。細胞壁は全般に薄く、放射組織の細胞高も低い。

マツ属単維管束亜属は、温帯から寒帯の山中に生育するいわゆる5葉松の仲間である。胴木に使われるほどの太く直立の幹材に成長する樹種は、コゴウマツ・チョウセンマツ・アマミゴヨウである。アカマツの材に比べやや軽軟である。

コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科　第226図　5a-5c（97C-W-109）

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔は窓状、細胞壁は全般に薄く、放射組織は5細胞以下の背の低いものが多い。

コウヤマキは日本特産の1属1種の常緑高木で、福島県以南・四国・宮崎県の暖帯上部から温帯の山地に分布し、特に長野県の木曽、和歌山県の高野山に多い。材は耐久性・耐水性・耐蟻性に優れる。

スギ　*Cryptomeria japonica D.*Don　スギ科　第226図　6a-6b（97C-W-037）　7（97C-W-065）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量が多く仮道管の壁は極めて厚い。分野壁孔は大きなスギ型、その孔口は水平に大きく開き、1分野に2～3個が水平に配置している。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で年輪界で堅さが不均一となるが加工は容易である。

クロベ　*Thuja standishii* Carr.　ヒノキ科　第227図　8a-8c（97C-W-036）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、仮道管の肥厚は

厚い。分野壁孔は小型のスギ型が多くヒノキ型も混じり、1分野に2～5個あり、2個以上ある分野が多く観察された。

クロベは本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木で、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科

第227図　10a-10c（97B-W-043）　11（97B-W-021）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の量は少なく仮道管の肥厚は早材部との差が少ない。分野壁孔は大きなヒノキ型、その孔口はやや斜めに細く開き、1分野に2～4個、おもに2個が水平に整然と配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれる。

サワラ　*Chamaecyparis pisifera*（Sieb. et Zucc.）

ヒノキ科　第227図　12a-12c（97C-W-042）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかまたは比較的急で、ヒノキに比べ晩材部の仮道管の肥厚が目立つ。分野壁孔は大きなヒノキ型であるが、その孔口はヒノキより大きく開き、孔口と壁孔縁の幅が同じくらいで、1分野に2～4個、おもに2～3個が水平に配列する。

サワラはヒノキより分布域は狭く、おもな分布域は東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。材はヒノキよりやや軽軟で、滑らかさ・緻密さ・光沢などは劣る。

アスナロ　*Thujopsis dolabrata sieb.* et Zucc.

ヒノキ科　第228図　14a-14c（97C-W-150）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は急または緩やかで、晩材の量は少なく仮道管の肥厚は目立つ。分野壁孔は小さなヒノキ型、1分野に2～5個、3～4個あるものが目立ち、壁孔の配置は不均一である。放射組織は比較的低い。

アスナロは日本特産で1属1種である。本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用であるがヒノキよりやや劣る。

ヒノキ科　Cupressaceae

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材で、樹脂道や仮道管のらせん肥厚はない。壁孔の外形は丸いことからヒノキ科の材と思われるが、細胞壁が不朽しており分野壁孔の型などは確認できず、これ以上は分類群を絞ることができなかった試料である。

ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　第228図　15a-15c（97C胴木31外）

小型の管孔が単独または2～4個が複合し晩材部に向いゆるやかに径を減じる散孔材。年輪界では、4以上のやや小型の管孔が放射方向に複合して分布する傾向が見られた。道管の壁孔は密接な交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は大きく交互状に密在にする。

ヤナギ属は川岸や陽光地に生育する落葉広葉樹である。胴木に使われるほどの大木に成長する樹種には、アカメヤナギ・ヤマネコヤナギ・エゾヤナギ・オノエヤナギコゴメヤナギなどがある。材質は軽軟で切削は容易だが耐朽性は低い。

カバノキ属　*Betula*　カバノキ科　第228図　16a-16c（97C胴木23）

中型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して分布する散孔材。道管の壁孔の孔口は極めて小さく、穿孔は階段数が10～15本の階段穿孔。放射組織はほぼ同性、1～4細胞幅である。

カバノキ属は温帯から寒帯の山地の陽光地に生育する落葉高木または低木で、約9種がある。材は重硬で有用材である。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科　第229図　17a-17c（97C-W-147）

幅の広い集合放射組織を挟み小型～中型の単独の

管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合放射組織があり、道管との壁孔は大きく柵状・交互状である。

アカガシ亜属は常緑性のいわゆるカシ類で、おもに暖温帯に分布する。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられる代表樹種である。

コナラ属コナラ亜属コナラ節　*Quercus. subgen. Quercus sect.* Prinus　ブナ科　第229図　18a-18c（97C胴木25）

年輪の始めに大型の管孔が１層配列し、その後は薄壁で角形の小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列のものと集合放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、いわゆるナラ類の中のカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワが属する。材は重硬であるが乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点がある。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　第229図　19a-19c（横木東1北）

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する。道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に生育する落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　ニレ科　第230図　20a-20c（97C胴木19）

年輪の始めに中型の管孔が１～２層配列し、その後は小型や非常に小型の管孔が多数集合して塊状・斜状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、１～10細胞幅の紡錘形､上下端や縁に大型の結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅い。

カツラ　*Cercidiphyllum japonicum* Sieb.et Zucc.　カツラ科　第230図　21a-21c（94A胴木A-2）

小型で多角形の管孔が年輪内に密在し、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状あるいは水平に開いた孔口の長さが不揃いの階段状、穿孔は横棒数が30～40本の階段穿孔、道管の内腔には弧状のチロースがあり、道管の先端部にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、１～２細胞幅、多列部の上下端や中間部に方形細胞や直立細胞が単列で１～３細胞層ある。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良いが保存性はあまり良くない。

サクラ属　*Prunus*　バラ科　第230図　22a-22c（97C胴木17）　第231図　23a-23c（97C-W-107）

小型で丸い管孔が単独または２～４個が様々に複合して分布する散孔材。年輪の始めは管孔がやや大きく、管孔数も多い。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚があり褐色の内容物がある。放射組織は異性、１～３細胞幅、縁辺部に直立細胞が連なり鞘細胞の様に見える放射組織もあり、道管との壁孔は小型で密在する。大型で提灯のように膨らむ結晶細胞も観察された。97C-W-107は、全般に管孔が小さい。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹である。材は粘り気があり強く、保存性も高い。

センダン *Melia azedarach* var. *japonica*　センダン科　第231図　24a-24c（97B-W-030）

年輪の始めに厚壁で大型の管孔が配列し、晩材部は小型の管孔が雑然と集合した塊が分布する。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔には厚く褐色の内容物があり、小道管には非常に細くこまかいらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性または上下端に方形細胞がある異性、約３細胞幅の紡錘形が多い。

センダンは、四国・九州以南の暖地の海岸付近に生育する落葉広葉樹である。本州では古くから栽培

されていたらしいが、本来の天然分布も不明な点がある樹種である。

カエデ属　*Acer*　カエデ科　第231図　25a-25c（97C土台木10）

小型の管孔が単独または２～３個が放射方向に複合して均一に分布している散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、１～４細胞幅、道管との壁孔は交互状で密在している。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育する落葉広葉樹で、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく保存性は中程度である。

トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　トチノキ科　第232図　26a-26c（94A胴木A-3）

小型の管孔が単独または２～数個が複合して均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性、層階状に配列し、道管の壁孔は交互状に密在する。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。材は軽軟で緻密で加工し易いが耐久性は低い。

ケンポナシ属　*Hovenia*　クロウメモドキ科　第232図　27a-27c（97C胴木2）

年輪の始めに大型の管孔があり除々に径を減じてゆき、晩材部は単独または２～３個が放射方向に複合した非常に小型で厚壁の管孔が分布し、周囲状・翼状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、１～５細胞幅、上下端や中間に方形細胞・直立細胞が単列であり、結晶細胞がある。

ケンポナシ属は暖帯の山中に生育する落葉高木である。本州・四国に分布するケケンポナシと北海道から九州に広く分布するケンポナシがある。材質はよいほうで有用である。

カキノキ属　*Diospyros*　カキノキ科　第232図　28a-28c（97C-W-135）

２個が放射方向に複合した厚壁の小型の管孔が疎らに分布している。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、１～２細胞幅、15細胞高前後で層階性があり、道管との壁孔は小型で交互状である。

カキノキ属は、伊豆半島以西の亜熱帯に分布する常緑小高木のトキワガキ、中国から渡来して栽培されているカキノキとマメガキがある。

散孔材　diffuse-porous wood　29（97C-W-113の木釘）

折敷の側板に埋まっていた木釘で、横断面しか採取できなかった。非常に小型で角形の管孔が均一に散在している。放射組織は１～４細胞幅、放射柔細胞は大きい事が判る。切片の一部では10細胞幅以上の放射組織が見られた。放射組織は節部や分枝部分で細胞幅が広くなるが、この試料は木釘でありそのような部位を使用したとは思えないので、広い放射組織を持つ材と思われる。ウツギは木釘に使われる事が知られている。横断面のみではあるが、当試料はウツギの材と類似性が高い。

４．まとめ

今までに調査された漆器類以外の木製品（井戸側・曲物・卒塔婆・人形・折敷・箸・杓子・へら・楔・箱・板など）は、ほとんどが針葉樹材であり、中でも圧倒的にヒノキ属が多く、次にコウヤマキも少ないながら井戸側や下駄から検出され、スギ１点が現代の井戸桶から検出されている（鈴木編1990、小澤編1992）。下駄にはモクレン属・ヤマグワなどの広葉樹材も使用されていたが、やはりヒノキ属が圧倒的に多い（鈴木編1990）。今回調査した戦国時代（16世紀前半）においても、土台木以外では様々の木製品にヒノキが圧倒的に多く使われていた事が判明した。また、ヒノキと同属のサワラも、ヒノキに次いで多く検出された。従って、全体的には16世紀前半

第 12 表　木製品における樹種利用の比較

種別 / 樹種	折敷 底·側板		曲物 底·受台		杓子 へら状		下駄 本体·歯		建て具 部材		建築 部材		不明 板·角材		楔		木屑	刀子 形代	木釘	木箭	結桶 底·側板	箱物 底·側板	その他		合計
	97B	97C	97B	97C	97B	97C	97B	97C	97B	97C	97B	97C	97B	97C	97B	97C	97B	97B	97C	97C	97C	97C	97B	97C	
アカマツ												1													1
コウヤマキ											1				1	1	3					1			7
スギ		1	1			1				1				2	1						1	1			9
クロベ		1		1					1	1		2	3	2							2				13
ヒノキ	12	8	2	11	3	1	5	6	2	1	1	2	10	6	1	3		1	5	2	1	6	2	4	95
サワラ	4	2		3		2				1	2	1	4	5		1					5	1			31
アスナロ	2	1										1									1	1	1	3	10
ヒノキ科							1					1													2
アカガシ亜属																1								1	2
クリ																							1		1
サクラ属																								1	1
センダン							1																		1
カキノキ属																								1	1
散孔材																			1						1
合計	18	13	3	15	3	4	7	6	3	4	4	8	17	15	3	6	3	1	6	2	10	10	4	10	175

の様々な木製品においても、ヒノキ属が多用されていた事が確認され、中でも特にヒノキが多用されていた事がより明らかになった。

胴木を除く木製品について、今回の調査から判明した特徴を次に列記する。

1．検出された分類群は、アカマツ・コウヤマキ・スギ・クロベ・ヒノキ・サワラ・アスナロ・ヒノキ科の針葉樹 8 分類群、アカガシ亜属・クリ・サクラ属・センダン・カキノキ属・散孔材の広葉樹 6 分類群であった。点数的には、針葉樹材が使われていた製品が圧倒的に多い。特にヒノキの使用が圧倒的に多く、それ以外はサワラ・クロベ・アスナロ・スギ・コウヤマキ・アカマツの順に多い（第 12 表）。上位 4 種類はすべてヒノキ科の材であり、曲物・折敷・杓子などの身近な生活用具から、建て具・建築材・板材・角材などの居住に関連した材に至るまで、ヒノキを主としてヒノキ科の材が多く使われていた事が判った。

2．ただし結桶に関しては、サワラが多く検出された。岐阜城千畳敷遺跡の16世紀後半の井戸桶部材も、ヒノキよりサワラが多く使われていた（植田、2000）。まだ事例は少ないが、板材を組む桶類では、ヒノキよりサワラの方を選択使用していた可能性もある。

3．調査区 97B 区と 97C 区では、使用樹種や樹種構成などに目立った違いはなかった。これは、漆器類の樹種構成や器種においても町屋と武家屋敷で差が無かった結果（小澤編 1992）と、今回調査の木製品も共通している。

4．しかし、同様な木製品から検出される樹種の種類数は、97B 区より 97C 区の方が常に 1 ～ 3 種類ほど多い傾向が見られた（第 12 表）。これは、97C 区が本丸跡であることを考えると、使用材の供給地、材の用途の多様性、職人の多様性など、町屋より人と物（材）の出入りの多さが樹種構成にも反映しているのかも知れない。

5．庶民の生活区域であった調査区 97B から出土した木屑 3 点はコウヤマキであったことから、この地区でもコウヤマキの材が運び込まれて、加工する作業が行われていた可能性が考えられる。

6．木釘は調査数が少ないが、箱物ではヒノキであり、折敷では散孔材（ウツギの可能性あり）であった。

清須城の石垣の下に敷かれていた土台木44点からは、モミ属・ツガ属・アカマツ・マツ属複維管束亜属・マツ属単維管束亜属・コウヤマキの針葉樹 6 分類、ヤナギ属・カバノキ属・コナラ節・クリ・ケヤキ・カツラ・サクラ属・カエデ属・トチノキ・ケンポナシ属10分類群、合計16分類群が検出された。ま

第 13 表　土台木の樹種

樹種＼地区	土台木			杭				角杭	合計
	94A	97C	合計	97B	SA07	97C	合計	97C	
モミ属	1	7	8		2		2		10
ツガ属		5	5				0		5
アカマツ	2	2	4	2	17	60	79	18	101
マツ属複維管束亜属	2		2				0		2
マツ属単維管束亜属		2	2				0		2
コウヤマキ		1	1				0		1
ヒノキ科			0			1	1	1	2
ヤナギ属		1	1	7	12		19		20
カバノキ属		4	4				0		4
コナラ節		1	1				0		1
アカガシ亜属			0	2	4		6		6
クリ		2	2				0	7	9
ケヤキ		1	1				0		1
カツラ	2		2				0		2
サクラ属		2	2				0		2
カエデ属		3	3				0		3
トチノキ		5	5				0		5
ケンポナシ属		1	1				0		1
合計	7	37	44	11	35	61	107	26	177

た杭 133 点からは、モミ属 2 点、アカマツ 97 点、ヒノキ科 2 点、ヤナギ属 19 点、アカガシ亜属 6 点、クリ 7 点が検出された（第 13 表）。前述の木製品に多用されていたヒノキやサワラそしてその他のヒノキ科の材は、土台木や杭からは 2 点しか検出されなかった。土台木には、針葉樹（モミ属・ツガ属・マツ属など）と落葉広葉樹（カバノキ属・トチノキ・カエデ属など）の多種類の樹種が使われていて、その樹種構成は前述の木製品とは明らかに異なる選択性で調達されていた。モミ属・ツガ属・マツ属単維管束亜属・コウヤマキといった針葉樹や、カバノキ属・カツラ・トチノキ・カエデ属などの広葉樹は、中間温帯林から冷温帯林に多く生育する樹種である。このような樹種は、丘陵から低山地の二次林にはあまり見られず、まして今回の土台木に使用されていたような大木の木を大量には里山や二次林からは求められないであろう。まして大きな石垣の基礎となる太い土台木をつくるために、幹が太く直通の材が得られる大木が選定され、当遺跡より遠方地の山間部から伐採され運ばれてきたと思われる。アカマツやアカマツを含むマツ属複維管束亜属、コナラ節・クリ・ケヤキなどの二次林要素でもある樹種も含まれているが、これらも大木が選択されている。今回調査した土台木からは建築材に使われる事の多い、ヒノキやヒノキ科の針葉樹材やクリ・ケヤキ・コナラ節･クヌギ節などの広葉樹材は意外と少なかった。

引用文献

鈴木正貴編 1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 17 集。

小澤一弘編 1992『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 28 集。

鈴木正貴編 1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集。

植田弥生 2000『岐阜城千畳敷遺跡井戸遺構の樹種同定』『千畳敷Ⅲ』（財）岐阜市教育文化振興事業団。

第 14 表　木製品の樹種同定結果（1）

樹種同定試料		調査区	グリッド	遺構	種別	樹種	図版番号
97B-W-	001	97B	Ⅳ G10c	NR02植物層	連歯下駄	ヒノキ	2749
97B-W-	002	97B	Ⅳ G9b	NRA	不明板材	ヒノキ	2769
97B-W-	003	97B	Ⅳ G11c	NR01下層	曲物桶底板? 厚い	ヒノキ	2640
97B-W-	004	97B	Ⅳ G11c	NR01下層	折敷底板	ヒノキ	2641
97B-W-	005	97B	Ⅳ G9a	NRB(裏込め)	板草履	針葉樹	2770
97B-W-	006	97B	Ⅳ G10c	NR02植物層	差歯下駄	ヒノキ	2750
97B-W-	009	97B	Ⅳ G10c	NR02植物層	不明板材	ヒノキ	2670
97B-W-	010	97B	Ⅳ F11t	NR01	差歯下駄の本体	ヒノキ	2639
97B-W-	010	97B	Ⅳ F11t	NR01	差歯下駄の前歯	ヒノキ	2639
97B-W-	010	97B	Ⅳ F11t	NR01	差歯下駄の後歯	ヒノキ	2639
97B-W-	011	97B		NR02植物層	折敷底板	アスナロ	2665
97B-W-	012	97B		NR02植物層	不明加工材(飾具)	サワラ	2727
97B-W-	013	97B		NR02植物層	へら	ヒノキ	2751
97B-W-	014	97B		NR02植物層	楔	コウヤマキ	2721
97B-W-	015	97B		NR02植物層	折敷底板	ヒノキ	2744
97B-W-	016	97B	Ⅳ G10c	NR02植物層	不明加工材(飾具)	ヒノキ	2734
97B-W-	017	97B	Ⅳ G9d	NR02灰色粘土	折敷底板	サワラ	2647
97B-W-	018	97B	Ⅳ G9d	NR02灰色粘土	折敷側板	ヒノキ	2648
97B-W-	019	97B	Ⅳ G9d	NR02灰色粘土	建て具部材?(角材)	クロベ	2649
97B-W-	019	97B	Ⅳ G9d	NR02灰色粘土	019の木釘	ヒノキ	2649
97B-W-	020	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	不明板材	ヒノキ	2724
97B-W-	021	97B		NR02植物層	折敷底板	ヒノキ	2662
97B-W-	022	97B		NR02植物層	建て具部材?(角材)	ヒノキ	2720
97B-W-	023	97B		NR02植物層	楔	ヒノキ	2722
97B-W-	024	97B		NR02植物層	建築部材(板材)? ほぞ孔	サワラ	2732
97B-W-	025	97B		NR02植物層	木屑	コウヤマキ	2736
97B-W-	026	97B		NR02植物層	不明棒材(栓状)	ヒノキ	2755
97B-W-	027	97B		NR02植物層	栓	アスナロ	2753
97B-W-	028	97B		NR02植物層	木屑	コウヤマキ	2737
97B-W-	030	97B		NR02植物層	下駄の歯	センダン	2752
97B-W-	031	97B		NR02植物層	木屑	コウヤマキ	2738
97B-W-	032	97B		NR02植物層	杓子(へら状)	ヒノキ	2669
97B-W-	033	97B		NR02植物層	建築部材(栓状)?	コウヤマキ	2738
97B-W-	034	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	不明板材(屋根)?	ヒノキ	2669
97B-W-	036	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	不明板材(屋根)?	ヒノキ	2667
97B-W-	037	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷底板	ヒノキ	2745
97B-W-	038	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	不明板材(屋根)?	サワラ	2740
97B-W-	039	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷底板	サワラ	2743
97B-W-	041	97B	Ⅳ G10c	NR02植物層	方形曲物底板	ヒノキ	2658
97B-W-	042	97B	Ⅳ G10c	NR02植物層	楔	スギ	2729
97B-W-	043	97B	Ⅳ G10c	NR02植物層	折敷底板	ヒノキ	2674
97B-W-	044	97B	Ⅳ G10c	NR02植物層	建築部材(板材)?	ヒノキ	2742
97B-W-	045	97B	Ⅳ G9d	NR02灰色粘土	折敷底板	ヒノキ	2650
97B-W-	047	97B	Ⅳ G10b	NR02下層	木簡上板材	ヒノキ	2764
97B-W-	048	97B	Ⅳ G10b	NR02下層	刀子形代柄部	ヒノキ	2759
97B-W-	050	97B	Ⅳ G10b	NR02下層	杓子(へら状)	ヒノキ	2768
97B-W-	051	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷底板	ヒノキ	2661
97B-W-	052	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷底板	ヒノキ	2663
97B-W-	053	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷底板	ヒノキ	2666
97B-W-	054	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷底板	ヒノキ	2664
97B-W-	055	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	不明円盤状板材 穴2	ヒノキ	2659
97B-W-	056	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	不明角材	サワラ	2725
97B-W-	058	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷脚部側板?	ヒノキ	2719
97B-W-	059	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷底板	サワラ	2672
97B-W-	060	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	折敷底板	サワラ	2671
97B-W-	061	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	菜箸	ヒノキ	2756
97B-W-	062	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	不明板材(屋根)	クロベ	2741
97B-W-	065	97B	Ⅳ G9c	NR02植物層	曲物桶受台	スギ	2748

第 15 表　木製品の樹種同定結果（2）

樹種同定試料		調査区	グリッド	遺構	種別	樹種	図版番号
97B-W-	066	97B	ⅣG9c	NR02植物層	曲物桶受台	ヒノキ	2747
97B-W-	067	97B	ⅣG10b	NR02植物層	二股棒状製品	クリ	2762
97B-W-	069	97B	ⅣG10b	NR02下層	不明加工板材	クロベ	2765
97B-W-	072	97B	ⅣG10b	NR02植物層	折敷底板	アスナロ	2673
97B-W-	074	97B	ⅣG10b	NR02植物層	不明板材	ヒノキ	2715
97B-W-	077	97B	ⅣG10b	NR02植物層	不明加工板材	ヒノキ	2728
97B-W-	078	97B	ⅣG9d	NR02植物層	不明加工板材	クロベ	2754
97B-W-	079	97B	ⅣG9d	NR02植物層	不明加工板材	サワラ	2726
97C-W-	031	97C	ⅢG9i	SX02(検Ⅲ)	曲物底板 桜皮	ヒノキ	2774
97C-W-	032	97C	ⅢG11i	検Ⅱ	木簡	ヒノキ	2820
97C-W-	033	97C	ⅢG11i	検Ⅳ	連歯下駄	ヒノキ	2921
97C-W-	034	97C	ⅢG11i	検Ⅰ	連歯下駄	ヒノキ	2801
97C-W-	035	97C	ⅢG12h	検Ⅱ	不明板材	ヒノキ	2822
97C-W-	036	97C	ⅢG10j	SW02柵	結桶側板 把手付き	クロベ	2779
97C-W-	037	97C	ⅢG10k 9k	SX02	杓子(へら状)	スギ	2780
97C-W-	038	97C	ⅢG11i	検Ⅱ	木簡	ヒノキ	2821
97C-W-	039	97C	ⅢG9j	検Ⅲ	結桶側板	アスナロ	2864
97C-W-	040	97C	ⅢG11j	検Ⅰ	方形曲物底板	ヒノキ	2788
97C-W-	041	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	方形曲物底板	ヒノキ	2846
97C-W-	042	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	折敷底板	サワラ	2848
97C-W-	043	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	折敷底板	ヒノキ	2847
97C-W-	043	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	043の木釘	ヒノキ	2847
97C-W-	044	97C	ⅢG9i	SW胴木脇	曲物底板	ヒノキ	2776
97C-W-	045	97C	ⅢG13g	検Ⅰ	曲物底板	ヒノキ	2790
97C-W-	046	97C	ⅢG11j	検Ⅲ	曲物底板	サワラ	2852
97C-W-	048	97C	ⅢG10j	検Ⅴ	楔?	サワラ	2925
97C-W-	050	97C	ⅢG10j	検Ⅰ	折敷底板	ヒノキ	2932
97C-W-	051	97C	ⅢG10i	検Ⅳ	方形曲物底板	ヒノキ	2885
97C-W-	054	97C	ⅢG11h	検Ⅳ	不明板材	サワラ	2910
97C-W-	055	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	有孔曲物底板	クロベ	2890
97C-W-	056	97C	ⅢG13 f	検Ⅰ	箱物側板	ヒノキ	2797
97C-W-	057	97C	ⅢG10i	検Ⅲ	建て具部材?(角材)	クロベ	2858
97C-W-	059	97C	ⅢG10i	検Ⅲ	不明角材 釘穴	サワラ	2859
97C-W-	060	97C	ⅢG10i	検Ⅲ	建て具部材?(角材)	サワラ	2857
97C-W-	062	97C	ⅢG10i	検Ⅲ	箱物底板?	サワラ	2860
97C-W-	064	97C	ⅢG11h	検Ⅳ	不明板材	クロベ	2917
97C-W-	065	97C	ⅢG11h	検Ⅳ	建て具部材?(角材)	スギ	2916
97C-W-	066	97C	ⅢG10j	検Ⅴ	箱物側板 漆	ヒノキ	2924
97C-W-	066	97C	ⅢG10j	検Ⅴ	066の木釘	ヒノキ	2924
97C-W-	067	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	箱物底板	ヒノキ	2887
97C-W-	067	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	067の木釘1	ヒノキ?	2887
97C-W-	067	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	067の木釘2	ヒノキ	2887
97C-W-	068	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	杓子(へら状)	サワラ	2900
97C-W-	069	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	栓	サワラ	2894
97C-W-	070	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	楔	ヒノキ	2899
97C-W-	071	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	楔	ヒノキ	2897
97C-W-	072	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	簪状木製品	サワラ	2906
97C-W-	073	97C	ⅢG12h	検Ⅰ	不明加工板材	サワラ	2795
97C-W-	075	97C	ⅢG12h	検Ⅰ,検出(客土)	釣瓶把手	ヒノキ	2800
97C-W-	076	97C	ⅢG10j	検Ⅴ	曲物底板 桜皮	サワラ	2928
97C-W-	078	97C	ⅢG10j	検Ⅴ	結桶側板	ヒノキ	2930
97C-W-	079	97C	ⅢG10j	検Ⅱ	結桶側板	サワラ	2835
97C-W-	080	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	楔	ヒノキ	2896
97C-W-	082	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	不明板材(箱物?)	ヒノキ	2893
97C-W-	083	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	建築部材(角材)	ヒノキ	2912
97C-W-	084	97C	ⅢG10j	検Ⅱ	結桶側板	スギ	2836
97C-W-	085	97C	ⅢG13g,13h	検Ⅰ,検Ⅱ	杓子(へら状)	サワラ	2802
97C-W-	086	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	建築部材(角材) ほぞ穴	アカマツ	2913

第 16 表　木製品の樹種同定結果（3）

樹種同定試料		調査区	グリッド	遺構	種別	樹種	図版番号
97C-W-	087	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	建築部材(角材) 蟻ほぞ	ヒノキ科	2911
97C-W-	088	97C	ⅢG10j	検Ⅲ(SX02)	建て具部材?(角材)	ヒノキ	2873
97C-W-	089	97C	ⅢG10j	検Ⅲ(SX02)	建築部材(角材)	クロベ	2868
97C-W-	091	97C	ⅢG10j	検Ⅲ(SX02)	折敷底板	スギ	2874
97C-W-	092	97C	ⅢG10j	検Ⅲ(SX02)	楔	アカガシ亜属	2866
97C-W-	096	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	箱物側板?	ヒノキ	2865
97C-W-	096	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	096の木釘	ヒノキ	2865
97C-W-	097	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	折敷底板	ヒノキ	2867
97C-W-	098	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	建築部材(板材)?	クロベ	2876
97C-W-	100	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	折敷側板	ヒノキ	2871
97C-W-	101	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	結桶側板	クロベ	2833
97C-W-	102	97C	ⅢG11i	検Ⅳ	杓子(へら状)	ヒノキ	2902
97C-W-	103	97C	ⅢG12h	検Ⅱ	不明板材(結桶側?)	スギ	2837
97C-W-	104	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	方形曲物底板	ヒノキ	2884
97C-W-	106	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	不明加工板材	クロベ	2901
97C-W-	107	97C	ⅢG11i	検Ⅲ	釣り手(分枝部分を利用)	サクラ属	2861
97C-W-	108	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	曲物底板(だ円)	ヒノキ	2892
97C-W-	109	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	楔	コウヤマキ	2898
97C-W-	110	97C	ⅢG11i	検Ⅱ	箱物底板?	アスナロ	2830
97C-W-	112	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	下駄の歯	ヒノキ	2920
97C-W-	113	97C	ⅢG11i	検Ⅱ	折敷(底板)	ヒノキ	2826
97C-W-	113	97C	ⅢG11i	検Ⅱ	113の側板	ヒノキ	2826
97C-W-	113	97C	ⅢG11i	検Ⅱ	113の側板の木釘	散孔材	2826
97C-W-	114	97C	ⅢG11h	検Ⅲ	建築部材(角材) 相欠ほぞ	サワラ	2863
97C-W-	115	97C	ⅢG13g	検Ⅰ	不明板材(屋根)	スギ	2808
97C-W-	116	97C			柄杓の柄	ヒノキ	2809
97C-W-	117	97C	ⅢG11i	検Ⅱ	不明板材(屋根)	ヒノキ	2824
97C-W-	118	97C	ⅢG13g	検Ⅱ	結桶側板	サワラ	2834
97C-W-	119	97C	ⅢG13g	検Ⅱ	結桶側板	サワラ	2832
97C-W-	120	97C	ⅢG10j	検Ⅲ	下駄の歯	ヒノキ	2872
97C-W-	121	97C	ⅢG15e	検Ⅰ	下駄の歯	ヒノキ	2804
97C-W-	122	97C	ⅢG11k	検Ⅱ	杵?	ヒノキ	2839
97C-W-	123	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	下駄	ヒノキ	2918
97C-W-	125	97C	ⅢG13g,13h	検Ⅱ	建築部材(角材)	ヒノキ	2831
97C-W-	126	97C	ⅢG13g	検Ⅱ	不明板材(礎板?)	ヒノキ	2838
97C-W-	127	97C	ⅢG10j	検Ⅳ	不明角材	ヒノキ	2909
97C-W-	129	97C	ⅢG11h	検Ⅳ	栓状製品	ヒノキ	2919
97C-W-	130	97C	ⅢG11h	検Ⅳ	つまようじ?	サワラ	2889
97C-W-	132	97C	ⅢG11h	検Ⅳ	建築部材(角材）ほぞ	アスナロ	2923
97C-W-	133	97C	ⅢG11h	検Ⅳ	結桶底板	サワラ	2895
97C-W-	135	97C	ⅢG13h	検Ⅲ	球状製品	カキノキ属	2856
97C-W-	136	97C	ⅢG10j	検Ⅴ	箱物底板?	ヒノキ	2927
97C-W-	137	97C	ⅢG10j	検Ⅴ	折敷側板?	サワラ	2931
97C-W-	138	97C	ⅢG10j	検Ⅴ	曲物底板	ヒノキ	2929
97C-W-	139	97C	ⅢG10j	検Ⅰ	不明角材	ヒノキ	2796
97C-W-	140	97C	ⅢG10i	検Ⅳ	不明板材(釣瓶？)	サワラ	2891
97C-W-	141	97C	ⅢG11j	検Ⅲ	方形曲物底板	ヒノキ	2851
97C-W-	144	97C	ⅢG11j	検Ⅲ	箱物側板(漆残存)	スギ	2854
97C-W-	147	97C	ⅢG9h	SW01	鍬柄	アカガシ亜属	2775
97C-W-	148	97C	ⅢG10j	検Ⅱ	折敷底板	ヒノキ	2825
97C-W-	149	97C	ⅢG10j	検Ⅱ	折敷底板	ヒノキ	2827
97C-W-	150	97C	ⅢG11i	検Ⅱ	折敷底板	アスナロ	2829
97C-W-	154	97C	ⅢG11i	検Ⅲ	折敷底板	クロベ	2850
97C-W-	156	97C	ⅢG11i	検Ⅲ	結桶底板	サワラ	2855
97C-W-	157	97C	ⅢG11i	検Ⅰ	箱物側板?	コウヤマキ	2806
97C-W-	159	97C	ⅢG11i	検Ⅰ	方形曲物底板	サワラ	2787
97C-W-	160	97C	ⅢG11i	検Ⅰ	方形曲物底板	ヒノキ	2789
97C-W-	161	97C	ⅢG11i	検Ⅰ	不明板材(屋根)	サワラ	2807

第17表　土台木の樹種同定結果

樹種同定試料		調査区　グリッド	遺構	種別	樹種	図版番号
胴木	2	97C	SW01	土台木A類	ケンポナシ属	
胴木	3	97C	SW01	土台木A類	ツガ属	
胴木	4	97C	SW01	土台木A類	アカマツ	
胴木	5	97C	SW01	土台木A類	ツガ属	
胴木	6	97C	SW01	土台木A類	モミ属	
胴木	8	97C	SW01	土台木A類	カバノキ属	
胴木	10	97C	SW01	土台木A類	カエデ属	
胴木	11	97C	SW01	土台木A類	カエデ属	
胴木	12	97C	SW01	土台木A類	アカマツ	
胴木	13	97C	SW01	土台木A類	トチノキ	
胴木	14	97C	SW01	土台木A類	マツ属単維管束亜属	
胴木	16	97C	SW01	土台木A類	ツガ属	
胴木	17	97C	SW01	土台木A類	サクラ属	
胴木	19	97C	SW01	土台木A類	ケヤキ	
胴木	20	97C	SW01	土台木A類	モミ属	
胴木	22	97C	SW01	土台木A類	モミ属	
胴木	23	97C	SW01	土台木A類	カバノキ属	
胴木	24	97C	SW01	土台木A類	コウヤマキ	
胴木	25	97C	SW01	土台木A類	コナラ節	
胴木	26	97C	SW01	土台木A類	マツ属単維管束亜属	2949
胴木	27	97C	SW01	土台木A類	ツガ属	2950
胴木	28	97C	SW01	土台木A類	ツガ属	2951
胴木	29	97C	SW01	土台木A類	モミ属	
胴木	30	97C	SW01	土台木A類	モミ属	2954
胴木	31a	97C	SW01	土台木A類	ヤナギ属	
胴木	31b	97C	SW01	土台木A類	クリ	
胴木	32	97C	SW01	土台木A類	モミ属	2952
胴木	33	97C	SW01	土台木A類	サクラ属	2953
横木	東2	97C	SW01	土台木B類	クリ	2945
横木	東3	97C	SW01	土台木B類	カバノキ属	2955
横木	東1	97C	SW01	土台木B類	トチノキ	2948
横木	西3	97C	SW01	土台木B類	トチノキ	2946
横木	西1	97C	SW01	土台木B類	モミ属	2947
横木	西2	97C	SW01	土台木B類	カバノキ属	
胴木	A-1	94A	SX01	土台木A類	マツ属複維管束亜属	Ⅶ-980
胴木	A-2	94A	SX01	土台木A類	カツラ	Ⅶ-981
胴木	A-3	94A	SX01	土台木A類	トチノキ	Ⅶ-982
胴木	A-4	94A	SX01	土台木B類	トチノキ	Ⅶ-983
胴木	A-5	94A	SX01	土台木B類	アカマツ	Ⅶ-985
胴木	A-6	94A	SX01	土台木B類	アカマツ	Ⅶ-984
胴木	B-1	94A	SX01	土台木A類	モミ属	Ⅶ-987
胴木	B-2	94A	SX01	土台木A類	マツ属複維管束亜属	Ⅶ-989
胴木	C-1	94A	SX01	土台木A類	カツラ	Ⅶ-986
胴木	6	94A	SX01	土台木A類	カエデ属	Ⅶ-988

終了

第 18 表　杭の樹種同定結果（1）

樹種同定試料		調査区　グリッド	遺構	種別	樹種
杭	No.1	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.2	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.3	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.4	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.5	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.6	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.7	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.8	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.9	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.10	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.11	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.12	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.13	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.14	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.15	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.16	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.17	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.18	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.19	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.20	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.21	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.22	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.23	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.24	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.25	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.26	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.27	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	ヒノキ科
杭	No.28	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.29	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.30	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.31	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.32	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.33	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.34	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.35	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.36	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.37	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.38	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.39	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.40	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.41	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.42	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.43	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.44	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.45	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.46	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.47	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.48	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.49	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.50	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.51	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.52	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.53	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.54	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.55	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.56	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.57	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.58	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.59	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.60	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.61	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.62	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.63	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.64	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.65	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.66	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ
杭	No.67	97C	SW01（石垣下）	杭Ｂ類（丸杭）	アカマツ

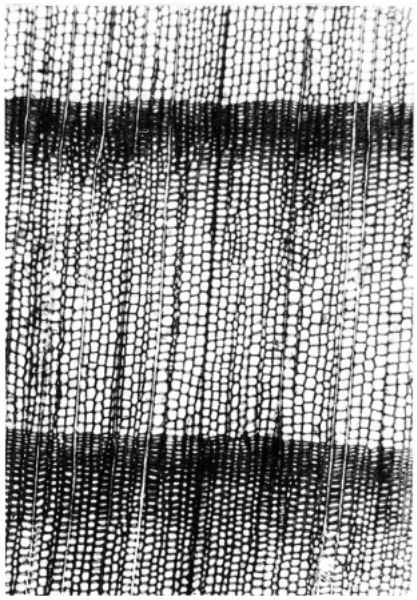
終了

第19表　杭の樹種同定結果（2）

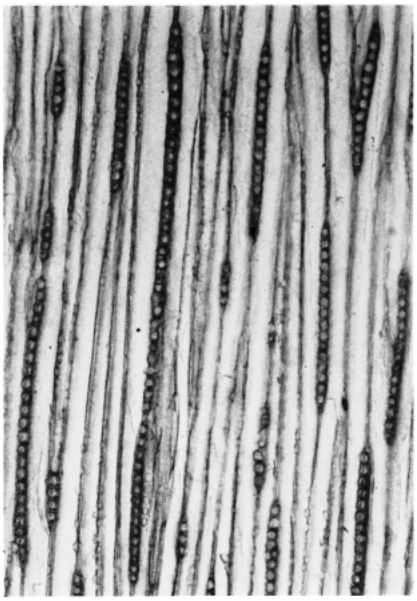
樹種同定試料		調査区　グリッド	遺構	種別	樹種
角杭	No.7	97C	SA04	杭A類（角杭）	ヒノキ科
角杭	No.10	97C	SA04	杭A類（角杭）	クリ
角杭	No.17	97C	SA04	杭A類（角杭）	クリ
角杭	No.37	97C	SA08	杭A類（角杭）	クリ
角杭	No.46	97C	SA08	杭A類（角杭）	クリ
角杭	No.53	97C	SA08	杭A類（角杭）	クリ
角杭	No.68	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.69	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.71	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.71	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.72	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.73	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.75	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.76	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.77	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.78	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.80	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.81	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.82	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.83	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.84	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.85	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.86	97C	SA04?	杭A類（角杭）	クリ
角杭	No.87	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
角杭	No.88	97C	SA04?	杭A類（角杭）	クリ
角杭	No.89	97C	SA04?	杭A類（角杭）	アカマツ
SX01サンプル下場4		97C	94ASX01?		アカマツ
SX01サンプル下場5		97C	94ASX01?		アカマツ
SX01サンプル下場7		97C	94ASX01?		ヤナギ属
SX01サンプル下場8		97C	94ASX01?		アカガシ亜属
SX01サンプル下場10		97C	94ASX01?		ヤナギ属
柵5杭A	1	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	2	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	3	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	4	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	5	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	6	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	7	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	9	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	10	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	11	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	12	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	13	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	15	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	16	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	17	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	20	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	22	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	23	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	24	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	25	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカガシ亜属
柵5杭A	27	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカガシ亜属
柵5杭A	28	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	29	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	30	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭A	40	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	41	97C	SA07	杭A類（角杭）	ヤナギ属
柵5杭A	42	97C	SA07	杭A類（角杭）	アカマツ
柵5杭S	21	97C	SA05	杭A類（角杭）	モミ属
柵5杭S	21下	97C	SA05	杭A類（角杭）	モミ属
柵5杭S	28	97C	SA05	杭A類（角杭）	アカガシ亜属
杭	1	97B	NR	杭A類（角杭）	ヤナギ属
杭	2	97B	NR	杭A類（角杭）	ヤナギ属
杭	3	97B	NR	杭A類（角杭）	ヤナギ属
杭	4	97B	NR	杭A類（角杭）	アカガシ亜属
杭	5	97B	NR	杭A類（角杭）	アカマツ
杭	6	97B	NR	杭A類（角杭）	ヤナギ属
杭	7	97B	NR	杭A類（角杭）	ヤナギ属
杭	8	97B	NR	杭A類（角杭）	アカガシ亜属
杭	9	97B	NR	杭A類（角杭）	アカマツ
杭	10	97B	NR	杭A類（角杭）	ヤナギ属
杭	11	97B	NR	杭A類（角杭）	ヤナギ属

終了

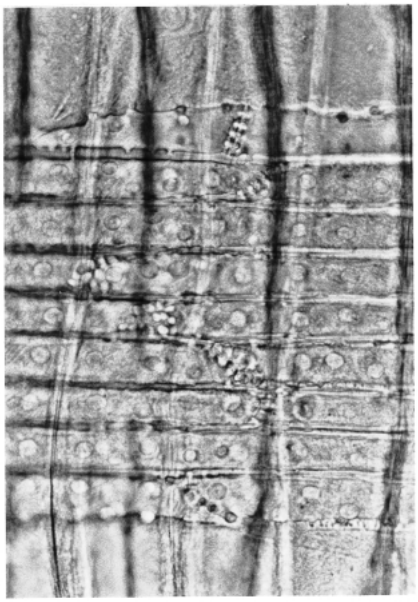
第 225 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（1）



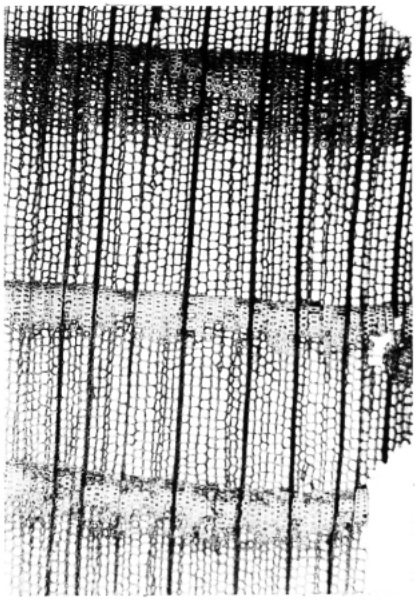
1a. モミ属（横断面）
97C 胴木 29　bar:0.5mm



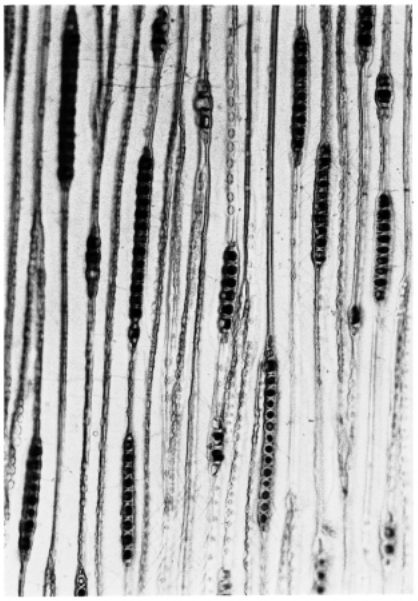
1b. モミ属（接線断面）
bar:0.2mm



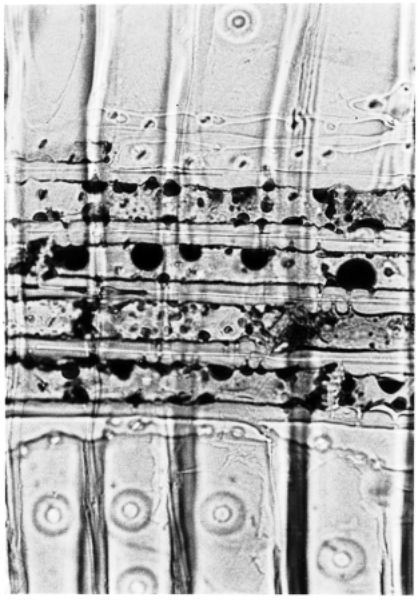
1c. モミ属（放射断面）
bar:0.05mm



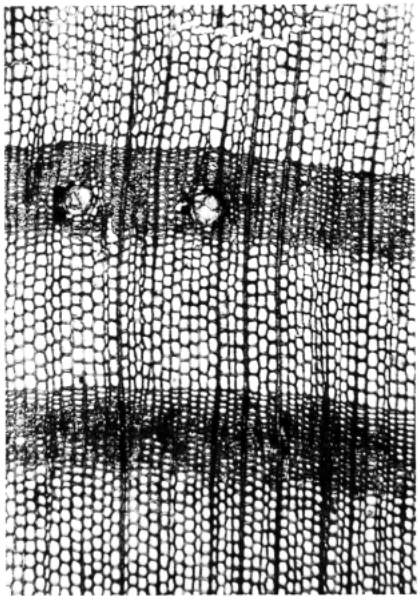
2a. ツガ属（横断面）
97C 胴木 28　bar:0.5mm



2b. ツガ属（接線断面）
bar:0.2mm



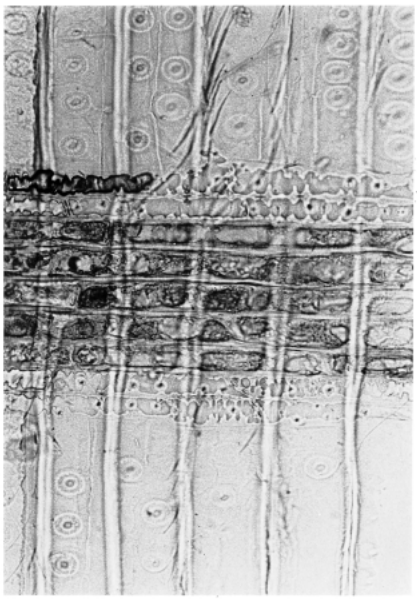
2c. ツガ属（放射断面）
bar:0.05mm



3a. アカマツ（横断面）
94A 胴木 A-6　bar:0.5mm

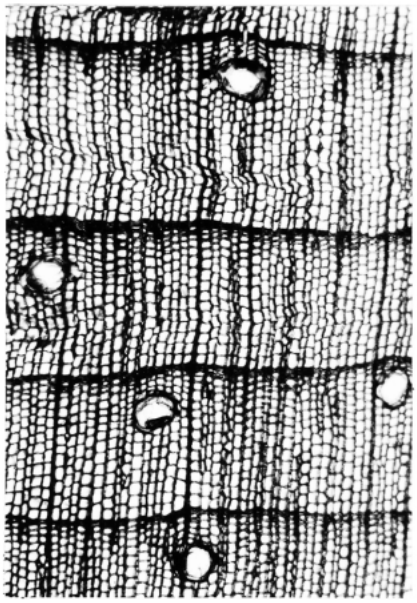


3b. アカマツ（接線断面）
bar:0.2mm



3c. アカマツ（放射断面）
bar:0.05mm

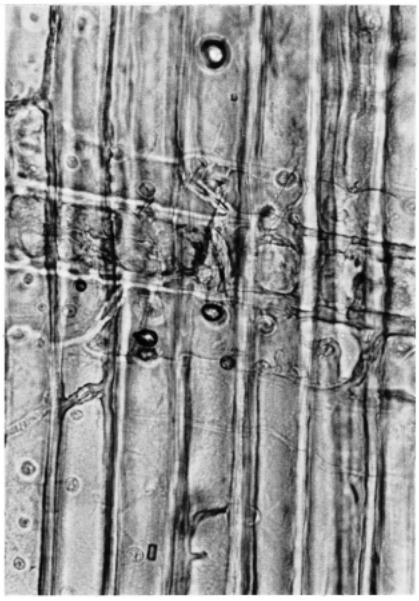
第 226 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（2）



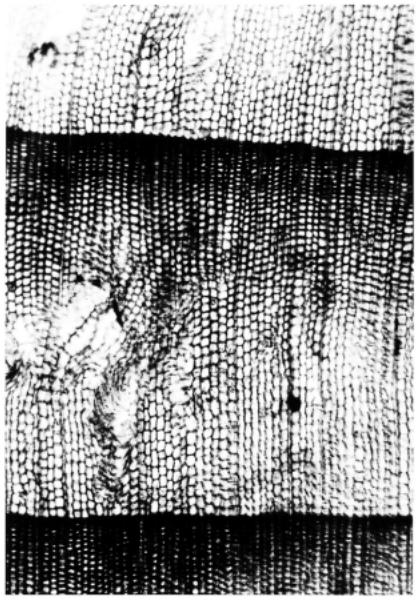
4a. マツ属単維管束亜属（横断面）
97C 胴木 14　bar:0.5mm



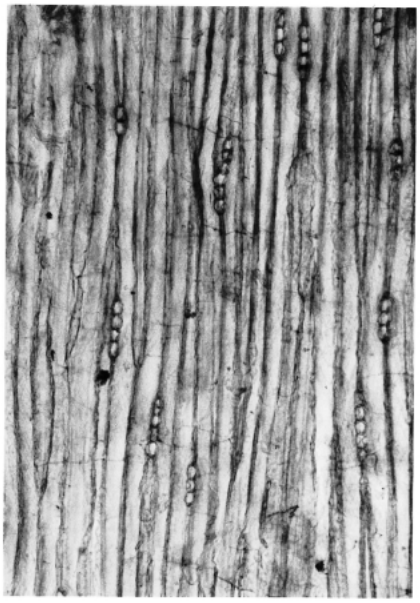
4b. マツ属単維管束亜属（接線断面）
bar:0.2mm



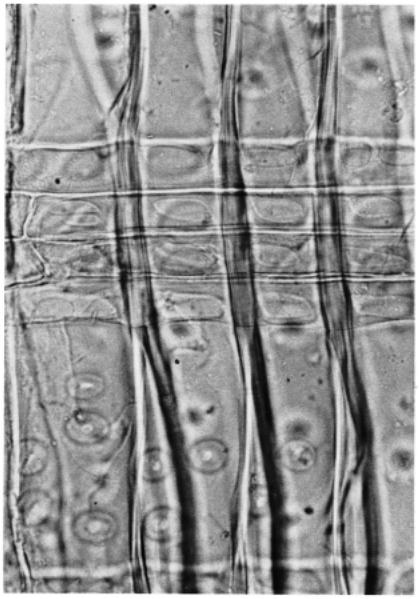
4c. マツ属単維管束亜属（放射断面）
bar:0.05mm



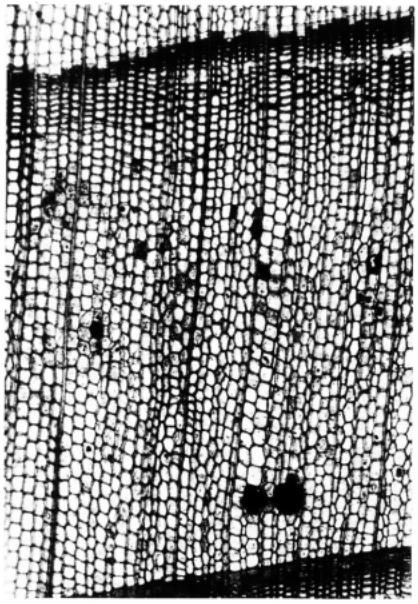
5a. コウヤマキ（横断面）
97C-W-109　bar:0.5mm



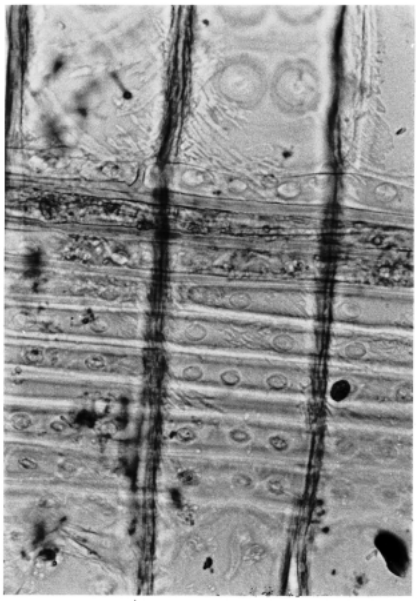
5b. コウヤマキ（接線断面）
bar:0.2mm



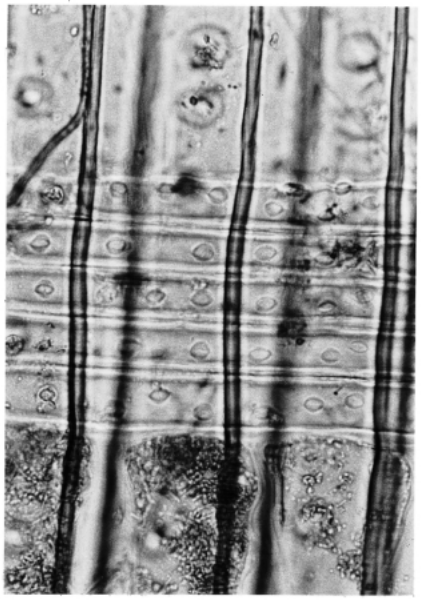
5c. コウヤマキ（放射断面）
bar:0.05mm



6a. スギ（横断面）
97C-W-037　bar:0.5mm

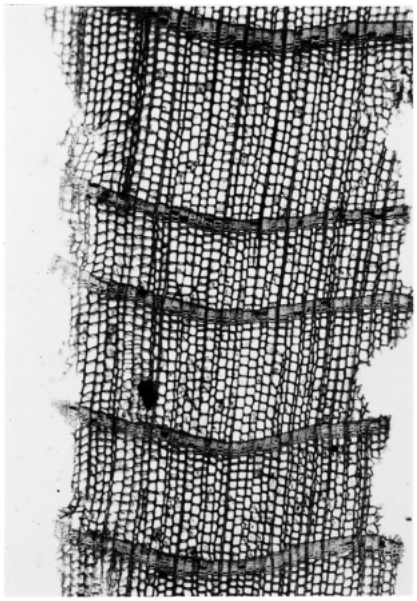


6b. スギ（放射断面）
bar:0.05mm



7. スギ（放射断面）
97C-W-065　bar:0.05mm

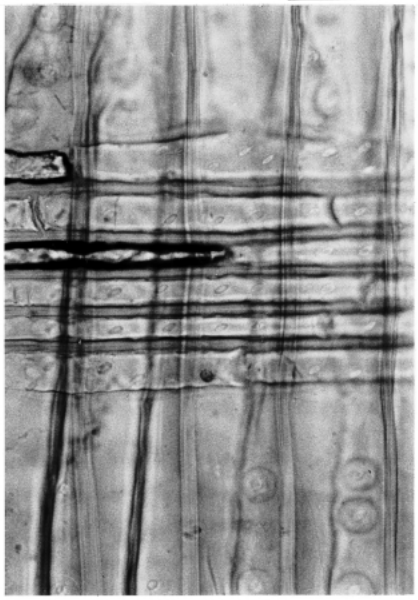
第 227 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（3）



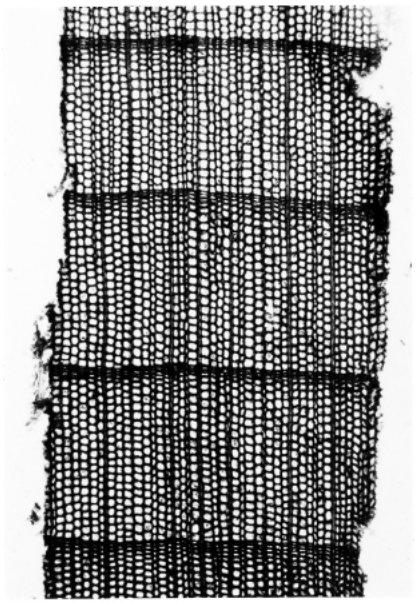
8a. クロベ（横断面）
97C-W-036　bar:0.5mm



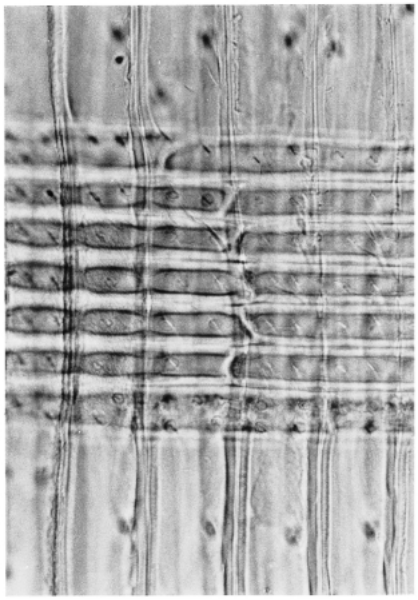
8b. クロベ（放射断面）
bar:0.05mm



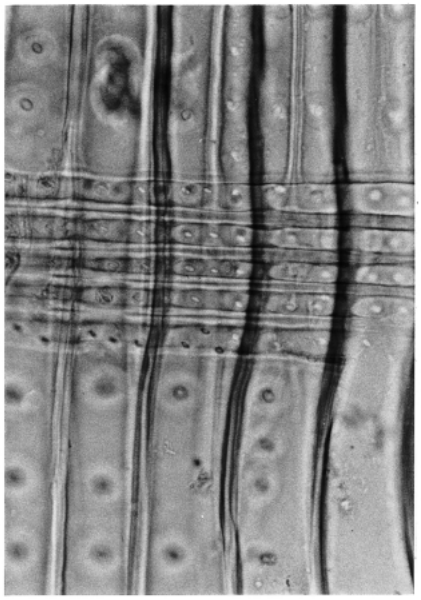
9. クロベ（放射断面）
97B-W-019　bar:0.05mm



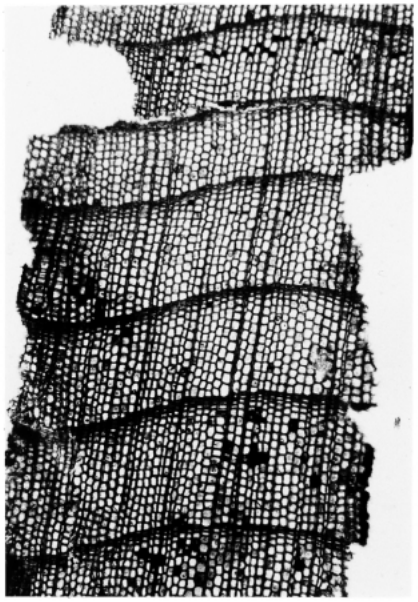
10a ヒノキ（横断面）
97B-W-043　bar:0.5mm



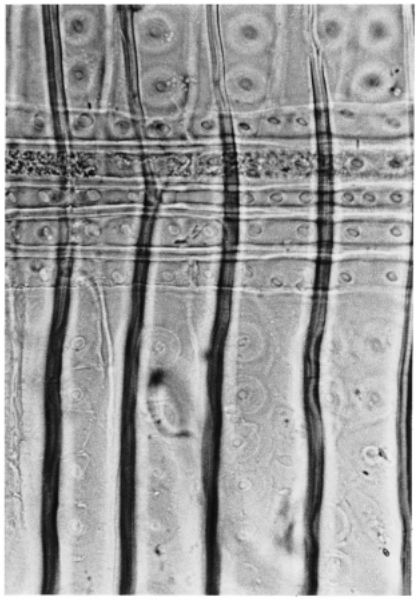
10b. ヒノキ（放射断面）
bar:0.05mm



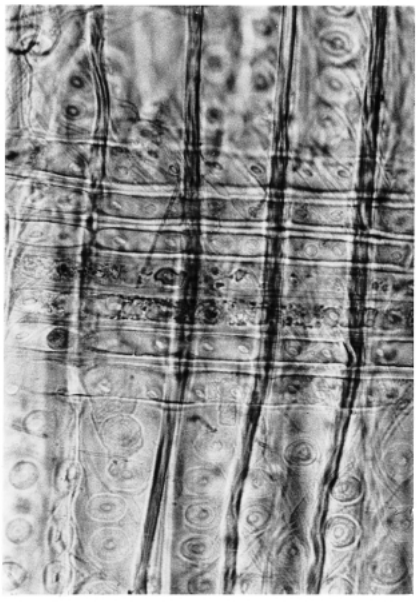
11c. ヒノキ（放射断面）
97B-W-021　bar:0.05mm



12a. サワラ（横断面）
97C-W-042　bar:0.5mm

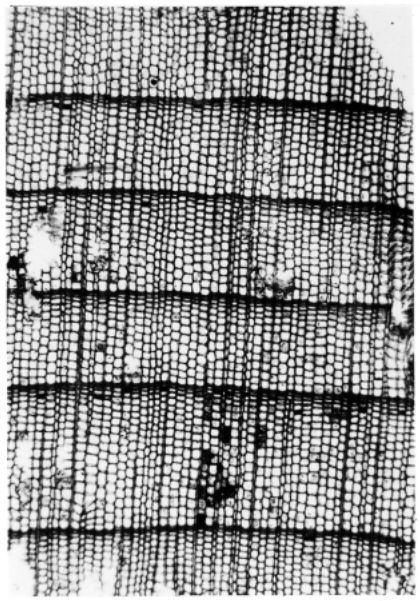


12b. サワラ（放射断面）
bar:0.05mm

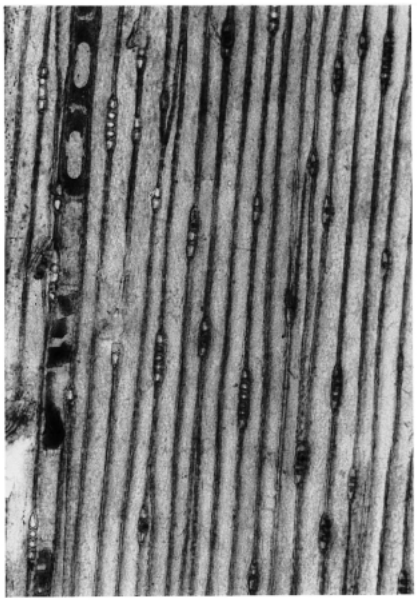


13. サワラ（放射断面）
97B-W-039　bar:0.05mm

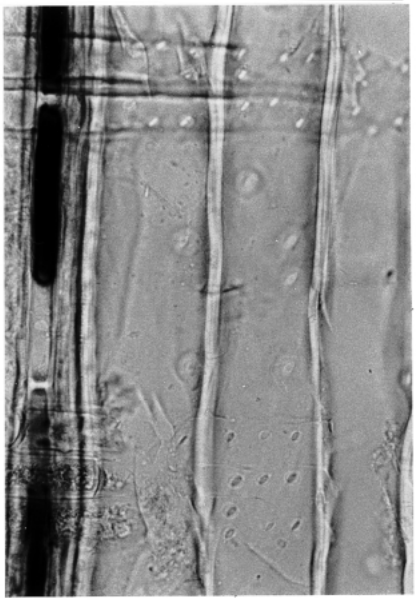
第 228 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（4）



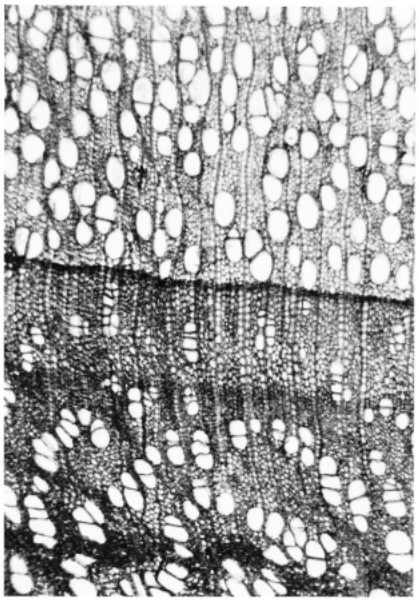
14a. アスナロ（横断面）
97C-W-150　bar:0.5mm



14b. アスナロ（接線断面）
bar:0.2mm



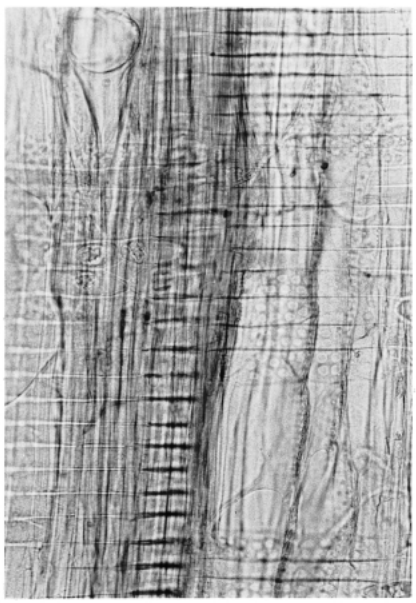
14c. アスナロ（放射断面）
bar:0.05mm



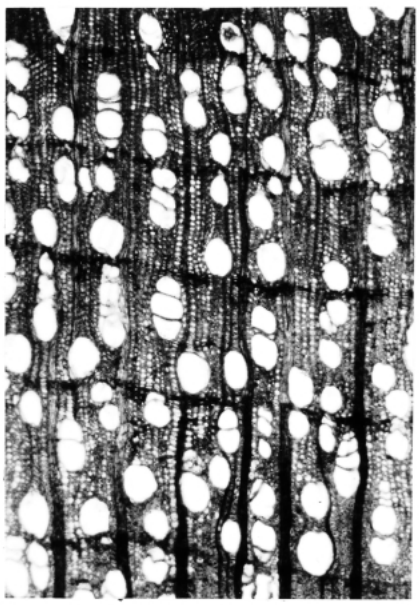
15a. ヤナギ属（横断面）
97C 胴木 31（外）　bar:0.5mm



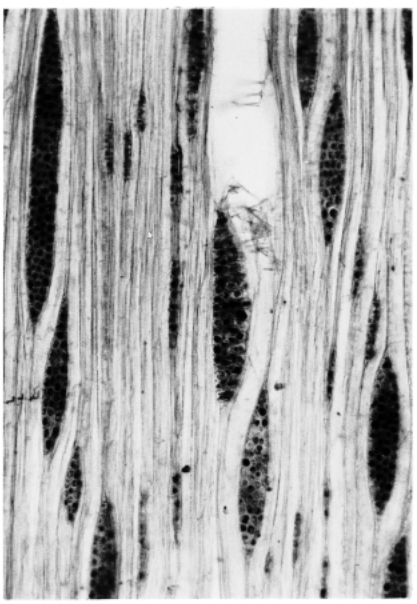
15b. ヤナギ属（接線断面）
bar:0.2mm



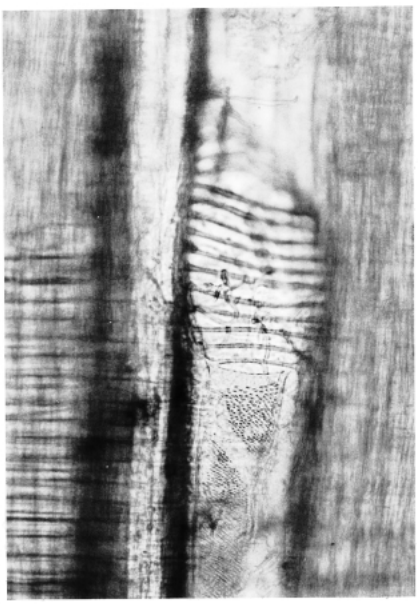
15c. ヤナギ属（放射断面）
bar:0.1mm



16a. カバノキ属（横断面）
97C 胴木 23　bar:0.5mm

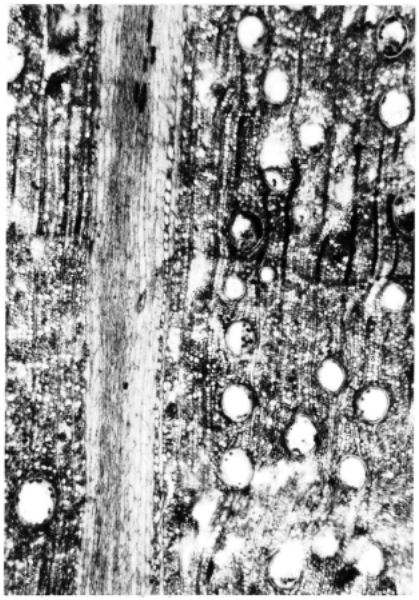


16b. カバノキ属（接線断面）
bar:0.2mm

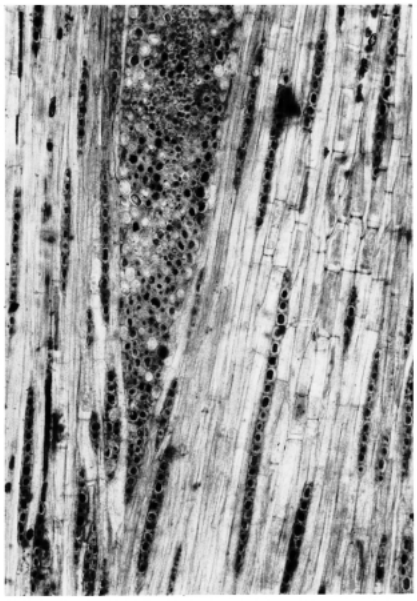


16c. カバノキ属（放射断面）
bar:0.1mm

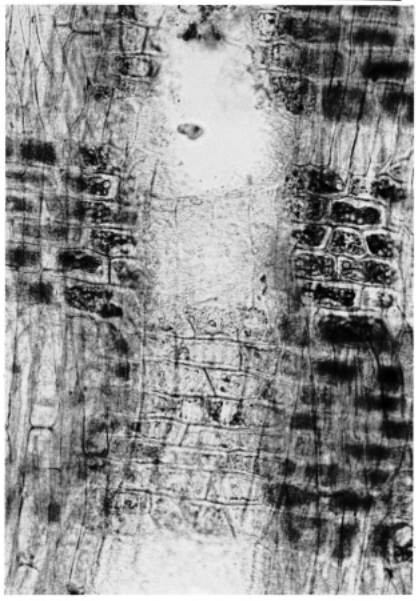
第 229 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（5）



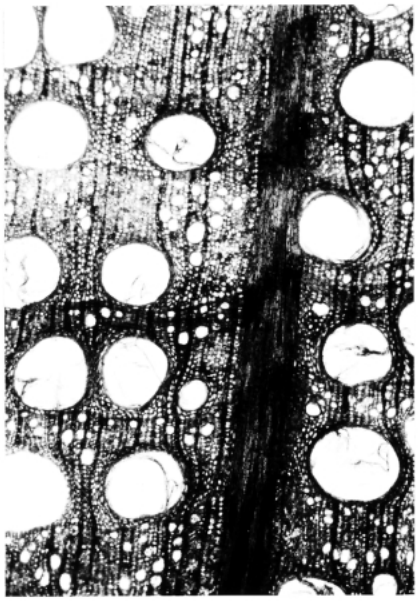
17a. アカガシ亜属（横断面）
97C-W-147　bar:0.5mm



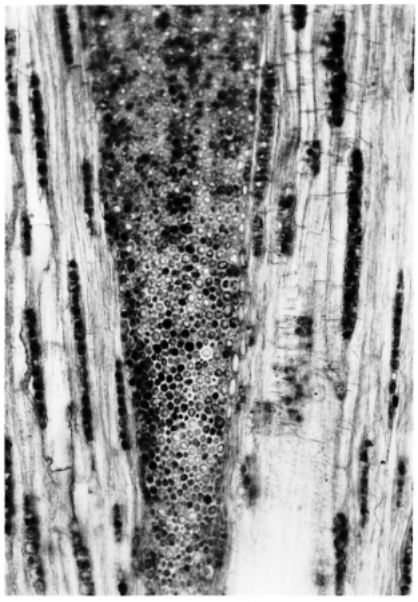
17b. アカガシ亜属（接線断面）
bar:0.2mm



17c. アカガシ亜属（放射断面）
bar:0.1mm



18a. コナラ節（横断面）
97C 胴木 25　bar:0.5mm



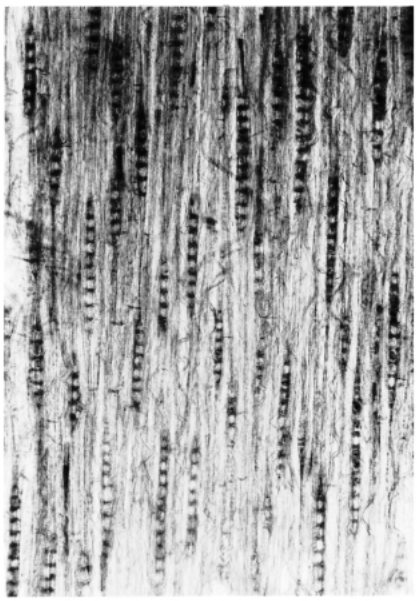
18b. コナラ節（接線断面）
bar:0.2mm



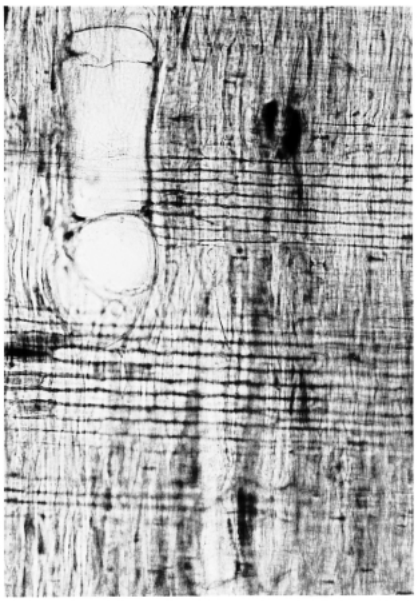
18c. コナラ節（放射断面）
bar:0.1mm



19a. クリ（横断面）
横木東 1 北　bar:0.5mm

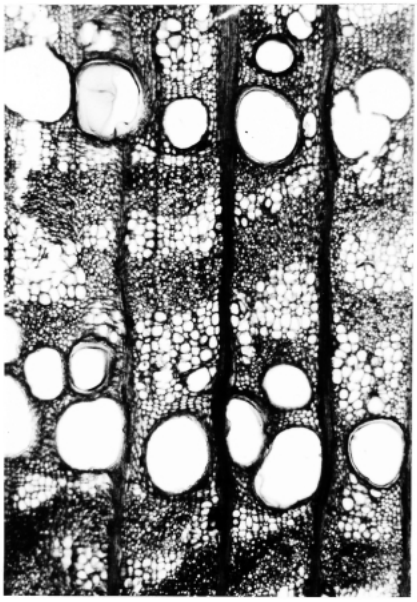


19b. クリ（接線断面）
bar:0.2mm

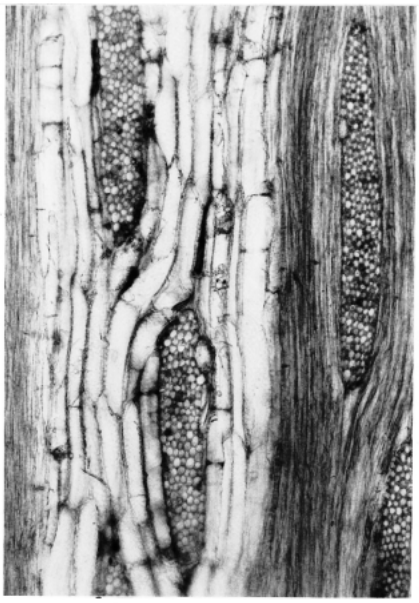


19c. クリ（放射断面）
bar:0.2mm

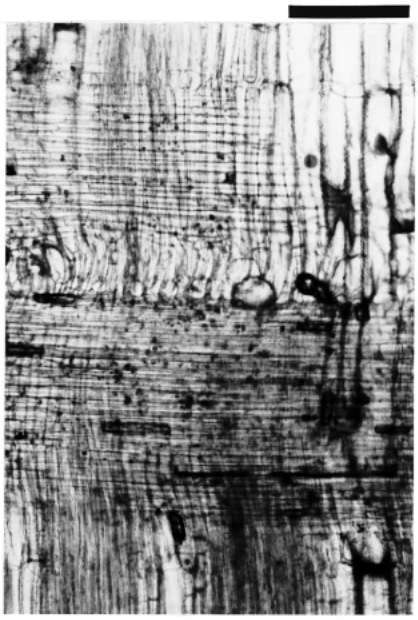
第 230 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（6）



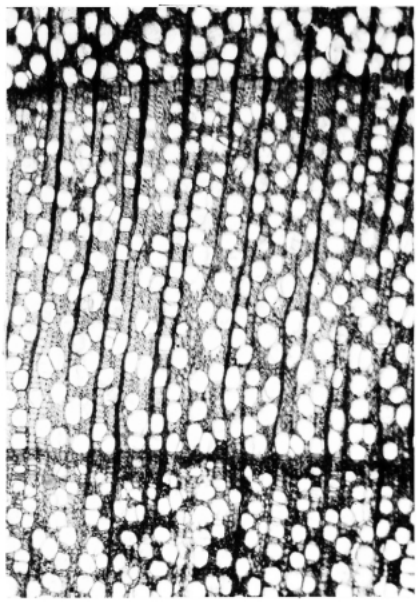
20a. ケヤキ（横断面）
97C 胴木 19　bar:0.5mm



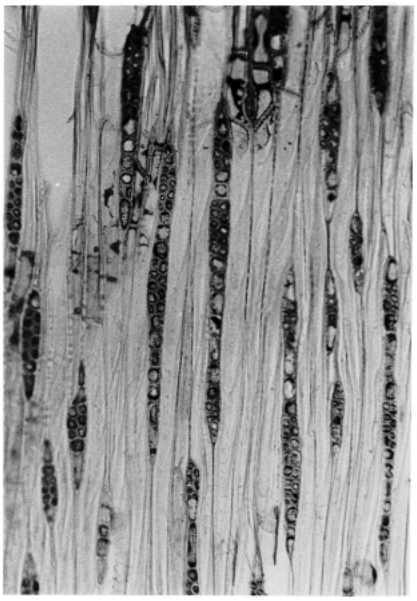
20b. ケヤキ（接線断面）
bar:0.2mm



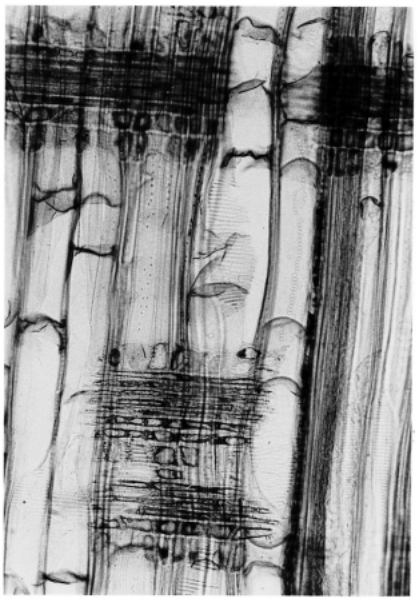
20c. ケヤキ（放射断面）
bar:0.1mm



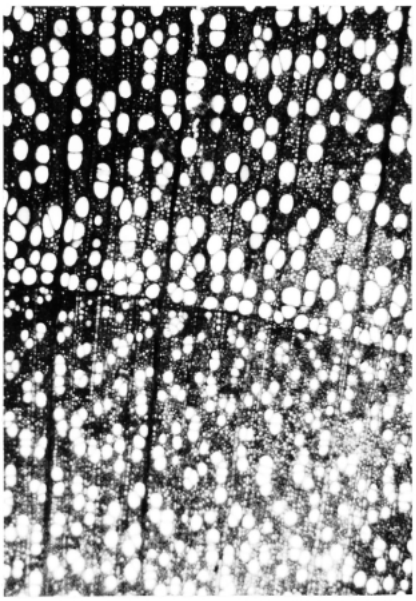
21a. カツラ（横断面）
94A 胴木 A-2　bar:0.5mm



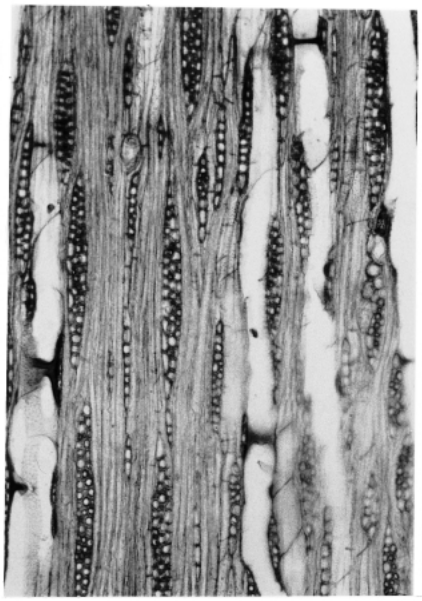
21b. カツラ（接線断面）
bar:0.2mm



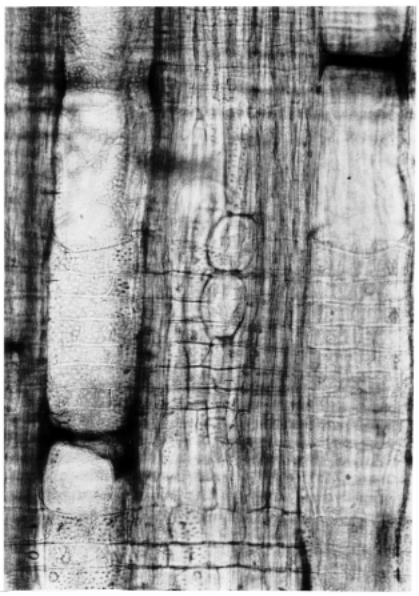
21c. カツラ（放射断面）
bar:0.2mm



22a サクラ属（横断面）
97C 胴木 17　bar:0.5mm

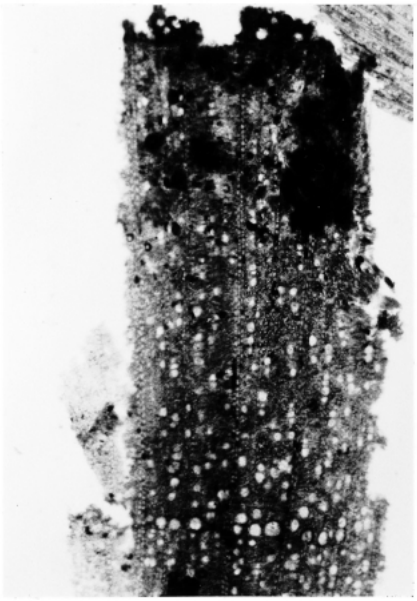


22b. サクラ属（接線断面）
bar:0.2mm

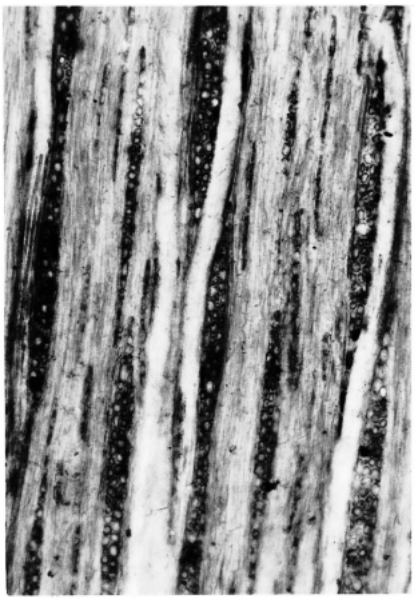


22c. サクラ属（放射断面）
bar:0.1mm

第 231 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（7）



23a. サクラ属（横断面）
97C-W-107　bar:0.5mm



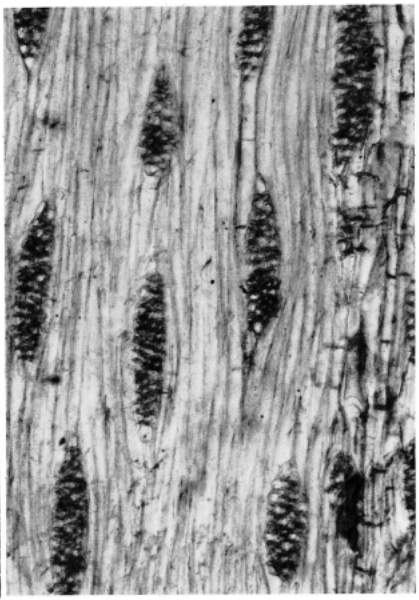
23b. サクラ属（接線断面）
bar:0.2mm



23c. サクラ属（放射断面）
bar:0.2mm



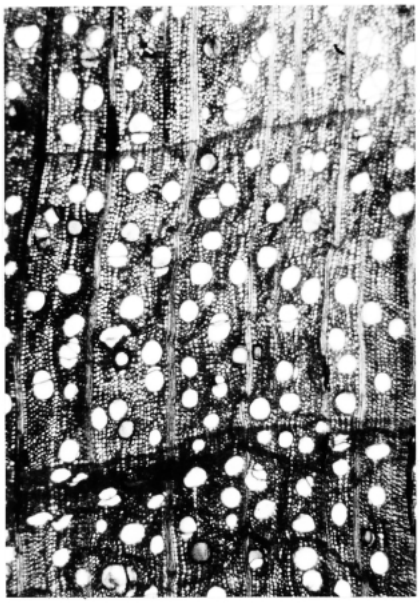
24a. センダン（横断面）
97B-W-030　bar:0.5mm



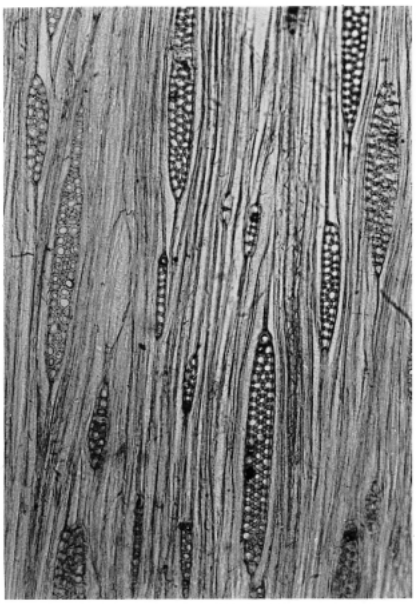
24b. センダン（接線断面）
bar:0.2mm



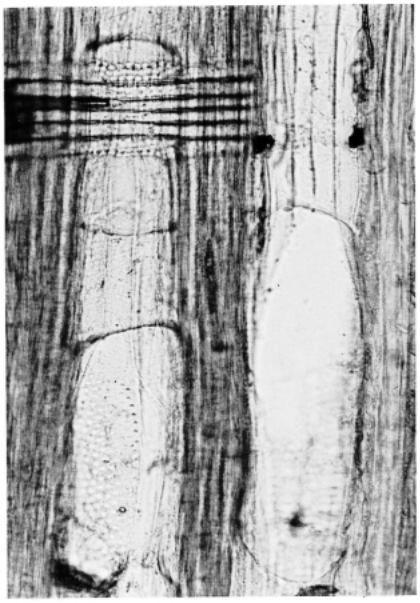
24c. センダン（放射断面）
bar:0.2mm



25a カエデ属（横断面）
97C 胴木 10　bar:0.5mm

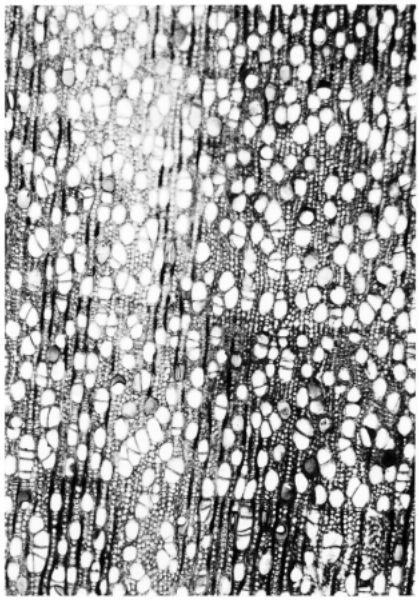


25b. カエデ属（接線断面）
bar:0.2mm

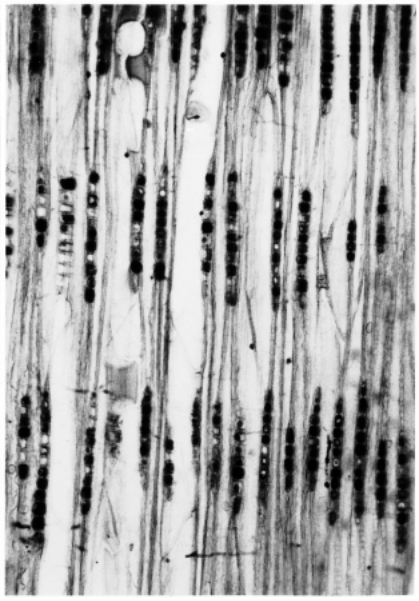


25c. カエデ属（放射断面）
bar:0.1mm

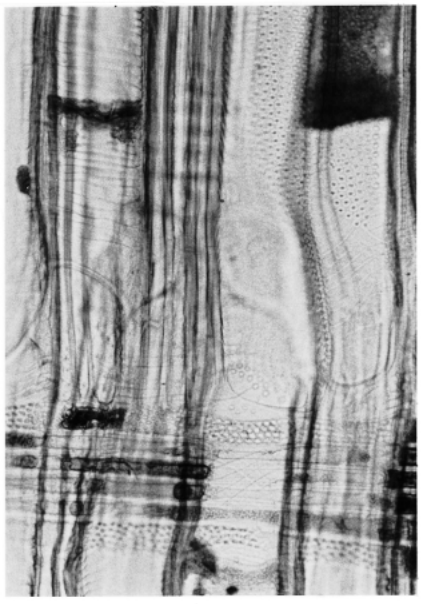
第 232 図　清洲城下町遺跡出土木製品樹種（8）



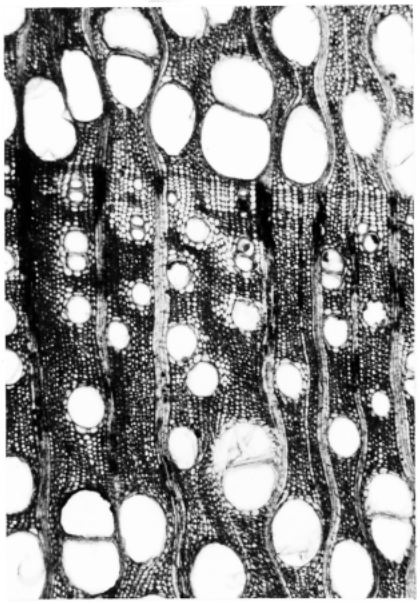
26a. トチノキ（横断面）
94A 胴木 A-3　bar:0.5mm



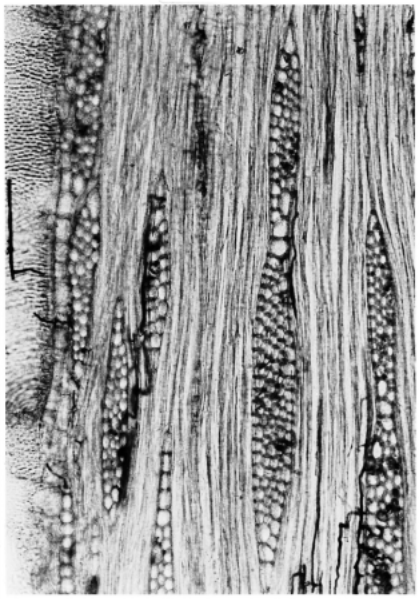
26b. トチノキ（接線断面）
bar:0.2mm



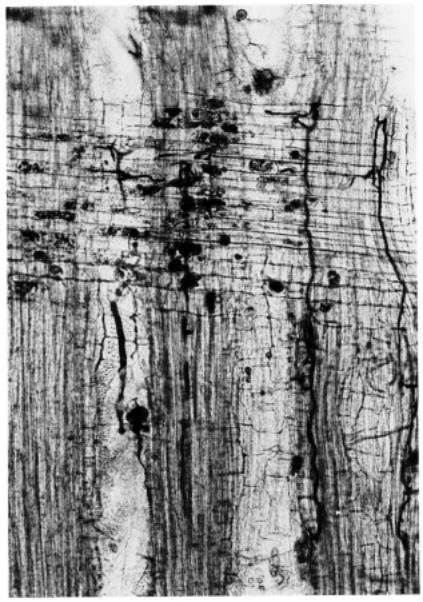
26c. トチノキ（放射断面）
bar:0.1mm



27a ケンポナシ属（横断面）
97C 胴木 2　bar:0.5mm



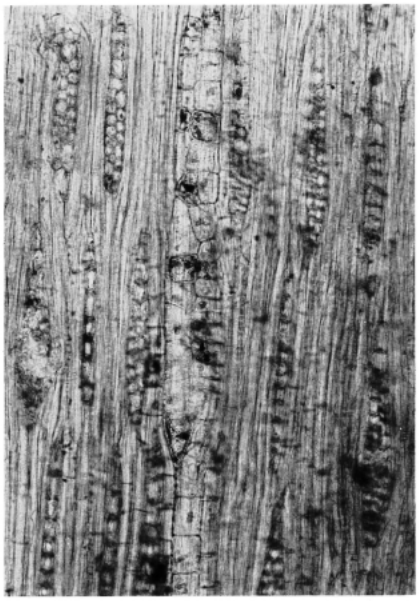
27b. ケンポナシ属（接線断面）
bar:0.2mm



27c. ケンポナシ属（放射断面）
bar:0.2mm



28a. カキノキ属（横断面）
97C-W-135　bar:0.5mm



28b. カキノキ属（接線断面）
bar:0.2mm



28c. カキノキ属（放射断面）
bar:0.1mm

（Ⅱ）清洲城下町遺跡出土漆器資料の材質と製作技法

くらしき作陽大学　北野信彦

1．はじめに

清洲城下町遺跡からは、清須城城郭および城下町関連の遺構や遺物が多数検出され、この中には漆器資料も多く含まれている。今回愛知県埋蔵文化財センターの御厚意により、これらの材質と製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得た。本報では、この調査結果を報告する。

2．出土漆器資料の調査

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり挽き物・板物の形態にする「木胎製作」の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、蒔絵・漆絵等の加飾や研磨作業を行う「漆工」の工程からなっている。本報では、これら個々の出土漆器資料の生産技術面を調査する方法として、まず各資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、(1) 用材選択、(2) 木取り方法、(3) 漆塗り構造、(4) 色漆の使用顔料、(5) 蒔絵材料、等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。以下、その調査方法と調査結果を記す。

2.1　調査方法

2.1.1　用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はサフラニンおよびキシレンで、染色および脱水して検鏡プレパラートに仕上げた。

2.1.2　木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行なった。

2.1.3　漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に 1mm × 3mm 程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイト GY1251JP, ハードナ HY837）に包埋した後、断面を研磨して薄層プレパラートに仕上げた。その上で、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について各種顕微鏡による落射および透過観察を行った。

2.1.4　漆絵や蒔絵の加飾技法

今回調査を行った清洲城下町遺跡出土漆器資料には赤色系色漆による家紋や漆絵を施した加飾漆器は多いものの、蒔絵加飾を施した資料自体は含まれていなかった。しかし、参考資料群として掲載する大脇城遺跡・吉田城遺跡・名古屋城三の丸遺跡等の出土漆器資料には蒔絵加飾漆器が多く見出されるため、本報ではこの内容についても取り扱うこととする。さて、本報ではこれら加飾技法に関する調査として肉眼で漆絵や蒔絵加飾の塗り表面の状態を観察した

後、実体顕微鏡および金属顕微鏡を用いて、(1) 色漆の使用顔料や蒔絵粉の粒型と粒度、(2) 色漆や蒔絵粉の接着状態や劣化の状態、に関する細部観察を行った。

2.1.5　色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、走査電子顕微鏡（日立製作所 S-415 型）に、エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー：堀場製作所 EMAX-2000 型）を連動させて用いた。分析設定時間は 500 秒とした。

2.1.6　分析結果の集計方法

個々の漆器資料からもっとも一般的な８つ（A タイプ）もしくは９つ（B タイプ）の材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結果をレーダーチャート方式で図化するものである。

（Aタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴を取り、それと相対する左側には、朱・サビ下地・ケヤキやシオジ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキやシオジ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率（%）をそれぞれ配置した。この配置で示されるレーダーチャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

（Bタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・スズ（Sn）粉・石黄（As_2S）粉などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴をとり、それと相対する左側には、朱・サビ下地・金（Au）粉などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもほぼ中間に位置すると考えられる銀（Ag）粉の占有比率（%）をそれぞれ配置した。

2.2　調査結果

今回、調査を行った漆器資料は、清須城本丸推定地や町屋跡推定地の城下町関連遺跡から検出された戦国時代～近世初頭期段階の椀・蓋・皿型を中心とした挽き物類の合計 83 点である。これらはいずれも、当時の基本的な飲食器である飯椀・汁椀・菜椀等に対応するものであろう。なお本報では、本資料の比較検討材料として、以前同様の調査を行う機会を得たが未発表であった愛知県埋蔵文化財調査センター所蔵の岩倉城遺跡 21 点、大脇城遺跡 167 点、勝川遺跡 6 点、豊橋吉田城遺跡 37 点、名古屋城三の丸遺跡 144 点の近世初頭期～江戸時代の各年代の出土漆器資料（計 375 点）の調査結果も併せて掲載する。

さて漆器資料は、おなじ飲食器である陶磁土器資料と比較して残存状況が脆弱なため、取り扱いに苦慮する場合が多く、かつ古窯跡のような生産地遺跡も検出されにくい。そのためか、これまで代表的な一部の資料の記述以外はあまり研究が進展してこなかった経緯がある。ところが漆器資料は、視点をかえてみてみると、木胎・塗り・加飾等の材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法による調査によって、より客観的にとらえやすい。そのためこのような漆器資料の生産技術面（ここでは材質と製作技法）を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考え

る上でも意味があるものと考える（注１）。以下、各項目別の調査結果を述べる（第 21 ～ 29 表）。

2.2.1　用材選択

挽き物類である清洲城下町遺跡漆器資料の樹種には、ブナ科シイノキ 14 点、ブナ科ブナ属８点、ブナ科コナラ節２点、ブナ科クリ２点、バラ科サクラ亜属１点、カツラ科カツラ、ニレ科ケヤキなどのニレ科 10 点、トチノキ科トチノキ 17 点、カバノキ属ハンノキ６点､アサダなどのその他のカバノキ属５点、トネリコ属シオジ３点、モクレン科ホオノキ３点、等の広葉樹材 12 種類が確認された。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類すると（第 30 表）に示すようになる（注２）。その上で本漆器資料の用材選択の傾向をみてみると、優材であるケヤキ材やシオジ材などと、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ材やブナ・クリ・シイノキ・コナラ節等のブナ科材等の２つのグループに分かれた。これらの出現比率をみてみると、前者のニレ科やシオジ材が 15.7%、後者のトチノキ材が 20.5%、同ブナ科材が 31.3%で、後者の占有比率が高かった（第 239 図）。筆者によるこれまでの全国 115 遺跡、合計 16,009 点の出土漆器資料の用材選択性に関する調査結果では、挽き物である漆器椀・蓋・皿類の樹種は、古い時期の資料に樹種の多様性が見られるが、江戸時代中期以降にはケヤキ（江戸時代前期段階ではシオジ材が多い）・トチノキ・ブナの3樹種の占有率が高く一般的となる。この結果を参考にして本資料の用材の使用状況をみてみると、シオジ・クリ・コナラ節など比較的近世の初期段階に出現がみられる樹種の占有率が高く、本遺跡出土漆器資料の基本的な年代観を考える上でも参考となろう。

2.2.2 木取り方法

資料は、横木地と竪木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柾目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、竪木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、竪木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である（第 233 図）。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている（注３）。本漆器資料の樹種を木取り方法との関係でみてみると、トチノキ材の場合は、横木地板目取り、ブナ材の場合は、横木地柾目取りの割合がかなり高い傾向が見出だされた。一般にトチノキは、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味（心材）が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分（辺材）がある。シラタは、多く取れても四寸（約 12cm）程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナは、芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法が適しているという口承資料が知られている（注３）。この点からも、本漆器資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれの材の性質を考慮に入れた可能性が指摘される。

2.2.3　漆膜面の塗り構造

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に、各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の２種類に分けられた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより、前者を炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した（注４）。

地の漆塗り層は、１層塗りから５～６層塗りまで

確認されたが、1～2層塗りの簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心であった（注5）。そして蒔絵や漆絵等の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（第234図）。その一方で、同じような赤色系漆を地塗りしたと思われた一括資料（通常漆工史の分野では寺社什器の流れをくむ漆器のグループであるという認識から根来手もしくは根来塗とも呼称される）も、塗り構造が極めて多岐にわたる事例や、明らかな塗り直し補修の痕跡や堅牢性を重視した布着せ補強や多層で複雑な塗り構造を有する資料が見出される等、品質の多様性が確認された（第240図）。

2.2.4　色漆の性質

赤色漆の使用顔料の定性分析と顕微鏡観察を行った結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3）、朱（水銀朱 HgS）、この両者の混合、の三種類の異なる顔料を用いた赤色漆であると理解した（第235図）。ベンガラ･朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。近世漆器の色漆顔料としては、通常近世初頭～江戸時代前期頃の資料では、朱を使用する事例が多い。その後の江戸時代中期以降には幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となるようである（注6）。

今回の調査結果でも、年代観が比較的古い清洲城下町遺跡や岩倉城跡資料では朱の使用が中心で占有率は高かった。この点も、本資料の帰属年代を考える上で参考となろう。その他の遺跡出土資料の場合では、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を、また地内面にはベンガラを地外面の家紋等の加飾部分のみに朱を使用する等、明らかな朱・ベンガラの使い分け事例が見出された。これらの結果の背景には先の赤色顔料の調達や価格の問題が反映しているのであろう。

2.2.5　蒔絵粉の材質

表面観察において金粉（金箔）もしくは金泥（金彩）によるとみられる家紋や絵柄等の蒔絵加飾部分の定性分析を行った結果、Au（金）が認められる資料の他、Ag（銀）、As＋S（石黄・硫化砒素：As_2S_3）のそれぞれ異なる材質が見出だされた（図3）。この事は、蒔絵加飾には、実際の金（Au）自体を用いる例の他、銀粉や代用金粉である錫粉・石黄粉、さらにはこれらの混合粉を使用する事例があったことを示していよう。

江戸期の各種文献資料には、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体が、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたことや、これら金・銀・錫等の材質別の蒔絵漆器に、明確な価格差が存在したこと等が、知られる。この点に関連して、各遺跡の蒔絵漆器資料の材質別使用比率の集計を行った。その結果、いずれの遺跡・年代の一括資料の場合でも、基本的には金（Au）自体を使用した蒔絵漆器は比較的少なく、大半は代用金粉である石黄粉、もしくは銀粉であった。筆者によるこれまでの近世蒔絵材料の調査結果では、金粉以外の蒔絵粉の材質は、石黄粉（江戸時代前期）→銀粉（江戸時代前～中期）→スズ粉（江戸時代後期）へと年代別に大きく使用状況が変化することが確認されている（注7）。今回の調査結果でも、大脇城跡遺跡出土資料では石黄粉を使用した資料のみであり、吉田城跡資料では銀粉が、名古屋城三の丸遺跡資料では銀粉および石黄粉を使用した資料がそれぞれ優勢であった（第237図）。これらの結果は、各遺跡出土漆器資料の帰属年代を考える上で何らかの示唆を与えてくれよう。

3．考察

以上、前章では項目別に清洲城下町遺跡をはじめとする各遺跡各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、清洲城下町遺跡出土漆器資料をはじめとする各一括資料は、木胎・漆塗り

技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。さらに各遺跡別の一括資料の傾向を把握するため、最も一般的な８つの材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出してそれぞれの比率を総出現数の中で集計した。その結果、各一括資料の基本的な様相は、いずれも基本的には極めて実用に即した生活什器類である飲食器類を中心としているものの、各遺跡別に若干の傾向の違いが認められた（第236図）。このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代（年代観）、これら什器を使用しさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景（生活様式）、地域性、什器類の使用目的や方法、さらには個々の漆器生産地の製作技術の違い等、さまざまな条件が反映されたものであろう（第238図）（注8）。

今後の課題としては、まずは各漆器資料の器型分類との照合を行うこと。そのうえで陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが、本出土漆器資料の性格を的確に理解する上で必要なことであると考える。

（謝　辞）

本調査を行なうにあたり、愛知県埋蔵文化財センターの鈴木正貴氏をはじめとする多くの方には、大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

なお本報は、平成11～14年度文部省科学研究費基盤研究（C）『近世蒔絵材料の劣化現象の把握とその保存に関する基礎的研究（研究代表者：北野信彦）』の成果の一部を含む。

（注）

（1）北野信彦1993「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』p.81-101、日本民具学会編　雄山閣出版

北野信彦2000「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学　第9号』p.71-96、日本考古学協会、吉川弘文館、等を参照されたい。

（2）橋本（1979）の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靭性がある材を適材であるとしている。

橋本鉄男1979『ろくろ　ものと人間の文化史31』法政大学出版局

北野信彦2000「近世出土漆器椀の用材に関する一考察」『考古学と自然科学　第38号』p.47-66日本文化財科学会

（3）須藤（1982）の調査によると、近世以降の近江系（小椋谷）木地師による挽き物類の木取り方法の場合、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとしている。

須藤護1982『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい

（4）サビ下地を用いた漆器の生産自体は、『延喜式』の糅漆技法をみるまでもなく、その歴史は古い。しかしその生産体制が地方の漆器生産においても普及・一般化するのは、漆器の需要とそれに伴う漆器生産量が増大化した江戸時代後期～幕末期以降のようである。この状況を知る事例として、近世輪島塗の台頭や、炭粉下地による廉価な日用漆器の生産では奥州会津・近江日野とともに三大生産地の一つといわれていた紀州黒江生産地へのサビ下地（堅地物）技術の導入などがあげられよう。

なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地（堅下地・本下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦1993「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・Ⅰ・―文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として―」『古文化財の科学第38号』p.65-79、古文化財科学研究会

(5) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の１つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると［上品］布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。[下品] 炭粉下地（柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆)。[中品] 下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編1974『木地師の習俗　民俗資料選集 2』国土地理協会

(6) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦 2000「朱・ベンガラ　項目」『日本民俗大辞典（下巻)』福田アジオ編、吉川弘文館

(7) 寛延四年（1751）の『名古屋諸色直段集，寛延四未年小買物諸色直段帳』には、漆器の休漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蝋色塗（上品）：常溜塗（中品）：常拭漆塗（下品）の相対価格差は、約51：3.4：1と算定される。

また、伊勢菰野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約 18：6：1と算定される。いずれの事例からも生産技術面（ここでは材質や製作技法）の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦・肥塚隆保 2000「近世出土蒔絵漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学　第38号』p.67-92、日本文化財科学会

(8) 北野信彦1993「近世武家社会における生活什器としての漆器資料」『綜合郷土研究所紀要 38 巻』p.115-134、愛知大学

北野信彦1999「出土漆器資料からみた近世初頭から前期頃の城下町居住者の一性格」『綜合郷土研究所紀要44巻』p.113-132、愛知大学

北野信彦2000「出土漆器資料からみた江戸市中における武家地関連遺跡の一性格」『綜合郷土研究所紀要 45 巻』p.75-96、愛知大学

北野信彦2002「出土漆器資料からみた国元城下町における武家地関連遺跡の一性格」『綜合郷土研究所紀要47巻』p.1-26、愛知大学、等を参照されたい。

（参考文献）

(1) 沢口吾一 1966『日本漆工の研究』美術出版社

(2) 灰野昭郎 1985『漆工（近世編）日本の美術８　第 231 号』至文堂

(3) 光芸出版社編 1978『うるし工芸辞典』

（引用文献）

参考資料となる近世尾張出土の個々の漆器資料の分析結果は、既刊の下記発掘調査報告書の項目を参照されたい。

北野信彦 1993「加飾漆器の製作技法」『名古屋城三の丸遺跡　Ⅳ』P259-267、（財）愛知県埋蔵文化財センター

北野信彦 1995「出土漆器資料の製作技法」『清洲城下町遺跡Ⅴ』P124-139、（財）愛知県埋蔵文化財センター

終了

第 20 表　清洲城下町遺跡出土漆器一覧表

分析番号	図版番号	調査区	グリッド	遺　　構	日　付	器　　種	内　　面	外　　面
1	2606	96	(Ⅲ)G7o	SX01 2層	970203	椀A	赤	黒-文赤
2	2620	96	(Ⅲ)G11j	T01	970120	椀AorB	?	黒
3		96	(Ⅲ)G7o	SX01 2層	970127	椀?	赤	黒-文赤
4		96	(Ⅲ)G13k	SX01 2層	970206	椀?	赤	黒
5	2627	96	(Ⅲ)G6o	北T	970120	椀?	赤	黒-文赤
6	2628	96	(Ⅲ)G9n	検(Ⅱ)	970310	椀AorB	赤	黒-文赤
7	2623	96	(Ⅲ)G10j	T01下層	970313	椀B	赤	黒-文赤
8	2626	96	(Ⅲ)G10i	T01下層	970312	椀B	赤	黒-文赤
9	2619	96	(Ⅲ)G12k	T01	970120	椀A?	赤	黒-文赤
10	2609	96	(Ⅲ)G9n	SX01 1層	970131	椀B?	赤	赤
11	2610	96	(Ⅲ)G12j	SX01 2層	970213	椀B	赤	赤
12	2614	96	(Ⅲ)G10i	T01下層	970312	椀B	赤	黒-文赤
13	2608	96	(Ⅲ)G12i	SX01 2層	970214	椀B?	赤	黒-文赤
14	2621	96	(Ⅲ)G10l	T14下層	970318	椀B	赤	黒
15	2786	97C		検	971125	椀AorB	赤	黒-文赤
16	2816	97C	(Ⅲ)G11i	検(Ⅱ)	971204	椀AorB	赤	黒-文赤
17	2785	97C	(Ⅲ)G11h	検(Ⅰ)	971203	椀B	赤	黒
18	2819	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅳ)	971210	Ⅲ	赤	黒
19	2817	97C	(Ⅲ)G11i	検(Ⅱ)	971204	椀B?	赤	黒-文赤
20	2784	97C	(Ⅲ)G11i	検(Ⅰ)	971203	椀B	赤	黒
21		97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅲ)	971209	?	赤	黒
22		97C	(Ⅲ)G11i	検(Ⅱ)	971204	椀AorB	赤	黒-文赤
23		97C	(Ⅲ)G13g	検(Ⅲ)	971203	椀AorB	赤	黒-文赤
24		97C	(Ⅲ)G16d	検(Ⅰ)	971202	?	赤	赤
25		97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅰ)	971204	?	赤	黒
26		97C	(Ⅲ)G15d	検(Ⅰ)	971202	?	赤	赤
27	2841	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅲ)	971211	椀A	黒	黒-文赤
28	2818	97C	(Ⅲ)G9k	検(Ⅱ)	971217	椀B	赤	黒-文赤
29	2783	97C	(Ⅲ)G11h	検(Ⅰ)	971204	椀AorB	赤	黒-文赤
30	2812	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅱ)	971205	椀A	赤	黒
31	2813	97C	(Ⅲ)G11i	検(Ⅱ)	971204	椀A	黒	黒
32	2810	97C	(Ⅲ)G11i	検(Ⅱ)	971204	椀A	赤	黒-文赤
33	2772	97C	(Ⅲ)G6n	SX01瓦溜	980109	椀B	赤	赤　底黒
34	2644	97B	(Ⅳ)G10c	NR02植物層	980310	椀B	赤	赤　底黒-文赤
35	2757	97B	(Ⅳ)G10b	NR02下層	980310	椀AorB	黒	黒-文赤
36	2645	97B	(Ⅳ)G9d	NR02灰色粘土	980310	椀B	黒	黒-文赤
37	2656	97B	(Ⅳ)G9c	NR02植物層	980310	Ⅲ	赤	黒
38	2655	97B	(Ⅳ)G9c	NR02植物層	980310	椀B	赤	赤　底黒
39	2652	97B	(Ⅳ)G10c	NR02植物層	980306	椀B	赤	黒-文赤
40	2651	97B	(Ⅳ)G9c	NR02植物層	980310	椀A	黒	黒-文赤
41	2653	97B	(Ⅳ)G9c	NR02植物層	980311	椀B	赤	黒-文赤
42	2654	97B	(Ⅳ)G9c	NR02植物層	980311	椀B	赤	黒-文赤
43	2646	97B	(Ⅳ)G10c	NR02灰色粘土	980309	椀AorB	赤	黒-文赤
44	2643	97B	(Ⅳ)G10b	NR02	980309	椀AorB	赤	黒-文赤
45	2642	97B	(Ⅳ)G9c	NR02	980309	椀A	赤	黒-文赤
46	2657	97B	(Ⅳ)G10b	NR02植物層	980309	椀AorB	赤	黒-文赤
47		97B	(Ⅳ)G9c	NR02植物層	980310	椀?	赤	黒-文赤
48	2881	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅳ)	971210	椀B	赤	黒
49	2879	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅳ)	971210	椀A	赤	黒-文赤
50	2880	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅳ)	971210	椀B	赤	黒-文赤
51		96	(Ⅲ)G10i	T01下層	970310	椀A	赤	黒-文赤
52		96	(Ⅲ)G9n	SX01 2層	970205	椀A	赤	黒-文赤
53	2843	97C	(Ⅲ)G10i	検(Ⅲ)	971209	Ⅲ	赤	黒-文赤
54	2781	97C	(Ⅲ)G10j	SX02下層	980204	椀A	赤	黒
55	2777	97C	(Ⅲ)G10j	SX02下層	980204	椀B	黒	黒-文赤
56		97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅲ)	971209	?	赤	黒-文赤
57		97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅲ)	971209	?	赤	黒-文赤
58		97C	(Ⅳ)G9c	NR02植物層	980310	?	赤	赤
59		98B	(Ⅳ)G10c	NR02炭化物	980306	椀?	赤	黒-文赤
60		96	(Ⅲ)G6o	北壁T	970120	?	赤	黒
61		96	(Ⅲ)G7o	SX01 2層	970128	椀?	赤	赤
62		96	(Ⅲ)G13k	SX01 2層	970206	?	赤	黒
63		96	(Ⅲ)G10i	T01下層	970312	?	赤	黒
64		96	(Ⅲ)G10k	SX01 2層	970204	椀?	赤	黒-文赤
65		96	(Ⅲ)G11k	SX01 2層	970206	?	?	赤
66		96	(Ⅲ)G7q	東壁T	970306	椀?	黒?	黒?
67		96	(Ⅲ)G12g	SD01	970213	椀?	赤	黒-文赤
68	2882	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅳ)	971211	椀B	赤	黒-文赤
69	2842	97C	(Ⅲ)G10i	検(Ⅲ)	971209	椀B	赤	黒-文赤
70	2811	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅱ)	971211	椀A	赤	黒-文赤
71	2782	97C	(Ⅲ)G9i	SX02	980119	箱物	黒	黒-文赤
72	2815	97C	(Ⅲ)G13h	検(Ⅱ)	971202	椀AorB	赤	黒
73	2814	97C	(Ⅲ)G13h	検(Ⅱ)	971203	椀AorB	赤	黒-文赤
74	2771	97C	(Ⅳ)G10c	NR01下層	980310	椀AorB	赤	黒-文赤
75		97C	(Ⅲ)G6n	SX01	980120	椀AorB	赤	黒-文赤
76	2845	97C	(Ⅲ)G9j	検(Ⅲ)	980114	椀B	赤	赤　底黒
77	2844	97C	(Ⅲ)G10i	検(Ⅲ)	971209	椀B	赤	黒
78	2883	97C	(Ⅲ)G10j	検(Ⅳ)	971209	Ⅲ	赤	赤　底黒
79	2778	97C	(Ⅲ)G9i	SX02	980119	椀B	赤	黒-文赤
80	2888	97C	(Ⅲ)G11h	検(Ⅳ)	971205	箱物	?	?
81	2791	97C	(Ⅲ)G15d	検(特)	971202	箱物	?	?
82		97C	(Ⅲ)G10j	SX02	980119	箱物	黒	黒-文黄色

終了

第 21 表　清洲城下町遺跡出土漆器の調査結果

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備　考
				内	外	文　様	内	外	内	外	文　様	
1	椀A	トチノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱	
2	椀 AorB	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
3	椀	カバノキ科	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
4	椀	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
5	椀	ブナ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
6	椀 AorB	トチノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
7	椀 B	シイノキ	B	赤	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱	
8	椀 B	クリ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
9	椀 A	ニレ科	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
10	椀 B	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	朱	朱		
11	椀 B	シオジ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
12	椀 B	シイノキ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
13	椀 B	シイノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱	
14	椀 B	シイノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
15	椀 AorB	ホオノキ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
16	椀 AorB	ハンノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
17	椀 B	シイノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱	
18	皿	ハンノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
19	椀 B	ムクノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱＋ベンガラ	
20	椀 B	ブナ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
21	挽物破片	ブナ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
22	椀 AorB	ハンノキ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
23	椀 AorB	シイノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
24	挽物破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	朱	朱		
25	挽物破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
26	挽物破片	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	朱	朱		
27	椀 A	クリ	B	黒	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ			朱	
28	椀 B	クリ	B	赤	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
29	椀 AorB	シイノキ	A	赤	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱	
30	椀 A	シオジ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
31	椀 A	ニレ科	C	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ			
32	椀 A	ハンノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
33	椀 B	サクラ亜属	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	朱			
34	椀 B	ブナ	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	朱			
35	椀 AorB	ブナ	B	黒	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ			朱	
36	椀 B	トチノキ	A	黒	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ			朱	
37	皿	クリ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
38	椀 B	カバノキ科	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	朱	朱		
39	椀 B	ハンノキ	A	赤	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
40	椀 A	シイノキ	B	黒	黒	外-絵－赤	Ⅲ	Ⅳ			朱	
41	椀 B	ブナ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
42	椀 B	コナラ節	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
43	椀 AorB	アサダ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
44	椀 AorB	トチノキ	A	赤	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
45	椀 A	トチノキ	A	赤	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
46	椀 AorB	コナラ節	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
47	椀	トチノキ	－	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
48	椀 B	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
48	椀 B	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	朱	朱		
49	椀 A	シイノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱	
50	椀 B	シイノキ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱	
51	椀 A	シイノキ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
52	椀 A	シイノキ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
53	皿	トチノキ	A	赤	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
54	椀 A	ブナ	B	赤	黒		Ⅴ	Ⅴ	朱			
55	椀 B	トチノキ	A	黒	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ			朱	
56	挽物破片	トチノキ	A	赤	黒	外-紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
57	挽物破片	シイノキ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
58	挽物破片	カバノキ科	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	朱	朱		
59	椀	カバノキ科	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
60	挽物破片	ブナ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
61	椀	トチノキ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	朱	朱		
62	挽物破片	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
63	挽物破片	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
64	椀	クリ	A	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
65	挽物破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	朱	朱		
66	椀	シオジ	A	黒	黒		Ⅴ	Ⅴ				
67	椀	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
68	椀 B	広散孔材	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
69	椀 B	広環孔材	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
70	椀 A	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
71	箱	針葉樹材	－	黒	黒		Ⅴ	Ⅴ				
72	椀 AorB	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ			
73	椀 AorB	ホオノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
74	椀 AorB	ホオノキ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱＋ベンガラ	
75	椀 AorB	ケヤキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
76	反端椀	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	朱	朱		布着せ補強
77	椀 B	広散孔材	－	赤	黒		Ⅶ	Ⅶ	朱			
78	皿	トチノキ	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	朱	朱		
79	椀 B	シイノキ	B	赤	黒	外-絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱	
80	板物破片	針葉樹材	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ				
81	箱物側板	針葉樹材	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ				
82	箱物側板	ヒノキ	－	赤	黒	外-絵－黄	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱	
83	板物破片	針葉樹材	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ				

終了

第 22 表　大脇城遺跡出土漆器の調査結果（1）

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文　様	内	外	文　様	内	外	
1	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
2	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
3.1	椀破片	トチノキ	A	赤	赤	外－絵－黄	ベンガラ	ベンガラ	As+S	Ⅰ	Ⅱ	
3.2	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
1.5	椀破片	ケヤキ	B	赤	赤		朱	朱		Ⅶ	Ⅶ	高台内黒＊
5	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		朱・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
6	椀破片	カツラ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
7	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	＊
7.2	椀破片	ブナ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
8	椀破片	ブナ	B	赤	黒					Ⅰ	Ⅰ	
9	椀破片	トチノキ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
10	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
10.2	椀破片	不明広材	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
11	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
12	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	高台内赤
13	椀破片	サクラ亜	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
14	椀破片	トチノキ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
15.1	椀破片	カバノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
15.2	椀破片	カバノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
15.3	椀破片	カバノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
16	椀破片	ブナ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
17	椀破片	エゴノキ	B	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
18	椀破片	トチノキ	A	茶	黒		ベンガラ潤み			Ⅰ	Ⅰ	＊
19	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
20	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
21	椀破片	ケヤキ	A	黒	黒					Ⅷ	Ⅷ	
22	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅱ	
23	椀破片	トチノキ	A	黒	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
24	椀破片	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
25	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
26	椀破片	ブナ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅱ	
27	椀破片	クリ	A	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
28	椀破片	クリ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
29	椀破片	ブナ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
30	椀破片	クリ	A	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
31	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
32	椀破片	ブナ	A	黒	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
33	椀破片	ブナ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
34	椀破片	シイノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
35	椀破片	シオジ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅲ	Ⅳ	
36	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
37	椀破片	ブナ	B	赤	赤		朱	朱		Ⅰ	Ⅰ	
38	椀破片	ブナ	A	赤	黒	外－紋－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
39	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
40	椀破片	ヒノキ	－	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
41	椀破片	クリ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
42	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
43	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
44	椀破片	ブナ	B	赤	黒	外－絵－黄	ベンガラ		As+S	Ⅰ	Ⅱ	
45	椀破片	ブナ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
46	椀破片	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
47	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
48	椀破片	クリ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
49	椀破片	ヒノキ	－	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
50	椀破片	シオジ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
51	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
52	椀破片	サクラ亜	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
53	椀破片	ブナ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
54	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
55	椀破片	クリ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
56	椀破片	ブナ	A	黒	黒	外－絵－赤			朱	Ⅰ	Ⅱ	
57	椀破片	トチノキ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
58.1	椀破片	シオジ	A	赤	赤		朱	朱		Ⅲ	Ⅲ	
58.2	椀破片	トチノキ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
59	椀破片	ブナ	B	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
60	椀破片	バラ科	B	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
61	椀破片	ブナ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
62	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
63	椀破片	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
64	椀破片	ホオノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
65	椀破片	ヒノキ	A	－	黒					－	Ⅰ	
66	椀破片	エゴノキ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
67.1	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	

終了

第 23 表　大脇城遺跡出土漆器の調査結果（2）

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文　様	内	外	文　様	内	外	
67,2	椀破片	ブナ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
68	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
69	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
70	椀破片	トチノキ	A	赤	赤		朱	朱		Ⅰ	Ⅰ	
71,1	椀破片	広散孔材	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
71,2	椀破片	ケヤキ	A	赤	赤		朱	朱		多層	多層	高台内黒
72	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
73	椀破片	ケヤキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱＋ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
74	椀破片	クリ	A	黒	黒	外－絵－赤			朱＋ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
75	椀破片	クリ	B	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
76	椀破片	クリ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
77	椀破片	ブナ	A	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
78	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
79	椀破片	シイノキ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
80	椀破片	ブナ	B	赤	赤		朱	朱		Ⅰ	Ⅰ	
81	椀破片	シオジ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
82	椀破片	シイノキ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
83	椀破片	ブナ	B	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
84	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
85	椀破片	シイノキ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
86	椀破片	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
87	椀破片	広散孔材	B	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
88	椀破片	トチノキ	B	赤	黒	外－絵－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
89	椀破片	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
90	椀破片	クリ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
91	椀破片	広散孔材	B	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
92	椀破片	クリ	A	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
93	椀破片	トチノキ	B	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
94	椀破片	シイノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱＋ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
95	椀破片	クリ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
96	椀破片	トチノキ	A	赤	赤		朱＋ベンガラ	朱＋ベンガラ		多層	多層	高台黒赤字＊
97	椀破片	ブナ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
98	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
99	椀破片	ブナ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
100	椀破片	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
101	椀破片	ケヤキ	B	赤	茶		朱	朱		Ⅶ	Ⅶ	布着せ補強＊
102	椀破片	ブナ	A	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		朱・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
103	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
104	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
105	椀破片	ブナ	B	赤	黒	外－紋－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
106	椀破片	ホオノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱＋ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
107	椀破片	トチノキ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
108	椀破片	シイノキ	B	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
109	椀破片	トチノキ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
110	椀破片	クリ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
111	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
112	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
113	椀破片	トチノキ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
114	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
115	椀破片	トチノキ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
116	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
117	椀破片	シイノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
118	椀破片	トチノキ	A	黒	黒	外－絵－赤			朱	Ⅰ	Ⅱ	
119	椀破片	サクラ亜	B	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
120	椀破片	シイノキ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
121	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
122	椀破片	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
123	椀破片	シイノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
124	椀破片	トチノキ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
125	椀破片	クリ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
126,1	椀破片	トチノキ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
126,2	椀破片	トチノキ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
127	椀破片	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
128	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
129	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
130	椀破片	トチノキ	B	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
131	椀破片	ブナ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
132	椀破片	ブナ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
133	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
134	椀破片	クリ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
135	椀破片	ブナ	B	赤	黒	外－絵－茶	朱		As+S	Ⅰ	Ⅱ	
136	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－黄	ベンガラ		As+S	Ⅰ	Ⅱ	
137	椀破片	クリ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	

第 24 表　大脇城遺跡出土漆器の調査結果（3）

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文　様	内	外	文　様	内	外	
138	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤・金	ベンガラ		朱・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
139	椀破片	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
140	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
141	椀破片	ブナ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	*
142	椀破片	ケヤキ	A	黒	黒					Ⅶ	Ⅶ	
143	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	*
145.1	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
145.2	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ		As+S	Ⅰ	Ⅱ	
146	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
147	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
148	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅲ	Ⅲ	
149	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
150.1	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
150.2	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
151	椀破片	トチノキ	A	赤	赤		朱	朱		Ⅰ	Ⅰ	
152	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
153	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
154	椀破片	カエデ属	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
155	椀破片	シイノキ	A	黒	黒	外－絵－赤			朱	Ⅰ	Ⅱ	
156	椀破片	カバノキ	B	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
157	椀破片	広散孔材	B	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	

No. は次の文献の番号と対応する。
北村和宏編 1999『大脇城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 86 集

第 25 表　岩倉城遺跡出土漆器の調査結果

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文　様	内	外	文　様	内	外	
516	Ⅲ	トチノキ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
517	Ⅲ	カエデ属	C	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
518		トチノキ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
519		クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
520		カツラ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
521		トチノキ	A	黒	黒	外－絵－赤			朱	Ⅰ	Ⅱ	
522	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅱ	
523	椀破片	ハンノキ	B	黒	黒	内外－絵－赤			朱	Ⅱ	Ⅱ	
524	椀破片	ケヤキ	A	赤	茶		朱	朱		Ⅴ	Ⅴ	布着せ補強
525.1	膜面のみ	－	－	赤	赤		朱	朱		多層	多層	布着せ補強
525.2	椀破片	トチノキ	A	－	黒					－	Ⅰ	
526	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
527	椀破片	広散孔材	B	赤	黒	外－絵－茶	朱		不明	Ⅰ	Ⅱ	
528	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
529.1	膜面のみ	－	－	赤	－		朱			多層	－	
529.2	膜面のみ	－	－	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
530	椀orⅢ	トチノキ	B	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
531	椀破片	シオジ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
532		トチノキ	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	
533	膜面のみ	－	－	赤	－		朱			Ⅶ	－	
534	椀破片	トチノキ	B	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	

No. は保存処理番号である。

第 26 表　勝川遺跡他出土漆器の調査結果

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文　様	内	外	文　様	内	外	
536	椀	ホオノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
537		ヒノキ	－	黒	－					Ⅰ	－	
538	椀？	ブナ	B	赤	－		ベンガラ			Ⅰ	－	
539	椀破片	クルミ科	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
540	椀	コナラ節	A	赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅰ	Ⅱ	
541	椀orⅢ	－	－	赤	赤		朱	朱		Ⅶ	Ⅶ	布着せ補強

No. は保存処理番号である。

終了

第 27 表　吉田城遺跡出土漆器の調査結果

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文　様	内	外	文　様	内	外	
274.1	椀破片	クリ	B	赤	黒		朱＋ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
274.2	椀破片	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
275	椀破片	トチノキ	B	黒	黒	外－絵－銀			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
276	椀	クリ	B	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
277.1	椀破片	クリ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
278	折敷側板	ヒノキ	－	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅴ	Ⅴ	
279	折敷側板	針葉樹	－	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	
280	折敷底板	ヒノキ		黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
281	椀	クリ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
282	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
283	蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	第114図2
284	蓋	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	第114図1
285	椀	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	第114図3
286	椀破片	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
287	折敷側板	ヒノキ	－	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
288	椭	ウメ	A	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	第117図31
289	傘軸部分	ホオノキ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
290	蓋	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	薄紋江戸系第117図30
291	蓋	トチノキ	A	赤	黒	外－紋－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
292	椀	ブナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅰ	第117図27
293	椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	第117図29
294	椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
295	ゴケ底椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	第117図28
296	椀	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
297	椭	ウメ	－	黒	黒	内外－絵－金			Au	Ⅱ	Ⅱ	第118図45
298	椀	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	第118図40
299	椀or皿	サクラ亜	A	赤	黒		朱潤み			Ⅰ	Ⅰ	
300	椀	サクラ亜	A	赤	黒		朱			Ⅰ	Ⅰ	第118図41
301	椀	クリ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	第118図43
302	椀破片	クリ	B	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
303	椀破片	広散孔材	B	赤	赤		朱	朱		Ⅰ	Ⅰ	第118図42
304	傘軸部分	ブナ	A	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	第114図4
305	盆	ホオノキ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	第114図5
306	曲物底板	ヒノキ	－	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	第115図6
307	折敷側板	針葉樹	－	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
308	曲物底板	針葉樹	－	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	第117図34
277.2	椀破片	トチノキ	B	赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	

備考の図版番号は小嶋廣也編 1995『吉田城遺跡 II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 59 集による。

終了

第 28 表　名古屋城三の丸遺跡出土漆器の調査結果（1）

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文　様	内	外	文　様	内	外	
4	椀	ケヤキ	A	黒	黒					Ⅶ	Ⅶ	布着せ補強第148図6
5	椀	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤・金	ベンガラ		朱・As+S	Ⅰ	Ⅱ	第148図3
6	椀	－	－	黒	黒					Ⅲ	Ⅲ	
7	椀	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－金・黄	ベンガラ		Au, As+S	Ⅴ	Ⅵ	第148図4
8	椀	カツラ	A	赤	黒	外－絵－赤・金	ベンガラ		ベンガラ, Au	Ⅰ	Ⅱ	第148図2
9	椀	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤・金	ベンガラ		ベンガラ, Au	Ⅰ	Ⅱ	第148図5
10	皿	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤・金	ベンガラ		ベンガラ, Au	Ⅰ	Ⅱ	第148図1
309	陶器			茶	－							
310				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅱ	
311	椀	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
312	陶胎蓋			－	黒	外－絵－金			Au		Ⅵ	
313				赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
314				－	黒	外－絵－赤			ベンガラ		Ⅱ	
315				赤	赤		朱	朱		Ⅶ	Ⅴ＋Ⅶ	
316				赤			ベンガラ			Ⅰ		
317				赤	赤		朱	朱		Ⅴ	Ⅴ	布着せ補強
318				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
319				赤	黒	外－絵－金	朱		Au	Ⅴ	Ⅵ	
320				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
321					黒						Ⅴ	
322					黒						多層	
323					黒						Ⅶ	
324				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
325	椀or皿			黒	黒	外－絵－赤			ベンガラ	Ⅹ	多層	
326				赤	赤		朱	朱		多層	多層	
327	椀破片？				黒						Ⅶ	
328	椀破片？			赤	黒		ベンガラ			Ⅶ		
329	椀or皿			赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅲ	Ⅱ	
330				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
331				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
332.1				赤	黒	外－絵－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
332.2				赤			朱			Ⅴ＋Ⅴ		
333	椀or皿破片	広散孔材	C	－	黒						Ⅰ	
334	椀or皿破片			赤			ベンガラ潤み			Ⅲ		
335					黒	外－絵－金			Au		多層	
336	皿	ケヤキ	B	黒	黒					Ⅴ	Ⅴ	
337				赤	黒	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
338				赤	黒		朱			Ⅲ	Ⅲ	
339				赤	黒		朱			Ⅹ	Ⅴ	
340				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
341				赤	黒	外－絵－金	ベンガラ		Au	Ⅹ	Ⅴ＋Ⅴ	
342				赤	黒	外－絵－黄	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
343				赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅶ	Ⅷ	
344				赤	黒		朱			Ⅴ	Ⅴ	
345				赤			朱			多層		
346					黒	外－絵－金・黄			Au・As+S		Ⅷ	
347	陶胎漆器				黒					－	－	
348				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
349				赤			ベンガラ			多層		
350				茶			ベンガラ			Ⅰ		
351	椀or皿破片			赤	黒	外－絵－赤	朱		朱	Ⅶ	Ⅷ	
352	椀破片			赤	赤	内外－絵－黒金	ベンガラ潤み	ベンガラ潤み	Au	Ⅱ	Ⅱ	
353				赤	黒	外－絵－緑	朱		As+S/藍	Ⅲ	Ⅱ	
354				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅶ	Ⅷ	
355				赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
356	椀or皿破片			赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
357				赤			朱			Ⅶ		
358.1				赤			ベンガラ			Ⅴ		
358.2				赤			ベンガラ			Ⅰ		
359	椀or皿			赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
360	皿？	広葉樹材	B	赤	－	内－絵－金	朱		Au	多層		布着せ補強
361					赤	外－絵－黒		朱			Ⅴ＋Ⅵ	
362				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
363				赤			朱			Ⅶ		
364				赤			ベンガラ			Ⅰ		
365				赤			ベンガラ潤み			Ⅰ		
366					黒						Ⅴ	
367				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅹ	Ⅹ	
368				赤	黒		朱			多層	多層	
369				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
370				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
371				赤	茶	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
372				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	

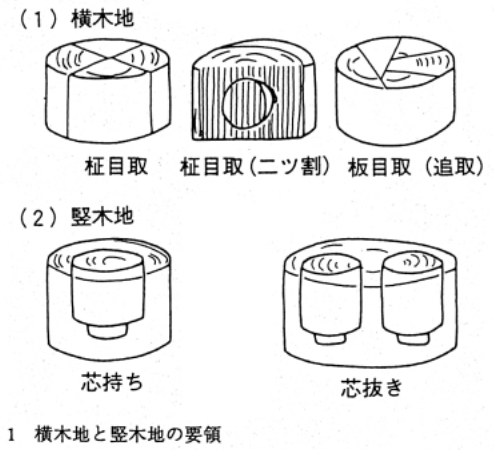
『名古屋城三の丸遺跡（Ⅲ）』所収分

終了

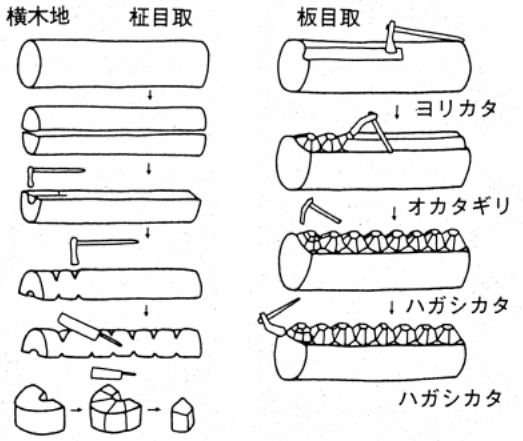
第 29 表　名古屋城三の丸遺跡出土漆器の調査結果（2）

No.	器　型	樹　種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備　考
				内	外	文　様	内	外	文　様	内	外	
373				赤	茶	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
374				赤	－		ベンガラ			Ⅰ	－	
375				赤	－		ベンガラ			Ⅰ	－	
376				赤	茶	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
377	土師器											漆付着
378				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
379	椀or皿			赤	黒	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
380	曲物底板			黒	黒					多層	多層	
381				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
382				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
383				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
384				赤			ベンガラ			Ⅰ		
385				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
386				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
387				赤	黒	外－絵－赤・黄	ベンガラ		朱・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
388.1				赤			ベンガラ			Ⅰ		
388.2					黒	外－絵－赤			朱		Ⅵ	
389				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
390				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
391				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
392				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
393				赤	黒	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
394				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
395				赤	黒	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
396				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅱ	
397	椀or皿？	トチノキ	B	赤	黒	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
398	膜面のみ			赤			朱			多層		
399	椀			赤	黒		朱			Ⅲ	Ⅹ	
475				赤			朱			Ⅷ		
476				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ		
477	板破片	ヒノキ	－	黒	－					Ⅷ		布着せ補強
478.1	皿？			赤	黒	外－絵－銀・赤	ベンガラ		朱＋ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
478.2					黒						Ⅴ	
479				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
480				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
481				赤	黒	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
483				赤	黒	外－絵－赤・黄	ベンガラ		朱・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
484				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅱ	
485				赤			朱			Ⅴ		
486				赤	黒	外－紋－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
487	編物破片			赤			ベンガラ			－		
488.1	板破片	スギ	－	黒	黒					Ⅰ	Ⅰ	
488.2				赤	黒	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
489	曲物底板	ヒノキ	－	黒	黒					多層	多層	
490.1				赤	黒	外－絵－赤	朱＋ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
490.2				赤	赤		朱	朱		Ⅴ	Ⅴ	
491	椀	カツラ	B	赤	茶	外－絵－赤・黄	ベンガラ		ベンガラ・As+S	Ⅰ	Ⅱ	
492				赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
493				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
494				赤	茶	外－絵－赤	ベンガラ		朱＋ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
495				赤	赤	外－絵－黒	ベンガラ	ベンガラ		Ⅹ	Ⅺ	
496					黒						Ⅹ	
497				赤	茶	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
498				赤	茶	外－絵－銀	ベンガラ		Ag+As+S	Ⅰ	Ⅱ	
499				赤	黒		ベンガラ			Ⅴ	Ⅴ	
500				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
501				赤	黒		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
502				赤	茶	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
503				赤	茶	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
504	椀or皿	ブナ	B	赤	茶	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
505				赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
506				赤	茶	外－絵－赤	ベンガラ		朱	Ⅰ	Ⅱ	
507	曲物底板	ヒノキ	－	黒	－					Ⅰ		
508				赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
509	椀or皿？	トチノキ	A	赤	茶	外－絵－銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
510				赤			朱＋ベンガラ			Ⅹ		
511				赤	茶		ベンガラ			Ⅴ	Ⅴ	
512	陶胎漆器				茶						Ⅰ	
513				赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
514	板	針葉樹材		黒						Ⅰ		
515	椀	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	

備考の図版番号は金子健一編 1992『名古屋城三の丸遺跡（Ⅲ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書による。

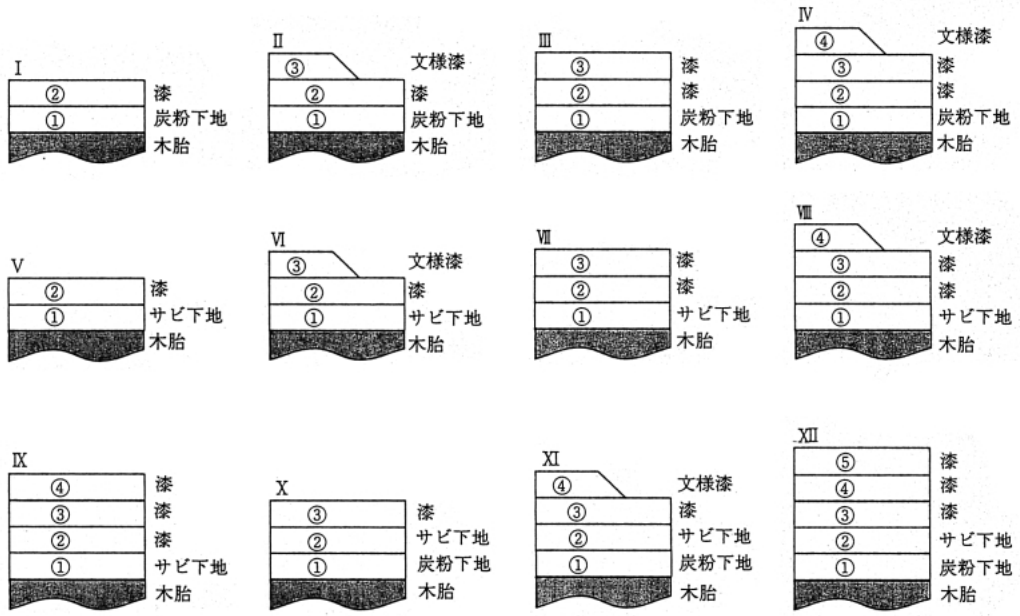


1　横木地と竪木地の要領
（橋本鉄男『ろくろ　ものと人間の文化史31』-1979- より原図引用）



2　近世会津木地師の木取りの方法
（須藤護『日本人の生活と文化(木)
暮らしの中の木器』-1982- より原図引用）

第 233 図　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法

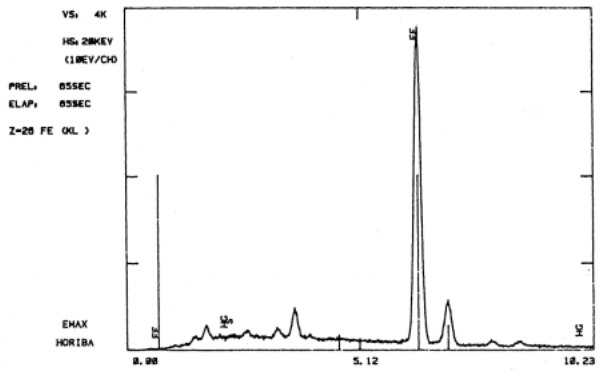


第 234 図　漆塗り構造の分類

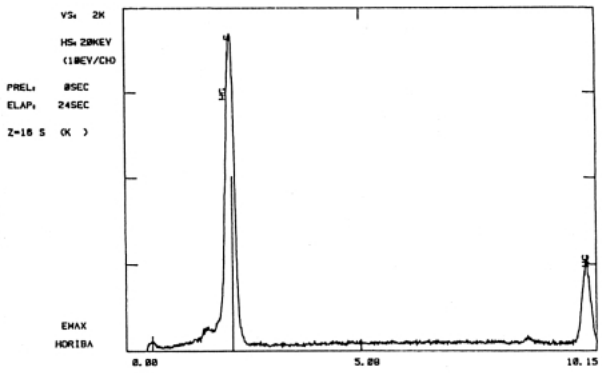
A 環孔材	a.　ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散孔材	b.サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c.ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d.エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

第 30 表　ろくろ挽き物の用材分類一覧表

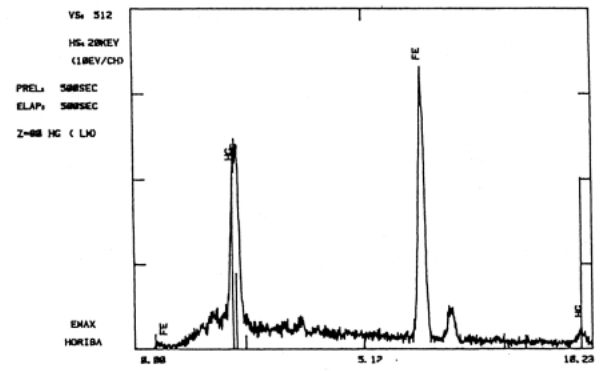
橋本鉄男『ろくろ　ものと人間の文化史31』-1979- などを参考にして作成



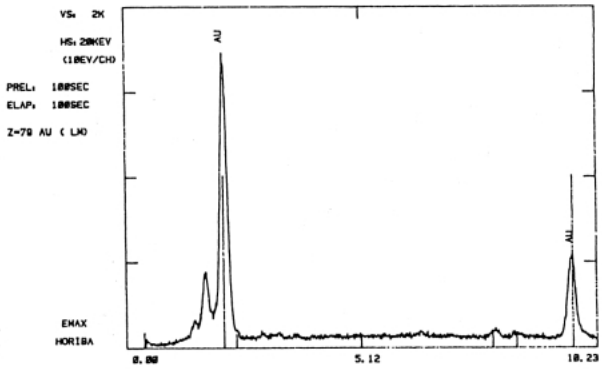
赤色系漆　ﾍﾞﾝｶﾞﾗ（Fe_2O_3）



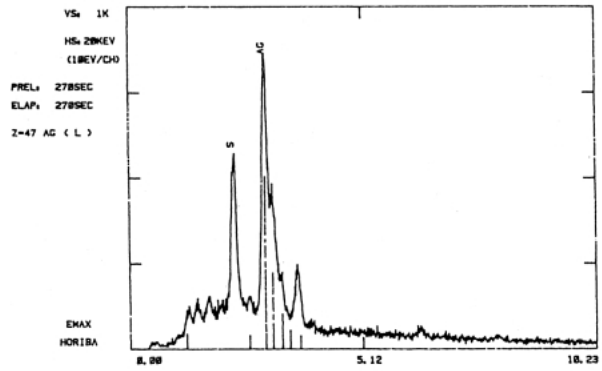
赤色系漆　朱（HgS）



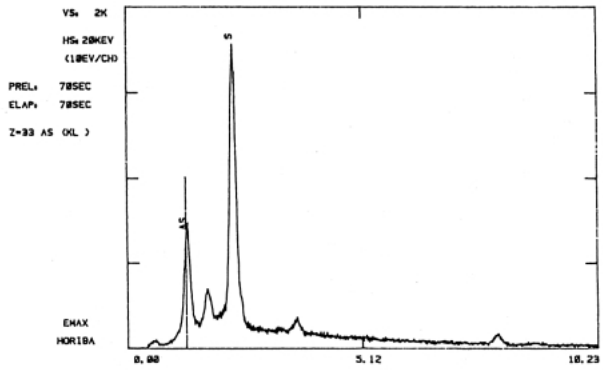
赤色系漆　朱+ﾍﾞﾝｶﾞﾗ（HgS+Fe）



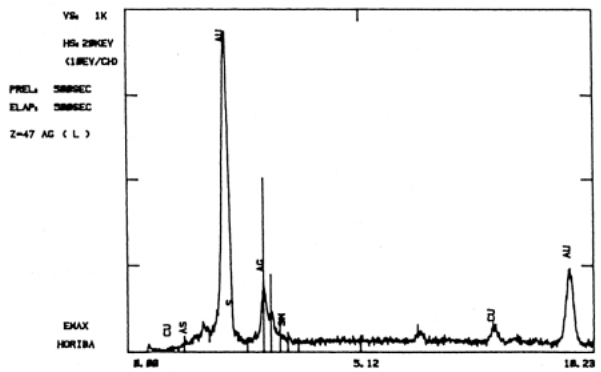
蒔絵加飾（金彩）　金（Au）



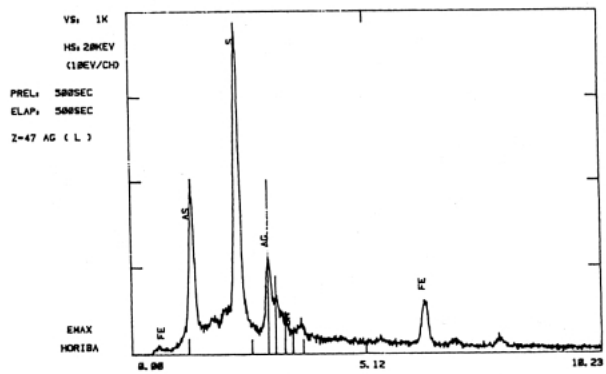
蒔絵加飾（銀彩）　銀（Ag）



蒔絵加飾（金彩）　石黄（As_2S_3）



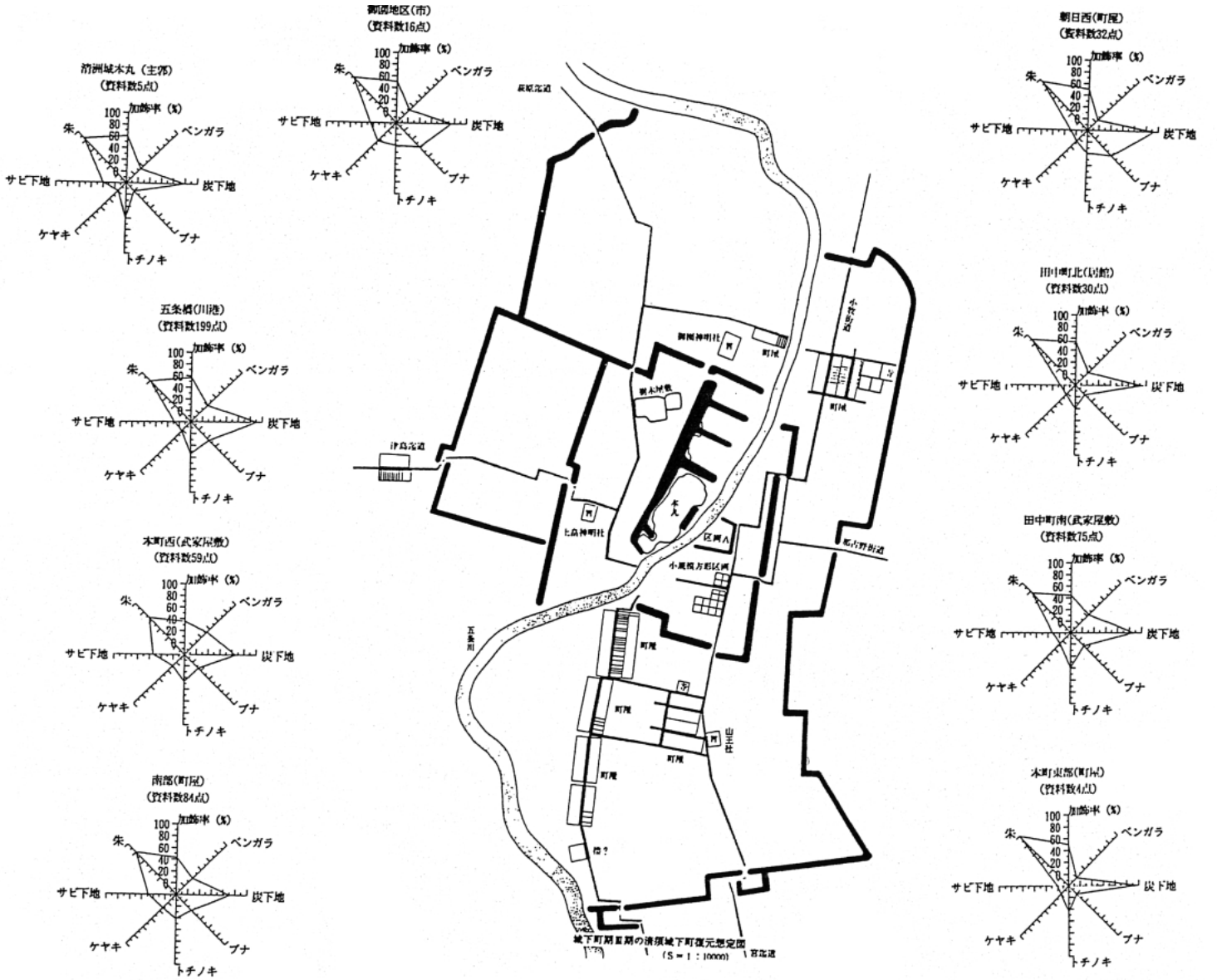
蒔絵加飾（金彩）　金+銀（Au+Ag）



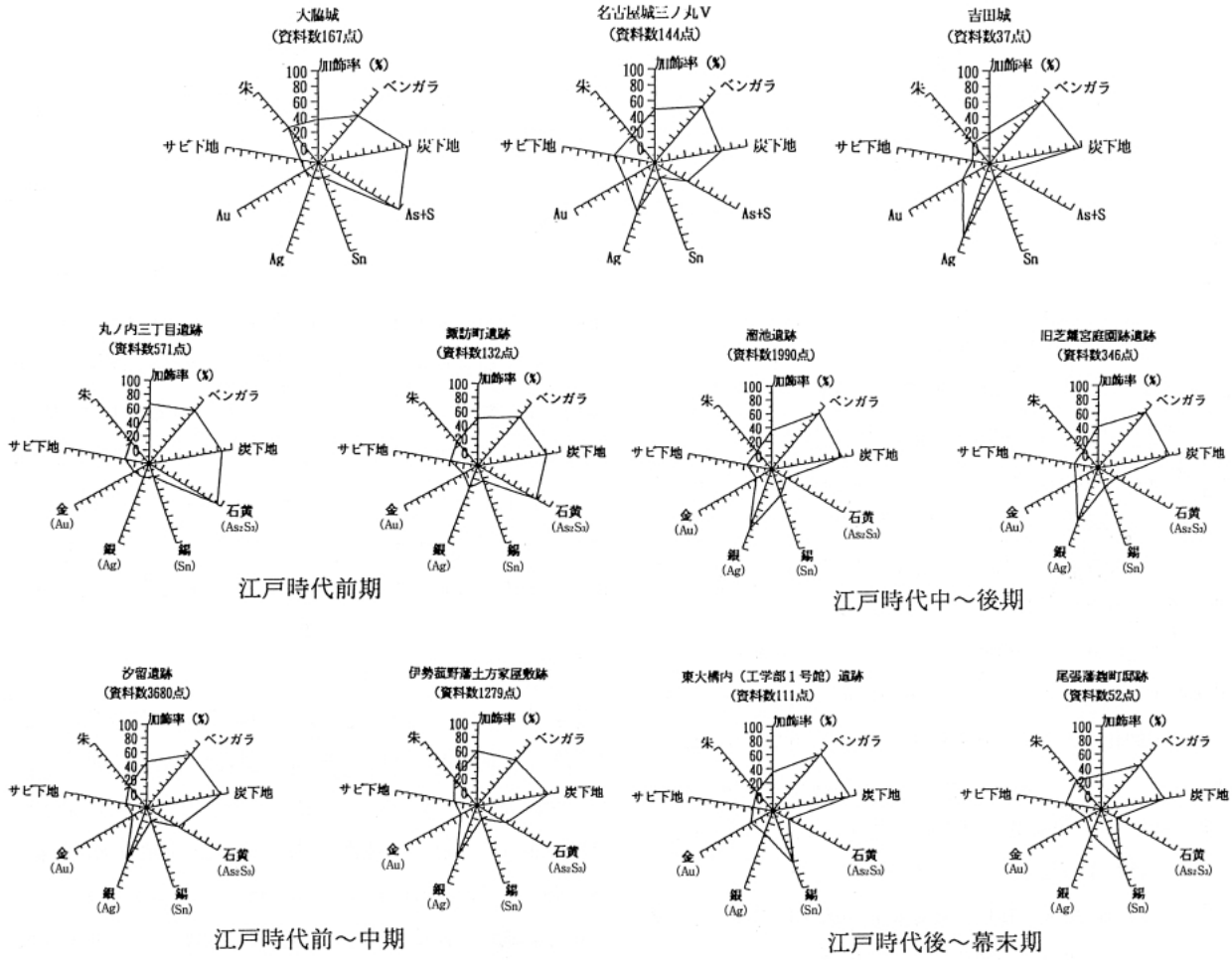
蒔絵加飾（金彩）　銀+石黄（Ag+As+S）

第 235 図　電子線マイクロアナライザー（EPMA）の分析結果

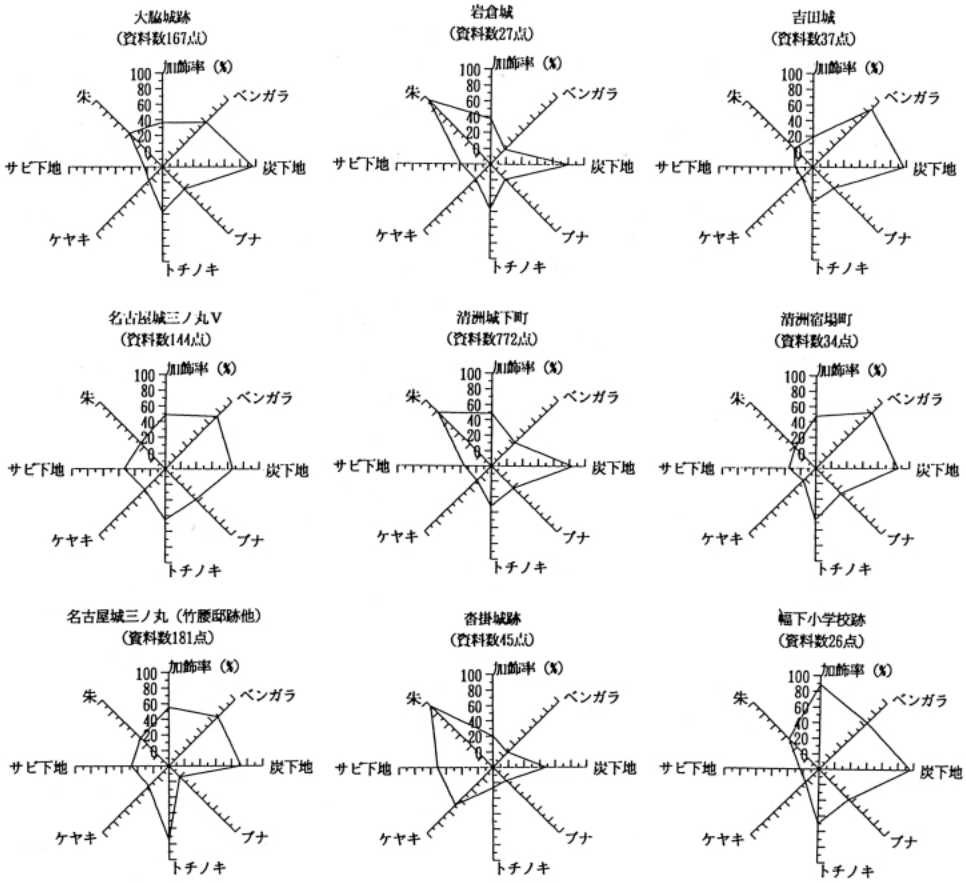
（図6）本資料を含む各遺跡別の一括出土漆器資料の組成（集計例）



第 236 図　清洲城下町遺跡の地区別出土漆器資料の組成（集計例）

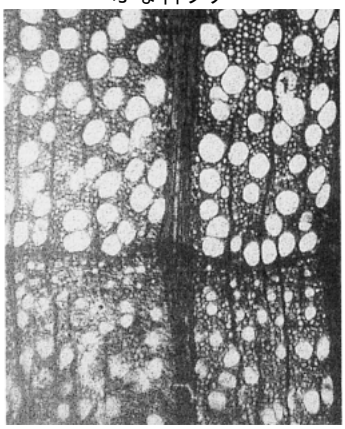


第 237 図　各遺跡における年代別の蒔絵粉材料の変遷（集計例）

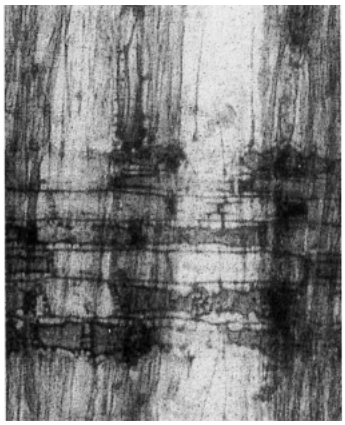


第 238 図　本資料を含む各遺跡別の一括出土漆器資料の組成（集計例）

ぶな科ブナ



木口（30×）

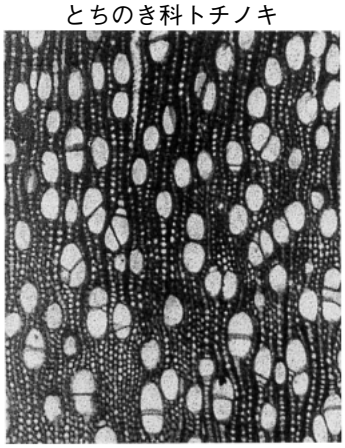


柾目（100×）

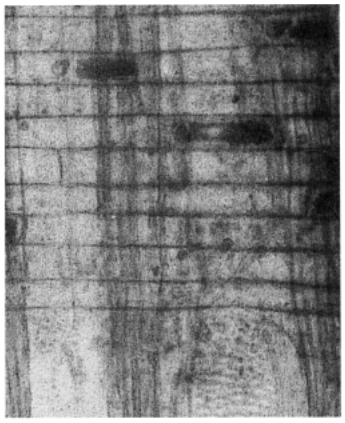


板目（50×）

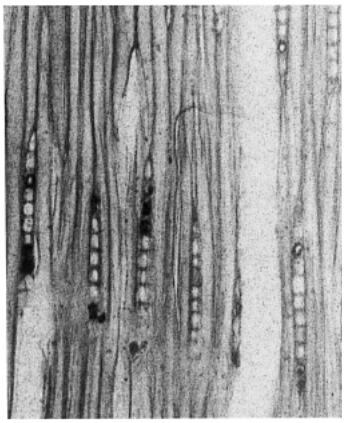
とちのき科トチノキ



木口（30×）

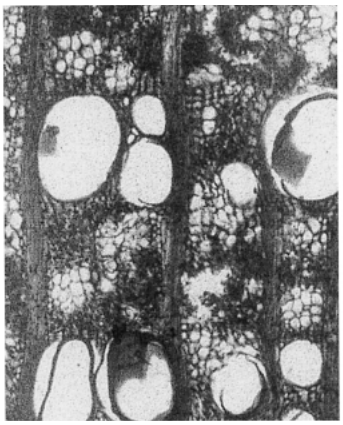


柾目（100×）

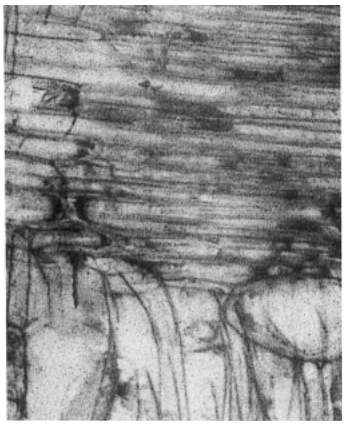


板目（50×）

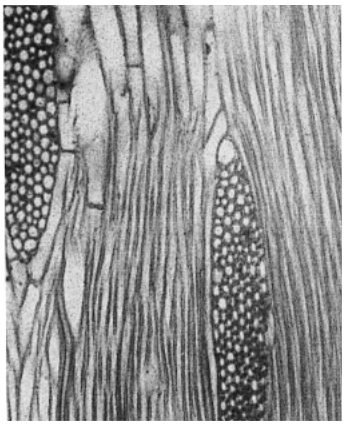
にれ科ケヤキ



木口（30×）

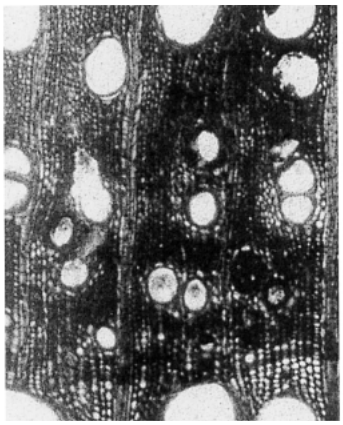


柾目（100×）

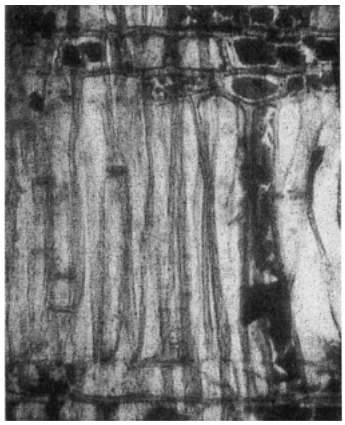


板目（50×）

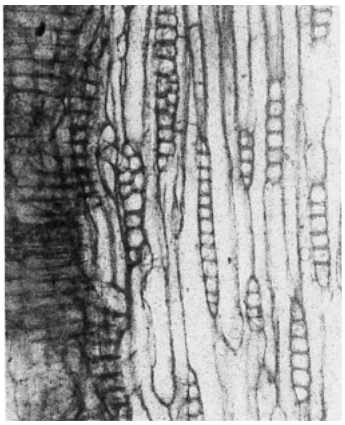
もくれん科シオジ



木口（30×）

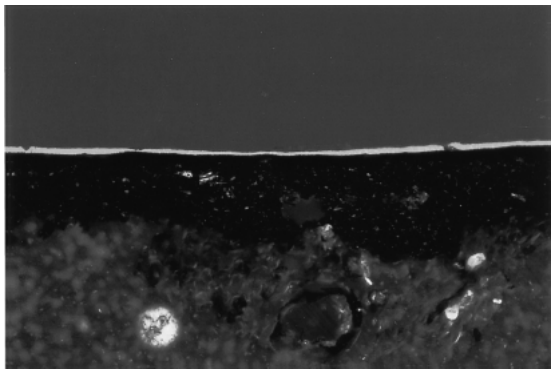


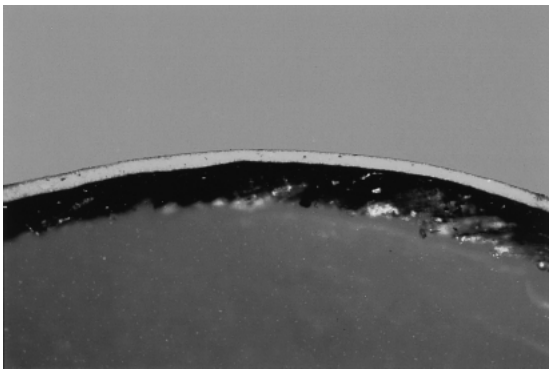
柾目（100×）

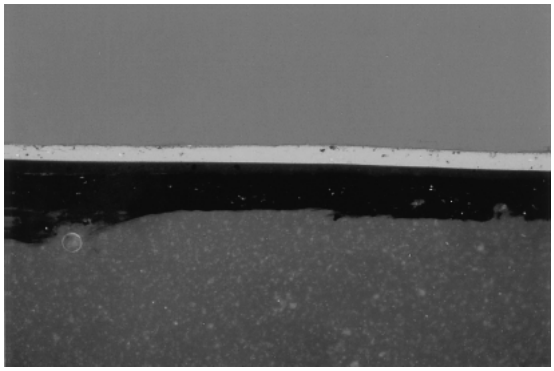


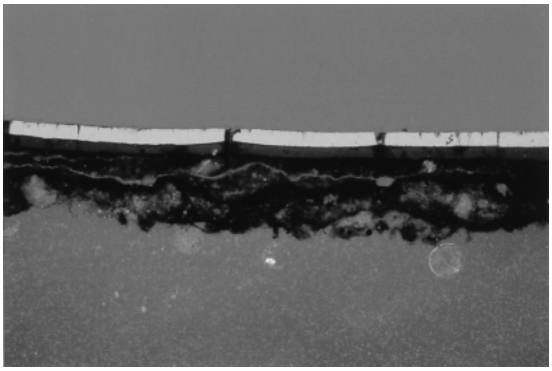
板目（50×）

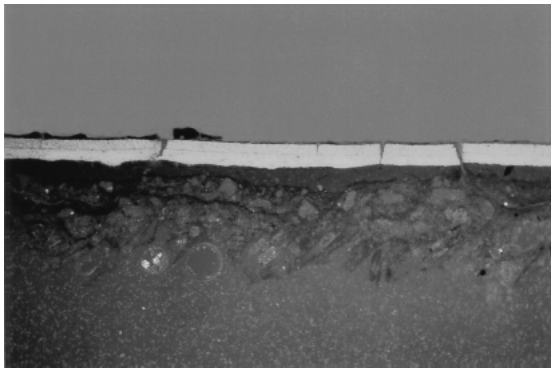
第 239 図　代表的な樹種の顕微鏡写真

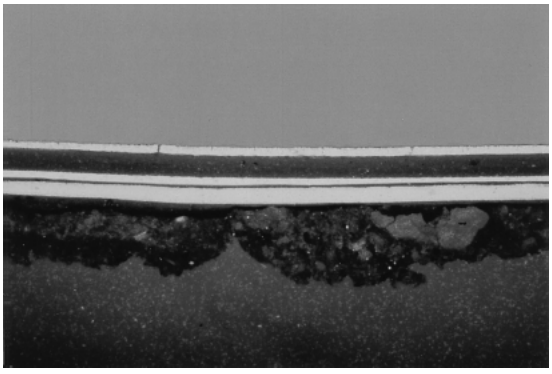


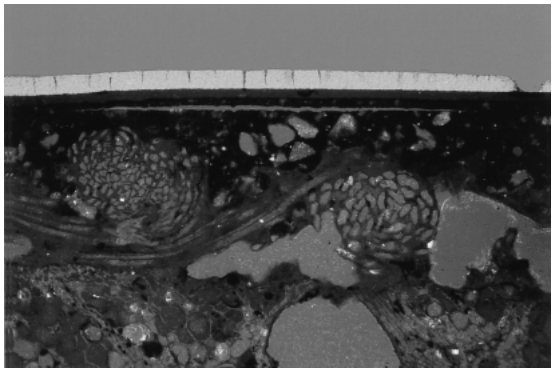


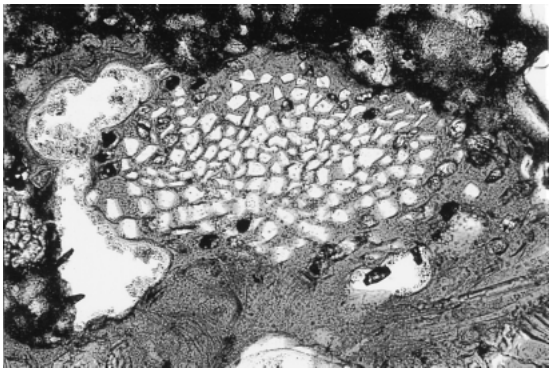












第 240 図　赤色系漆（根来系漆器）の漆塗塗り構造　　（断面観察写真）

（Ⅲ）清須城出土瓦の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

清須城出土瓦の胎土分析は、これまでに軒瓦を中心に70点の試料について行われており、一部の瓦当紋様分類と胎土との間に対応関係のあることが明らかにされている（鈴木編1997）。これにより、清須城の普請に際しては複数の瓦工人が動員された可能性があるという所見が出されている。

今回の報告では、前回の試料が出土した調査区に隣接する調査区から出土した瓦を試料として分析を行い、前回の試料との間で胎土の差異について検討する。発掘調査所見では、今回対象とした調査区から出土した軒瓦の紋様の組成は、前回の調査区から出土した軒瓦のそれとは異なっていることが判明しつつあり、このことからそれぞれの調査区から出土した瓦は、互いに異なる建物に使用されていた可能性があると考えられている。本分析では、瓦の胎土の様相を明らかにすることによって、この所見に対する検討資料を作成するものである。

１．試料

試料は、96区から出土した軒瓦56点である。96区は前回の試料が出土した94A区の南東に接する部分で、清須城本丸の東側に相当する。発掘調査では石垣遺構が確認され、石垣の前面から大量の瓦が出土している。これらの瓦は出土状態から、16世紀末～17世紀初頭の清須城主郭に用いられた瓦であると考えられている。

今回の試料56点には試料番号1～56までが付されているが、そのうち試料番号1～25は軒丸瓦、試料番号26～56は軒平瓦である。各試料の分類型式、出土地点などは、分析結果を呈示した図1に併記する。

２．分析方法

前回の分析では、胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴とする重鉱物分析を行った。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉砕し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm－1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉱物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数％を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数％を求めずに主な産出鉱物を呈示するにとどめる。

３．結果

（1）胎土の分類

分析結果を第31表および第241図に示す。前回の分析では、斜方輝石の多い胎土Ａ類と角閃石の多い

胎土B類とに2分したが、今回の結果でも、その分類は適用できる。ここではa類とb類とする。さらに、今回は、それぞれの胎土で少量の鉱物の種類と組成から、以下のような細分を試みた。

1）a1類

斜方輝石が多く、少量の単斜輝石を伴う。試料によっては微量のジルコンが含まれる。

2）a2類

a1類の組成に加えて微量の角閃石を伴う。

3）a3類

a2類に比べて角閃石の量比がやや高く、単斜輝石とほぼ同量程度含まれる。

4）a4類

a3類に比べて単斜輝石は微量となり、単斜輝石に対する角閃石の量比が比較的高い。

5）a5類

斜方輝石と角閃石が同量程度に多く、少量の単斜輝石を伴う。

6）b1類

角閃石が多く、少量の斜方輝石、黒雲母、ジルコンを伴う。

7）b2類

b1類の組成に加えて、少量または微量のザクロ石を含む。

8）b3類

b2類の組成からジルコンがほとんど含まれない組成。

各試料の胎土分類結果については、第241図に併記する。

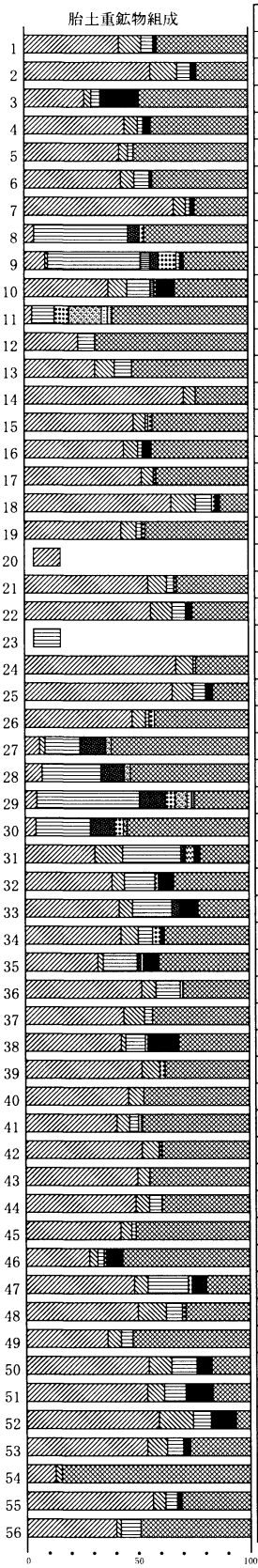
(2) 型式と胎土との対応関係

各型式ごとに上記の胎土分類を対応させた表を第32表に作成した。この表には、前回の94A区試料の分析結果から、今回と同様の基準で胎土を分類した結果も記載した。この表より、今回の試料においてもa類の胎土が圧倒的に多いことは前回と変わりはない。また、b類の胎土は、軒丸瓦のM151型式、M211型式、軒平瓦のH102型式およびH111型式にのみ認められる。これらの型式のうち、M151型式およびH111型式は、ともに前回の分析でもb類の胎土である。

細分した胎土a類と瓦の型式との間では、個々の

第31表　重鉱物分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉱物	その他	合計
1	0	106	25	13	0	0	0	0	0	0	0	4	102	250
2	1	141	30	15	0	0	2	0	0	0	0	6	55	250
3	0	67	8	10	0	0	0	1	0	0	0	43	121	250
4	0	112	15	6	0	0	2	1	0	0	1	8	105	250
5	0	106	10	6	0	0	0	0	0	0	1	1	126	250
6	0	108	15	17	0	0	1	0	0	0	0	3	106	250
7	0	167	13	5	0	0	0	0	0	0	0	5	60	250
8	0	11	1	105	0	13	5	1	0	0	0	1	113	250
9	0	23	3	104	11	9	20	2	2	4	0	4	68	250
10	0	94	21	26	4	0	3	1	0	0	1	20	80	250
11	0	5	0	15	0	0	10	22	0	4	3	0	91	150
12	0	60	2	19	1	0	0	1	0	0	1	0	166	250
13	0	79	22	19	0	0	0	0	0	0	0	0	130	250
14	0	178	13	0	0	1	1	0	0	0	0	2	55	250
15	0	122	13	3	0	0	5	0	0	0	0	0	107	250
16	0	111	16	5	0	0	2	0	0	0	0	10	106	250
17	0	131	13	1	0	0	3	0	0	0	0	0	102	250
18	0	164	27	18	0	0	4	0	0	0	0	5	32	250
19	0	108	17	6	0	0	4	0	0	0	0	0	115	250
20	0	50	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	29	86
21	0	138	21	8	0	0	3	0	0	0	0	0	80	250
22	0	141	24	15	0	0	0	0	0	0	0	7	63	250
23	0	0	0	4	0	1	1	0	0	0	0	0	6	12
24	0	169	19	3	0	0	2	0	0	0	0	2	55	250
25	0	165	23	14	0	0	0	0	0	0	0	8	40	250
26	0	120	15	4	0	0	6	2	0	0	1	1	101	250
27	0	8	3	19	0	14	0	3	0	0	0	0	75	122
28	0	19	0	66	0	26	2	7	0	1	0	0	129	250
29	0	13	0	115	0	29	11	13	2	5	3	0	59	250
30	0	12	0	61	0	27	10	4	0	1	1	2	132	250
31	0	78	31	65	2	5	0	0	10	2	0	6	51	250
32	0	97	14	34	2	0	4	0	0	0	2	17	80	250
33	0	105	15	44	0	9	2	0	2	1	1	20	51	250
34	0	107	19	16	0	0	9	0	0	1	0	4	94	250
35	0	81	6	38	0	4	3	0	0	1	1	17	99	250
36	0	130	16	27	0	1	3	0	0	0	0	1	72	250
37	0	110	23	9	0	2	2	0	0	0	0	0	104	250
38	0	107	5	22	0	2	3	0	0	1	0	34	76	250
39	0	130	20	1	0	0	6	0	0	0	0	1	92	250
40	0	115	17	0	0	2	1	0	0	0	0	0	115	250
41	0	102	14	10	0	0	2	0	0	0	4	0	118	250
42	0	130	19	1	0	0	3	0	0	0	0	1	96	250
43	0	125	13	2	0	0	0	0	0	0	0	0	110	250
44	0	123	15	14	0	0	0	0	0	0	0	0	98	250
45	0	106	12	5	0	0	2	0	1	0	0	1	123	250
46	0	71	9	7	2	0	3	0	0	0	2	18	138	250
47	0	121	15	45	0	0	4	0	0	0	2	16	47	250
48	0	125	31	18	0	0	4	0	0	0	0	2	70	250
49	0	91	15	13	0	0	2	0	0	0	0	1	128	250
50	0	137	25	28	0	1	0	0	0	0	0	17	42	250
51	0	135	19	24	0	1	0	0	0	2	0	30	39	250
52	0	148	38	20	0	0	0	0	0	1	0	28	15	250
53	0	135	22	18	0	0	1	1	0	1	0	8	64	250
54	0	32	7	1	0	0	2	0	0	0	0	0	208	250
55	0	141	14	13	1	0	0	0	0	0	0	5	76	250
56	0	100	5	22	0	1	0	0	0	0	0	0	122	250



	胎土	型式	調査区	グリット	遺構	日付
1	a3	M121	96	ⅢG11j	T01	970120
2	a3	M122	96	ⅢG12k	SX01 12層	970210
3	a3'	M123	96	ⅢG10j	検1	970128
4	a2	M123	96	ⅢG12m	SX01 12層	970128
5	a2	M124	96	ⅢG16d	SX01 12層	970310
6	a3	M124	96	ⅢG14f	SX01 12層	970212
7	a2	M124	96	ⅢG12m	SX01 12層	970128
8	b1	M151	96	ⅢG13i	SX01 12層	970221
9	b1	M151	96	ⅢG14g	SX01 12層	970219
10	a3	M161	96	ⅢG11n	SX01 12層	970123
11	b2	M211	96	ⅢG12i	SX01 12層	970214
12	a4'	M221	96	ⅢG07p	SX01 12層	970128
13	a3	M241	96	ⅢG10j	SX01 礫層	970205
14	a1	M251	96	ⅢG12l	SX01 12層	970131
15	a2	M341	96	ⅢG10i	T01	970120
16	a2	M341	96	ⅢG08p	SX01 12層	970124
17	a1	M341	96	ⅢG11j	T01	970117
18	a3	M341	96	ⅢG15f	SX01 12層	970310
19	a2	M341	96	ⅢG15e	SX01 12層	970310
20	(a)	M341	96	ⅢG12i	SX01 12層	970214
21	a2	M351	96	ⅢG12m	SX01 12層	970128
22	a3	M351	96	ⅢG11j	SX01 12層	970207
23	(b?)	M351	96	ⅢG13i	SX01 12層	970221
24	a2	M351	96	ⅢG13h	SX01 12層	970212
25	a3	M351	96	ⅢG12h	SX01 12層	970217
26	a2	H102	96	ⅢG13j	SX01 12層	970221
27	b3	H102	96	ⅢG11n	T03	970117
28	b3	H111	96	ⅢG14f	SX01 12層	970212
29	b2	H111	96	ⅢG14g	SX01 12層	970219
30	b2	H111	96	ⅢG12i	SX01 12層	970224
31	a5	H112	96	ⅢG14h	SX01 12層	970220
32	a4	H112	96	ⅢG17d	SX01 12層	970310
33	a4	H131	96	ⅢG16d	SX01 12層	970307
34	a3	H131	96	ⅢG12g	検出	970210
35	a4	H131	96	ⅢG14f	SX01 12層	970212
36	a3	H211	96	ⅢG09o	SX01 12層	970127
37	a2	H212	96	ⅢG05o	SX01 12層	970127
38	a4	H213	96	ⅢG10j	SX01 礫層	970205
39	a1	H214	96	ⅢG14g	SX01 12層	970218
40	a1	H215	96	ⅢG06o	SX01 12層	970131
41	a3	H221	96	ⅢG12j	SX01 12層	970213
42	a1	H221	96	ⅢG12i	SX01 12層	970213
43	a1	H221	96	ⅢG10i	SX01 礫層	970205
44	a3	H221	96	ⅢG12i	SX01 12層	970213
45	a2	H222	96	ⅢG06o	SX01 12層	970124
46	a3'	H222	96	ⅢG10n	SX01 11層	970121
47	a4	H331	96	ⅢG13i	SX01 12層	970213
48	a3	H331	96	ⅢG13j	SX01 12層	970221
49	a3	H333	96	ⅢG10i	SX01 礫層	970224
50	a3	H341	96	ⅢG13i	T02	970114
51	a3	H341	96	ⅢG12i	SX01 12層	970229
52	a3	H341	96	ⅢG14i	SX01 12層	970206
53	a3	H491	96	ⅢG12k	SX01 12層	970210
54	a1'	H222	96	ⅢG14f	SX01 12層	970212
55	a3	H222	96	ⅢG10j	検1	970129
56	a4	H222	96	ⅢG12g	SX01 12層	970212

第241図　胎土重鉱物組成

型式の試料数が少ないこともあり、特に明瞭な対応関係は認められない。すなわち、一つの型式の中に複数種の胎土が混在している状況が認められる。このことは、細分したb類の胎土においても同様である。

(3) 96区出土試料と94A区出土試料との比較

第32表に示したように、いずれの型式も複数種の胎土が混在しており、96区試料と94A区試料とが全く重なることはなく、一部に共通した胎土が認められるという状況である。その中で、M121、M211、H112、H221、H331の各型式においては、96区試料と94A区試料とで重なる胎土が認められない。

第32表　瓦の型式と胎土

種類	大きさ	型式	a1	a2	a3	a4	a5	b1	b2	b3	Z
軒丸瓦	大型	M121			●○G○G						
		M122	○	○	●○	○○					
		M123	○	●	●						
		M124		●●	●						
		M151						●●	●○		
		M161			●○						
	中型	M211							●		○
		M221		○		●○○					
		M241		○	●○						
		M251	●								
	小型	M341	●	●●●	●○○						
	M351			●	●						
軒平瓦	大型	H102		●○	○○					●	
		H111						○○	●●○○	●	
		H112		○○		●	●				
		H131			●	●●	○				
	中型	H211	○		●						
		H212		●	○						
		H213		○		●○					
		H214	●								
		H215	●								
		H221	●●		●●		○				
		H222		●	●○						
	小型	H331	○	○	●	●					
		H333			●						
		H341		○	●●●○						
		H491		○	●○						
	H222		●		●	●					

a1～Zは胎土の分類（Zは今回の分析では認められなかったジルコンの多い組成）
●：96区出土試料　○：94A区出土試料　G（a3類の組成にザクロ石が加わった組成）

4．考察

結果の項で述べたように、96区試料と94A区試料との間に特に明瞭な胎土の差異は認められない。また、上述したようにいくつかの型式においては、両区で異なる胎土を示す型式も存在するが、これらにしても試料数を増やした場合に、共通する胎土が見出される可能性がある。すなわち、胎土分析結果からは、紋様から推定されるほどの両区の違いを指摘することはできない。考古学的所見により瓦の使用された建物が異なっていたとしても、おそらく瓦の生産供給体制は変わらなかったことを今回の分析結果は示唆している。

なお、a類の胎土は、以前の報告でも述べたように、尾張地域で生産されたことを示す「両輝石型」に相当する。これまで清須城における瓦の生産供給地の主体が尾張地域にあるという見解は、今回の分析結果においても変わらない。ただし、今回細分した各胎土が、それぞれ尾張地域内での産地の違いを示すものかあるいは、瓦工人の違いを示すものであるかについては、現時点では判断できない。

一方、前回の報告において西三河地域で作られた可能性が高いとしたb類の胎土は、今回の試料でも前回と同様の型式に認められたが、今回は、さらに別の型式（M211、H102）でも認められている。b類の胎土を持つ瓦の存在は、清須城の普請に際して複

数の技術だけではなく、西三河地域の材料あるいは西三河地域の製品も使用されたことを示唆しており、当時の様相を考える際の重要なポイントとなる。今回の分析により、b類の胎土は、複数の型式において認められ、しかも、これらの型式は、H102型式ではa類とb類、M211型式ではb類とZ類というように他の胎土との混在が認められることも判明した。したがって、分析例の増加によっては、また異なる瓦生産供給の様相が推定される可能性はある。今後はさらに、瓦の時期の変遷と胎土との対応関係を探るなど、清須城の普請に関わる瓦の生産供給体制の時期的な変化についても検討する必要があろう。

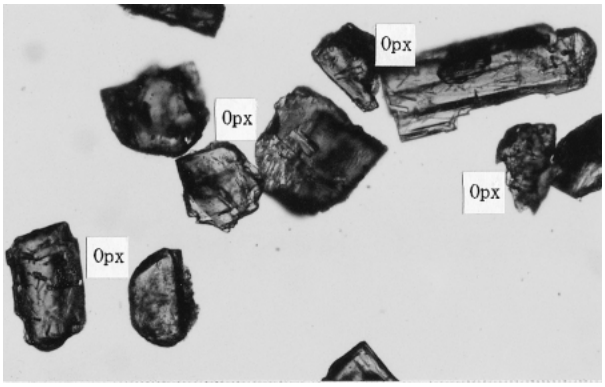
引用文献

鈴木正貴編1997『清洲城下町遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第70集

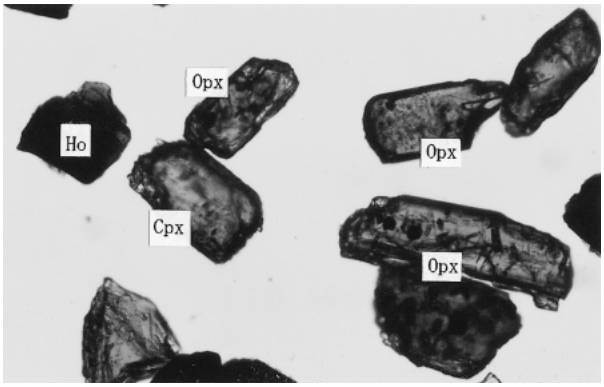
第33表　重鉱物分析試料一覧

番号	型式	調査区	グリッド	遺構	日付	分析重量
1	M121	96	ⅢG11j	T01	970120	32.3
2	M122	96	ⅢG12k	SX01２層	970210	75.3
3	M123	96	ⅢG1oj	検Ⅰ	970128	31.4
4	M123	96	ⅢG12m	SX01２層	970128	34.7
5	M124	96	ⅢG16d	SX01２層	970310	37.7
6	M124	96	ⅢG14f	SX01２層	970212	36
7	M124	96	ⅢG12m	SX01２層	970128	69.3
8	M151	96	ⅢG13i	SX01２層	970221	52.8
9	M151	96	ⅢG14g	SX01２層	970219	73.1
10	M161	96	ⅢG11n	SX01２層	970123	49.7
11	M211	96	ⅢG12i	SX01２層	970214	31.8
12	M221	96	ⅢG07p	SX01２層	970128	41.2
13	M241	96	ⅢG10j	SX01礫層	970205	36.9
14	M251	96	ⅢG12l	SX01２層	970131	40.2
15	M341	96	ⅢG10i	T01	970120	75.9
16	M341	96	ⅢG08p	SX01２層	970124	48
17	M341	96	ⅢG11j	T01	970117	46
18	M341	96	ⅢG15f	SX01２層	970310	41.3
19	M341	96	ⅢG15e	SX01２層	970310	54.2
20	M441	96	ⅢG12i	SX01２層	970214	8
21	M351	96	ⅢG12m	SX01２層	970128	43.5
22	M351	96	ⅢG11j	SX01２層	970207	41.1
23	M351	96	ⅢG13i	SX01２層	970221	4.5
24	M351	96	ⅢG13h	SX01２層	970212	48.1
25	M351	96	ⅢG12h	SX01２層	970217	54.8
26	H102	96	ⅢG13j	SX01２層	970221	39.4
27	H102	96	ⅢG11n	T03	970117	36
28	H111	96	ⅢG14f	SX01２層	970212	37.4
29	H111	96	ⅢG14g	SX01２層	970219	41.5
30	H111	96	ⅢG12i	SX01２層	970224	40.4
31	H112	96	ⅢG14h	SX01２層	970220	45
32	H112	96	ⅢG17d	SX01２層	970310	57.7
33	H131	96	ⅢG16d	SX01２層	970307	59.9
34	H131	96	ⅢG12g	検出	970210	46.6
35	H131	96	ⅢG14f	SX01２層	970212	58.9
36	H211	96	ⅢG09o	SX01２層	970127	54.2
37	H212	96	ⅢG05o	SX01２層	970127	32.2
38	H213	96	ⅢG10j	SX01礫層	970205	35.3
39	H214	96	ⅢG14g	SX01２層	970218	64.1
40	H215	96	ⅢG06o	SX01２層	970131	75.8
41	H221	96	ⅢG12j	SX01２層	970213	35.8
42	H221	96	ⅢG12i	SX01２層	970213	34
43	H221	96	ⅢG10i	SX01礫層	970205	64.7
44	H221	96	ⅢG12i	SX01２層	970213	45.2
45	H222	96	ⅢG06o	SX01２層	970124	34.5
46	H222	96	ⅢG10n	SX01１層	970121	42.9
47	H331	96	ⅢG13i	SX01２層	970213	41.2
48	H331	96	ⅢG13j	SX01２層	970221	37.4
49	H333	96	ⅢG10i	SX01礫層	970224	40.7
50	H341	96	ⅢG13i	T02	970114	50
51	H341	96	ⅢG12i	SX01２層	970229	45.3
52	H341	96	ⅢG14i	SX01２層	970206	36
53	H491	96	ⅢG12k	SX01２層	970210	57.1
54	H222	96	ⅢG14f	SX01２層	970212	32.9
55	H222	96	ⅢG10j	検Ⅰ	970129	40.8
56	H222	96	ⅢG12g	SX01２層	970212	34.7

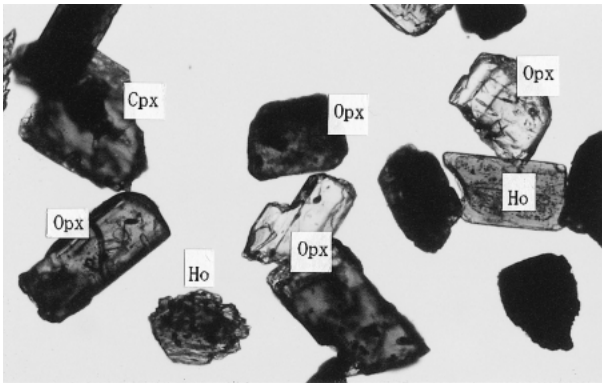
第 242 図　胎土中の重鉱物



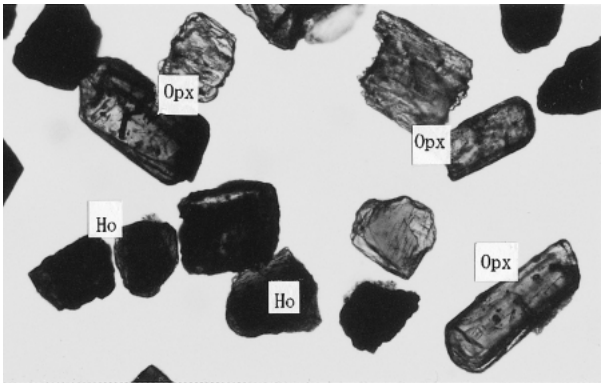
1.a1 類（14；M251　96　III G12l　SX01　12 層）



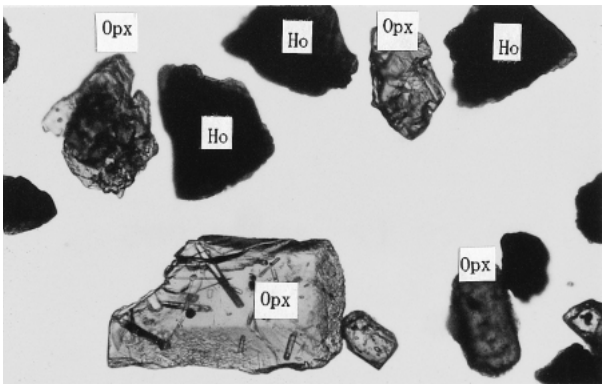
2.a2 類（24；M351　96　III G13h　SX01　12 層）



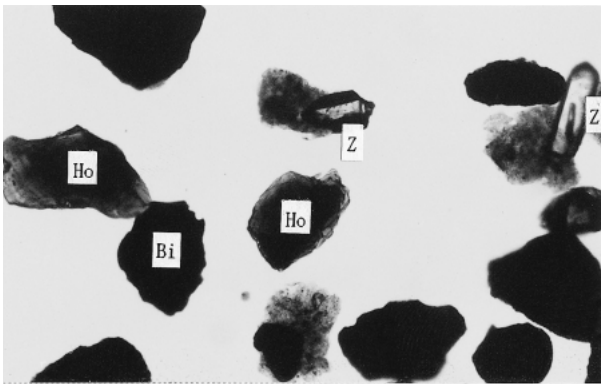
3.a3 類（50；H341　96　III G13i　T02）



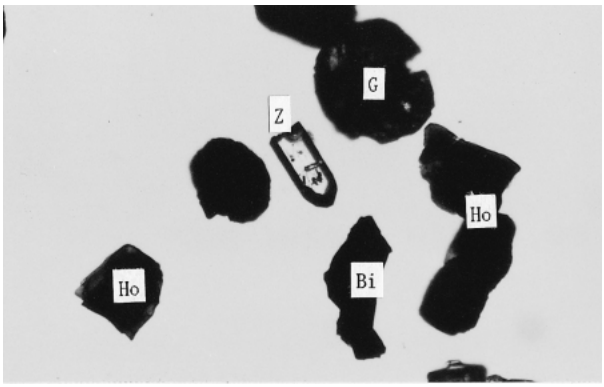
4.a4 類（33；H131　96　III G16d　SX01　12 層）



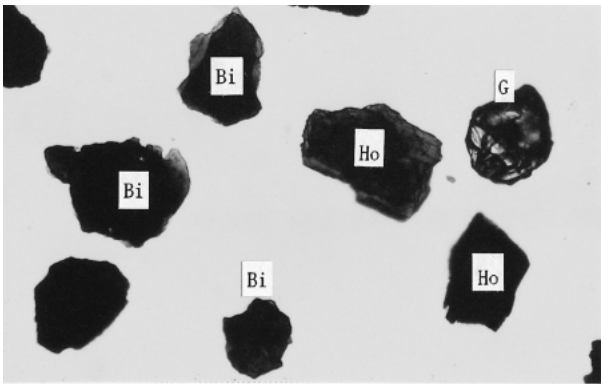
5.a5 類（31；H112　96　III G14h　SX01　12 層）



6.b1 類（9；M151　96　III G14g　SX01　12 層）



7.b2 類（29；H111　96　III G14g　SX01　12 層）



8.b3 類（28；H111　96　III G14f　SX01　12 層）

Opx：斜方輝石．Cpx：単斜輝石．Ho：角閃石．
Bi：黒雲母．Z：ジルコン．G：ザクロ石．

0.5mm

（Ⅳ）清洲城下町遺跡出土瓦の胎土・金箔分析

―X線回折試験及び化学分析試験―

（株）第四紀　地質研究所　井上　巖

１．実験条件

１－１　試料

分析に供した試料は第34表胎土性状表に示す通りである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーテングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

１－２　X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。Target:Cu, Filter:Ni, Voltage:40kV, Current:30mA, ステップ角度:0.02°　計測時間:0.5秒

１－３　化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧：15kV、分析法：スプリント法、分析倍率：200倍、分析有効時間：100秒、分析指定元素10元素で行った。

２．X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第34表胎土性状表に示す通りである。第34表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト（Mullite）、クリストバライト（Cristobalite）等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

２－１　組成分類

1）Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

第243図に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント（%）で表示する。モンモリロナイトはMont／Mont+Mica+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1～4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第243図に示す通りである。

2）Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイアグラム

第244図に示すように菱形ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）、緑泥石（Ch）の内、a）

3成分以上含まれない、b）Mont, Chの2成分が含まれない、c）Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-Hbのそれぞれの X線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont／Mont+Ch*100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイアグラム内にある1～7はMont, Mica,Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第244図に示すとおりである。

２－２　焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト（Mullite）は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト（Cristobalite）はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

a）焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。

b）焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

c）焼成ランクⅢ：ガラスのなかにクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d）焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微少な葉状を呈する。

e）焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

３．Ｘ線回折試験結果

３－１　タイプ分類

第34表胎土性状表には清洲城下町遺跡出土の瓦を記載してある。この結果に基づいて第3表タイプ分類一覧表を作成した。第36表に示すように瓦の胎土はAタイプだけである。

Aタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。焼成温度が低い瓦は $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O$（アロフェン質ゲル）で構成される。高温で焼成された瓦は鉱物が熱により分解し、ガラスに変質しているために4成分が検出されない。

焼成温度が低い瓦（ムライトとクリストバライトが検出されない）はMont, Mica, Hb, Chの4成分が検出されないことから推察して、高温で焼成された瓦も同じ胎土であろう。

３－２　石英（Qt）-斜長石（Pl）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の胎土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。第245図Qt-Pl図に示すようにⅠ～Ⅳの4グループに分類された。

Ⅰグループ：軒丸瓦が集中する。

Ⅱグループ：飾瓦と鬼瓦が集中する。

Ⅲグループ：軒平瓦が集中し、16の鬼瓦が混在する。
Ⅳグループ：軒丸瓦が集中する。

軒丸瓦は2タイプ、軒平瓦は1、飾瓦と鯱瓦で1タイプ、鬼瓦－16は軒平瓦と同じグループ、軒平瓦－9は軒丸瓦と同じグループに入り、この２個は異質である。

４．化学分析結果

第35表化学分析表に示すように、清洲城下町遺跡の瓦を化学分析した。分類結果に基づいて第246図SiO_2-Al_2O_3図、第247図Fe_2O_3-MgO図、第248図K_2O-CaO図を作成した。

４－１　SiO_2-Al_2O_3の相関について

第246図SiO_2-Al_2O_3図に示すようにⅠとⅡの2グループに分類される。Ⅰグループには軒丸瓦の1と2、Ⅱグループにはこの2個を除く軒丸瓦、軒平瓦、飾瓦と鬼瓦が集中する。このことは石英（Qt）と斜長石（Pl）の相関では4グループに分類されたが胎土の主体である粘土の組成は2タイプしかないということである。その大半はⅡグループに属し、素地土は同じで混和材としての砂の混合率が異なることを意味している。

４－２　Fe_2O_3-MgOの相関について

第247図Fe_2O_3-MgO図に示すように、SiO_2-Al_2O_3の相関と同様にⅠとⅡの２グループに分類される。Ⅰグループには軒丸瓦、軒平瓦、飾瓦、鬼瓦の大半が集中し、Ⅱグループには軒丸瓦の1と2が集中する。

４－３　K_2O-CaOの相関について

第248図K_2O-CaO図に示すように、ⅠとⅡの２グループに分類される。Ⅰグループには軒丸瓦の1と2、Ⅱグループにはこの2個を除く軒丸瓦、軒平瓦、飾瓦と鬼瓦が集中する。軒平瓦の10はK_2Oの価が高くいくぶん異質に見える。

５．瓦の金箔の化学分析

第35表化学分析表には瓦の金箔の分析値がのっている。分析値に基づいて第249図Au-Ag図を作成した。金（Au）と銀（Ag）の比率は第７図に示すように直線的であり、金にたいして銀を混入する比率はランダムではなく一定の比率で行われていることがわかる。最も金の含有量が高いものは金100％であり、6、12、
14の3個が該当する。金が88～100％の領域にはほとんどの瓦が含まれる。銀の含有率が高くなるにしたがっていくぶんくすんだ金色となり、100％に向かって黄金色が強くなるものであろう。軒丸瓦の3は銀が20％近く含まれており、いくぶん品質が低い。軒平瓦の8は15％の銀と15％の鉛（Pb）を混入した低品位のものである。

６．まとめ

1）瓦の胎土はAタイプだけである。低温で焼成されたものと高温で焼成されたものがともに同じタイプをしており、基本的にはMont, Mica, Hb, Chの４成分を含まない粘土を使用しているものであろう。
2）X線回折試験に基づくQt-Pl相関では軒平瓦、飾瓦は1つのグループに集中し、軒丸瓦は2グループに分かれて分布する。鬼瓦は軒平瓦と同じグループに属し、関連性が伺われる。軒丸瓦1と2は明らかに異なるグループを形成し、異質である。
3）化学分析結果では軒丸瓦の1と2を除く軒丸瓦、軒平瓦、飾瓦・鬼瓦は粘土成分が同じで1つのグループに属し、砂の混同比による分類とはいくぶん異なる。基本となる粘土は同じで砂の混合比を変えて軒丸瓦、軒平瓦、飾瓦を製作していることになる。
4）瓦の金箔の分析では金と銀の混同比には一定の比率があり、その関係は直線的である。銀が10～0％すなわち金が90～100の範囲にあるものがほとんどである。軒平瓦の10は鉛15％、銀15％の低品位の金箔で、軒丸瓦3は銀を20％含む低品位の金箔である。このように見てくると金箔には多くの種類があることがわかる。

終了

第34表　胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物													ガラス	備　考	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au		
清洲城下町-1	A		14	20						3578	231									軒丸瓦（金箔）	M151形式
清洲城下町-2	A		14	20						2984	268	80	47	188						軒丸瓦（金箔）	M152形式
清洲城下町-3	A		14	20						3661	106									軒丸瓦（金箔）	M122a形式
清洲城下町-4	A		14	20						3102	105	92	70	250			68			軒丸瓦（金箔）	M161形式
清洲城下町-5	A		14	20						3431	133	89								軒丸瓦（金箔）	新形式
清洲城下町-6	A		14	20						2917	132	92	65	211			64			軒丸瓦（金箔）	不明形式（鳥衾瓦）
清洲城下町-7	A		14	20						4468	136	82	58							軒平瓦（金箔）	H102b形式
清洲城下町-8	A		14	20						3810	149	119								軒平瓦（金箔）	H101形式
清洲城下町-9	A		14	20						2620	78	157	103	143			80			軒平瓦（金箔）	H112形式
清洲城下町-10	A		14	20						4080	187									軒平瓦（金箔）	H213形式
清洲城下町-11	A		14	20						4336	231									軒平瓦（金箔）	H214形式
清洲城下町-12	A		14	20						4928	162	70								軒平瓦（金箔）	H333?形式
清洲城下町-13	A		14	20						3859	126	79		172						飾瓦（金箔）	A1類
清洲城下町-14	A		14	20						3863	99	87	84				71			飾瓦（金箔）	A4類
清洲城下町-15	A		14	20						4017	91	99	62				58			飾瓦（金箔）	A5類
清洲城下町-16	A		14	20						4272	213	102	54							鬼瓦（金箔）	
清洲城下町-17	A		14	20						3560	123									鯱瓦（金箔）	

Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石　Ch：緑泥石　（Ch:Fe　一次反射、Ch:Mg　二次反射）　Qt：石英　Pl：斜長石　Crist：クリストバライト
Mullite：ムライト　K-fels：カリ長石　Halloy：ハロイサイト　Kaol：カオリナイト　Pyrite：黄鉄鉱　Au：普通輝石　Py：紫蘇輝石

終了

第35表　化学分析表

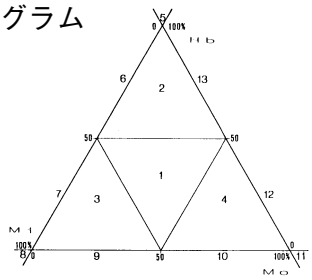
試料番号	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	Nio	Total	備　考	
清洲城下町-1	0.77	0.28	25.00	63.82	2.69	0.72	0.86	0.19	5.58	0.08	99.99	軒丸瓦（金箔）	M151形式
清洲城下町-2	1.07	0.47	25.62	61.26	2.82	0.86	0.63	0.39	6.87	0.00	99.99	軒丸瓦（金箔）	M152形式
清洲城下町-3	0.12	0.47	24.28	65.60	3.00	0.17	1.11	0.00	5.05	0.19	99.99	軒丸瓦（金箔）	M122a形式
清洲城下町-4	0.27	0.31	22.62	68.92	2.93	0.00	0.75	0.00	4.05	0.15	100.00	軒丸瓦（金箔）	M161形式
清洲城下町-5	0.16	0.28	24.70	66.13	3.25	0.11	0.97	0.20	3.97	0.22	99.99	軒丸瓦（金箔）	新形式
清洲城下町-6	0.26	0.51	25.33	65.55	2.68	0.22	0.93	0.00	4.52	0.01	100.01	軒丸瓦（金箔）	不明形式（鳥衾瓦）
清洲城下町-7	1.07	0.33	23.56	66.72	3.19	0.38	0.82	0.00	3.85	0.08	100.00	軒平瓦（金箔）	H102b形式
清洲城下町-8	0.23	0.14	24.86	66.70	2.11	0.14	1.07	0.05	4.70	0.00	100.00	軒平瓦（金箔）	H101形式
清洲城下町-9	0.36	0.22	22.74	68.99	3.25	0.16	0.68	0.00	3.60	0.00	100.00	軒平瓦（金箔）	H112形式
清洲城下町-10	0.39	0.34	24.17	64.29	5.49	0.20	0.75	0.00	4.08	0.31	100.02	軒平瓦（金箔）	H213形式
清洲城下町-11	0.23	0.50	25.58	64.69	2.91	0.18	0.88	0.10	4.64	0.28	99.99	軒平瓦（金箔）	H214形式
清洲城下町-12	0.21	0.50	26.48	62.98	3.12	0.16	0.74	0.22	5.58	0.00	99.99	軒平瓦（金箔）	H333?形式
清洲城下町-13	0.47	0.40	22.80	66.24	3.06	0.22	0.97	0.26	5.58	0.00	100.00	飾瓦（金箔）	A1類
清洲城下町-14	0.58	0.25	22.04	69.18	3.46	0.21	0.69	0.19	3.25	0.14	99.99	飾瓦（金箔）	A4類
清洲城下町-15	0.57	0.30	26.09	66.72	2.94	0.00	0.78	0.00	2.59	0.00	99.99	飾瓦（金箔）	A5類
清洲城下町-16	0.23	0.62	24.07	65.04	2.93	0.11	0.94	0.15	5.54	0.38	100.01	鬼瓦（金箔）	
清洲城下町-17	0.00	0.40	23.98	66.84	2.50	0.00	0.89	0.01	4.86	0.52	100.00	鯱瓦（金箔）	
	Ag	Au	Hg	Pb									
清洲城下町-1	6.67	93.33	0.00	0.00							100.00	軒丸瓦（金箔）	M151形式
清洲城下町-2	2.52	97.48	0.00	0.00							100.00	軒丸瓦（金箔）	M152形式
清洲城下町-3	19.47	80.53	0.00	0.00							100.00	軒丸瓦（金箔）	M122a形式
清洲城下町-4	5.67	94.33	0.00	0.00							100.00	軒丸瓦（金箔）	M161形式
清洲城下町-5	9.92	90.08	0.00	0.00							100.00	軒丸瓦（金箔）	新形式
清洲城下町-6	0.00	100.00	0.00	0.00							100.00	軒丸瓦（金箔）	不明形式（鳥衾瓦）
清洲城下町-7	4.72	95.28	0.00	0.00							100.00	軒平瓦（金箔）	H102b形式
清洲城下町-8	15.33	69.17	0.00	15.50							100.00	軒平瓦（金箔）	H101形式
清洲城下町-9	4.88	95.12	0.00	0.00							100.00	軒平瓦（金箔）	H112形式
清洲城下町-10	11.58	88.42	0.00	0.00							100.00	軒平瓦（金箔）	H213形式
清洲城下町-11	0.00	99.01	0.00	0.99							100.00	軒平瓦（金箔）	H214形式
清洲城下町-12	0.00	100.00	0.00	0.00							100.00	軒平瓦（金箔）	H333?形式
清洲城下町-13	2.14	97.86	0.00	0.00							100.00	飾瓦（金箔）	A1類
清洲城下町-14	0.00	100.00	0.00	0.00							100.00	飾瓦（金箔）	A4類
清洲城下町-15	7.88	92.12	0.00	0.00							100.00	飾瓦（金箔）	A5類
清洲城下町-16	7.60	92.40	0.00	0.00							100.00	鬼瓦（金箔）	
清洲城下町-17	10.01	89.99	0.00	0.00							100.00	鯱瓦（金箔）	

第36表　タイプ分類一覧表

試料 No	タイプ分類	備　考
清洲城下町-1	A	軒丸瓦（金箔）　M151形式
清洲城下町-2	A	軒丸瓦（金箔）　M152形式
清洲城下町-3	A	軒丸瓦（金箔）　M122a形式
清洲城下町-4	A	軒丸瓦（金箔）　M161形式
清洲城下町-5	A	軒丸瓦（金箔）　新形式
清洲城下町-6	A	軒丸瓦（金箔）　不明形式（鳥衾瓦）
清洲城下町-7	A	軒平瓦（金箔）　H102b形式
清洲城下町-8	A	軒平瓦（金箔）　H101形式
清洲城下町-9	A	軒平瓦（金箔）　H112形式
清洲城下町-10	A	軒平瓦（金箔）　H213形式
清洲城下町-11	A	軒平瓦（金箔）　H214形式
清洲城下町-12	A	軒平瓦（金箔）　H333?形式
清洲城下町-13	A	飾瓦（金箔）　A1類
清洲城下町-14	A	飾瓦（金箔）　A4類
清洲城下町-15	A	飾瓦（金箔）　A5類
清洲城下町-16	A	鬼瓦（金箔）
清洲城下町-17	A	鯱瓦（金箔）

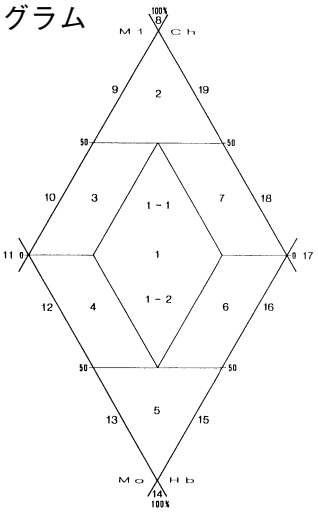
終了

第243図　三角ダイヤグラム
位置分類図



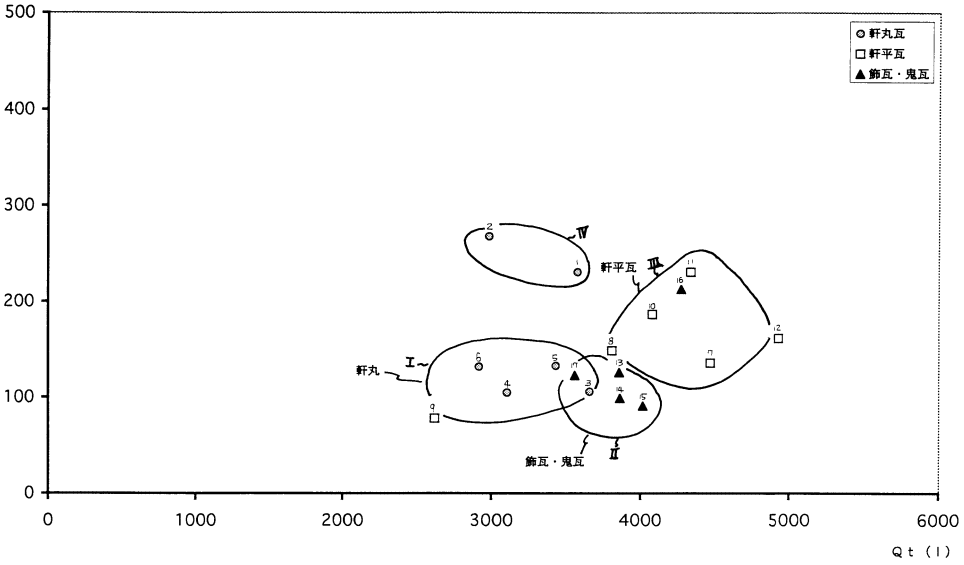
14　記載不能

第244図　菱形ダイヤグラム
位置分類図

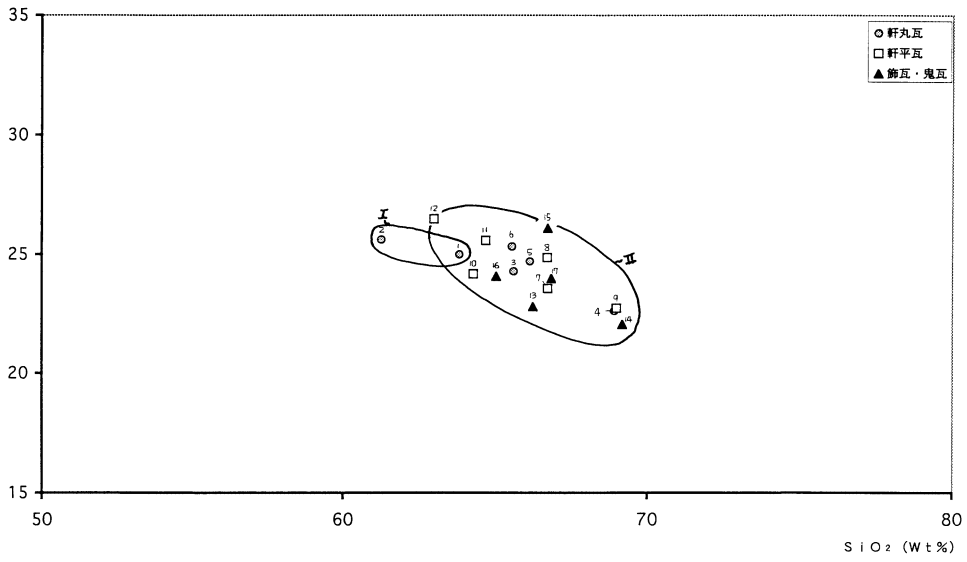


20　記載不能

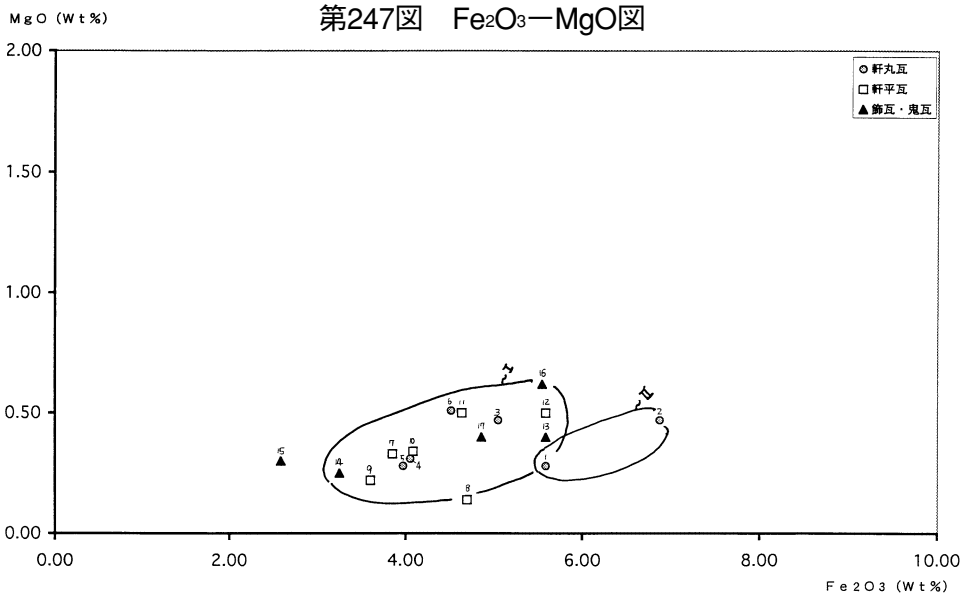
第245図　Qt－Pl図



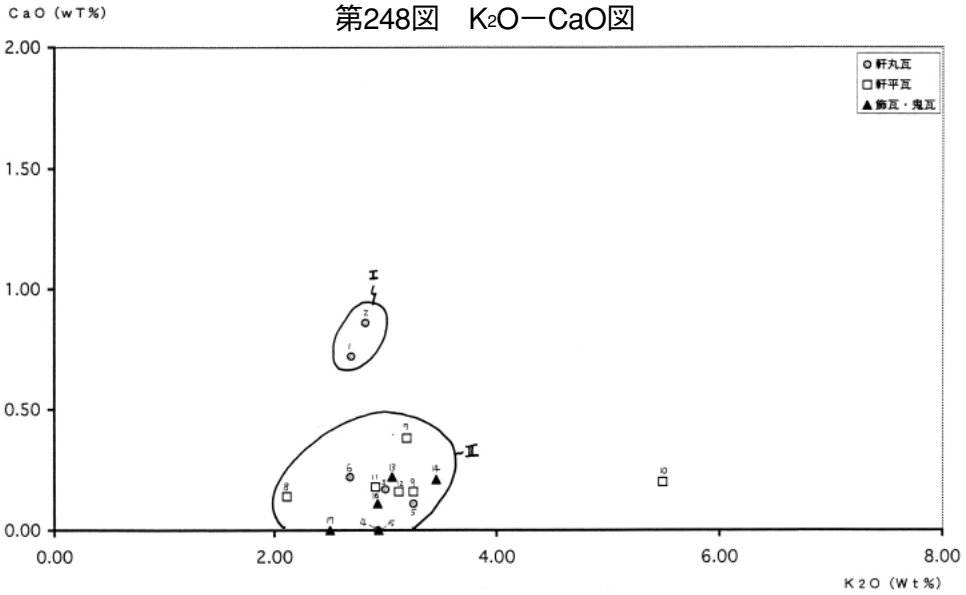
第246図　SiO_2－Al_2O_3図



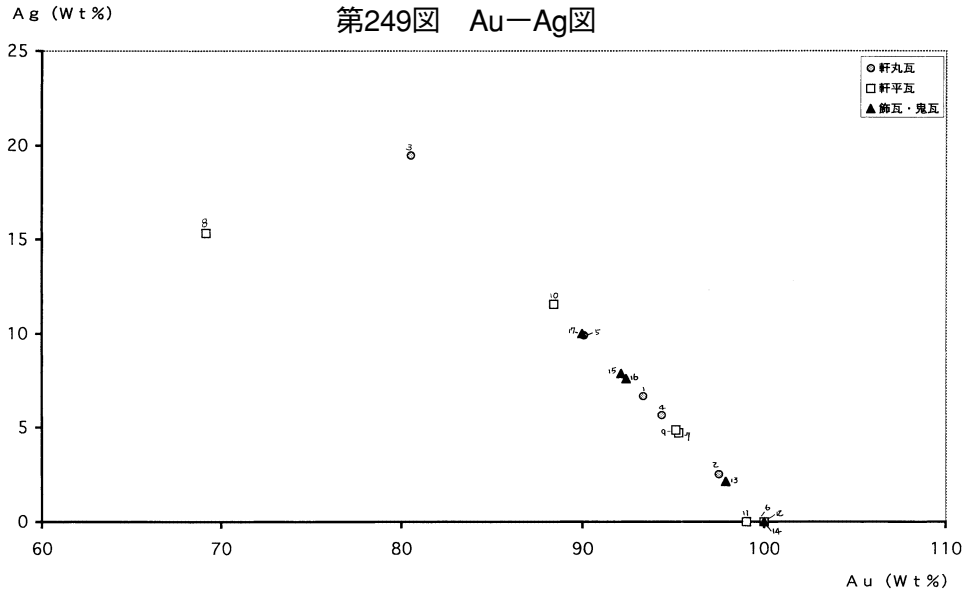
第247図　Fe_2O_3—MgO図

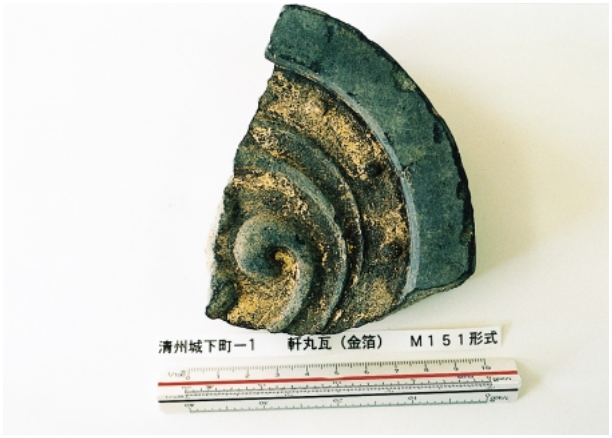


第248図　K_2O—CaO図



第249図　Au—Ag図









試料No.1



試料No.2







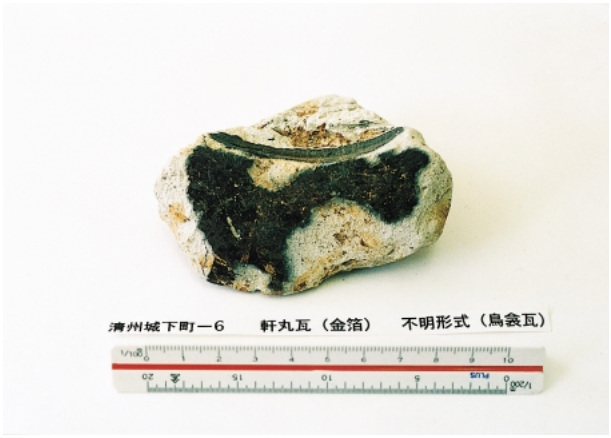
試料No.3



試料No.4

第250図　胎土・金箔分析試料（1）







試料No.5



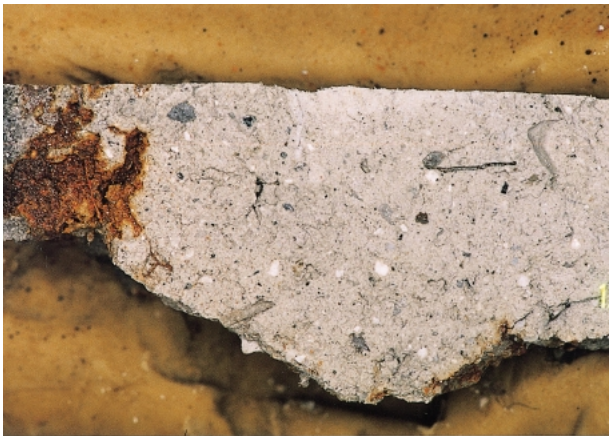
試料No.6







試料No.7



試料No.8

第251図　胎土・金箔分析試料（2）



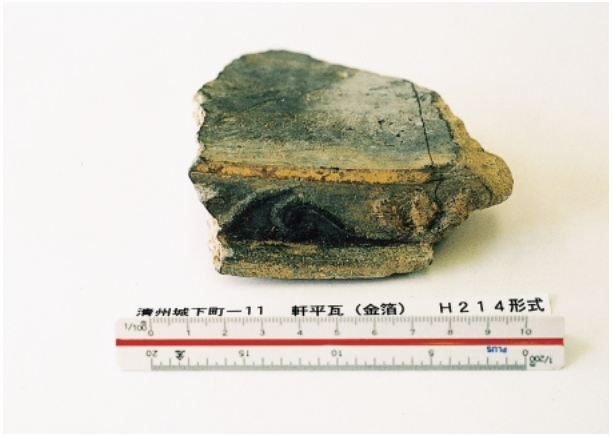




試料No.9



試料No.10







試料No.11



試料No.12

第252図　胎土・金箔分析試料（3）





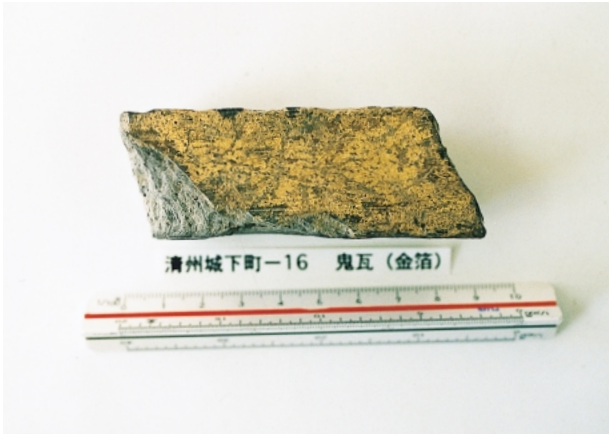


試料No.13



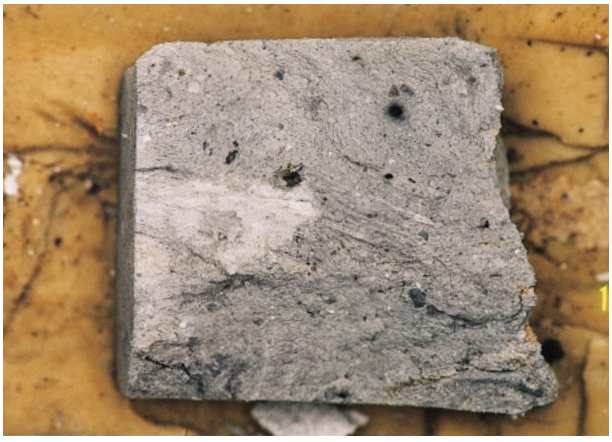
試料No.14







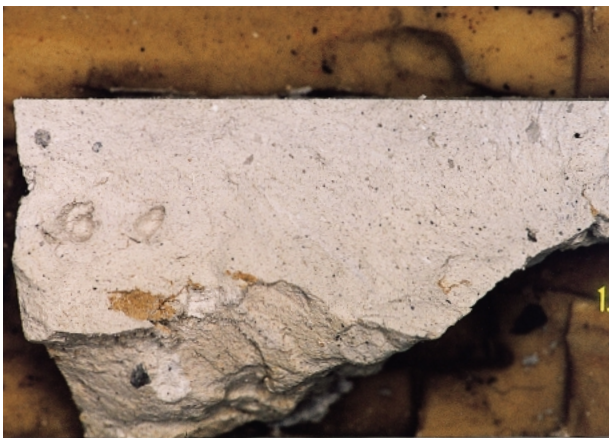
試料No.15



試料No.16

第253図　胎土・金箔分析試料（4）





試料No.17

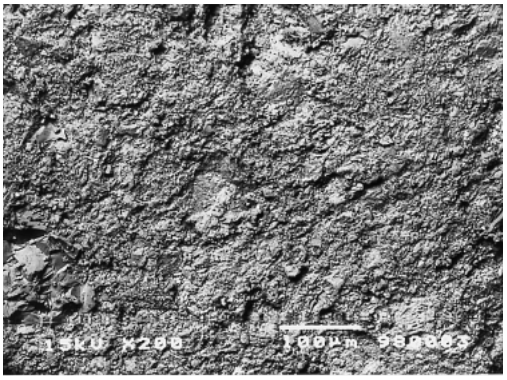
第254図　胎土・金箔分析試料（5）

試料No.	図版番号	種別	型式	金箔押の部位	タイプ分類
清洲城下町-1	7-697	軒丸瓦（金箔押）	M151型式	凹部金箔	A
清洲城下町-2	7-696	軒丸瓦（金箔押）	M151型式	凹部金箔	A
清洲城下町-3		軒丸瓦（金箔押）	M122型式	周縁区金箔？	A
清洲城下町-4		軒丸瓦（金箔押）	M161型式	凹部金箔	A
清洲城下町-5		軒丸瓦（金箔押）	不明型式	凹部金箔	A
清洲城下町-6		軒丸瓦（金箔押）	不明型式	区金箔	A
清洲城下町-7	3237	軒平瓦（金箔押）	H102b型式	周縁区金箔	A
清洲城下町-8		軒平瓦（金箔押）	H101型式	外区金箔	A
清洲城下町-9		軒平瓦（金箔押）	H112型式	中心飾り金箔	A
清洲城下町-10		軒平瓦（金箔押）	H213型式	中心飾り金箔	A
清洲城下町-11		軒平瓦（金箔押）	H214型式	中心飾り及び外区金箔	A
清洲城下町-12		軒平瓦（金箔押）	H331型式	中心飾り及び外区金箔	A
清洲城下町-13		飾瓦（金箔押）	A1類	突部金箔	A
清洲城下町-14	2469	飾瓦（金箔押）	A4類	突部金箔	A
清洲城下町-15		飾瓦（金箔押）	A5類	突部金箔	A
清洲城下町-16		飾瓦（金箔押）		突部金箔	A
清洲城下町-17		鯱瓦（金箔押）		口角部金箔？	A

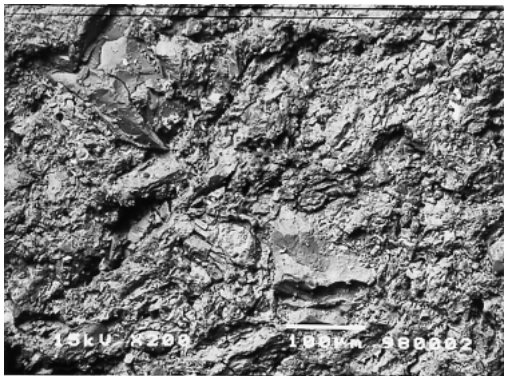
第37表　胎土・金箔分析試料一覧表



試料No.1



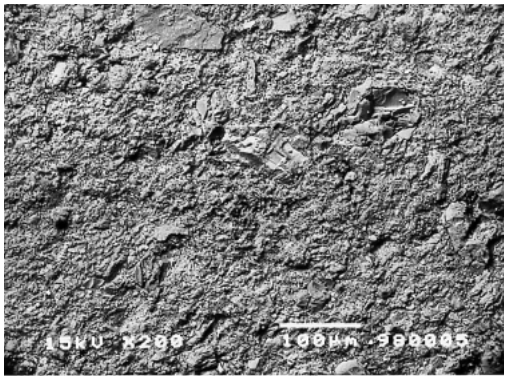
試料No.3



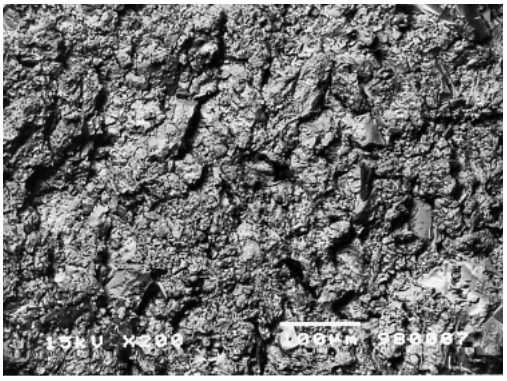
試料No.2



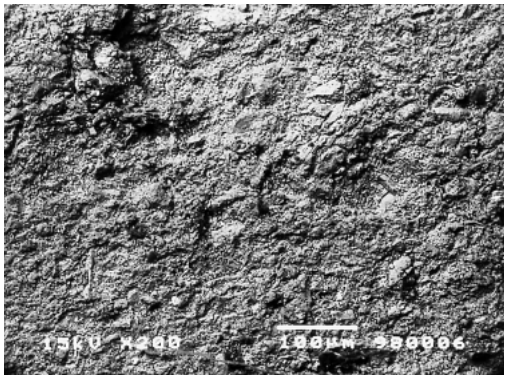
試料No.4



試料No.5



試料No.7

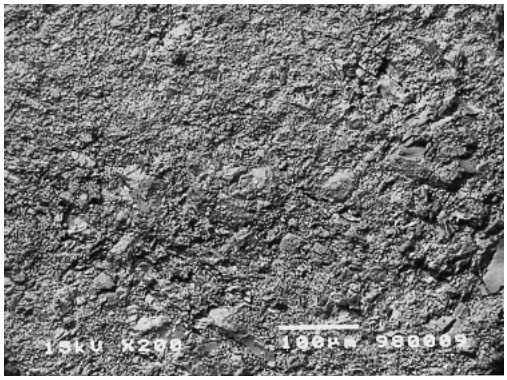


試料No.6

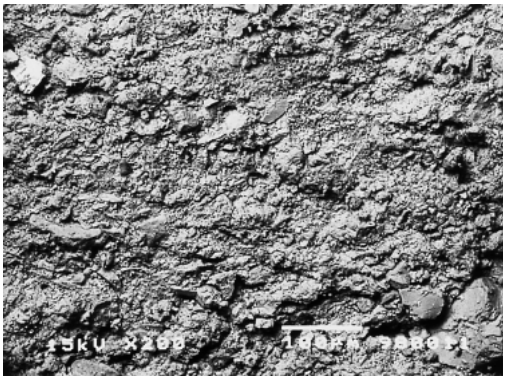


試料No.8

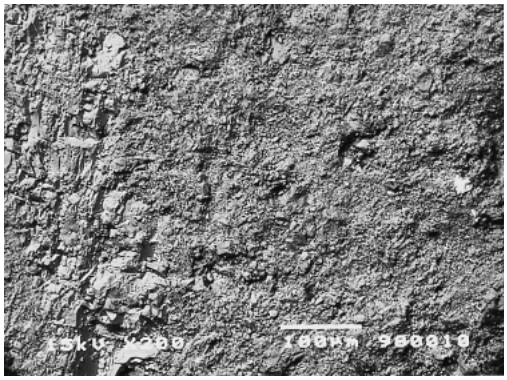
第255図　胎土の顕微鏡写真（1）



試料No.9



試料No.11



試料No.10



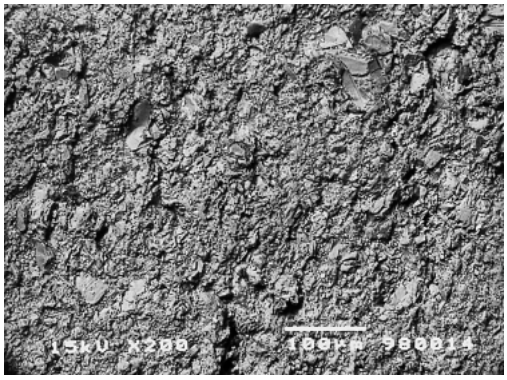
試料No.12



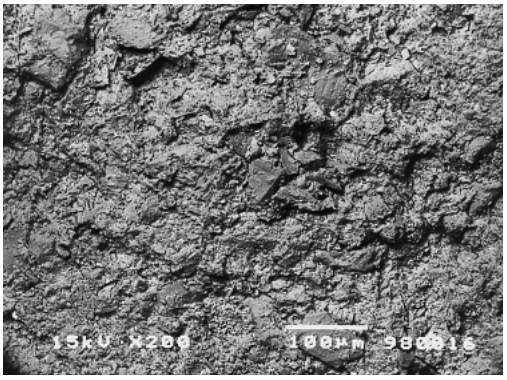
試料No.13



試料No.15

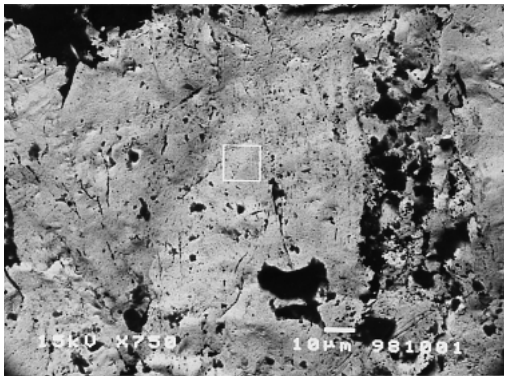


試料No.14

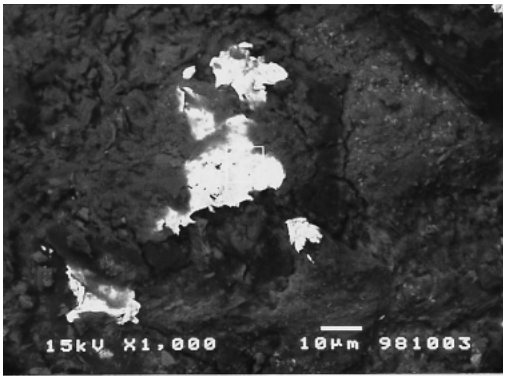


試料No.16

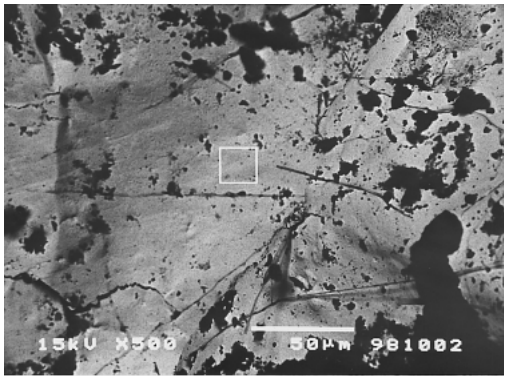
第256図　胎土の顕微鏡写真（2）



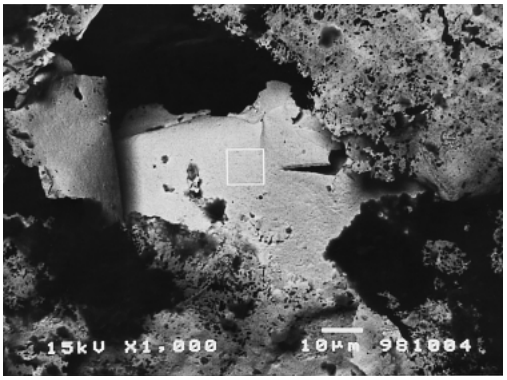
試料No.1



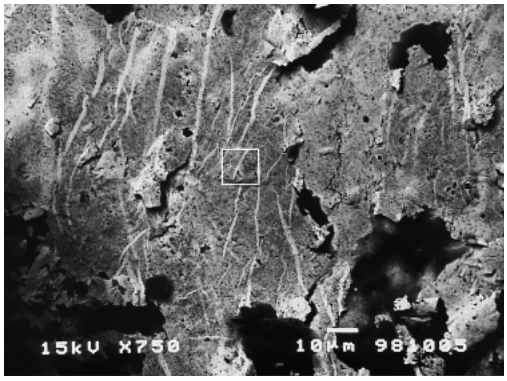
試料No.3



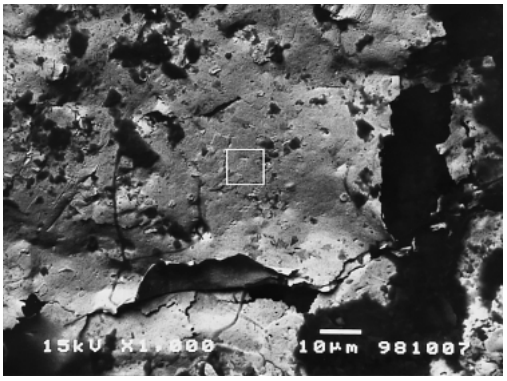
試料No.2



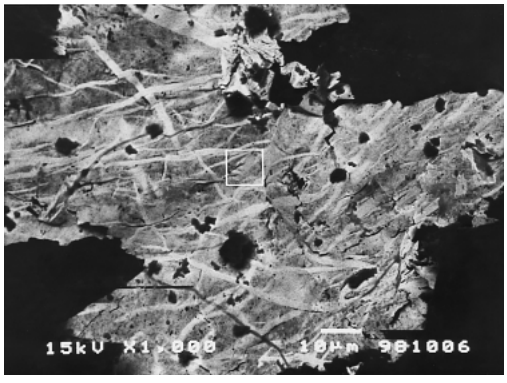
試料No.4



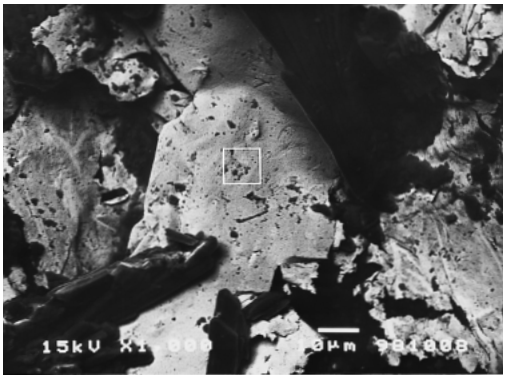
試料No.5



試料No.7

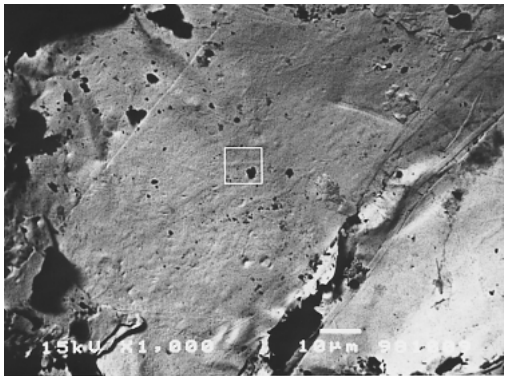


試料No.6

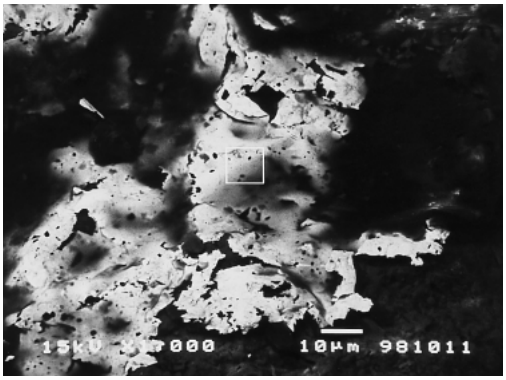


試料No.8

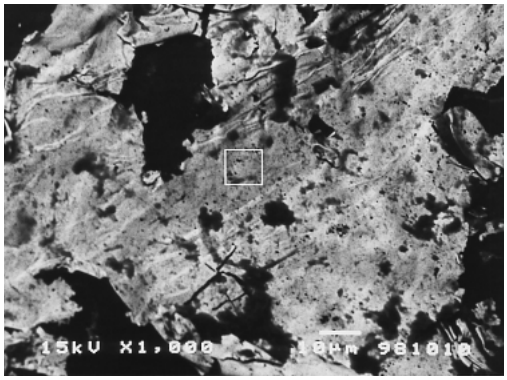
第257図　金箔の顕微鏡写真（1）



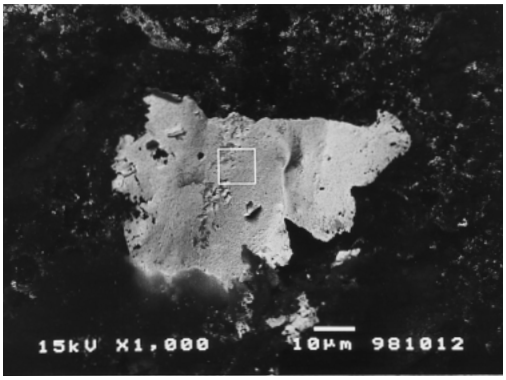
試料No.9



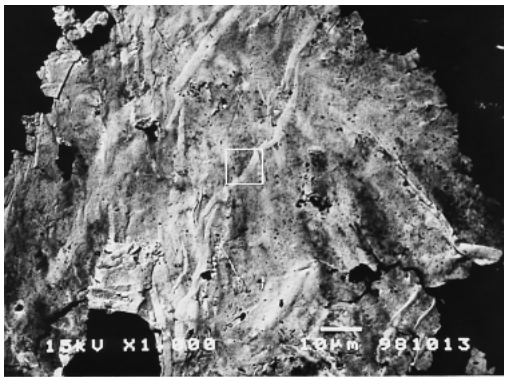
試料No.11



試料No.10



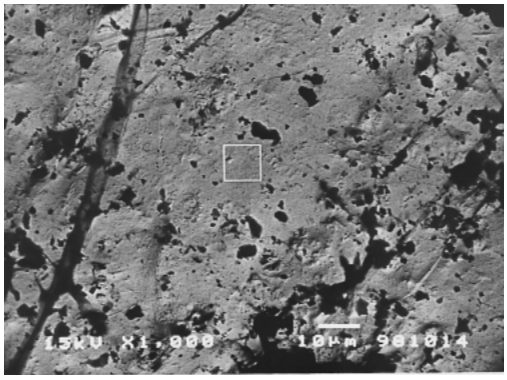
試料No.12



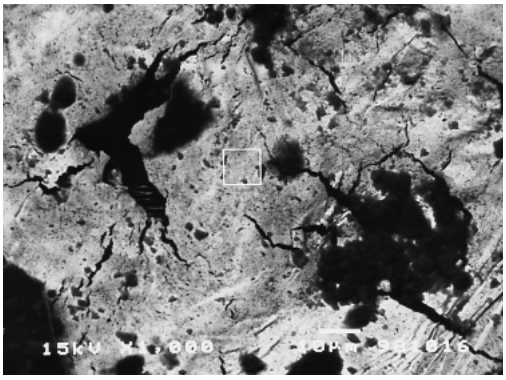
試料No.13



試料No.15



試料No.14



試料No.16

第258図　金箔の顕微鏡写真（2）

終了

（Ⅴ）清洲城下町遺跡から産出した貯穀性昆虫とその意義

森　勇一

1．はじめに

清洲城下町遺跡は、庄内川水系五条川の河畔に位置し、標高約5mの自然堤防帯に立地している。行政的には、愛知県西春日井郡清洲町の中心部のほぼ全域、および同新川町・春日町の一部が含まれる。

本遺跡は、1586（天正13）年に発生した天正地震の影響を強く受け、この地震を契機に城館の大改修が行われた。そのため、整地層を境に遺物包含層が二分され、下半部に清洲城下町遺跡前期（主に16世紀前半）、上半部に同後期（16世紀後半～17世紀前半）の地層が堆積している。そして、これらを宿場町として栄えた時期（江戸時代前期～後期）の遺物包含層が被覆している。

2．分析試料

昆虫化石の分析試料は、1999年3月に実施された五条川左岸の2調査区（Ⅰ KJ99A区およびⅠ KJ99B区）より採取した（第259図）。

試料1は、五条川にかかる長者橋北側の99A区内の一辺約2mの方形土坑（SK248）を埋積する腐植質シルト層中より採取したものである。本調査区からは、畑作地と推定される畝状遺構を伴う江戸時代前期の遺物包含層が検出されており、この下位より用途不明の方形ないし円形の土坑と大小の溝跡が多数確認されている。なお、昆虫分析試料を採取した地層からは、中世後期（16世紀末～17世紀初頭）の遺物が発見されている。

試料2は、長者橋を挟んで南側の99B区南端の幅約3mの溝（SD20）を埋積する植物片混じり砂質シルト層より検出されたものである。本溝からも中世後期（16世紀後半）の考古遺物が確認されている。

分析試料の湿潤重量は、試料1が3.2㎏、試料2が4.8㎏であった。昆虫化石は、流水下で水洗篩別法により抽出した。なお、試料2については、一部ブロック割り法を併用し、同定は1点ずつ顕微鏡下で現生標本と比較しながら実施した。

3．結　果

分析試料からは、試料1より246点、試料2より132点、計378点の昆虫化石が検出された（表1）。なお、これらの産出点数はいずれも節片数ないし破片数を示したものであり、生息していた当時の個体数を表していない。

試料ごとの特徴種をみると、試料1では、コクゾウ（ムシ）*Sitophilus zeamais*（56点）、ノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis*（33点）を中心に、コクヌスト *Tenebroides mauritanicus*（5点）、コクヌストモドキ *Tribolium castaneum*（4点）など、貯蔵された穀物を加害する貯穀性昆虫を多産した。ほかに、食肉性ないし雑食性の地表性歩行虫であるオサムシ科 Carabidae（28点）や、ハネカクシ科 Staphylinidae（29点）などが認められ、アリ科 Formicidae が頭部を中心に計11点見いだされた。

試料2では、マメ科植物をはじめ各種畑作物や果樹などを加害するヒメコガネ *Anomala rufocuprea*（29

点）や、ヒメコガネを含む分類群であるサクラコガネ属 *Anomala* sp.（8点）、同じくコガネムシ科 Scarabaeidae（6点）などの食植性昆虫と、地表性で食糞性甲虫であるエンマコガネ属 *Onthophagus* sp.（10点）、地表性で主に双翅目の幼虫などを捕食するエンマムシ科 Histeridae（5点）が比較的多く検出され、これにコガムシ *Hydrochara affinis*（6点）、ガムシ *Hydrophilus acuminatus*（5点）、マメガムシ *Regimbartia attenuata*（5点）、ゲンゴロウ科 Dytiscidae（5点）などの水生昆虫が伴われた。

4．考　察

試料1

筆者は、これまで15年間にわたって日本各地の先史～歴史時代の遺物包含層中より昆虫化石を抽出し、出現昆虫の組成変化から、気候変動や農耕の歴史、人為による自然改変の様子などについて調査・報告してきた（森、1994・1997a・1999ほか）。しかるに、従来の研究成果では、清洲城下町遺跡から得られたような顕著な貯穀性昆虫は確認されたことがなかった。

試料1より最も多く発見されたコクゾウは、体長2.3～3.5mm（平均2.8mm）、褐色ないし濃褐色のオサゾウムシ科 Rhynchophoridaeに属する穀物の重要害虫である。清洲城下町遺跡から産出した化石標本は、鞘翅の黄色斑紋が大型で輪郭が不明瞭であり、前胸背板の形状が前方に向かって狭まるなどの特徴（安富・梅谷、1983）から、コクゾウに同定され、また近縁種のココクゾウ *Sitophilus orizae* とも識別される。両種とも分布は全世界に及び、日本ではココクゾウがコクゾウより少なく、世界的にはむしろコクゾウの方が少ないとされる（安富・梅谷、1983）。コクゾウはコメやトウモロコシ、ココクゾウはコムギでよく生育するとされる。三重県一志郡嬉野町の津村善博氏（三重県立博物館次長）宅では、収穫した米を300Kg入りのブリキ缶に玄米の状態で保存しているが、乾燥が十分でない場合や湿気の多いところに保管するとコクゾウが発生しやすいという（第261図写真1）。秋に収穫した米に、翌年夏すでにコクゾウが現れることがあり、米が古ければ古いほど発生する確率が高いということである。

ノコギリヒラタムシは、ヒラタムシ科 Cucujidaeに属し、穀粉および菓子などの穀粉加工品の害虫として世界的に知られる（安富・梅谷、1983、日本家屋害虫学会編、1995）。体長3mm内外、褐色で光沢がなく、鞘翅全面に黄褐色の短毛を密布する。前胸背板の両側縁に、ノコギリのような歯状突起を有する特徴から識別される。清洲城下町標本は、前胸背板の特徴や、鞘翅の形状・鞘翅表面の黄褐色の短毛などにより同定される。本種は完全な穀粒では生育できず、倉庫などでは隅にたまった穀粉やゴミなどの中に見いだされるという（安富・梅谷、1983）。前述の津村氏宅から採集されたコクゾウの標本約100頭の中に、計4頭のノコギリヒラタムシが混じっているのを確認することができた（第261図写真2）。

試料1より計5点産出したコクヌストは、コクヌスト科 Trogositidaeに属し、濃褐色で体長は6～10mmである。成虫、幼虫ともに穀類や他の穀類害虫を食べて生活する。日本全土をはじめ、全世界に広く分布する。

コクヌストモドキは赤褐色、体長3～4mmで前種より小型である。試料中より4点見いだされた。本種は穀粉害虫として最も普遍的な種類とされ、小麦粉などの穀粉をはじめ、菓子・パン類などの害虫として世界的に知られている。成虫は倉庫内では、木材や麻袋・紙袋の下で越冬する（日本家屋害虫学会編、1995）。愛知県一宮市千秋町の中村嘉彦氏宅では、玄関横の納戸に8俵（480Kg）入りのブリキ缶が計4缶あり、これらに収穫後の玄米が保管してあるが、5月末から6月下旬にかけよくコクヌストモドキ（第261図写真3）が発生するという。中でも発生の

多い1缶は風呂場に近く、一年を通じ温度・湿度ともに高い傾向にある（第261図写真4）。同じ缶で盛夏のころコクゾウの発生も認められるとのことである。筆者が訪れた2002年6月21日には、昨年収穫した米が缶の底付近にわずかに残っており、これを掻き出すとコクヌストモドキが米粒1000粒に1頭ぐらいの割合で検出された。なお、貯蔵缶内には米粒以外に穀粉も認められた。

中世後期の清洲城下町遺跡の土坑（SK248）内より、多種類の貯穀性昆虫が検出されたことから、本調査区周辺にかれらのエサとなる穀類が存在したことは確かだろう。昆虫化石を産出した土坑そのものが、穀物貯蔵と関わる遺構であった可能性も否定できないが、おそらく土坑が一種のホールトラップのような役割を果たし、風などの営力により生きたままあるいは死後土坑内に落下した昆虫が今日までその化石片をとどめたものと考えられる。とすれば、清須城下町遺跡の本調査区周辺のどこかに穀物を多量に蓄えた施設があり、そこが貯穀性昆虫の発生源となっていたことが容易に想像される。

清須城下町は「関東の巨鎮」といわれ、一説に5万人とも10万人ともいわれる巨大な人口を擁する中世都市であったとされる。こうした人々の生活には、多量の食糧とそれらを運搬する陸路や水路、食糧貯蔵施設の存在が不可欠だったに違いない。しかし、これまでの調査では、中世後期のころ、99A調査区はもとより、清洲城下町遺跡一帯にどのような建物が存在し、どのような町並みが展開していたか、具体的に明らかにする資料は著しく乏しかった。

一方、江戸時代に描かれたとされる尾張名所図会によれば、五条川に面した本調査区付近にはクラヤシキという記述があり、今回得られた貯穀性昆虫の存在からこうした蔵屋敷に併設された穀物倉庫が実在した可能性が指摘され、中世都市「清須」の実像を解明するうえで重要である。

清洲城下町遺跡から最も多く産出したコクゾウは、玄米ないし白米の穀粒に発生することから、本遺跡内に脱穀後の米が貯蔵されていたことは確かであろう。また、ノコギリヒラタムシやコクヌストモドキは、各種穀物の穀粉に由来することより貯蔵された穀物に穀粉化したものが存在したか、さもなくば何らかの穀粉が貯蔵されていた可能性も考えられる。

試料2

昆虫化石の検出点数が必ずしも多くなく、そこから多くの情報を引き出すことは困難であるが、清洲城下町遺跡の中世後期の溝（SD20）内から検出された昆虫群集は、従来濃尾平野内の大毛沖遺跡（森、1996）や大毛池田遺跡（森、1997b）などをはじめ、同時代（中世）における日本各地の溝や土坑中より得られた群集組成とよく共通するものであるといえる（森、1999）。

すなわち、成虫がマメ科植物や果樹・各種畑作物の葉を加害し、幼虫がこれらの根を食害する畑作指標昆虫としてのヒメコガネの多産は、わが国の中世（鎌倉～室町時代）の昆虫群集の重要な特徴の一つである（森、1997a）。そして、ほぼ同様の生態を有するマメコガネやサクラコガネ属が本遺跡の昆虫群集に伴われたことは、こうした共通性をさらに補強するものであろう。

畑作指標昆虫が、清洲城下町遺跡の溝中から産出したことは、畑作物が遺跡周辺に植栽されていたことを強く示唆するものであるが、同時に中世の人々が山林開発を精力的に行ったことの反映であるとも考えられる。このような食植性昆虫は、本来、山林や雑木林内の林縁部を構成する小灌木などの葉を加害していたものであるが、この時期、人々が人家周辺に果樹や畑作物を多数植栽したことにより、これらを加害するようになったと推定される。

また、食植性・水生昆虫であるガムシやコガムシ・マメガムシなどの産出からは、溝内に水生植物が繁茂していた可能性が考えられる。

5．おわりに

本報告を草するにあたり、以下の皆さんにお世話になった。記して感謝申し上げる。廣田早和子氏（信州大学）・津村善博氏（三重県立博物館）・中村嘉彦氏（営農家）・牧田健男氏（愛知県立明和高等学校）

文　献

森　勇一1994「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元」『第四紀研究、 33（5)』

森　勇一1996「愛知県一宮市大毛沖遺跡から得られた昆虫群集について」『大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集

森　勇一1997a「虫が語る日本史－昆虫考古学の現場から－（2)」『インセクタリウム、2』

森　勇一1997b「畑作農村地帯を特徴づける愛知県大毛池田遺跡（中世）の食植性昆虫について」『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集

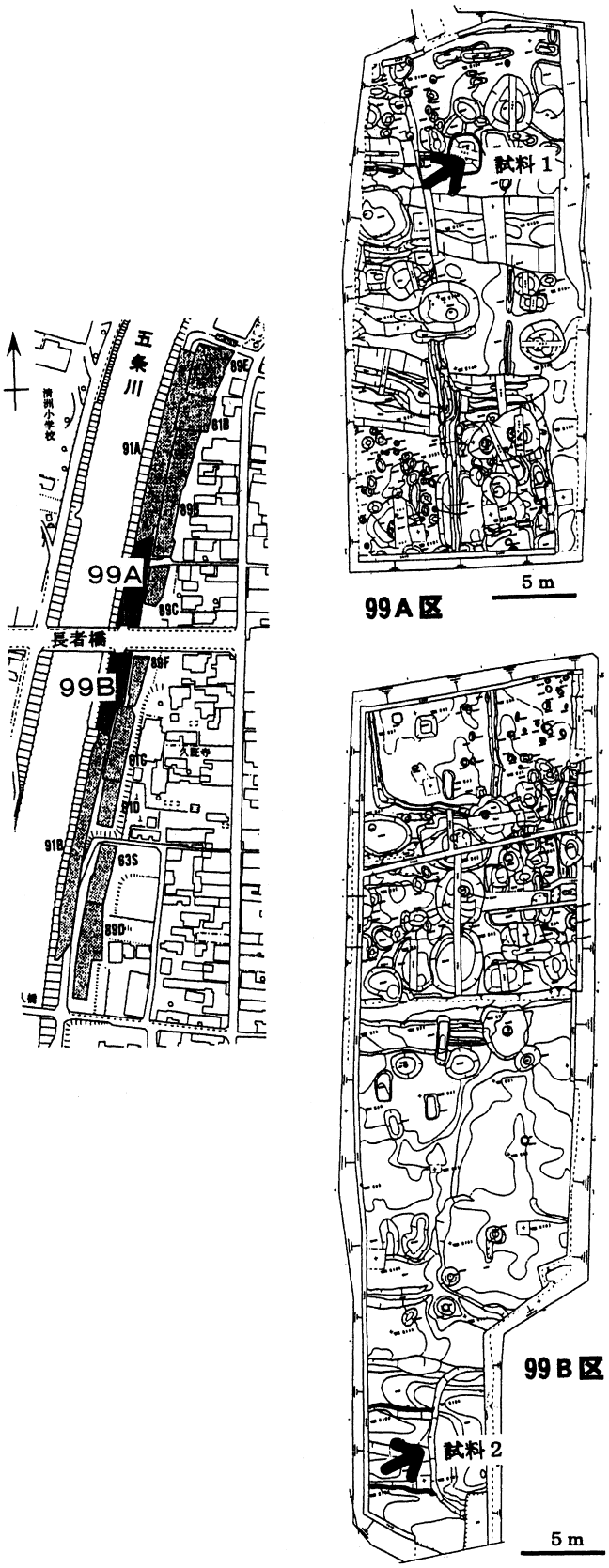
森　勇一1999「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史」『歴博国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」』国立歴史民俗博物館研究報告第81集、国立歴史民俗博物館

森　勇一2000「愛知県清洲城下町遺跡（中世）から産出した貯穀性昆虫について」『家屋害虫（日本家屋害虫学会誌)、22』

森　勇一2001「先史～歴史時代の地層中より産出した都市型昆虫について」『家屋害虫（日本家屋害虫学会誌)、23』

日本家屋害虫学会編1995『家屋害虫事典』井上書院、東京

安富和男・梅谷献二1983『原色図鑑衛生害虫と衣食住の害虫』全国農村教育協会、 東京



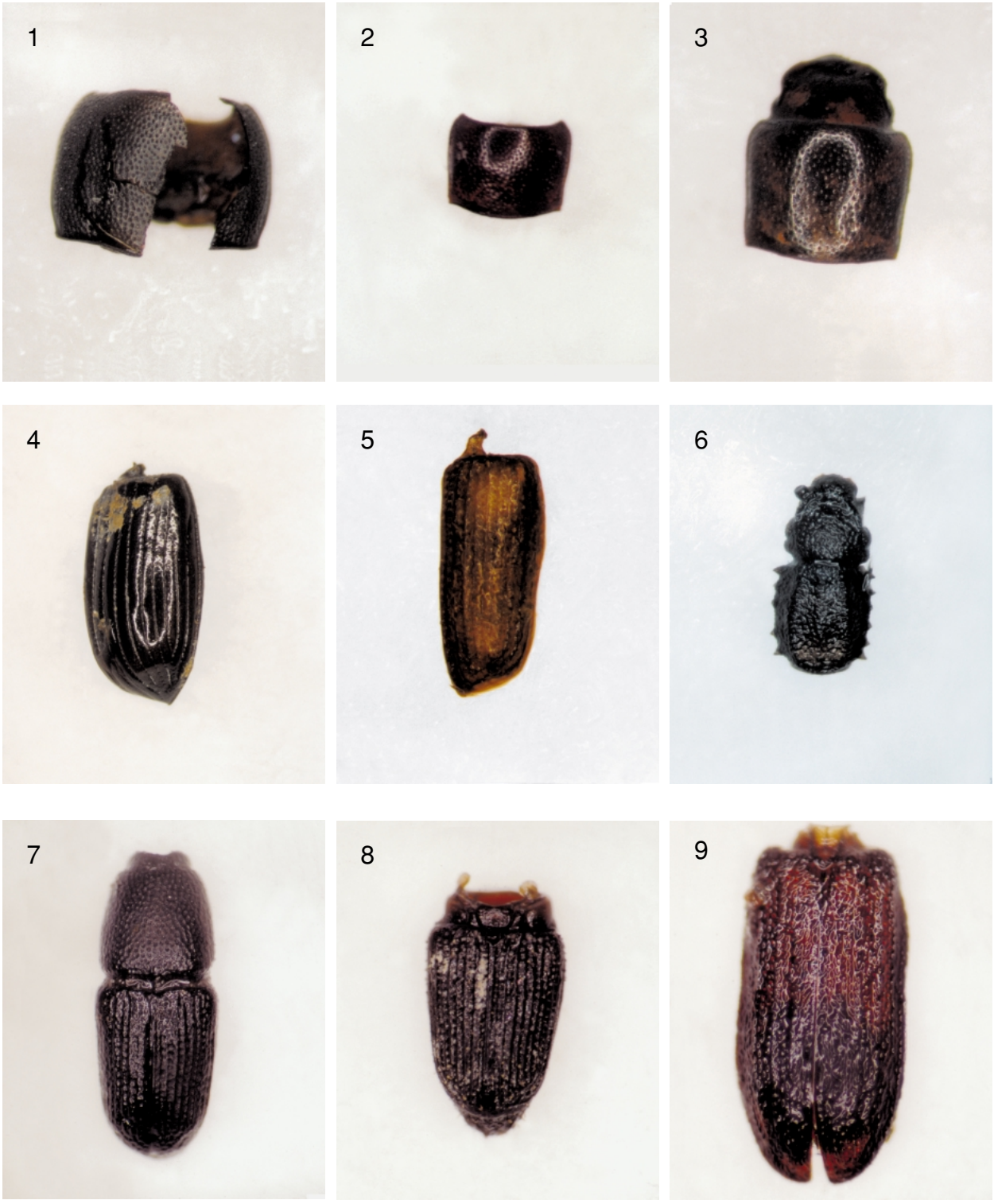
第259図　昆虫分析試料の採取地点

Fig.1　Collecting points of insect analytical samples

第 38 表　清洲城下町遺跡出土の昆虫化石分析結果

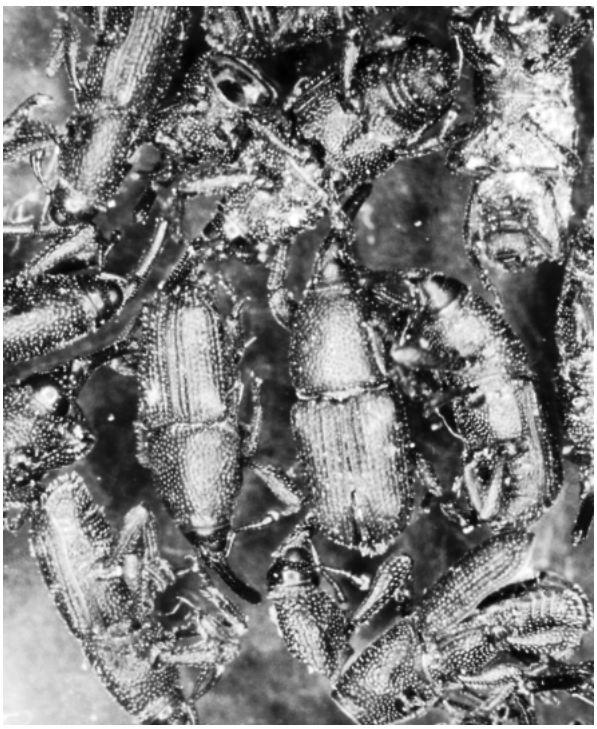
生　態		和　　名	学　　名	SK248	SD20	総　計
水生	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae	W1 A2	W1 A1	5
		ケシゲンゴロウ族	Hyphydrini		W2	2
		オオミズスマシ	*Dineutus orientalis* Modeer		W1	1
		コガシラミズスマシ	*Peltodytes intermedius* Sharp		T1	1
	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae	W1	T1 L2	4
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky		A2 L3	5
		コガムシ	*Hydrochara affinis* Sharp		W3 L3	6
		ヒメガムシ	*Sternolophus rufipes* Fabricius		L3	3
		マメガムシ	*Regimbartia attenuata* Fabricius		W5	5
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* Walker	P1	P2	3
湿地性	食植性	ネクイハムシ亜科	Donaciinae	W2		2
地表性	食糞性 食屍性	エンマコガネ属	*Onthophagus* spp.		W1 A2 L7	10
		マグソコガネ	*Aphodius rectus* Motschulsky	W2		2
		エンマムシ科	Histeridae		P1 A1 L3	5
	雑食性	オサムシ科	Carabidae	H1 M25 A2	W2 M2 H2 P1 T1 A2 L1	39
		ゴミムシ亜科	Harpalinae	O1		1
		ナガゴミムシ属	*Pterostichus* sp.		P1	1
		ミズギワゴミムシ属	*Bembidion* sp.		W1	1
		モンコミズギワゴミムシ属	*Tachyura* sp.	W1		1
		ナガヒョウタンゴミムシ	*Scarites terricola pacificus* Bates		W1	1
		ヤマトトックリゴミムシ	*Lachnocrepis japonica* Bates		W1	1
		ハネカクシ科	Staphylinidae	W6 P3 A18 T2	W2 T1	32
		ニジゴミムシダマシ	*Tetraphyllus lunuliger* Marseul	W3		3
陸性	食植性	コガネムシ科	Scarabaeidae	L2	W2 H1 A1 L2	8
		サクラコガネ属	*Anomala* sp.		H1 A1 L6	8
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky	W3	W11 H2 S1 P2 T2 A2 L9	32
		アオドウガネ	*Anomala albopilosa* Hope	W1		1
		コガネムシ	*Mimela splendens* Gyllenhal		L1	1
		マメコガネ	*Popillia japonica* Newmann		L1	1
		ヒメカンショコガネ	*Apogonia amida* Lewis		W1	1
		クロコガネ	*Holotrichia kiotoensis* Brenske		L1	1
		カミキリムシ科	Cerambycidae		L2	2
		クワガタムシ科	Lucanidae		T1	1
		ゾウムシ科	Curculionidae	W4 H2 A1	W1 H2 L3	13
		コクゾウムシ	*Sitophilus zeamais* Motschulsky	W26 H14 P7 A5 PW3 一体分1		56
		ヒラタムシ科	Cucujidae	W1		1
		ノコギリヒラタムシ	*Oryzaephilus surinamensis* Linnaeus	W16 H7 P9 T1		33
		コクヌスト	*Tenebroides mauritanicus* Linnaeus	P1		1
		コクヌストモドキ	*Tribolium castaneum* Herbst	P2		2
		ホソヒメコクヌストモドキ	*Lyphia exigua* Mauseul	HP1		1
		キクイムシ科	Scolytidae	W1		1
		コメツキムシ科	Elateridae		W1	1
		ハムシ科	Chrysomelidae	W1	A1 L1	3
		不明甲虫	Non identified beetles	W9 H5 M1 P3 T1 A4 L4 O16	P1 T1 L3 O5	54
		アリ科	Formicidae	H7 T2 A2		11
		ハエ目	Diptera	A1		1
		ハチ目	Hymenoptera	A2		3
	総　　計			239		371

（検出部位凡例）
W(Wings)；鞘翅　H(Head)；頭部　T(Thorax)；胸部　A(Abdomen)；腹部　P(Pronotum)；前胸背板
S(Scutellum)；小楯板　L(Legs)；腿脛節　M(Mandible)；大腮　O(Other)；部位不明



第 260 図　清洲城下町遺跡から産出した貯穀性昆虫の顕微鏡写真

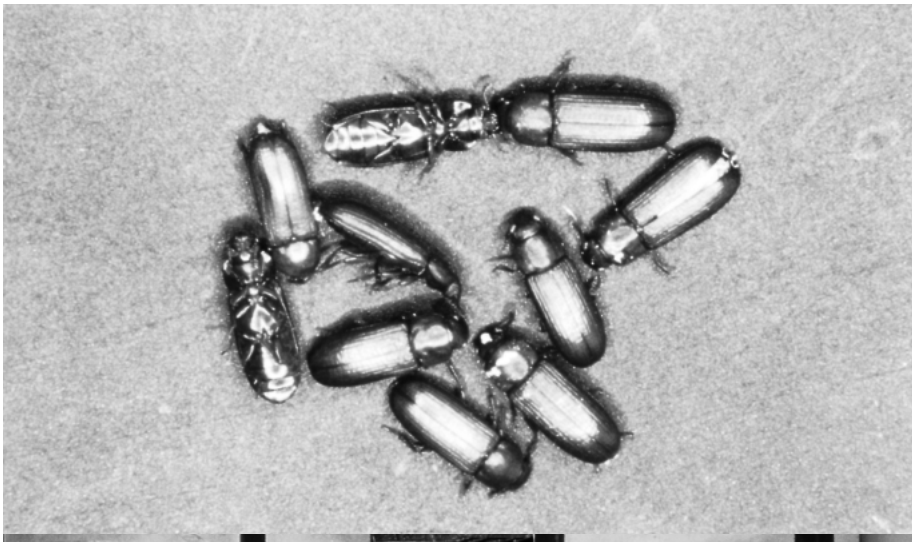
1. コクヌストモドキ　*Tribolium castaneum*（Herbst）　前胸背板　幅0.64mm
2. コクヌストモドキの仲間　Tribolium genus et species indet.　前胸背板　幅0.38mm
3. ホソヒメコクヌストモドキ　*Lyphia exigua* Mauseul　前胸背板および頭部　幅0.75mm
4. マグソコガネ　*Aphodius rectus* Motschulsky　右上翅　長さ3.6mm
5. コクゾウ　*Sitophilus zeamais* Motschulsky　右上翅　長さ1.75mm
6. ノコギリヒラタムシ　*Oryzaephilus surinamensis* Linnaeus　前胸背板および頭部　長さ1.45mm
7. コクゾウ　*Sitophilus zeamais* Motschulsky　左右上翅および前胸背板　長さ3.0mm
8. コクゾウ　*Sitophilus zeamais* Motschulsky　左右上翅　長さ1.8mm
9. ノコギリヒラタムシ　*Oryzaephilus surinamensis* Linnaeus　左右上翅　長さ1.64mm



（写真1）コクゾウの顕微鏡写真
（津村善博氏宅にて採集）



（写真2）ノコギリヒラタムシの顕微鏡写真
（津村善博氏宅にて採集）



（写真3）
コクヌストモドキの顕微鏡写真
（中村嘉彦氏宅にて採集）



（写真4）
玄米貯蔵用のブリキ缶

第 261 図　現在の貯穀性昆虫

終了

（Ⅵ）清須城伝本丸を中心とした土木構築物について
－主として石垣・土台木－

北垣聰一郎

はじめに

北方より南行する五条川（旧清洲川）を中心に広がる自然堤防帯は、近年「清洲城下町遺跡」として発掘調査が継続して行われている。本稿ではこのうち清須城主郭群の一部と推定されている伝「本丸」遺跡を中心とした土木構築物についてふれようと思う。

清須城は15世紀初頭から尾張守護斯波氏の治めるところとされ、16世紀中葉には織田信長の居城となる。その後、織田信忠、同信雄のあと、天正18年（1590）には豊臣秀次が支配した尾張領主となる。そして慶長5年（1600）には徳川氏の領するところとなり（松平忠吉・家康4男）、同15年（1610）徳川義直（家康9男）の名古屋築城、慶長18年（1613）の「清須越」の終了にともない、清須城は事実上、終焉をむかえる。

本稿でとり扱う清須城とは、明治17年に書写された「地籍字分全図」の「清洲村」項のうち、字「古城」相当箇所であり（第262図）、また、17世紀後半の成立と伝える「清須村古城絵図」（蓬左文庫蔵）に描写する清須城をさす。「清須村古城絵図」に注記をほどこす清須城の「本丸」の「水堀」一帯（第263図）が、本稿での調査対象区の94A区と96区（A.B）、そして97C区である（第262図・264図）。

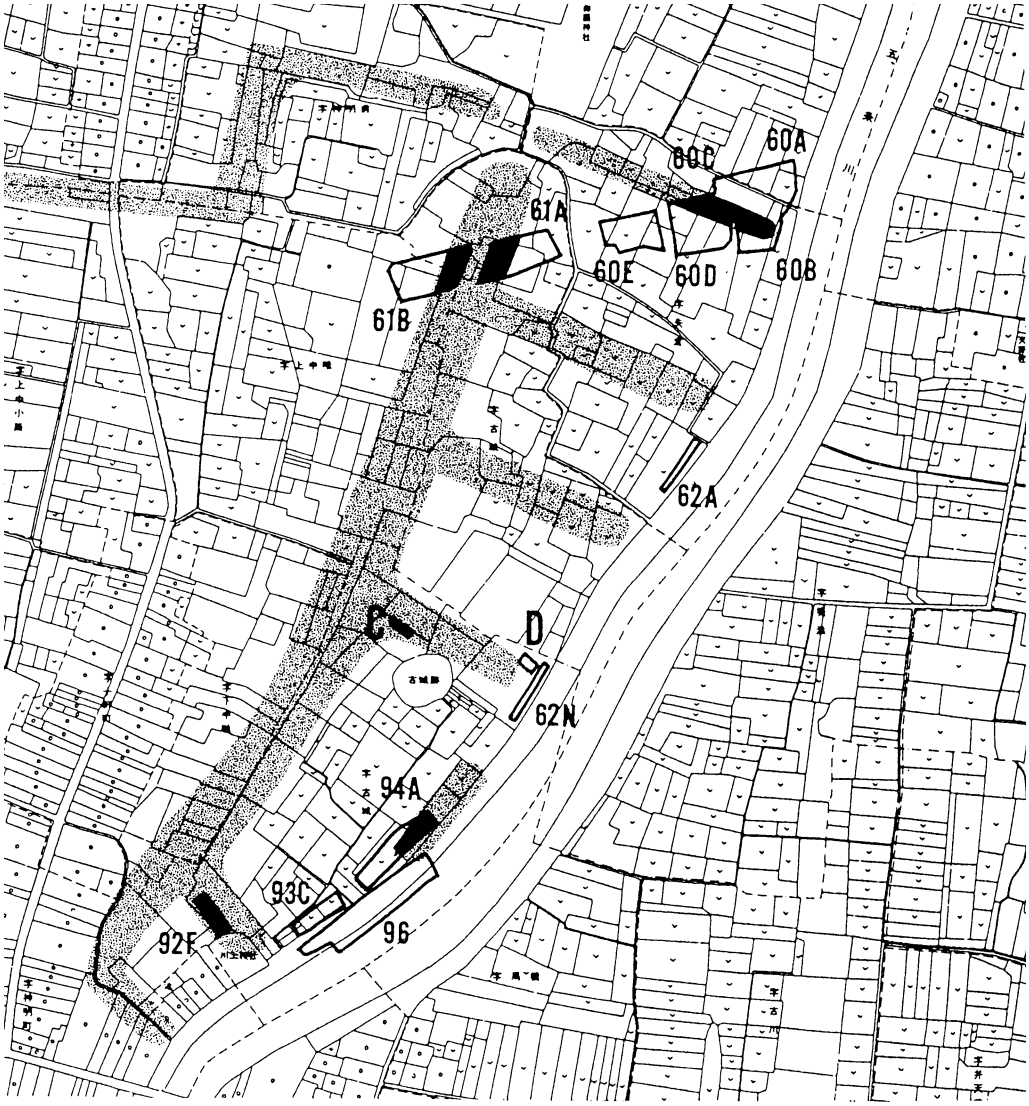
なお、本稿で用いる用語としての「石垣」とは、「石を積む」行為を名詞化した積み方としての「石積み」に対して、一定の技術をもつ構造体の意にとらえている。

1．94A区の土木構造物（石垣、土台木）遺構

第264図によれば、遺構は北東部の94A区（SX01）から南西方向の96区（SX01）（A.B面）にかけての石垣遺構と、その両者の間にある97C区（SD03）の台地状張出し遺構が存在する。まず本節では94A区の土木構造物について述べたい。なお、引用資料は『清洲城下町遺跡Ⅶ』に所収のSX01地点の引用図番号にもとづきながら紹介し、検討を試みる（以下、Ⅶ第○図とする）。なおこのSX01は、城下町期前期の遺構SX02の整地後その一部を利用したものである。

さて、第265図での遺構（A・B・C・D地点をふくめた）の長さは、約27m。C地点からD地点にかけては直角に折れ約5 m、計32mを測る。後述するように、この折れは「入角」（いりずみ）であろう。第265図の状況からみて、A地点の北端から9 mばかり（A-1地点）は、Ⅶ第10図（平面）、11図（立面）によると、幅1 m強、厚さ約80cm程度のぐり石層（5～20cmの粒状）を敷く。その前方に約30cmの空間を残しながら、直径10cm内外、長さ130cm内外の杭木列が不規則な間隔で、土層内に打たれている。注目すべきは、杭木列にそって階段状の溝（内堀状遺構）を通すことであろう。しかも、この内堀状遺構は粘性土を盛る基礎構造成をしたのち、内堀に掘り直すことである。この内堀は第265図のD地点の下層を通り、南方の96区SX01（A面）に到達する。

第265図のA-1地点に接して南へのびるA-2地点の特徴は、基礎造成をした内堀ぞいに不規則に重なりあう杭木列が存在する。またⅦ第13図とⅦ第14図から、水のつかる湿地といった軟弱地盤の石垣構築に使われる1本の短い土台木（長さ2.1m）（Ⅶ第15図）と、それにのる築石（角石、角脇石ではない）が観察できる。もっとも、①～⑧の築石のうち、土台木が確実に支えるのは⑧の築石のみで、Ⅶ第11図での②～⑥の例から、すでに原位置を移動して「浮き石」状を呈している。これは⑤の築石がA-1地点に存在した築石ではなく、A-2地点の土台木にともなう築石であったことにほかならない。A-1地点の裏ぐり石層にともない存在したはずの石垣築石は、何らかの理由から、A-2地点以前に抜き取られた可能性が強い。さらに付け加えるなら、Ⅶ第10図でふれたように、ぐり石層と杭木列との間にみられる約30cm幅の規則的な空間である。これは土台木の存在をうかがわせる。



第262図　清須城本丸地点の発掘調査区位置図（明治17年作成地籍図を利用）（1：5000）



第 263 図　清須村古城絵図（蓬左文庫蔵）と調査区推定地点（矢印）

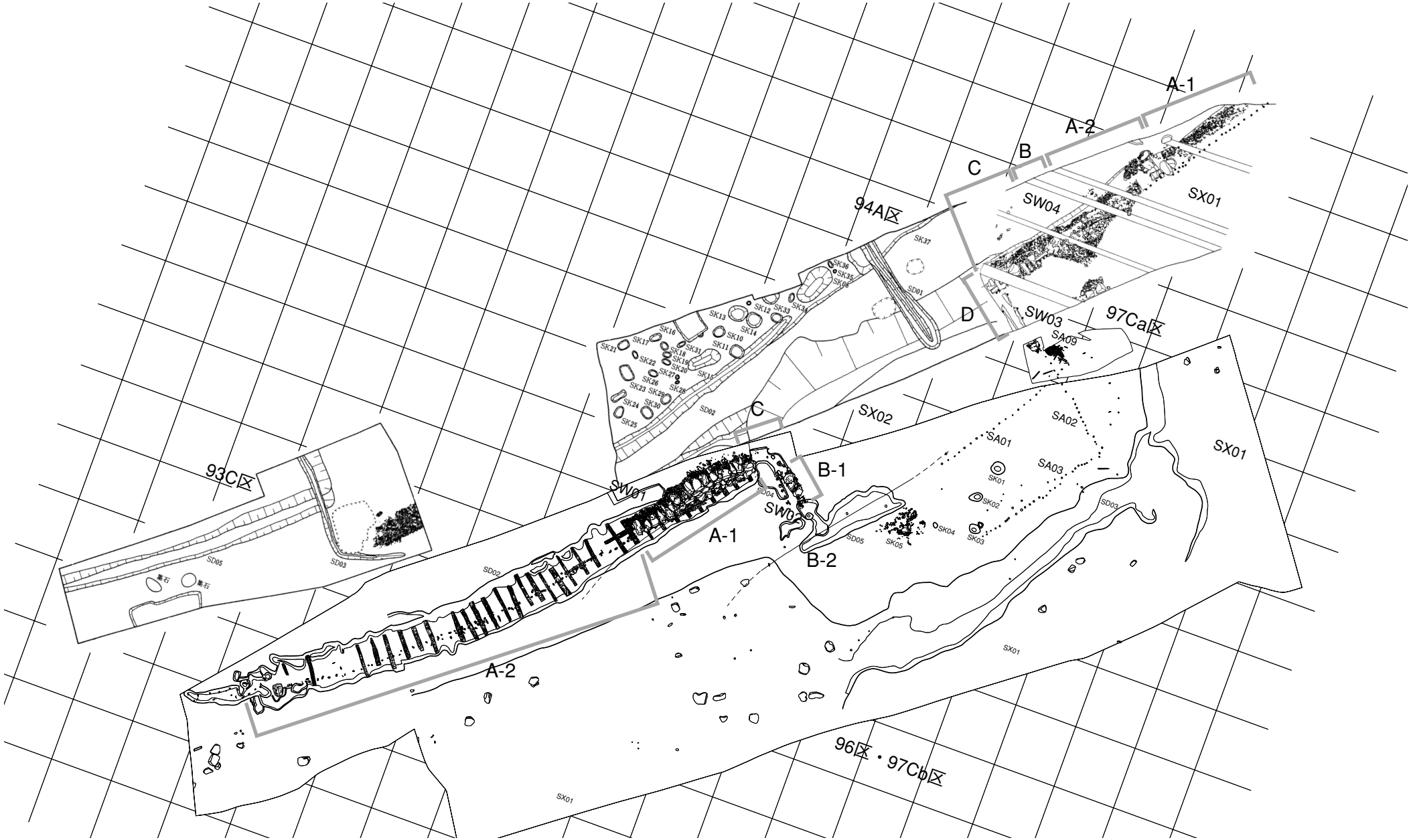
ところで A-2 地点の土台木であるが、本来なら杭木列の後方に並列して配置されてよいものである。逆に杭木列に直交する隅角「出角」状を構成する意識をうかがわせるが、だとすれば、この土台木は後述する C 地点、D 地点に残存する土台木との関係で検討すべきものといえよう（第 265 図）。

また、A-2 地点のトレンチ（第 265 図・Ⅶ第 12 図（a ～ a'））から、次のことが確認できる。ひとつは A-1 地点と同様、内堀はあらかじめ盛土補強による基礎造成が実施されていたことで、なかでも裏ぐり石層は標高 2.4m で基底幅が 1.0m、さらに標高 3.1m まで裏ぐり石層が存在していたことである。

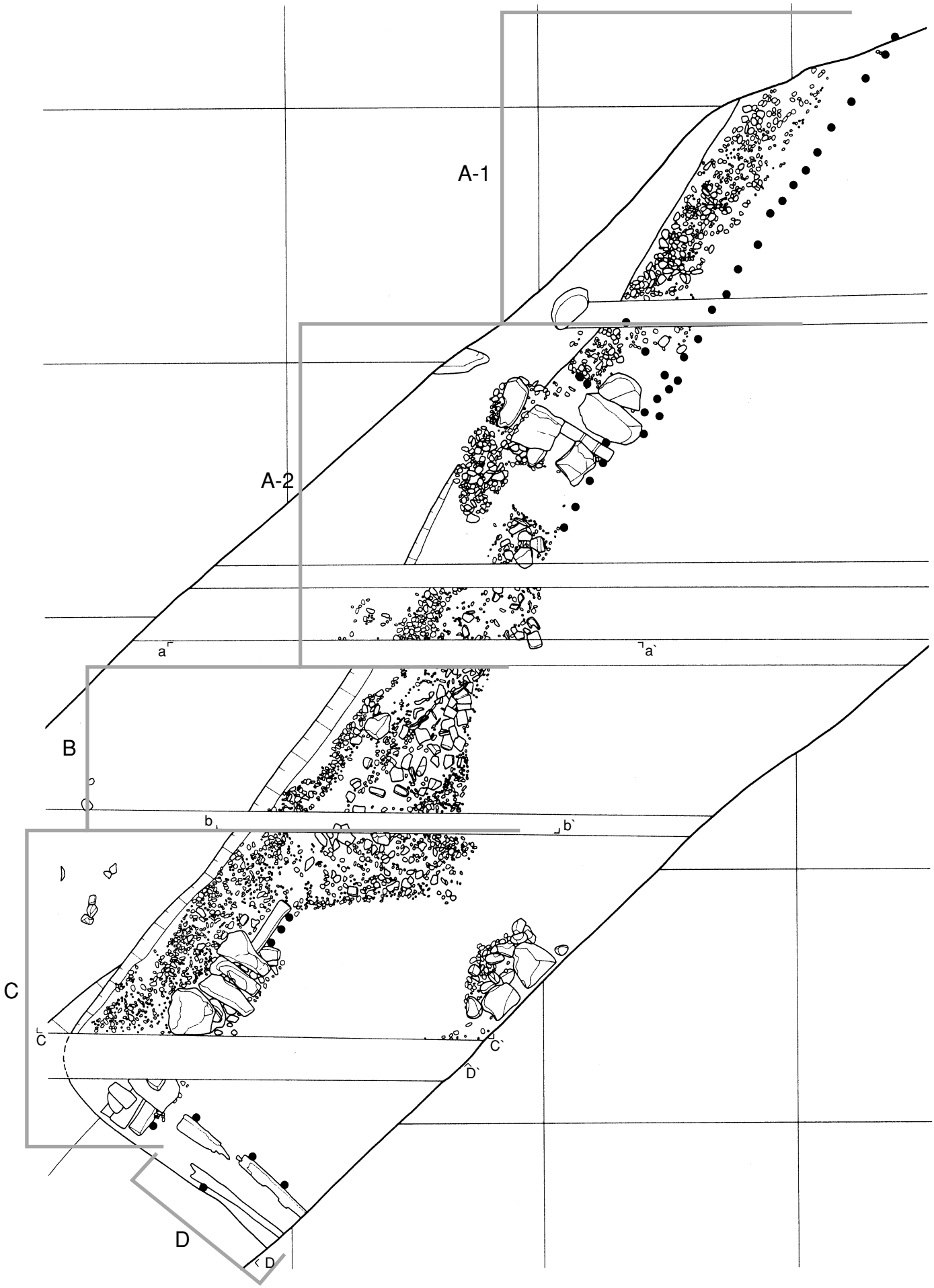
＜B地点＞

A 地点と B 地点との土層の違いは、A 地点が地盤の軟弱さを克服するために基礎造成を実施したことに対し、B 地点では、安定した地山層を確保できたことである（Ⅶ第 16 図）。裏ぐり層（12 層）の入る基底は標高2.0mで地山掘削角度は約50度に近く、推定天端にむけて裏ぐり幅は広く設けられたであろう。

報告書が述べるように、B 地点の状況については（Ⅶ第 17 図）、残存する築石はわずかに 1 石のみ、しかも、すでに原位置にはない。さらに土台木列も存在しない。しかし、裏ぐりのラインは、いずれも A 地点と土台木のある C 地点のラインに接続する可能



第 264 図　93C・94A・96・97C 区遺構配置図（1：400）



第 265 図　94A 区石垣・土台木（1：100）

黒丸は杭

性が強く、土台木列の存在した蓋然性は高いだろう。

＜C地点＞

94A区のなかで、土木構造物としての石垣、裏ぐり層、土台木、杭木を総合的に観察できる唯一の箇所だといえる。まず第265図において、土台木先端部にそって濃密に詰る裏ぐり層が、また土台木の厚み出しを防止する杭木列や土台木上にのる築石列が観察できる。以下はそれぞれについての検討である。

（石垣）

Ⅶ第19図・第20図・第24図により、石垣遺構は自然石の築石の一部が二段積みで約4.5mにわたり土台上に9石分が残存する。もっとも、築石は⑤をのぞき、原位置より若干前方へ移動したことがうかがえる。その理由のひとつは、自然石（野面）を用いた築石の築き方とは、まず左右の隣接する石面どうしの「二番」にあて、さらに胴部どうしを接することで築石の動きを固定することからはじめる。築石⑨・⑧にはすでに空隙が生じている（Ⅶ第19図）。また③・②・①の築石（根石部分にあたる）の石尻は土台木からはずれ据わらない。これは石垣技術の基本に合致しないといえる（第274図写真1）。

次に第一段目の築石⑦・⑥・⑤・④の場合である。土台木はⅦ第18図に示されるように、「地形根切」をして安定基盤を設けて設置する。土台木の前方への傾きは、上にのる築石の尻部を上げ、孕み出しや崩壊の原因になるからである。そうしたところから、土台木が根石列にあたる。Ⅶ第18図のうち、見通し図として紹介された土台木上の築石④の石面の下端は少し下がり、それにひきかえ石尻が土台木から浮く状況がうかがえる（第274図写真2）。なお、この場合の土台木の標高は1.8mの位置にある。C地点南端の土台木上にのる築石⑦（折損）⑥（Ⅶ第19図）のうち、⑥の石面は、逆に10cm突出する例である（第274図写真4）。以上の観察を通じて、築石は地震、あるいは人為的な解体で、原位置から移動したものであろうか。そのことに関連して報告者は、杭に根石を支える機能があった可能性を説かれている。さらに再考の余地があるだろう。

ところで、二段積みされた石垣であるが（Ⅶ第19図・第21図）、勾配角度を固定するための介石（胴介石、尻介石）のうち、尻介石が観察できないことも特徴的である。とくに④と上段の⑤の自然石を用いることで発生する空隙を、ぐり石と大ぶりの詰石のみで調整している（第274図写真3）。また各築石の控え長さは、⑦（折損）を除き110cmをこえ安定してはいる。積み方は一段目、二段目の各築石の天端面が揃うところから「布積み」状を呈するものの詳細は不明である。石垣の成立時期については、天正4年（1585）段階の地震による墳砂を整地した後に地形根切をするところから、天正14年以降であることは確実であろう（Ⅶ第18図の6と8）。

（土台木遺構）

C地点で検出された土台木遺構は、きわめて特徴的な構造物である。それをⅦ第22図に求めると、長さ2.7～2.5m×径（タテ、ヨコ）30cmもの3本（a.b.c）、また長さ5.1m×径20cmもの（d）、長さ3.5m×径20cmもの（e）、長さ4.7m×径20cmもの各3本、計6本を残し、4列組みを構成する。このうちのa.b.cは調査によれば、ほぼ同位置に凹部の切り込みを有している。何らかの転用材であろう。また、eやdにも先端部に鼻ぐり状のホゾ穴を抜く。土台木の運搬法との関連が考えられる。

江戸時代土台木は胴木・ぼうしけたとも称し、各地の河川普請や、湿潤低地などに一般的に用いられた（ささら土台・はねかけ土台・そろばん土台等）。なかでも、城郭への使用については江戸時代に成立した『石垣秘伝之書』『石壇書』『後藤家文書』の技術書や、さらには、各地の城郭石垣の発掘調査で構造が明らかにされている（江戸・駿府・名古屋・大坂・高槻・広島等）。

例えば寛永年間、細川氏が助役普請として参加した江戸城では最大級のもので、表土台（木）、裏土台

（木）の規模は、400間で一番土台となる表土台木は123本、長さ3間、末口差渡し（跡面の径）1尺4寸～5寸、築石の控え幅に応じて表土台に併列して後方に敷く二番土台の裏土台木は末口差渡しが9寸～6尺1間とする以外に変わりはない（細川家永青文庫蔵）。こうした前・後2本からなる組土台は、接合する土台木の本口と末口にそれぞれ喰い違いの継ぎ口加工をほどこし、それにホゾ穴を設けて杭木を差し込み固定した。また一番土台から直交する末口径5寸以上、長さ7尺以上の敷ささら木を水平に数多く敷くことで水掘、河川といった軟弱地盤の補強をはかったのである。

しかし、c地点に残存する土台木4列組みには、本来土台木下に敷くささら木が存在しない。また土台木どうしの本口、末口を合わせるための喰い違い加工面がない。当然おこりうる不等沈下についての対策は乏しいといわねばならぬ。もっとも一番土台に口径の大きい転用材を使うことで石尻を下げる効果を期待しているが（Ⅶ第22図・第274図写真2）、一方で補助材の三番土台に転用材を使う意味は不明である。

（杭木列）

杭木はA地点、B地点をあわせて68本がA-2地点の土台木の先端にそって一列に打ち込まれている（第265図）。杭木の頭径は約10cm、長さは平均して1.30mはある。杭列の間隔は30～40cmを前後するもので、その打ち方も個々人の自由裁量にまかされていたらしい（Ⅶ第11図）。注意すべきは、A地点の杭木4・9・11・15の存在である。Ⅶ第20図での土台木天端ライン（2.0m）より杭頭は高いのである。このことはA.B地点に土台木列がかつて存在していたこと、また、一番築石が斜の杭頭上で支えることの不合理性を説明する材料とならないか。

だとすれば、第265図でのA地点に一列にならぶ杭列や裏ぐり層、B地点での杭列と一部残存する裏ぐり層の存在は、この箇所にも3列組み、あるいは4列組み土台木の可能性を示唆するものだといえよう。

＜D地点＞

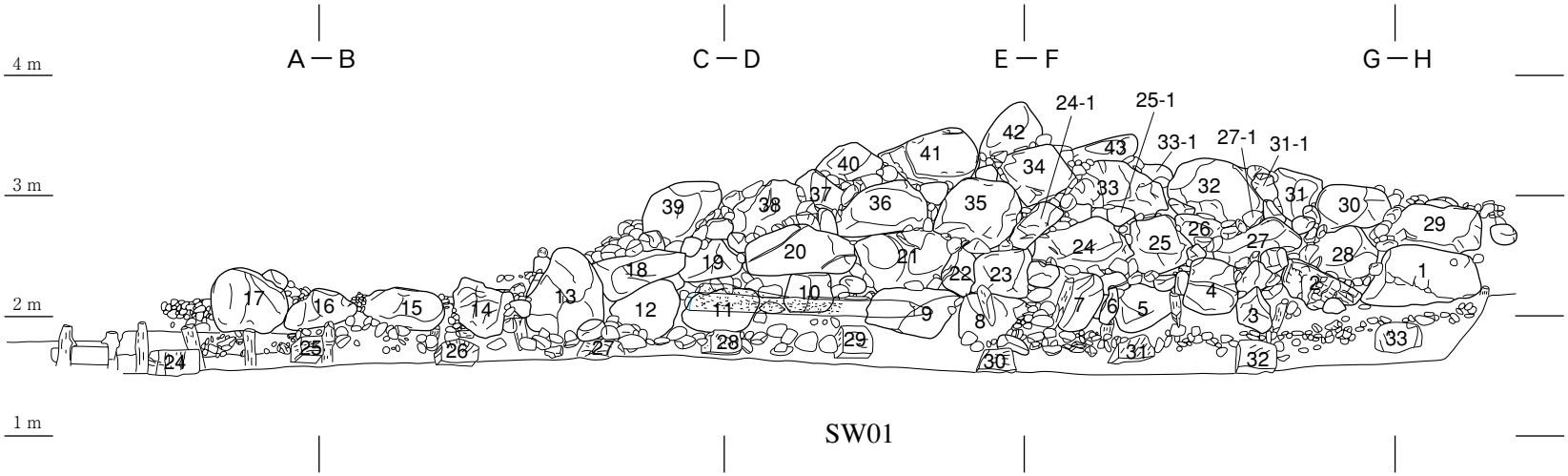
C地点南端であるが、これは前述したようにA地点・B地点からC地点にむけ一直線にのびる土台木列と石垣、そして杭木列が予想できる。土台木列はここで直角に折れD地点を構成する（第265図）。土台木3本とそれは止める杭木の存在するところから、C・D地点の交点は隅角部（入角）であろう（Ⅶ第24図）。もっとも、A・B・C地点とD地点とで構成された掘り込みコーナー（内堀・SX01）は、D地点の2ケ所のトレンチ（第265図D-D'・Ⅶ第24図E-E'）によって、D地点の土台木、杭列を設けるための大規模な、基礎造成であったことがわかる（Ⅶ第23図・第27図）。またそれによればB、D地点の土台木の天端面（Ⅶ第27図）は、C地点のそれ（Ⅶ第20図）に比して、約10cmは高い。工程作業、ないしは時間差をさすものであろうか。また、石垣の鉛直高はC地点の例（Ⅶ第20図）から2.9m、しかし、裏ぐり層はきわめて薄いことがうかがえる。

＜小結＞

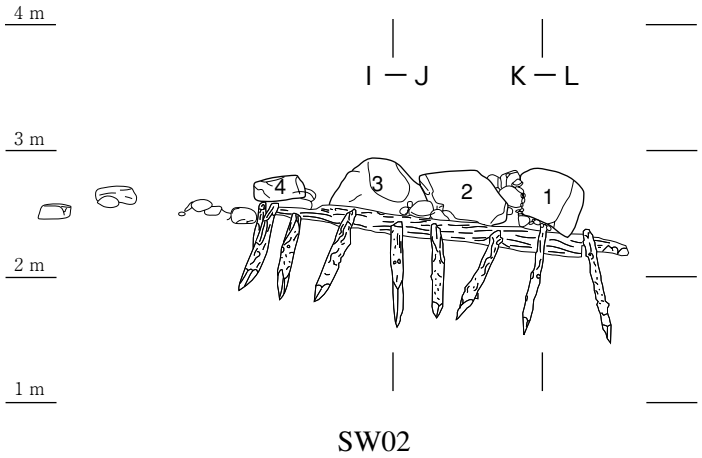
以上の検討を通じて94A区は石垣と土台木、杭列とによるコーナー部（入角）による（旧五条川への）張り出し面と内堀を有する平面プランとしても類例のない土木遺構であったことが推定できる。またその成立時期は少なくとも、天正14年（1586）以降だとされているところから、今後同様の事例検証にとってひとつの基準指標になるだろう。

2．96区の土木構造物（土台木・石垣）遺構

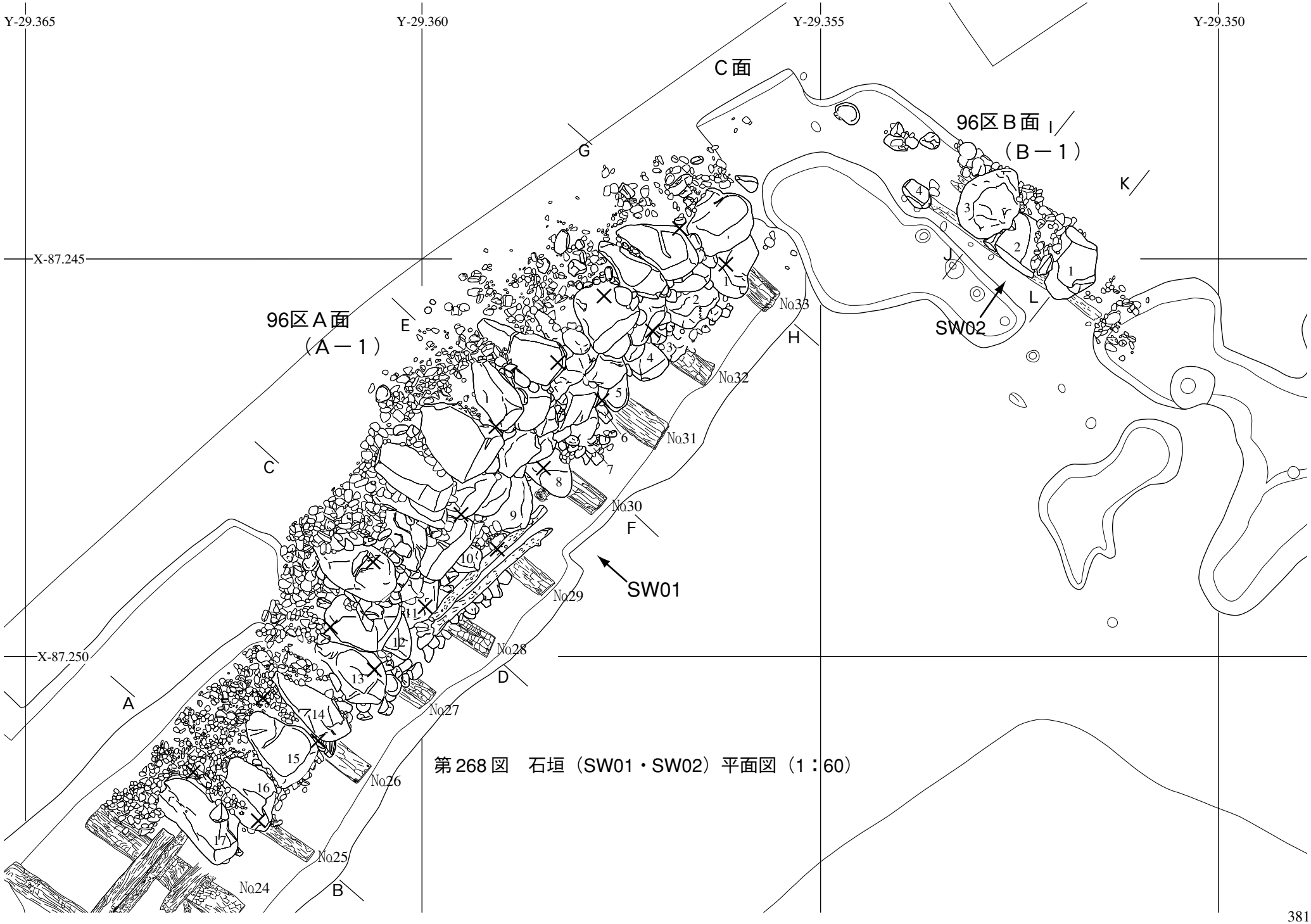
この遺構はA地点の石垣遺構（A-1）と、石垣はすでに解体されて存在しないが、その南側に隣接して土台木列だけが残存する遺構（A-2）、さらにまた、A-1との接続が予想されるB・C地点について述べるものである。これらの遺構もまた、清須城伝本丸の東



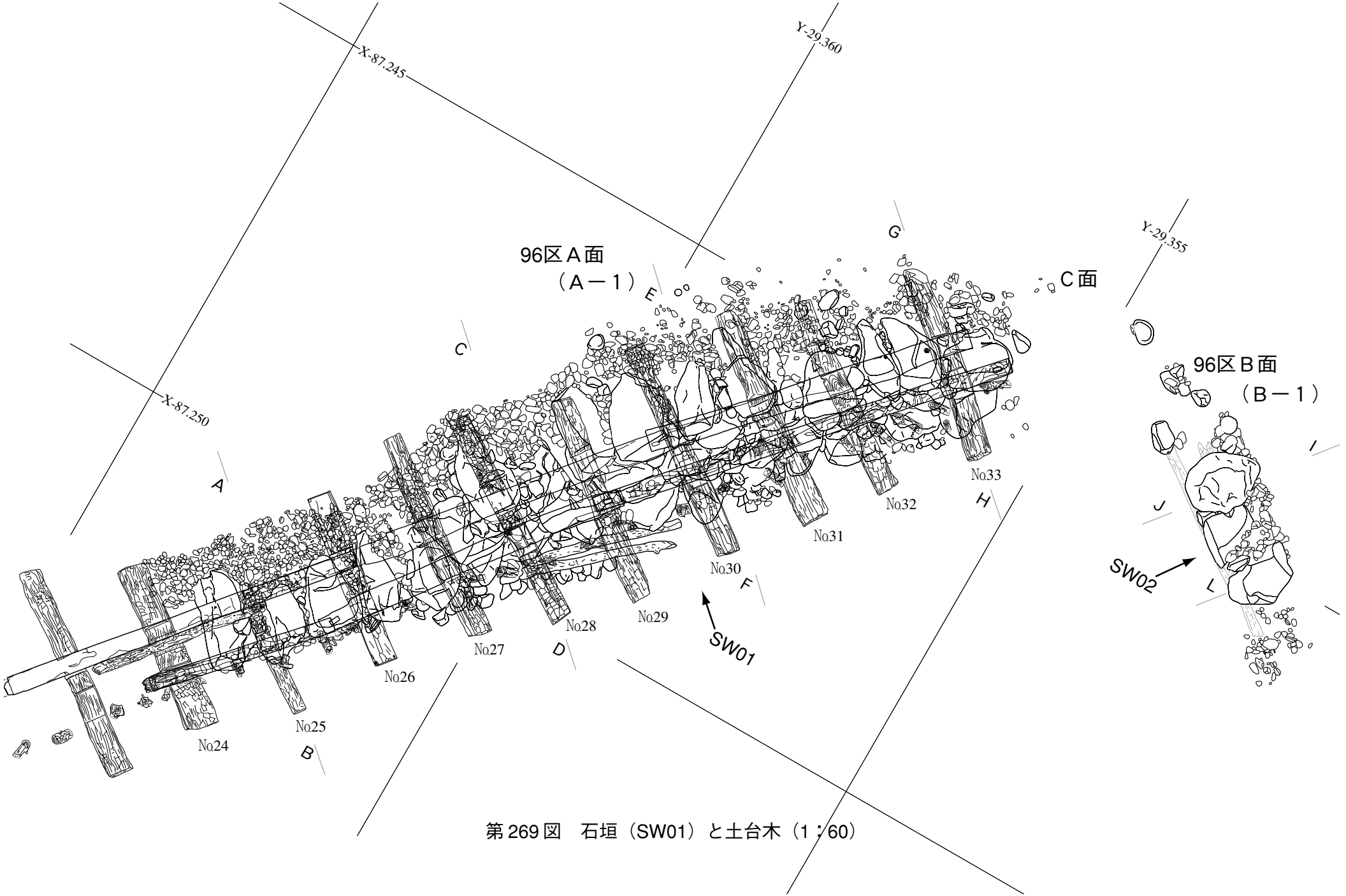
第 266 図　SW01 立面図（1：80）



第 267 図　SW02 立面図（1：80）



第268図　石垣（SW01・SW02）平面図（1：60）



第269図　石垣（SW01）と土台木（1：60）

側護岸、旧五条川（旧清洲川）沿いに展開された石垣であったことがうかがえる。

＜A地点＞

A地点での圧観は、何といっても現在のところ他に類例をみない土台木遺構であろう。もっとも、それに加えて注目すべきものに長さ約11mにわたる残存する石垣遺構がある（第266図）。築石は3、4段分が残存し、本高さ（鉛直高）は土台木天端面（高さ1.9m）から上方に1.9mを測る。築石は43石分、いずれも自然石が大半を占める。なかでも築石の石面形状は方形状、方形崩し、長方形崩し、三角形状の大・小を採用する。その最大のものは長径1.0m、平均して70cm内外で、その控えはとくに長いものはなく、平均すると1.0cm内外のものが多い。また第266図では、「雑」と墨書された築石（23）が検出されており、この遺構が少なくとも慶長期かそれ以前であることをうかがわせる。また積み方は二石が傾くように重なる「あものり」（あん入りの餅、二段重ねの意）の築石（12～18）や24-1、38を除き、他はおおむね石面の長軸を水平になるように配石されている。もっとも横目地は通らない。いわゆる乱積みである。またその勾配についてはE-F断面から60度が求められる（本報告書第9図）。

なかでも次述する特異な土台木構造物上に配架する一番築石（一段目の意）は、捨石とぐり石上に直接据える根石部分に相当する。とくに一番築石13の縦石や、1の築石は最大級で6・3といった最小のものまでが存在する。この結果一番築石列は高さが揃わない。ここで興味深いものは一番築石のうち8・9・10・11・12である。とくに8・9・10はそれぞれ50cm・40cm・30cmと大きく前方へ突出する（第266図）。しかも二番築石23・21・20以降の勾配は変化し、60度に近い（第275図写真5）。それに対して、一番石7・6・5以下は孕みは顕著であるものの勾配はほぼ一定する（第275図写真5・6）。

以上を要約すれば、①勾配と一体化した一番築石1～7の箇所、②8～11の根石状遺構に上積みされた箇所の問題に大別できる。このうち①の8・23・24-1・34の上下は、②の7の真上にかぶる傾向がうかがえる（第266図）。第266図の石垣には少なくとも二時期の積み直しが想定できるのである。つまり、一番築石の1～7が第Ⅰ期、大きく前方へ突出した8～11の根石状築石を第Ⅱ期の改修とみる。また12～17については二番石がすでに喪失してはいるものの、築石は8～11に近い。縦石13もまた、慶長期以前、なかでも、文禄・天正期に各地の城郭例に採用されている例に近い（安土・岡山・肥前名護屋・甲府他多数）。

また、内部構造としての石面に多用される詰石は、とくに1～7に目立つ（第268図）。これは石面がのちの元和・寛永期にいたり、加工石が主流に変化するからである。また石垣の背後に使う介石の使用が乏しいことであろう。介石には角石・角脇石・築石の控えの胴部、さらには石尻部の下端に水平に配する片平状の小型石をいい、胴介石、尻介石として使用されることが多い。それらは石材を固定する目的と、石面の勾配角度を調整するための役割がある。また石尻部分に詰める裏ぐり石（栗石）は裏土層との境目から入れるが、主として排水機能をもつ。近年、境目に築石一段ないし一層（小石2、3段）ごとに大ぶりの石塊を一列に配石し、裏土のぐり石への流入防止、裏土固めの機能をもつ事例が報告されている（岩国・丸亀・甲府・仙台・金沢等の城郭例）。当石垣には観察できない。

ところで第266図の立面に示す築石に必要なぐり石は、川原石の大・小を用いているが、石尻から50～60cm程度の幅でつき固めている。しかし、川原石による胴介石の代用はわずかに認められるものの、介石はなきに等しい。介石を用いない理由として、①高い石垣を必要としなかったこと。②修改築をくり返したこと。③急いだ普請工事であったこと。などがあげられよう。

いわゆる「高石垣」（11間以上をさす）については、最近「のり返し」石垣の実例が各地の城郭で明らかになりつつある（拙稿「伝統技術からみた城郭石垣の勾配について」（『関西大学考古学研究室開設50周年考古学論叢』所収、平成15年4月刊行予定）、「のり返し」とは石垣の基礎高1間分の底辺幅を基準に、1間上がるごとに一定のてい減率をもって、底辺幅を減少させることをいう。その結果1間ごとでは傾斜角の矩（のり）であったものが、最終の完成した天端面では、全体としての「反り」を生む技法である。現在のところ、江戸・二条・大坂・熊本・高知・金沢・甲府・仙台の各城郭で確認されている。少なくとも慶長期以降の主要な城郭石垣には、従来からの矩（のり）とともに使用されていた。

次に介石を通じてみた清須城伝本丸石垣の①・②・③について検討する。①については本報告書第9図E-F断面でみた石垣は60°前後の勾配はとるが、1間ごとの「のり返し」はみられない。それは当石垣が「のり返し」以前の形態である傾斜角だけの矩（のり）を使ったことと、旧五条川の護岸的な役割をも担うからであろうか。近世の河川普請に一般的な勾配は傾斜角で、本高さも比較的低い。石垣の初源形態であった可能性もあるだろう。②については前述したように、Ⅰ期・Ⅱ期の修改修が十分考えられるところである。ところで城郭普請とはきわめて短期間で計画的に工事の完了を必要とする。そうした状況を改めて第266図に求めるなら、石材の大小の不統性と逆に裏ぐり石の共通性がうかがえる。従って当石垣遺構は、天正13年（1585）の大地震による噴砂整地後の翌14年以降を上限とし、その下限については前述した理由にもとづき慶長期とみなしたい。したがって当遺構は、天正・文禄・慶長期にまたがる技術的特徴を内包した石垣と考えられる。なお、B面石垣については後述する。

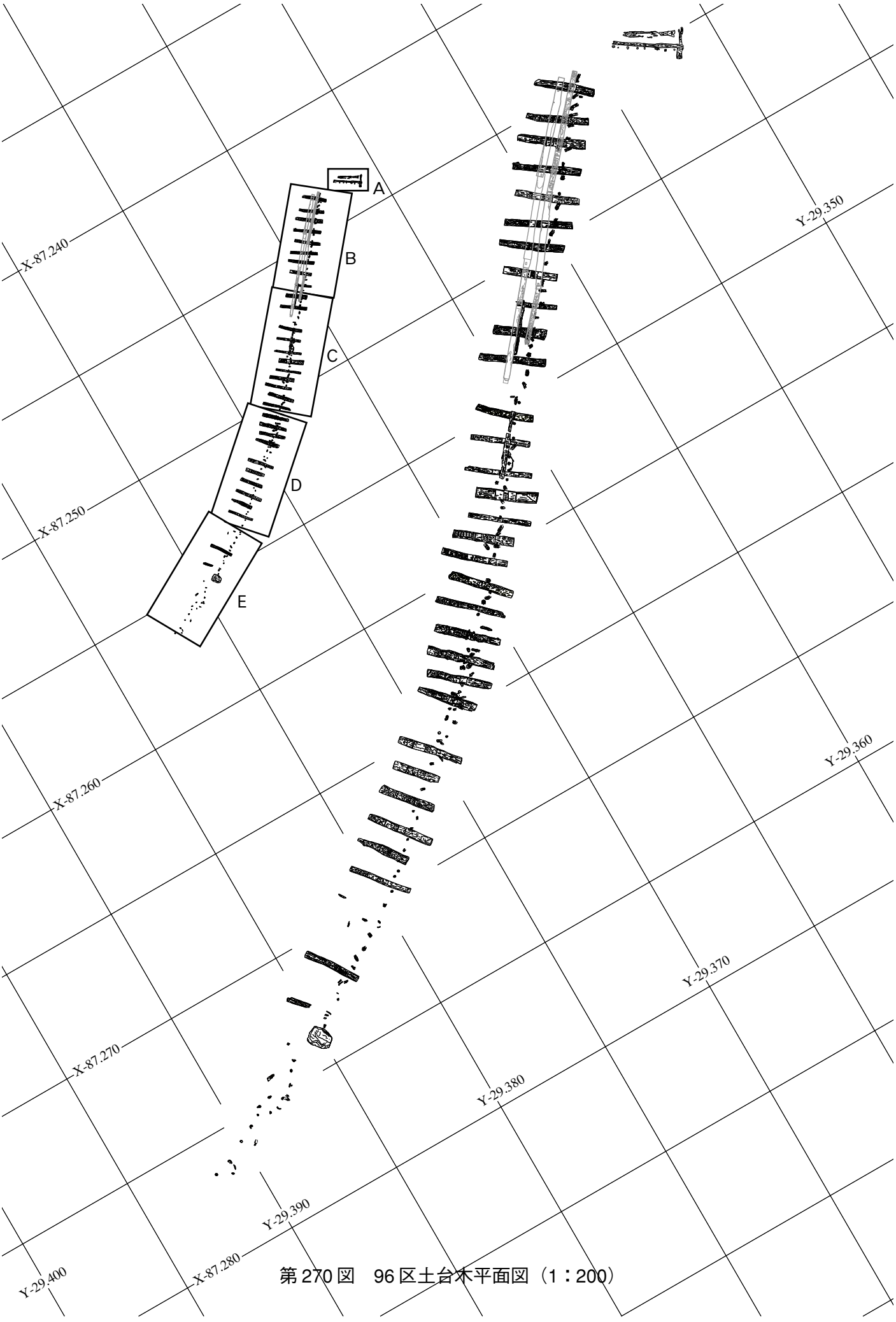
＜96区A面石垣遺構にともなう土台木構造＞

現在のところ、全国でも類例のない土台木構造物、それが当96区A地点の土台木とささら木を組み合わせた構造物である（第268図の下方に第269図が存在）。しかし、実測直前の前夜の河川増水により、前後3本の2組みの土台木は翌朝には浮上し、原位置からはわずかに移動し、ささら木構造だけが現状をとどめていたのは惜しまれる（第269図）。なお、本報告書写真図版4は増水直前の土台木である。

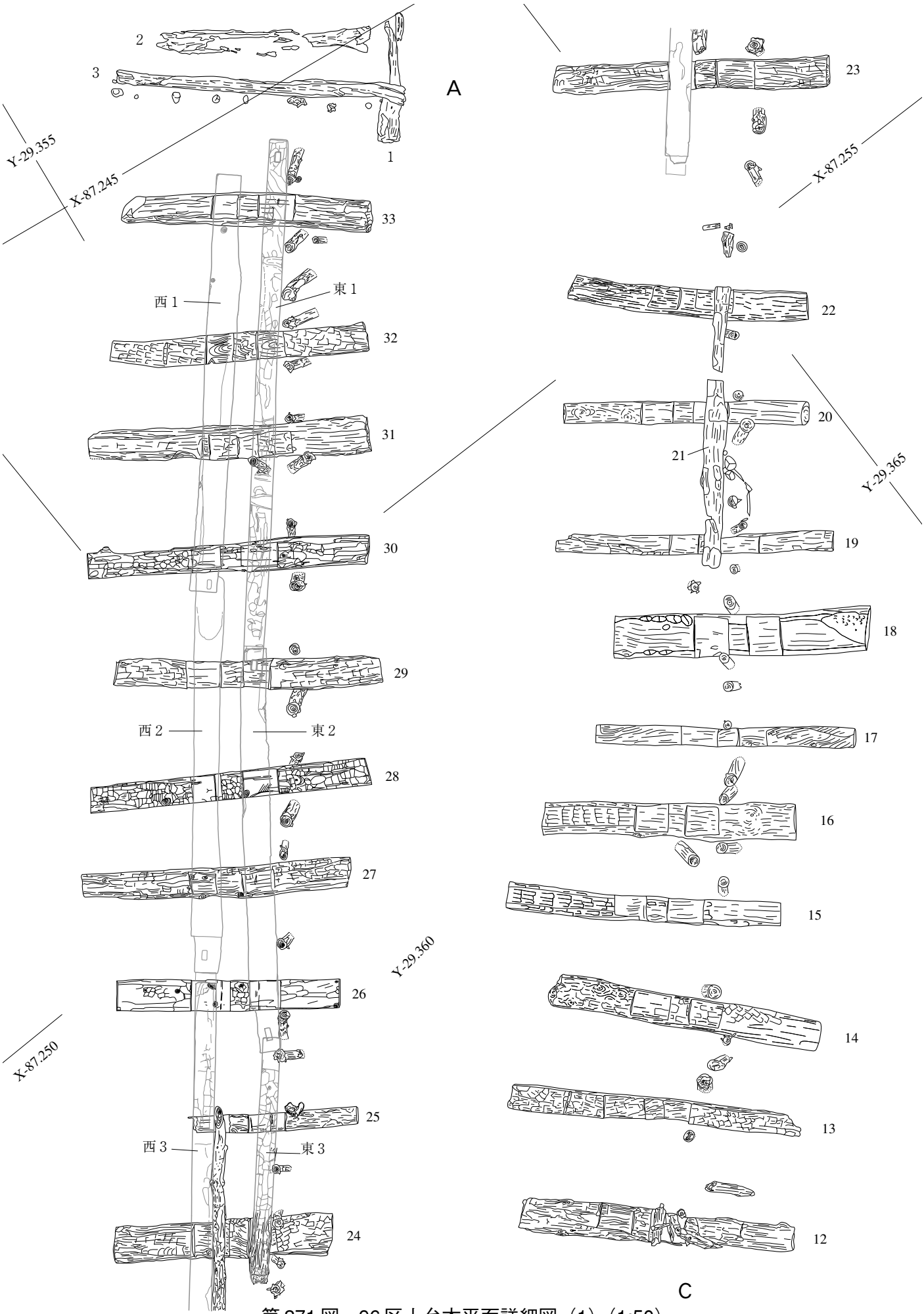
まず土台木の構造、とくに現状をとどめるささら木からみよう。これは前述した第265図94A区C地点の事例とは全く異なるもので、鉄道軌道の枕木とレールの関係に近い。つまり、レールが一、二番土台木で枕木がささら木に相当する（第268・269図）。ささら木（胴木No.19～28）の本口（木材の幹の口径にあたる）は、幅30～40cm、厚さは約20cmに対して控えの長さは最大で2.8m、最小で2.4m、平均すると2.6mの規格性の高いものである。ささら木の上端面には本口から末口へむけ、約80cmの位置に幅80cm内外の枠取りをし、それに前・後35cm内外で、深さが5～6 cmのくり込み加工をほどこしている。土台木を前・後の枠内にはめ込みほぼ中央に築石をのせ、安定をはかろうとした。

ところで興味深い事実がある。それは石垣されたささら木本口のいくつかに不陸が認められることであろう（第266図）。そこでまずささら木と土台木がセットで完存する箇所として胴木No.24・第275図写真7を確認する。次にその本口（天端）の高さ（標高1.75m）を基準に水準線を胴木No.33へむけ通す。その結果はNo.28、29、33の本口は浮き上がり、逆にNo.30、32では沈下する傾向を観察することができる。このことは、石垣の解体作業以前に本口と土台木上に不等沈下現象がおこっていたことにほかならない。前述した第266図の石垣の孕み出しの大きな原因のひとつであろう。

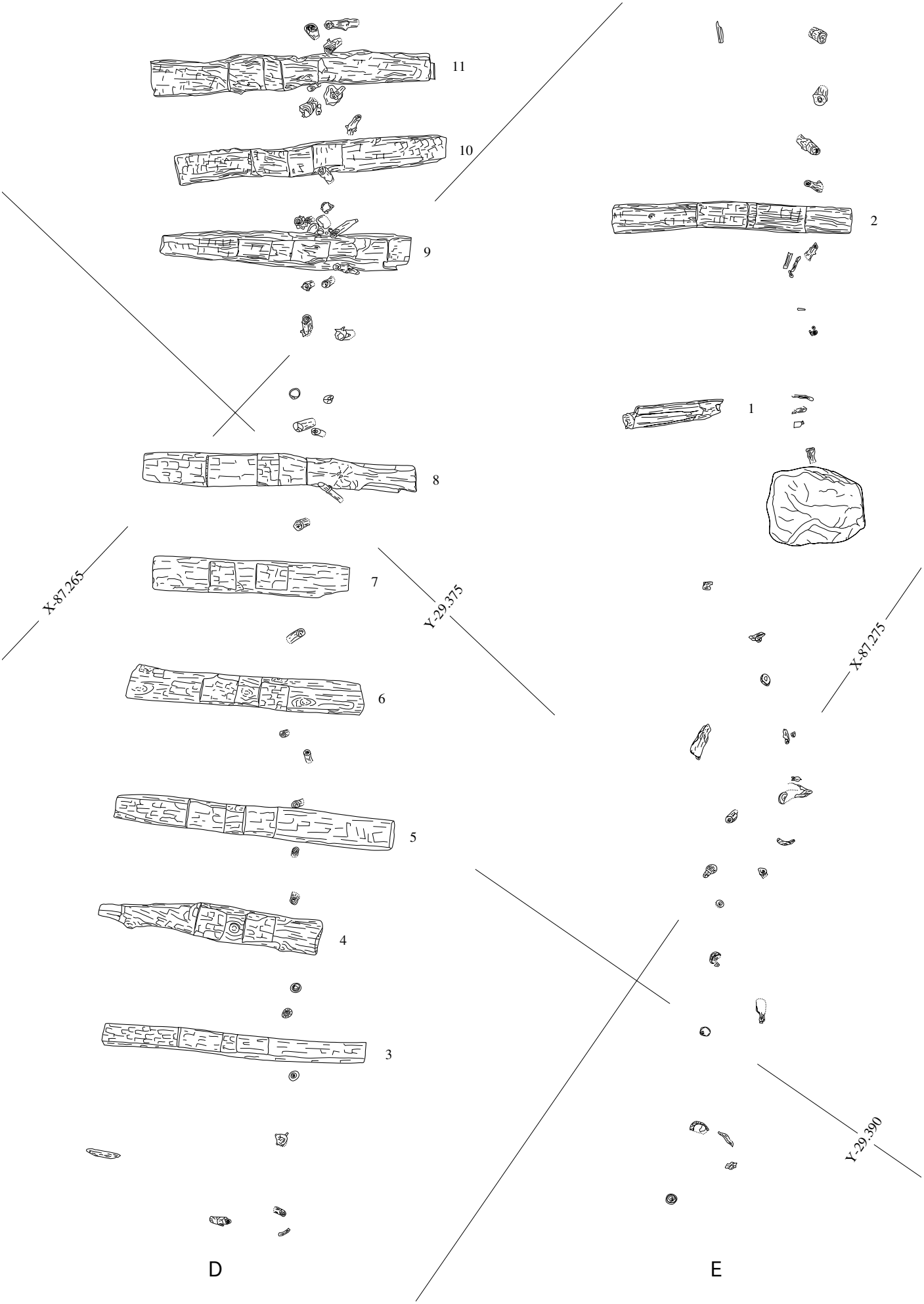
次に第268図からささら木上にのる土台木列の復元を試みたい。まず、ささら木1本ごとの本口からくり込み枠までの長さと、末口から枠までの長さを



第 270 図　96 区土台木平面図（1：200）



第 271 図　96 区土台木平面詳細図（1）（1:50）



第 272 図　96 区土台木平面詳細図（2）（1：50）

それぞれ２点おさえ、それに×印をつける。ささら木上の２つの×印は、本来そこに位置したであろう一番土台木、二番土台木の外枠となるはずである。前掲第275図写真6をまじえて土台木の位置を復したものが第269・271図となる。土台木の位置は現存する胴木No.24での２本組みをもとに北端のささら木（胴木No.33）までとする。第268図によってささら木（胴木No.33）の枠内の×印２点を定め、胴木No.24での２本の土台木（第275図写真7）とを見通し線でつなぐ。一番土台木とささら木を固定する杭木の存在も検討材料となる。この作業で復元した土台木列が第269・271図となる。

この結果、胴木No.33での×印２ケ所は土台木の配架が出来るかどうか微妙な位置にあるものの、No.24にいたるささら木の×印は推定土台木ライン（外端）にそわない。これでは土台木はささら木上で安定せず、石垣は構築できないだろう。おそらく、第269図もまた、増水時の影響を受けたものといわざるを得ない。

以上の検討を通じて、石垣遺構に配されたささら木に組む土台木（第275図写真7）、さらには杭木役割と仕組みがほぼ明らかにできたように思う。

＜A-2地点　土台木遺構＞

胴木No.24～33に引続き南部にのびる長さ50mに近い土台木遺構（実はささら木）が存在する（第270・271図）。すでに抜りとり痕となっているもの６本（概数）をふくめ23本が確認されている。控えの長さは2.7m内外が中心で、その他は前述したものと変わらない。その配列も１間あたり２本程度で、おそらく現場設工者の判断にゆだねられた作業であったものと思われる。もっともこの工区でのささら木もまた第269図と同様の増水の影響は若干あったのであろうが、全体として旧状を保っているとみなしてよいだろう。

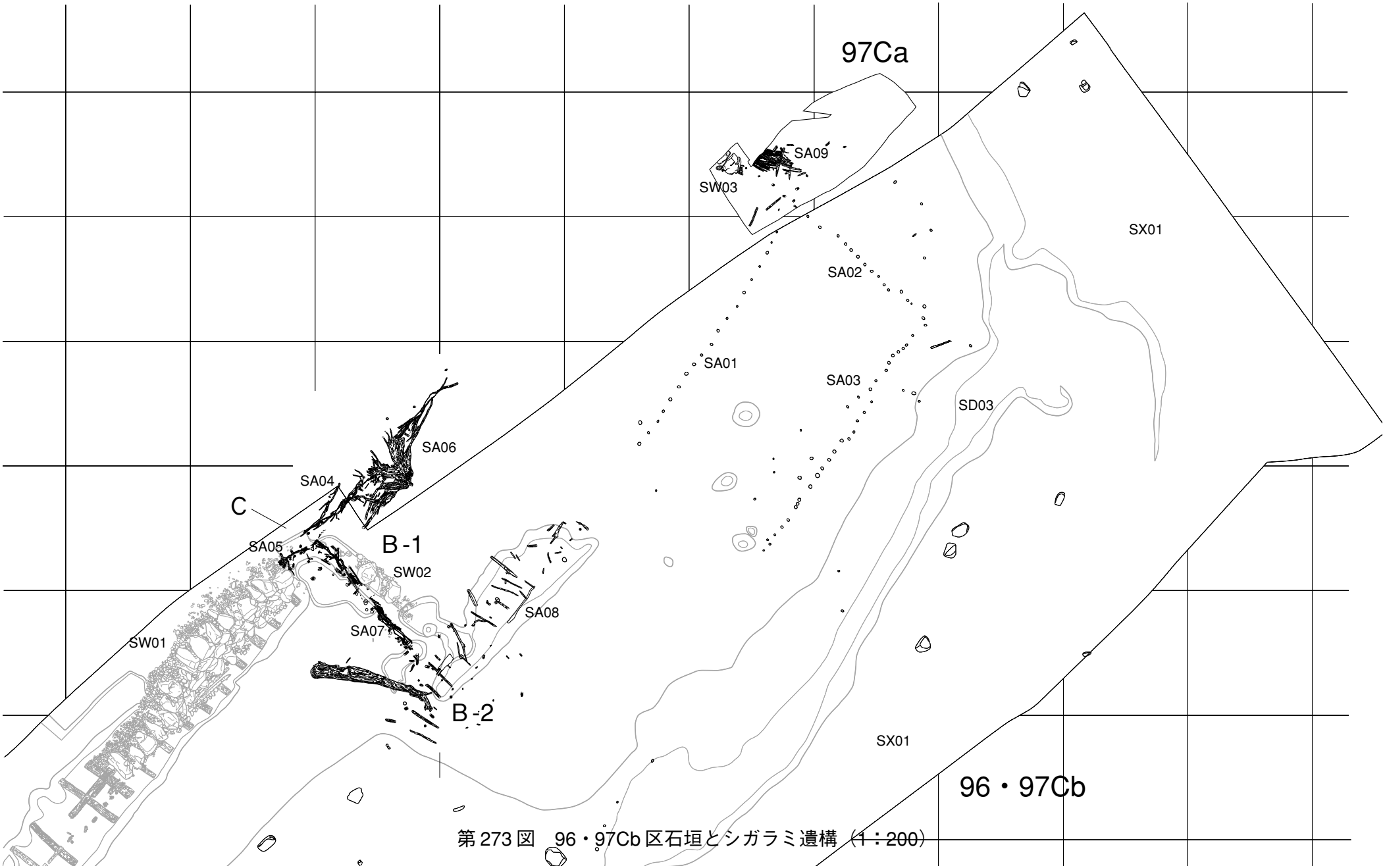
ここでひときわ注目されるのはささら木と一番（前面）土台木を固定するための杭木列である（第271図）。それはささら木のNo.24から数えて９番目（No.14）まで直線状に南行する杭木が、13番以降でわずかに西側へふり、No.23へむけ直進し（第276図写真8）、さらにNo.3とNo.2との間でさらにわずかにNo.1方向にふる（第270～272図）。このように原位置に固定された杭木列の方向性は土台木自体の方向性を指向している。こうしたわずかに湾曲した積み方を「しのぎ積み」と呼称する（第270図C・D・E）。短い直線を重ねた鈍角（90度以上）積みをいう。しのぎ積みもまた、天正・文禄期を中心に、自然地形を活用する山城の石垣に多用する技術のひとつである。実は本来は河川に用いられる技術を山岳城郭に採用した可能性もなくはない。

以上、96区A面の土木構造物（石垣遺構・土台木遺構）について述べたのであるが、ふれておくべき点があとひとつある。第264図に示されているように、A面の土台木構造物に隣接してゆるやかな塁状ラインが北方の97C区の台地形へと続く（第276図写真9）。土台木列はこの塁状に盛土造成されたなかに埋設されていたのである。土台木列は旧五条川の平時の水位では浸水は全くないものの、増水時には上層の石垣に及び（第266図）、97C区の台地形もその流路になることも予想できるところである。では、土台木列を埋設した理由は何か。

それには、一定幅の溝をつくり、それに量産にみあう規格性の高いささら木を枕木状に配することで、常時湿潤状態を確保したものと私は考えている。現在のところ、全国に類例のない清須城伝本丸部の土台木列は、河川の護岸としての役割を担いながら機能したものではなかろうか。

＜96区B･C地点土木構造物＞

第268・271図によると、96区B地点には4・3・2・1の築石と前・後２本の土台木が検出した（第267・268図）。一番土台木は長さが約３mに近く、その口径は厚さ20cm、幅15cmあり、本口・末口には喰違いの継口がある。したがって左右に土台木が延長さ



第 273 図　96・97Cb 区石垣とシガラミ遺構（1：200）

れた可能性はなくはない。もっとも第267図での96区B面によれば、4の築石を受ける一番土台木上端は標高が約2.6m、1の築石のそれは、標高約2.2mの不陸が生じている。また土台木固定のため長さ60cm平均の杭木も存在する（第267図）。しかし、ささら木は存在しない。また第268図でのB-1に配された4個の各築石は、A-1地点と同様自然石でその控えの長さは0.6～1.0cmになる。裏ぐり石は控えを埋める程度残存する。背後には土塁状の構造物が不可欠となる。

では、このB-1地点の石垣構築の目的は何であろうか。結論からいえば前掲第264図96区A-1の石垣ラインと直交する入角構造が必要だからであろう（B-1・Cの交点）。同様にB地点にはこの石垣と土台木構造物のほか、第273図のようにさらに前方に石垣遺構と交錯する杭木列が存在する（B-2・第276図写真10）。この杭木列はその後の発掘調査で、97C区の台地状張出し遺構の三方を仕切る大規模土木施設（長さ2mをこえる多数の杭木列、それにからませるシガラミ）の構造物であることが判明した（本報告書第15図）。これは第273図B-1の石垣遺構に先行するもので、湿潤地の開拓や河川普請などに用いられた伝統技術である（最近では江戸汐留遺跡）。軟弱な湿潤地の、張出し状台地の補強施設として注目される。

また第264図B-1石垣の土台木は、標高2.6～2.2mの上下幅にあって、A-1土台木から、少なくとも一段分底上げすることで、台地上のC地点に到達し、石垣構造としての体裁をなす入角部が成立する。当然のことであるが、裏ごめ石をもつ石垣にはコーナー部（隅角部）と、背後を受ける構造物（裏ごめ石・裏土層）を必要とすることはいうまでもない。後出するB-1の石垣遺構は、伝統的なわが国の土木技術に支えられて機能したといえよう。

3．結語

清須城伝本丸東側護岸部に残された、土木構造物を中心に検討を加えた。第264図での94A区（A-1・2）については、ささら木を採用しない土台木の3本組み、4本組みが用いられた。それは軟弱湿潤地形を盛土で改良したものの、不等沈下など構造的には弱い難点を補うかたちで、大量の杭木列を使用したのであろう。前述したように、96区の土台木は、全国でも類例のない長さを、規格したささら木を用いている。この特徴は一般的に江戸期に多用される2本組みの組土台と異なり、築石を中央部に配石してバランスを重視する。また積み方として「しのぎ角」を採用した。しのぎ角は早く天正・文禄・慶長期に採用された技術である。

94A区と96区での土台木構造（第264図）では、明らかに94A区が構造的には劣る。しかし、普請工期は短縮できる。そうしたことで96区は、あらたな河川災害への防止策として、護岸の機能を合わせもつ新しい技術の採用だといえないか。もっとも、94A区では、96区で採用したささら木を転用するが、それを採用した時期の新・旧については定かではない。

最後に提起しておきたい課題のひとつに、第264図94A区C・D地点、さらには96区B-1地点・C地点におけるそれぞれの「入角」の問題がある。両者はいずれも石垣構成上出角に対する構造体として、不可欠の構成要素である。97C区の張出し状台地遺構はそうしたことで重要であろう。ではなぜ台地形を必要とするのか。それは清須城の平面プランと関係する。清須城は主郭と旧五条川をはさみ、西側対岸部に城内機構の中心があったとされる。張出し台地遺構は、町屋をふくむ対岸の字「馬橋」に直面する位置にある。馬橋の呼称からみて、あるいは張出し状台地遺構が、「舟入り」とは別の施設として機能していた可能性も検討する必要がありはしないだろうか。

（完）



写真 1

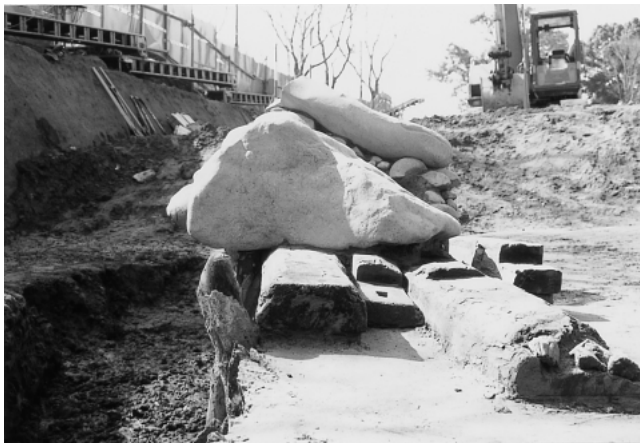


写真 2



写真 3



写真 4

第 274 図　94A 区石垣・土台木写真



写真５



写真６



写真７

第 275 図　96 区石垣・土台木写真（1）



写真 8



写真 9



写真 10

第 276 図　96 区石垣・土台木写真（2）

Ⅴ　まとめ

これまでに、遺構、遺物、様々な分析結果を記述してきたが､ここではここで得られた成果をまとめ、清洲城下町遺跡全体の中でどのように位置付けられ、どのような意義付けができたかを整理して、まとめとしたい。先ずは調査区毎に調査結果を整理し、その後に個別の問題点に若干言及することとする。なお、既報告の遺構番号は掲載された各報告書の略称に遺構番号を組み合わせて記述した（例として『清洲城下町遺跡Ⅳ』のSD8024は「Ⅳ SD8024」と表記する）。

（Ⅰ）95A・B区

95A・B区は清洲城下町遺跡の南部地区に相当し、清須城下町の南端に所在する。95A・B区の東側を既に発掘調査と整理報告が行われており、城下町期Ⅲ期の町屋と櫓に類する区画などが存在したと想定した（鈴木編 1995）。

95A・B区では、SD04とSD101、SD102とSD107という2組の平行して走る溝が確認された。SD04とSD101は南北方向とはややずれる方位、SD102とSD107はほぼ東西方向となるもので、両者は全く異なる方位の基準を持っていると考えられる。SD04とSD101はⅣSD8024とⅣSD8028に連続する溝と考えられ、道路ⅣSF8001の延長部分を構成すると推測される。また、SD102とSD107はⅣSD8025に連続する溝と想定され、東西方向に細長い長方形の区画（Ⅳ区画8005：城下町期Ⅲ-1期）を形成していると思われる。Ⅳ区画8005は南北方向で約20mの規模を持ち､その内部には多数の土坑などがあることから、屋敷（居住域）であったと想定される。加えてSD107の南側には井戸SE101などの遺構が存在すること、およびSD102の北側でも多くの土坑などが分布することなどから、Ⅳ区画8005の南北両側にも区画溝は確認できないものの屋敷の存在が想像できる（北側の区画を区画8014、南側の区画を区画8015と設定する）。Ⅳ区画8005と区画8014・8015は、Ⅳ区画8007～8010の配置と類似することからみて、幅15～20m程度の長方形区画が連続して配置される屋敷が展開したと考えられ、この状況から町屋が広がっていたと推定されよう。90Fa区でⅣSD8025はⅣSD8028に切られていることが判明しており、細長い長方形区画（町屋）が廃絶した後（城下町期Ⅲ-2期）に道路ⅣSF8001が構築されたと考えられる。ⅣSF8001に連動する区画8012も町屋廃絶後に形成されていたこととなり、大きな地割の変更と屋敷構成の組み換えが行われていたと評価される。

（Ⅱ）96・97C区

96･97C区は清洲城下町遺跡の本丸地区に相当し、清須城城郭東端部に該当する。本丸地区は92F区、93C区、94A区などが発掘調査され、既に報告書が刊行されている（鈴木編1997）。94A区では石垣が発見され大量の瓦が確認されており、96・97C区で検出された石垣やそれに伴う遺構群との関連性が問題となる。

第277図に93C区・94A区・96区・97C区を合成した遺構図を掲載した。この図を用いて遺構変遷の概要を記述する。

1　清須城成立以前

まず、城下町期よりも古い段階では、遺構が明瞭には確認されなかったものの、古瀬戸製品などの遺物が相当量出土している。96区出土資料で古瀬戸製品の時期別組成を算出すると（第40表参照）、四（三）

終了

第 39 表　96 区　出土山茶碗類出土量

	第3型式	第4型式	第4－5型式	第4－6型式	第5型式古	第5型式新	第5－6型式	第6型式	第6－7型式	第7型式	第7－9型式	第8型式	第9型式	第9－10型式	第10型式	第10－11型式	第11型式	第12型式	不明	合計
東濃型山茶碗		4		5	10	7		3		17	63	11	19		25	48	30			242
東濃型小皿					3	1		6		16		4	3		1		1		28	63
尾張型山茶碗			3				6	2	1										5	17
尾張型鉢											1			2	2				1	6
合計	0	4	3	5	13	8	6	11	1	33	64	15	22	2	28	48	31	0	34	328

	前期	前Ⅰ－Ⅱ期	前Ⅱ期	前Ⅲ期	前Ⅳ期	前Ⅲ－Ⅳ期	前Ⅲ期－中Ⅱ期	中期	中Ⅰ期	中Ⅰ－Ⅱ期	後期	後Ⅰ－Ⅱ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅲ－Ⅳ期	後Ⅳ期古	後Ⅳ期	後Ⅳ期新	後期－大窯	合計
四耳壺	2	21	19	5		2		15			18									82
壺か瓶	13					15	38	31			55								61	213
瓶子	3			2	2						7				1					15
梅瓶								7												7
広口壺										1										1
口広有耳壺															2					2
茶壺								1												1
祖母懐壺											14								2	16
壺											1						2			3
水注	2																			2
花瓶												1			1					2
燭台															3					3
小壺																	1			1
甕											1								11	12
縁釉小皿												1			1	1				3
卸皿									1						2					3
折縁深皿									1	3			1							5
折縁中皿															1					1
直縁大皿												1		2		5		2		10
卸目付大皿													1		1	2		3		7
盤類												29		4	25		5			63
擂鉢																	3			3
平碗															3		2			5
仏供															4					4
土瓶か釜											5									5
内耳鍋											1				5					6
不明											12									12
合計	20	21	19	7	2	17	38	54	2	4	114	32	2	6	49	8	13	5	74	487

第 40 表　96 区　古瀬戸製品出土量一覧表

耳壺は古瀬戸前期・中期・後期を通じて一定量が出土していること、皿類や盤類などは古瀬戸後期から出土量が多くなっていることなどが分かる。一方、同時期に生産・流通していた山茶碗類について同様のデータを計算すると（第39表参照）、第4型式から第11型式まで一定量出土していることが明らかとなる反面、総出土破片数が古瀬戸製品よりも少ないことが判明した。

こうした状況から、96区の様相は2期に分けて考えることができる。まず、古瀬戸中期以前では四(三)耳壺や瓶子といった器種に限定されていることから、墓域など一般的な居住域とは異なる空間が96区付近に展開していたことが推定される。一方、古瀬戸後期段階には、供膳具が一定量見られるようになり、96区付近が居住域として利用され始めていたことが想定される。

このように清須城本丸推定地の城郭構築以前の様相が、出土遺物という傍証でしか論ずることができないが、それでもある程度具体的な推測ができたという成果は極めて重要であるといえよう。

2　城下町期前期（Ⅰ・Ⅱ期）

城下町期前期（Ⅰ・Ⅱ期）で確認された遺構には、溝状遺構SX02が存在する。SX02は、旧五条川と微妙に方位を違えながら平行し、掘肩がはっきりしない状態の幅約7mの溝である。西側に展開する区画を区切る溝として理解されるが、区画の性格については今回の調査でも明らかにすることができなかった。出土遺物は土師器皿が比較的多い傾向を見て取ることができるが、大量に使用され廃棄されたという状況ではなさそうである。

このSX02が城下町期Ⅰ期の段階である程度埋積した後で、かつ石垣が構築される以前の遺構として5条の柵列群が存在する。柵列という遺構の形態上、明確に遺構に伴う遺物を検出することは事実上不可能に近く、実際SX02埋積以降、SW01構築以前ということ以外に時期の絞り込みはできなかった。SA04～SA09は全体として、幅約7m、長さ約24mの細長い長方形の空間を形成するかのように配置されており、おおよそSX02の上位に位置している。柵列は杭にしがらみが伴う構造であること、溝SX02の上位にあること、旧五条川に隣接することなどから、流路の締め切りや護岸施設であった可能性も考えられるだろう。SA08は約10m程構築されたのみで、北にはこれ以上展開しないことからみて、これらの柵列は長方形空間の両端を基礎固めしようとした構築物と考えられる。これらは、角杭による柵列が丸杭列によって補修された状況も観察されており、いくつかの段階を経ていることも推測される。

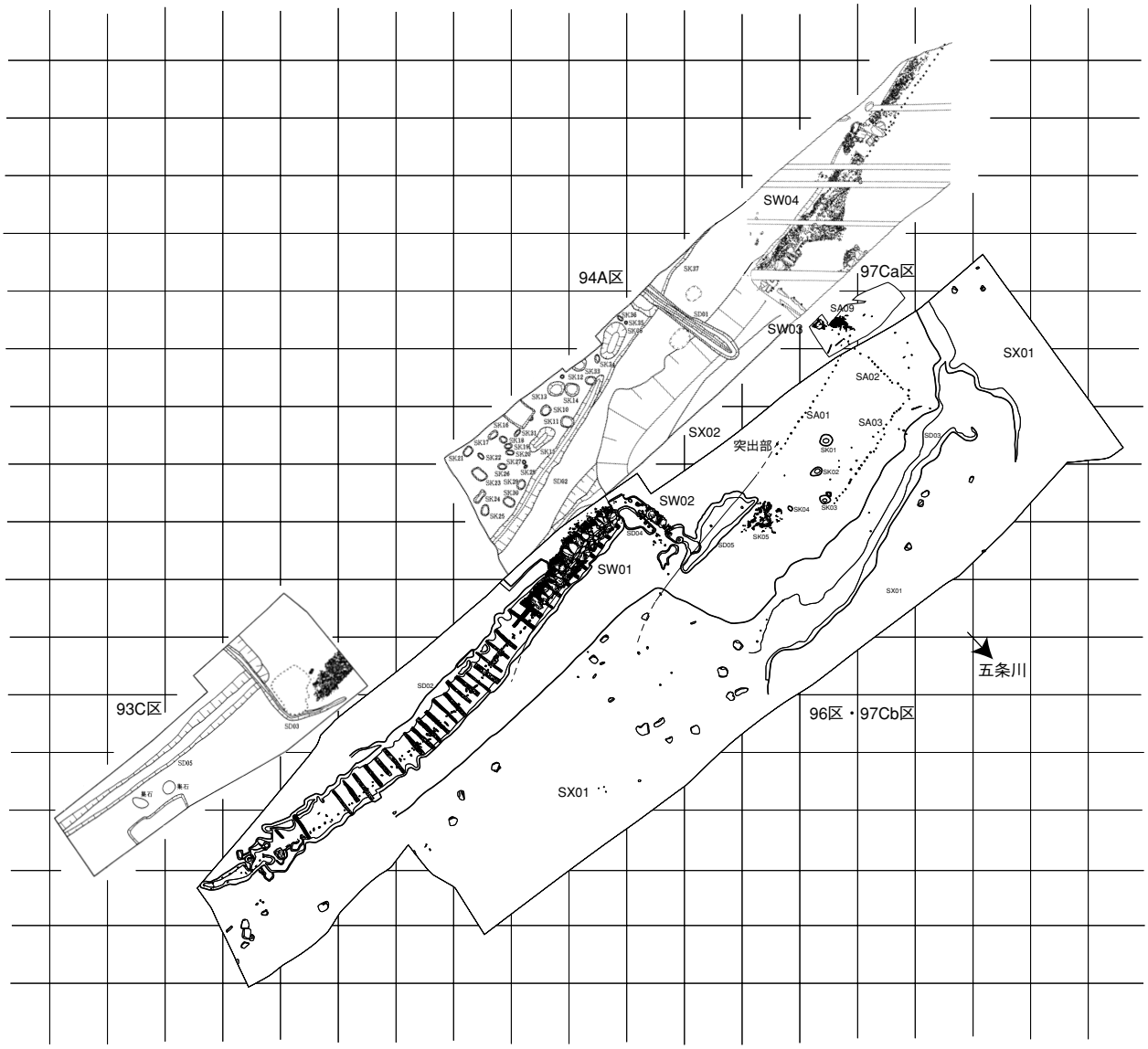
以上の所見から、城下町期Ⅱ期を前後する段階に、幅約7m、長さ約24mの細長い長方形の空間を形成し基礎固めするかのような柵列が構築されたといえよう。問題は、幅約7m、長さ約24mの細長い長方形の空間が何を意味していたのかであろう。状況からみて、河川（五条川）に面する張り出し状施設であることが想定されるが、これ以上の復元に際しては未だ十分な調査ができていない状態である。

3　城下町期後期（Ⅲ期）

城下町期後期（Ⅲ期）には石垣と内堀が構築され、清須城本丸に瓦葺建造物が建設されるようになる。石垣はSW01とSW02が確認され、遺構配置から見て94A区で検出されたSW03とSW04とは一連の構築物であったことが想定される。石垣の構築時期は少なくともSW04は天正地震（天正13年11月発生）以降であると確認されており、SW01～04は全て天正14（1586）年以降に構築されたと推定されよう。

SW04の基礎構造はSW01とは異なり土台木を筏状に並べられており、SW01とSW04の構築事情が異なっていたことが考えられる。しかし、両者とも使用された材に着目すると、土台木A類と土台木B類の2種に限定されている点が共通であり、単に組み立て方が異なっているだけに過ぎない。したがって、土台木の調達自体はSW01～04については同時に行われていた可能性が高く、石垣を普請する際に技術者の相違などの理由により組み立て方が異なってしまったものと思われる。

さて、ほぼ同時期に構築されたと推測される石垣群SW01～04を全体の平面プランで概観すると、旧五条川流路に沿う形で北東から南西に広がっており、



第 277 図　本丸東側遺構配置図

中央付近で五条川に向かって突出部を形成するかのように入角となっている。南西部は基礎構造の規模を小さくしながらしのぎ角で西側に角度を振り、おそらく92F区で検出された内堀北肩に連続すると予想される。突出部（張り出し部）は石垣SW01とSW04の前面よりも一段高く作られ、突出部を護岸するかのように作られた石垣SW02とSW03もSW01とSW04より高い位置に所在している。

突出部前面にコ字状に展開する杭列SA01～SA03は、遺構の時期を特定することが極めて難しい。丸杭が使用されていたことから城下町期Ⅲ期に属する遺構であると仮定するならば、杭列SA02とSA03から一回り外側で突出部の掘肩に至り、これより東側は五条川に向かうことからみて、突出部とSA01～03は一連の遺構であると考えることもできる。

こうした遺構群は、清須城城郭の東端部に当たることから、基本的には城郭の外郭線を防御あるいは荘厳に飾るための施設であるといえる。石垣は高さが約4m位と復元され、突出部付近の川に面する部分をより荘厳に構築されていた。瓦類の出土状況は突出部周辺で大量に見られることが判明しており、この瓦が使用された建物付近で廃棄されたと仮定するならば、突出部付近にかなり大規模な瓦葺建造物が存在したことが予想される。また瓦の種類は、軒瓦に着目すると大形のもの（M100番台とH100番台の型式）と小形のもの（M300番台とH300番台の型式）に分けられ、小形のものは多門櫓などの庇か渡櫓の軒先に利用された可能性が考えられる。小形のものが渡櫓に利用されたものと仮定するならば、石垣の上位に小形瓦が使用された渡櫓が展開し、突出部に規模の大きな多門櫓または城門のような建造物が存在したことが想像できる。問題は突出部の意義付けであろう。

ここで、清須城に関連する絵図を確認しておきたい。まず「春日井郡清須村古城絵図」に着目する。96区などに該当する部分は、本丸と記された郭から川に向かって張り出した部分が2ケ所存在し、それに挟まれた部分は「水堀」と記述され水色に塗られている。この記載からみて、検出された遺構は南側の張り出し部分と水堀と位置付けられるが、突出部の性格付けに寄与できる情報を読み取ることまではできない状況である。次に「清須古城之図」では堀が三重に階段状に描かれており、96区などに該当する部分がどこに相当するか判別が難しい状態である。最後に臼杵市図書館蔵の「尾州清須之古城図」について検討する。これは高田徹氏の指摘によってようやく筆者もその存在を知ることができた図面で、筆者が清須城を考察する上では初めて使用する資料である。96区などに該当する部分は「二」と記された堀で囲まれた郭の東側に相当すると考えられ、そこはちょうど土橋状に堀が途切れた状態に描かれている。この絵図の記述を信用すれば、検出された突出部は出入り口施設の可能性が高くなるだろう。

以上、現段階で提示できる材料と仮説をいくつか提示した。現状は決定的な結論を出す状態ではないが、今後とも様々な可能性を考慮しながら清須城城郭の復元を試みていく必要があるだろう。

（Ⅲ）97B区

97B区は清洲城下町遺跡の五条橋地区に相当し、清須城城郭の対岸に該当する。既に発掘調査された61A区、63B区、93A区などに隣接しており、この部分については報告書が刊行されている（鈴木編1994・鈴木編1995）。61A区、63B区、93A区では城下町期から宿場町期の遺構が確認され、城下町期Ⅰ期では旧五条川とその付近の小規模な遺構群が、城下町期Ⅱ・Ⅲ期では旧五条川が埋積した後に小規模な溝や土坑などが発見された。また、宿場町期では町屋敷に伴う井戸などの遺構が確認されている。

調査の結果、97B区では調査区の大部分は旧五条川と推測される自然流路が確認された。流路の岸には護岸の柵列などが存在しており、流路内からは様々な種類の遺物が多数出土した。具体的な性格を特定することは難しいが、この付近での人々の活動が城下町期Ⅰ期の段階から活発であったことが追認されよう。旧流路ではない南東部では、土坑や溝、井戸などが確認されている。この中でSD01・02がⅣ

SD4031やⅣSD4033と対応する溝になる可能性がある。この他の井戸SE01などの遺構は宿場町期に属すると推測される。

（Ⅳ）99A・99B区

99A・99B区は清洲城下町遺跡の本町地区および南部地区に相当し、隣接する89C区、89F区、91A区、91B区などが既に発掘調査されており、報告書が刊行されている（鈴木編1994・鈴木編1995）。99A区では、89C区や91A区などの成果からみると、城下町期Ⅰ・Ⅱ-1期には武家屋敷と推定される区画6006の内部、城下町期Ⅱ-2期以降は町屋と推定された区画6024などに相当すると考えられた。また、99B区では、89F区や91B区などの成果からみると、城下町期Ⅱ期以前には顕著な遺構は認められず、城下町期Ⅲ期以降には町屋と推定された区域とあると想定されている。

99A・99B区では城下町期Ⅰ期などに属する古い遺物が若干量存在するものの、遺構と遺物の大部分は城下町期Ⅲ期に属するものであった。99A区では、ほぼ東西方向に走る幅約4mの溝SD13と幅2m前後を測る溝SD14が検出されている。出土遺物からみて城下町期Ⅲ期に属するこの溝群は、89F区で確認されたⅣSD7002と平行することからみて、SD13とSD14の間は道路、SD14とⅣSD7002との間が屋敷と想定される区画と考えることができる。SD13の北側とSD14の南側では、多数検出された井戸の配置の方向が微妙に異なっていることなどから、SD13とSD14で構成される道路を境に地割が異なっている可能性が指摘できよう。99A区のSD11や99B区のSD01・SD11のように、SD14の南側でおおよそ南北方向に走る溝が存在することを積極的に取り上げれば、これらの溝はSD13とSD14で作る道路に面して細長い区画が設定され、短冊型地割の町屋を推定することもできよう。99B区SD11の南側では井戸が多数確認され、これらは大きく分布のまとまりを3ケ所で認めることができる。99B区SD11の南側では、東西方向に細長い区画が南北方向に並ぶ屋敷を想定することができ、これが短冊型地割の町屋であると解釈することもできる。

こうした遺構配置からみた屋敷の推測は、あくまで推測でしかなく別の仮説を提示することも可能である。しかし一方で、遺物などから見た99A区と99B区の評価でも町屋であったことを窺わせる資料が存在する。99A区では、小形のとりべや銅滴、羽口などの銅製品生産（銅細工師の存在）を推定させる資料が多数出土している。また、99A区SK248では貯穀性昆虫遺体が多数確認され、米を商う商人の存在が近隣に想定される成果も得られている。こうしたことから、遺構から想定復元された屋敷には様々な職種の商職人が生活を営んでいたことが明らかとなってきたといえる。

終了

報告書抄録

ふりがな	きよすじょうかまちいせき　8
書　　名	清洲城下町遺跡Ⅷ
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第99集
編著者名	宮腰健司、鈴木正貴、北垣聰一郎、北野信彦、堀木真美子、植田弥生、森勇一、㈱パリノ・サーヴェイ、井上巖
編集機関	愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2002年 8月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
きよすじょうかまち 清洲城下町 いせき 遺跡	にしかすがいぐん 西春日井郡 きよすちょうこじょうほか 清洲町古城他	23346	21002	35度 2分 58秒	136度 6分 57秒	19951101 ～ 20000331	8500㎡	河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清洲城下町遺跡	城館	戦国時代	石垣と基礎構造、内堀、溝、土坑、井戸、自然流路など	瀬戸美濃窯産陶器、土師器、瓦、土台木など木製品、石器・石製品、金属製品およびその関連遺物など	清須城城郭東側の石垣とその基礎構造物 清須城下町の町屋遺構

終了

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集

清洲城下町遺跡Ⅷ

本 文 編

2002年８月31日

編集・発行　財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　サンメッセ株式会社